常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅲ

――花前Ⅱ-1・花前Ⅱ-2・矢船――

1985

日本道路公団東京第一建設局

財団法人　千葉県文化財センター

常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅲ

——花前Ⅱ-1・花前Ⅱ-2・矢船——

1985

日本道路公団東京第一建設局

財団法人　千葉財文化財センター

花前II－2遺跡(本線部) 073製練炉

序　　文

千葉県北部に広大な広がりをもつ下総台地は，県内でも数多くの遺跡が所在し，歴史的文化遺産の多いことで知られています。

本県北部の柏市，流山市を通過する常磐自動車道の建設に当って，千葉県教育委員会では，用地内に所在する埋蔵文化財について事前に発掘調査を実施し，記録保存の措置を講ずることになりました。発掘調査は㈶千葉県文化財センターが実施することになり，昭和52年10月から同57年９月までの５年間をかけて調査を行いました。その成果の一部は「常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書」Ⅰ・Ⅱとして既に刊行されております。今回はその３冊目に当り，柏市に所在する花前Ⅱ－１遺跡，花前Ⅱ－２遺跡，矢船遺跡の３遺跡の報告であります。

利根川流域の右岸台地上に立地するこれらの遺跡は，先土器時代から江戸時代にわたる様々な遺構・遺物が検出されています。なかでも，花前Ⅱ－２遺跡では平安時代の製錬炉をはじめとする，製鉄関係の遺構・遺物が数多く検出されました。同様の遺跡は，今までに流山市中ノ坪遺跡，成田市取香遺跡，同市御幸畑遺跡などの調査例が知られていますが，本遺跡の資料も千葉県北部における古代鉄生産の実態を解明する重要かつ貴重な資料になると思われます。また，近年，調査例が増加している江戸時代の資料に関しても，当時の生活や商品流通を知る上で良好な資料となる陶磁器類が出土しています。

さらに，矢船，花前Ⅱ－１の両遺跡では，古墳時代中期の住居跡が検出され，両遺跡の関連性も含めて貴重な資料であります。

本報告書が学術資料としてはもとより，教育資料及び郷土の歴史に対する理解を深める資料として，広く一般の方々にも活用されることを願ってやみません。

最後に，酷寒猛暑をついて発掘調査，整理作業に従事された多くの調査補助員の方々，日本道路公団東京第一建設局，千葉県教育委員会をはじめ関係諸機関の御協力と御指導に対して心より謝意を表します。

昭和60年３月30日

財団法人　千葉県文化財センター

理事長　今　井　　正

凡　　例

1　この報告書は，日本道路公団による常磐自動車道建設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2　本書に収録される内容は，千葉県柏市の花前II－1・II－2・矢船の各遺跡の発掘調査報告である。

3　発掘調査から報告書作成に至る業務は，日本道路公団の委託を受け，千葉県教育庁文化課の要請と指導のもとに，財団法人千葉県文化財センターが行なった。

4　報告書の作成作業は，鈴木道之助，根本弘の指導のもとに，鈴木定明，橋本勝雄，郷堀英司，田井知二が行なった。なお発掘作業と基礎整理作業については，第1篇第1章を参照されたい。

5　本書の編集は，鈴木定明，郷堀英司，田井知二が担当した。

6　原稿執筆は別記のとおりである。

7　発掘調査から報告書の刊行に至るまで，下記の諸機関・諸氏の御指導・御協力を賜りました。ここに謝意を表します。

日本道路公団東京第1建設局及び同柏工事事務所，千葉県教育庁文化課，穴沢義功，石戸啓夫，大橋康二，金子真土，斉藤孝正，酒井清治，田中正夫，西弘海，服部敬史，福田健司，吉岡康暢，及び多くの調査補助員，地元の方々（敬称略）。

8　第1図地形図には，国土地理院著作発行，2万5千分の1「流山」を使用している。

9　本書に掲載した図面の方位は座標北とした。

10　古墳時代以降のカマドの表記については，構築材をスクリーントーンで表わし，カマド内の土層については次のように表現している。

I′：崩壊した構築材　II：カマド内堆積

III：流入土　IV：基底部　V：住居跡覆土　VI：カクラン土

a：山砂　b：粘土　c：焼土　d：灰　e：炭　f：ローム

11　花前II－1・II－2遺跡の出土遺物表について，「法量」の項目は，上から口径，器高，底径の順に記載し，（　）は推定，〈　〉は現存値としている。

目　　次

序　文

凡　例

第1篇　経過と環境 …… 1

第1章　調査の経過と組織 …… (郷堀) … 3

第2章　環境 …… (郷堀) … 3

第2篇　花前II－1・II－2遺跡 (217—006・013) …… 5

第1章　調査の方法と経過 …… (郷堀) … 7

第2章　遺構と遺物 …… 9

第1節　花前II－1遺跡 …… 9

1．古墳時代 …… (郷堀) … 9

2．奈良・平安時代 …… (郷堀) …16

第2節　花前II－2遺跡側道部 …… 89

1．古墳時代 …… (郷堀) …89

2．奈良・平安時代 …… (郷堀) …90

第3節　花前II－2遺跡本線部 …… 102

1．旧石器時代 …… (橋本) …103

2．縄文時代 …… (田中) …104

3．奈良・平安時代 …… (郷堀・田井) …125

住居跡 …… 126

土　坑 …… 157

精錬炉 …… 160

斜面部 (製鉄関連遺構、他) …… 172

グリッド出土遺物 …… 216

4．江戸時代以降 …… (郷堀・田井) …223

第3章　小結 …… 242

第1節　縄文時代 …… (田中) …242

第2節　古墳時代 …… (郷堀) …242

第3節　奈良・平安時代 …… 243

1．編年について …… (郷堀) …243

2．製鉄関連遺物について …… (郷堀・田井) …247

3．製鉄関連遺構について …… (田井) …277

4．墨書土器について ……（郷堀）…279
第4節　江戸時代以降 ……（郷堀）…285
第3篇　矢船遺跡（217—012）……287
第1章　調査の方法と経過 ……（田井）…289
第2章　遺構と遺物 ……291
第1節　旧石器時代 ……（橋本）…291
第2節　縄文時代 ……（橋本・田井）…328
第3節　古墳時代 ……（田井）…344
第3章　小結 ……358
第1節　旧石器時代 ……（橋本）…358
第2節　縄文時代 ……（田井）…360
第3節　古墳時代 ……（田井）…360
結語 ……（郷堀）…361

挿 図 目 次

第 1 図　花前II遺跡・矢船遺跡の位置 …… 4
第 2 図　グリッド配置図 …… 8
第 3 図　002住居跡 …… 9
第 4 図　002住居跡出土遺物 …… 10
第 5 図　009住居跡 …… 12
第 6 図　009住居跡出土遺物 …… 13
第 7 図　010住居跡及び出土遺物 …… 14
第 8 図　018住居跡 …… 15
第 9 図　018住居跡出土遺物 …… 16
第 10 図　001住居跡 …… 17
第 11 図　001住居跡出土遺物 …… 18
第 12 図　001住居跡出土遺物 …… 19
第 13 図　003住居跡 …… 22
第 14 図　003住居跡出土遺物 …… 23
第 15 図　004住居跡及び出土遺物 …… 25
第 16 図　005住居跡及び出土遺物 …… 27
第 17 図　006住居跡 …… 29
第 18 図　006住居跡出土遺物 …… 30
第 19 図　006住居跡出土遺物 …… 31
第 20 図　007住居跡 …… 33
第 21 図　007住居跡出土遺物 …… 34
第 22 図　007住居跡出土遺物 …… 35
第 23 図　008住居跡 …… 37
第 24 図　008住居跡出土遺物 …… 38
第 25 図　011住居跡 …… 40
第 26 図　011住居跡出土遺物 …… 41
第 27 図　012住居跡及び出土遺物 …… 43
第 28 図　014住居跡及び出土遺物 …… 45
第 29 図　015住居跡 …… 47
第 30 図　015住居跡出土遺物 …… 48
第 31 図　015住居跡出土遺物 …… 49

第 32 図　016住居跡 ……51
第 33 図　016住居跡カマド ……52
第 34 図　016住居跡出土遺物 ……53
第 35 図　017住居跡 ……54
第 36 図　017住居跡出土遺物 ……55
第 37 図　019住居跡 ……57
第 38 図　019住居跡出土遺物 ……58
第 39 図　019住居跡出土遺物 ……59
第 40 図　019住居跡出土遺物 ……60
第 41 図　020・021住居跡 ……63
第 42 図　020・021住居跡出土遺物 ……64
第 43 図　022住居跡 ……65
第 44 図　022住居跡出土遺物 ……66
第 45 図　028住居跡及び出土遺物 ……68
第 46 図　029・030住居跡 ……69
第 47 図　013・031・032住居跡出土遺物 ……70
第 48 図　013・031・032住居跡出土遺物 ……71
第 49 図　013・031・032住居跡出土遺物 ……72
第 50 図　013・031・032住居跡出土遺物 ……73
第 51 図　013・031・032住居跡出土遺物 ……74
第 52 図　013・031・032住居跡 ……79
第 53 図　024小竪穴 ……81
第 54 図　025土坑 ……81
第 55 図　027土坑 ……82
第 56 図　鉄製品 ……84
第 57 図　鉄製品 ……85
第 58 図　鉄製品及び羽口 ……86
第 59 図　グリッド出土の遺物 ……88
第 60 図　002住居跡及び出土遺物 ……90
第 61 図　005住居跡 ……91
第 62 図　005住居跡出土遺物 ……92
第 63 図　007住居跡 ……92
第 64 図　007住居跡出土遺物 ……93
第 65 図　008・009住居跡 ……94

第 66 図　008住居跡出土遺物 ……95
第 67 図　011住居跡 ……96
第 68 図　011住居跡出土遺物 ……97
第 69 図　012住居跡 ……98
第 70 図　012住居跡出土遺物 ……99
第 71 図　鉄製品 ……100
第 72 図　鉄製品 ……101
第 73 図　旧石器時代遺物 ……103
第 74 図　004住居跡 ……104
第 75 図　004住居跡出土土器 ……105
第 76 図　034住居跡 ……106
第 77 図　034住居跡出土遺物 ……107
第 78 図　001竪穴状遺構 ……108
第 79 図　001竪穴状遺構出土土器 ……109
第 80 図　002竪穴状遺構 ……110
第 81 図　002竪穴状遺構出土土器 ……110
第 82 図　010竪穴状遺構 ……111
第 83 図　010竪穴状遺構出土土器 ……111
第 84 図　008炉穴 ……112
第 85 図　008炉穴出土土器 ……112
第 86 図　024炉穴 ……113
第 87 図　027土坑 ……114
第 88 図　027土坑出土土器 ……114
第 89 図　028土坑 ……114
第 90 図　028土坑出土土器 ……115
第 91 図　第１群Ａ～Ｃ類・第２群Ａ類土器 ……116
第 92 図　第２群Ｂ・Ｃ類土器 ……117
第 93 図　第2群Ｃ類・第３群・第４群Ａ類土器 ……118
第 94 図　第４群Ｂ～Ｅ類土器 ……119
第 95 図　尖頭器・石鏃 ……121
第 96 図　打製石斧・磨製石斧 ……122
第 97 図　磨製石斧・凹石・敲石 ……123
第 98 図　石皿・石棒 ……124
第 99 図　003住居跡及び出土遺物 ……126

第 100 図　003住居跡出土遺物 ……127
第 101 図　011住居跡 ……129
第 102 図　011住居跡出土遺物 ……130
第 103 図　012住居跡及び出土遺物 ……131
第 104 図　013住居跡 ……133
第 105 図　013住居跡カマド及び出土遺物 ……134
第 106 図　013住居跡出土遺物 ……135
第 107 図　014住居跡及び出土遺物 ……137
第 108 図　018住居跡 ……138
第 109 図　018住居跡出土遺物 ……139
第 110 図　019住居跡 ……141
第 111 図　020住居跡 ……142
第 112 図　020住居跡出土遺物 ……143
第 113 図　021住居跡出土遺物 ……144
第 114 図　021住居跡 ……145
第 115 図　029住居跡及び出土遺物 ……146
第 116 図　030住居跡 ……147
第 117 図　030住居跡出土遺物 ……148
第 118 図　030住居跡出土遺物 ……149
第 119 図　035住居跡 ……152
第 120 図　035住居跡出土遺物 ……153
第 121 図　036住居跡 ……154
第 122 図　036住居跡出土遺物 ……155
第 123 図　038住居跡及び出土遺物 ……156
第 124 図　006土坑 ……157
第 125 図　015土坑 ……158
第 126 図　022土坑 ……159
第 127 図　026土坑 ……160
第 128 図　005精錬炉 ……161
第 129 図　005精錬炉出土遺物 ……162
第 130 図　009住居跡 ……163
第 131 図　009住居跡カマド ……164
第 132 図　009住居跡内精錬炉 ……165
第 133 図　009住居跡出土遺物 ……166

第 134 図　009住居跡出土遺物 ……167
第 135 図　023住居跡 ……169
第 136 図　023住居跡内精錬炉(1) ……170
第 137 図　023住居跡内精錬炉(2) ……171
第 138 図　023住居跡出土遺物 ……172
第 139 図　031・032カマド状遺構 ……173
第 140 図　031カマド状遺構出土遺物 ……173
第 141 図　042遺物集中地点 ……174
第 142 図　042遺物集中地点出土遺物 ……175
第 143 図　048精錬炉・049製錬炉 ……176
第 144 図　049製錬炉〈炉壁出土状況〉 ……177
第 145 図　048精錬炉・049製錬炉 ……178
第 146 図　048精錬炉 ……179
第 147 図　049製錬炉主体部分(1)〈新炉〉 ……180
第 148 図　049製錬炉主体部分(2)〈旧炉〉 ……181
第 149 図　049製錬炉主体部分(3)〈掘り方〉 ……181
第 150 図　054精錬炉・062土坑 ……182
第 151 図　062土坑出土遺物 ……183
第 152 図　054精錬炉(1)〈新炉〉 ……184
第 153 図　054精錬炉(2)〈旧炉〉 ……185
第 154 図　056土坑(1) ……186
第 155 図　056土坑(2) ……187
第 156 図　056土坑出土遺物 ……188
第 157 図　056土坑出土遺物 ……190
第 158 図　056土坑出土遺物 ……192
第 159 図　059土坑・063製錬炉・064土坑 ……194
第 160 図　061製錬炉・065土坑 ……195
第 161 図　061製錬炉主体部分 ……196
第 162 図　066土坑及び出土遺物 ……197
第 163 図　067製錬炉 ……198
第 164 図　068土坑 ……199
第 165 図　072土坑 ……200
第 166 図　073製錬炉〈炉体、平面図及内面見通し図〉……202
第 167 図　073製錬炉 ……203

第 168 図　073製錬炉〈炉壁出土状況図〉……205
第 169 図　073製錬炉〈下部構造〉……206
第 170 図　073製錬炉〈内面布目痕〉……207
第 171 図　073製錬炉出土遺物……207
第 172 図　074製錬炉……209
第 173 図　074製錬炉主体部分(1)〈炉壁出土状況・セクション〉……211
第 174 図　074製錬炉主体部分(2)〈平面，構造〉……212
第 175 図　074製錬炉主体部分(3)〈掘り方〉……213
第 176 図　079土坑……215
第 177 図　グリッド出土遺物……216
第 178 図　グリッド出土遺物……217
第 179 図　鉄製品……219
第 180 図　鉄製品……220
第 181 図　鉄製品……221
第 182 図　037炭窯……223
第 183 図　炭窯群〈東側部分〉……224
第 184 図　040炭窯……225
第 185 図　041炭窯……226
第 186 図　041炭窯出土遺物……227
第 187 図　044炭窯……228
第 188 図　044炭窯出土遺物……229
第 189 図　炭窯群〈西側部分〉……229
第 190 図　058炭窯……230
第 191 図　060炭窯……231
第 192 図　069炭窯……232
第 193 図　070炭窯……233
第 194 図　071炭窯……234
第 195 図　037・041炭窯閉そく石……235
第 196 図　磁器……237
第 197 図　磁器……238
第 198 図　磁器……239
第 199 図　出土地点による磁着度別鉄滓組成図……249
第 200 図　鉄滓出土状況図（花前II—2遺跡本線部）……250
第 201 図　鉄滓出土状況図（花前II—2遺跡本線部）……251

第202図　羽口内外径比 ……259
第203図　羽口 ……260
第204図　製鉄関連遺物1（鋳型） ……263
第205図　製鉄関連遺物2（鋳型） ……264
第206図　製鉄関連遺物3（鋳型） ……265
第207図　製鉄関連遺物4（鋳型） ……266
第208図　製鉄関連遺物5（鋳型） ……267
第209図　製鉄関連遺物6（鋳型） ……268
第210図　製鉄関連遺物7（鋳型） ……269
第211図　製鉄関連遺物8（鋳造関係） ……270
第212図　製鉄関連遺物9（るつぼ） ……271
第213図　製鉄関連遺物10（その他） ……272
第214図　製鉄関連遺物11（その他） ……273
第215図　製鉄関連遺物12（その他） ……274
第216図　製鉄関連遺物13（その他） ……275
第217図　矢船遺跡と周辺の地形 ……289
第218図　グリッド配置図 ……290
第219図　標準層序 ……291
第220図　遺跡土層断面図 ……292
第221図　旧石器時代ブロック配置図 ……293
第222図　第1ブロック出土遺物 ……296
第223図　第1・2ブロック遺物出土状況図 ……299
第224図　第3・4ブロック遺物出土状況図 ……302
第225図　第3ブロック出土遺物 ……304
第226図　第5ブロック遺物出土状況図 ……306
第227図　第5ブロック出土遺物 ……307
第228図　第6ブロック遺物出土状況図 ……308
第229図　第7ブロック遺物出土状況図 ……310
第230図　第7ブロック出土遺物 ……311
第231図　第8ブロック出土遺物 ……312
第232図　第8・9ブロック遺物出土状況図 ……313
第233図　第9ブロック出土遺物 ……316
第234図　第10ブロック遺物出土状況図 ……317
第235図　第10ブロック出土遺物 ……318

第236図　第11ブロック遺物出土状況図 ……321
第237図　第11ブロック出土遺物 ……323
第238図　ブロック外出土遺物 ……325
第239図　表面採集遺物 ……327
第240図　縄文時代早期の土器 ……328
第241図　縄文時代前期の土器(1) ……329
第242図　縄文時代前期の土器(2) ……330
第243図　縄文時代前期の土器(3) ……331
第244図　縄文時代前期の土器(4) ……332
第245図　縄文時代前期の土器(5) ……333
第246図　縄文時代前期の土器(6) ……334
第247図　縄文時代前期の土器(7) ……335
第248図　縄文時代中期・後期の土器 ……336
第249図　縄文時代石器(1) ……340
第250図　縄文時代石器(2) ……341
第251図　その他の遺物(1) ……342
第252図　その他の遺物(2) ……343
第253図　古墳時代遺構配置図 ……344
第254図　001住居跡 ……345
第255図　001住居跡遺物出土状況図 ……346
第256図　001住居跡出土遺物(1) ……347
第257図　001住居跡出土遺物(2) ……349
第258図　001住居跡出土遺物(3) ……350
第259図　001住居跡出土遺物(4) ……352
第260図　001住居跡出土遺物(5) ……353
第261図　001住居跡貯蔵穴周辺遺物出土状況 ……354
第262図　002住居跡 ……355
第263図　002住居跡出土遺物 ……355
第264図　004土坑及び出土遺物(1) ……356
第265図　004土坑出土遺物(2) ……357
第266図　矢船遺跡の石器群の変遷 ……359

図　版　目　次

巻頭図版花前II－2遺跡（本線部）073製錬炉

花前II－1遺跡

図版1　002住居跡，002住居跡遺物出土状況

図版2　009住居跡，009住居跡貯蔵穴内遺物出土状況

図版3　010住居跡，018住居跡

図版4　001住居跡，003住居跡

図版5　004住居跡，006住居跡

図版6　007住居跡遺物出土状況，007住居跡

図版7　008住居跡，011住居跡

図版8　013住居跡，014住居跡

図版9　016住居跡，020・021住居跡

図版10　022住居跡，028住居跡

図版11　002住居跡出土遺物

図版12　002・009住居跡出土遺物

図版13　009・001・003住居跡出土遺物

図版14　004・005・008住居跡出土遺物

図版15　006・007住居跡出土遺物

図版16　011・016・017・019住居跡出土遺物

図版17　019住居跡出土遺物

図版18　019・020住居跡出土遺物

図版19　013・031・032住居跡出土遺物

図版20　013・031・032住居跡出土遺物

図版21　珠文鏡・鉄製品

花前II－2遺跡（側道部）

図版22　007住居跡，008・009住居跡

図版23　011住居跡，012住居跡

花前II－2遺跡（本線部）

図版24　008炉穴，024炉穴

図版25　001住居跡，002住居跡

図版26　010住居跡，034住居跡

図版27　027土坑，028土坑

図版28　発掘風景，003住居跡
図版29　005精錬炉・006土坑，005精錬炉遺物出土状況
図版30　009住居跡，009住居跡内精錬炉
図版31　009住居跡内精錬炉
図版32　009住居跡内精錬炉，011住居跡
図版33　012住居跡，013住居跡
図版34　018住居跡，019住居跡
図版35　020住居跡，021住居跡
図版36　023住居跡，023住居跡遺物出土状況
図版37　023住居跡内精錬炉
図版38　029住居跡，030住居跡
図版39　035住居跡，036住居跡
図版40　斜面部遠景，斜面部発掘風景
図版41　斜面部発掘風景，斜面部遺構群
図版42　048精錬炉，048精錬炉・049製錬炉
図版43　049製錬炉主体部分
図版44　049製錬炉土層断面Ｇ－Ｇ′，Ｅ－Ｅ′
図版45　054精錬炉，061製錬炉
図版46　067製錬炉，073製錬炉
図版47　073製錬炉遺物出土状況
図版48　073製錬炉主体部分遺物出土状況，073製錬炉下部構造土層断面
図版49　073製錬炉土層断面Ａ－Ａ′
図版50　073製錬炉土層断面Ｃ－Ｃ′，073製錬炉土層断面
図版51　073製錬炉主体部分
図版52　073製錬炉主体部分布目痕，073製錬炉後背部分テラス
図版53　074製錬炉
図版54　074製錬炉内炉壁出土状況，056土坑
図版55　054精錬炉・062土坑遺物出土状況，炭窯群
図版56　037炭窯
図版57　037炭窯煙道部断面Ｃ－Ｃ′，窯体断面Ａ－Ａ′
図版58　040炭窯，044炭窯
図版59　003住居跡・005精錬炉出土遺物
図版60　009・011・012住居跡出土遺物
図版61　013・014住居跡出土遺物

図版62　018・023住居跡出土遺物
図版63　030住居跡出土遺物
図版64　036住居跡・042遺物集中地点出土遺物
図版65　056土坑出土遺物
図版66　056土坑出土遺物
図版67　鉄製品
図版68　製鉄関連遺物

矢船遺跡

図版69　矢船遺跡調査前
図版70　第1ブロック遺物出土状況，第2ブロック遺物出土状況
図版71　第3ブロック遺物出土状況，第3・第4ブロック遺物出土状況
図版72　第4ブロック遺物出土状況，第10ブロック北側遺物出土状況
図版73　第10ブロック遺物出土状況，D2—23グリッド遺物出土状況
図版74　第1～第8ブロック出土遺物
図版75　第9～第11ブロック出土遺物
図版76　ブロック外，表採遺物
図版77　グリッド出土の縄文時代の石器
図版78　グリッド出土の縄文土器1，2
図版79　グリッド出土の縄文土器3，4
図版80　グリッド出土の縄文土器5，6
図版81　グリッド出土の縄文土器7，8
図版82　グリッド出土の縄文土器9，10
図版83　グリッド出土の縄文土器11，12
図版84　グリッド出土の縄文土器13
図版85　001住居跡，001住居跡遺物出土状況
図版86　001住居跡遺物出土状況，002住居跡
図版87　001住居跡出土遺物1
図版88　001住居跡出土遺物2
図版89　001住居跡出土遺物3
図版90　001住居跡出土遺物4，004土坑出土遺物

第１篇　経過と環境

第１章　調査の経過と組織

花前II－１・II－２，矢船の各遺跡は，日本道路公団によって計画された常磐自動車道の建設に際して記録保存の措置がとられることとなった遺跡である。この調査に至る経緯については既に「常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ[1]」（以下報文「常磐Ⅰ」と略す）の中で述べているので，ここでは調査の経過と組織について記載する。

花前II－１遺跡（センターコード217—006）

調査期間　昭和53年４月１日～昭和54年５月31日，調査面積　14,500㎡

調査部長　西野　元（昭和54年３月31日まで），白石竹雄（昭和54年４月１日から）

班長　岡川宏道（昭和54年３月31日まで），天野　努（昭和54年４月１日から）

調査研究員　鈴木定明，川島利道（昭和54年４月１日から）

花前II－２遺跡（217—013）

調査期間　昭和54年４月２日～同年７月30日，同年10月１日～昭和55年６月23日　調査面積　8,400㎡

調査部長　白石竹雄　班長　天野　努

調査研究員　鈴木定明，杉崎茂樹，石倉亮治，川島利道，田中　豪

矢船遺跡（217—012）

調査期間　昭和54年７月１日～同年９月30日　調査面積　3,400㎡

調査部長　白石竹雄　班長　天野　努

調査研究員　鈴木定明，石倉亮治

発掘調査及び，基礎整理作業は以上の組織のもとに行なわれたが，報告書作成については例言を参照されたい。

註

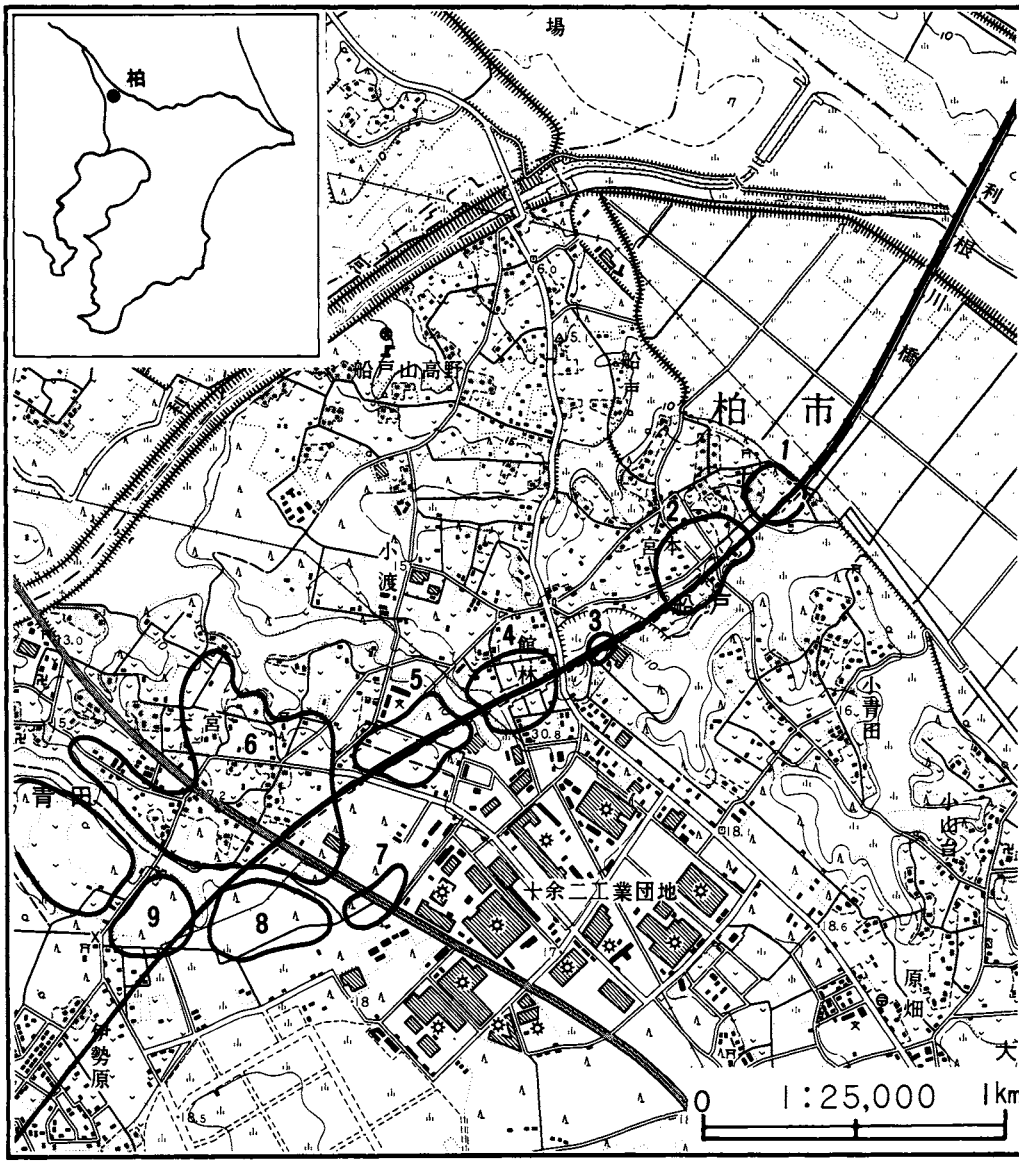
(1)　清藤一順ほか　1982　「常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」　財団法人千葉県文化財センター

第２章　環　　境

花前II－１・II－２，矢船の各遺跡は下総台地西北部の標高10～17mの台地平坦部及び斜面部に立地しており，柏市の中心部から北北西へ約６kmの地点に位置する。

柏市は北を利根川，西を野田市，南を流山市，東を我孫子市，沼南町に挟まれており，首都圏の交通至便な地域として急速な宅地化が進行している。このため自然環境も著しく変化を見せているが，本遺跡周辺はこのような状況の中でも開発による自然破壊の比較的少ない所で，クヌギ，コナラなどの雑木林がまだ少なからず認められる。

各遺跡と周辺遺跡の位置関係は第１図のとおりである。



1. 花前Ⅰ遺跡　4. 館　林遺跡　7. 元　割遺跡
2. 花前Ⅱ遺跡　5. 水　砂遺跡　8. 聖人塚遺跡
3. 矢　船遺跡　6. 中山新田Ⅱ・Ⅲ遺跡　9. 中山新田Ⅰ遺跡

第1図　花前Ⅱ遺跡・矢船遺跡の位置

第2篇　花前II—1・II—2遺跡

第１章　調査の方法と経過

調査の方法

花前II－１・II－２の両遺跡は道路建設の工事工程等の絡みによって二分されたもので，遺跡の立地や性格によって分けられたものではない。調査の方法はグリッド方式を基本としているが，両遺跡のグリッドの大きさ，呼称については統一されていない。グリッドの基準線は調査範囲が道路という線的なものであり，地形的にも台地の縁辺に平行した形にあることから，日本道路公団で設定した道路センター杭の二点（ＳＴＡ125＋60，ＳＴＡ126＋00）を利用して，その延長線上にグリッドを設定した。このためグリッドの主軸方向は座標北に対して38°10′西にずれている。

グリッドの設定は，花前II－１遺跡では40×40mの大グリッドをさらに10×10mの小グリッドで16分割する。

花前II－２遺跡は，側道部と仮称される常磐道本線から北に張り出した地点と，本線部に分けて調査された。

側道部は花前II－１遺跡で設定した40m四方の大グリッドとその呼称方法を踏襲しつつも，さらに４分割して中グリッドを設定し，この中グリッドをさらに２×２mの小グリッドで100分割している。

本線部では20m四方の大グリッドを４×４mの小グリッドで25分割している。

第２図はこのグリッド設定と呼称を示したものである。（なお小グリッドの表示は縮尺不同）

調査の経過と概要

花前II－１遺跡の調査の経過及び概要については報文「常磐Ｉ」に詳しいので，ここでは花前II－２遺跡について記述する。

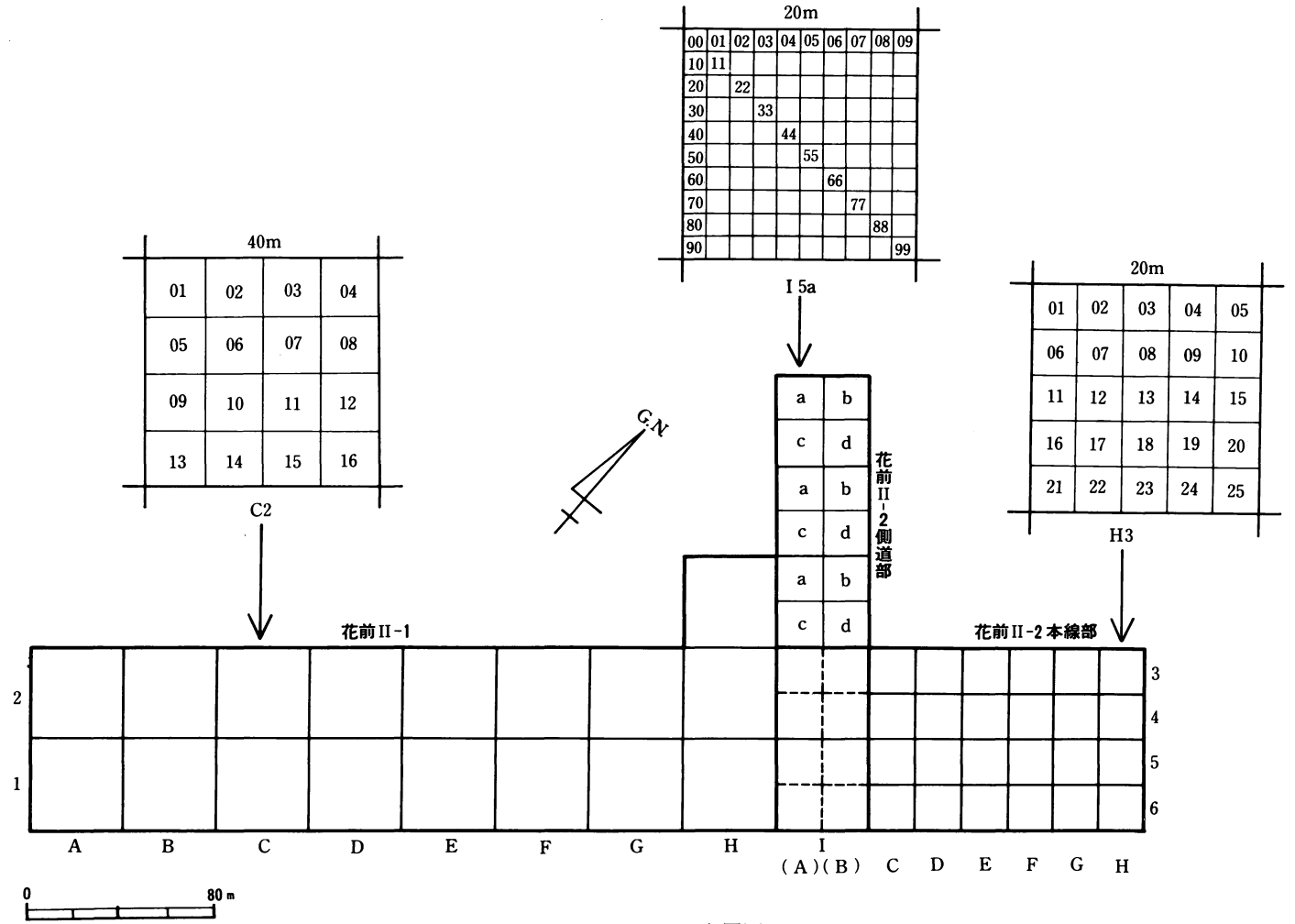
花前II－２遺跡は柏市船戸字花前1438他に所在し，利根川右岸の支谷により形成された標高10～17mの台地上及びその斜面に位置する。

花前II－２遺跡の東側には谷を挟んで花前Ｉ遺跡が対峙している。

最初に調査を行なった地点は側道部であり，昭和54年４月１日から４ケ月間の本調査によって，古墳時代後期と奈良・平安時代の竪穴住居跡７軒，時期不明の溝状遺構２条を検出した。

本線部は昭和54年10月１日から台地平坦部の調査が始まり，その結果，縄文前期･後期の竪穴住居跡各１軒，前期の竪穴状遺構３基，早期の炉穴２基，土坑２基，奈良平安時代の住居跡16軒，鍛冶遺構１基を検出した。これらの各遺構の精査は昭和55年３月下旬に終了したが，この間に１月から先土器時代の確認調査，２月から斜面部の調査も併行して行なった。

斜面部では製錬炉をはじめとする製鉄関連遺構８基，土坑８基，近世の炭窯９基が検出された。この中で073製錬炉は切り取り保存の処置が講ぜられることになり６月中旬から切り取り作業が進められ，６月23日をもって，全ての作業が終了した。


20m
00 01 02 03 04 05 06 07 08 09
10 11
20 22
30 33
40 44
50 55
60 66
70 77
80 88
90 99
I 5a
40m
01 02 03 04
05 06 07 08
09 10 11 12
13 14 15 16
C2
20m
01 02 03 04 05
06 07 08 09 10
11 12 13 14 15
16 17 18 19 20
21 22 23 24 25
H3
G.N
a b
c d
a b
c d
a b
c d
花前II-2側道部
花前II-1
花前II-2本線部
1
2
3
4
5
6
A B C D E F G H I
(A)(B) C D E F G H
0
80 m

第2図　グリッド配置図

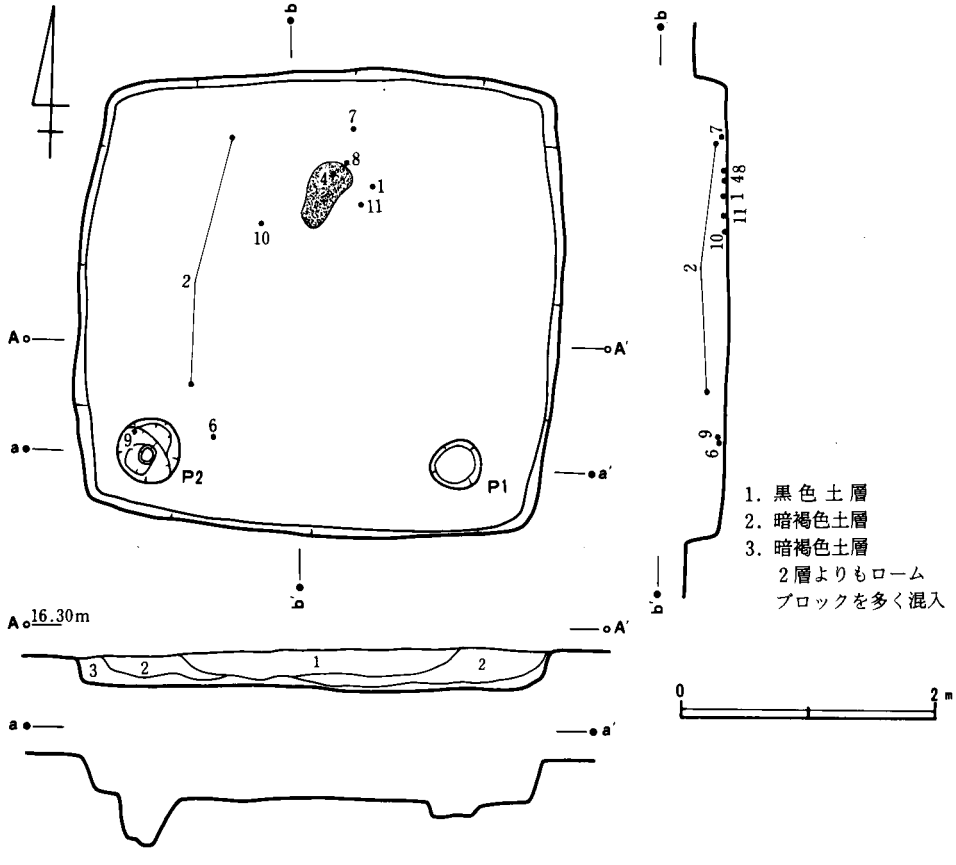
第２章　遺構と遺物

第１節　花前II－１遺跡

１．古墳時代

古墳時代の住居跡は４軒検出された。この内訳は和泉期３軒（ただし１軒は遺構形態から判断したものである。）と鬼高期１軒である。和泉期の土器は良好なセット関係となる資料である。鬼高期のものは遺物も少なく，また遺構も他の遺構に切られるため，良好な状態とは言えない。

また表採品ながら碧玉製管玉，珠文鏡も出土している。

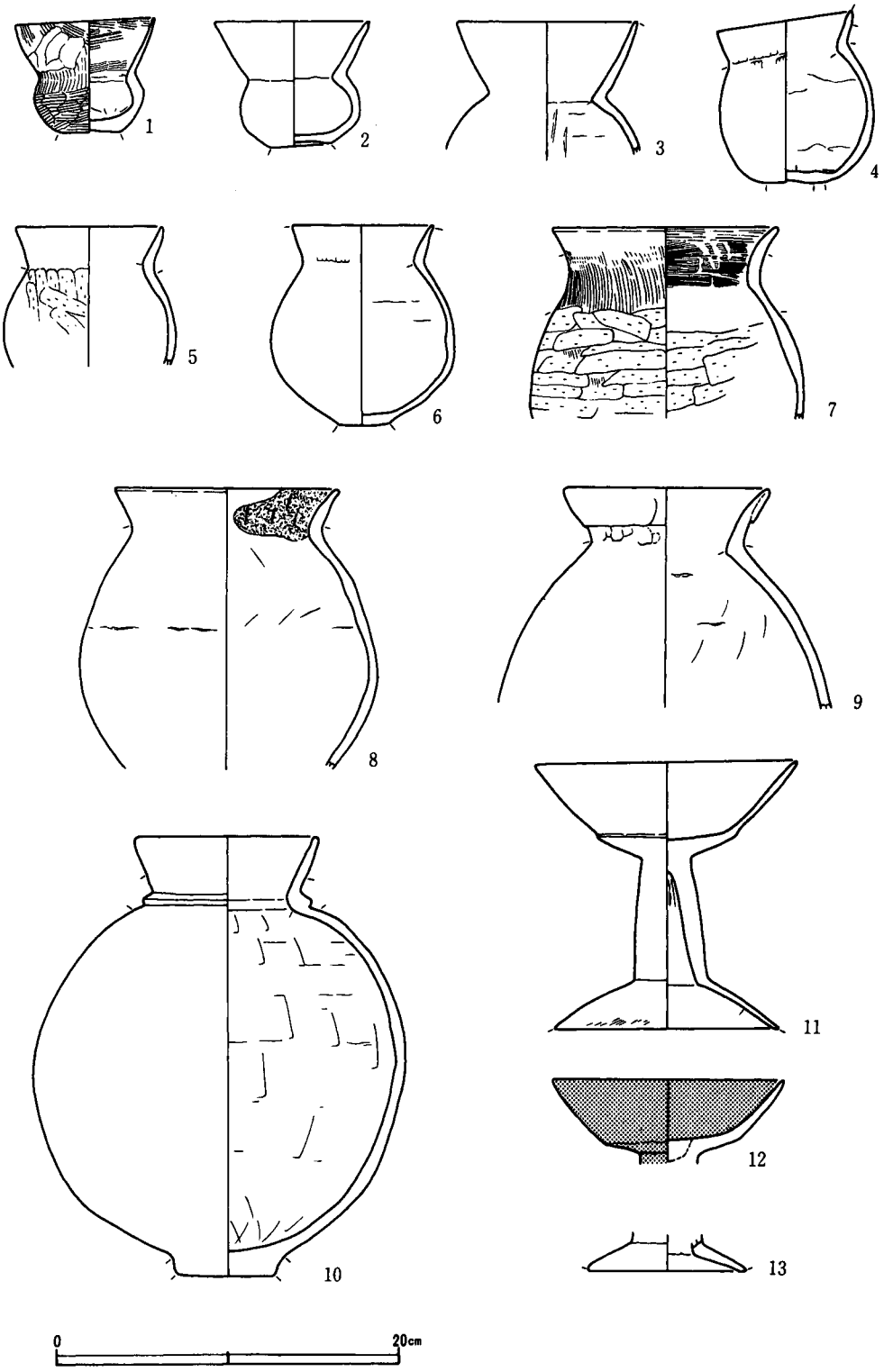


第３図　002住居跡

002住居跡

プラン　方形　　**規　模**　3.6×3.8m　　**主軸方向**　N－3°－E

所　見　現存壁高は約30cmを測る。床面は中央は固く，周縁部は固くしまる部分は少なかったが貼り床の痕跡は認められなかった。炉は北壁中央部から南へ70cmのところにあるが，不整形となり，焼土の堆積もうすい。Ｐ１は径40cm，深さ10cmのピットで底は凹凸が激しい。Ｐ２は径50cm，深さ40cmを測り，



第4図　002住居跡出土遺物

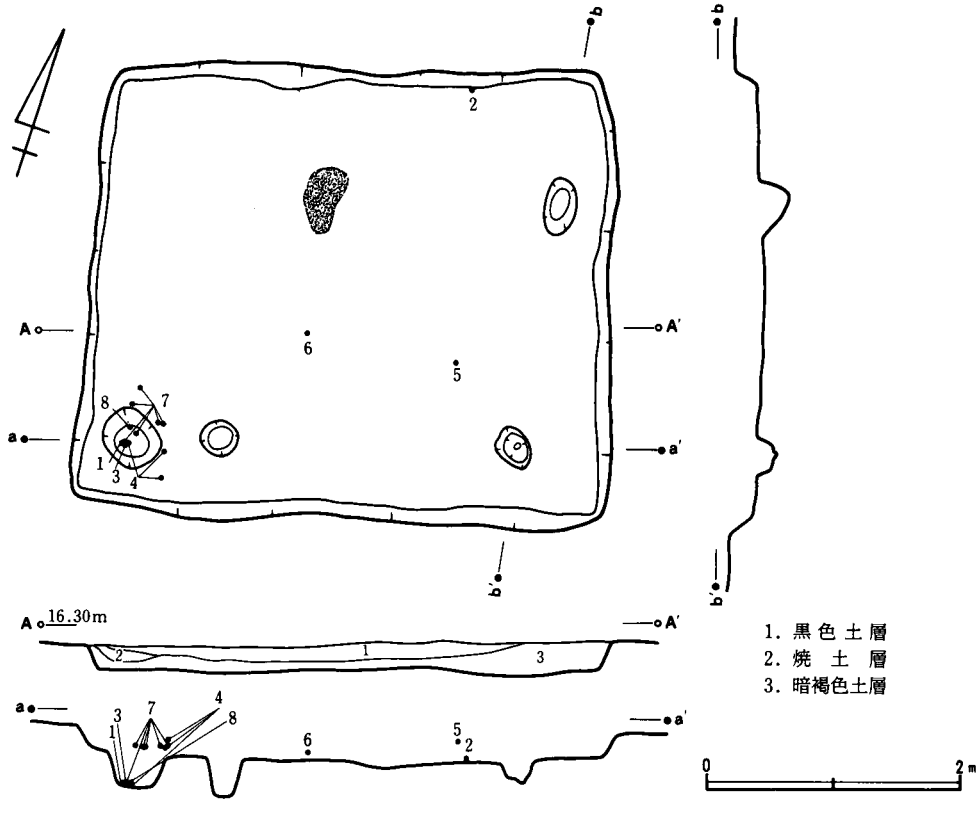
Ｐ１より一回り大きくなる。この内部から壺の上半部(9)が出土する。このピットの底部も凹凸が著しいが，貯蔵穴と考えられる。

遺物は床面から出土するものが大半で，炉の周辺で検出されるものが比較的多い。器は坩，甕，壺，高坏で，比較的良好なセットとなる。

002住居跡出土遺物

挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	胎土	色調	焼成	備考
1	坩 (土師器)	7.9 6.7 3.3	完形	口縁部内面一横方向のハケ調整後部分的にナデ 口縁部外面一縦方向のハケ調整後部分的にナデ 胴部内面一ナデ 胴部外面一横方向のハケ調整 底部一ヘラ削り	中粒砂	淡褐色	良	図版11－1
2	坩 (土師器)	9.0 7.4 胴最大径 7.0 3.3	ほぼ完形	口縁部内面一ヨコナデ 頸部内面一ヘラ磨キ 胴部内面一ナデ 胴部外面～口縁一ヘラ磨キ 底部一ヘラ削り	中粒砂一多	外面½淡黄褐色，黒褐色	良	図版11－2
3	壺 (土師器)	10.5 〈7.5〉	胴部欠く	口縁内面～口唇部一横方向のヘラ磨キ 口縁外面一縦斜めのヘラ磨キ 頸部内面一斜め方向のヘラ磨キ 胴部内面一ヘラナデ 胴部外面一縦方向のヘラ磨キ	中粒砂，酸化鉄粒 密	橙色	良	
4	坩 (土師器)	8.0 10.0 3.5	ほぼ完形	口縁内面一ヘラ磨キ 口縁外面一横方向磨キ 胴部内面一ナデ 胴部外面一縦方向磨キ 底部一ナデ周縁部削り	中粒砂一多	淡黄褐色	良	図版11－3
5	坩 (土師器)	8.5 〈8.1〉 胴最大径 10.1 —	胴部下半欠く	口縁内面一磨キ 口縁外面一ヨコナデ後，磨キ 胴部内面一ナデ 胴部外面一ヘラ削り後，磨キ	中粒砂一多	淡黄褐色	良	図版11－4
6	坩 (土師器)	(8.4) 11.6 胴最大径 10.6 2.5	口縁部胴部⅓欠く	口唇部一ヨコナデ 口縁部内面一横方向磨キ 口縁部外面一横ナデ後縦方向の削り様のナデ 胴部内面一横方向のナデ 胴部外面上位・下位一斜位の削り様の磨キ。中位一横方向の削り様磨キ 底部一削り様の磨キ	細粒砂，中粒砂一密	淡黄褐色	良	黒斑有り 図版11－5
7	甕 (土師器)	13.0 〈10.9〉 胴最大径 16.1	胴部下半欠く	口縁部内面一ヨコにハケ調整 口縁部一ヨコナデ 頸部外面一縦ハケ 頸部内面一ナデ 胴部内面一左→右のヘラ削り 胴部外面一右→左ヘラ削り	中粒砂一多 石英，酸化鉄粒 雲母一少	淡黄褐色	良	口縁部内面に炭化物付着 図版11－6
8	甕 (土師器)	12.9 〈16.0〉 胴最大径 17.4	胴部下半欠く	口縁部内外一ヨコナデ 胴部内面一ナデ 胴部外面一ナデ後，削り様の磨キ	中粒砂一多	暗褐色	良	口縁部内面に炭化物付着 図版12－1

挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	胎土	色調	焼成	備考
9	壺 (土師器)	11.9 〈12.4〉	胴部下半欠く	口縁内面一磨キ 口縁部外面～口唇部一横方向ナデ後磨キ 頸部外面一ヘラナデ 胴部内面一ヘラナデ 胴部外面一ナデ後，荒い削り様の磨キ	中粒砂一多 酸化鉄粒一少	淡黄褐色	良	図版12－2
10	壺 (土師器)	10.5 25.1 5.5 胴最大径 21.9	胴部¼欠く	口縁内外一ヨコナデ 胴部内面一荒い木口状工具によるナデ 胴部外面一削り様の磨キ 底部一ヘラ削り	細粒砂一多 中粒砂一少	暗褐色	良	頸部に突帯 外面全体と口縁内面の一部にスス付着 図版12－4
11	高坏 (土師器)	15.4 15.3 13.0	ほぼ完形	坏部内外一磨キ 脚部外面一磨キ 脚部内面一ヘラ削り	中粒砂一多 雲母一少 密	淡黄褐色	良	図版12－3
12	高坏 (土師器)	13.6 〈4.8〉	坏部のみ	口縁部内外一横ナデ後磨キ	細粒砂・酸化鉄粒一少 密	乳橙色	良	坏部内外面に赤彩の痕跡
13	高坏 (土師器)	－ － (9.3)	裾部のみ¼	裾部外面一ヘラ磨キ 裾部内面一ヘラナデ後，横ナデ	細粒砂，酸化鉄粒一少	明褐色	良	脚内面端部に粘土のたまり有り



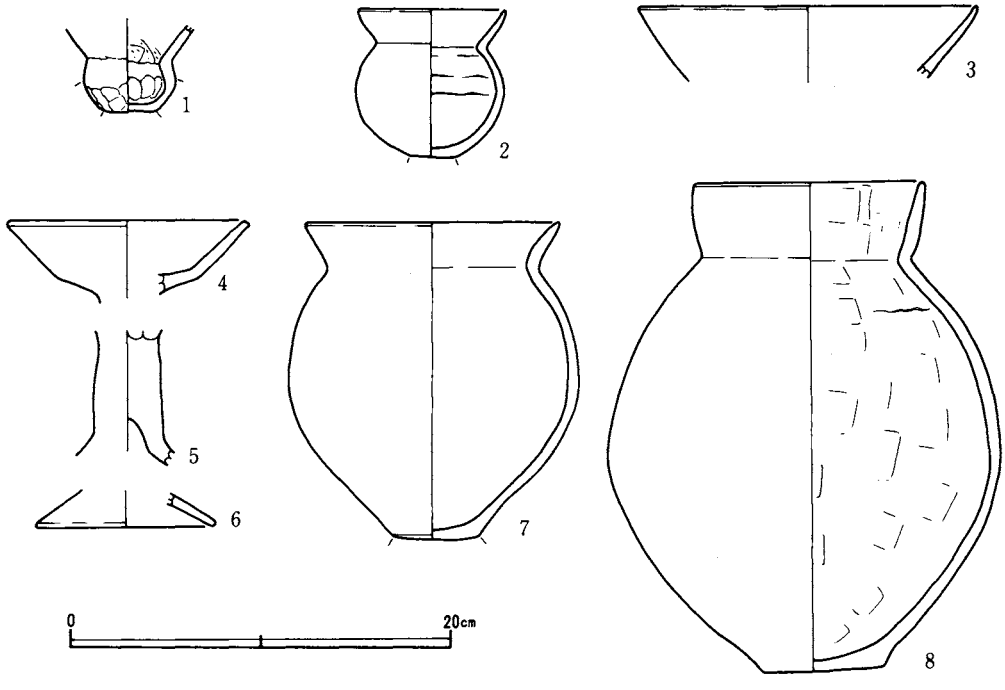
第5図　009住居跡

009住居跡

プラン　長方形　　**規　模**　3.5×4.2m　　**主軸方向**　N－16°－W

所　見　002住居跡の西約10mの地点にある住居跡である。柱穴は３本で径30cm前後を測る。南西隅に貯蔵穴と考えられる径50cmのピットがある。このピット内の覆土には焼土，炭化材，ブロック状の粘土が混入していた。現存壁高は15～20cmを測る。炉は住居跡中央部よりやや北寄りに位置する。

遺物の大半は貯蔵穴内とその周辺から出土した。８の壺は貯蔵穴の床面に密着して，ほぼ完形の状態で出土した。

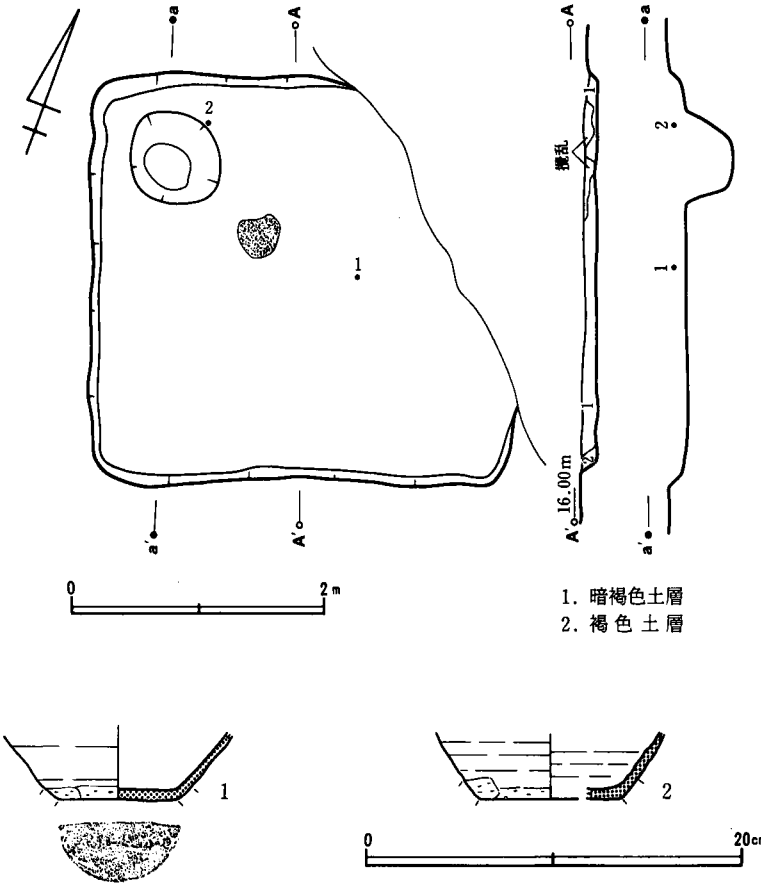


第６図　009住居跡出土遺物

009住居跡出土遺物

挿図番号	器　種	法　量	遺存状態	成・整形手法	胎　土	色　調	焼　成	備　考
1	坩 （土師器）	－ 〈4.2〉 2.7 胴最大径 5.0	口縁端部欠く	口縁部内面－木口状工具によるナデ 頸部内面－無調整 胴部外内面－指による押へラナデつけ 口縁部外面－縦方向磨キ 頸部－縦方向調整，磨キと思われるが，磨滅していて不明 胴部外面－へラ削り 端部－無調整 底部－不定方向へラ削り	細粒砂－多 密	橙　褐　色	やや甘	図版12－５
2	坩 （土師器）	7.7 7.6 胴最大径 7.8 2.1	ほぼ完形	胴部外面及び口縁－ナデ 胴部外面－ていねいなナデ 底部－へラ削り	中粒砂－多	淡　褐　色	良	図版12－６

挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	胎土	色調	焼成	備考
3	高坏 (土師器)	(17.5) 〈3.8〉 —	坏部のみ	坏部内面—木口状工具成形痕 坏部外面—木口状工具によると思われるナデ	砂粒—少 密	明黄褐色	良	
4	高坏 (土師器)	(12.5) 〈4.0〉	坏部⅓	口縁部内外—ヨコナデ後ヘラ磨キ	細粒砂—多 細礫—少	淡褐色	良	
5	高坏 (土師器)	脚最大径 3.5	脚部のみ	脚部外面—縦ヘラ磨キ 脚部内面—ナデ	細粒砂—少	乳橙色	良	
6	高坏 (土師器)	— — 9.5	裾部	外面—削り様の磨キ 内面—ナデ	細粒砂—多	淡褐色	良	
7	甕 (土師器)	13.3 16.4 胴最大径 15.2 4.6	胴部⅔欠く	口縁部内面—ナデ 胴部内面—木口状ナデ 胴部外面—ナデ。部分的にヘラ削り 底部—ナデ	中粒砂—多	暗褐色	良	図版13—1
8	壺 (土師器)	11.9 25.3 胴最大径 20.5 6.4	ほぼ完形	口縁部外面—ヨコナデ 胴部内外～底部—木口状工具によるナデ	中粒砂—多	淡褐色	良	全体に調整が粗い 図版13—2



第7図　010住居跡及び出土遺物

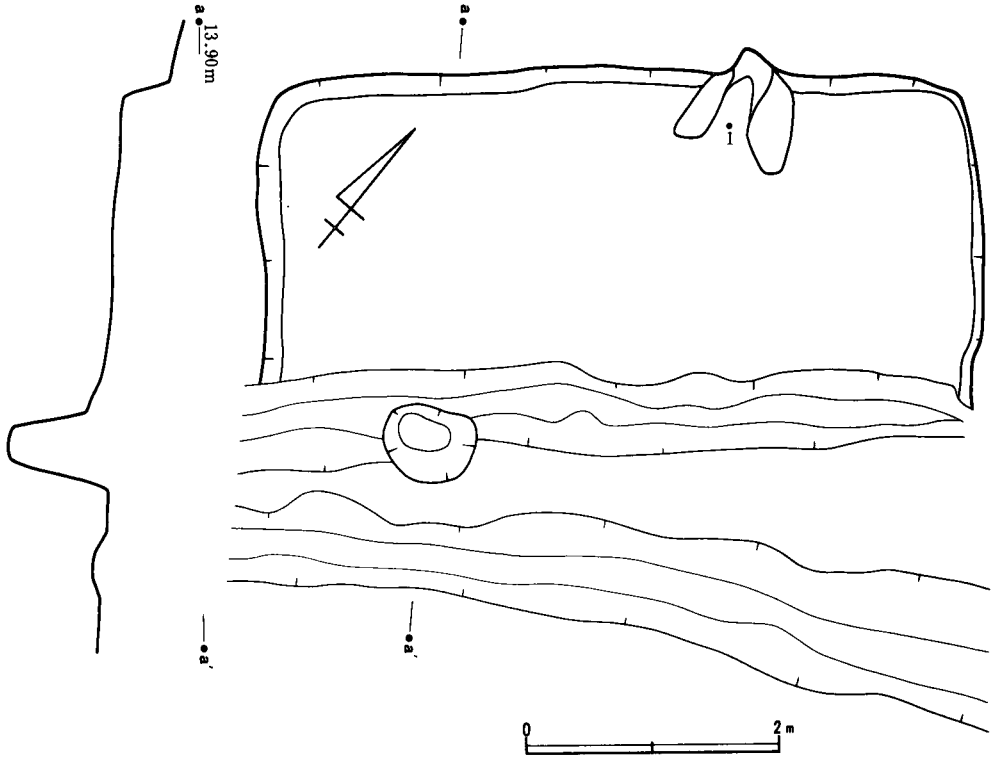
010住居跡

プラン　方形　　**規　模**　3.1×3.4m　　**主軸方向**　N－21°－W

所　見　住居跡北東部を後世の溝で切られるため全体を知ることはできない。掘り込みは浅く現存壁高は10～15cm程度である。住居跡中央やや西寄りの地点には炉があり，北西隅には径70cm，深さ40cmの不整円形を呈する大型のピットがある。また覆土中からは炭化材が検出された。出土遺物は極めて少なく，図示したものは奈良～平安時代にかけての須恵器坏があるだけだが，床面から浮いた状態での出土である。この住居跡に関して時期決定を行なう事は難しいが，住居形態と炉の存在から和泉期のものと考えたい。

010住居跡出土遺物

挿図番号	器　種	法　量	遺存状態	成・整形手法	胎　土	色　調	焼　成	備　考
1	坏 (須恵器)	－ 〈3.3〉 6.0	1/3	体部内外－ヨコナデ 体部下端－手ヘラ削り 底部－切り離し不明，一定方向のヘラ削り	中粒砂，細礫，雲母，長石，石英－多	灰褐色	良	
2	坏 (須恵器)	－ 〈3.4〉 (7.3)	1/6	体部内外－ヨコナデ 体部下端－手ヘラ削り 底部－切り離し不明，一定方向のヘラ削り	中粒砂－多	灰色	良	



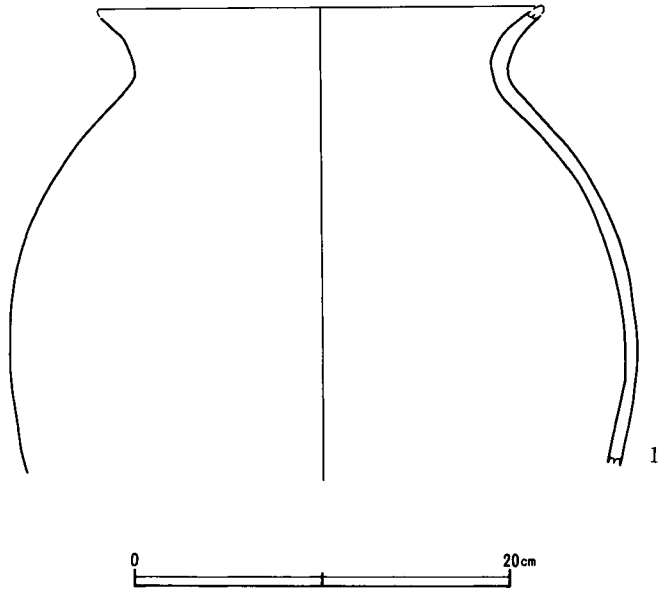
第8図　018住居跡

018住居跡

プラン　方形？　　**規　模**　一辺5.7m　　**主軸方向**　N－39°－W

所　見　住居跡半分を後世の溝２条に切られるため全体を知ることはできない。周溝，柱穴，貯蔵穴などは検出していない。

出土遺物はわずかに１点で，カマド内から出土した土師器甕だけである。この甕は口唇を欠失しているが，「く」の字状の口縁となり，胴部は球形を呈する。



第９図　018住居跡出土遺物

018住居跡出土遺物

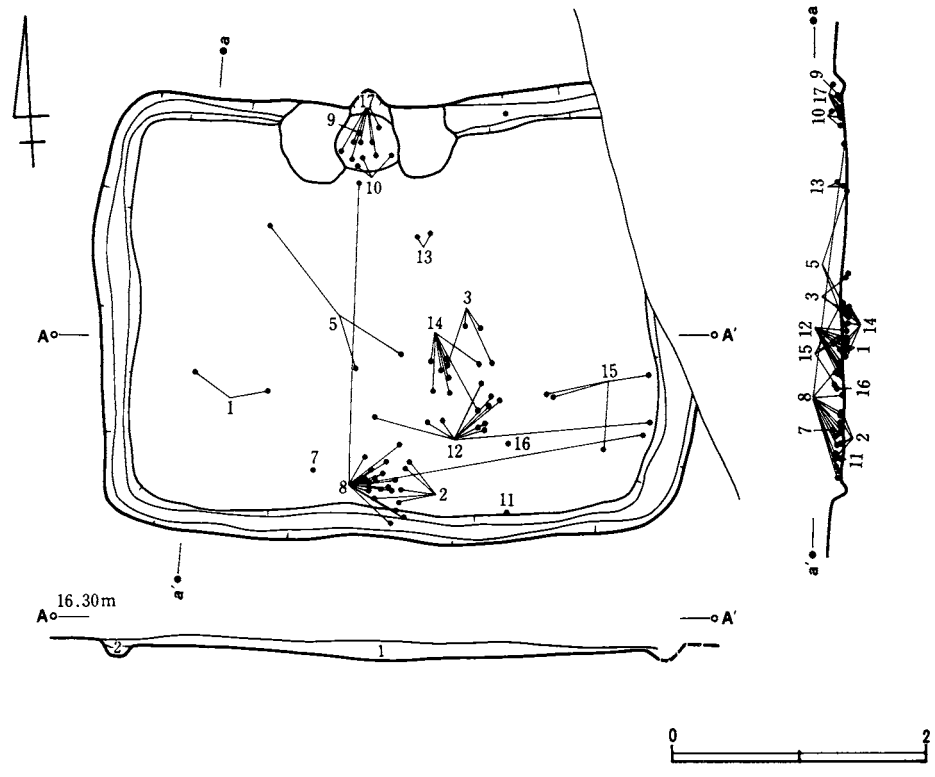
挿図番号	器　種	法　量	遺存状態	成・整形手法	胎　土	色　調	焼　成	備　考
1	甕 （土師器）	(23.5) 〈13.5〉 胴最大径 (33.0)	⅓	口縁部内外－ヨコナデ 胴部内外－器面の剝離が著しく調整不明	中粒砂，長石，石英，雲母－多	暗　褐　色	やや甘	口唇部を欠く

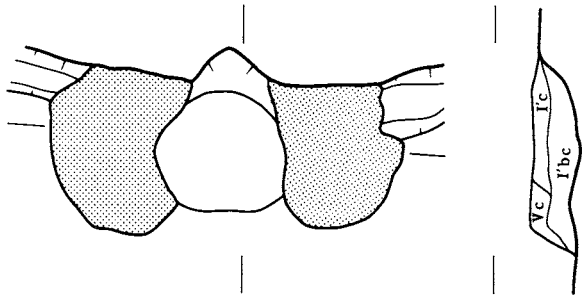
２．奈良・平安時代

検出された遺構は竪穴住居跡22軒，小竪穴１基，時期・性格不明の土坑２基である。

遺構の分布から見ると調査区の東側Ｇ２，Ｈ２グリッドに密に見られる。

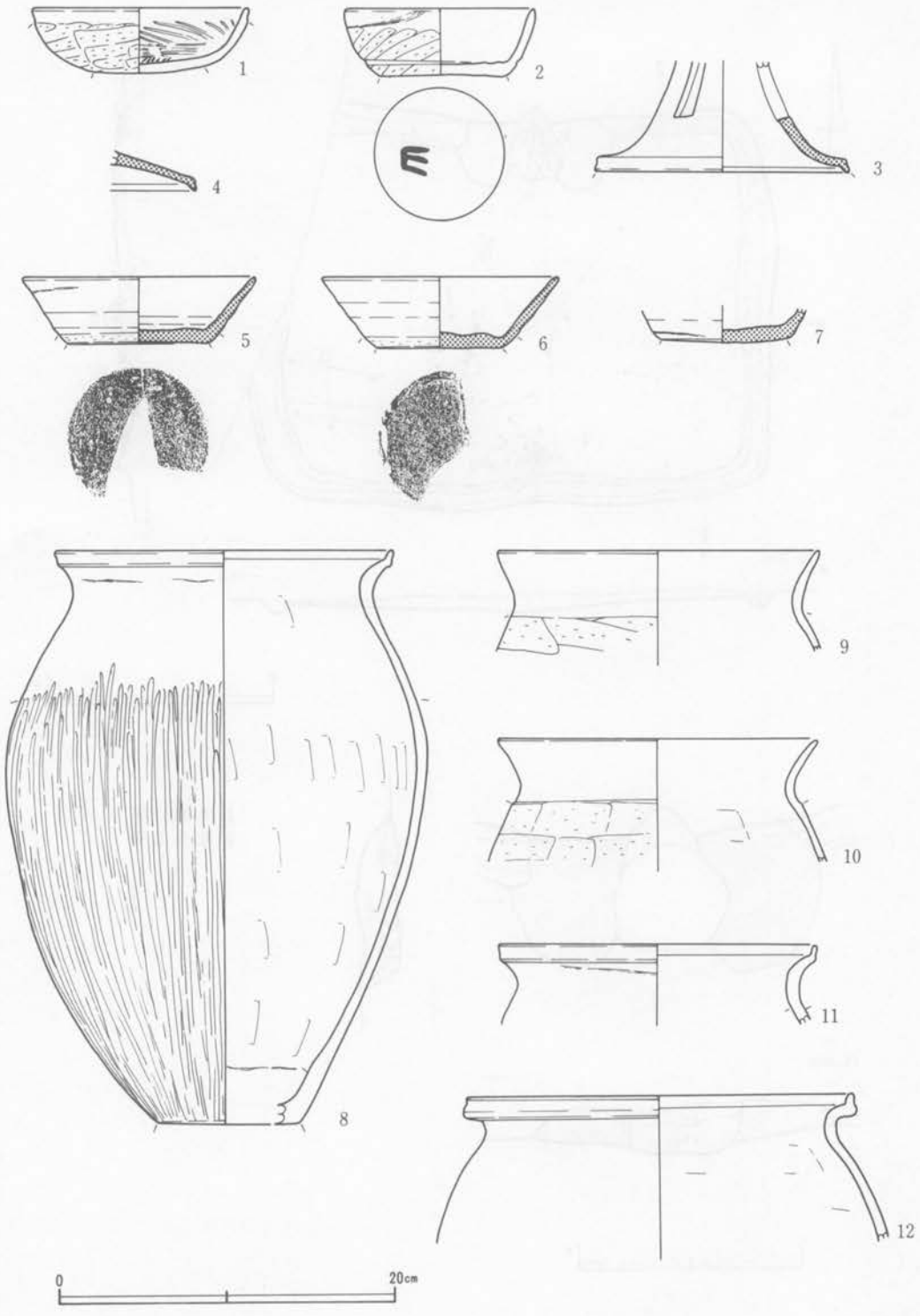
遺物としては豊富な種類の鉄器，「☆」の墨書，線刻を有した土器群がある。



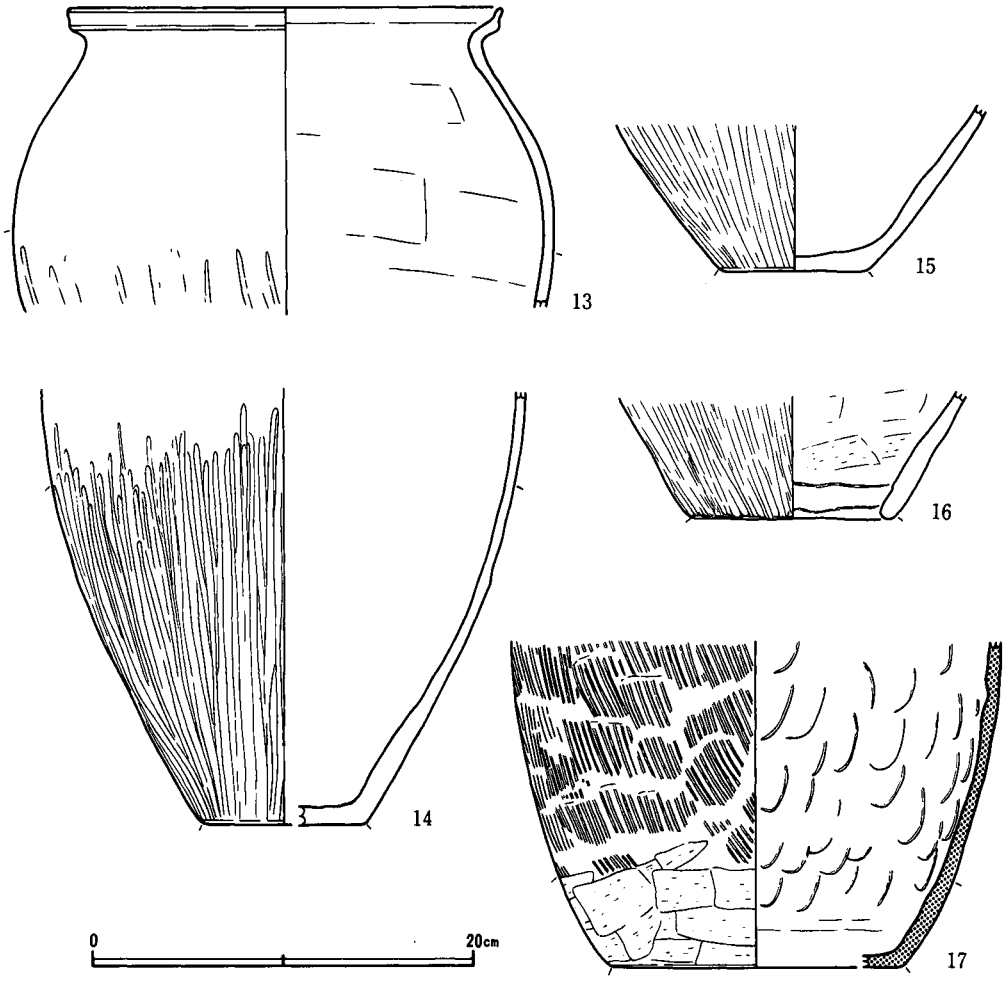


1 黒褐色土層
2 褐 色 土 層

第10図　001住居跡



第11図　001住居跡出土遺物



第12図　001住居跡出土遺物

001住居跡

プラン　長方形　　**規　模**　3.5×4.6m　　**主軸方向**　N－4°－E

所　見　本遺跡調査区内の最も西側に位置する住居跡である。遺構の遺存状態は悪く，現存する壁高は約10cmである。周溝はカマド部を除いて全周する（東側は後世の溝に切られるため不明），幅約20cm，深さ10cm前後を測るが深さ，幅ともに一定しない。カマド周辺にはかき出したと思われる灰の堆積が認められた。

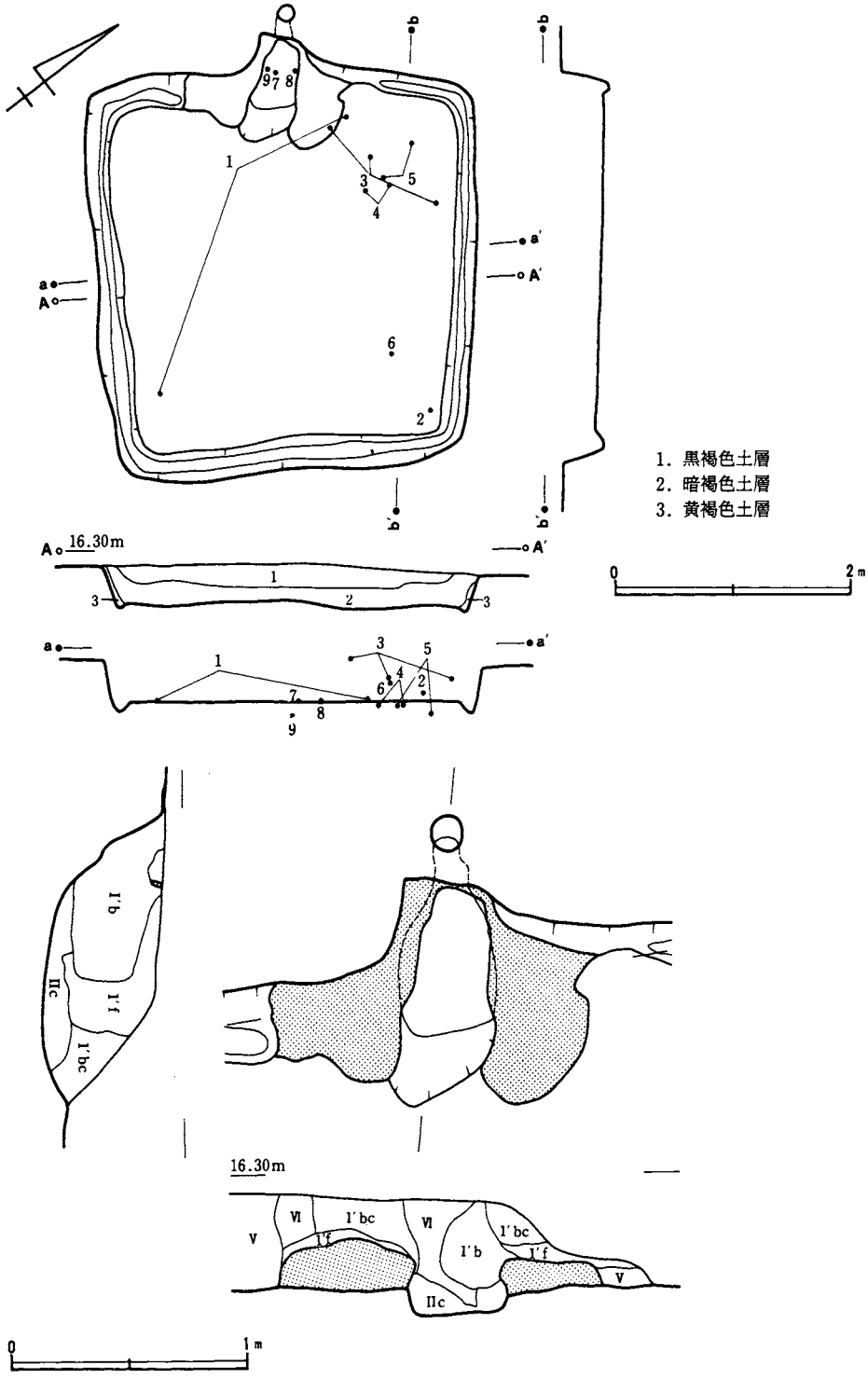
出土遺物は比較的多く床面からの出土が大半である。2は底部に墨書のあるロクロ土師器で，底部中央は木口状工具で削り，周縁を手持ちヘラ削りする（図版13－3）。須恵器坏は口径と底径の差が比較的大きくなる。土師器甕は口唇部をつまみ出し，胴下半に細いヘラ磨きを施すもの（8，13～16）と，口縁は「く」の字状を呈し，胴部は幅広のヘラ削りを施し，薄手のつくりのものの二種がある。

時　期　花前III期

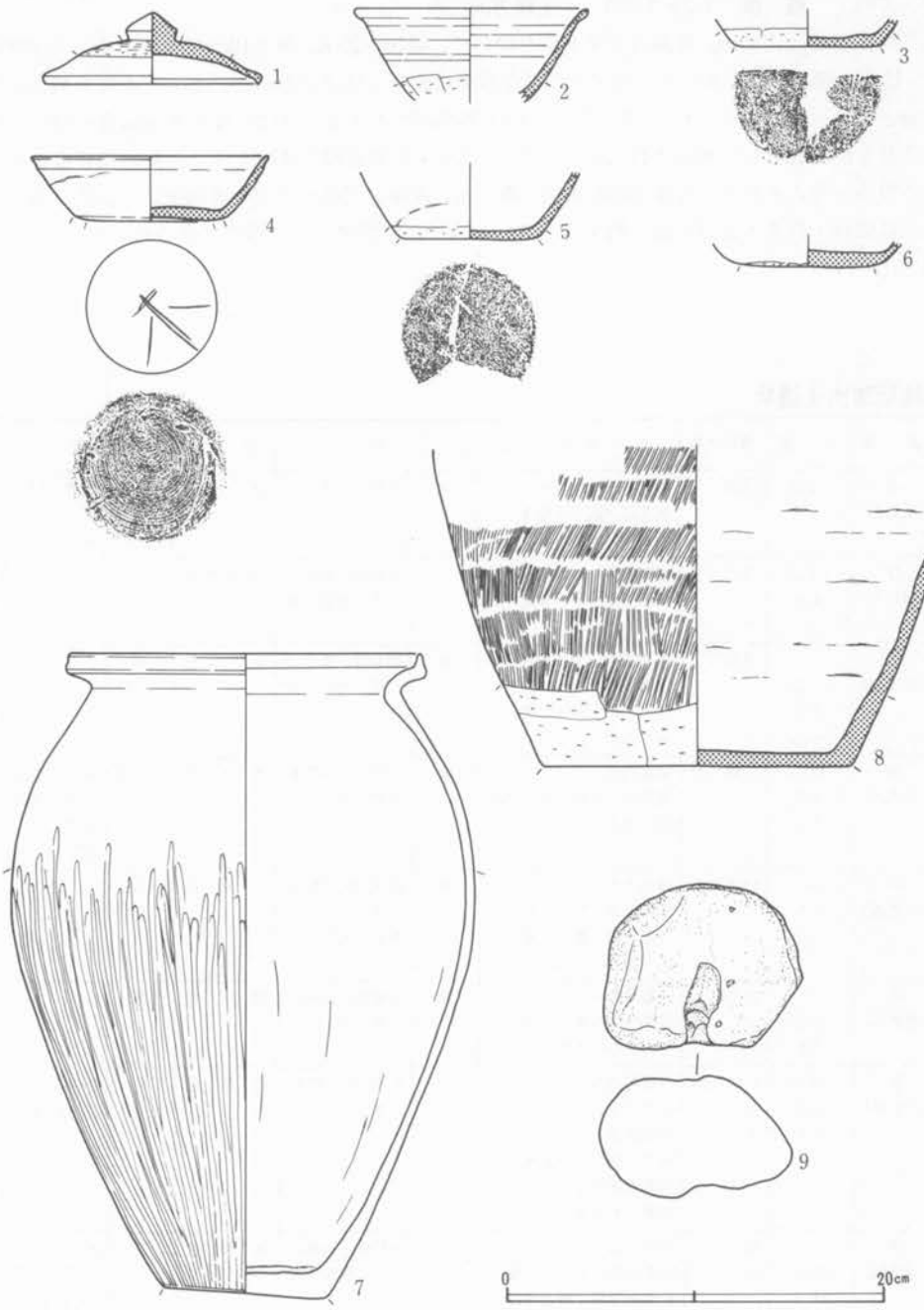
001住居跡出土遺物

挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
1	坏（土師器）	(12.5) 3.9	1/4	口縁部内外ーヨコナデ 体部内面ーヨコナデ後，ヘラ磨キ 体部外面ー斜位方向(左下から右上へ)ヘラ削り 底部ー一定方向のヘラ削り		中粒砂ー多	乳橙色	良	
2	坏（土師器）	(11.5) 4.1 (7.6)	1/4	体部内面ーヨコナデ後，磨キ 口縁外面ーヨコナデ 体部外面ー斜位方向（右上から左下へ）ヘラ削り 体部下端ー棒状工具による沈線 底部ー切り離し不明，木口状工具のナデ		中粒砂ー多	橙褐色	良	墨書 図版13ー3
3	高盤（須恵器）	ー ー (15.0)	脚部1/3	内外面ーヨコナデ		中粒砂，長石 石英ー多 密	灰色	良	
4	蓋（須恵器）	(20.0)	1/8	内外ーヨコナデ		中粒砂ー多 長石，石英ー少	青灰色	良	
5	坏（須恵器）	(14.0) 4.0 (8.0)	1/4	体部内外ーヨコナデ 体部下端ーヨコヘラ削り 底部ー切り離し不明，ヘラ削り		粗粒砂，長石， 石英ー多 雲母ー少	灰褐色	良	
6	坏（須恵器）	(14.0) 4.2 (7.4)	1/4	体部内外ーヨコナデ 体部下端ーヘラケズリ 底部ー切り離し不明，一方向ヘラ削り		粗粒砂，長石， 石英ー多 雲母ー少	灰色	良	
7	坏（須恵器）	ー 〈1.8〉 (7.3)	底部1/2	内外面ーヨコナデ 底部ー回ヘラ切り離し後一定方向にヘラ削り		中粒砂ー多 長石，石英ー少	灰褐色	良	
8	甕（土師器）	(20.0) 33.4 (8.5) 胴最大径 25.0	口縁部3/4欠く	口縁部内外ーヨコナデ 胴部内面ーヘラナデ 胴部外面ー縦方向のヘラナデ		中粒砂，雲母ー多 長石，石英ー少	暗褐色	良	図版13ー4
9	甕（土師器）	(19.0) 〈5.9〉 ー	1/6	口縁部内外ーヨコナデ 胴部内面ーナデ 胴部外面ーヨコヘラ削り		中粒砂ー多	赤褐色	良	
10	甕（土師器）	(19.0) 〈7.2〉	1/8	口縁部内外ーヨコナデ 胴部内面ーナデ 胴部外面ーヨコヘラ削り		細粒砂ー多 密	橙褐色	良	
11	甕（土師器）	(19.0)	1/6	口縁部内外ーヨコナデ 胴部内外ーナデ		中粒砂，長石， 石英ー多 雲母ー少	乳橙色	良	
12	甕（土師器）	22.8 〈8.5〉 ー	3/4	口縁部内外ーヨコナデ 胴部内外ーナデ		中粒砂，長石， 石英ー多 雲母ー少	橙褐色	良	
13	甕（土師器）	(22.5) 〈16.0〉 ー ー	1/6	口縁部内外ーヨコナデ 胴部内面ー木口状工具によるナデ 胴部外面ー縦方向のヘラナデ		中粒砂，長石， 石英ー多 雲母ー少	橙褐色	良	

挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
14	甕 (土師器)	— 〈21.9〉 (8.5)	胴下半1/3	胴部内面—ナデ 胴中位—ナデ 胴下半—縦方向ヘラ磨キ 底部—木葉痕		中粒砂，長石， 石英—多 雲母—少	暗褐色	良	木葉痕
15	甕 (土師器)	— 〈7.6〉 (7.6)	胴下半1/6	胴部内面—ナデ 胴部外面—縦方向のヘラナデ 底部—木葉痕		粗粒砂，長石 石英—多 雲母—少	橙褐色	良	木葉痕
16	甑 (土師器)	— 〈6.3〉 (10.6)	胴下半1/3	胴部内面—ナデ 端部—ヨコ方向のナデ 胴外面—縦方向の磨キ		粗粒砂，長石， 石英—多 雲母—少	橙褐色	良	
17	甕 (須恵器)	— 〈16.8〉 (15.0)	胴下半1/6	胴部外面—斜位の平行叩キ後部分的にナデ 胴部下端—叩キ後，ヘラ削り		中粒砂，雲母—多 長石，石英—少	灰色	良	



第13図　003住居跡



第14図　003住居跡出土遺物

003住居跡

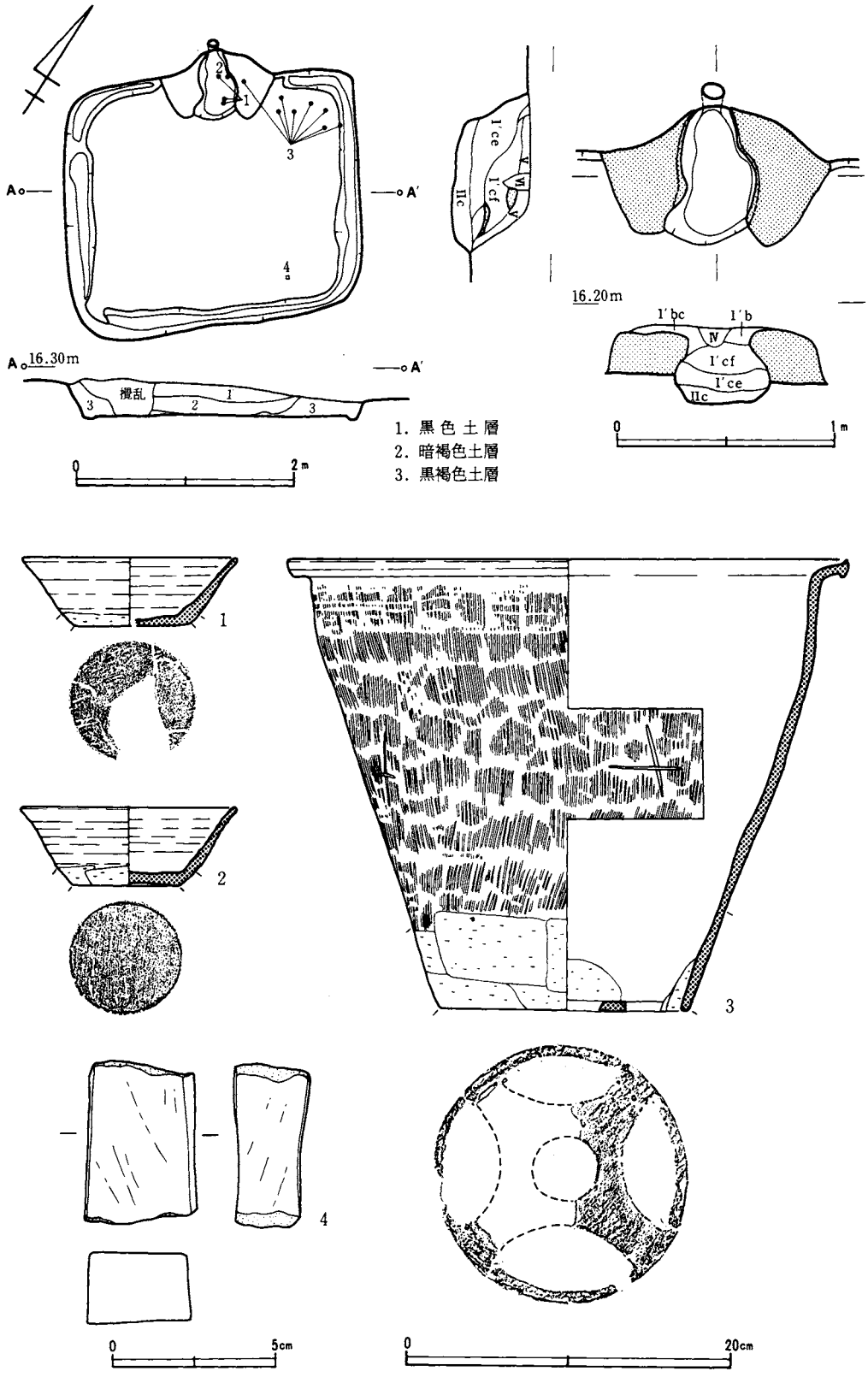
プラン 方形　**規　模** 3.2×3.0m　**主軸方向** N－53°－W

所　見 現在壁高は約30cm，周溝はカマド部を除いて，幅10～25cm，深さ10cmで全周する。床面は固くしまる。柱穴は確認されなかった。カマドの遺存状態は良好とは言えないが，カマド内に堆積する焼土は約10cmと厚い。ここから7・8の甕と9の不明土製品が出土する。9は砂粒を多量に含んだ楕円形の土製品であるが支脚として使用されたものであろうか。4の須恵器坏は胎土に白色針状物を含むもので南比企の製品と考えられる。底部は回転糸切り離し後，周縁に回転ヘラ削りを施す。その他の須恵器坏は，胎土に長石・石英・雲母の混入物を多く含むもので，当該地方で一般的に見られるものである。

時　期 花前IV期

003住居跡出土遺物

挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
1	蓋（須恵器）	11.3 3.9	完形	つまみ一ヨコナデ 天井部一回ヘラ削り 内面～口縁部一ヨコナデ	R	中粒砂一多	灰色	堅緻	全体に焼きひずむ 図版13－5
2	坏（須恵器）	(12.5) 〈4.9〉 —	体部1/3	体部内外一ヨコナデ 体部下端一手ヘラ削り		中粒砂，長石 石英，雲母一多	明灰褐色	良	
3	坏（須恵器）	— 〈1.5〉 7.4	底部1/2	体部内外一ヨコナデ 体部下端一回ヘラ削り 底部一切り離し不明，一定方向手ヘラ削り	R	粗粒砂，長石 石英，雲母一多	灰色	良	
4	坏（須恵器）	12.3 3.5 7.5	口縁1/4欠く	体部内外一ヨコナデ 底部一回糸切り後，周縁回ヘラ削り	R	細粒砂，白色針状物一多	青灰色	堅緻	南比企製品 底部に焼成後の線刻「木」 図版13－6
5	坏（須恵器）	— 〈3.6〉 7.5	口縁欠く1/3	体部内外一ヨコナデ 体部下端一回ヘラ削り 底部一切り離し不明，一定方向手ヘラ削り	R	粗粒砂，雲母一多 長石，石英一少	灰褐色	良	
6	坏（須恵器）	— 〈1.2〉 7.0	底部1/2	体部内外一ヨコナデ 底部一切り離し不明，不定方向のヘラ削り	R	中粒砂，長石， 石英一多	青灰色	良	
7	甕（土師器）	(19.0) 33.2 8.8	口縁2/3胴上半約1/2欠く	口縁部内外一ヨコナデ 胴部内面一ヘラナデ 胴部外面一ナデ 胴部下半一ヘラ磨キ 胴部内面下端一ヨコナデ 底部一木葉痕		中粒砂，雲母一多	暗褐色	良	胴外面の一部にスス付着
8	甕（須恵器）	— 〈16.8〉 16.3	胴下半のみ	胴部内面一ナデ 胴部外面一平行叩キ後，約2cm間隔で横方向のナデ 胴部下端一ヘラ削り 底部一磨滅の為，調整不明		中粒砂，長石， 石英，雲母一多	灰褐色	良	酸化焔焼成
9	支脚？（不明土製品）								



第15図　004住居跡及び出土遺物

004住居跡

プラン 方形　**規　模** 2.3×2.7m　**主軸方向** N－40°－W

所　見 小型の住居跡である。調査途中の段階で，カマド直前と，カマド東側に2ケ所，ピットを検出したが（図版5），精査の結果，この遺構に伴なうものではないと判断され，図面上には記入されていない。現存壁高は15～30cm，周溝は幅15cm前後，深さ5cmでカマド部を除いてほぼ全周する。

須恵器坏1・2はカマド内からの出土で，小さな底部から立ち上がり，口縁はわずかに外反する。甑3は住居跡の北東隅で出土する。胴部に2ケ所，焼成前のヘラ書きが認められる。また砥石4も出土している。

時期 花前VI期

004住居跡出土遺物

挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
1	坏 （須恵器）	13.0 4.2 6.5	¾	体部内外一ヨコナデ 体部下端一回ヘラ削り 底部一切り離し不明，一定方向手ヘラ削り	R	粗粒砂，長石，石英，雲母一多粗	橙褐色	良	酸化焔焼成 図版14－1
2	坏 （須恵器）	13.3 4.8 6.6	口縁½欠く	体部内外一ヨコナデ 体部下端一手ヘラ削り 底部一切り離し不明，一定方向のヘラ削り	R	中粒砂，長石，石英，雲母一多密	灰色	良	図版14－2
3	甑 （須恵器）	34.3 27.2 15.3	ほぼ完形	口縁部内外一ヨコナデ 胴部内面一ヨコナデ 胴部外面一平行叩き，所々を横方向にナデを施す 胴部下端内外一ヘラ削り 底部一磨滅の為調整不明		中粒砂，雲母一多 長石，石英，酸化鉄粒一少	灰褐色	良	胴部外面中位に焼成前のヘラ書キ「十」二ケ所 酸化焔焼成 図版14－3
4	砥石	全長5.0 幅 2.9 厚 2.2							

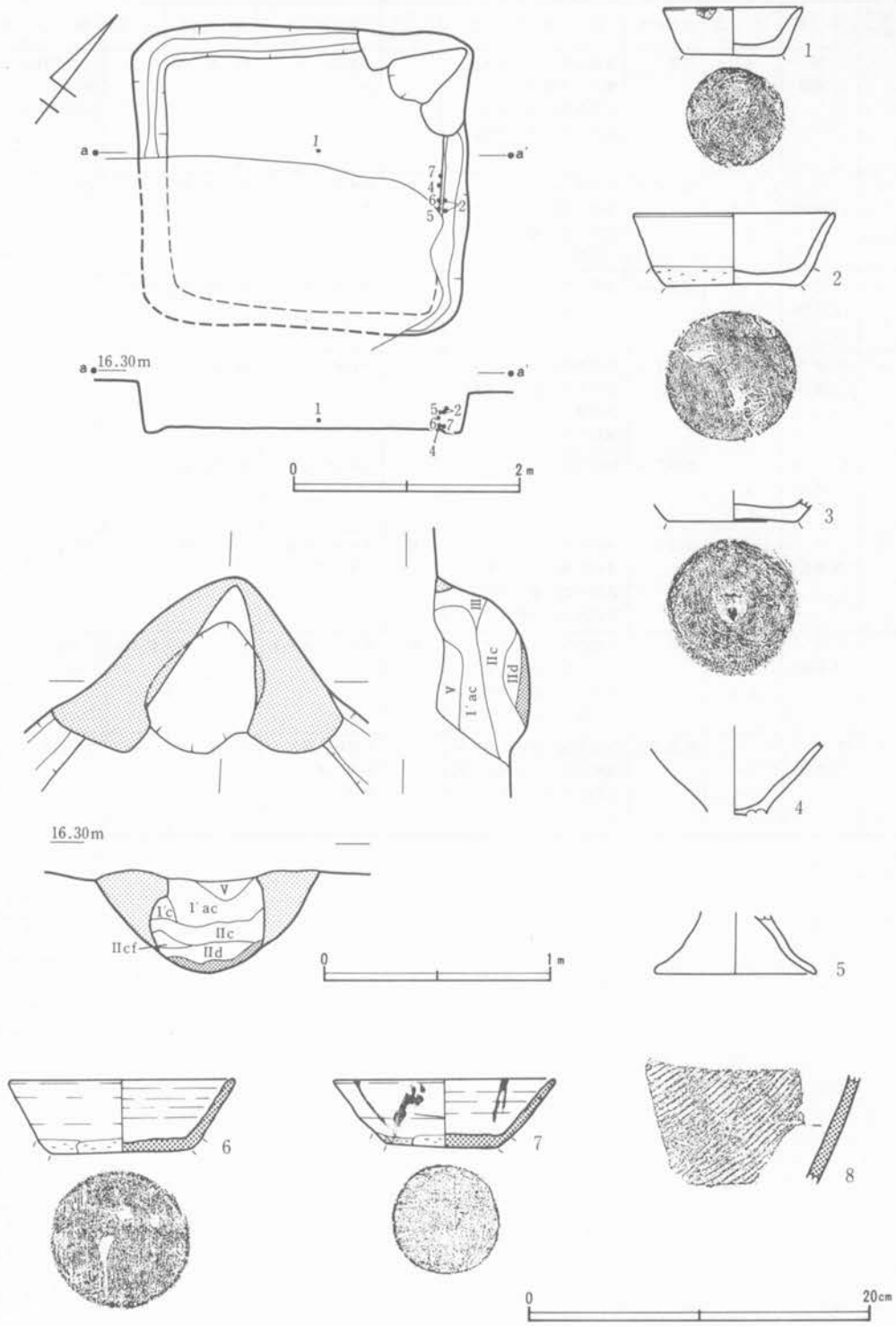
005住居跡

プラン 方形　**規　模** 3.0×2.8m　**主軸方向** N－39°－W

所　見 住居跡の南側半分は削平されるため，全体を知ることはできない。カマドは北東隅に構築される。壁高はほぼ垂直に立ち上がり現存する高さで30cmを測る。周溝は幅15cm，深さ5cmで全周するものと考えられる。柱穴は検出されなかった。遺物の大半は東壁際にかたまって出土する。

土師器坏はいずれもロクロ土師器で，丁寧な作りである。器形に大小が認められる。須恵器坏は比較的底径の大なるもの6と，器高は低く，口径は底径の約2倍になるもの7がある。この他に土師器台付甕と須恵器甕の破片が出土している。

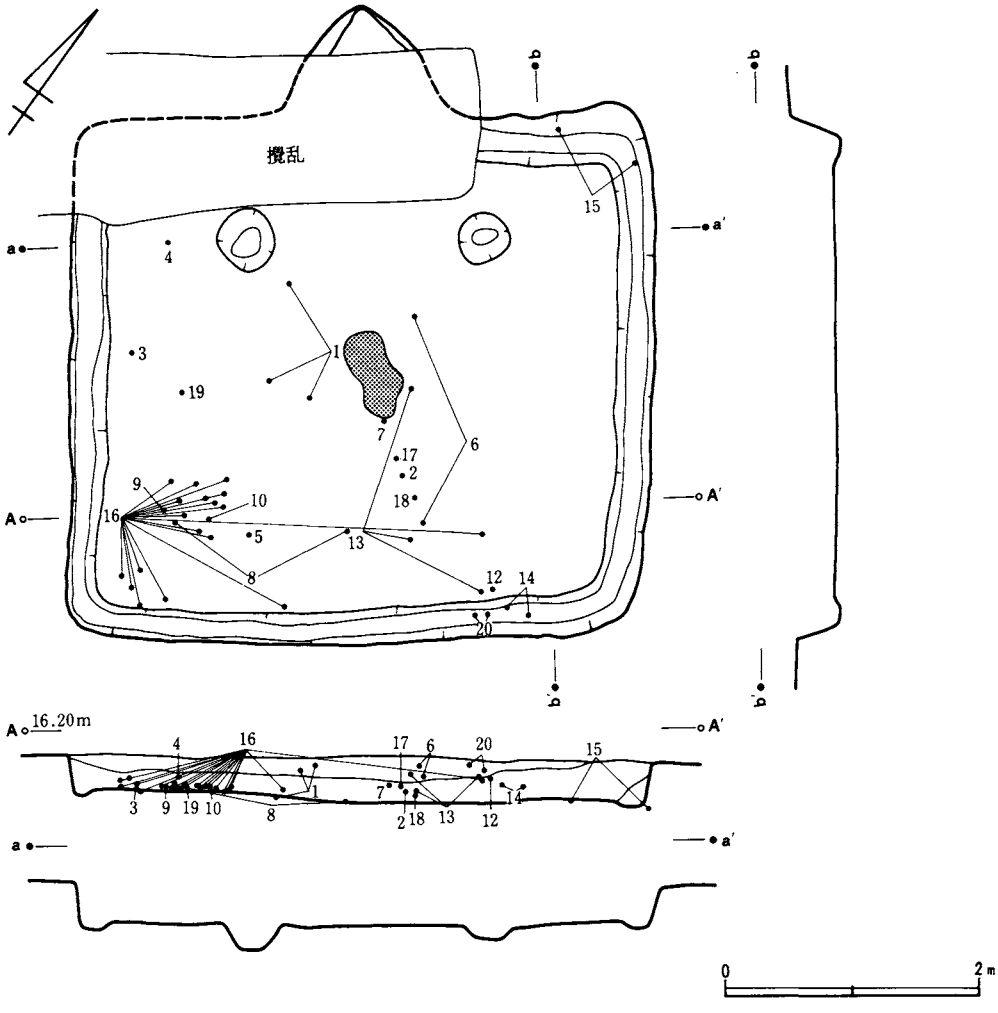
時　期 花前IV期



第16図　005住居跡及び出土遺物

005住居跡出土遺物

挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
1	坏 (土師器)	8.0 2.8 5.5	完形	体部内面一ヨコナデ後，横にヘラ磨キ 体部外面一ヨコナデ 底部一切り離し不明，不定方向に手ヘラ削り		中粒砂一少 密	橙褐色	良	体部内外面に油煙付着 図版14－4
2	坏 (土師器)	11.7 4.2 7.8	ほぼ完形	体部内外一ヨコナデ 体部下端一回ヘラ削り 底部一切り離し不明，回ヘラ削り	R	細粒砂一少 密	橙褐色	良	図版14－5
3	坏 (土師器)	－ 0.6 －	底部のみ	底部一回ヘラ切りか？ 回ヘラ削り		中粒砂一多	橙褐色	やや甘	
4	台付甕 (土師器)	－ 4.1 －	胴部下半のみ	体部内面一ナデ 体部外面一剝落，摩耗の為不明 底部一ナデ		中粒砂一多 密	暗褐色	良	
5	台付甕 (土師器)	－ 3.5 (9.3)	脚部のみ	脚部内外一ヨコナデ		中粒砂一多	橙褐色	良	
6	坏 (須恵器)	13.1 4.3 7.9	ほぼ完形	体部内外一ヨコナデ 体部下端一手ヘラ削り 底部一切り離し不明，一定方向のヘラ削り	R	中粒砂，長石，石英，雲母一少	灰色	良	底部にスス付着 図版14－6
7	坏 (須恵器)	13.0 3.9 6.4	完形	体部内外一ヨコナデ 体部下端一手ヘラ削り 底部一切り離し不明，一定方向のヘラ削り	R	長石，石英一多	灰色	堅緻	内外面に火襷痕 図版14－7
8	甕？ (須恵器)	－ － －	胴部破片	胴部内面一摩耗の為不明 胴部外面一平行叩キ，部分的にその上をナデている		粗粒砂，長石，石英一多 雲母一少	灰褐色	良	酸化焰焼成



第17図　006住居跡

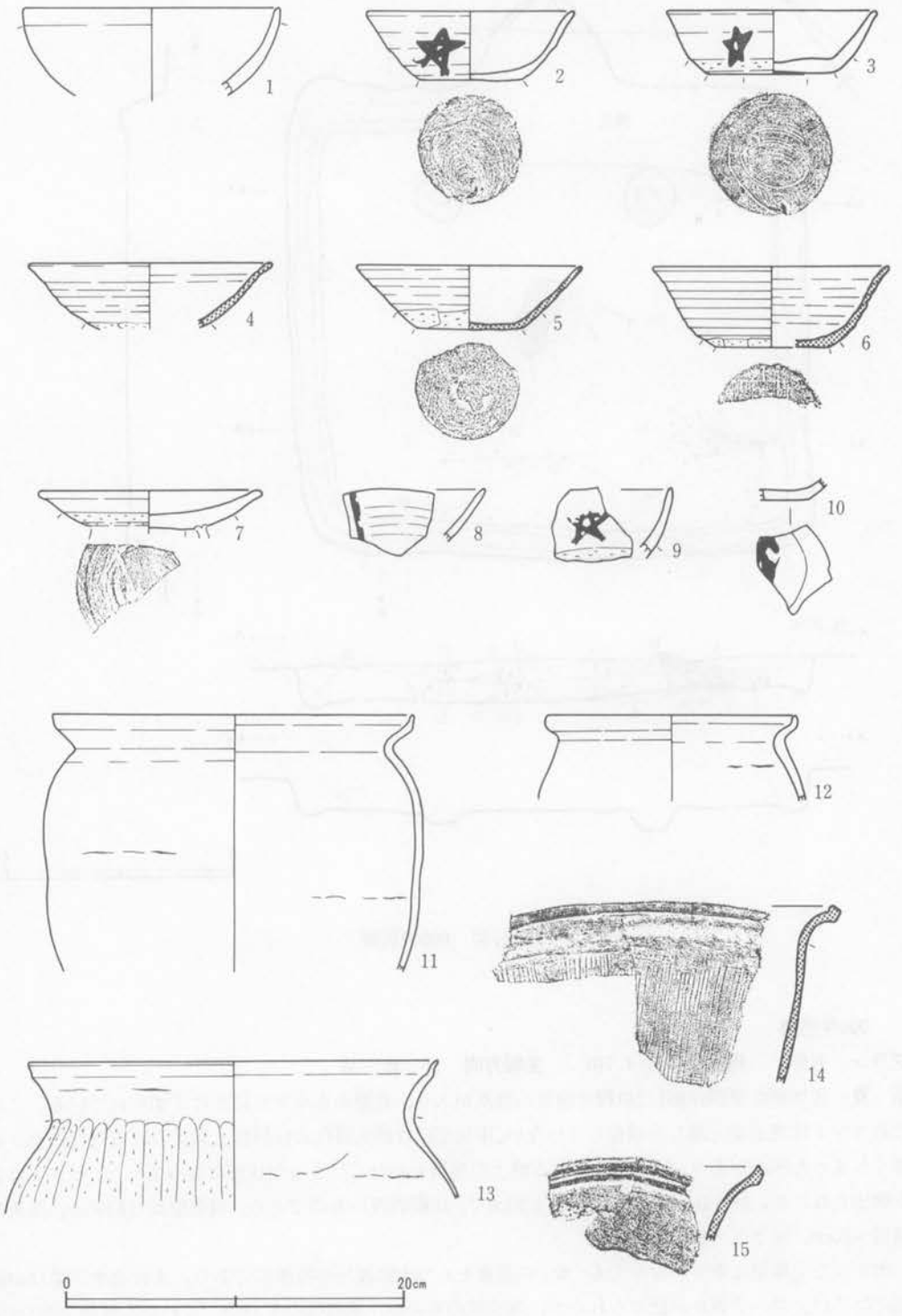
006住居跡

プラン　方形　　**規模**　4.1×4.7m　　**主軸方向**　N－35°－W

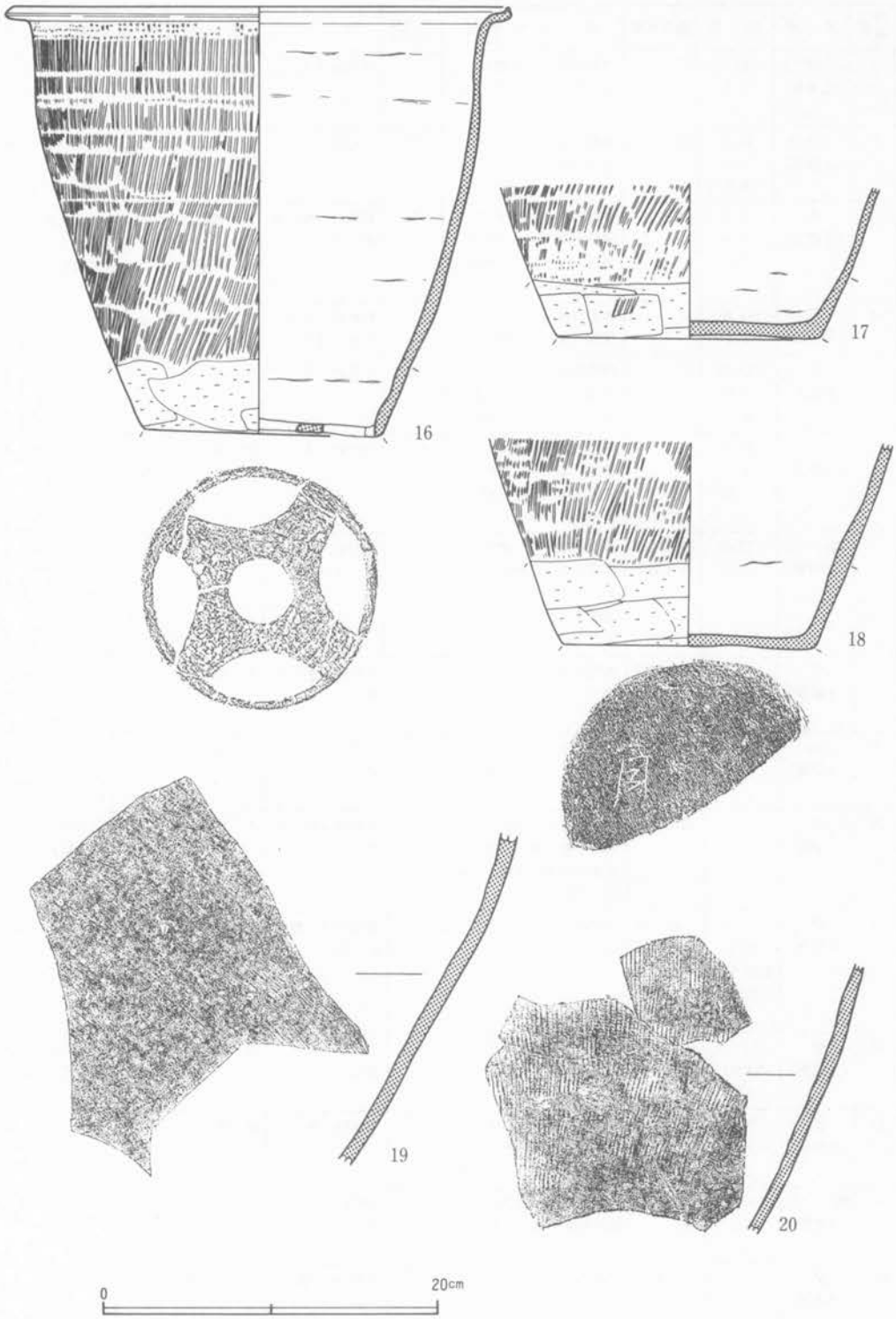
所　見　住居跡北壁側は幅1.2m程の後世の攪乱が入り，北壁からカマドにかけて切られている。このためカマドは煙道部先端しか遺存していない。中央部には縄文時代の住居跡と考えられる円形プランの固くしまった床面があり，炉と考えられる焼土の堆積もかたくしまった状態になっていた。ピットは2本検出されたが，掘り込みの深さは10cmと20cmで，比較的浅いものである。現存壁高は約30cm，周溝は幅15～25cm，深さ5～10cmを測る。

出土した土器量は多く，なかでも「☆」の墨書をもつ土師器坏が特徴的である。また須恵器甕18の底部には「月」のヘラ書きが認められるが，焼成前のものか，焼成後のものか，にわかには断じがたい。

時　期　花前Ⅶ期



第18図　006住居跡出土遺物

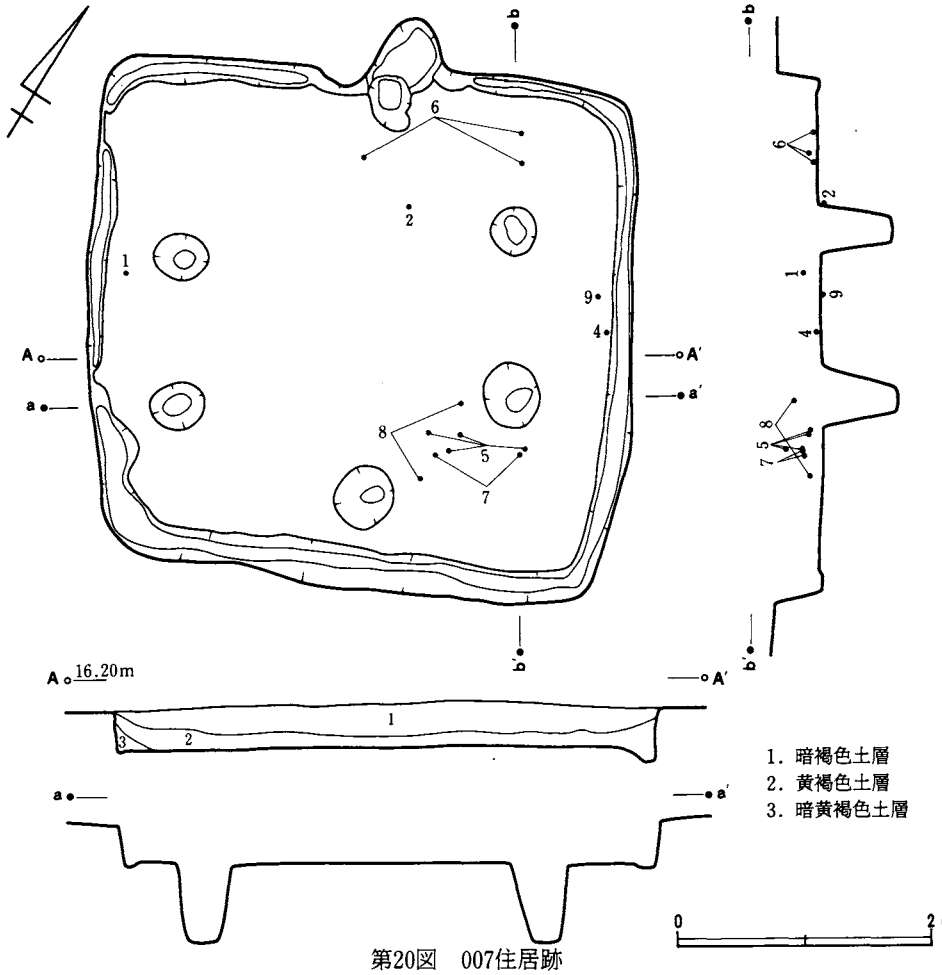


第19図　006住居跡出土遺物

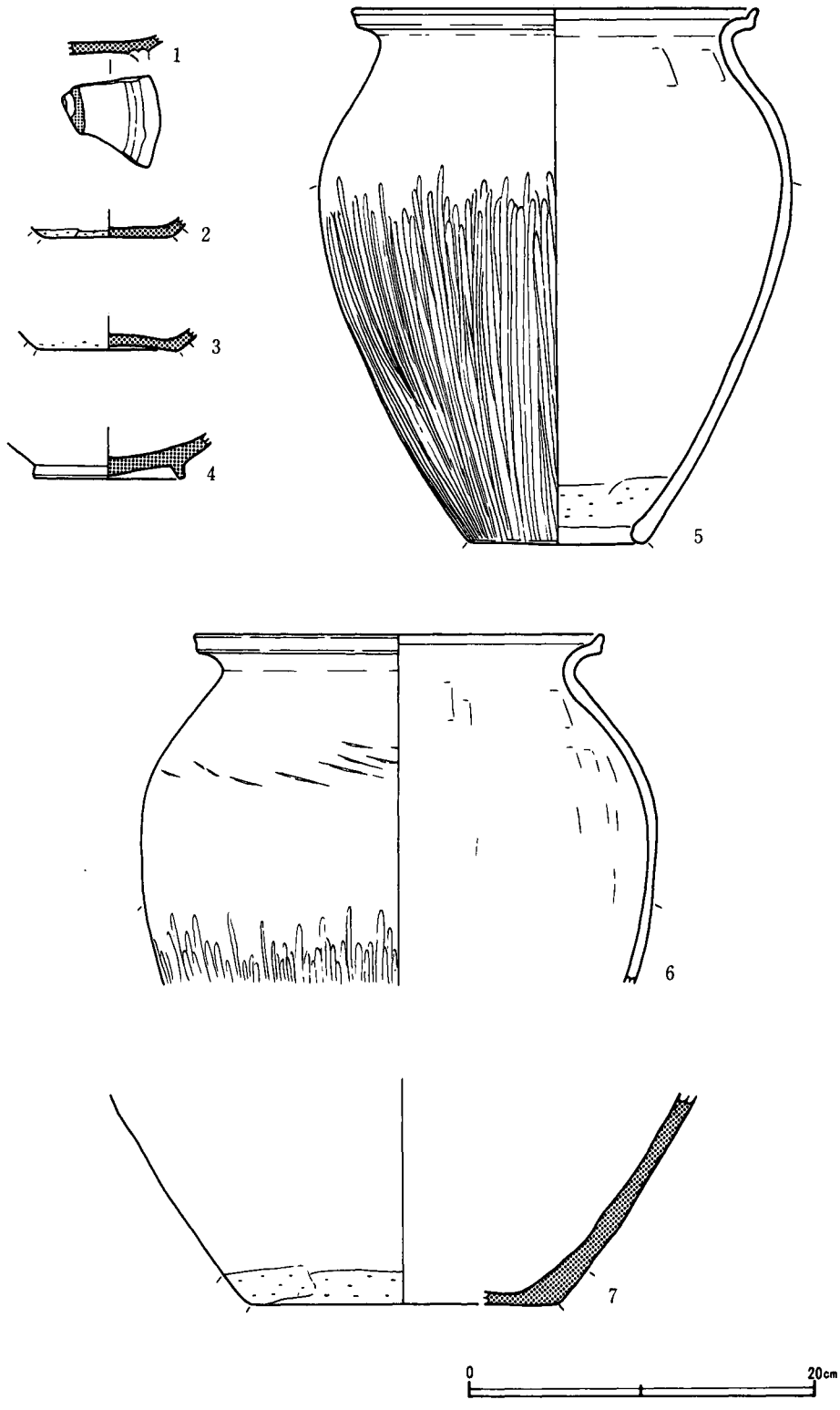
006住居跡出土遺物

挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
1	坏 (土師器)	(15.0) 〈5.1〉 —	¼	体部内面—ヘラ磨き 体部外面—ヨコナデ		中粒砂—多	橙褐色	良	
2	坏 (土師器)	12.2 4.0 6.0	完形	体部内外—ヨコナデ 底部—回糸切り	R	細粒砂—少 密	乳橙色	良	体部外面に「☆」墨書 図版15—1
3	坏 (土師器)	12.4 3.8 7.5	¾	体部内外—ヨコナデ 体部下端—回ヘラ削り 底部—回糸切り、周縁回ヘラ削り	R	細粒砂，酸化鉄粒—少	乳橙色	良	体部外面に「☆」墨書 図版15—2
4	坏 (須恵器)	(14.0) 〈3.8〉	¼	体部内外—ヨコナデ 体部下端—ヘラ削り		粗粒砂，長石，石英，雲母—多	灰褐色	良	
5	坏 (須恵器)	(13.2) 3.8 6.2	¼	体部内外—ヨコナデ 体部下端—手ヘラ削り後，一定方向のヘラ削り	R	中粒砂—多	灰白色	良	
6	坏 (須恵器)	(13.6) 4.7 (6.6)	⅙	体部内外—ヨコナデ 体部下端—手ヘラ削り 底部—切り離し不明，一定方向のヘラ削り	R？	中粒砂—多	暗褐色	良	体部外面に火襷痕
7	高台付皿 (土師器)	(13.0) 〈2.1〉 —	体部⅙，高台部欠く	体部内面—ヘラ磨き 体部外面～口縁部—ヨコナデ 体部下端—回ヘラ削り 底部—回糸切り		粗粒砂，酸化鉄粒—少 密	乳橙色	良	
8	坏 (土師器)	— — —	口縁部破片	体部内外—ヨコナデ		細粒砂，酸化鉄粒—少	乳橙色	良	体部外面墨書
9	坏 (土師器)	— — —	体部破片	体部外面—ヨコナデ 体部下端—回ヘラ削り		中粒砂—少 密	乳橙色	良	体部外面に「☆」墨書 図版15—3
10	坏 (土師器)	— — —	底部破片	体部内面—ヨコナデ 体部下端—回ヘラ削り 底部—回糸切り後，周縁回ヘラ削り		中粒砂，酸化鉄粒—少	乳橙色	良	底部外面に墨書，判読不可
11	甕 (土師器)	(21.0) 〈14.8〉 胴最大径 22.2 —	口縁，胴部上半¼	口縁部内外—ヨコナデ 胴部内外—ナデ		雲母—多，粗粒砂—少	淡黄褐色	良	
12	甕 (土師器)	(14.5) 〈4.8〉 —	¼	口縁部内外—ヨコナデ 胴部内外—ナデ		中粒砂—多 雲母—少	暗褐色	良	頸部内面に炭化物付着
13	甕 (土師器)	(24.0) 〈8.0〉	⅓	口縁部内外—ヨコナデ 胴部内面—ヘラナデ 胴部外面—縦位ヘラ削り		中粒砂—多	暗褐色	良	
14	甑　？ (須恵器)	— 10.2 —	口縁部の破片	口縁部内外—ヨコナデ 胴部外面—格子目風平行叩キ		中粒砂—少 雲母—多	黒褐色	良	20と同一個体？
15	甕 (須恵器)	— 4.2 —	口縁部破片	口縁部内外—ヨコナデ		中粒砂、雲母—少	灰色	良	

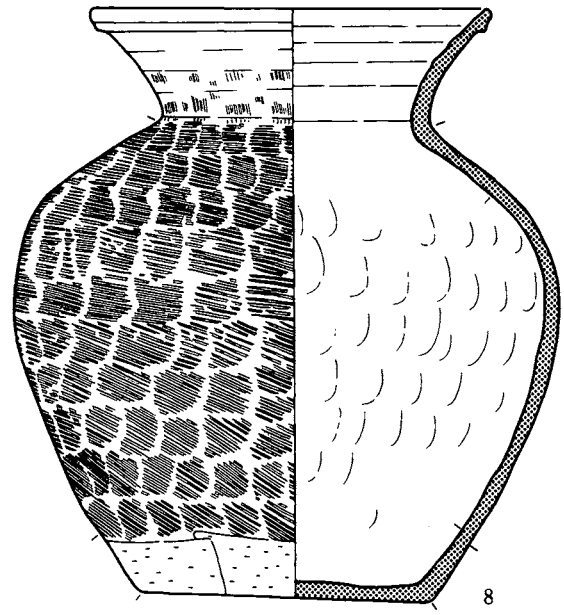
挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
16	甑（須恵器）	29.4 25.4 14.0	完形	口縁部内外一ヨコナデ 胴部内面一ナデ 胴部外面一平行叩き後，間隔をおいてヨコナデ施す 胴部下端一ヨコヘラ削り 底部一ヘラ工具にて穿孔		細粒砂，雲母一少	灰色	良	図版15－4
17	甕（須恵器）	— 〈10.0〉 15.3	胴下半，底部	胴部内面一ナデ 胴部外面一平行叩き 胴部下端一ヘラ削り 底部一磨滅，調整不明		粗粒砂，長石，石英，雲母一多	灰褐色	良	酸化焔焼成
18	甕（須恵器）	— 〈12.0〉	胴下半，底部½	胴部内面一ナデ 胴部外面一平行叩キ後，ナデ 胴部下端一ヘラ削り 底部一ナデ		中粒砂一多	暗褐色	良	底部外面に「月」の焼成前のヘラ書き有り
19	甕（須恵器）	— — —	胴部下半破片	胴部内面一ナデ 胴部外面一平行叩き後，ナデ		細礫一少	灰色	堅緻	
20	甑（須恵器）	— — —	胴部下半の破片	胴部内面一ナデ 胴部外面一格子目風平行叩キ 胴部下端一横ヘラ削り		中粒砂一少 雲母一多	黒褐色	良	14と同一個体か？

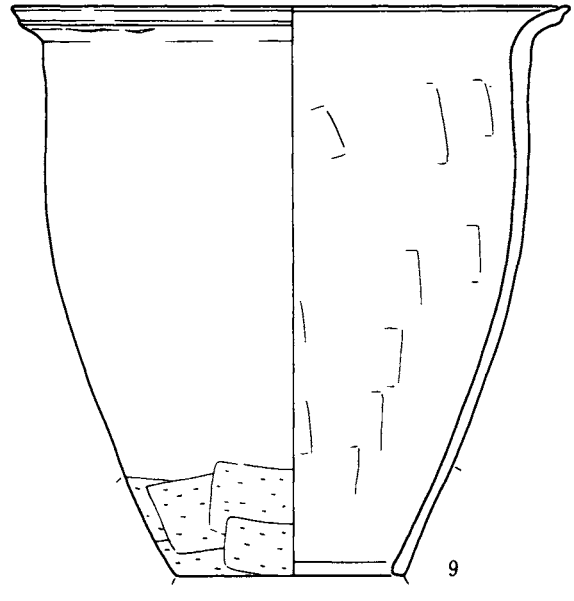


第20図　007住居跡



第21図　007住居跡出土遺物





第22図　007住居跡出土遺物

007住居跡

プラン　方形　　**規模**　3.9×4.2m　　**主軸方向**　N－30°－W

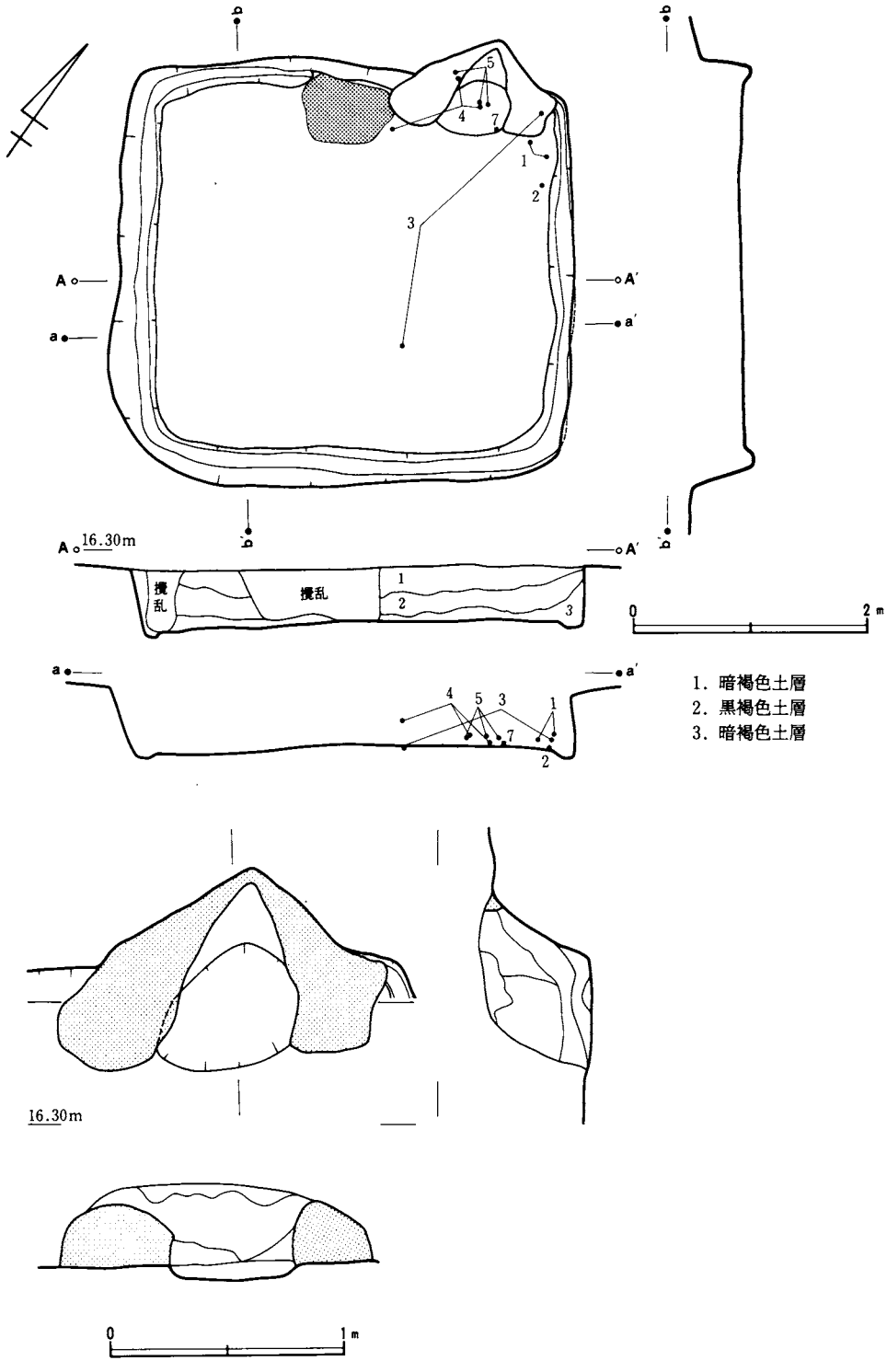
所　見　柱穴の並びは整然としないが，4本柱とカマドに対面する柱の形態をとる。壁はほぼ垂直に立ち上がり，現存高30～35cmを測る。周溝は幅5～15cm，深さ3～10cmで全周する。カマドの遺存状態は極めて悪く，掘方を残すのみである。

出土遺物は須恵器坏・甕，土師器甕，甑である。単孔式の甑9は床に密着して倒立した状態で出土した。須恵器甕8は押しつぶされた状態で出土している。須恵器坏1は高台付になるものであるが，底部に「◎」になると思われる朱書が認められる。この土器は住居埋没過程で流れ込んだものと考えられる。

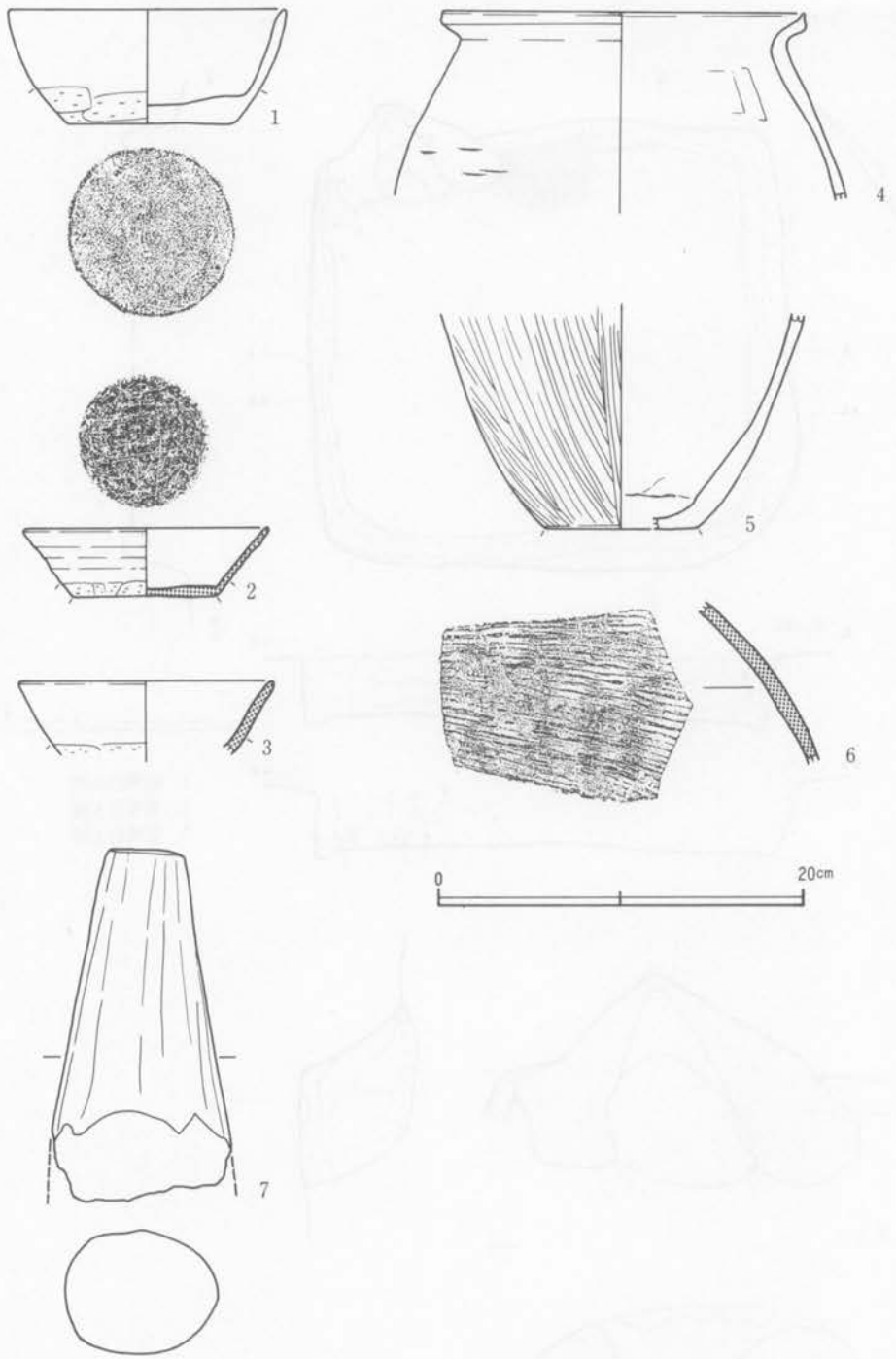
時　期　花前IV期

007住居跡出土遺物

挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
1	高台付坏 (須恵器)	－ － －	底部破片	底部一回ヘラ削り		中粒砂，長石，石英，雲母一多	灰白色	良	底部外面朱書
2	坏 (須恵器)	－ － 7.3	底部½	内外一ヨコナデ 体部下端一回ヘラ削り 底部一回糸切り後，一定方向のヘラ削り		中粒砂一多	暗褐色	良	
3	坏 (須恵器)	－ － 8.2	底部のみ	体部内面一ヨコナデ 体部下端一ヘラ削り 底部一回ヘラ切り後，回ヘラ削り	R	細粒砂・雲母一多	暗褐色	良	
4	高台付坏 (須恵器)	－ 高台径 8.8	底部のみ	高台部一ヨコナデ 底部一回ヘラ削り	R	細粒砂，雲母一多	灰白色	甘	
5	甕 (土師器)	23.8 〈30.5〉 胴最大径 27.5 －	底部欠く	口縁部内外一ヨコナデ 胴部内面一ヘラナデ 胴部上位一ナデ 胴部外面一ヘラ磨キ 底部一欠損後，割れ口を磨キ，コシキ様にする		細礫，長石，石英一多 雲母，酸化鉄粒一少	暗褐色	良	図版15－5
6	甕 (土師器)	(23.5) 〈19.8〉 胴最大径 30.0 －	胴上半¼	口縁部内外一ヨコナデ 胴部内面一ヘラナデ 胴部上半一ナデ 胴部下半一ヘラ磨キ		細粒砂，雲母一多	暗褐色	良	
7	甕 (須恵器)	－ 〈11.9〉 (17.2)	胴部下半⅓	胴部内面一磨滅の為調整不明 胴部外面一ていねいなナデ 胴部下端一ヘラ削り 底部一ナデ		中粒砂，雲母一多 長石，石英一少	灰白色	やや甘	
8	甕 (須恵器)	20.9 30.6 胴最大径 28.7 15.2	口縁部½欠く	口縁部内外一ヨコナデ 胴部内上位一ナデ 胴部内面一タンポ状あて具 内部下端一横方向のナデ 胴部外面一平行叩キ 下端一横ヘラ削り 底部一磨滅の為調整不明		中粒砂一多	灰白色	やや甘	図版15－6
9	甑 (土師器)	29.4 29.3 12.1	底部½欠く	口縁部内外面一ヨコナデ 胴部内面一ヘラナデ 胴部外面一ナデ 胴部下端一ヘラ削り 底部一ヘラ切りによる穿孔		中粒砂一多 長石・石英・雲母一少	淡黄褐色	良	図版15－7


A
A'
a
a'
b
b'
16.30m
撹乱
撹乱
1
2
3
4
5
7
0
2 m
1. 暗褐色土層
2. 黒褐色土層
3. 暗褐色土層
16.30m
0
1 m

第23図　008住居跡



第24図　008住居跡出土遺物

008住居跡

プラン　方形　　**規　模**　3.7×3.9m　　**主軸方向**　N−34°−W

所　見　北壁の東隅にカマドを構築しているが，その西側床面に焼土と山砂が密着した状態で検出された。このことから現存するカマド以前に構築されたカマドの痕跡と考えられる。柱穴は検出されなかっ

た。周溝は幅15～20cm，深さ５～10cmで，カマド部を除いて全周する。床面は全体に固くしまった状態であった。現存壁高は35～55cmを測る。

遺物の多くはカマド内およびその周辺から出土する。須恵器坏２の内面には焼成後による「井」の線刻が認められる。

時　期　花前III期

008住居跡出土遺物

挿図番号	器　種	法　量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎　土	色　調	焼　成	備　考
1	坏 (土師器)	(15.0) 6.2 8.9	体部½欠く	体部内外面ーヨコナデ後，ヘラ磨キ 体部下端ー手ヘラ削り 底部ー不定方向のヘラ削り	R	中粒砂ー多 酸化鉄粒ー少	橙　褐　色	良	図版14－８
2	坏 (須恵器)	(13.1) 3.7 7.7	⅓	体部内外ーヨコナデ 体部下端ー手ヘラ削り 底部ー回ヘラ切り後，一定方向手ヘラ削り	R	中粒砂ー多 細礫，雲母ー少	灰　色	良	底部内面に焼成後「井」の線刻 図版14－９
3	坏 (須恵器)	(13.8) 〈3.9〉	½	体部内外ーヨコナデ 体部下端ーヘラ削り		中粒砂，雲母ー多	灰　色	良	
4	甕 (土師器)	(20.0) 〈10.0〉 —	¼	口縁内外ーヨコナデ 胴部内面ーヘラナデ 胴部外面ーナデ		中粒砂，雲母ー多 細礫ー少	淡　褐　色	良	
5	甕 (土師器)	— 〈11.3〉 (8.0)	胴下半⅓	胴部内面ーナデ 胴部外面ー縦位のヘラ磨キ 底部ーナデ		細礫，長石，石英ー多，雲母ー少	暗　褐　色	良	
6	甕 (須恵器)	— — —	胴部破片	胴部内面ータンポ具あて具 胴部外面ー平行叩キ		細礫，雲母ー多	灰　褐　色	良	

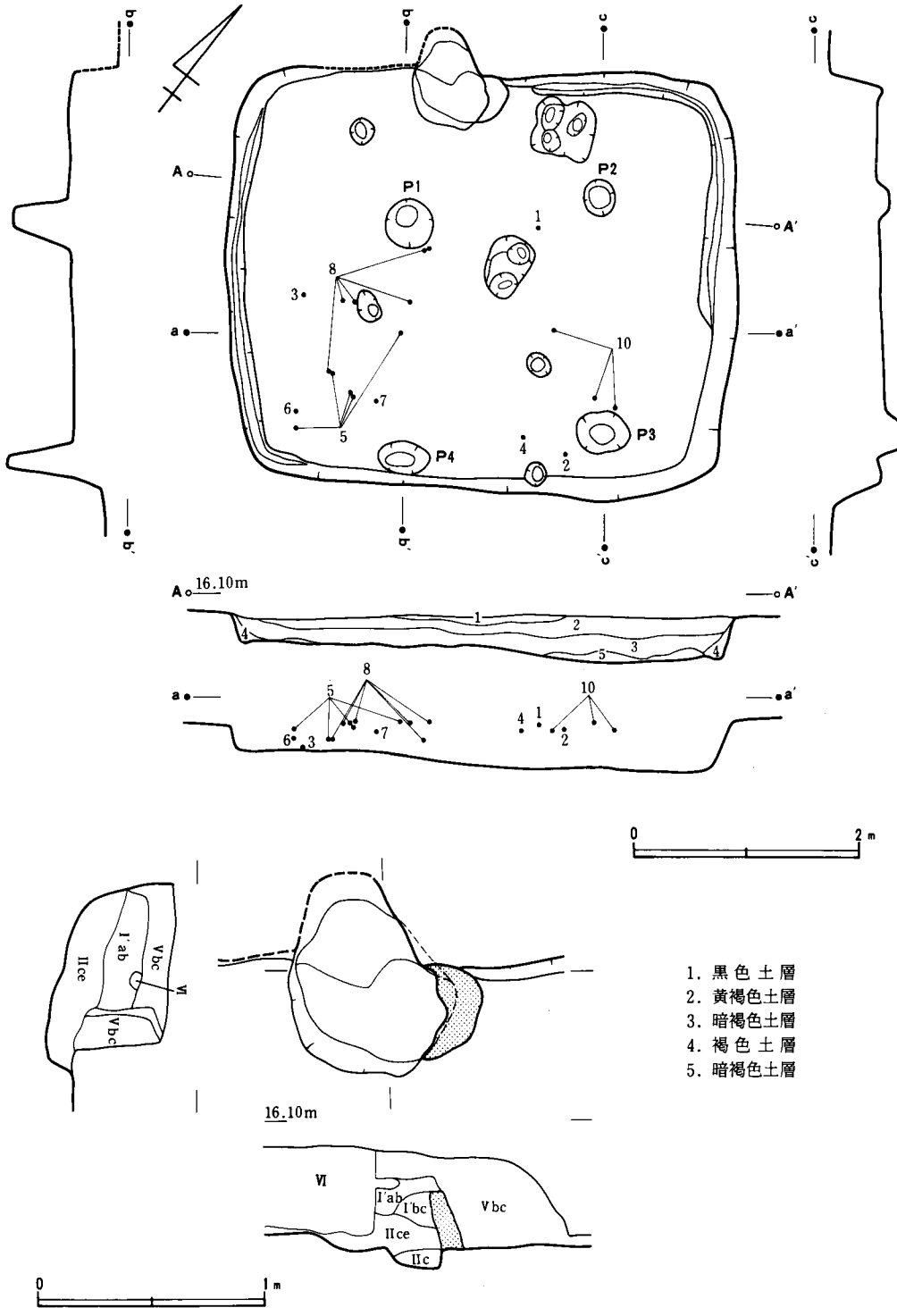
011住居跡

プラン　長方形　　**規　模**　3.7×4.5m　　**主軸方向**　N－38°－W

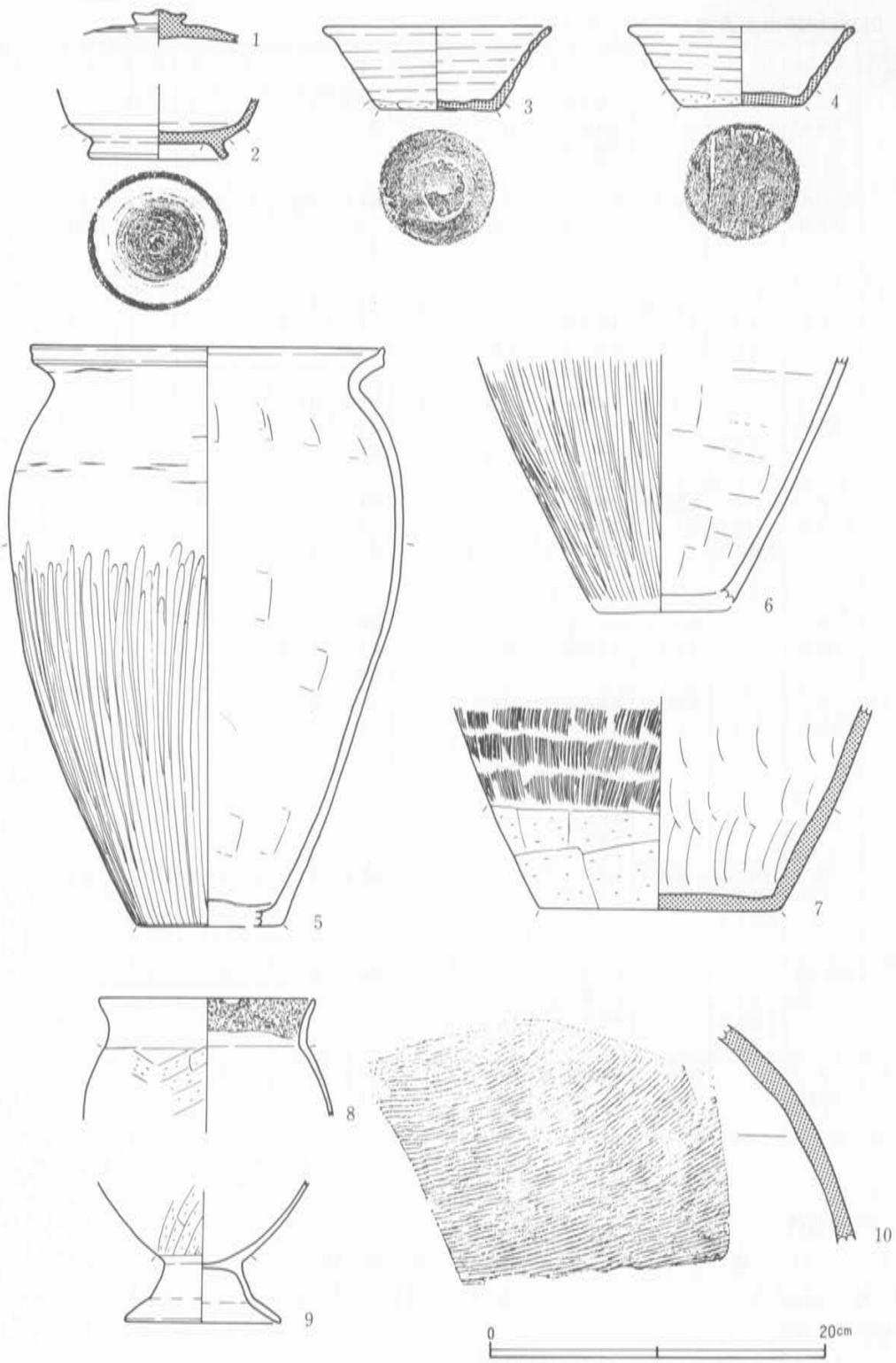
所　見　やや大型の住居跡である。床面でピットを数多く確認しているが，いずれも並び，規模ともに整然とせず判断が難しいが，P1～P4をもって柱穴と考え，四本柱の形態と考えたい。周溝は西壁と北壁から東壁の一部に認められるだけで全周しない。巾は10～15cm，深さ５cmを測る。北壁は攪乱を受けるために，カマドの遺存状態は極めて悪い。

遺物は住居の南半分で多く出土している。８は土師器甕の口縁であるが，９と同一個体になると考えられる。

時　期　花前VI期


P1
P2
P3
P4
A
A'
a
a'
b
b'
c
c'
16.10m
0
2 m
1. 黒色土層
2. 黄褐色土層
3. 暗褐色土層
4. 褐色土層
5. 暗褐色土層
I'ab
Vbc
IIce
VI
I'bc
IIc
1 m

第25図　011住居跡



第26図　011住居跡出土遺物

011住居跡出土遺物

挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
1	蓋 (須恵器)	つまみ径 3.1 つまみ高 0.9	½	つまみ部一ヨコナデ 天井部一回ヘラ削り 内面一ヨコナデ	R	細粒砂一多 密	灰色	堅緻	
2	高台付坏 (須恵器)	— 〈3.6〉 高台径 8.3	口縁部を欠く	体部内面一ヨコナデ 体部下端一回ヘラ削り 高台部内外一ヨコナデ 底部一回ヘラ削り	R	細粒砂，雲母一多 密	灰白色	やや甘	底部外面に朱書判読不明
3	坏 (須恵器)	13.6 4.9 6.9	口縁部を若干欠く	体部内外一コヨナデ 体部下端一手ヘラ削り 底部一回ヘラ切り離し後一定方向のヘラ削り	R	粗粒砂，雲母，長石，石英一多	灰褐色	やや甘	酸化焔焼成 図版16—1
4	坏 (須恵器)	13.3 4.7 7.0	口縁⅓を欠く	体部内外一ヨコナデ 体部下端一手ヘラ削り 底部一切り離し不明，一定方向のヘラ削り	R	粗粒砂，長石，石英一多 雲母一少	灰色	やや甘	図版16—2
5	甕 (土師器)	21.0 33.5 胴最大径 23.4 (8.9)	底部⅓を欠く	口縁部内外一ヨコナデ 胴部内外一ヘラナデ 胴部下半一縦位のヘラ磨キ 底部一木葉痕		中粒砂，雲母一多 長石，石英一少	暗褐色	良	図版16—3
6	甕 (土師器)	— 〈14.6〉 —	胴部下半底部を欠く	胴部内面一ヘラナデ 胴部外面一ヘラ磨キ		粗粒砂，細礫，長石，石英一多 雲母一少	橙褐色	良	
7	甕 (須恵器)	— 〈12.0〉 14.2	胴部下半	胴部内面一円形叩キ後，軽いナデ 胴部外面一平行叩キ 胴部下端一横ヘラ削り 端部内面一ナデ 底部外面一ヘラ削りか 底部内面一ナデ		中粒砂・雲母一少	灰色	良	
8	甕 (土師器)	(12.5) 〈7.2〉 胴最大径 15.0	口縁部⅙	口縁部内外一ヨコナデ 胴部内面一ナデ 胴部外面一横ヘラ削り		細粒砂一多	暗褐色	良	口縁部内面に炭化物付着
9	高台付甕 (土師器)	— 〈8.4〉 台端部径 9.2	½	胴内面一ナデ 胴外面一縦ヘラ削り 高台部内外一ヨコナデ		細粒砂一多	暗褐色	良	
10	甕 (須恵器)	— — —	体部上位の破片	胴部内面一ナデ 胴部外面一平行叩キ		細粒砂，長石，石英一少	暗灰色	堅緻	

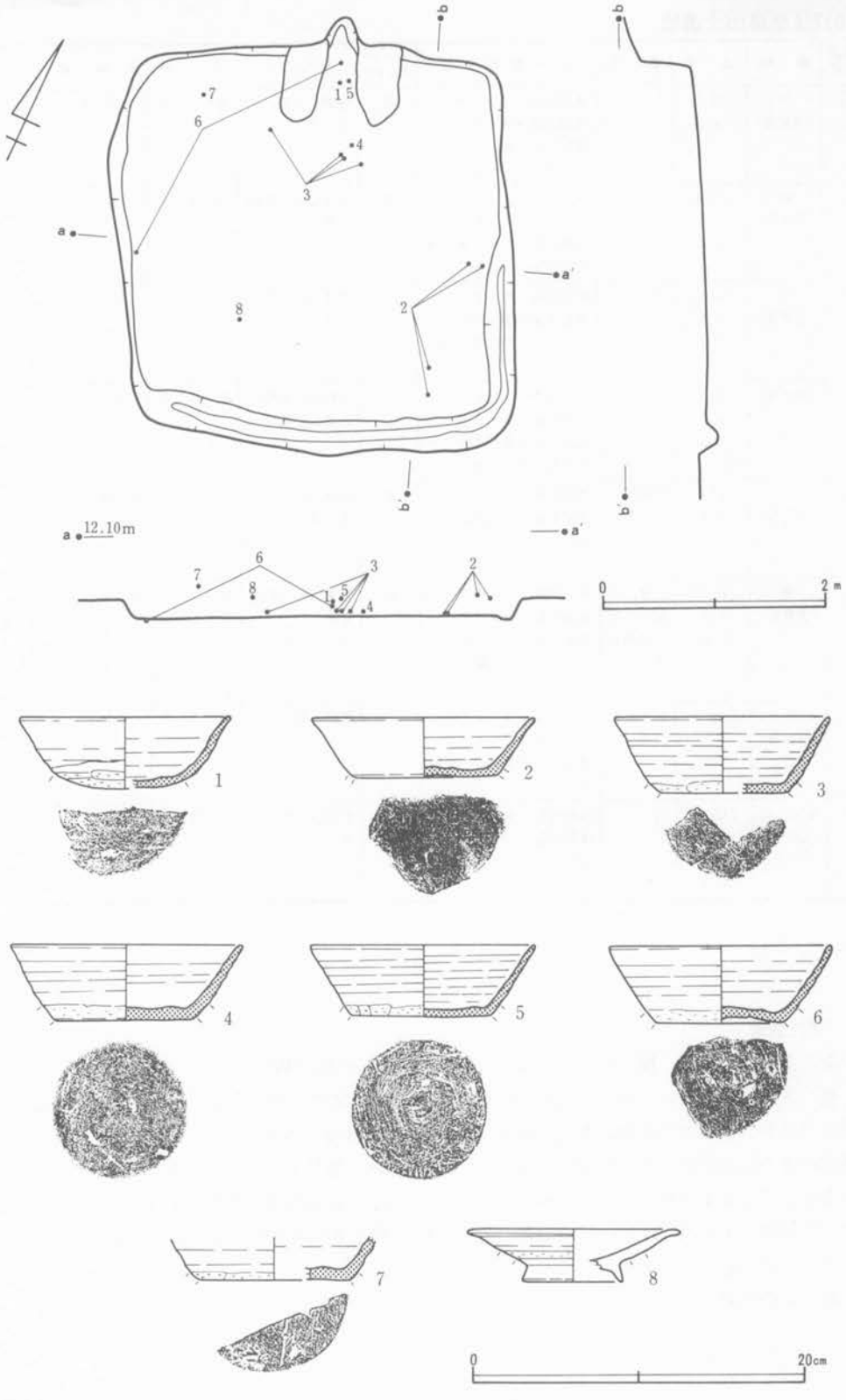
012住居跡

プラン 方形　**規模** 3.4×3.5m　**主軸方向** N—25°—W

所見 現存壁高は10～45cmを測る。周溝は南壁と，東壁の一部に幅20cm，深さ4～12cmで巡る。柱穴は検出されなかった。

出土遺物はあまり多くないが，そのなかで須恵器坏が比較的多い点が目につく。丸底気味の坏1，口径と底径の差が比較的小さい坏2，器高が4cmを越え，深い器形の坏の3種類がある。8の土師器皿は他の須恵器坏の一群と時期が異なるものである。

時期 花前II期



第27図　012住居跡及び出土遺物

012住居跡出土遺物

挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
1	坏 (須恵器)	12.5 4.3 —	⅓	体部内外—ヨコナデ 体部下端—手ヘラ削り 底部—切り離し不明，一定方向のヘラ削り	R	細礫，長石，石英—多	青灰色	良	
2	坏 (須恵器)	(13.4) 3.6 8.2	⅛	体部内外—ヨコナデ 体部下端—ヘラ削りか？ 底部—回ヘラ切り離し後不定方向のヘラ削り	R	中粒砂，雲母—多	灰褐色	甘	
3	坏 (須恵器)	(13.0) 4.6 (7.4)	⅓	体部内外—ヨコナデ 体部下端—手ヘラ削り 底部—一定方向のヘラ削り		中粒砂，雲母—多	黒灰色	甘	
4	(須恵器)	13.7 4.5 8.3	口縁部¼を欠く	体部内外—ヨコナデ 体部下端—手ヘラ削り 底部—切り離し不明，不定方向の手ヘラ削り		中粒砂，雲母，石英，長石—少	暗灰色	甘	
5	坏 (須恵器)	13.4 4.4 8.6	口縁部わずか欠く	体部内外—ヨコナデ 体部下端—手ヘラ削り 底部—回ヘラ切り後，不定方向のヘラ削り	R	細礫，長石，石英—多	灰色	堅緻	
6	坏 (須恵器)	(13.3) 4.6 (7.8)	口縁，体部の大半と底部わずかに欠く	体部内外—ヨコナデ 体部下端—手ヘラ削り 底部—回ヘラ切り離し後一定方向にごく軽いヘラ削り	R	中粒砂，雲母—多 長石，石英—少	灰色	やや甘	
7	坏 (須恵器)	— 〈2.5〉 9.0	底部⅓を欠く	体部内外—ヨコナデ 体部下端—手ヘラ削り 底部—一定方向のヘラ削り		雲母—多	灰色	やや甘	
8	高台付皿 (土師器)	(12.6) 3.2 高台径 (6.0)	⅓	体部内外—ヨコナデ 体部下端—回ヘラ削り 高台部—ヨコナデ		中粒砂—多 密	乳橙色	良	

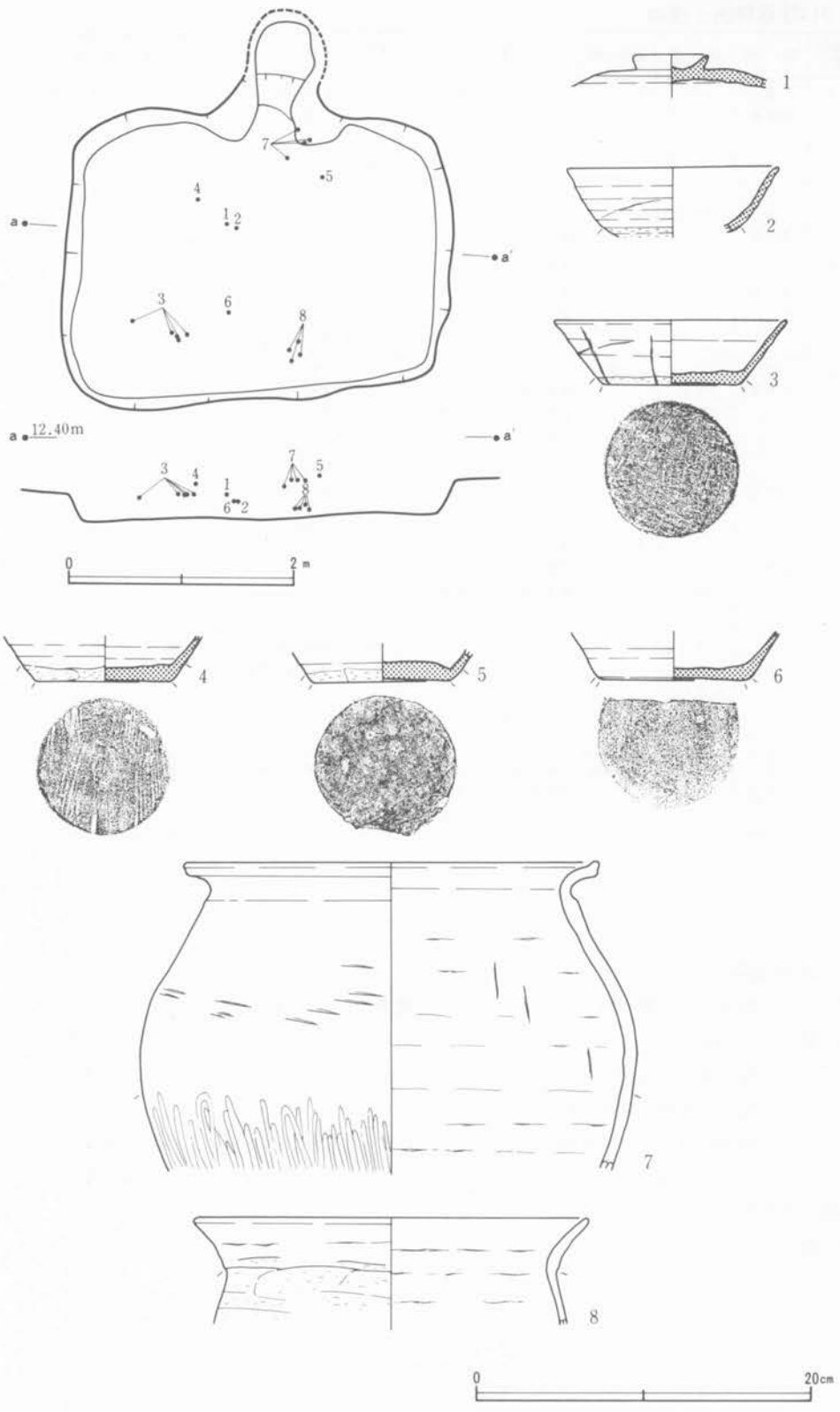
014住居跡

プラン 長方形　**規模** 2.4×3.5m　**主軸方向** N—25°—W

所見 東西方向に長い小型の住居跡である。カマド堀方は北壁の外へ大きくとび出す感があるが図上破線部分は別の土坑の可能性がある。柱穴，周溝ともに検出されなかった。

遺物の多くは床面から浮いた状態で出土した。須恵器坏で器形全体を知り得るものは少ないが，底部のみ遺存している4～6の坏は底径8cmを越えるもので，比較的底径の大きな部類に入る。7の土師器甕の口唇部のつまみ出しは弱いが，口縁の屈曲は強く，胴下半部は小さな底部に向って急激にすぼまるタイプのものと思われる。

時期 花前II期



第28図　014住居跡及び出土遺物

014住居跡出土遺物

挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
1	蓋（須恵器）	— つまみ径 4.4 つまみ高 0.9	1/8	天井部一回ヘラ削リ後，その周囲をヨコナデ 内外一ヨコナデ	L	中粒砂，雲母一多	淡褐色	良	酸化焰焼成
2	坏（須恵器）	(12.5) 〈4.1〉	1/6	体部内外一ヨコナデ 体部下端一回ヘラ削リ		中粒砂一多	灰色	良	
3	坏（須恵器）	13.8 3.8 7.9	2/3	体部内外一ヨコナデ 体部下端一手ヘラ削リ 底部一切り離し不明，不定方向のヘラ削リ	R	中粒砂一多 長石，石英，雲母一少 密	灰色	堅緻	火襷痕
4	坏（須恵器）	— 〈2.6〉 8.0	底部破片	体部内外一ヨコナデ 体部下端一手ヘラ削リ 底部一回ヘラ切り離し後一定方向のヘラ削リ	R	中粒砂一少 雲母一多 密	灰色	良	内面に「井」形の火襷痕
5	坏（須恵器）	— 〈1.8〉 8.2	底部破片	体部内外一ヨコナデ 底部一切り離し不明，一定方向の手ヘラ削リ	R	細粒砂一少 密	青灰色	堅緻	底部の焼きひずみが著しい
6	坏（須恵器）	— 〈2.8〉 8.3	体部下端～底部2/3	体部内外一ヨコナデ 体部下端一回ヘラ削リ 底部一回ヘラ切り離し後一定方向の手ヘラ削リ	R	雲母，長石一多	灰白色	良	
7	甕（土師器）	24.5 〈18.3〉 胴最大径 29.5 —	1/2	口縁内外一ヨコナデ 胴部内面一ヘラナデ 胴部外面一上半ナデ 胴下半一縦位のヘラ磨キ	R	細礫，長石，石英，雲母一多	暗褐色	良	
8	甕（土師器）	(23.5) 〈6.3〉 —	口縁部破片	口縁内外一ヨコナデ 胴部内面一ヘラナデ 胴部外面一横ヘラ削リ		中粒砂一多	橙褐色	良	

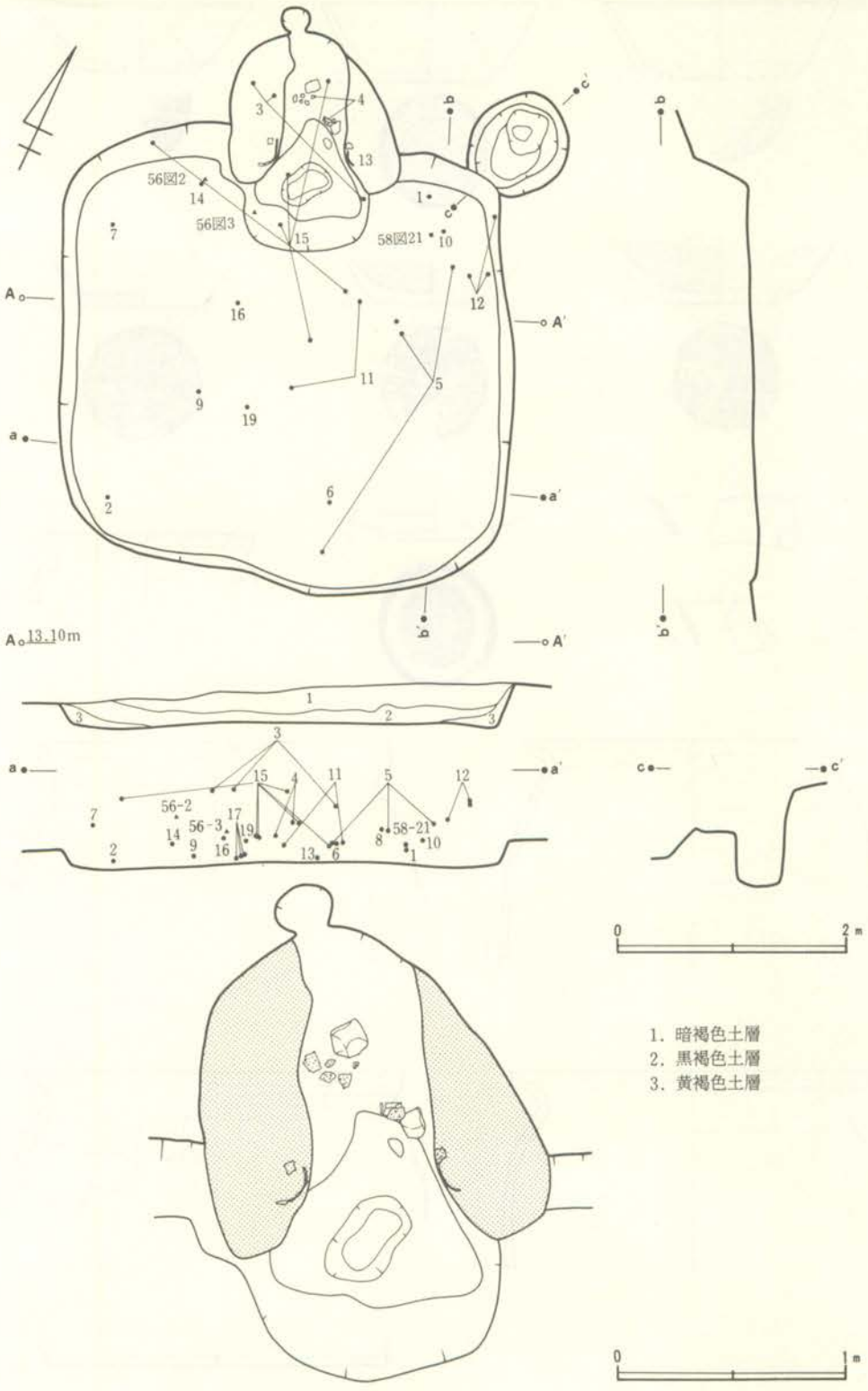
015住居跡

プラン 不整方形　**規模** 3.8×4.0m　**主軸方向** N—24°—W

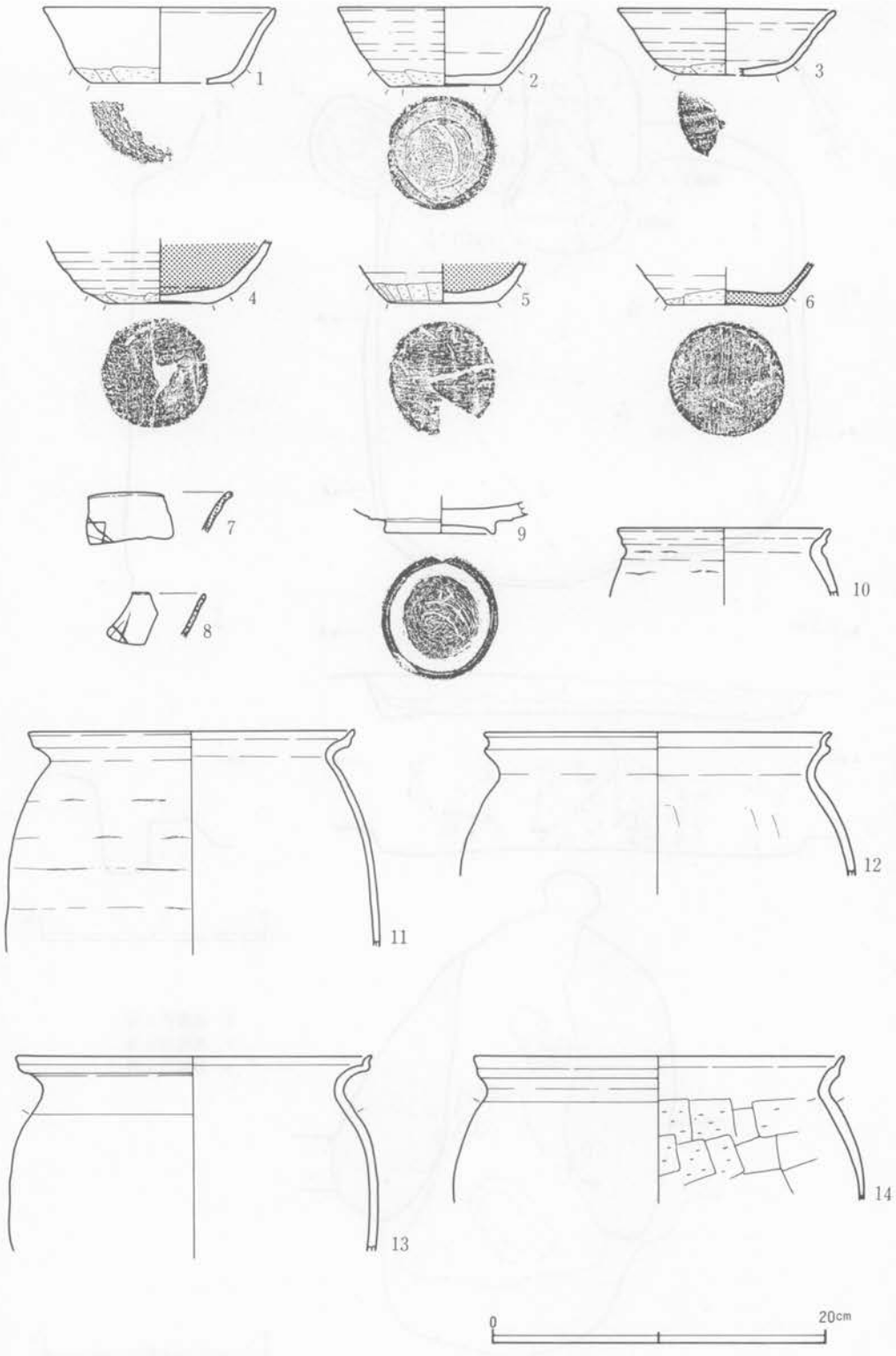
所見 カマドは北壁外方へ大きく張り出した住居である。カマド内には一辺15cm程の礫と鉄滓が出土している。また袖部には構築材として土師器の甕12・13が使用されていた。柱穴，周溝ともに検出されなかった。住居跡中央部床面は極めて固くしまっていた。

出土した遺物量は多く，また種類も豊富である。7・8の須恵器坏の体部外面に焼成後の「☆」の線刻が施されている。18の須恵器瓶は突出した円盤状の底部となり，回転糸切り後無調整である。19は猿投産の灰釉陶器で，黒笹90号窯式のものである。

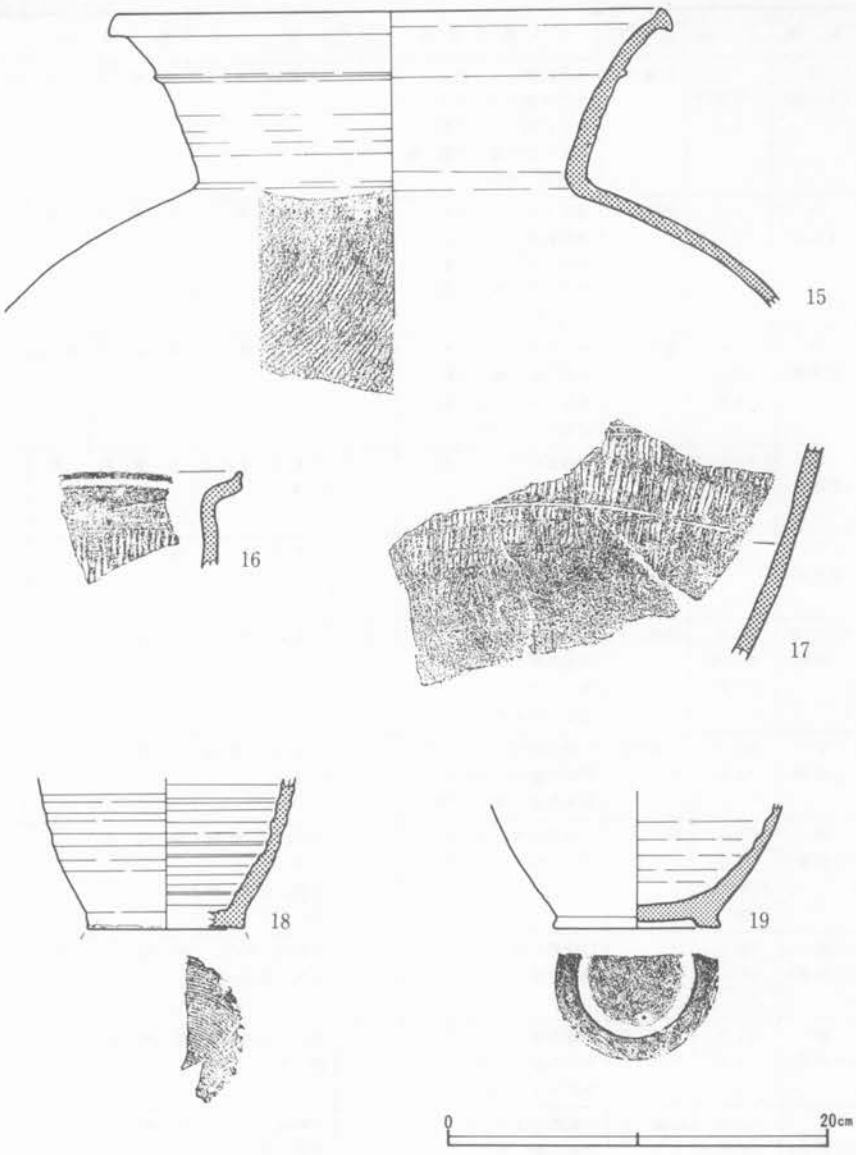
時期 花前VII期



第29図　015住居跡



第30図　015住居跡出土遺物



第31図　015住居跡出土遺物

015住居跡出土遺物

挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
1	坏 (土師器)	(13.5) 〈4.5〉 (8.5)	¼	体部内外—ヨコナデ 体部下端—手ヘラ削り 底部—周縁回ヘラ削り		中粒砂—多 酸化鉄粒—少	橙褐色	良	口縁内外に油煙
2	坏 (土師器)	(12.5) 〈4.7〉 6.6	¼	体部内外—ヨコナデ 体部下端—回ヘラ削り 底部—回糸切り、周縁ヘラ削り		中粒砂—多	淡褐色	良	
3	坏 (土師器)	(13.0) 3.9 (6.0)	¼	体部内外—ヨコナデ 体部下端—手ヘラ削り 底部—切り離し不明，一定方向のヘラ削り		中粒砂，酸化鉄粒—多	乳橙色	良	

挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
4	坏 (土師器)	— 〈3.9〉 6.2	口縁欠く	体部内面—ヘラ磨キ 体部外面—ヨコナデ 体部下端—手ヘラ削リ 底部—切り離し不明，数方向のヘラ削リ		中粒砂—多	明橙色	良	内黒
5	坏 (土師器)	— 〈2.5〉 6.3	底部¾	体部内面—ヘラ磨キ 体部外面—ヨコナデ 体部下端—手ヘラ削リ 底部—切り離し不明，一定方向のヘラ削リ		中粒砂—多	乳橙色	良	内黒 体部下端に粘土紐の巻き上げ痕残す
6	坏 (須恵器)	— 〈2.5〉 6.6	底部のみ	体部内外—ヨコナデ 体部下端—横ヘラ削リ 底部—回ヘラ切り後，一定方向のヘラ削リ		中粒砂—多	暗灰色	堅緻	
7	坏 (須恵器)	— — —	口縁部破片	口縁部内外—ヨコナデ		中粒砂，金雲母—多	暗褐色	良	体部内外面に焼成後の「☆」か
8	坏 (須恵器)	— — —	口縁部破片	口縁内外—ヨコナデ		中粒砂—少	黒褐色	良	体部外面に焼成後の線刻「☆」か
9	高台付皿 (土師器)	〈1.9〉 高台径 6.5	底部のみ	体部内面—ヘラ磨キ 体部外面—ヨコナデ 高台—ヨコナデ 底部—回糸切リ	R	中粒砂—多	黄褐色	良	
10	甕 (土師器)	(12.5) 〈4.0〉 —	口縁部破片	口縁部内外—ヨコナデ 胴部内面—ヘラナデ 胴部外面—横位ヘラ削り		中粒砂，雲母—多	暗褐色	良	
11	甕 (土師器)	(19.5) 〈12.9〉 胴最大径 22.0	½	口縁部内外—ヨコナデ 胴部内外—ヘラナデ		中粒砂，雲母—多 細礫，石英，長石—少	暗褐色	良	
12	甕 (土師器)	(20.5) 〈8.4〉 —	⅛	口縁部—ヨコナデ 胴部内外—ヘラナデ		中粒砂，長石，石英，雲母—多	明褐色	良	外面に山砂付着
13	甕 (土師器)	21.0 〈11.4〉 —	口縁～胴上半⅛	口縁内外—ヨコナデ 胴部内面—ヘラナデ 胴部外面—ナデ		長石，石英，雲母—多	暗褐色	良	
14	甕 (土師器)	22.0 〈8.5〉	口縁～胴上半⅛	口縁部—ヨコナデ 胴部内面—横方向のヘラナデ 胴部外面—ナデ		中粒砂，長石，雲母—多	暗褐色	良	
15	甕 (須恵器)	(28.5) 〈15.8〉	口縁～胴上位	口縁部—ヨコナデ 胴部内面—叩キ後，ナデを施す 胴部外面—平行叩キ		中粒砂—多 密	灰白色	堅緻	口縁部内面から胴部外面に釉が付着
16	甕 (須恵器)	— — —	口縁部破片	口縁部内外—ヨコナデ 胴部内面—鈍い円形の叩キ後，横ナデ 胴部外面—平行叩キ，部分的に横ナデ		中粒砂—多 細礫—少	暗褐色	良	酸化焔焼成
17	甕 (須恵器)	— — —	胴部破片	内面—鈍い円形の叩キ後ヨコナデ 外面—平行叩キ，部分的にヨコナデ 下端部—ヘラ削リ		中粒砂—多 細礫—少	暗褐色	良	酸化焔焼成

挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
18	長頸瓶（須恵器）	— 〈7.9〉 (8.2)	胴下半⅓	胴部外面—ヨコナデ 胴部内面—工具使用によるヨコナデ 底部—回糸切り	R	細粒砂—少 密	灰色	堅緻	底部は平高台となる。東海以西からの搬入品
19	長頸瓶（灰釉陶器）	— 〈6.4〉 高台径 8.7	底部½	内面—ヨコナデ 外面—回ヘラ削り 高台—ヨコナデ 底部—回糸切り後，ヨコナデ	R	中粒砂—多 密	灰色	堅緻	外面に淡緑色の釉が付着 黒笹90号窯式

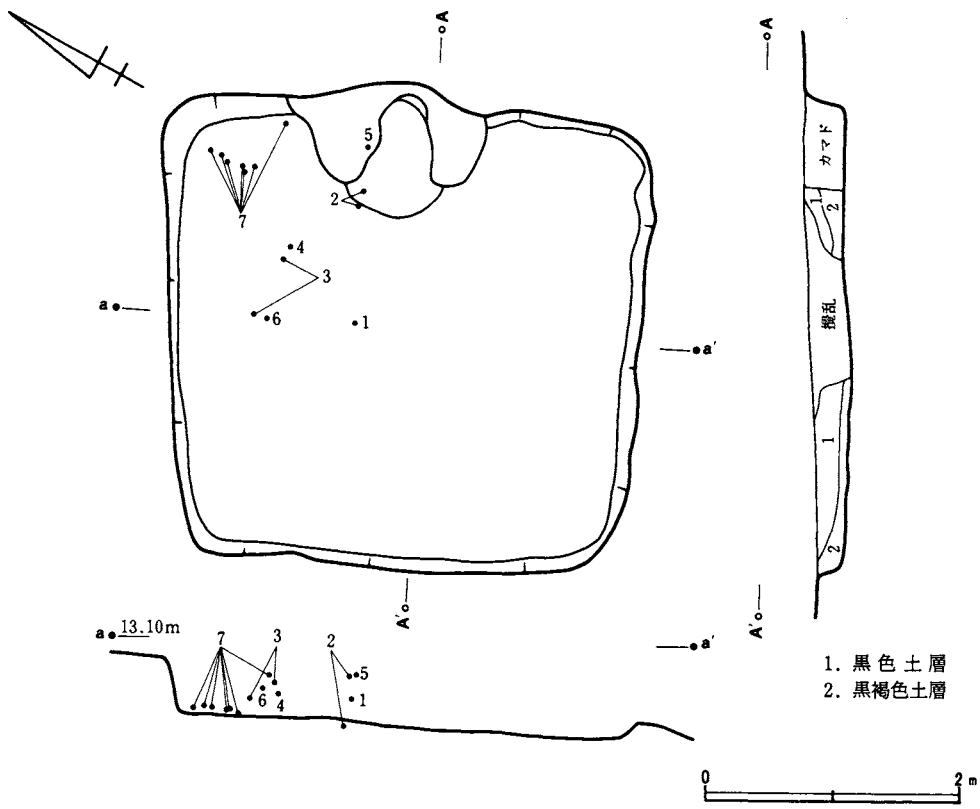
016住居跡

プラン 方形　**規模** 3.5×3.7m　**主軸方向** N—64°—E

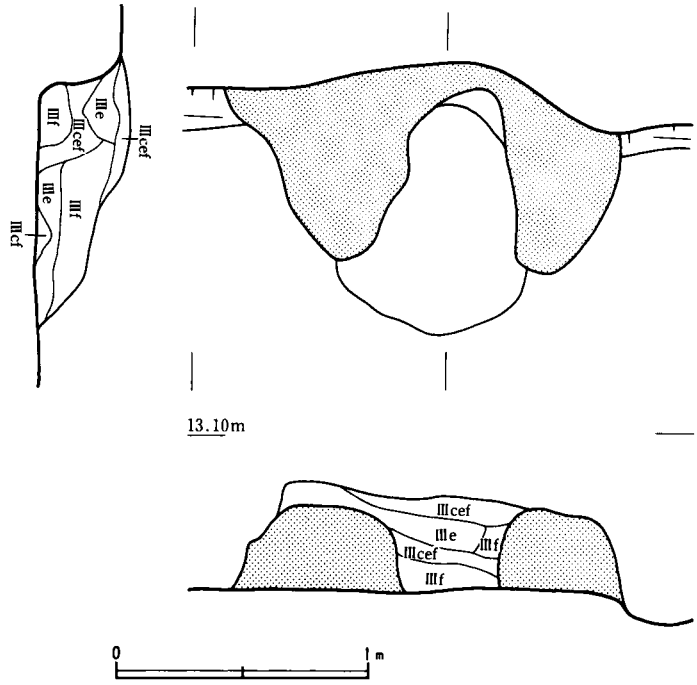
所見 主軸方向が東西に振れる住居跡である。柱穴，周溝ともに検出されなかった。

1の土師器坏は体部外面に手持ヘラ削りを施し，口縁部はヨコナデ調整を行なう。2～5の須恵器坏は口径が底径の2倍以上になるものである。この中で4は胎土に白色針状物を含み，焼成も堅緻なるもので南比企の製品と考えられる。この他に台付甕6と，下野型の甕7が出土している。

時期 花前VI期



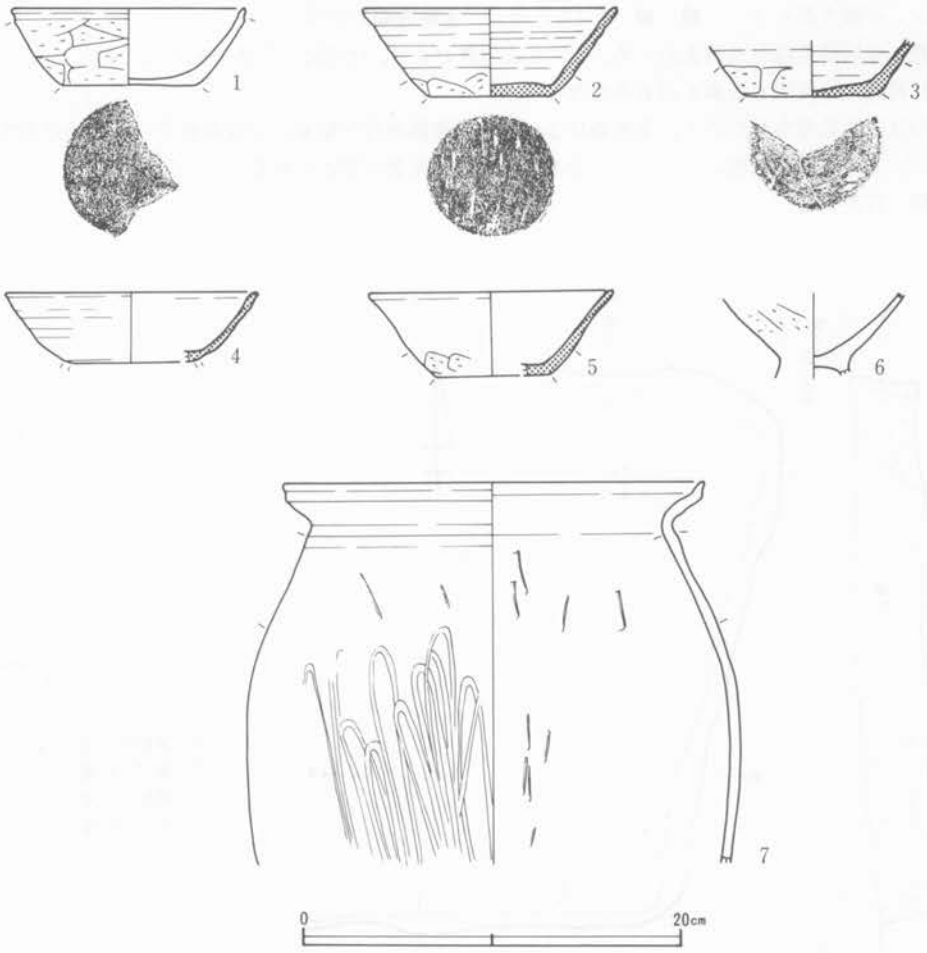
第32図　016住居跡



第33図　016住居跡カマド

016住居跡出土遺物

挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
1	坏 (土師器)	12.0 4.2 6.9	1/3	口縁部—ヨコナデ 体部内面—横ナデ後，ヘラ磨キ 体部外面—手ヘラ削リ 底部—手ヘラ削リ		中粒砂—多 密	橙褐色	良	
2	坏 (須恵器)	13.2 4.7 6.5	2/3	体部内外—ヨコナデ 体部下端—手ヘラ削リ 底部——定方向の手ヘラ削リ	L	細礫，長石，石英，雲母—多	灰色	良	図版16—4
3	坏 (須恵器)	— 〈3.0〉 6.2	1/3	体部内外—ヨコナデ 体部下端—手ヘラ削リ 底部—切り離し不明，手ヘラ削リ		細礫，長石，石英—多	灰色	良	
4	坏 (須恵器)	(13.0) 3.6 (6.2)	1/6	体部内外—ヨコナデ 体部下端—回ヘラ削リ 底部周縁—回ヘラ削リ		細粒砂，白色針状物—少 密	灰色	良 堅緻	南比企製品
5	坏 (須恵器)	(12.8) 4.5 (6.0)	口縁部～底部1/5	体部内外—ヨコナデ 体部下端—手ヘラ削リ 底部—手ヘラ削リ		細粒砂，雲母—多	灰色	良	
6	台付甕 (土師器)	— 〈4.4〉	底部付近砂片	胴部内面—ヘラナデ 胴部外面—ヘラ削リ		中粒砂—多 雲母—少	暗褐色	良	
7	甕 (土師器)	21.8 〈19.7〉 胴最大径 26.0 —	口縁部～胴上半3/4	口縁部内外—ヨコナデ 胴部内面—横方向のヘラナデ 胴部外面上位—横方向のヘラナデ 胴部下半—ヘラ磨キ		中粒砂，雲母—多 長石，石英，酸化鉄粒—少	暗褐色	良	



第34図　016住居跡出土遺物

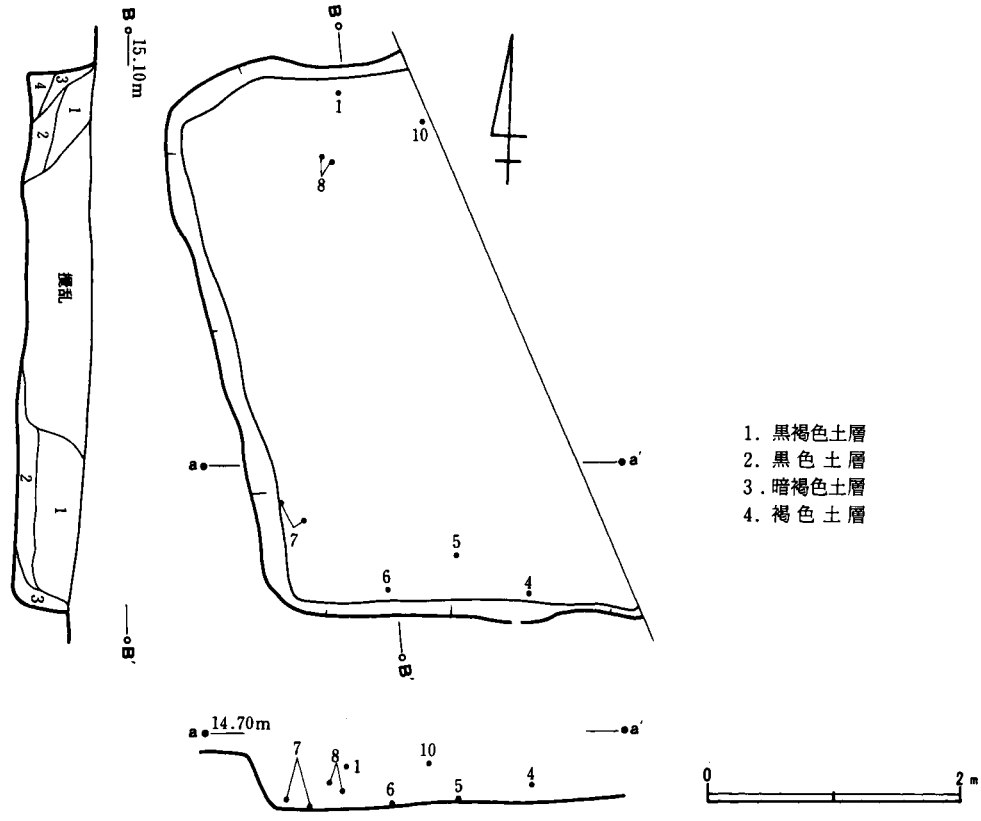
017住居跡

プラン　不整方形か？　　**規　模**　4.4×？m　　**主軸方向**　不明

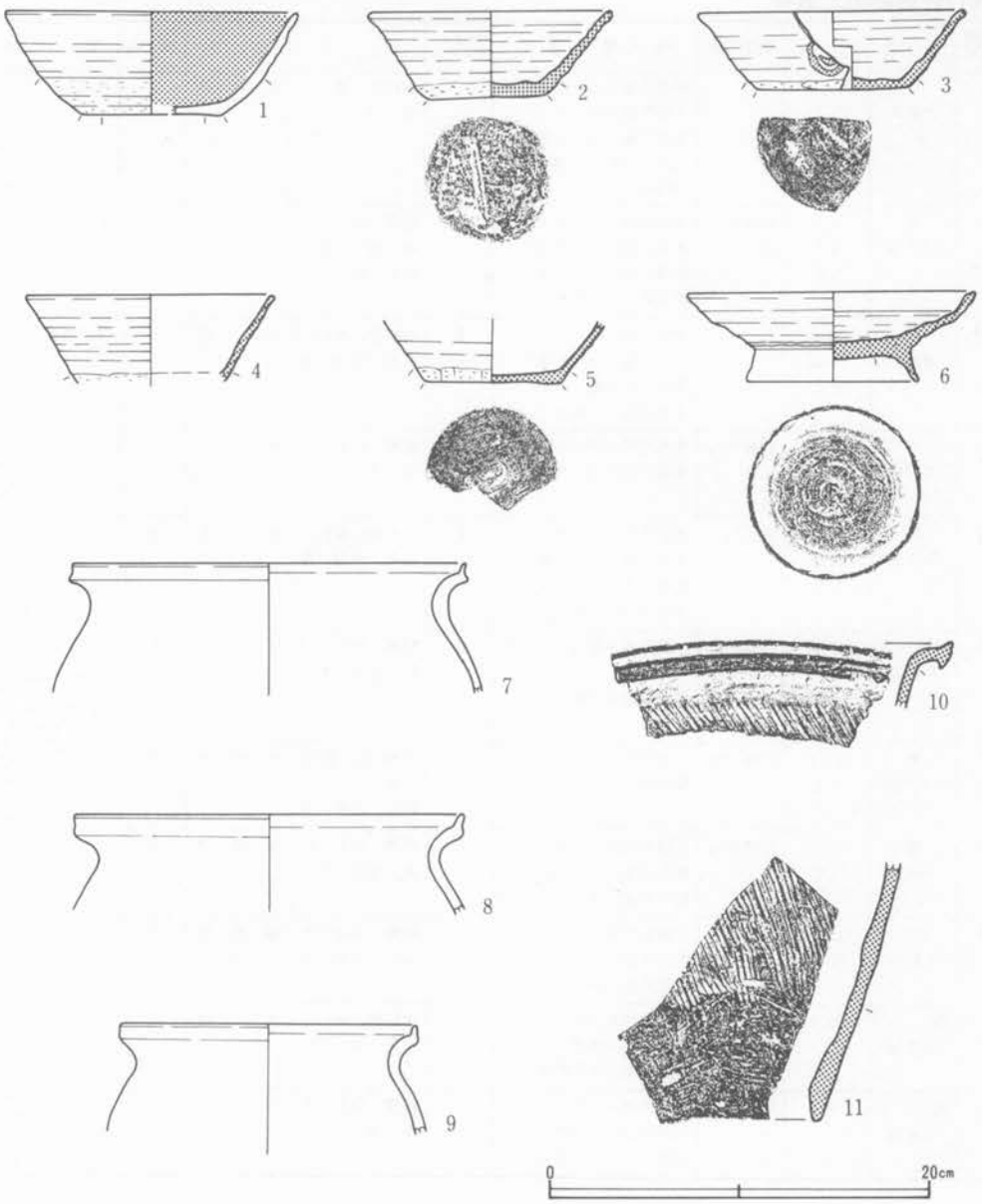
所　見　住居跡東側が未調査のため，カマドの位置および，住居跡の全体を知ることができない。検出された範囲では柱穴も周溝も認められない。

遺物は内黒処理された坏１，須恵器坏２～５，須恵器高台付盤６，土師器甕７～９，須恵器甑10･11である。３の坏体部外面には「◎」になると思われる朱書が認められる。

時　期　花前VI期



第35図　017住居跡



第36図　017住居跡出土遺物

017住居跡出土遺物

挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
1	坏（土師器）	(15.5) 5.5 (7.4)	1/6	体部内面一ヘラ磨キ 体部外面一ヨコナデ 体部下端一回ヘラ削り 底部一回糸切り周縁回ヘラ削り		細粒砂一多 密	乳橙色	良	内黒
2	坏（須恵器）	12.9 4.5 6.5	口縁部1/2欠く	体部内外一ヨコナデ 体部下端一回ヘラ削り 底部一回ヘラ切り後，一定方向のヘラ削り	R	細礫，長石，石英，雲母一多 極めて粗	灰色	良	図版16--5
3	坏（須恵器）	(14.0) (4.0) (8.0)	1/4	体部内外一ヨコナデ 体部下端一回ヘラ削り 底部一切り離し不明，一定方向のヘラ削り	R	中粒砂，長石，石英，雲母一多	灰色	良	体部外面に朱書
4	坏（須恵器）	(13.0) 〈4.5〉 —	口縁部1/4	体部内外一ヨコナデ 体部下端一手ヘラ削り		細礫，長石，石英一多	青灰色	良	
5	坏（須恵器）	— 3.0 7.3	底部3/8	体部内外一ヨコナデ 体部下端一回ヘラ削り 底部一回ヘラ切り後，一定方向のヘラ削り	L	中粒砂，長石，石英，雲母--多	灰色	やや甘	
6	高台付盤（須恵器）	(13.0) 4.6 高台径 9.1	口縁部の大半欠く	体部内外～高台一ヨコナデ 底部一回ヘラ削り	R	細礫，長石，石英，雲母一多	灰色	甘	図版16--6
7	甕（土師器）	(21.5) 〈6.7〉 —	口縁部1/8	口縁部内外一ヨコナデ 胴部内外一ヘラナデ		中粒砂，雲母一多 長石，石英一少	乳橙色	良	
8	甕（土師器）	(21.0) 〈4.9〉 —	口縁部1/4	口縁部内外一ヨコナデ 胴部内面一ヘラナデ 胴部外面一ナデ		細礫，長石，石英，雲母一多	暗褐色	良	
9	甕（土師器）	(15.5) 〈5.8〉 —	口縁部1/8	口縁部内外一ヨコナデ 胴部内面一ヘラナデ 胴部外面一ナデ		細礫，雲母一多 長石，石英一少	橙褐色	良	
10	甑？（須恵器）	(29.0) -- —	口縁破片	口縁部一ヨコナデ 胴部内面一ナデ 胴部外面一平行叩キ		中粒砂，長石 石英一多	灰色	良	
11	甑？（須恵器）	— — —	胴部破片	胴部内面一ナデ 胴部外面一平行叩キ 胴部下端一ヘラ削り		細礫，長石，石英一多	灰色	良	

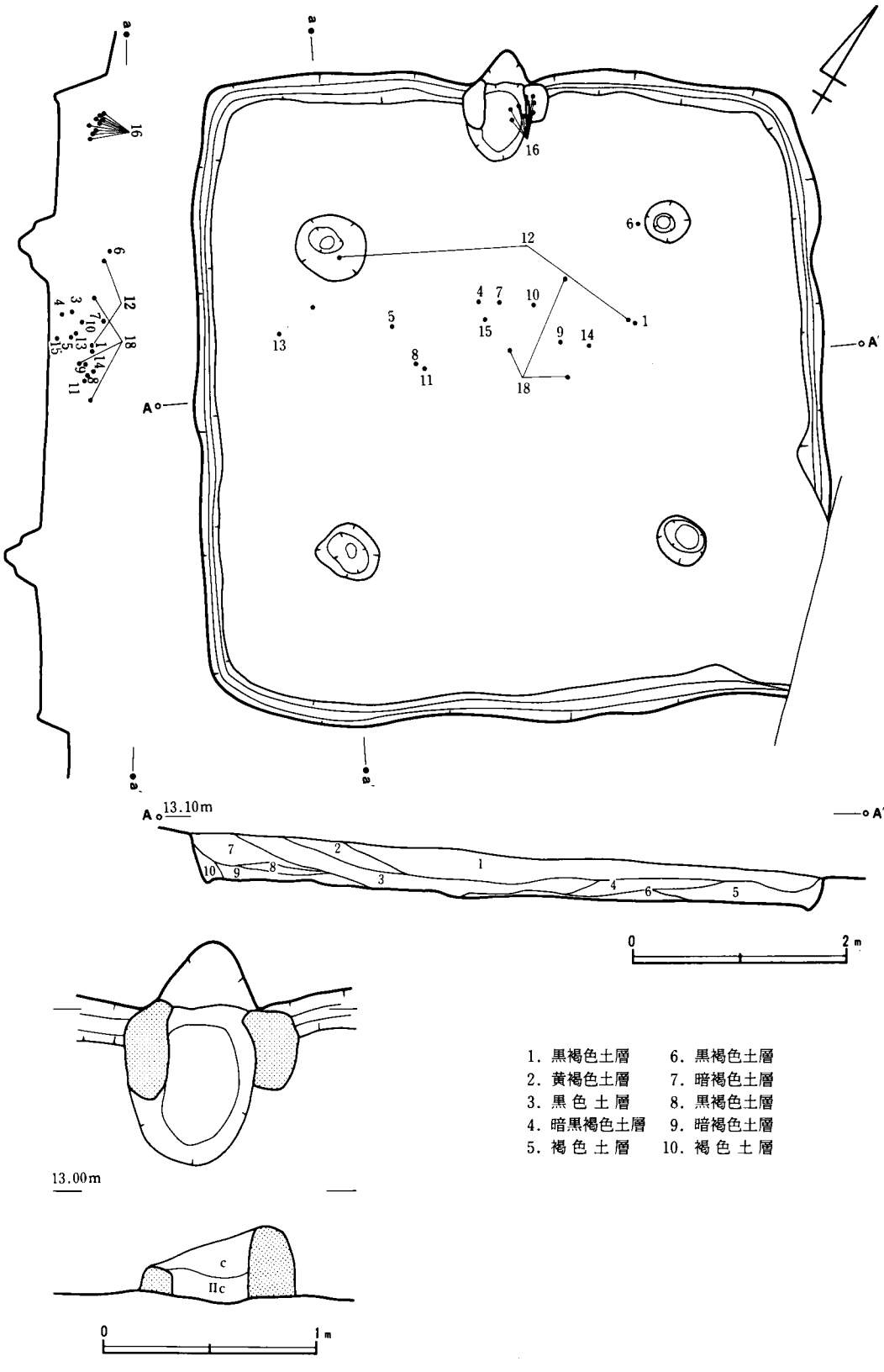
019住居跡

プラン 方形　**規模** 5.8×6.0m　**主軸方向** N－35°－W

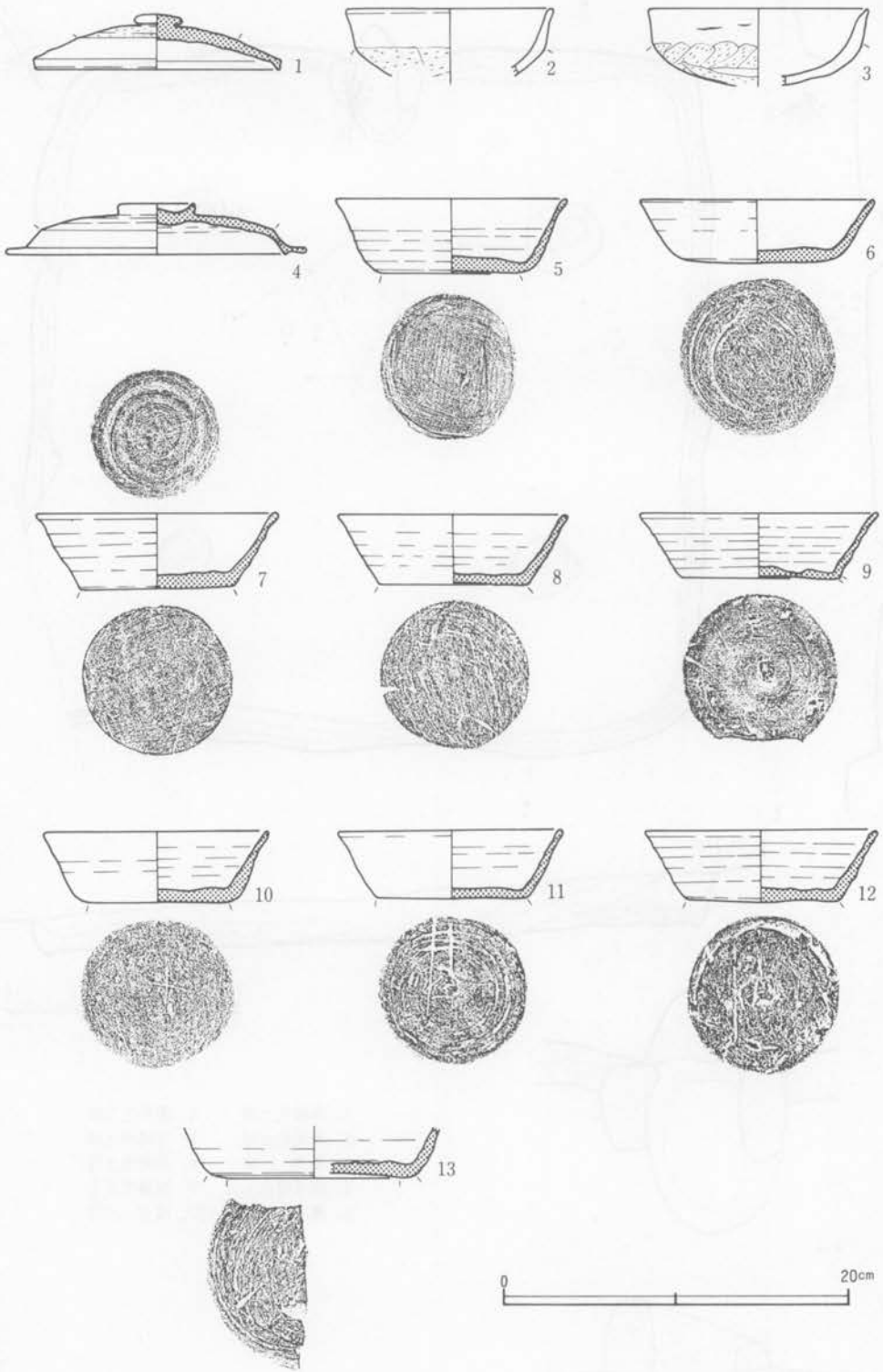
所見 大形で，四本柱の形態をとる住居跡である。柱穴は径40～70cm，深さ35cmを測る。南東隅は削平を受けるため不明だが，周溝は幅10～20cm，深さ5cmで全周する。

遺物はカマド内から出土した甕の底部16を除いて，覆土中から出土している。土師器坏は体部にわずかに稜を残すものである。須恵器蓋にはカエリを有したもの4と，端部を折り返したもの1がある。須恵器坏5～12の口径は底径の1.5～1.6倍となり，比較的底径が大きい一群である。この他に長頸瓶18・19，甕20，大形の鉢22は東海地方の製品と考えられるものである。覆土中からの出土であるため，検討の余地はあるが，一括遺物として考えたい。

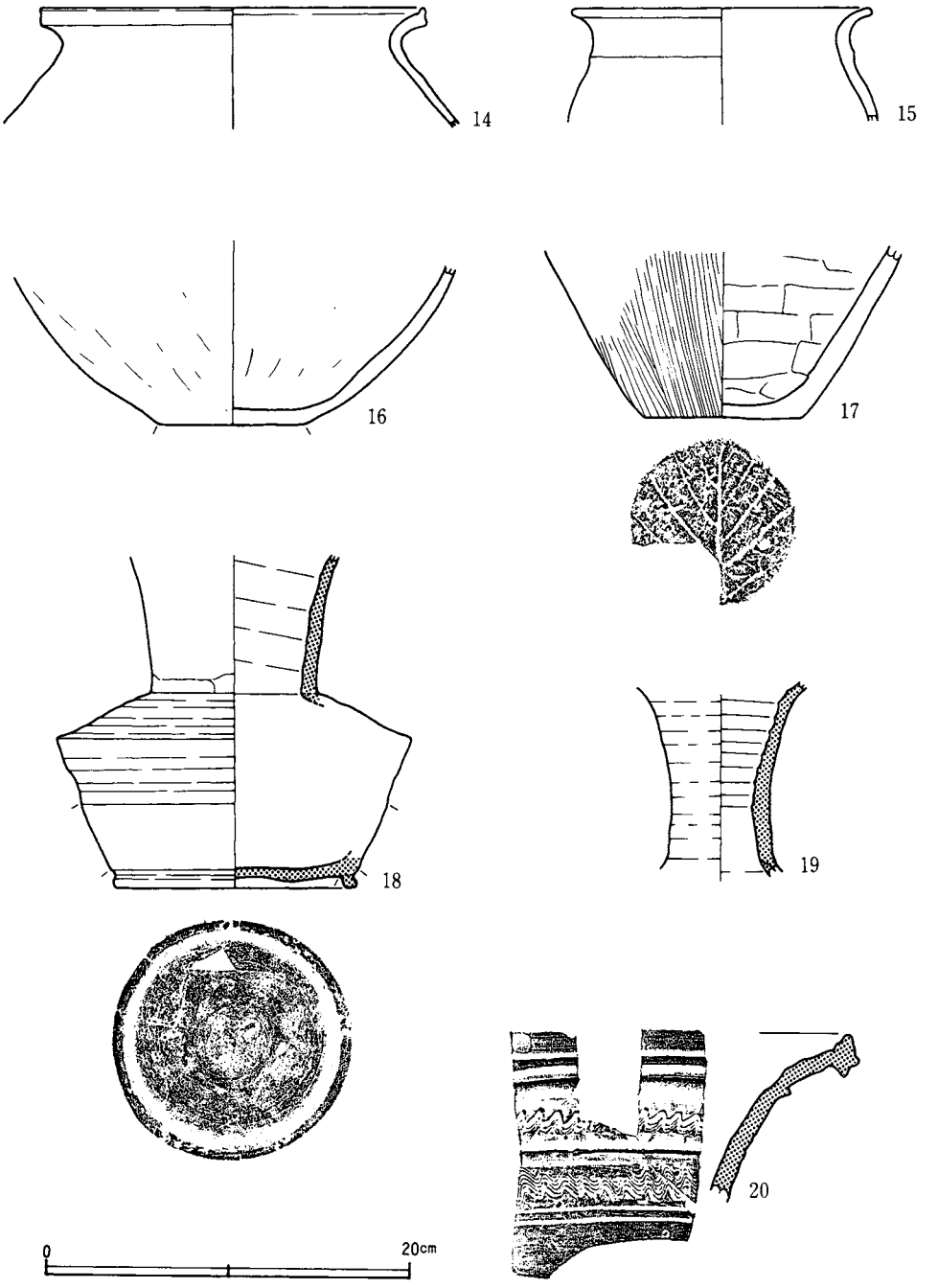
時期 花前Ⅰ期


a
A
A'
13.10m
13.00m
c
IIc
0
2m
1m
1. 黒褐色土層
2. 黄褐色土層
3. 黒 色 土 層
4. 暗黒褐色土層
5. 褐 色 土 層
6. 黒褐色土層
7. 暗褐色土層
8. 黒褐色土層
9. 暗褐色土層
10. 褐 色 土 層

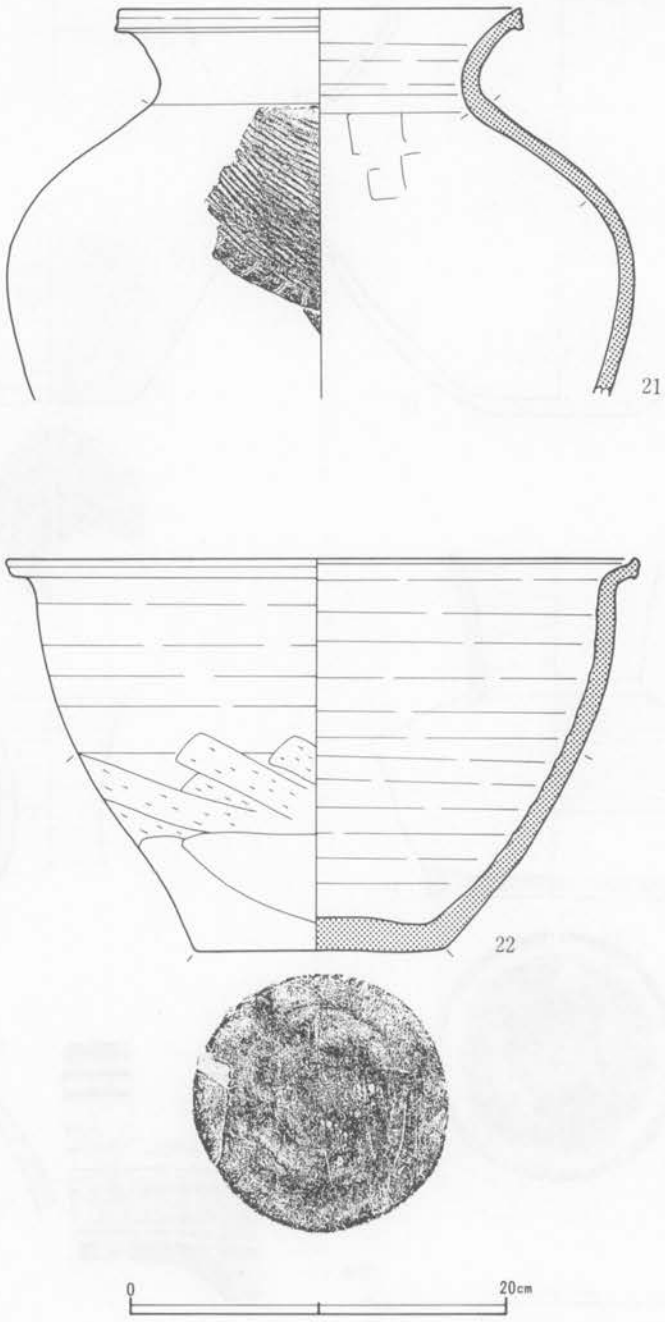
第37図　019住居跡



第38図　019住居跡出土遺物



第39図　019住居跡出土遺物



第40図　019住居跡出土遺物

019住居跡出土遺物

挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
1	蓋（須恵器）	14.0 3.2 つまみ高 0.6 つまみ径 2.8	3/3	天井部一回ヘラ削り 内外一ヨコナデ つまみ部一ヨコナデ	L	中粒砂一多	灰白色	やや甘	東海地方の製品
2	坏（土師器）	(12.0) 〈3.8〉 —	口縁部1/4	口縁部～体部内面一ヨコナデ 体部外面一ヘラ削り		中粒砂一多 密	乳橙色	良	
3	坏（土師器）	(12.5) (5.5) —	口縁部1/4	口縁部～体部内面一ヨコナデ 体部内外一ヘラ削り		中粒砂一多 密	乳橙色	良	
4	蓋（須恵器）	(16.5) 3.1 つまみ高 0.7 つまみ径 4.4	1/4	天井部一回ヘラ削り 内外一ヨコナデ つまみ部一ヨコナデ	L	中粒砂，雲母一多	暗褐色	やや甘	
5	坏（須恵器）	(13.4) 4.4 8.0	口縁～体部2/3	体部内外一ヨコナデ 体部下端一回ヘラ削り 底部一数方向の手ヘラ削り	R	細粒砂，雲母一多 密	青灰色	堅緻	
6	坏（須恵器）	13.6 3.8 9.0	口縁部1/2を欠く	体部内外--ヨコナデ 底部一回ヘラ削り	R	中粒砂，長石，石英一多 雲母一少	灰色	良	図版16—7
7	坏（須恵器）	14.0 4.2 8.6	口縁1/4を欠く	体部内外一ヨコナデ 体部下端一回ヘラ削り 底部一手ヘラ削り	R	中粒砂，雲母一少 密	灰色	良	底部内面に焼成後「米」の線刻 図版17—3
8	坏（須恵器）	13.4 4.0 8.7	1/4欠く	体部内外一ヨコナデ 底部一切り離し不明，数方向の手ヘラ削り	L	中粒砂一多 長石，石英，雲母一少	青白色	良	図版16—8
9	坏（須恵器）	13.8 3.7 9.0	1/6欠く	体部内外一ヨコナデ 体部下端一回ヘラ削り 底部一回ヘラ切り離し	R	中粒砂，雲母一多 密	灰褐色	良	図版17—1
10	坏（須恵器）	(13.0) 4.0 8.0	口縁部1/4欠く	体部内外一ヨコナデ 底部一一定方向のヘラ削り	L	中粒砂，雲母一多	灰白色	やや甘	底部に焼成後「＋」の線刻 図版17—4
11	坏（須恵器）	13.1 3.8 8.7	体部～口縁部1/4欠く	体部内外一ヨコナデ 底部一回ヘラ切り離し後回ヘラ削り	R	細礫，長石，石英一多 雲母一少 粗	灰色	良	底部に焼成後「丰」の線刻 図版17--5
12	坏（須恵器）	13.4 4.0 8.8	体部一口縁1/4を欠く	体部内外一ヨコナデ 底部一回ヘラ削り	R	細粒砂，雲母一多 密	灰色	堅緻	図版17—2
13	坏（須恵器）	— 〈2.8〉 (10.0)	底部1/2	体部内外一ヨコナデ 底部一回ヘラ削り	R	中粒砂，雲母一多	黒灰色	良	
14	甕（土師器）	(20.9) 〈6.4〉 —	口縁部1/6	口縁部内外一ヨコナデ 胴部内面一ヘラナデ 胴部外面一ナデ		中粒砂，雲母一多 長石，石英一少	暗褐色	良	
15	甕（土師器）	(16.5) 〈5.3〉 —	口縁部1/4	口縁部内外一ヨコナデ 胴部内面一ヘラナデ 胴部外面一斜位のヘラ削り		中粒砂一多	暗褐色	良	

挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
16	甕 (土師器)	— — 7.9	胴部下半 破片	胴部内面—ヘラナデ 胴部外面—ヘラ磨キ 底部—調整不明		中粒砂，長石， 石英，雲母—多	暗褐色	良	
17	甕 (土師器)	— 〈9.0〉 8.6	底部¼ 胴部下半 ½	胴部内面—ヘラナデ 胴部外面—ヘラ磨キ 底部—木葉痕		中粒砂，長石 石英—多 雲母—少	乳橙色	良	
18	長頸瓶 (須恵器)	— 17.5 胴最大径 19.5 13.0	頸上半を 欠く	胴部内外—ヨコナデ 胴部下半—回ヘラ削り 高台部—ヨコナデ 底部—回ヘラ削り		中粒砂—多	灰色	良	東海地方の製品 図版18—1
19	長頸瓶 (須恵器)	— 〈9.8〉 —	頸部のみ	頸部内外—ヨコナデ	R	中粒砂—多	灰白色	良	東海地方の製品
20	甕 (須恵器)		口縁破片	口縁部内外—ヨコナデ		細粒砂—多 密	灰色	堅緻	内外面に釉付着 東海地方の製品
21	甕 (須恵器)	21.0 〈20.5〉 胴最大径 33.0	胴上半⅛	口縁部内外—ヨコナデ 胴内面上位—ヘラナデ 胴外面—平行叩キ		中粒砂—多	灰白色	やや甘	図版18—2
22	鉢 (須恵器)	33.6 20.3 13.0	完形	胴部内面～外上半—ヨコナデ 胴部下半—ヘラ削り 底部—数方向のヘラ削り		中粒砂—多	灰色	良	東海地方の製品か 図版18—3

020住居跡

プラン　方形　　**規　模**　3.1×？m　　**主軸方向**　N－37°－W

所　見　021住居跡を切って構築されている。東側は削平され，カマドも上半部は遺存していない。周溝は北壁と西壁に認められる。幅20～25cm，深さ5cmを測る。

遺物は土師器坏，甕，須恵器蓋，坏がある。3～5の坏は体部が直線的に立ち上がり箱型を呈する。2の蓋の天井部には回転糸切り痕が明瞭に残る。6・7の坏は器高が高いタイプである。

時　期　花前Ⅴ期

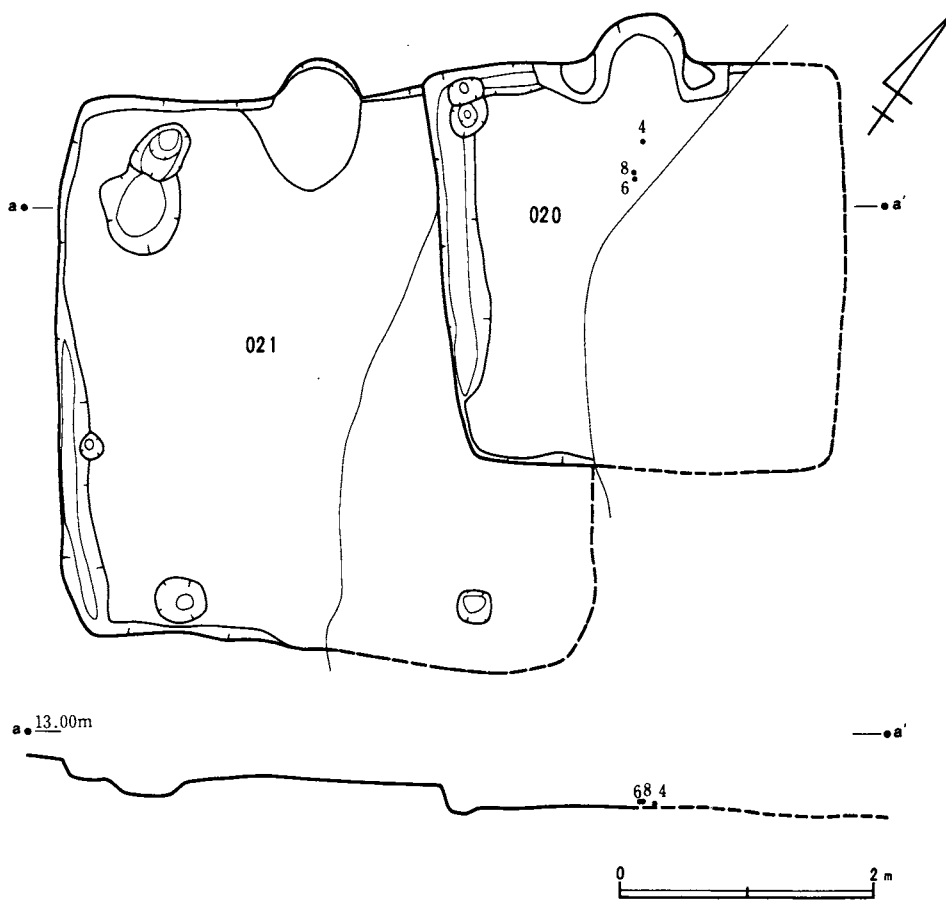
021住居跡

プラン　方形　　**規　模**　4.1×？m　　**主軸方向**　N－34°－W

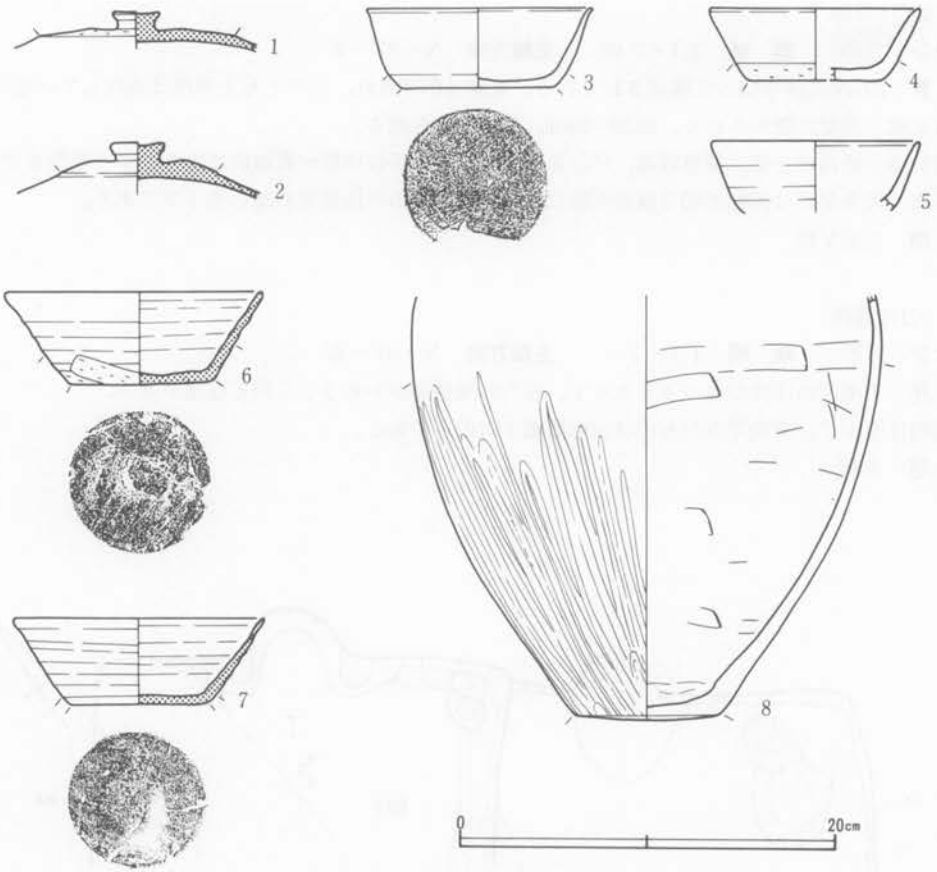
所　見　東南部は床面がはっきりとせず，柱穴の残存部がかろうじて残る程度である。

遺物は僅少で，実測できたものは須恵器蓋1点のみである。

時　期　不明



第41図　020・021住居跡

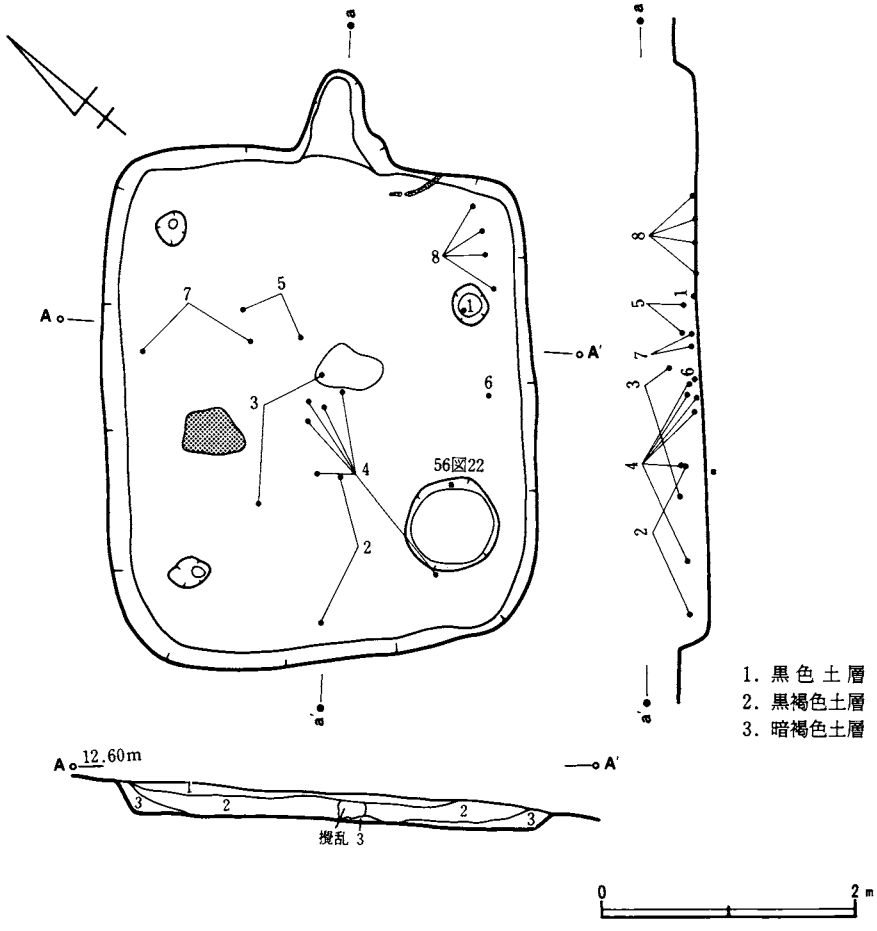


第42図　020・021(1)住居跡出土遺物

020，021住居跡出土遺物

挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
1	蓋 (須恵器)	— 〈1.9〉 つまみ高 0.9 つまみ径 2.5	¼	天井部—回ヘラ削り 内外—ヨコナデ つまみ部—ヨコナデ	R	中粒砂，長石，石英，雲母—多	灰白色	良	021住居跡出土
2	蓋 (須恵器)	— 〈2.8〉 つまみ高 1.0 つまみ径 2.9	¼	天井部—回糸切り，周縁回ヘラ削り 内外—ヨコナデ つまみ部—ヨコナデ	R	粗粒砂，長石，石英—多	青灰色	良	
3	坏 (土師器)	11.8 4.3 8.0	⅓	体部内外—ヨコナデ 体部下端—回ヘラ削り 底部—切り離し不明，手ヘラ削り	L	中粒砂—多 酸化鉄粒—少	黄褐色	やや甘	
4	坏 (土師器)	11.0 3.8 7.0	⅓	体部内外—ヨコナデ 体部下端—回ヘラ削り 底部—切り離し不明，回ヘラ削り		中粒砂—多	暗褐色	良	

挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
5	坏 (土師器)	10.8 〈3.7〉 —	口縁½ 底部欠く	体部内外—ヨコナデ 体部下端—回ヘラ削り		中粒砂—多	黄褐色	甘	
6	坏 (須恵器)	13.2 4.9 7.5	ほぼ完形	体部内外—ヨコナデ 体部下端—手ヘラ削り 底部—回ヘラ切り離し後 一定方向の手ヘラ削り	L	粗粒砂，長石， 石英，雲母—多	灰白色	良	図版18—4
7	坏 (須恵器)	13.0 4.5 7.1	ほぼ完形	体部内外—ヨコナデ 体部下端—回ヘラ削り 底部—回ヘラ切り離し後 一定方向の手ヘラ削り	L	粗粒砂，長石， 石英—多	青灰色	良	図版18—5
8	甕 (土師器)	— 22.2 7.6 胴最大径 24.9	胴下半⅓	胴内面—ヘラナデ 胴外面—ヘラ磨キ 底部—木葉痕		中粒砂，長石， 石英，雲母—多	暗褐色	良	



第43図　022住居跡

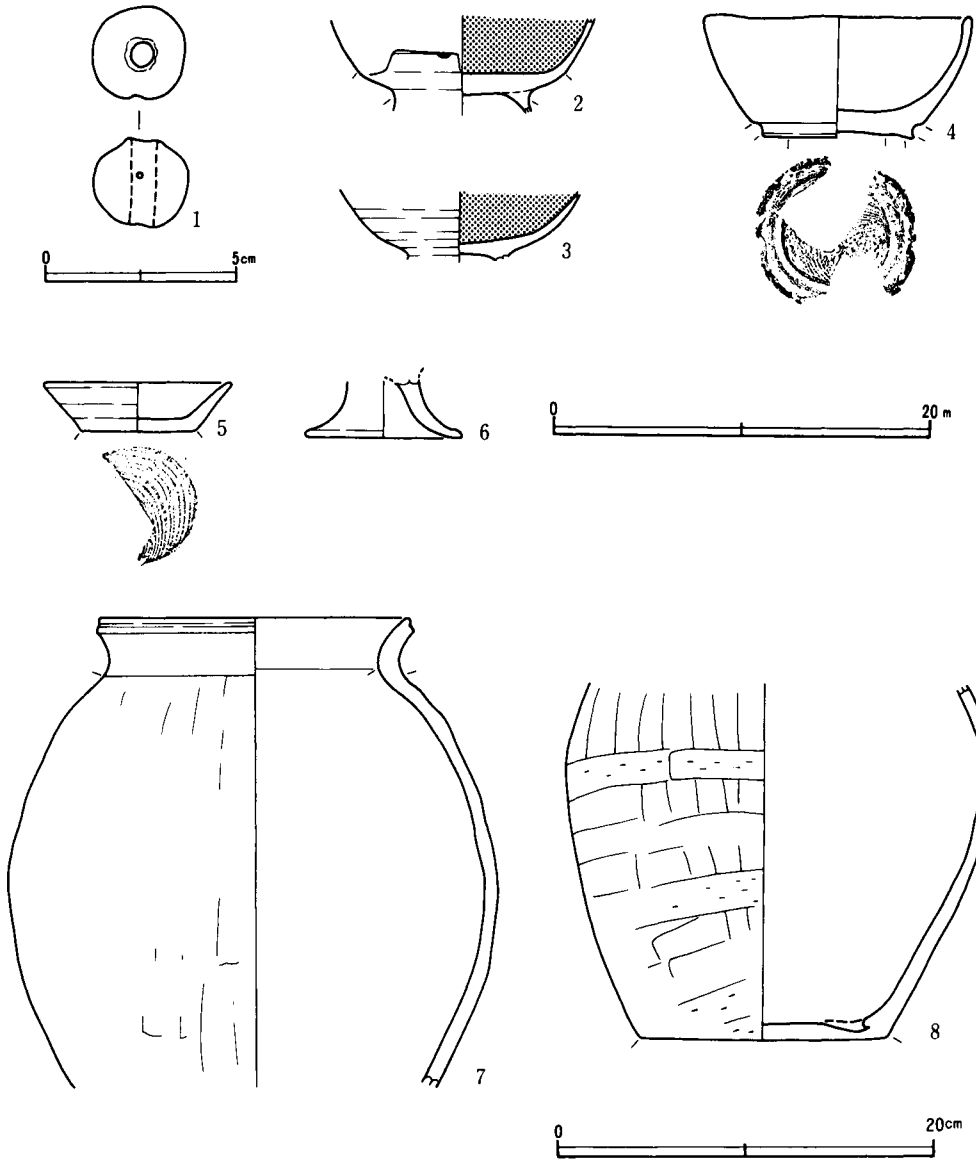
022住居跡

プラン　長方形　　**規　模**　4.0×3.6m　　**主軸方向**　N－56°－E

所　見　縦長の平面形態をとる住居跡で，カマドの遺存状態は悪く掘方を残すのみである。径30cm，深さ20cmを測る小形のピット３本は柱穴であろうか。また南東隅にある平面円形のピットは径75cm，深さ30cmを測る，このピット内には鉄滓が含まれていた。周溝などは認められない。

遺物は少量であるが，須恵器がほとんど含まれないのが特徴である。２の内黒処理された高台付坏の体部には僅かに墨書された部分が遺存している。５の坏は底部回転糸切り無調整になる小形のものである。７の甕の口唇部は凹線が巡り，器形も他に類例を見ない特異なものである。この他に羽口も出土している。

時　期　花前IX期



第44図　022住居跡出土遺物

022住居跡出土遺物

挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
1	土玉	径 2.4 高さ2.3 孔径0.6 重さ 13.0g					淡褐色		側面に穿孔途中の痕跡
2	高台付坏 (土師器)	— 〈4.6〉 —	体部½	体部内面—ヘラ磨キ 体部下端—回ヘラ削り 高台部—ヨコナデ		細粒砂—多	乳橙色	良	体部内面に僅かに墨書残す
3	高台付坏 (土師器)	— 〈3.6〉 —	体部⅓	体部内面—ヘラ磨キ 体部外面—ヨコナデ 体部下端—回ヘラ削り 高台部—ヨコナデ		中粒砂—多	暗褐色	良	内黒
4	高台付坏 (土師器)	(14.0) 6.3 7.9	⅓	体部内外—ヨコナデ 体部下端—回ヘラ削り 高台部—ヨコナデ 底部—回糸切り		中粒砂—多	暗褐色	良	
5	坏 (土師器)	(9.6) 2.5 (6.0)	⅓	体部内外—ヨコナデ 底部—回糸切り		中粒砂—多	乳橙色	良	
6	台付甕 (土師器)	— 〈3.0〉 (8.2)	脚部⅓	脚部内外—ヨコナデ		中粒砂—多	乳橙色	良	
7	甕 (土師器)	16.2 〈24.3〉 胴最大径 (25.7)	胴下半を欠く	口縁部内外—ヨコナデ 胴部内面—ヘラナデ 胴部外面—縦位のヘラ削り		中粒砂—多 酸化鉄粒—少	乳橙色	良	口唇部外面に凹線をめぐらす
8	甕 (土師器)	— 〈18.5〉 胴最大径 22.4 13.0	胴下半½ 底部完	胴部内面—ナデ 胴部外面—縦位のヘラ削り後，横位のヘラ削り 底部—調整不明		粗粒砂—多 酸化鉄粒—少	黄褐色	良	

028住居跡

プラン 方形？　**規模** 一辺3.2m以上　**主軸方向** N—31°—W

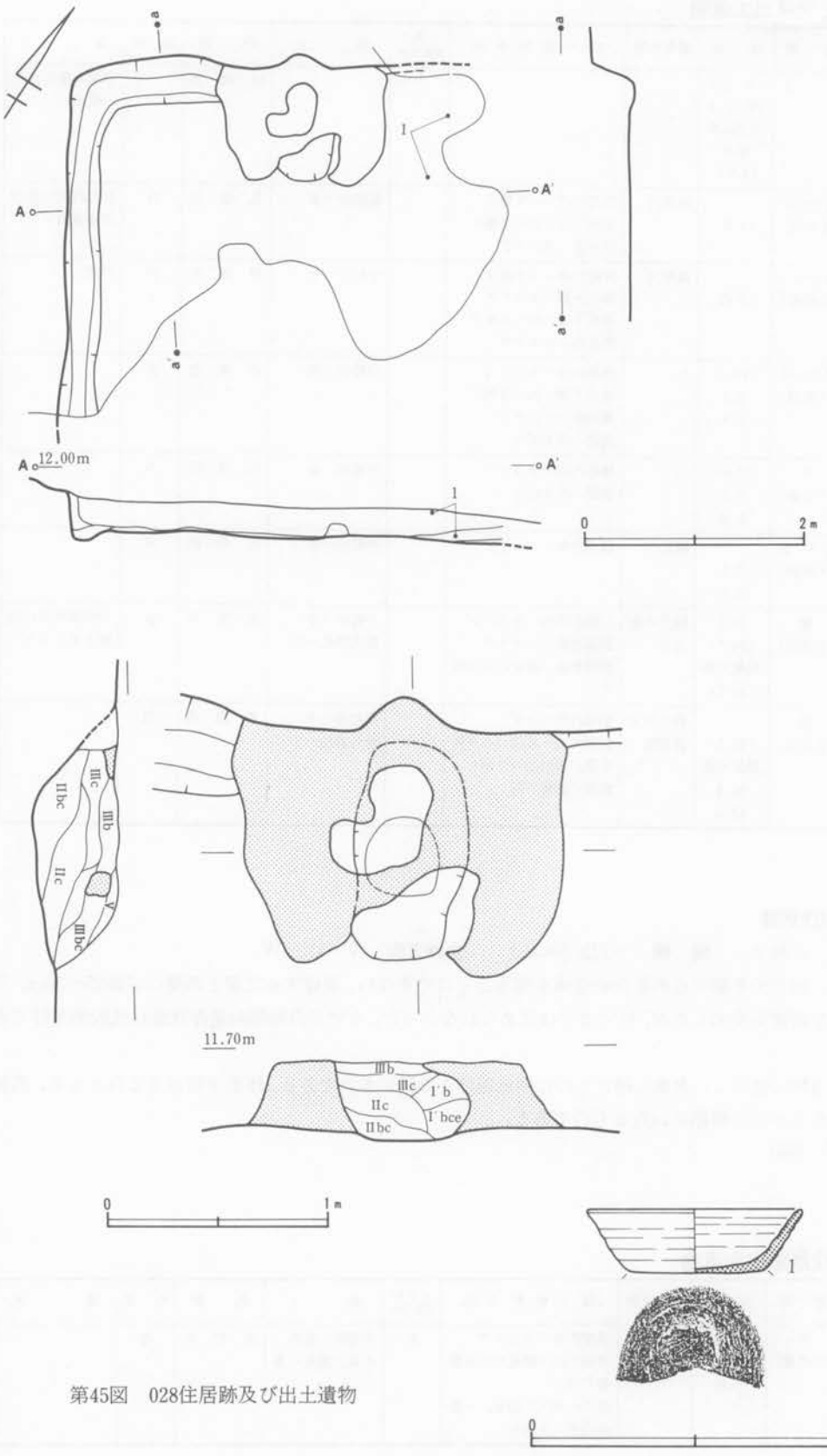
所見 南半分を削平されるため全体を知ることはできない。現存する北壁と西壁には幅25～30cm，深さ10cmで周溝を検出したが，柱穴などは認められなかった。カマドの袖部の遺存状態は比較的良好であった。

出土遺物は僅少で，実測し得たものは須恵器坏1の僅か1点である。体部下端はまるみをもち，直線的に立ち上がり口唇部にいたるものである。

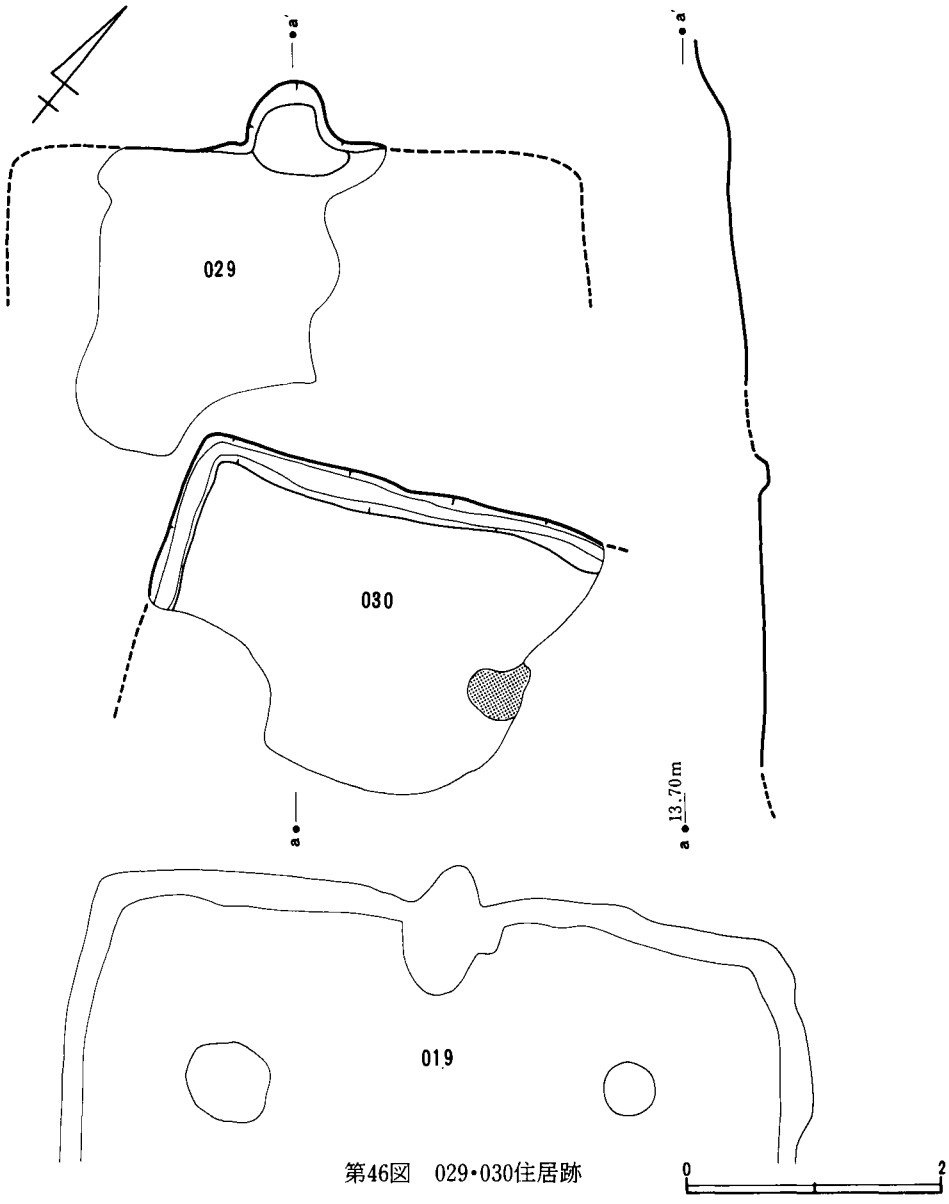
時期 不明

028住居跡出土遺物

挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
1	坏 (須恵器)	(12.6) 3.8 (7.8)	½	体部内外—ヨコナデ 体部下端—磨耗のため調整不明 底部—回ヘラ切り，一方向の手ヘラ削り	R	中粒砂，長石，石英，雲母—多	灰白色	良	



第45図　028住居跡及び出土遺物



第46図　029・030住居跡

029住居跡

プラン　方形？　　**規　模**　不明　　**主軸方向**　N－40°－W

所　見　カマド掘方と床面と考えられる一部を確認したにとどまる。遺物は細片が多く時期の決定もし難い。

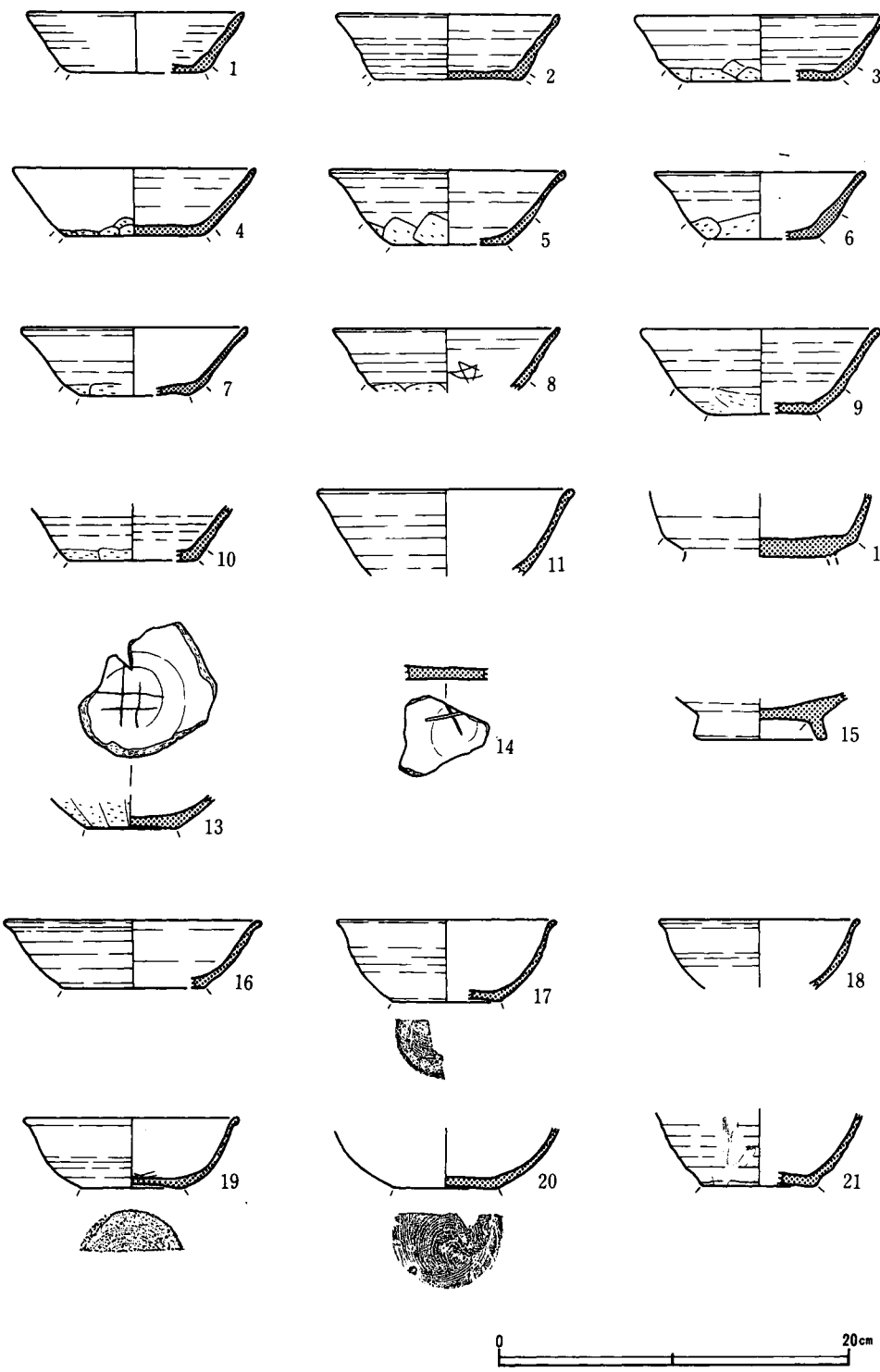
時　期　不明

030住居跡

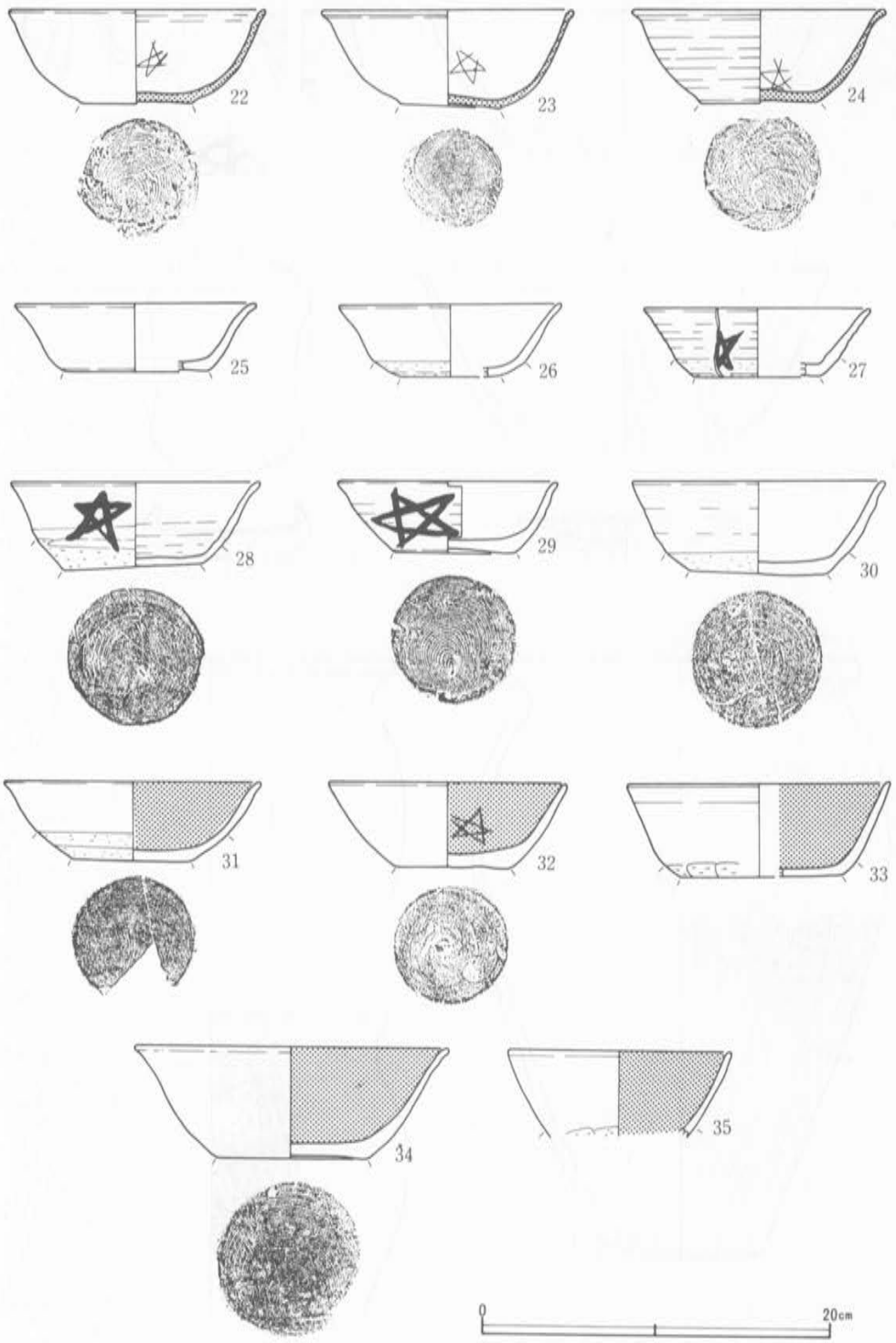
プラン　方形？　　**規　模**　不明　　**主軸方向**　不明

所　見　周溝と床面の一部を遺存するだけである。周溝は幅20cm，深さ10cmを測る，床面の一部に焼土の推積があり，カマドの火床部とも考えられる。遺物は少なく時期は決定できない。また019・030住居跡と切り合い関係をもつが，その新旧関係も不明である。

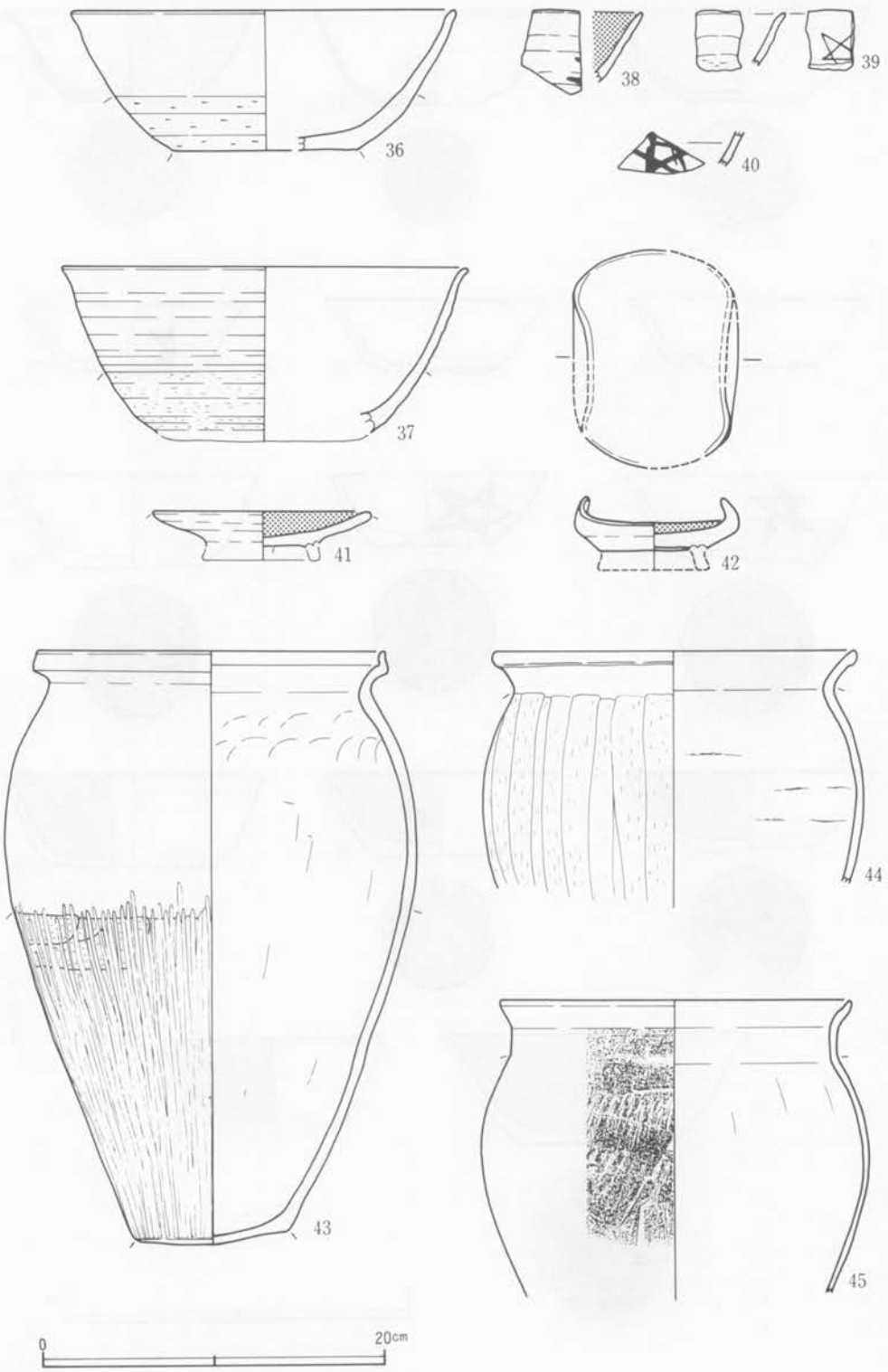
時　期　不明



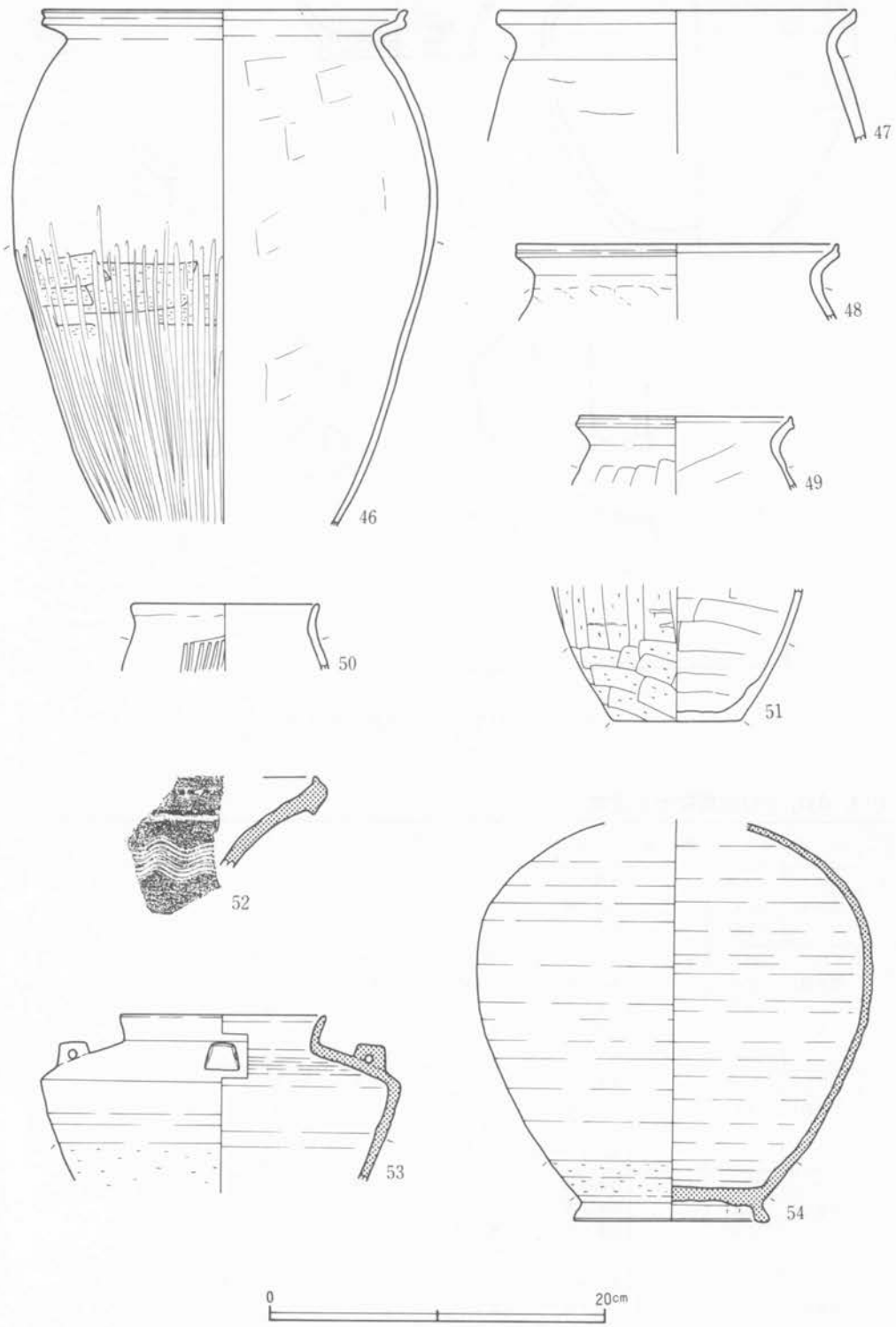
第47図　013・031・032住居跡出土遺物



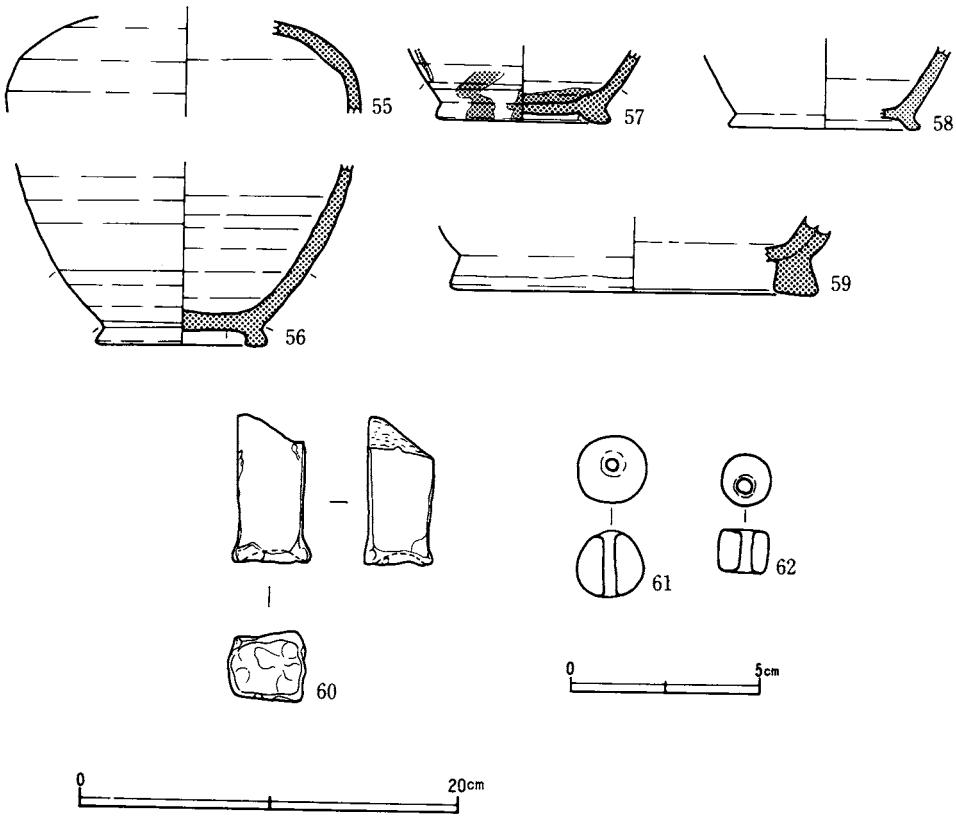
第48図　013・031・032住居跡出土遺物



第49図　013・031・032住居跡出土遺物



第50図　013・031・032住居跡出土遺物



第51図　013・031・032住居跡出土遺物

013，031，032住居跡出土遺物

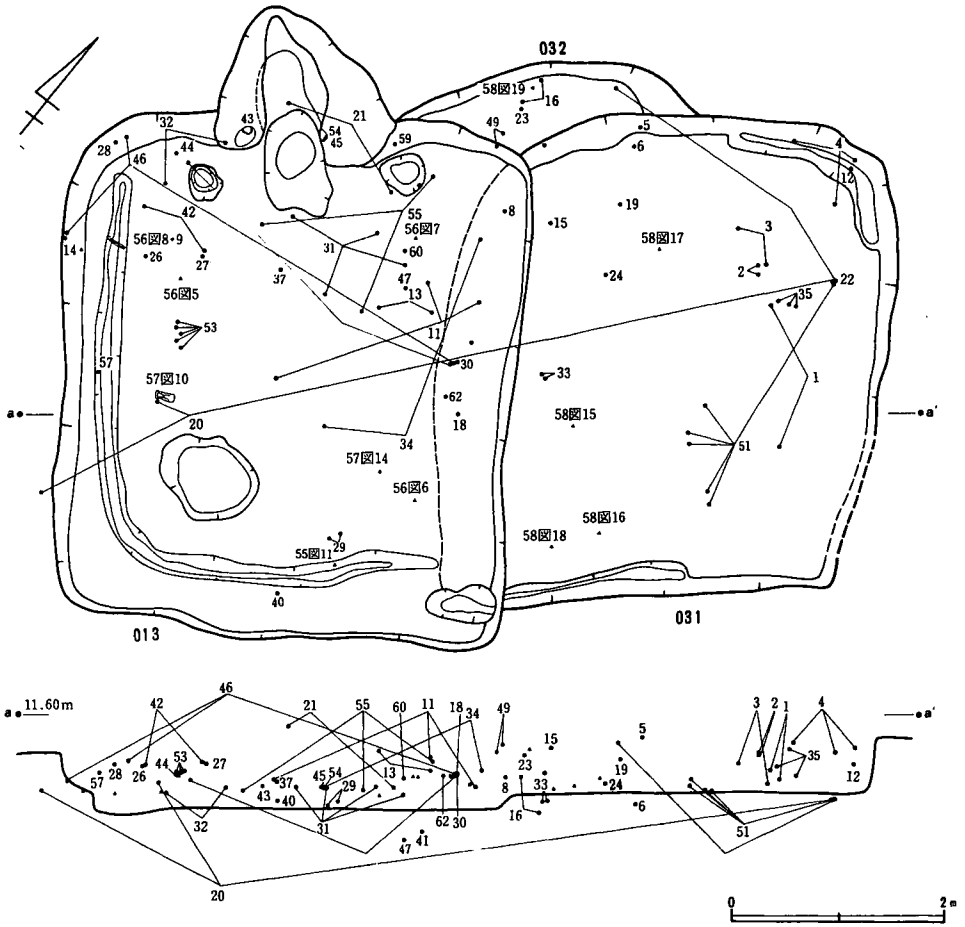
挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
1	坏（須恵器）	(12.2) 〈3.4〉 (7.7)	1/6	体部内外一ヨコナデ 体部下端一ヘラ削り 底部一回ヘラ削り		細礫，長石，石英一多	灰色	良	
2	坏（須恵器）	(12.4) 3.8 (8.5)	1/3	体部内外一ヨコナデ 体部下端一ヨコナデ後軽く手ヘラ削り 底部一不定方向の手ヘラ削り		中粒砂一少密	青灰色	堅緻	
3	坏（須恵器）	(14.0) 3.8 (8.7)	1/6	体部内外一ヨコナデ 体部下端一手ヘラ削り 底部一回ヘラ切り離し後，手ヘラ削り		中粒砂，雲母一多	灰白色	やや甘	
4	坏（須恵器）	(13.5) 〈3.8〉 (7.8)	体部1/8	体部内外一ヨコナデ 体部下端一手ヘラ削り 底部一回ヘラ切り離し後一定方向の手ヘラ削り		細礫，長石，石英一多	灰色	良	
5	坏（須恵器）	(13.3) 〈4.1〉 (6.6)	1/4	体部内外一ヨコナデ 体部下端一手ヘラ削り 底部一切り離し不明，手ヘラ削り		中位砂一多	灰褐色	やや甘	
6	坏（須恵器）	(12.0) 3.8 (6.4)	1/6	体部内外一ヨコナデ 体部下端一手ヘラ削り 底部一手ヘラ削り		中粒砂，長石，石英一多 雲母一少	淡褐色	良	酸化焔焼成

挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
7	坏（土師器）	(12.6) 3.8 (6.0)	1/6	体部内外ーヨコナデ 体部下端ー手ヘラ削リ 底部ー回糸切り		中粒砂，長石，石英ー多 雲母ー少	淡褐色	良	酸化焔焼成
8	坏（須恵器）	12.9 〈3.5〉 —	口縁部1/3	体部内外ーヨコナデ 体部下端ー手ヘラ削リ		中粒砂ー多	灰褐色	やや甘	体部内面に焼成後「☆」の線刻
9	坏（須恵器）	(13.5) (4.8) (6.0)	1/6	体部内面ーヨコナデ 体部下端ー手ヘラ削リ 底部ー一定方向のヘラ削リ	R	細粒砂，雲母ー多	灰色	やや甘	
10	坏（須恵器）	— 〈2.9〉 —	1/3	体部内外ーヨコナデ 体部下端ー手ヘラ削リ 底部ー切り離し不明，数方向にヘラ削リ	L	雲母，小石粒	灰色	やや甘	
11	坏（須恵器）	14.2 4.8 —	口縁1/6	体部内外ーヨコナデ		中粒砂ー多	灰色	堅緻	
12	高台付坏（須恵器）	— 〈3.5〉	体部下半1/3	体部内外ーヨコナデ 底部ー回ヘラ削り	R	細礫，長石，石英ー多	青灰色	良	
13	坏（須恵器）	— 〈1.7〉 5.0	底部のみ	体部内面ーヨコナデ 体部下端ー手ヘラ削リ 底部ー一定方向のヘラ削り	R	粗粒砂ー多	灰褐色	良	底部内面に焼成後「井」の線刻
14	坏（須恵器）	— — —	底部破片			小石粒	暗灰色	やや甘	外面に焼成前「十」のヘラ書き
15	高台付坏（須恵器）	— 〈2.6〉 高台径 (7.5)	底部1/2	体部内外ーヨコナデ 高台部ーヨコナデ 底部ー回ヘラ削り	R	中粒砂，雲母ー多	灰褐色	甘	
16	坏（須恵器）	(14.4) 3.8 (8.0)	1/6	体部内外ーヨコナデ 庭部ー回糸切り		細粒砂，白色針状物ー多 密	灰色	良	南比企製品
17	坏（須恵器）	(12.5) (4.5) (6.5)	1/3	体部内外ーヨコナデ 底部ー回糸切り		細粒砂，白色針状物ー多	青灰色	堅緻	南比企製品
18	坏（須恵器）	11.0 3.8	口縁1/6	体部内外ーヨコナデ		細粒砂，白色針状物ー多	青灰色	堅緻	南比企製品
19	坏（須恵器）	(12.0) 3.9 (5.6)	1/3	体部内外ーヨコナデ 底部ー回糸切り		細砂粒，白色針状物ー多 密	灰色	堅緻	体部内面に焼成後「☆」の線刻 南比企製品
20	坏（須恵器）	— 〈3.1〉 6.0	体・底部約1/2	体部内外ーヨコナデ 底部ー回糸切り	R	細粒砂，白色針状物ー多 密	灰色	堅緻	南比企製品
21	坏（須恵器）	— 〈4.2〉 (6.0)	底部1/3	体部内外ーヨコナデ 底部ー回糸切り		細粒砂，白色針状物ー多 密	青灰色	堅緻	内外面に火襷有り 南比企製品
22	坏（須恵器）	(14.3) 5.5 (6.1)	口縁1/4	体部内外ーヨコナデ 底部ー回糸切り	R	細粒砂，白色針状物ー多	灰褐色	良	体部内面に焼成後「☆」の線刻 南比企製品 図版19ー7
23	坏（須恵器）	(14.3) 5.7 6.7	口縁の1/3を欠く	体部内外ーヨコナデ 底部ー回糸切り		白色針状物，細砂粒ー多	灰白色	やや甘	体部内面に「☆」の線刻 南比企製品 図版19ー8

挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
24	坏 (須恵器)	(14.2) 5.4 (6.7)	1/3	体部内外ーヨコナデ 底部ー回糸切り	R	中粒砂，白色針状物ー多	灰褐色	良	体部内面に焼成後「☆」の線刻 南比企製品 図版20ー1
25	坏 (土師器)	(13.5) 3.9 (8.0)	1/3	体部内外ーヨコナデ 底部ー回糸切り		中粒砂ー多	黒灰色	良	
26	坏 (土師器)	(12.5) 4.1 (6.0)	1/4	体部内外ーヨコナデ 体部下端ー回ヘラ削り 底部周縁ー回ヘラ削り		中粒砂ー多 密	乳橙色	良	
27	坏 (土師器)	(13.0) 4.0 (7.0)	1/3	体部内外ーヨコナデ 体部下端ー回ヘラ削り 底部ー切り離し不明，回ヘラ削り		中粒砂ー多 酸化鉄粒ー少	乳橙色	良	体部外面に「☆」の墨書 図版19ー4
28	坏 (土師器)	14.3 4.9 8.0	口縁部若干欠く	体部内面ーヨコナデ後，斜め横のヘラ磨キ 体部外面ーヨコナデ 体部下端ー回ヘラ削り 底部ー回糸切り後，回ヘラ削り	R	細粒砂ー多	乳橙色	良	体部外面に「☆」の墨書 図版19ー1
29	坏 (土師器)	12.8 4.1 7.0	口縁1/2を欠く	体部内外ーヨコナデ 底部ー回糸切り	R	細粒砂，酸化鉄粒ー少	乳橙色	良	体部外面に「☆」の墨書 内面に長方形の墨痕 図版19ー2
30	坏 (土師器)	14.4 5.3 7.9	口縁部若干欠く	体部内面ーヘラ磨キ 体部外面ーヨコナデ 体部下端ー回ヘラ削り 底部ー切り離し不明，回ヘラ削り		中粒砂ー多	乳橙色	良	図版19ー3
31	坏 (土師器)	(14.5) 4.5 (6.5)	口縁3/4欠く	体部内面ーヘラ磨キ 体部外面ーヨコナデ 体部下端ー回ヘラ削り 底部ー切り離し不明，回ヘラ削り	R	中粒砂，酸化鉄粒ー少	乳橙色	良	内黒
32	坏 (土師器)	13.6 4.8 6.5	1/2	体部内面ーヘラ磨キ 体部外面ーヨコナデ 底部ー切り離し不明，回ヘラ削り	R	中粒砂ー少	乳橙色	良	内黒 体部内面に焼成後「☆」の線刻 図版19ー5
33	坏 (土師器)	(15.0) 5.3 (9.2)	1/6	体部内面ーヨコナデ後ヘラ磨キ 体部外面ーヨコナデ 体部下端ー手ヘラ削り 底部ー手ヘラ削り		中粒砂ー多	乳橙色	良	内黒
34	鉢 (土師器)	(18.0) 7.5 8.5	体部の3/4欠く	体部外面ーヨコナデ 底部ー回糸切り		中粒砂ー多	灰褐色	良	内黒
35	坏 (土師器)	12.8 〈4.9〉 —	1/4	口縁部外面ーヨコナデ後横方向のヘラ磨キ 体部内面ーヨコナデ後，磨キ 体部外面ーヨコナデ 体部下端ー手ヘラ削り		雲母，微粒砂ー少	淡褐色	良	内黒
36	鉢 (土師器)	(22.2) 8.3 (10.2)	1/2	体部内面ーヨコナデ後，ヘラ磨キ 体部外面ーヨコナデ 体部下端ー回ヘラ削り 底部ー回ヘラ削り		中粒砂，酸化鉄粒ー少	乳橙色	堅緻	

挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
37	鉢 (土師器)	(23.5) (10.0)	¼	体部内面一ヘラ磨キ 体部外面一ヨコナデ 体部下端一回ヘラ削り		細粒砂一多 密	乳橙色	良	口縁に鉄附着
38	坏 (土師器)	— — —	口縁部破片	体部内面一ヘラ磨キ 体部外面一ヨコナデ 体部下端一回ヘラ削り		中粒砂一多 酸化鉄粒一少	乳橙色	良	内黒 体部外面に墨書
39	坏 (土師器)	— — —	口縁部破片	体部内外一ヨコナデ 体部下端一回ヘラ削り		中粒砂一少 密	乳橙色	良	体部内面に焼成後「☆」の線刻 図版19— 4
40	坏 (土師器)	— — —	体部破片	体部内面一ヨコナデ 体部外面一ヨコナデ 体部下端一ヘラ削り		中粒砂一多 密	橙褐色	良	体部外面に「☆」の墨書 図版19— 4
41	高台付皿 (土師器)	(13.0) 〈2.0〉 —	体部½ 高台を欠く	体部内面一ヘラ磨キ 体部外面一ヨコナデ 高台部一ヨコナデ 底部一回糸切り後，回ヘラ削り		中粒砂一多	乳橙色	良	内黒
42	高台付耳坏 (土師器)	長径12.5 短径 8.5 現存高 3.0	高台欠く	体部内面一ヘラ磨キ 体部外面一回ヘラ削り後ヘラ磨キ 底部一回ヘラ削り	L	細粒砂一多	乳橙色	良	内黒 図版19— 6
43	甕 (土師器)	20.5 33.7 胴最大径 24.1 8.9	完形	口縁部内外一ヨコナデ 胴部内面上半一ナデそれ以下ヘラナデ 胴部下半一横方向のヘラ磨キ後，縦位のヘラ磨キ 底部一ナデ		中粒砂，細礫，雲母一多	乳橙色	良	図版20— 2
44	甕 (土師器)	(21.0) 〈13.5〉 胴最大径 22.0 —	¼	口縁部内外一ヨコナデ 胴部内面一ナデ 胴部外面一縦位のヘラ削り		中粒砂，酸化鉄粒一多	乳橙色	良	
45	甕 (土師器)	20.5 〈16.9〉 胴最大径 22.5	胴下半部欠く	口縁内外一ヨコナデ 胴部内面一ヘラナデ 胴部上位一ヨコヘラ削り 胴部中位一縦位ヘラ削り		中粒砂一多	明褐色	良	外面山砂附着 胴部上位のヨコヘラ削りはカンナとぴの状態となる 図版20— 3
46	甕 (土師器)	(21.5) 〈30.3〉 胴最大径 (25.0) —	口縁部～胴部⅓欠く	口縁部内外一ヨコナデ 胴部内面一ヘラナデ 胴部上位一ナデ 胴部下半一横方向のヘラ削り後，縦位のヘラ磨キ		細礫，長石，石英，雲母一多	橙褐色	良	
47	甕 (土師器)	(21.0) 〈7.7〉	口縁¼	口縁内外一ヨコナデ 胴部外面一ナデ		粗粒砂，長石，石英一多	乳橙色	良	
48	甕 (土師器)	19.0 〈4.4〉 —	口縁⅙	口縁部内外一ヨコナデ 胴部外面一ヘラ削り		中粒砂，長石，石英一多	暗褐色	良	
49	甕 (土師器)	13.5 4.2 —	口縁¼	口縁部内外一ヨコナデ 胴部内面一ヘラナデ 胴部外面一縦位のヘラ削り		中粒砂，長石，石英，雲母一少	暗褐色	良	
50	甕 (土師器)	(10.8) 〈3.9〉 —	口縁¼	口縁部内外一ヨコナデ 胴部外面一荒い木口状工具による削り		中粒砂一多	橙褐色	甘	

挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
51	甕（土師器）	— 〈7.8〉 7.5	胴下半～底部⅔	胴部内面—ヘラナデ 胴部外面—ヘラ削り 底部—ナデ		中粒砂—多 密	乳橙色	良	
52	甕（須恵器）	—	口縁部破片	口縁部内外—ヨコナデ後外面に櫛描波状文を施す		細礫	暗灰色		
53	四耳壺（須恵器）	(12.0) 〈9.7〉 胴最大径 (21.0)	⅓	胴部内外—ヨコナデ 胴部下端—回ヘラ削リ		中粒砂—少 密	灰白色	良	胴上半に自然釉付着 東海地方の製品 図版20—5
54	長頸瓶（灰釉）	— 〈23.4〉 胴最大径 23.3 高台径 11.6	⅔	胴部下端—回ヘラ削リ 高台部—ヨコナデ 底部—回ヘラ削リ		中粒砂—多	灰白色	良	井ケ谷78号窯式 図版20—4
55	長頸瓶（灰釉）	— — —	胴部上半⅓	胴部内外—ヨコナデ		中粒砂—多	青灰色	良	
56	長頸瓶（灰釉）	— 〈9.6〉 高台径 9.0	胴部下半⅓	胴部内外—ヨコナデ 胴部下端—回ヘラ削リ 高台部—ヨコナデ 底部—回ヘラ削リ		中粒砂—多	青灰色	良	井ケ谷78号窯式
57	長頸瓶（須恵器）	— 〈8.7〉 高台径 9.2	底部½	胴部下端—回ヘラ削リ 高台部—ヨコナデ 底部—回糸切り後，回ヘラ削リ		中粒砂—多	灰白色	良	表面に鉄分の噴出
58	長頸瓶（灰釉）	台径 10.0		台部内外—ヨコナデ		粗粒砂—多	灰色	良	黒世14号窯式
59	短頸壺？（灰釉）	— 〈3.4〉 高台径 (19.5)	底部破片	内面—ヨコナデ 高台部—ヨコナデ		中粒砂—少 密	灰白色	堅緻	内面に釉 井ケ谷78号窯式
60	不明土製品	一辺3.5 現存長7.7		外面—斜位にヘラナデにより調整 端部—指頭による押え		中粒砂—少	乳橙色 (断面-灰色)	良	角柱状の土製品，用途不明
61	土玉	長径1.9 孔径0.3 重さ4.7g					暗褐色	良	
62	土玉	長径1.3 孔径0.2					暗褐色	良	



第52図　013・031・032住居跡

013住居跡

プラン　長方形　　**規　模**　4.9×4.4m　　**主軸方向**　N－43°－W

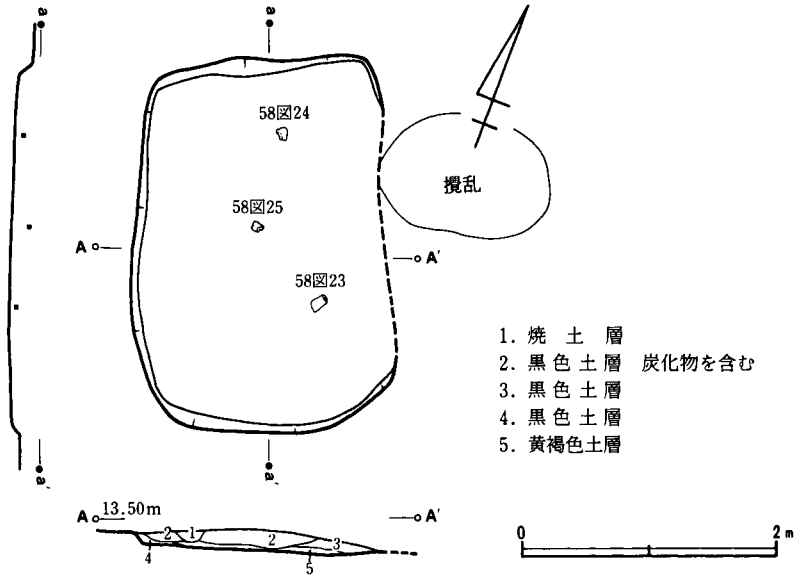
所　見　031・032の各遺構と切り合い関係をもつ住居跡である。現存壁高は60cmを測る。周溝は南・西壁から20～50cm程中に入って，並行して検出された。柱穴はカマド袖部の両側に径約30cmを測るものが２本ある。また住居跡の南西部には100×75cmのピットが検出された。031住居跡は一辺4.5m程で現存壁高は約55cmである。北東壁の一部と南壁の一部に周溝が認められる。カマドは検出されなかった。

032遺構は013・031の北壁にまたがって検出されたが，その性格等不明である。出土した遺物量は極めて多く土器の他に鉄器，鉄滓も多く出土している。

土器は切り合いを持つ３遺構にまたがって接合しており，どの遺構にどの遺物が伴なうのかを判断するのは難しい，また切り合いによる新旧関係も不明である。

須恵器坏１～４は口径と底径の差が比較的小さなもので，花前II期に見られる法量値に近い。16～24は胎土に白色針状物を含み，回転糸切り無調整となる一群で南比企からの搬入品である。53の四耳壺は東海地方からの搬入品，54・55・58～59は灰釉陶器である。60は角柱状の土製品で用途不明であるが，脚としての使用が考えられる。また坏には「☆」の線刻，墨書が多く認められる点も特徴である。

時　期　花前II・VII期

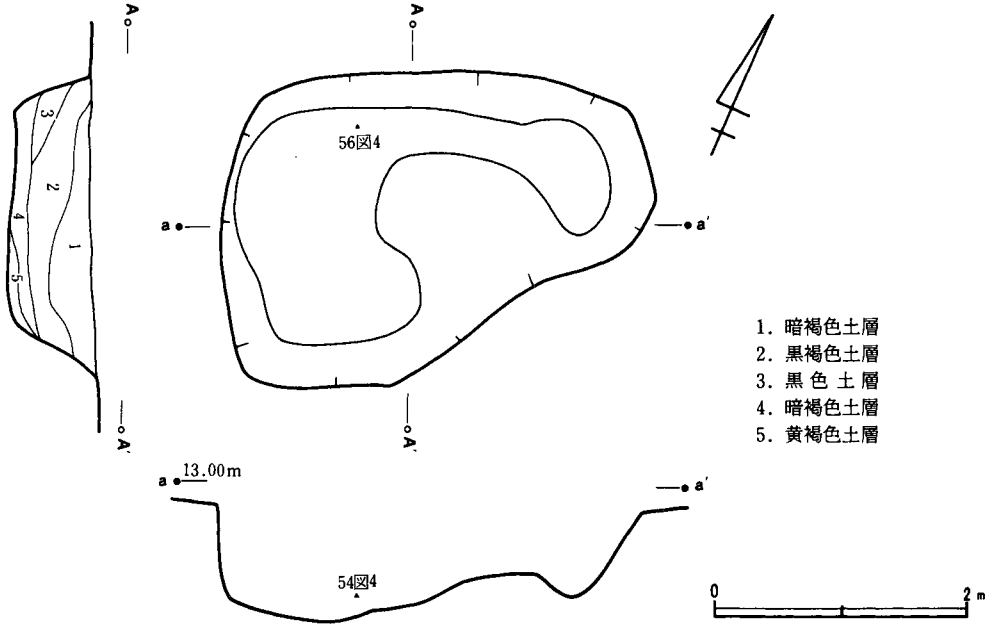


第53図　024小竪穴

024小竪穴

プラン　長方形　　**規　模**　2.9×1.9m

所　見　小形の竪穴遺構で鉄滓と羽口が出土している。遺物から見て製鉄に関連した遺構かとも思われるが，鍛冶炉などの痕跡も認められず断定しがたい。現存壁高は7～12cmを測る。



第54図　025土坑

025土坑

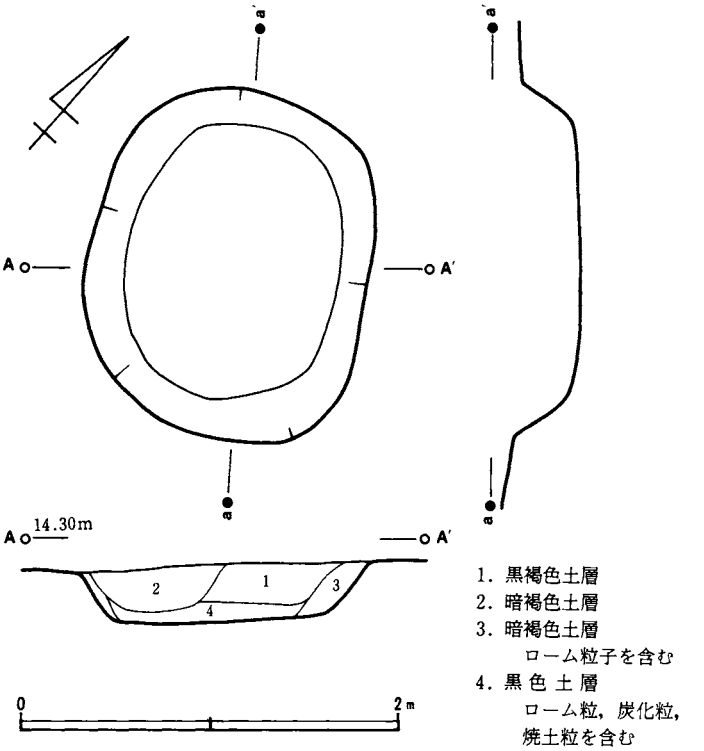
プラン　不整形　　**規　模**　2.5×3.4m

所　見　比較的大きな土坑で現存する壁高は40～80cmを測る。床面はゆるやかな凹凸があり覆土下層から鉄製の丸ノミが出土している。時期，性格ともに不明。

027土坑

プラン　楕円形　　**規　模**　1.5×1.8m

所　見　平面楕円形を呈する土坑で，床面は平坦になっている。現存壁高は25～30cmで，なだらかに立ち上がる。出土遺物はほとんど無く時期，性格ともに不明。



第55図　027土坑

鉄製品と羽口　（第56～58図）

花前II－1遺跡出土の鉄製品で実測可能なものは19点である。以下遺構ごとに出土鉄製品について記述する。

1は008住居跡出土のもので，高台の付いた盤のようなものを想定している。鋳造品で，高台部の高さは0.7cm，高台径は約40cmとなる。体部外面には隆帯が1条縦走する。

2・3は015住居跡出土のもので鉄鏃と棒状鉄製品である。

4は025土坑から出土した丸ノミで遺存状態は良好である。身部に設けられた樋は幅0.6cm，深さ0.3cm，長さ8.1cmを測る。

013・031・032住居跡出土の鉄製品は質，量ともに豊富である。8・9は扁平な刀部を作り出したもので，刃部の幅は0.5～0.7cmを測る。また9は頂部が中空となっており，8も錆のため判然としないが同様の形態をとるものと思われる，用途としてはノミのような工具を想定している。

斧はやや大形のものと小形のものがある。ともに作りは丁寧で，遺存状態も良好である。

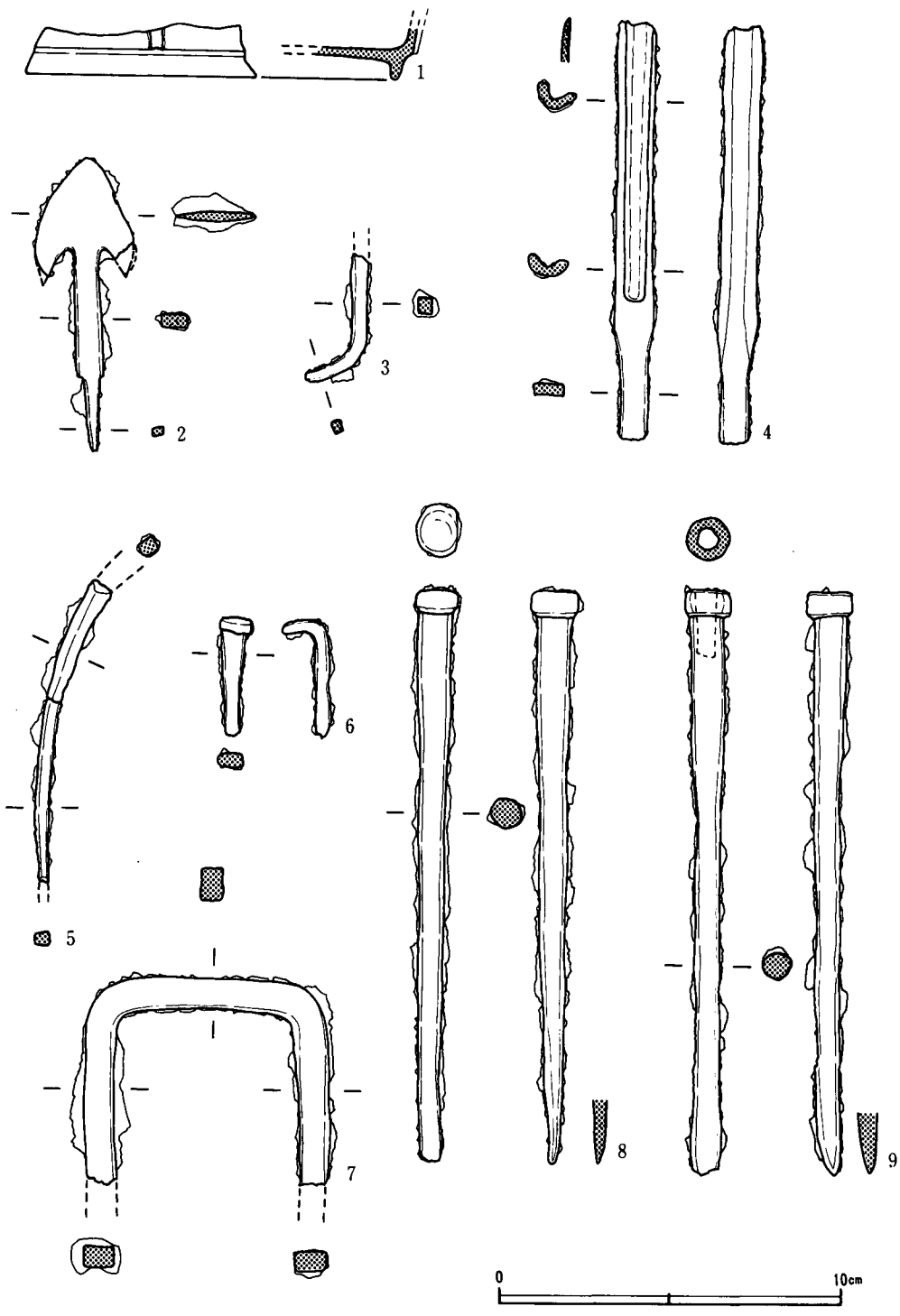
鏃は未製品1点と，製品3点がある，未製品のものは雁股鏃の製作途中のものと考える。

この他に刃部がかなり擦り減った刀子，鎌の先端部，釘，棒状鉄製品，鑿と考えられるものがある。

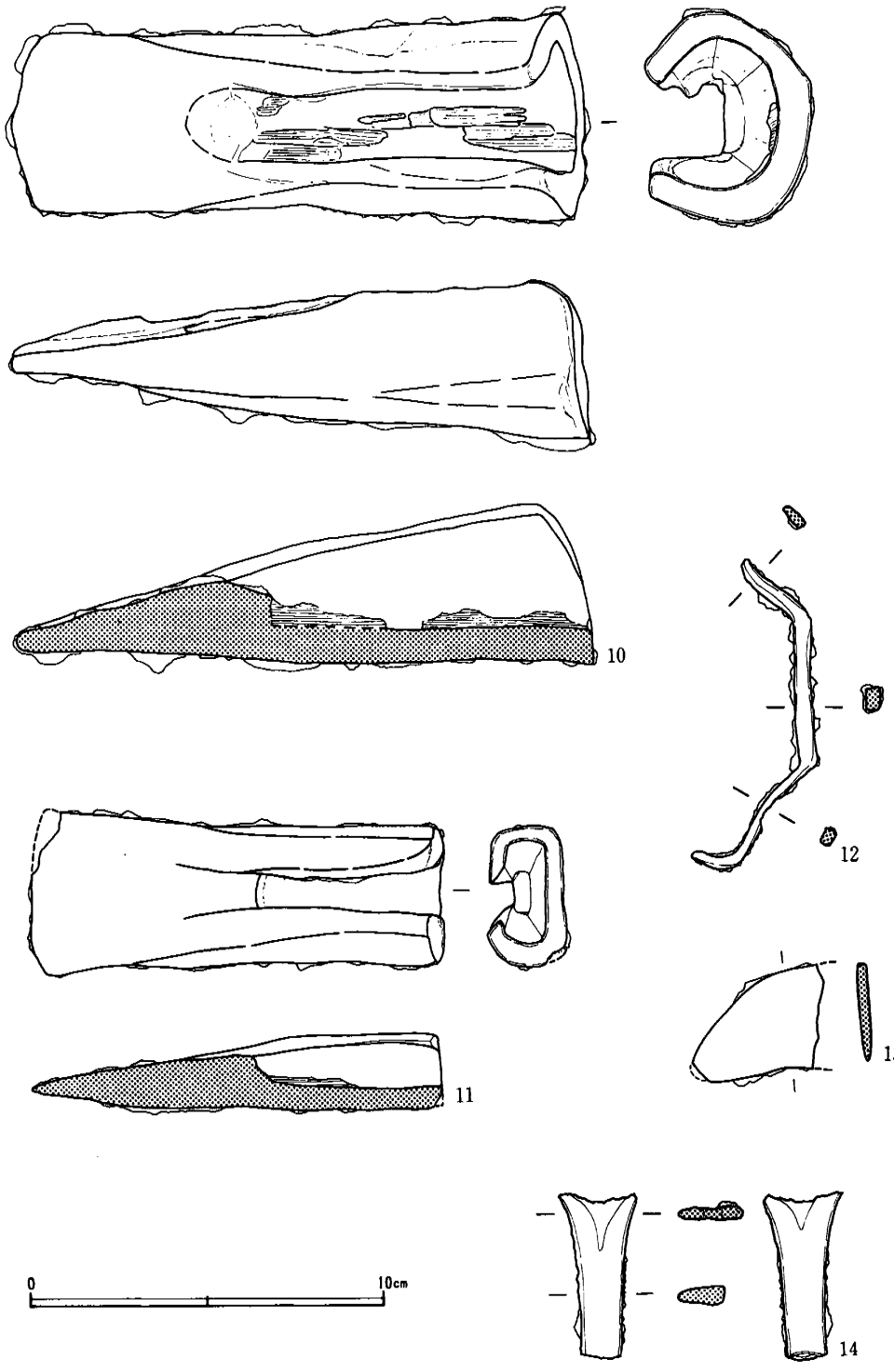
羽口は6点出土している。遺存状態の差によって，その内外径の推定復原の差が出て，ばらつきがあるが，平均値として外径7.8cm，内径2.7cmとなる。また，先端部の形態が絞られるものと，扁平となるものとに分けられる。

花前II－1遺跡羽口計測数値一覧表

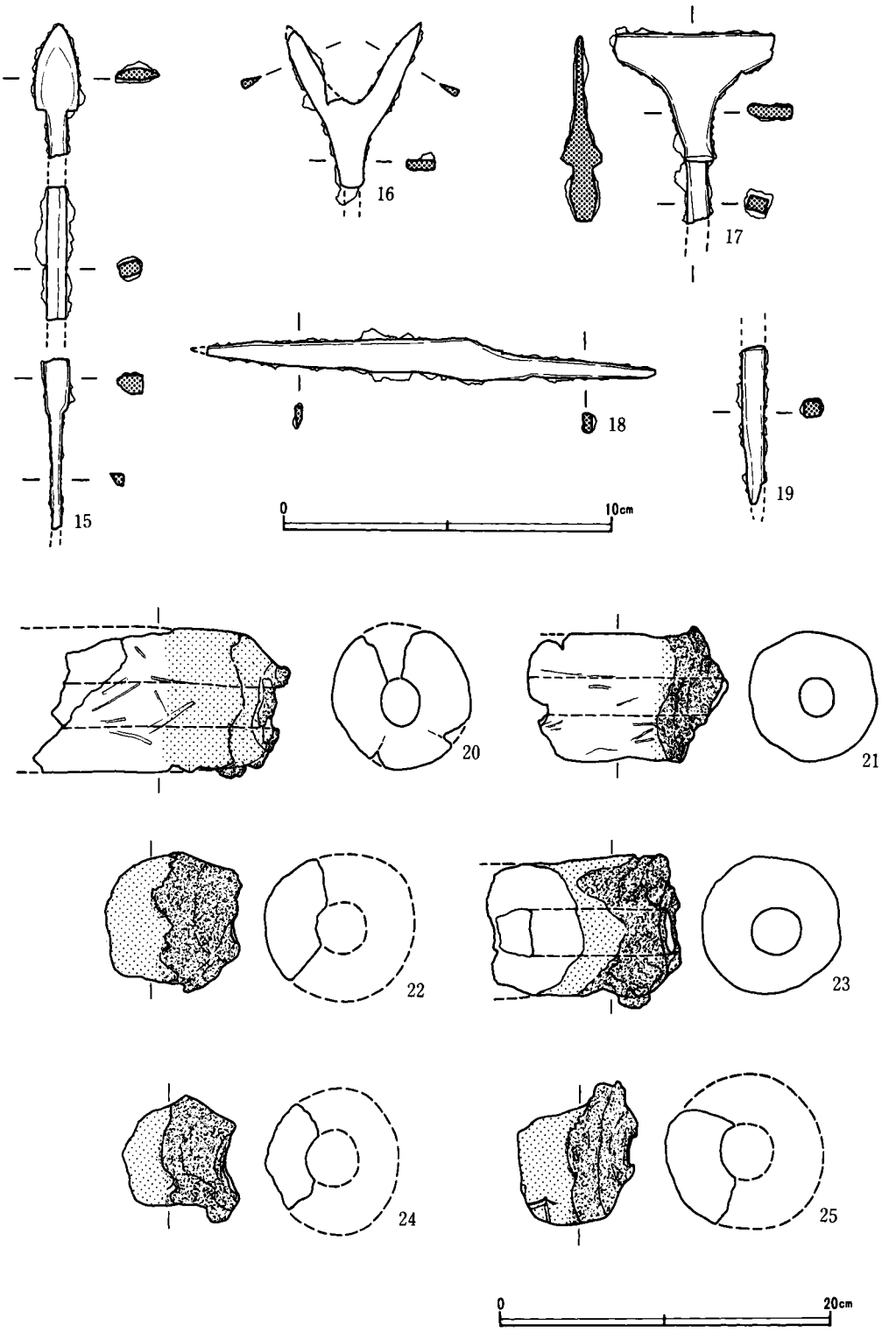
整理No.	挿図No.	出土遺構	外径(cm)	内径(cm)	遺存部位	備　　考
1	58図20	007	7.8	2.1	先端	出土地点の詳細不明
2	21	015	7.2	2.1	先端	
3	22	022	7.7	3.1	先端	
4	23	024	7.9	2.7	先端	
5	24	〃	6.4	3.6	先端	
6	25	〃	10.0	2.7	先端	



第56図　鉄製品



第57図　鉄製品



第58図　鉄製品及び羽口

花前II－1遺跡出土鉄製品一覧表

挿図No	出土遺構	製品名	現存計測数値(cm)(g) 長	巾	厚	重量	備考
56図1	008	高台付盤？	高台高 0.7	推定高台径 40.0	0.3	45.0	図版21－2
2	015	鉄鏃	8.5	根 2.8 篦被 0.7 茎0.2～0.5	0.3 0.3 0.2～0.3	13.5	
3	〃	棒状鉄製品	4.6	0.4	0.2～0.5	3.4	先端は曲がる
4	025	丸ノミ	12.1	身 1.0 柄 0.8	0.3	24.4	図版21－3
5	013	棒状鉄製品	8.9	0.3～0.6	0.4～0.5	6.5	
6	〃	釘	3.4	0.4～1.0	0.4	4.2	皿部は長方形
7	〃	鎹？	7.0	0.9	0.6	50.5	両端を欠損コの字形の製品
8	〃	ノミ？	16.5	頂部径 1.5 0.6～1.0	0.3～1.0	46.6	刃部は扁平 図版21－6
9	〃	ノミ？	16.7	頂部径 1.4 頂部内径0.5	0.3～1.0	51.5	刃部は扁平頂部は中空となる。図版21－7
57図10	〃	鉄斧	16.2	4.8～6.0	1.0～2.0	735.0	刃先角度16°
11	〃	鉄斧	11.6	3.7～4.5	0.6～1.5	257.0	刃先角度13° 図版21－4
12	〃	棒状鉄製品	11.4	0.3～0.5	0.5～0.8	10.9	
13	〃	鉄鎌	3.5	2.6	0.3	8.0	先端部のみ
58図14	〃	鉄鏃（未製品）	4.6	1.1～2.2	0.3～0.5	9.3	雁股鏃の未製品，図版21－8
15	031	鉄鏃	根 2.7 篦被 5.6 茎 4.3	1.3 0.5～0.6 0.3	0.4 0.5～0.6 0.3～0.4	4.8 5.0 4.4	同一個体となるかは不明。図版21－5
16	〃	鉄鏃	根 5.0	4.1	0.2～0.3	8.4	
17	〃	鉄鏃	根 4.0 茎 1.7	4.8 0.6	0.1～1.2 0.4	17.3	図版21－9
18	〃	刀子	身 7.9 茎 5.7	0.8 0.6	0.2 0.3	10.7	刃部は極端に擦り減る
19	032	棒状鉄製品	4.7	0.2～0.7	0.5	5.4	

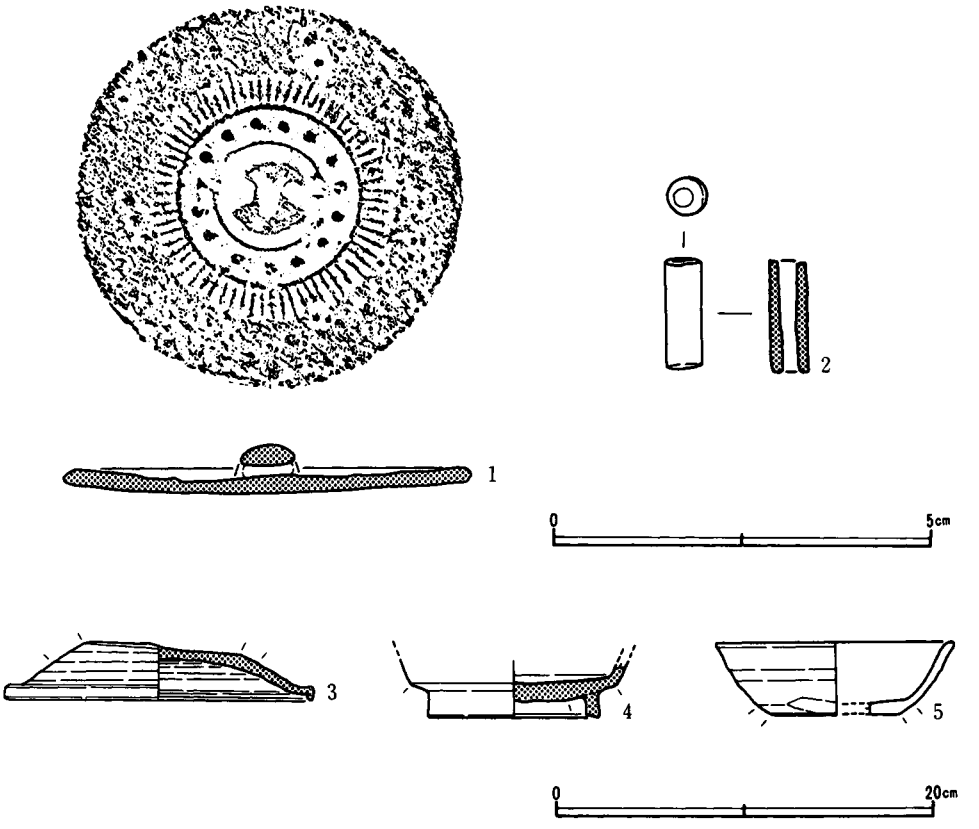
グリッド出土の遺物

グリッド出土の遺物としては鏡，管玉，土師器坏，須恵器坏，蓋がある。

1の鏡はD2－11グリッドの耕作土中から出土したもので鋳上り，遺存状態ともに良好な珠文鏡である。径は5.25cm，鈕径0.7cm，厚さ0.17～0.22cmを測る。鏡面は凸面となっている。鈕座には圏線が配されるが，孔を結ぶ延長線上では，この圏線は消失する。その外側に珠文が環状に15個配され，さらに圏線をはさんで櫛目文帯が配されている。(図版21－1)

県内出土の珠文鏡としては，現在までに市原市新皇塚古墳の主体部出土例と[1]，市原市草刈遺跡C区出土例[2]がある。また珠文鏡とは異なるが，花前II－1遺跡の周辺遺跡で，柏市戸張遺跡の住居跡から小形彷製鏡（重圏文鏡）の出土[3]が報告されている。

2の碧玉製管玉はC2－12グリッドで出土したものである。長さ1.35cm，径0.48cm，孔径



第59図　グリッド出土の遺物

0.2～0.25cmを測る。穿孔は両側穿孔となる。色調は暗緑色を呈する。

上記の2点は古墳時代の所産と考えられる遺物であるが，本遺跡では和泉期の住居跡も検出されており，また鏡と管玉が出土した地点は近世の遺構のために下層の遺構が削平されていた可能性も考えられ，これらの遺構に伴なう時期の遺物として把握している。

3の須恵器蓋は，つまみ部のない器形で，天井部には回転糸切りの痕跡を残したままになっている。胎土には3～5㎜程の長石，石英を含み，全体に粗いものであり，末野産の製品と考えられる。

4は高台付坏の須恵器で，3と同様に，胎土に3㎜大の長石，石英を多く含んでいる。しかしながら全体的には末野産の胎土とは異なった質感である。

5は土師器坏で，体部は内彎しながら立ち上がり，口唇部は僅かに外反する。体部下端および底部周縁は手持ちヘラ削りによる調整が施される。

以上の3点はいずれも採集地点が不明であるが，本遺跡の主体となる時期の遺物として何らの矛盾もない。

註

(1) 斉木　勝ほか　1974　「市原市菊間遺跡」房総考古資料刊行会

(2) (財)千葉県文化財センター　1982　「千葉県文化財センター年報」No.8

(3) 千葉県立房総風土記の丘編　1980　「房総の古鏡」　展示図録　No.8

217—006—グリッド

挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
1	蓋 (須恵器)	16.3 3.0 天井部 8.3	完形	天井部—回糸切り後，無調整	R	中礫，長石，石英—少	灰色	堅緻	末野製品
2	高台付 (須恵器)	— 〈3.1〉 11.0 高台径9.0	1/3	底部周縁—回ヘラ削り後高台貼付に伴うヨコナデ 底部—切り離し不明，回ヘラ削り	R	中礫，長石，石英—少	外—灰褐色 内—灰色	堅緻	
3	坏 (土師器)	12.6 〈3.8〉 6.8	1/4	巻き上げロクロ，切り離し不明 体部外面—ヨコナデ 体部下端—手ヘラ削り 底部—切り離し不明，手ヘラ削り		中粒砂—少	淡茶褐色	良	

第2節　花前II—2遺跡側道部

側道部で検出された遺構は，古墳時代鬼高期の住居跡1軒，奈良・平安時代の住居跡6軒，時期不明の溝状遺構2条である。

出土遺物では009住居跡出土の鉄器のなかに遺存状態良な鉄鋌があり，側道部においても製鉄に係る資料を検出している。

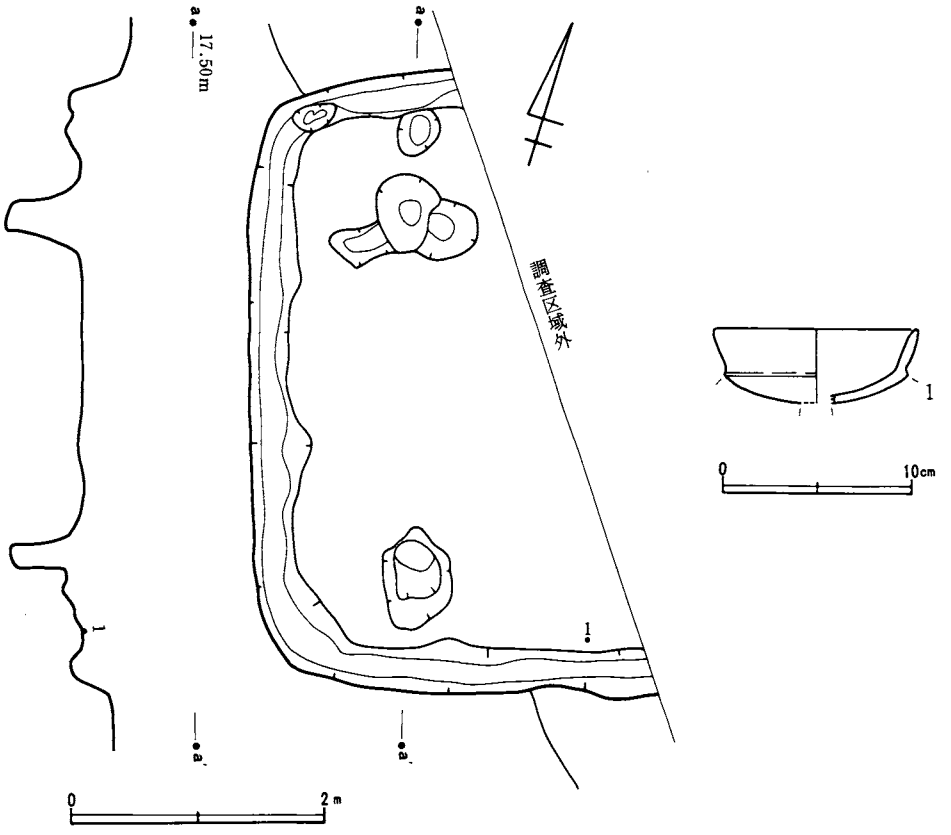
1．古墳時代

002住居跡

プラン　方形？　　**規模**　一辺4.5m　　**主軸方向**　不明

所見　住居跡東側は調査区域外となるため，全体を知ることはできない。また西側も後世の溝に切られるため遺存状態は良好とは言い難い。周溝は幅24cm，深さ10cm程で，検出した範囲内では全周する。柱穴は深さ50cm前後のものを2基検出するが，並びは整然となり，四本柱の形態をとるものと考えられる。

遺物量は少なく，南側の床面から土師器坏が1点出土している。



第60図　002住居跡及び出土遺物

002住居跡出土遺物一覧表

挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
1	坏 (土師器)	10.6 〈3.9〉	⅓	体部内外ーヨコナデ後， 内面は粗いヘラ磨キ 底部ーヘラ削り後，幅4 mm程の工具で丁寧なヘラ 磨キ		中粒砂，雲母 一少 密	明褐色	良	

2．奈良・平安時代

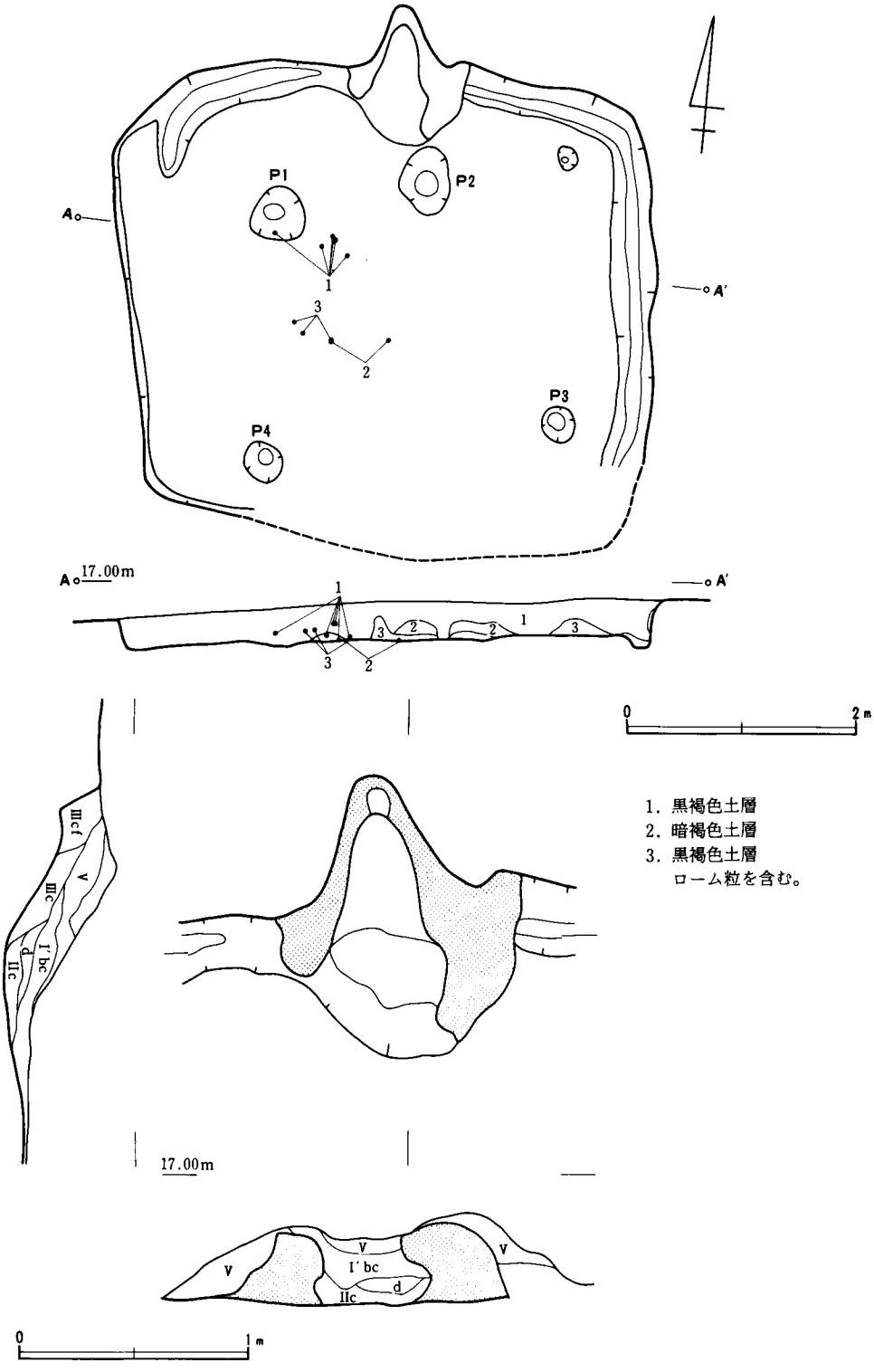
005住居跡

プラン　長方形　　**規模**　4.0×4.7m　　**主軸方向**　N－6°－W

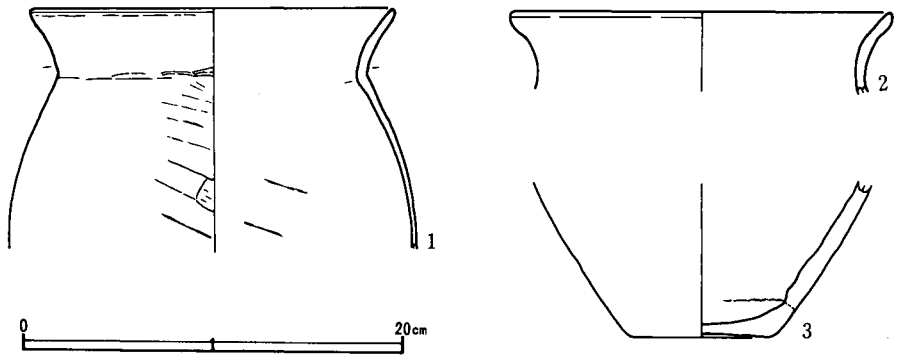
所見　住居の南壁は削平されるため，全体を知ることはできない。柱穴かと考えられるピットは4基あり，P1・P2ともに径50cm，深さ45cm，P3・P4は径30cm，深さ20～30cmとなる。周溝は北壁と東壁にそって検出され，幅18cm，深さ8cm程度である。

出土遺物で図示し得たものは，すべて甕で薄手になる1と，厚手の2・3がある。

時期　不明


P1
P2
P3
P4
A
A'
17.00m
1
2
3
0
2m
1. 黒褐色土層
2. 暗褐色土層
3. 黒褐色土層
ローム粒を含む。
17.00m
V
I' bc
IIc
d
0
1m

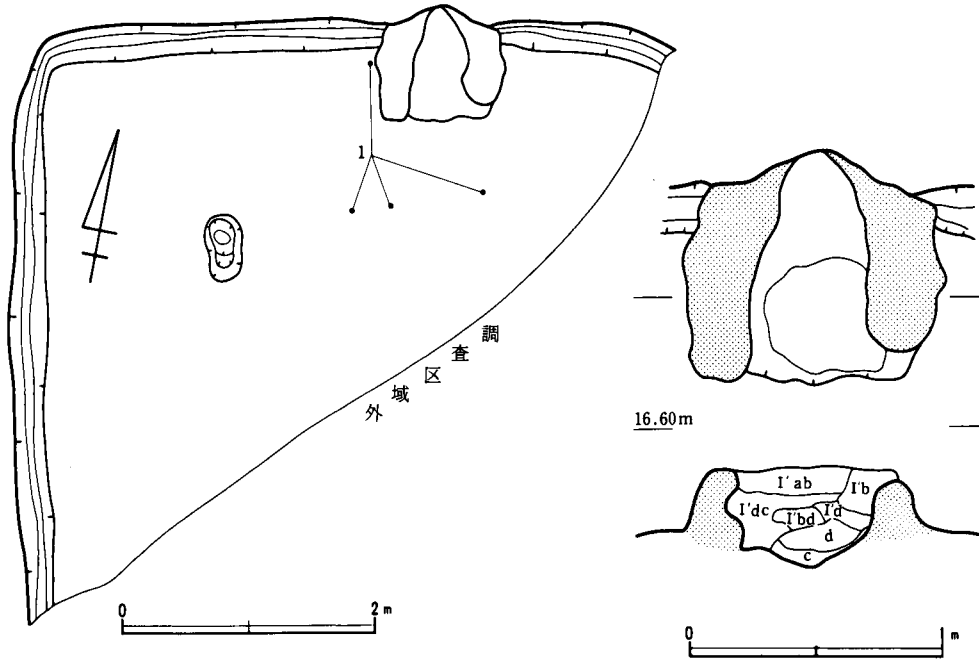
第61図　005住居跡



第62図　005住居跡出土遺物

005住居跡出土遺物一覧表

挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
1	甕 (土師器)	(19.0) 〈12.6〉	½	口縁ー内外ヨコナデ 胴部外面ーヘラ削り 内面ーヘラナデ		中粒砂ー多 雲母ー少	暗褐色	良	
2	甕 (土師器)	(20.2) 〈4.1〉 —	⅓	口縁ーヨコナデ		中粒砂・粗粒砂ー多	暗褐色	良	
3	甕 (土師器)	— 〈8.1〉 7.5	⅔	内面ーヘラナデ 外面ー剝離が著しく不明		細礫・石英・雲母ー多	暗褐色	良	



第63図　007住居跡

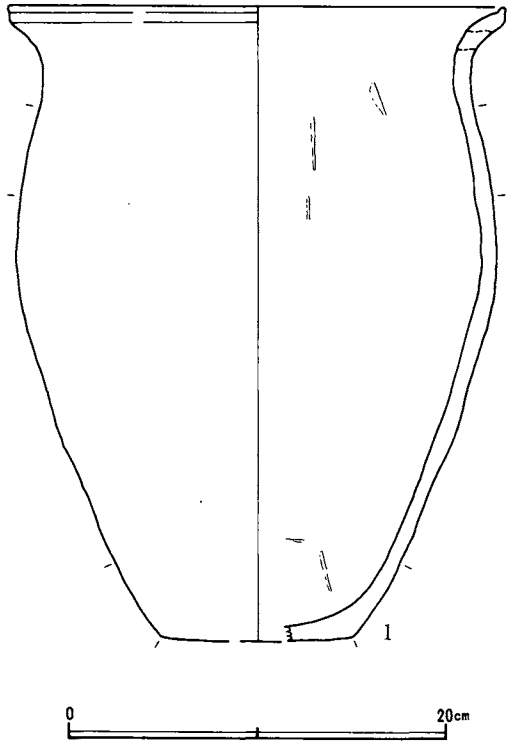
007住居跡

プラン　方形？　　**規　模**　4.5m以上×5.0m以上　　**主軸方向**　N－14°－W

所　見　側道部調査区域の中で最も南端に位置する住居跡で，住居の南東部は調査区域外となる。周溝は幅20cm，深さ10cmを測る。

遺物はわずかに甕１点である。

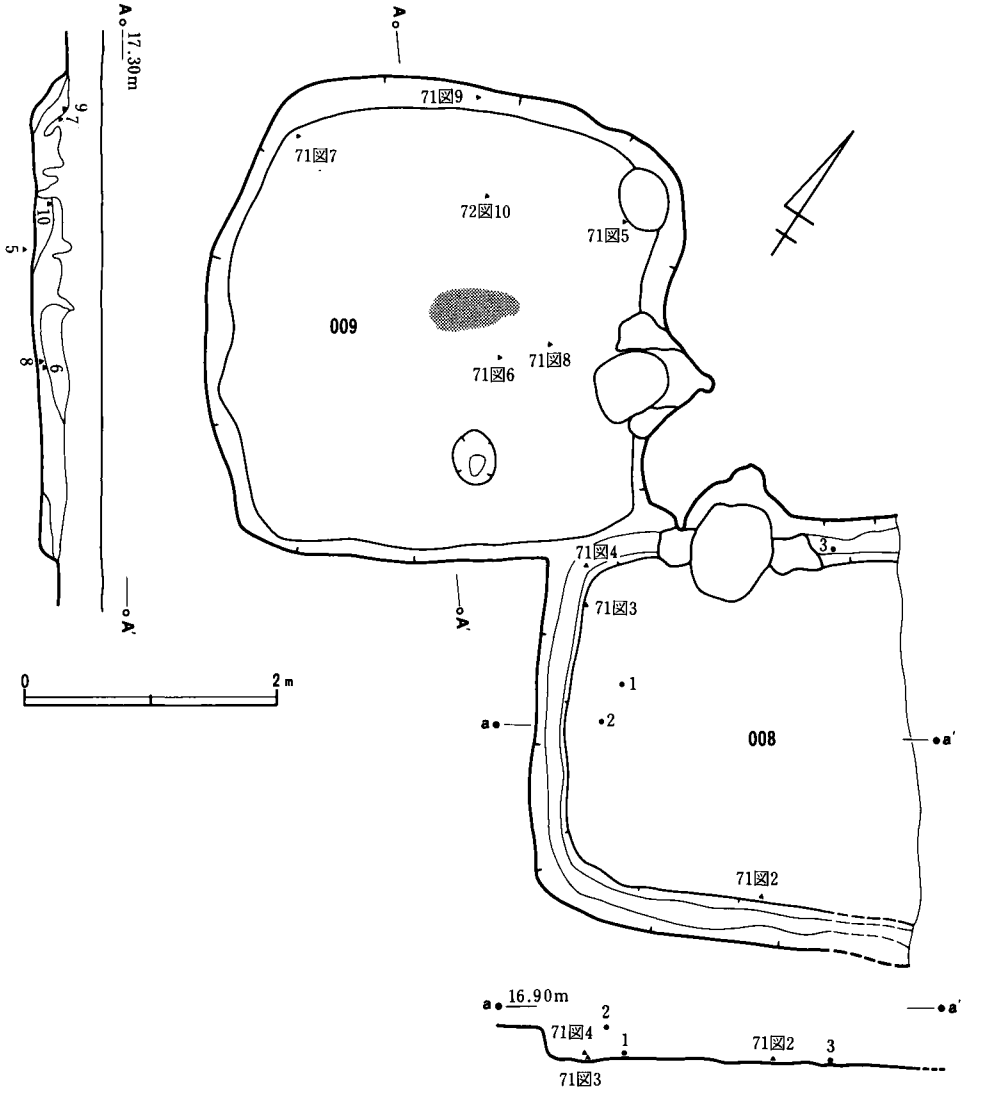
時　期　不明



第64図　007住居跡出土遺物

007住居跡出土遺物一覧表

挿図番号	器　種	法　量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎　土	色　調	焼　成	備　考
1	甕 （土師器）	(26.4) 32.8 (10.2)	⅓	口縁内外－ヨコナデ 胴部内面－ヘラナデ 外面－ナデの後，下半部は細いヘラ磨キ		粗粒砂・長石・石英－多 細礫，雲母－少	赤　褐　色	良	胴部上半にスス付着



第65図　008・009住居跡

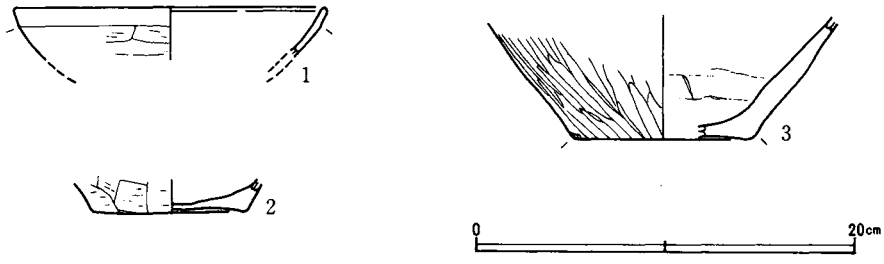
008住居跡

プラン　方形？　　**規　模**　3.3×3.0m以上　　**主軸方向**　N－24°－W

所　見　住居跡東側は削平を受けるため不明であるが，周溝は幅10cm，深さ3cm程で全周するものと思われる。現存壁高は25cmを測る。北西隅で009住居跡と切り合いをもつが，008住居跡の方が古く，009住居跡が新しい。

遺物は少量の土器と，板状鉄製品がある。2の小形甕底部以外はすべて床面直上の出土である。

時　期　花前II期



第66図　008住居跡出土遺物

008住居跡出土遺物一覧表

挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
1	坏（土師器）	(16.3) <2.7>	1/6	口縁内外一ヨコナデ 体部外面一ヘラ削り		中粒砂一少 密	暗褐色	良	
2	甕（土師器）	— <2.0> 7.9	1/2	外面一幅広いヘラ削り		中粒砂一多	暗褐色	良	小形甕の底部
3	甕（土師器）	— <6.2> (9.3)	1/3	内面一ヘラナデ 外面一細いヘラ磨キ 底部一木葉痕		中粒砂，雲母， 長石，石英一多	暗褐色	良	

009住居跡

プラン　方形　　**規模**　3.4×3.7m　　**主軸方向**　N—59°—E

所見　東壁にカマドを設けた住居跡であり，008住居跡を切って構築されている。周溝は無く，柱穴と考えられるピットは南壁側で径40cm，深さ52cmのものを1基検出した。また住居中央部には焼きしまった部分を検出したが，焼土以外には炉壁となるような部材は認められない。しかしながら出土遺物には製鉄関係の遺物も多く，検討を要する。

遺物は鉄製品が多く，71図9の鉄鋌や72図10の鋤鍬先の他に5・7のように板状となる不明鉄製品や，6のような棒状鉄製品，8のような鉄素材かと考えられるものがある。

時期　不明（整理作業の段階で本線部009住居跡出土遺物と混在させたため土器の帰属不明のものが多いが，恐らく花前IX期頃と考えられる。）

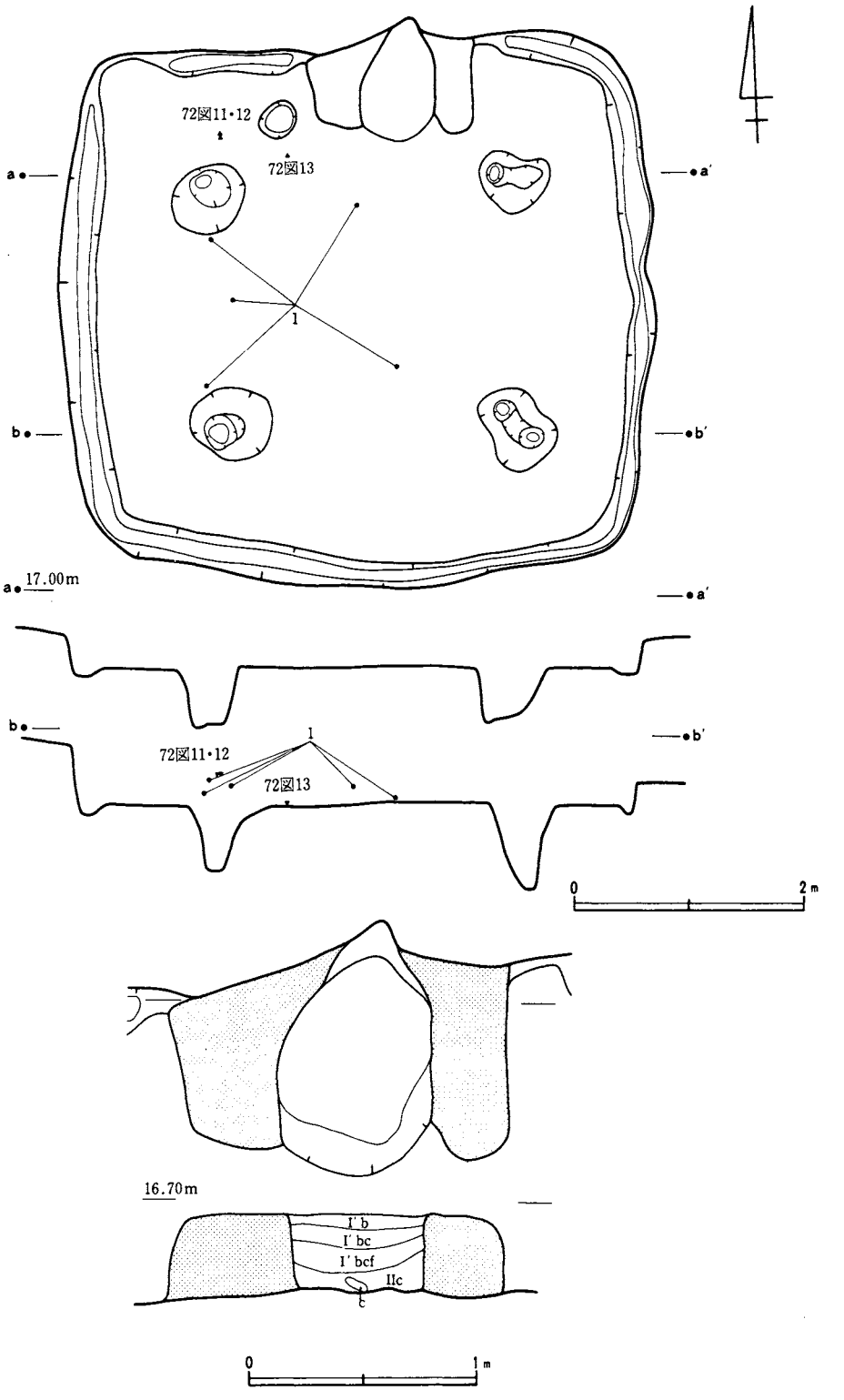
011住居跡

プラン　長方形　　**規模**　4.5×5.0m　　**主軸方向**　N—2°—E

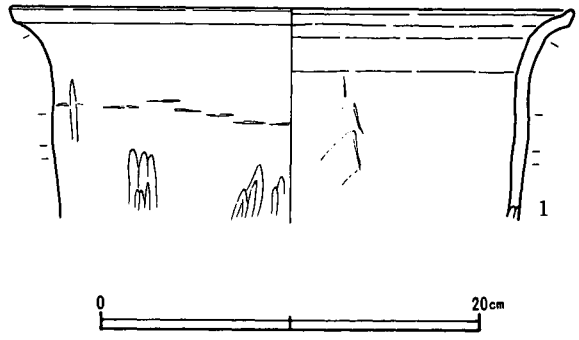
所見　柱穴は整然とした並びとなり4本柱の形態をとる住居跡である。各柱穴は径65～70cm，深さ45～60cmを測る。周溝も，幅10～22cm，深さ5～10cmで全周する。現存壁高は25～45cmで，側道部の遺構の中では，012住居跡とならび，遺存状態の比較的良好なものである。

遺物は少量の土器と鉄製品がある。図示した土器は器形から甑かと考えられるが，胴部外面には甕の調整によく用いられる細いヘラ磨きが施されており，興味深いものとなっている。鉄製品には板状となる不明製品（72図11・12）と釘かと思われるものがある。

時期　不明


72図11・12
72図13
1
a
a'
b
b'
17.00m
72図11・12
72図13
1
0
2m
16.70m
I' b
I' bc
I' bcf
IIc
0
1m

第67図　011住居跡



第68図　011住居跡出土遺物

011住居跡出土遺物一覧表

挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
1	甑？ (土師器)	(30.2) 〈11.4〉	⅓	口縁内外一ヨコナデ 胴部内面一ヘラナデ 外面一細いヘラ磨キ		中粒砂一多	暗褐色	良	

012住居跡

プラン　不整長方形　　**規模**　3.8～4.5m×4.6m　　**主軸方向**　N－20°－W

所見　4本柱とカマドに対面する柱穴を設けた住居跡である。各柱穴は径30cm前後で，深さは25～50cmとなる。周溝は全周するが西壁と南壁側で非常に幅広いものとなっている。現存壁高は20～60cmを測る。

遺物は須恵器蓋，土師器甑，甕の他に鉄製品がある。1の蓋はカエリをわずかに残すものである。2の甑は底部周縁を意識的に打ち欠いている。

3の甕はカマド内からの出土である。

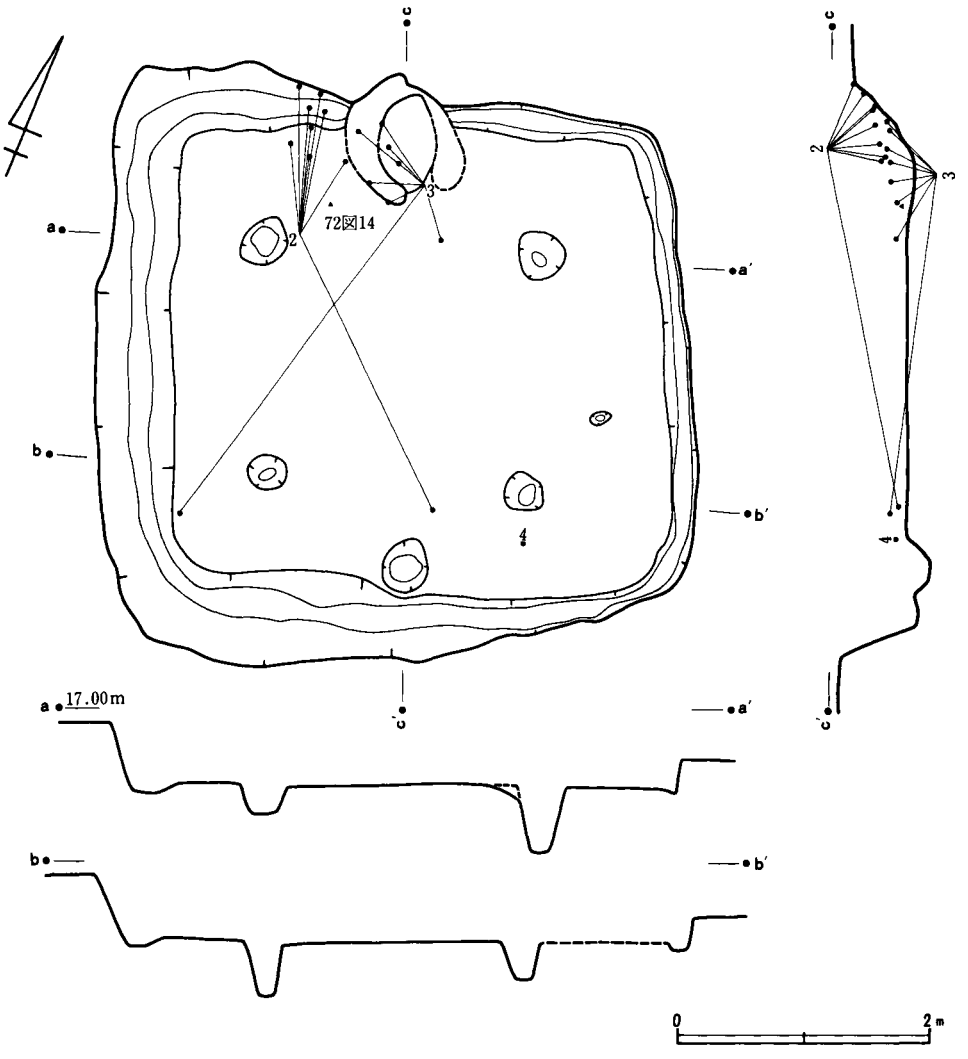
時期　花前Ⅰ期

001溝

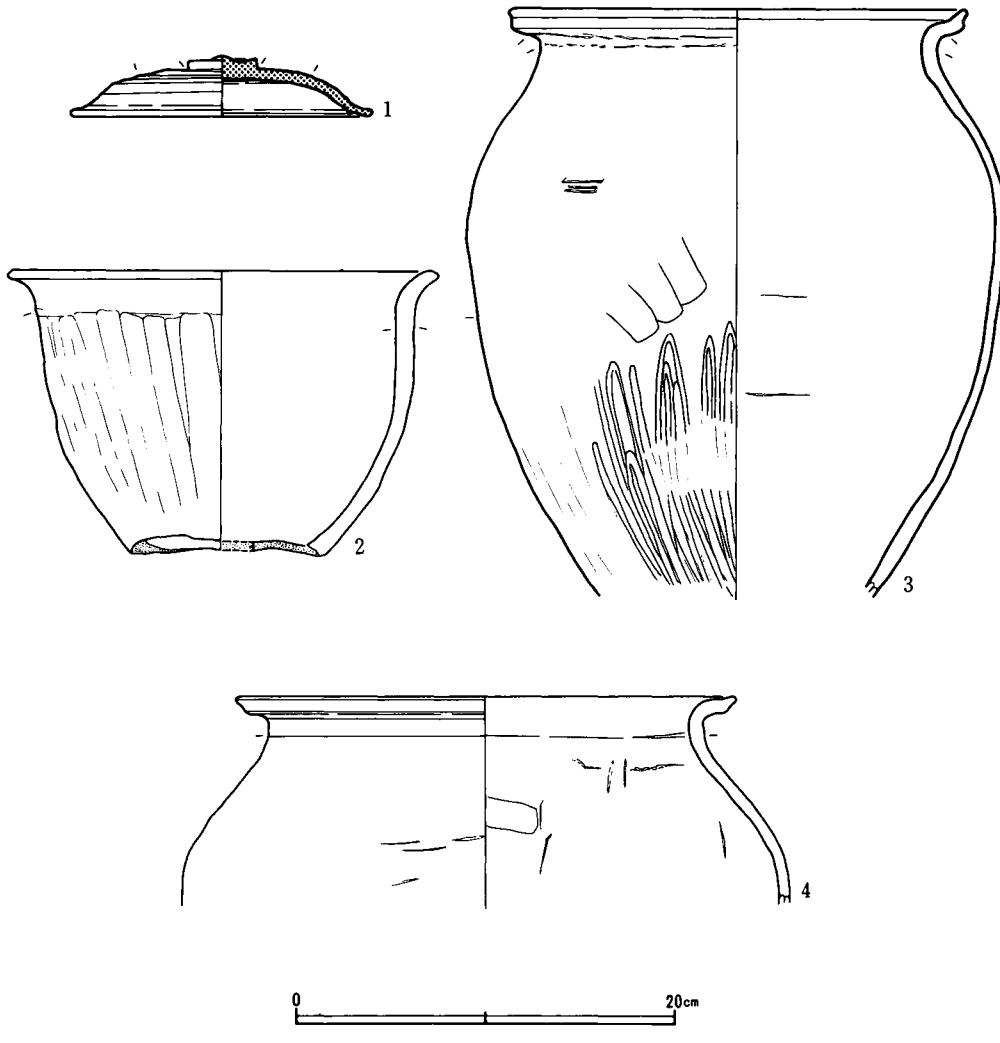
所見　調査区の東側を南北に走る溝で002住居跡を切って構築されている。この002より北側では座標北に対して約46°西に振れており，南側では西に38°の振れとなっている。検出された部分で，全長約50m，幅は2.2mとなる。断面形態は浅い皿状を呈している。遺物には鉄滓があるが，特に椀形滓が出土しており，周辺に精錬炉の存在を窺わせる。

003・004溝

所見　001溝の北側で直交する溝で，断面は二段構築となる。上面の幅は4m，下段は2m，検出された部分の全長は5.8mである。出土遺物はほとんど無く，時期・性格ともに不明である。



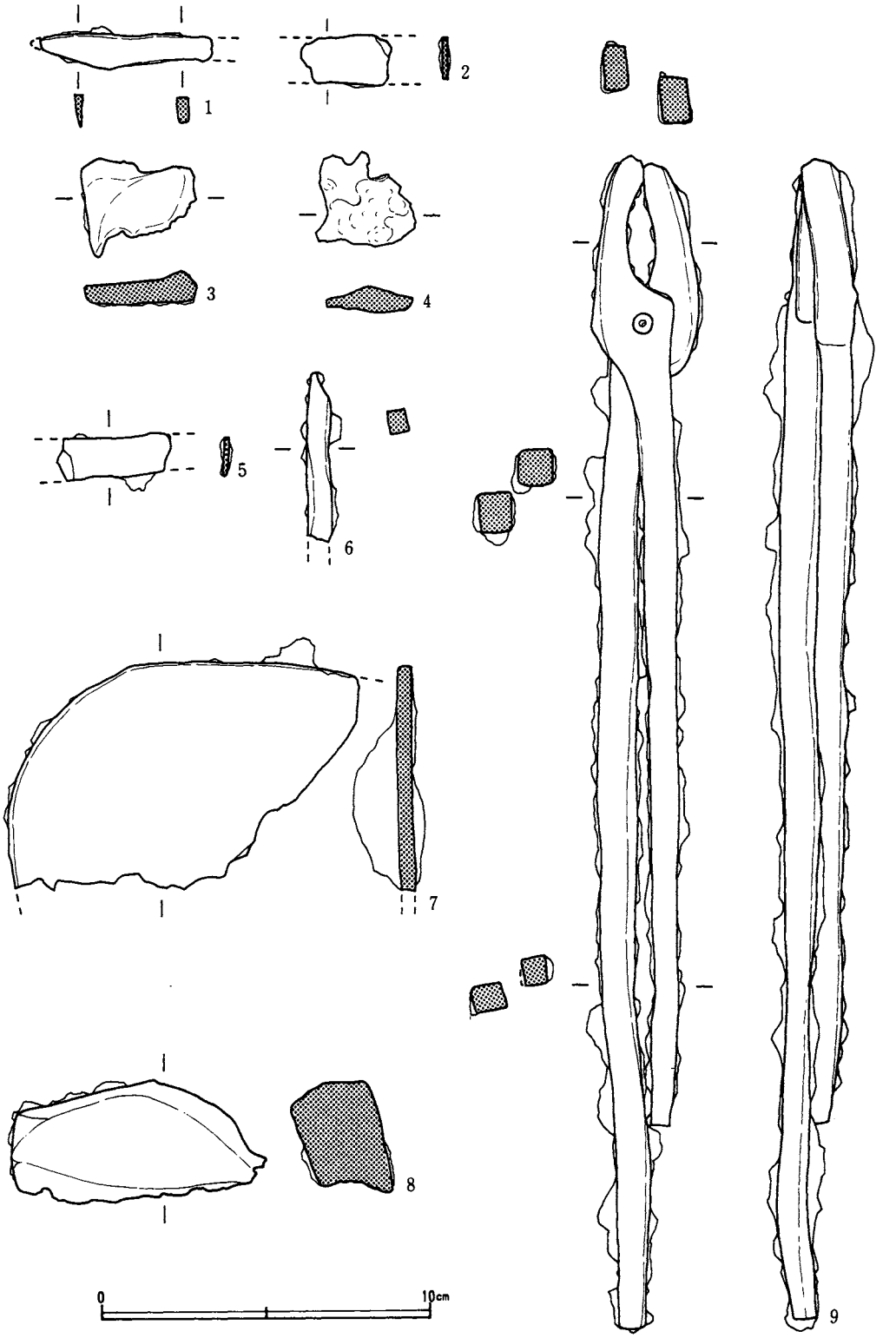
第69図　012住居跡



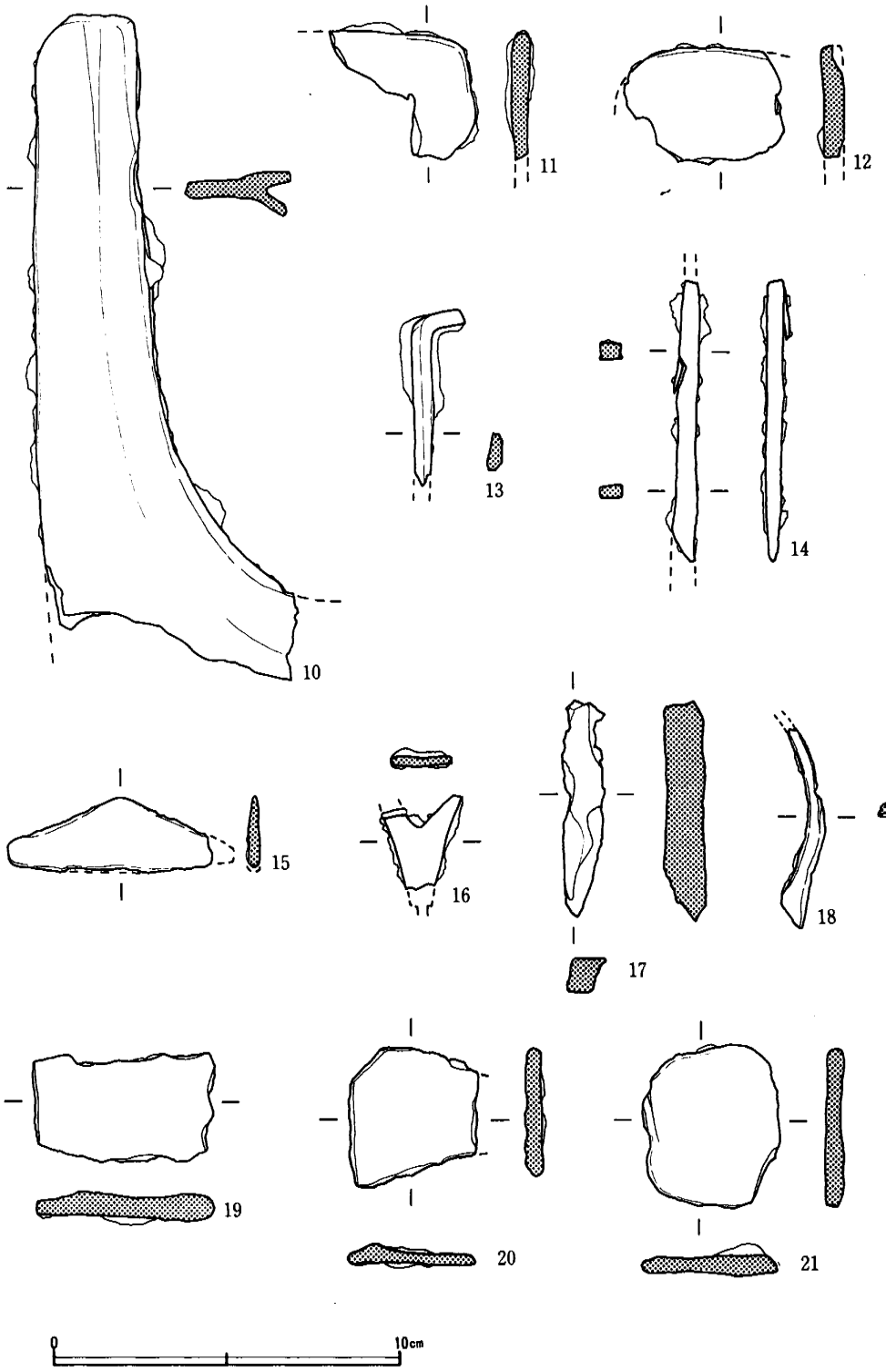
第70図　012住居跡出土遺物

012住居跡出土遺物一覧表

挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
1	蓋 (須恵器)	15.8 3.2 つまみ径 3.6	½	つまみ部―ヨコナデ 天井部―回ヘラ削り	R	中粒砂・雲母―多	黒褐色	やや甘	
2	甑 (土師器)	21.5 15.0 8.3	⅚	口縁内外―ヨコナデ 胴部内面―ヘラナデ 外面―ヘラ削り		中粒砂―少 密	乳橙色	やや甘	底部は打ち欠いて孔とする。
3	甕 (土師器)	(24.0) 〈30.5〉 胴最大径 28.6	⅓	口縁内外―ヨコナデ 胴部内面―ヘラナデ 外面―上半はヘラナデ，下半は細いヘラ磨キ		粗粒砂・雲母―多	暗褐色	良	
4	甕 (土師器)	(26.0) 〈10.8〉	¼	口縁内外―ヨコナデ 胴部内面―ヘラナデ		中粒砂・長石・石英・雲母―多	暗褐色	良	



第71図　鉄製品



第72図　鉄製品

花前II－2遺跡側道部出土鉄製品一覧表

挿図No	出土遺構	製品名	現存計測数値(cm)(g)				備考
			長	巾	厚	重量	
71図1	003	不明鉄製品	5.2	1.1	0.1～0.4	5.0	刀子か？
2	008	板状鉄製品	3.7	1.5	0.2	3.4	
3	〃	〃	3.4	3.0	0.6～0.9	21.0	
4	〃	〃	3.1	2.9	0.3～0.8	9.0	
5	009	〃	3.4	1.2	0.15	2.3	
6	〃	棒状鉄製品	5.0	0.5	0.7	11.0	
7	〃	不明鉄製品	10.5	6.7	0.3～0.4	150.0	端部は弧を描く
8	〃	鉄素材？	7.7	3.3	2.4	228.0	
9	〃	鉄鋌	35.0	—	—	345.0	図版67－7
72図	〃	鋤鍬先	19.0	—	—	210.0	図版67－6
11	011	板状鉄製品	4.3	3.7	0.6	14.7	
12	〃	〃	4.7	3.4	0.6	17.8	
13	〃	釘？	5.0	1.0	0.5	13.0	
14	012	棒状鉄製品	8.0	0.6	0.4	7.9	
15	I 5 d	燧鉄	5.9	0.8～2.0	0.3	10.5	
16	I 4 c	鉄鏃	2.6	0.9～2.6	0.3	3.0	雁股鏃
17	I 4 d	棒状鉄製品	6.0	1.1	1.0	20.9	
18	I 3 a	〃	5.7	0.3～0.7	0.2～0.4	3.1	
19	I 4 d	板状鉄製品	5.0	2.9	0.7	27.2	
20	〃	〃	3.8	3.7	0.3～0.6	23.9	
21	I 4b －97	板状鉄素材	4.6	3.9	0.4～0.5	33.6	端部は裁断面と考えられる

第3節　花前II－2遺跡本線部

本線部においては旧石器時代の遺物は僅少であり，ブロックとなるような遺物集中箇所は検出されなかった。

縄文時代では，早期の炉穴2基，前期の住居跡1軒，竪穴状遺構3基，後期の住居跡1軒，土坑2基を検出した。遺物の出土量は比較的少量であった。

奈良・平安時代では住居跡16軒，製錬炉6基，精錬炉3基，土坑12基を検出したが，製錬炉などの主な製鉄関連遺構は南側の斜面部に集中して検出された。遺物では土器はもちろんのこと，鉄器，鉄滓，鋳型，羽口など，製鉄関連遺物が多量に出土した。

江戸時代では，炭窯9基と陶磁器を検出したが，年代的には，報告済みとなっている花前II－1遺跡で検出された江戸時代の遺構・遺物と同時期である。

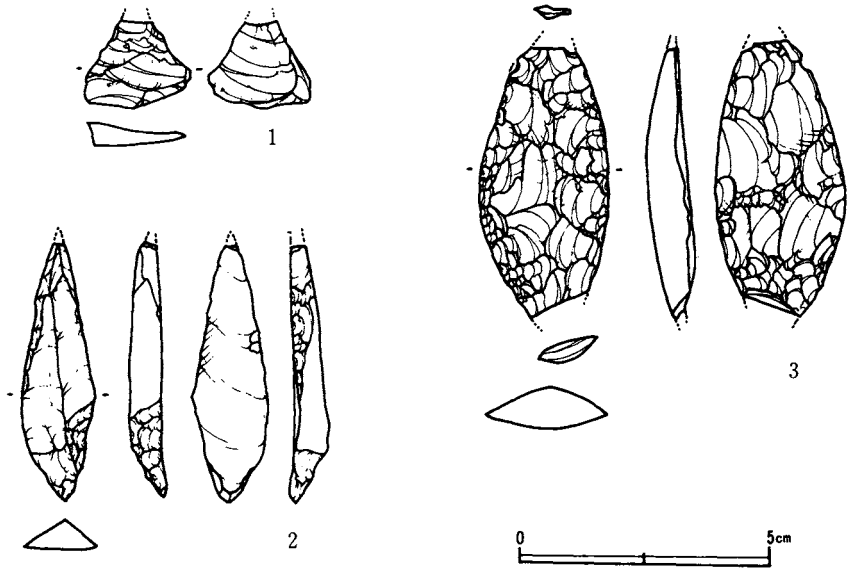
1．旧石器時代

実測し得た旧石器時代の遺物は僅か3点である。石器組成はナイフ形石器，木葉形尖頭器，剝片各1点ずつとなっている。

1は横長剝片で，花前II－1側道部I4b－21グリッドの第VII層上部（第2黒色帯）より出土した。打面が弾けとんでおり，先端はステップ・フラクチュアを呈する。長さ1.7cm，幅2.1cm，厚さ0.6cm測る。石材は爽雑物を多量に含有する黒曜石である。

2はナイフ形石器である。表面採集品のため層位的位置づけは不明である。縦長剝片を素材として二側縁に刃つぶし加工が施されている。長さ5.1cm，幅1.5cm，厚さ0.7cm。石材は安山岩である。

3は両面加工の木葉形尖頭器である。これも表採品のため層位的位置づけはできない。表裏に平坦な剝離が施され，断面形はカマボコ形を呈する。上下両端は欠損している。現存長5.3cm，幅2.6cm，厚さ0.9cmである。石材は珪質頁岩。



第73図　旧石器時代遺物

2．縄文時代

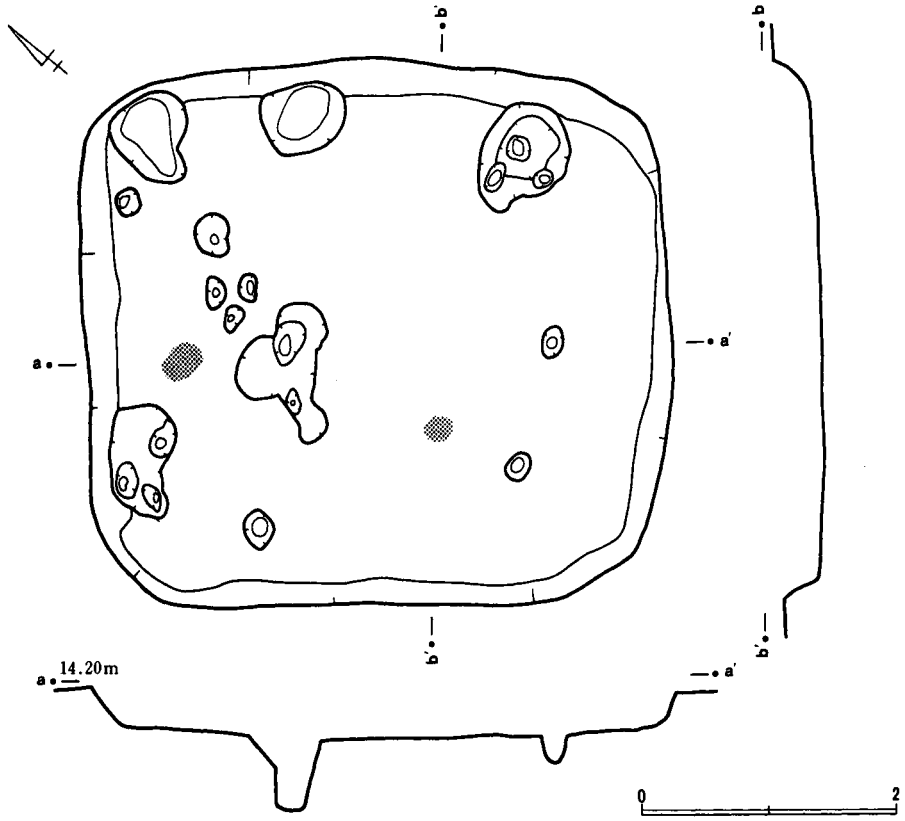
004住居跡

位　置　D 4 —10・15グリッド

形　状　長軸4.6m，短軸4.2m，壁高30cmを測る隅丸方形のプランを呈する。炉は南北２か所に所在し，いずれも長時間火を受けていない。柱穴は東側の壁に沿って大型のものが配列されており，全体として径の小さなものが目立つ。南東の隅は時期不明の土坑によって切られている。

遺　物　総数152点を数える。早期の撚糸文土器から前期の黒浜式・諸磯式土器を混入するが，諸磯ａ式土器が主体を占る。

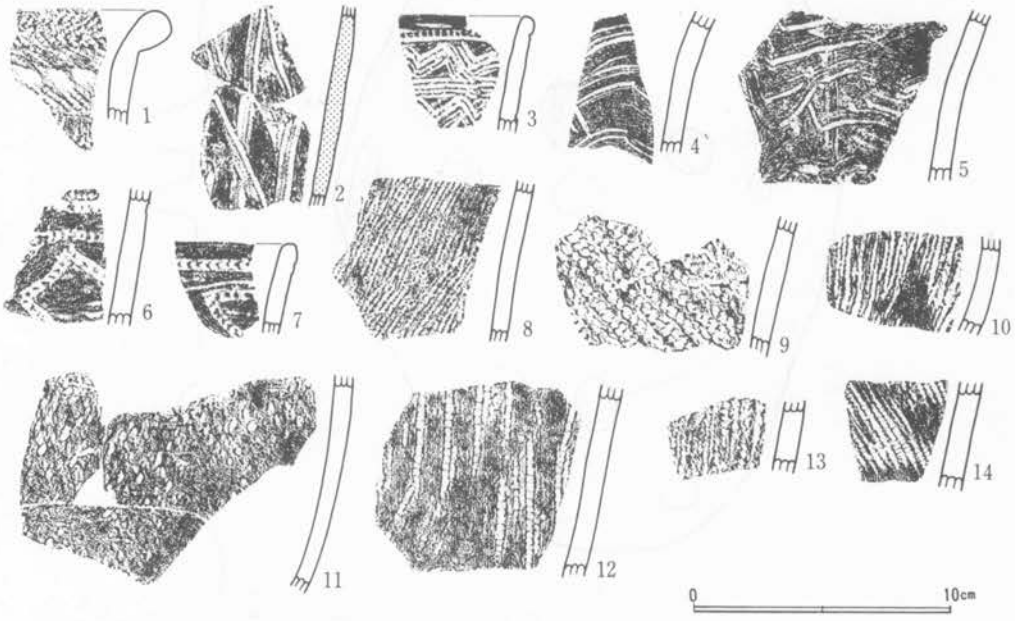
時　期　諸磯期に比定される。



第74図　004住居跡

004住居跡出土土器

1は早期の撚糸文土器であり口唇を肥厚させ，口唇下には指頭圧痕を施している。2は胎土に繊維を含む黒浜式土器であり，半裁竹管による平行沈線を格子状に施している。3～5は波状の平行沈線を施すもので，3は櫛歯状工具（半裁竹管の先割状の工具など），4・5は半裁竹管を用いている。5は特に肋骨文のモチーフに近い縦の区割の沈線を施している。6・7は半裁竹管による連続爪形文を施している。8～12は縄文を施すものを一括した。3～12は諸磯式土器に比定される。



第75図　004住居跡出土土器

034住居跡

位　置　D4—10グリッド

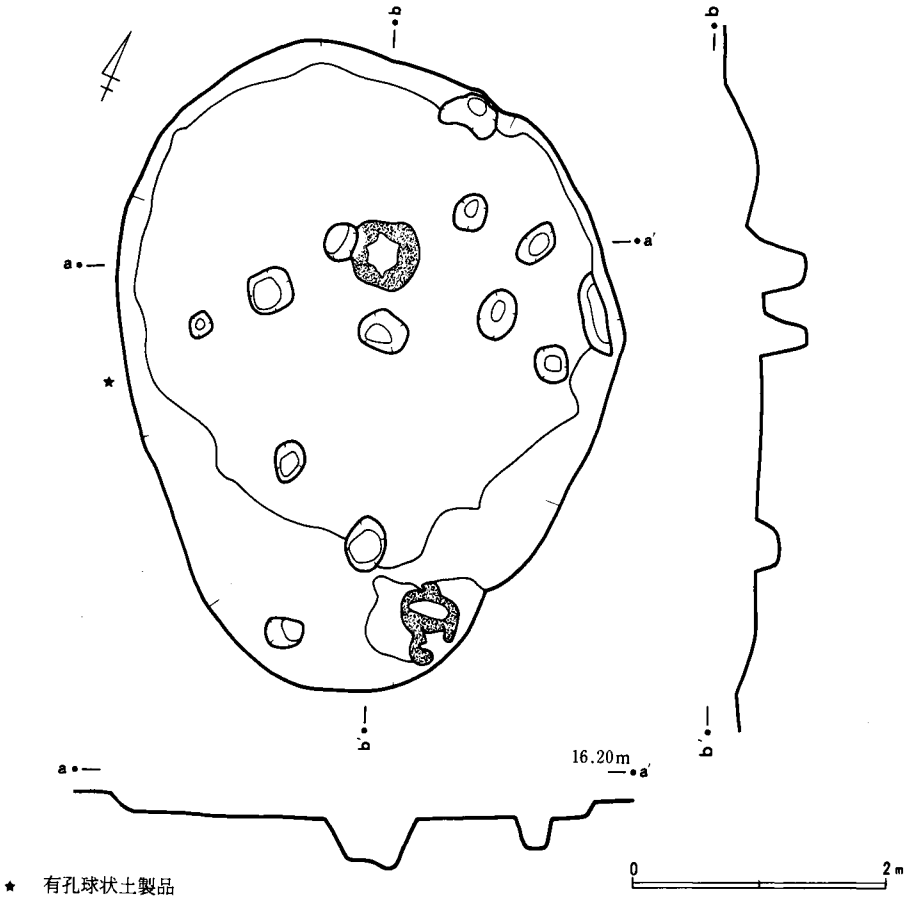
形　状　長軸5.1m，短軸4m，壁高15cmを測るやや不整形な楕円形プランを呈する。炉は住居中央と南端の2か所にあり，いずれも掘り込みが深く周囲がよく焼けている。

遺　物　総数76点を数える。ほとんどが後期の堀之内式土器であるが，床面直上からはほとんど検出されていない。また，住居外の西側近接地からは有孔球状土製品が検出されている。

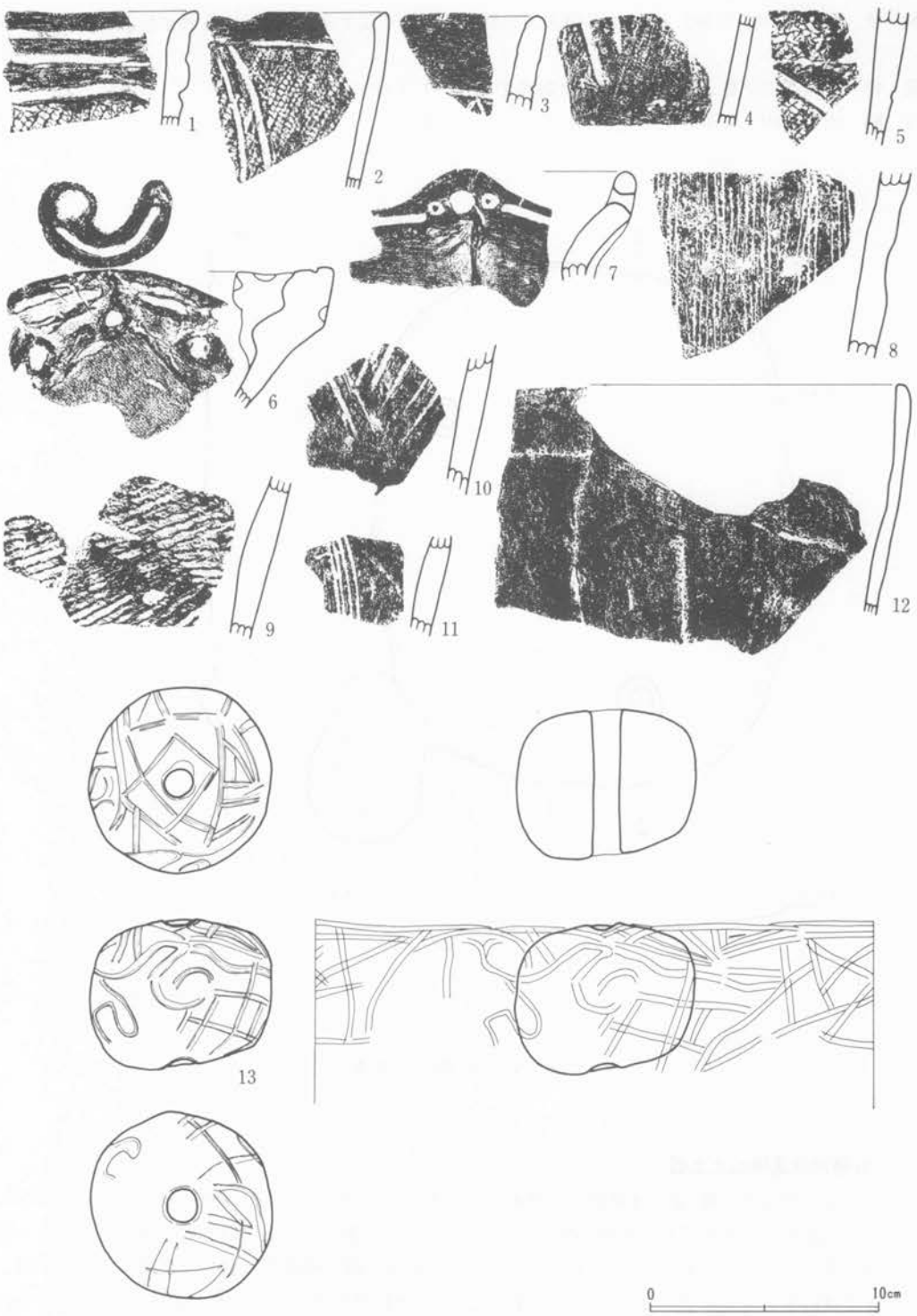
時　期　堀之内期に比定される。

034住居跡出土遺物

13は有孔球状土製品であり，全国的にも類例と少ないものである。直径約8cm，高さ6cm，4cm，孔径1.3cmを測り全面に半裁竹管による平行沈線を廻らせている。図中の底面と考えられる部分については磨耗が著しく，その用途に基づく痕跡と考えられるがその性格は不明である。



第76図　034住居跡



第77図　034住居跡出土遺物

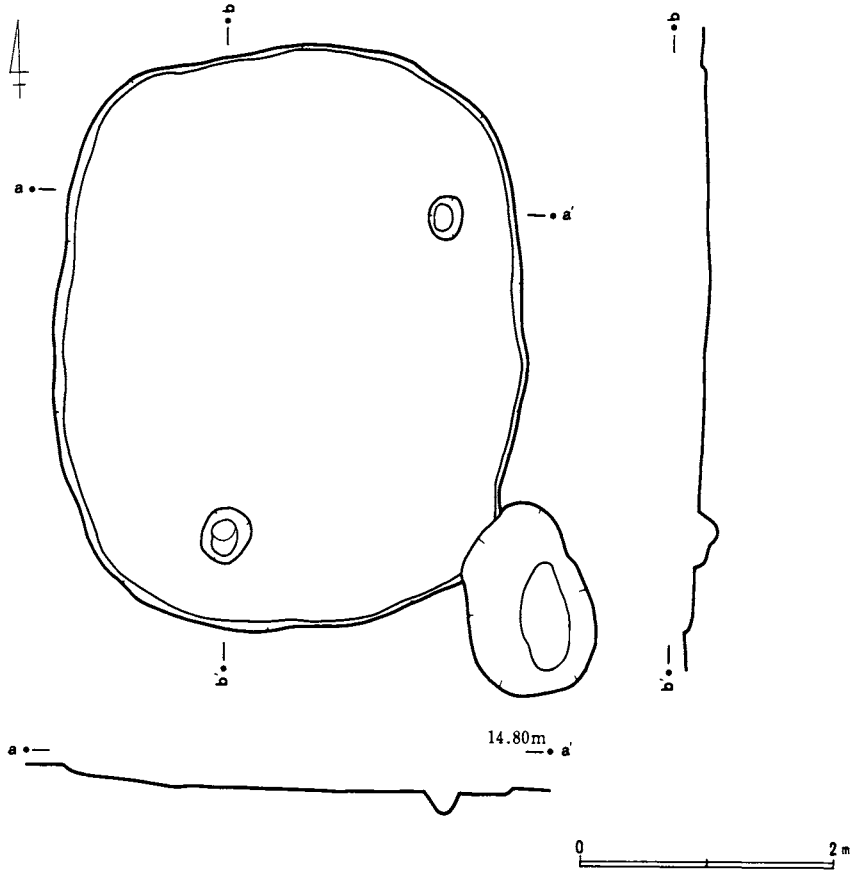
001竪穴状遺構

位　置　F 3 —15・25グリッド

形　状　長軸4.7m，短軸3.7mを測る隅丸方形状のプランを呈する。炉は検出されず柱穴も不明確である。

遺　物　総数72点を数える。散布状況は散漫であり，若干ながら西半分に集中している。

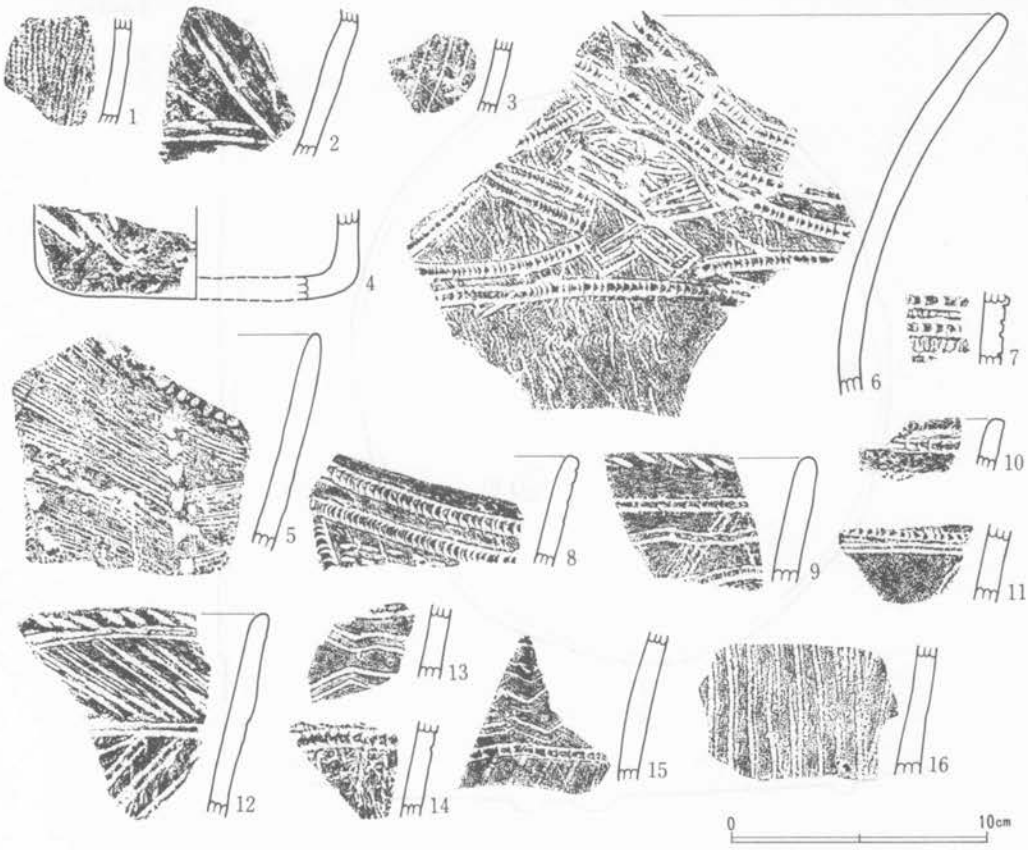
時　期　出土遺物より浮島期に比定されるものと思われる。



第78図　001竪穴状遺構

001竪穴状遺構出土土器

1は早期の撚糸文土器。2～4は胎土に繊維を含む黒浜式土器である。2は棒状工具による平行沈線，3はヘラ状工具による格子状の沈線を施している。5は波状口縁を呈し，口唇部には棒状工具による縦の圧痕を施している。文様は連続した竹管刺突を行ない，その間を櫛歯状工具による斜めの沈線で満たし肋骨文状のモチーフを描いている。6～11，14，15は連続爪形文を施し，6・9・14・15は地文に撚糸文を施している。12は半割竹管による平行沈線を文様の主としており，施文後，口唇部同様に棒状工具による圧痕を施している。5～16は胎土に繊維を含まない浮島・諸磯式土器である。



第79図　001竪穴状遺構出土土器

002竪穴状遺構

位　置　Ｆ４—10・15グリッド。

形　状　長軸4.6m，短軸4.2mを測る円形に近いプランを呈する。炉は検出されず柱穴も浅く，Ｐ１が唯一34cmの深さを測る。

遺　物　総数は47点を数える。散布状況は散漫であるが，一応東西方向にその広がりが見られる。

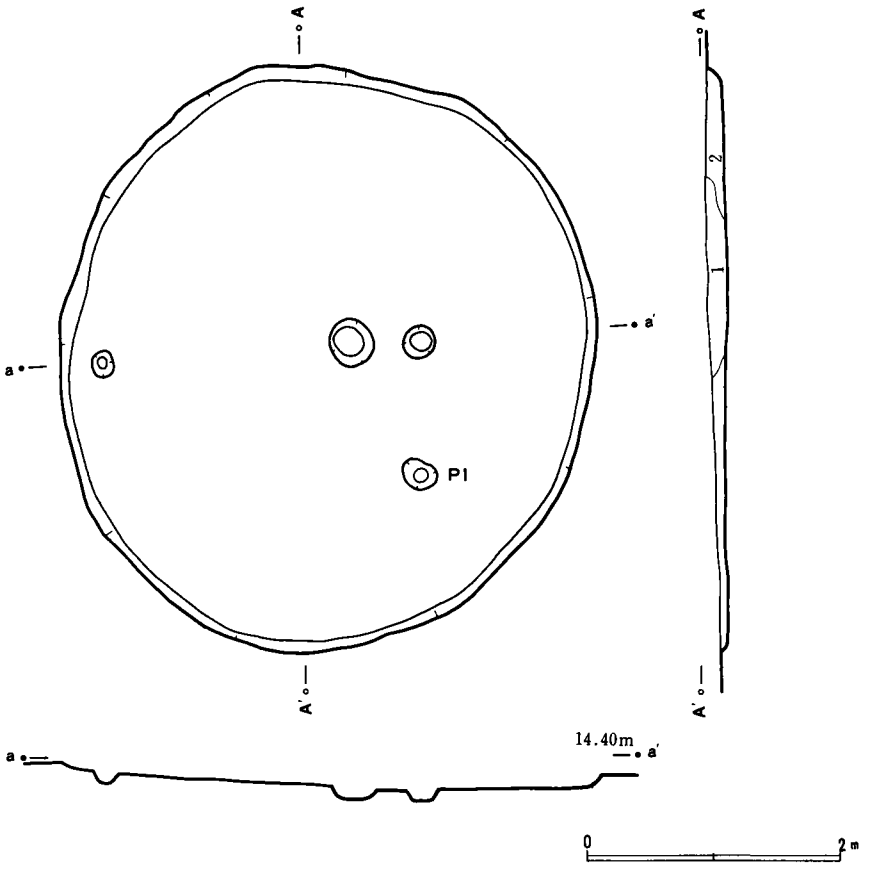
時　期　遺物の比率から考えると諸磯期と思われるが，不確定である。

002竪穴状遺構

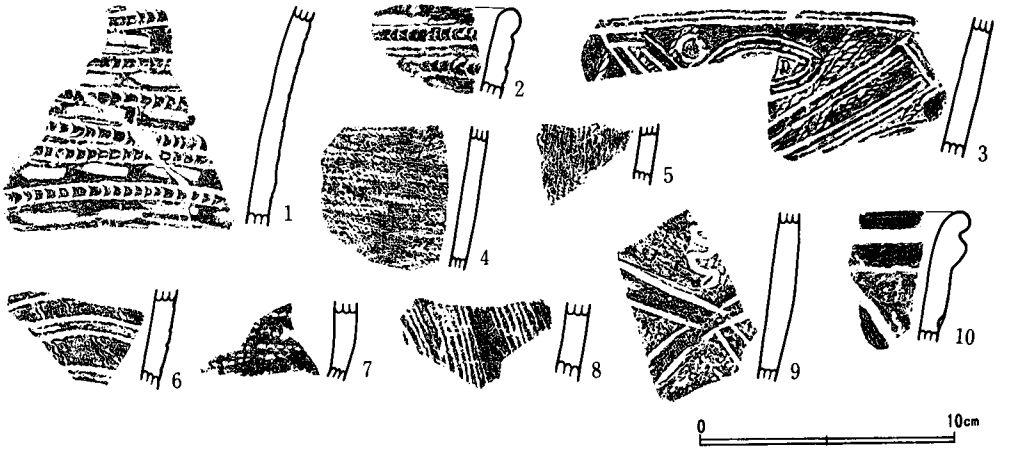
土　層

１．黒褐色土層　微細炭化粒，ローム粒を含む。

２．暗褐色土層　ローム粒を混入。



第80図　002竪穴状遺構



第81図　002竪穴状遺構出土土器

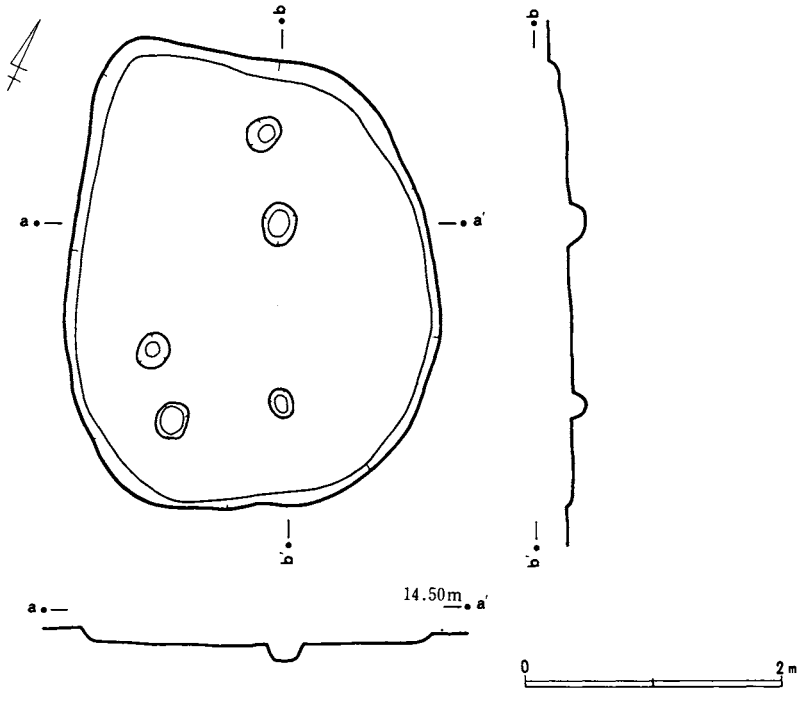
010竪穴状遺構

位　置　Ｆ４－13グリッド

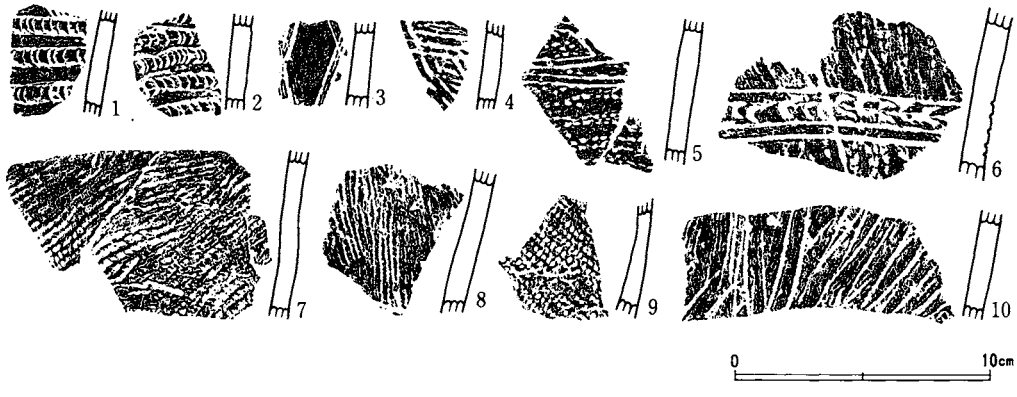
形　状　長軸3.5m，短軸３m，壁高10cmを測る不整形な楕円形プランを呈する。柱穴は極めて浅く，全体的に不明瞭である。

遺　物　総数51点を数える。出土状況は散漫であり，前期の諸磯ｂ式を主体としている。

時　期　諸磯期と思われるが不確実である。



第82図　010竪穴状遺構



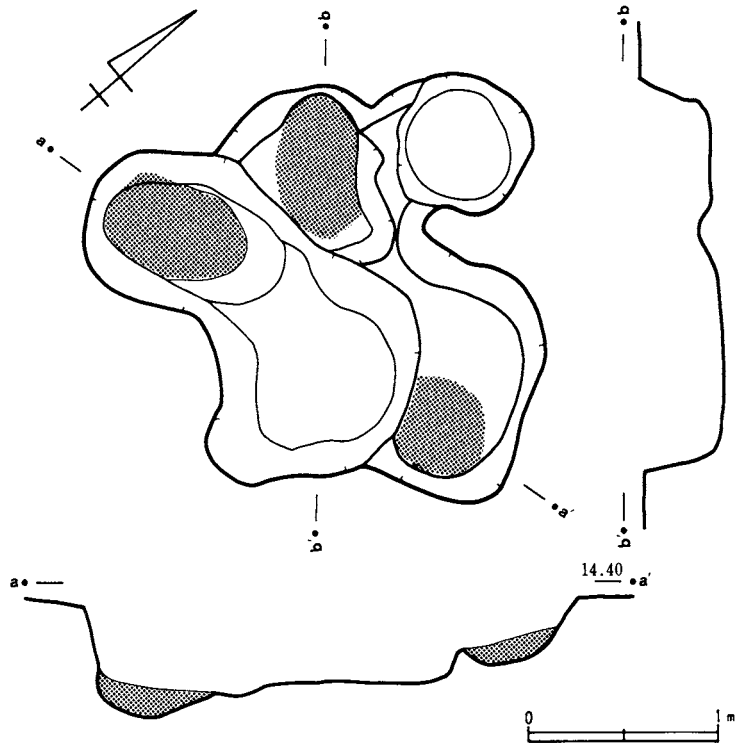
第83図　010竪穴状遺構出土土器

008炉穴

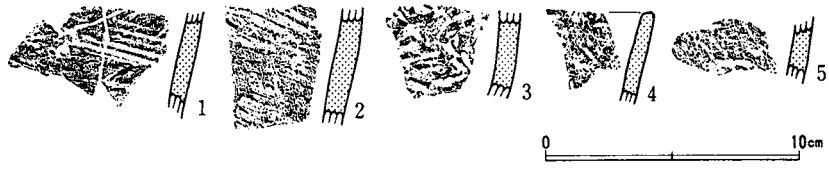
位　置　F５－14グリッド

形　状　不整形なプランを呈する。焼土は３か所に見られ，いずれも厚く推積している。一番北端に位置するピットは後世の攪乱のの可能性がある。３つの焼土の新旧関係については西南に位置するものが一番新しく，他の２か所の焼土面を切り込んでいる。残りの２か所については不確定である。

遺　物　総数８点を数える。３点は無文の後期の土器である。１・２は条痕文が施されており，２は裏面にも極めて弱い条痕が認められる。３は縄文らしい施文があるが不明瞭である。４・５は無文で，４は口縁部破片である。



第84図　008炉穴



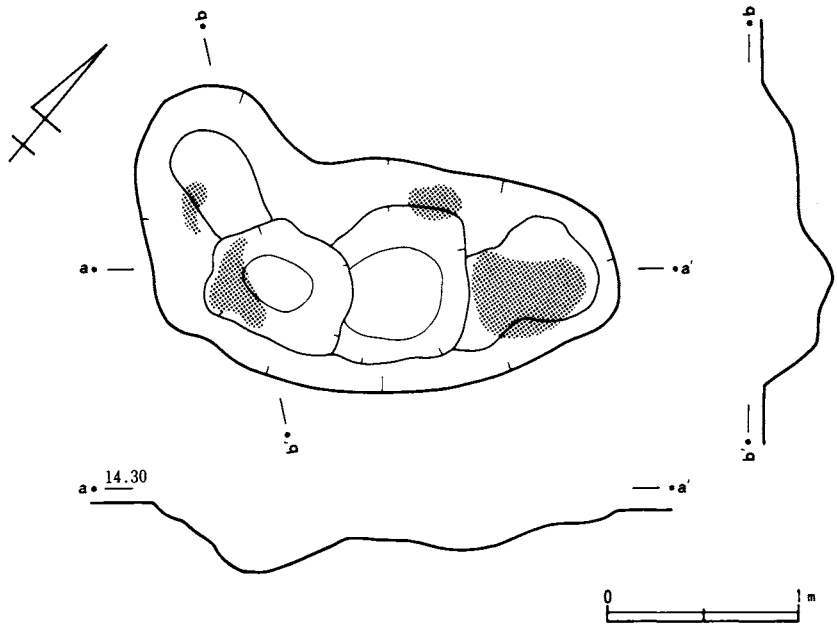
第85図　008炉穴出土土器

024炉穴

位　置　G５－12グリッド

形　状　不整な楕円形プランを呈する。焼土は大きく分けて東西の２か所に見られ，セクションでは明確な新旧関係を促えることができなかったが，東側の焼土の方が段階的に新しいものと考えられる。

遺　物　検出されていない。



第86図　024炉穴

027土坑

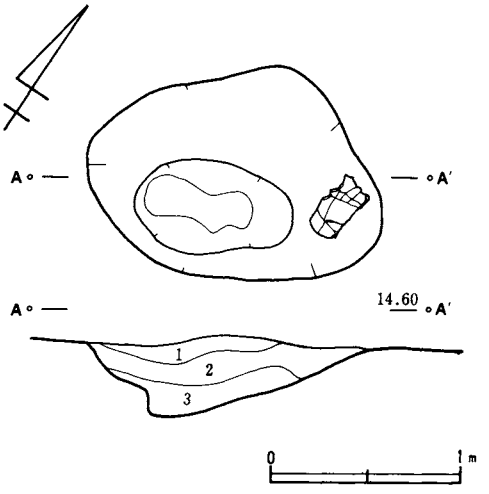
位　置　G４－21グリッド

形　状　長軸1.6m，短軸1.2m，深さ35cmを測る不整な楕円形プランを呈する。明確な掘り込みはなく，全体的に緩やかに落ち込んでいる。検出時は表面を焼土が覆っていた。土器は裏面を向けた状態で検出された。

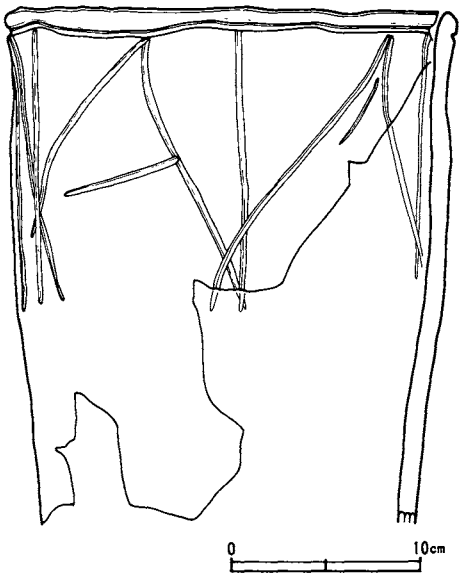
遺　物　復原可能な後期の堀之内式土器一個体も含め52点を検出した。

027土坑土層

1．焼　土
2．黒褐色土層
3．暗褐色土層



第87図　027土坑（1/40）

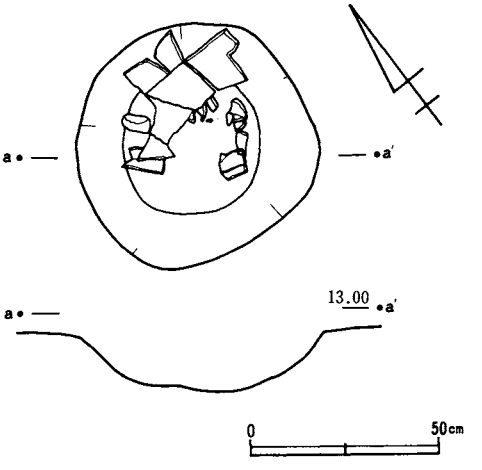


第88図　027土坑出土土器

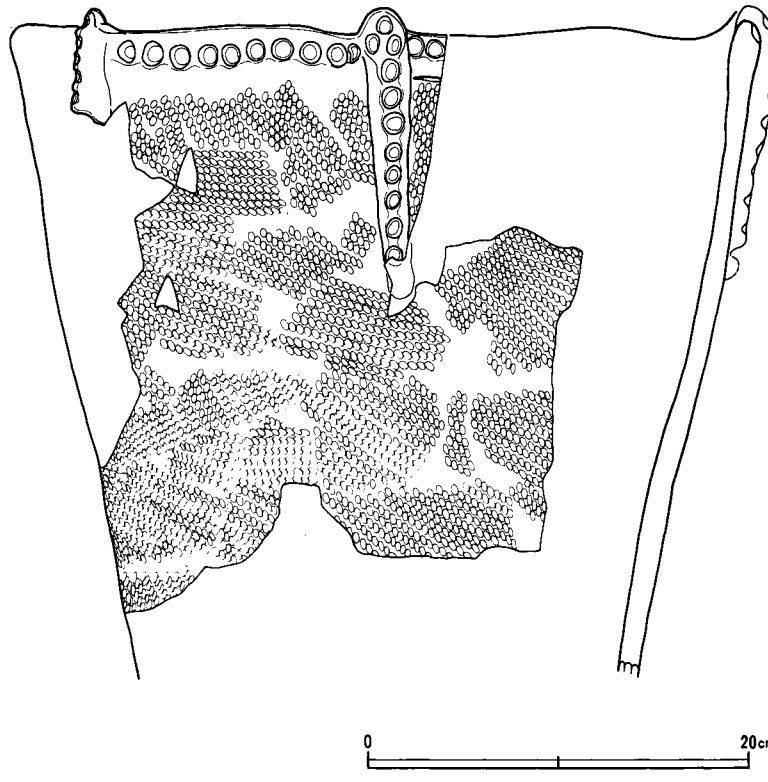
028土坑

位　置　G５—08グリッド

形　状　長径65cm，深さ15cmを測る円形プランを呈する。掘り込みは浅く，027土坑同様に緩やかである。遺構面には後期の掘之内式土器が検出された。



第89図　028土坑（1/20）



第90図　028土坑出土土器

その他の遺物

グリッド出土の土器

各グリッドより出土した土器は早期から後期にまで及んでいるが，その主体は前期及び後期であり，早期・中期については極めて少量であった。以下時期別に各群を分けて記した。

第1群土器　早期の土器

第2群土器　前期の土器

第3群土器　中期の土器

第4群土器　後期の土器

第1群土器

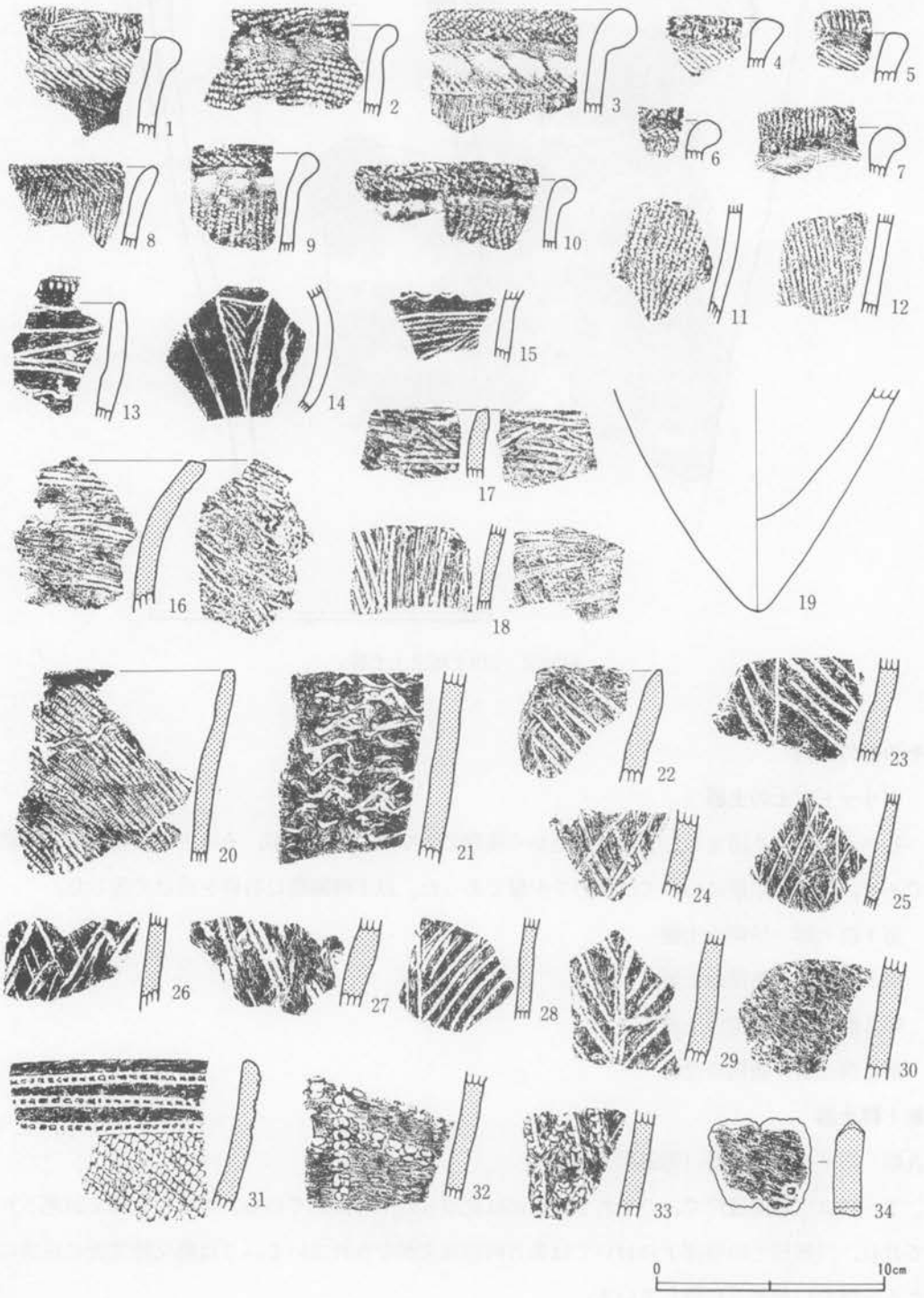
A類　撚糸文系の土器（第91図1～12）

1～10は口縁部破片で，いずれも口唇部は肥厚し若干外反している。地文には縄文が施されており，口唇部と口唇部下においては異方向の施文がなされている。3は縄文施文後に指頭による圧痕を口唇部下に施している。

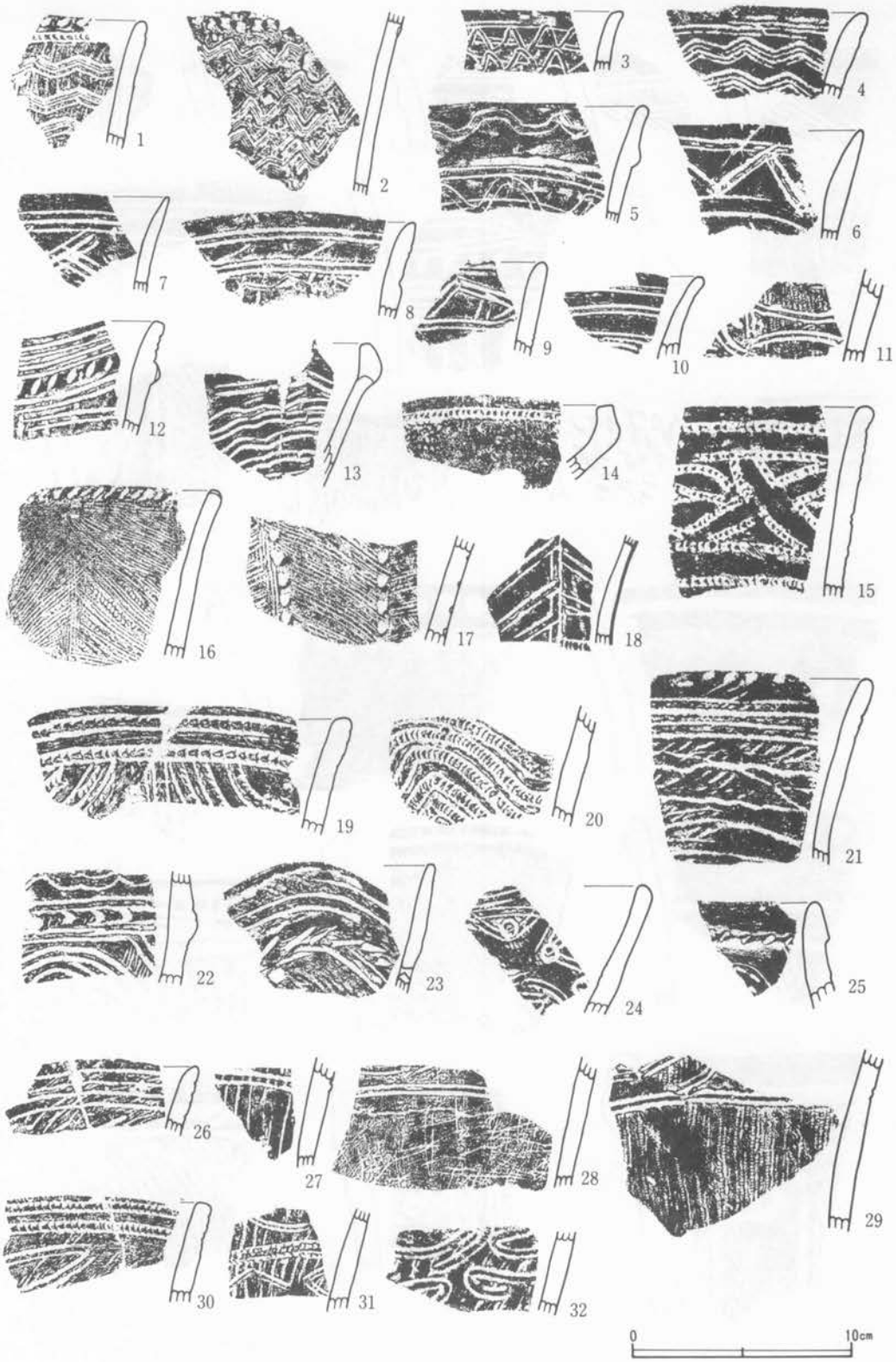
井草式に比定される。

B類　沈線文土器（13～15）

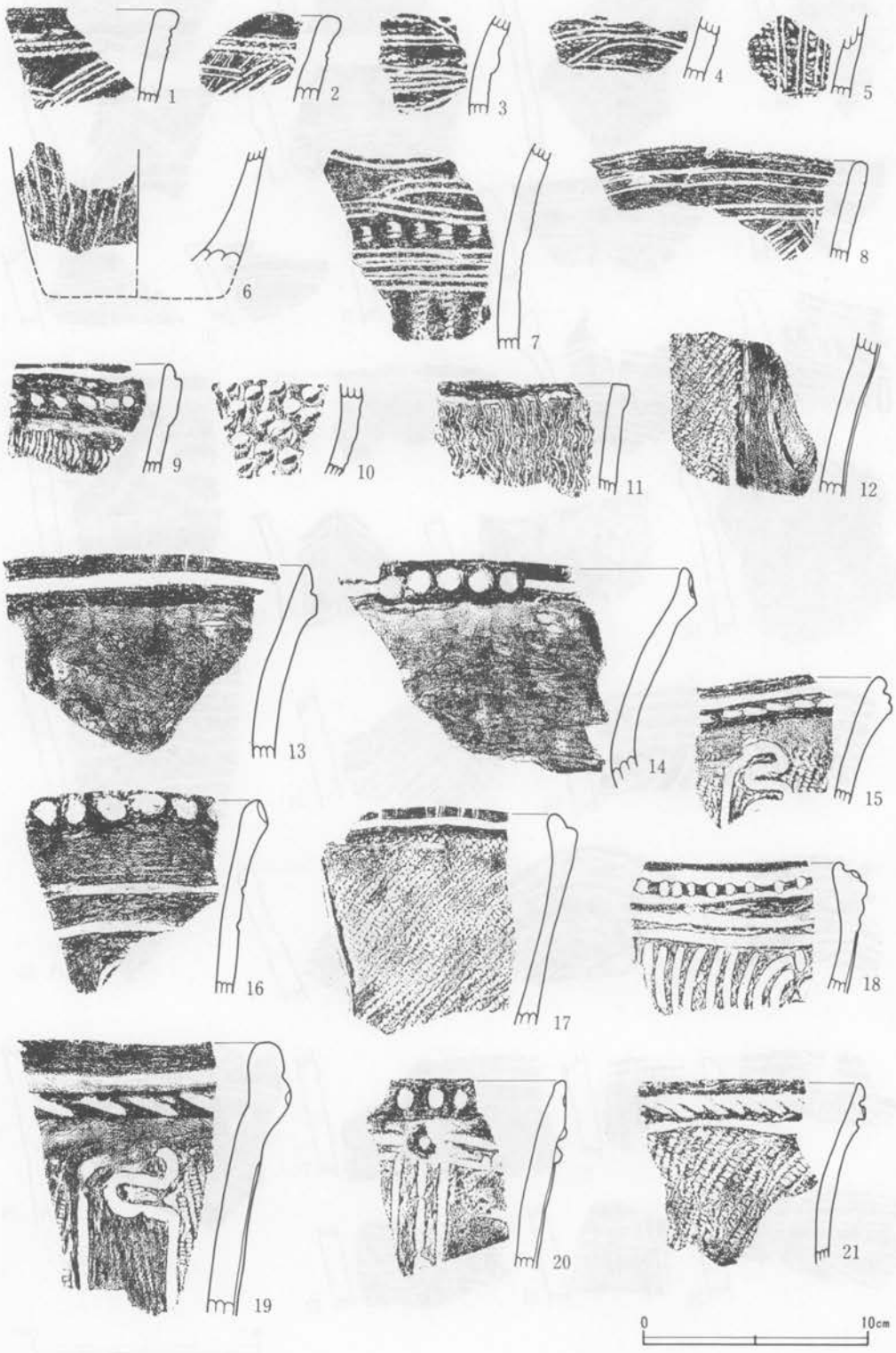
13は口縁部破片で口唇上には棒状工具による直角方向の圧痕が施されている。文様は13～15



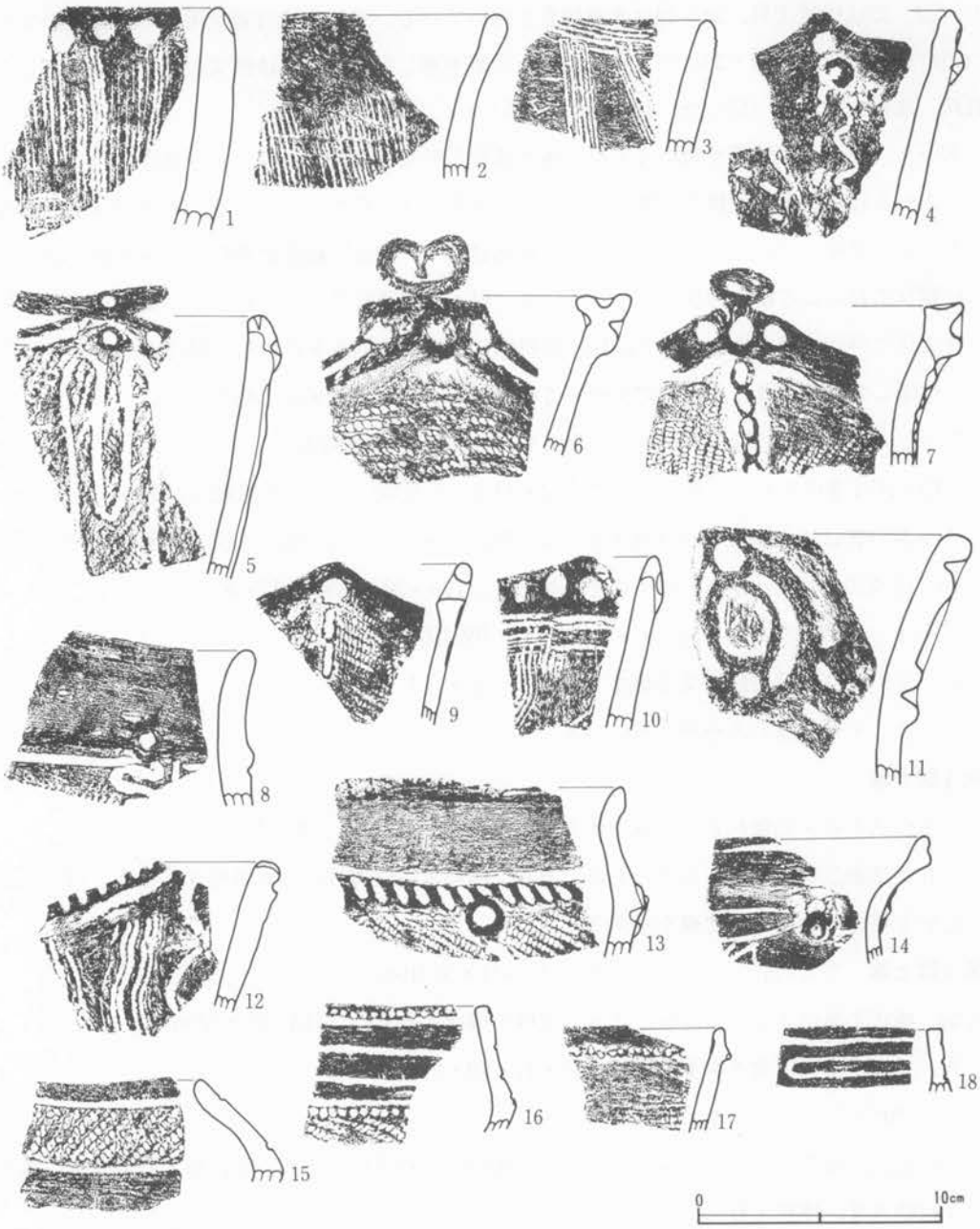
第91図　第１群Ａ～Ｃ類・第２群Ａ類土器



第92図　第２群Ｂ・Ｃ類土器



第93図　第２群Ｃ類・第３群，第４群Ａ類土器



第94図　第４群Ｂ～Ｅ類土器

とも沈線とアナダラ属の貝殻腹縁文によって構成されている。田戸式に比定される。

Ｃ類　条痕文土器（16～18）

すべて表裏に貝殻条痕文を施している。

第２群土器

Ａ類　黒浜式土器を一括した。（第91図20～34）

１は口唇部を平坦に整形し，胴部には縄文を施している。22～29は沈線を主として施してお

り，22～25は棒状工具，26～29は半裁竹管を用いている。31は半裁竹管を用いた連続爪形文を口辺に施しており，32・33は同工具を用いた圧痕を施している。34は無文の土器片錘である。

B類　諸磯式土器を一括した。(第92図1～25)

B－1　細い半裁竹管を用いて平行沈線や連続爪形文等を施すもの（1～18)

1～5は波状平行沈線文を施しており，2は櫛歯状工具を用いている。6～13は平行沈線を主として施している。12・13は波状口縁部破片で，12は口縁部に平行して粘土紐を貼り付け棒状工具による縦の押圧を行なっている。14・15は連続爪形文を施している。16～18は肋骨文状に平行沈線を施しており，16は口唇部に縦方向の刻みを有する。17は中心となる縦軸に付随して竹管工具による刺突を施している。いずれも諸磯a式に相当する。

B－2　幅の広い竹管工具を用いて施文を行なうもの（19～24)

19・20は連続爪形文を施している。22・23は平行沈線に沿って微隆起帯があり，その上から半裁竹管による刺突やヘラ状工具による刻みを施している。24は円形竹管刺突文を有する。

C類　浮島式土器に比定されるものを一括した。(26～32・第93図1～8)

C－1　地文に撚糸文を施すもの（26～32・第93図1・2・6)

C－2　地文に貝殻腹縁文を施すもの（3～5・7)

C－3　平行沈線のみを施すもの（8)

第3群土器

阿玉台式土器・加曽利E式土器に相当するものを一括した。(9～12)

10は指頭圧痕に爪形を加えたものであり，前期末に位置付けらる可能性もある。11は半裁竹管を用いて縦に平行沈線を垂下させている。

第4群土器　掘之内式土器を一括した。(13～21・第94図)

A類　棒状工具による太い沈線によって文様を構成するもの。(13～21・第94図)

A－1　地文に縄文を有するもの（15・17・19・21)

いずれも口唇下に一本の沈線を有する。

15は波状口縁部破片で，沈線下にはさらに破線状の刺突を加えている。19・21は沈線に隆帯を付随させ，棒状工具による押圧を行なっている。

A－2　地文の無いもの（13・14・16・18・20)

13・14は頸部で一度くびれる深鉢形土器であり，14は指頭状の圧痕を有する。16・20も同様の圧痕を有する。18は沈線によって隆起した部分に縦方向の圧痕を施している。

B類　櫛歯状工具による施文を有するもの（1～3)

1は口唇下に指頭状の圧痕を有する。

C類　波状口縁部を一括した。(4～7・9～12)

C－1　地文に縄文を有するもの（5～7・9)

6・7は波状頂部を肥厚させ，立体的な構成を行なっている。

C－2　地文の無いもの（4・11）

11は大型の波状口縁部破片である。

D類　口縁を若干内傾させるもの（8・13・15・16）

8・13は口辺に幅の広い無文帯を有する。

E類　その他の土器（14・17・18）

14は注口土器の口縁部破片，17は小型の深鉢形土器である。

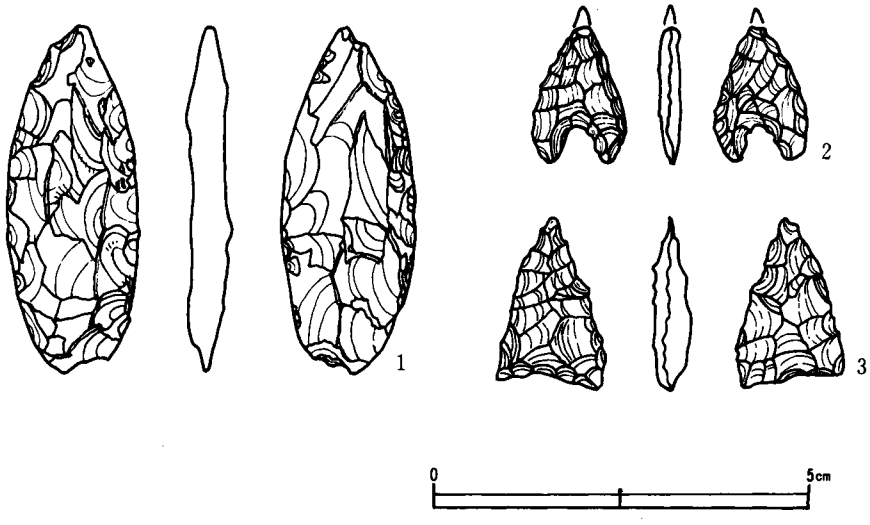
グリッド出土の石器

尖頭器（第95図1）

木葉形の形状を呈するもので基部が若干欠損している。

石鏃　（2・3）

2は先端部が若干欠損している。3はいわゆる三角鏃である。



第95図　尖頭器，石鏃

打製石斧　（第96図1～5）

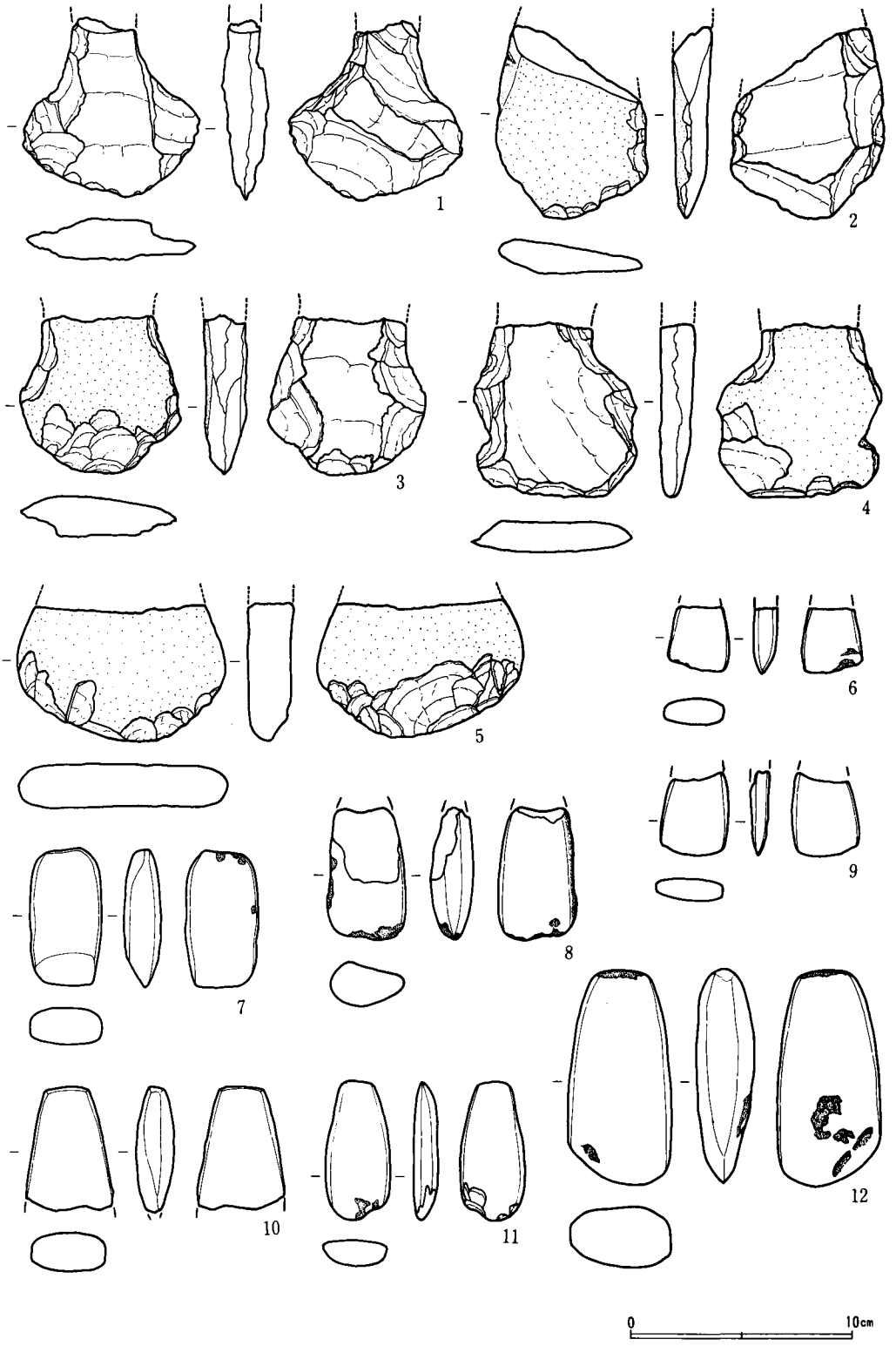
1・3・4はいわゆる分銅型を呈するものであり，2・5は不定形で短冊型の範中に含まれるものと思われる。いずれも自然面を残し，簡単な調整を加えたものばかりである。

磨製石斧　（6～12・第97図1・2）

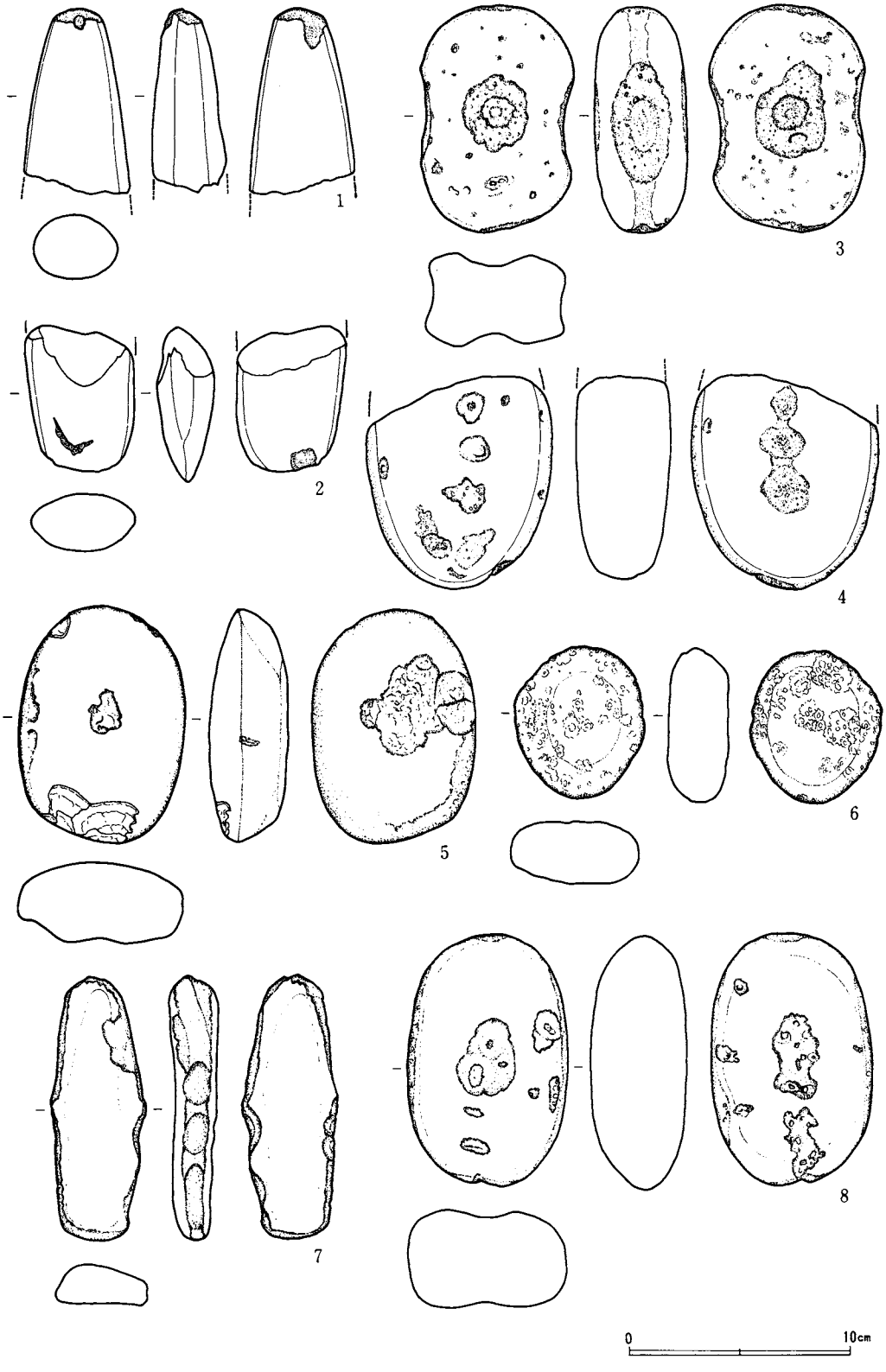
ほとんどが小型のものであり，撥状を呈している。刃部は表裏面の研磨によって作られているが，大半の両側面はほとんど手を加えられていない。8の側面には敲打痕が認められる。

凹　石　（3～6・8）

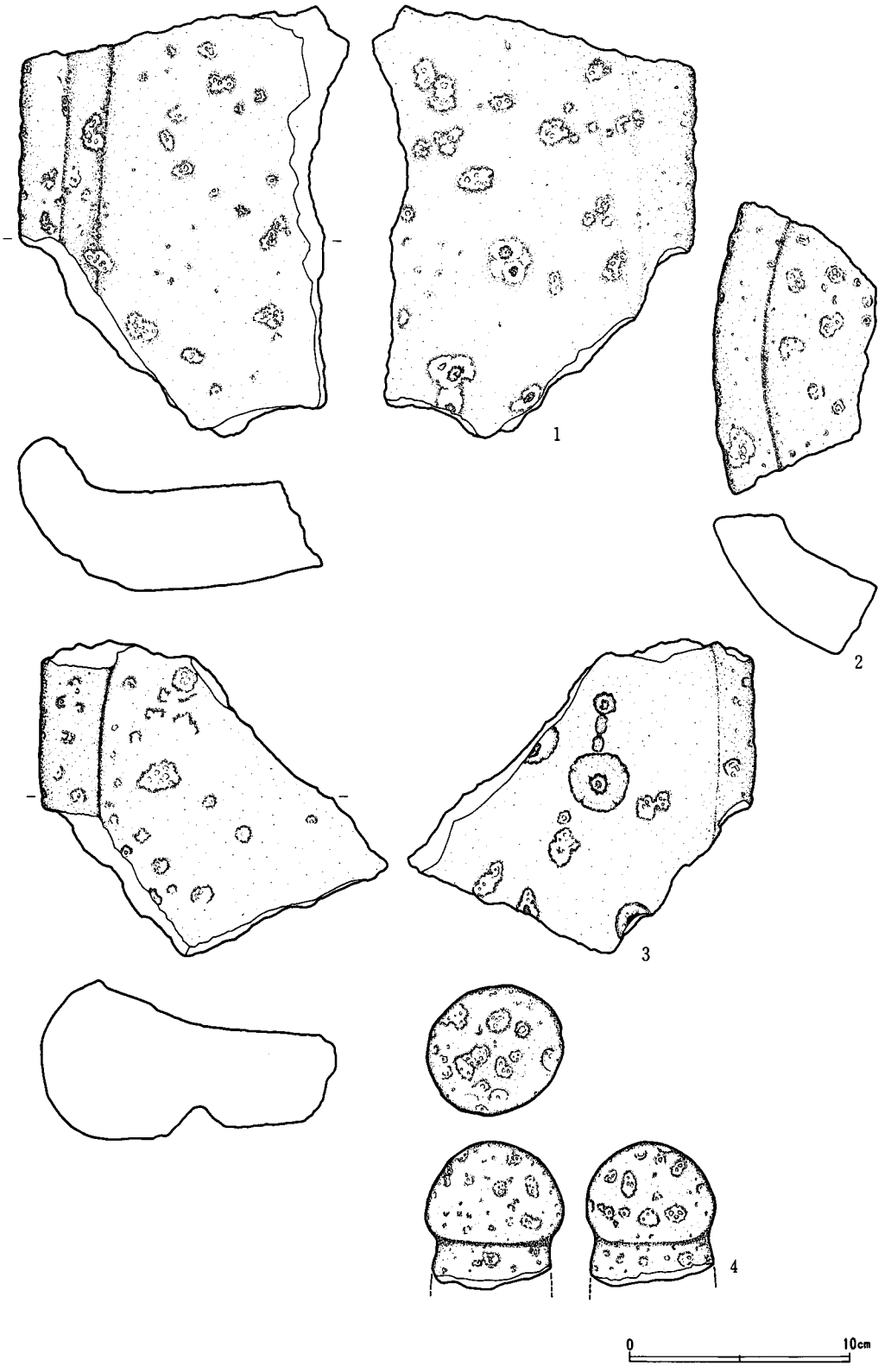
すべて表裏面に凹を有し，周囲には敲打痕が認められる。また表面には擦痕もあり，敲石および磨石の機能を有する。3は両側面にも凹を有する。



第96図　打製石斧・磨製石斧



第97図　磨製石斧・凹石・敲石



第98図　石皿・石棒

敲　石　（7）

棒状を呈し，周囲には敲打痕が認められる。側面には緩やかな凹が3か所あり，握る部分と考えられる。

石　皿　（第98図1～3）

1は大型の破片で縁辺部は隆起している。3は裏面に凹を有する。

石　棒　（4）

安山岩製でくびれ部以下は欠損している。

花前II－2　217－013石器表（　）内は欠損

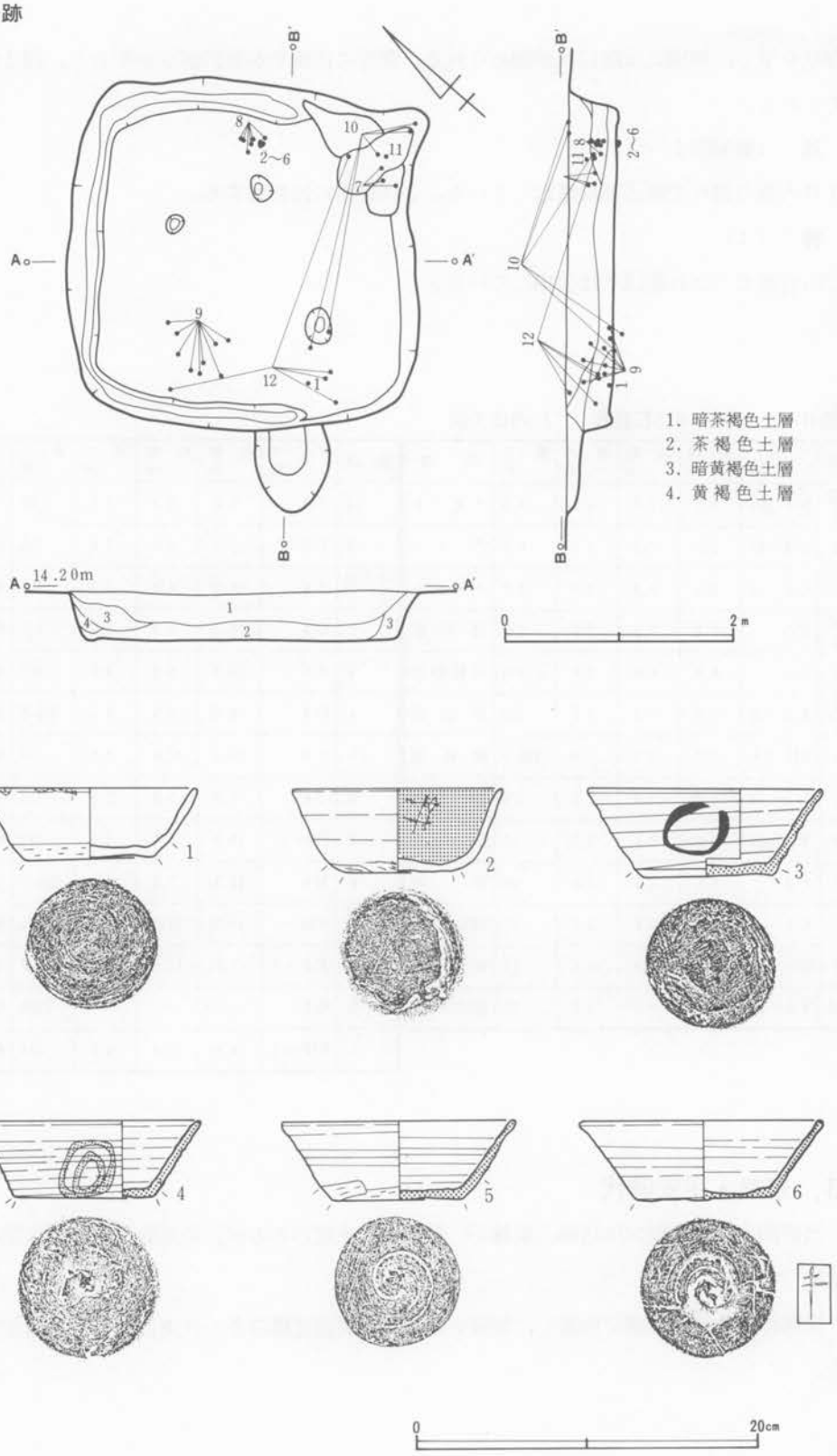
挿図	グリッドNo.	長軸 cm	短軸 cm	厚さ cm	重さ g	石質
第1図1	003－205	4.5	1.8	0.5	4.5	チャート
2	F4－02	1.7	1.2	0.3	0.4	チャート
3	G4－11	2.1	1.3	0.5	1.2	チャート
第1図1	E5	7.1	7.0	2.0	100	硬砂岩
2	F5	8.8	6.8	1.8	106	中粒砂岩
3	E5－05	7.0	7.2	1.9	132	安山岩
4	KH－t4	7.7	7.3	1.6	123.5	硬砂岩
5	G5－14	(6.9)	9.4	2.1	176	砂岩
6	F4－25	(2.8)	2.7	1.3	15	砂岩
7	P4	6.1	3.2	1.6	60	砂岩
8	G4	(5.8)	3.6	2.0	67	弱変成砂岩
9	020－361	(3.5)	2.9	0.8	17	凝灰質砂岩
10	F4－25	(5.5)	4.0	1.7	60	弱変成砂岩
11	F6	6.2	3.0	1.1	36	砂岩
12	F5	9.5	4.6	2.6	205	緑色砂岩
第2図1	F4	(8.5)	4.8	3.4	196	緑色片岩
2	G4	(6.3)	4.9	2.7	127	細粒砂岩
3	F4	10.3	6.1	4.1	460	輝石安山岩
4	G4	(8.8)	8.5	4.3	585.5	輝石安山岩
5	F4	10.5	12.6	3.5	353	細粒砂岩
6	T6	6.8	5.9	2.7	150	玄武岩
7	046－1	11.7	4.4	2.2	143	砂岩
8	E4	11.3	7.3	4.4	529.5	安山岩
第3図1	F13	(19.0)	(15.0)	4.4	1495	輝石安山岩
2	F6－7	(7.2)	(12.9)	(3.6)	429	安山岩
3	G5	—	—	—	1563	安山岩
4	KH－t3	(6.6)	6.4	6.2	316	輝石安山岩

3．奈良・平安時代

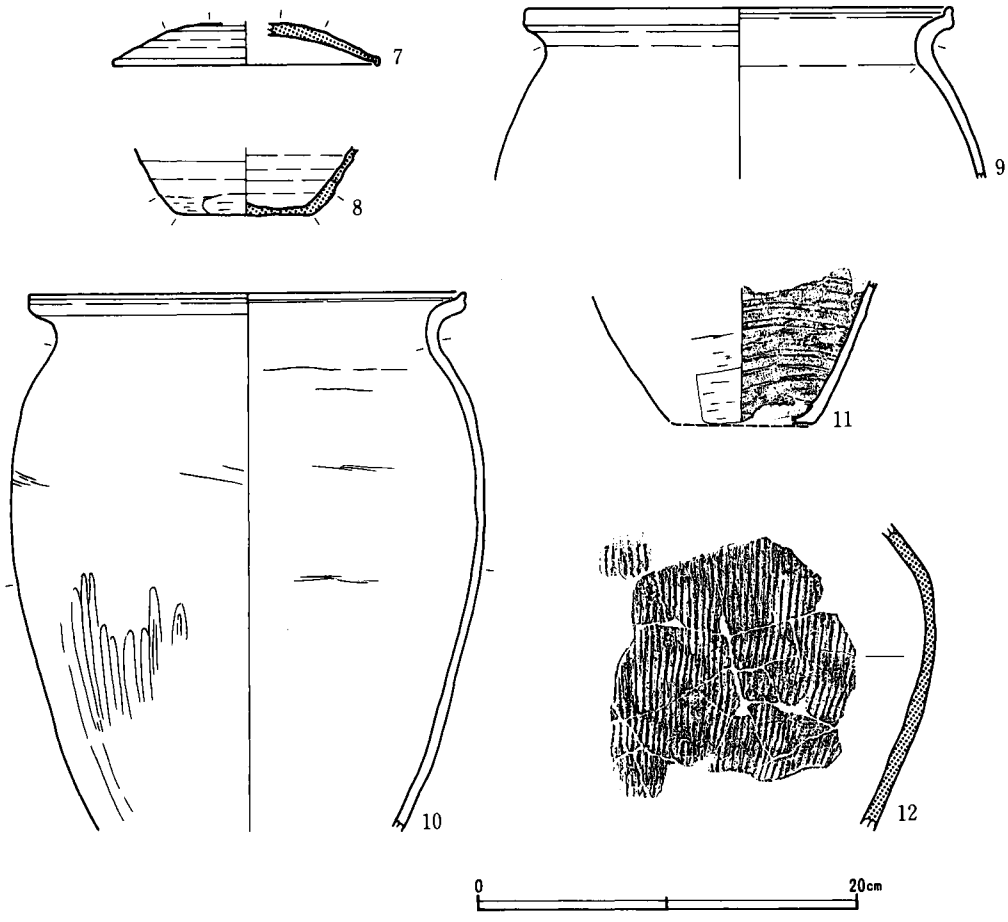
当該期の遺構は竪穴住居跡，製錬炉，精錬炉，土坑があるが，特徴的な点は製鉄関連遺構と遺物である。

住居跡は台地平坦部に位置し，製練炉等の製鉄関連遺構の多くは南に面した斜面部に位置する。

住居跡



第99図　003住居跡及び出土遺物



第100図　003住居跡出土遺物

003住居跡

プラン　正方形　　**規　模**　2.9×3.0m　　**主軸方向**　N－52°－E

所　見　隅カマドとなる小形の住居跡である。現存壁高は40cm，床面には３個のピットを検出したが，規模は小さく，並びも整然とならず柱穴と判断するには難がある。周溝は西壁と南北壁の一部に幅10～15cmで回るが，掘り込みは３～５cmと浅く明瞭ではない。カマドの遺存状態は極めて悪い。

遺物は土師器坏・甕，須恵器蓋・坏・甕がある。２の内黒の坏には，体部内面に焼成後による「井」の線刻，３には体部外面に「○」の墨書，３には「◎」の朱書が書かれている。また11の甕の内面は木口による荒い削りが施されている。坏の２～７は重ねた状態で北壁寄りのところから出土した。

時　期　花前Ⅴ期

003住居跡出土遺物

挿図番号	器　種	法　量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎　土	色　調	焼　成	備　考
1	坏 （土師器）	12.2 4.1 7.5	完形	体部内外－ヨコナデ 体部下端－回ヘラ削り 底部－切り離し不明，回ヘラ削り	R	粗粒砂・細礫－多 長石－少	乳橙色	良	口縁部内外面に油煙 図版59－１

挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
2	坏 (土師器)	12.2 4.8 6.2	完形	体部内面一ヘラ磨キ 外面一ヨコナデ後，荒いヘラ磨キ 体部下端一手ヘラ削り 底部一切離しり不明，手ヘラ削り	不明	中粒砂・粗粒砂一多	赤褐色	良	体部内面に「井」の線刻 内黒 図版59－2
3	坏 (須恵器)	13.3 5.1 7.6	口縁¼を欠損	体部内外一ヨコナデ・体部下端一全周を3回で手ヘラ削り 底部一回ヘラ切り，一定方向の手ヘラ削り	R	雲母一多・長石一多	灰白色	やや甘	体部外面に「□」 底部に「官取」？の墨書 図版59－3
4	坏 (須恵器)	13.0 4.4 8.1	完形	体部内外一ヨコナデ 体部下端一手ヘラ削り？ 底部一回ヘラ切り，手ヘラ削り	R	長石一多，雲母一少	灰色	やや甘	図版59－4
5	坏 (須恵器)	13.6 4.5 7.6	完形	体部内外一ヨコナデ 体部下端一全周を3回に分けて手ヘラ削り	R	長石一多	青灰色	良	口縁内面に僅かに油煙 図版59－5
6	坏 (須恵器)	13.8 4.6 7.9	口縁，底部 1/10 を欠く	体部内外一ヨコナデ 底部一回ヘラ切り，一定方向の手ヘラ削り	R	雲母，長石一多	灰色	やや甘	底部に「キ」の線甘刻 図版59－6
7	蓋 (須恵器)	(13.6) 〈2.3〉		天井部一回ヘラ削り 内外面一ヨコナデ	不明	長石・雲母・粗粒砂一多	淡灰褐色	甘	酸化焔焼成となる
8	坏 (須恵器)	— 〈3.5〉 (7.0)	1/3	体部内面一ヨコナデ 体部下端一手ヘラ削り 底部一回ヘラ切り，一定方向の手ヘラ削り	R	長石一多，雲母一少	暗灰色	良	
9	甕 (土師器)	(22.0) 〈9.1〉 —	2/3	口縁部一ヨコナデ 胴内外一ナデ		長石，雲母一多	暗褐色	良	
10	甕 (土師器)	(22.6) (28.0) 胴最大径 (24.7)	胴部2/3 底部欠損	口縁内外一ヨコナデ 胴部内外一ヘラナデ 胴部下半一細いヘラ磨キ		長石一多，雲母一少	赤褐色	良	
11	甕 (土師器)	— 〈7.3〉 7.7	胴下半のみ	胴部内面一木口状工具による削り 胴部外面一幅広の横方向のヘラ削り 胴部外面一平行叩キ		長石一多，雲母一少	橙褐色	良	
12	甕 (須恵器)		胴部1/3	胴部外面一平行叩キ		長石，雲母一多	灰色	やや甘	

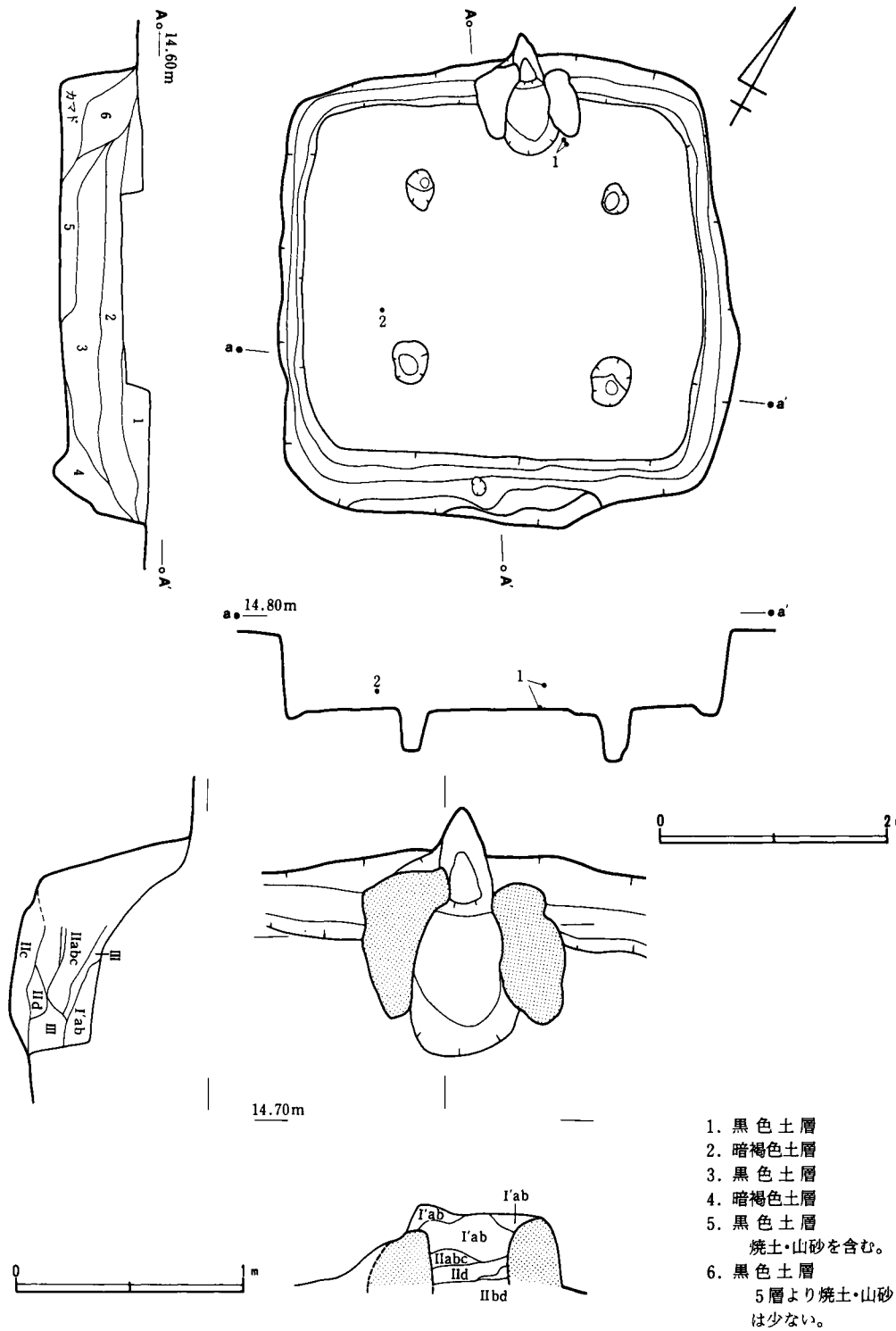
011住居跡

プラン 正方形　**規模** 一辺3.8m　**主軸方向** N－32°－W

所見 北壁中央にカマドをもち，四本柱の形態をとる住居跡である。現存壁高は70～80cm，周溝は幅20～30cm，深さ10cmを測る。南壁側の周溝は極端に幅広くなっているが，これは壁の崩壊によるためで，全周ほぼ20～30cmの幅になると考えられる。柱穴は径20～40cm，深さ35～45cmを測る。また床面は固く踏みしめられた状態であった。

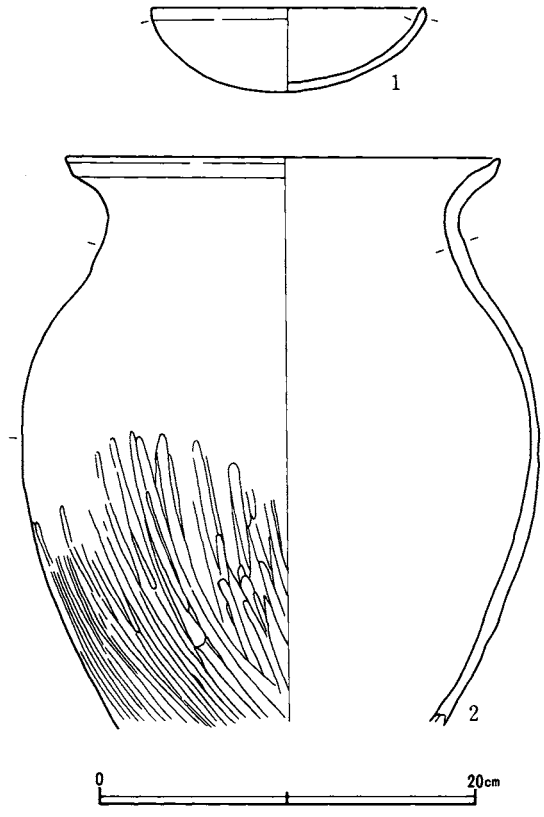
遺物は少量で，図示し得たものは僅かに土師器坏・甕が1点づつと棒状鉄製品があるだけである。1の坏は丸底になるものでカマド袖部近くからの出土である。2の甕は口唇部のつみ出しが弱く，胴下半部は細いヘラミガキを施したものである。

時期 花前Ⅰ期



1. 黒色土層
2. 暗褐色土層
3. 黒色土層
4. 暗褐色土層
5. 黒色土層
   焼土・山砂を含む。
6. 黒色土層
   5層より焼土・山砂は少ない。

第101図　011住居跡



第102図　011住居跡出土遺物

011住居跡・出土遺物

挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
1	坏 (土師器)	14.6 4.4 —	½	口縁内外—ヨコナデ 体部内面—ナデ 体部外面—手ヘラ削り		中粒砂・粗粒砂—多 雲母—少	乳橙色	良	図版60—5
2	甕 (土師器)	23.1 29.5 — 胴最大径 27.5	底部を欠損	口縁内外—ヨコナデ 胴部内面—ナデ 胴部外面—ヘラ削り後，ナデ 胴部下端—ヘラ磨キ		長石—多・雲母—少	暗褐色	良	図版60—6

012住居跡

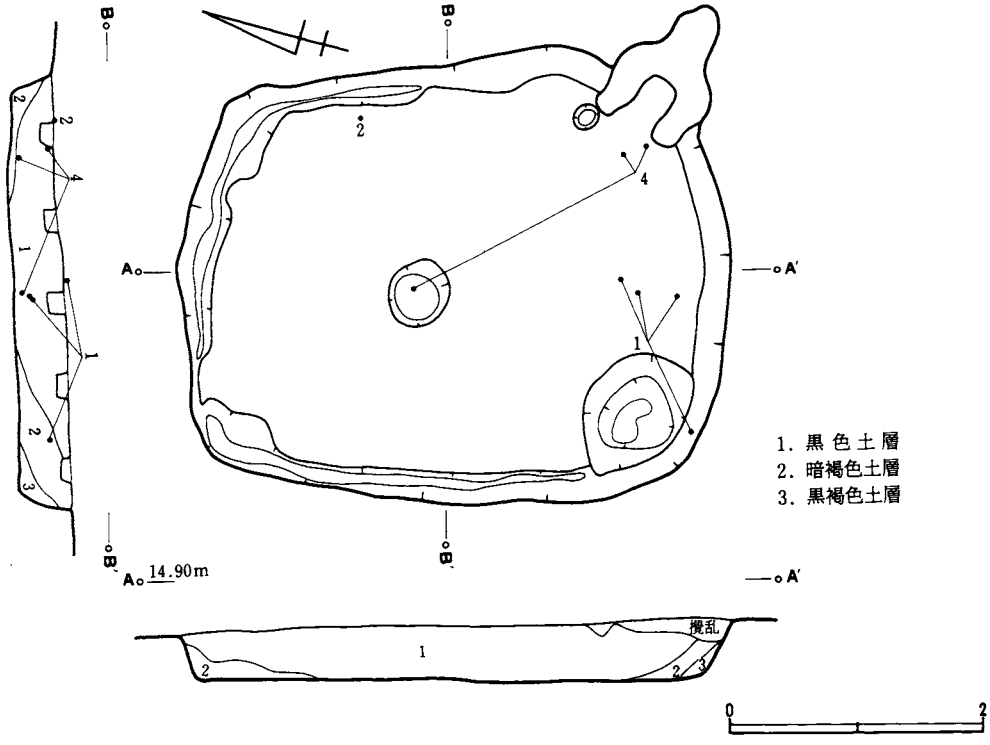
プラン　長方形　　**規模**　3.3×4.2m　　**主軸方向**　N—75°—E

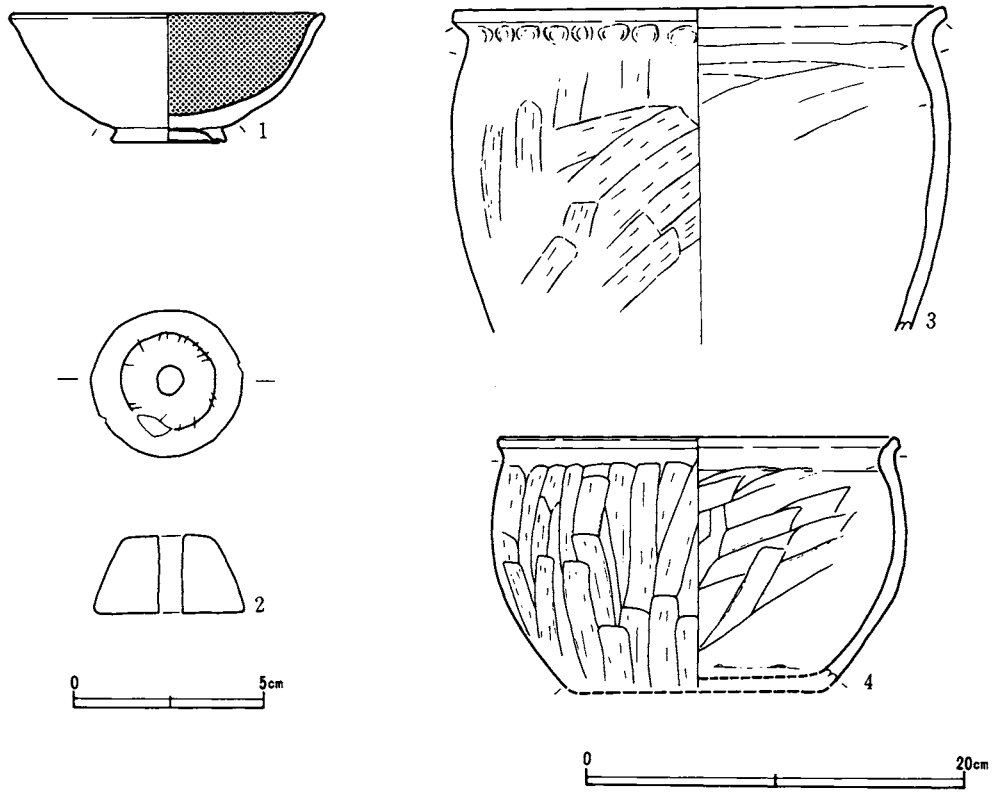
所見　東壁の南隅にカマドをもつ，不整長方形の住居跡である。現存壁高は30～40cmを測る。周溝は北壁と西壁に幅約15cm，深さ3cm程の浅いものを検出した。ピットは中央部に径50cm，深さ20cmのものと，西南隅に径約1m，深さ35cmを測るものを検出したが，いずれも柱穴と判断するには難しい。

遺物はいずれも覆土中からの出土である。土師器高台付坏，甕，石製紡錘車がある。特に甕3・4の器形は珍しく，また3の頸部には指頭圧痕を明瞭残したままとなっている。

この他に鍛造剝片を少量検出しており，この遺構が製鉄に関連したものであることを示している。

時期　花前IX期





第103図　012住居跡及び出土遺物

012住居跡出土遺物

挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
1	高台付埦（土師器）	16.2 6.6 高台径 6.1	¼	体部内面—ヘラ磨キ 体部外面—ヨコナデ後・ヘラ磨キ		中粒砂—多 雲母—少	褐色	良	内黒
2	紡錘車（石製）	外径8cm 内径1.4cm 厚さ4cm							滑石か？
3	甕（土師器）	25.6 〈16.5〉 — 胴最大径 26.1	¼	口縁部内外—ヨコナデ 胴部内面—ヘラナデ 頸部外面—指頭痕 胴部外面—ヘラ削り，一部ナデ施す		粗粒砂・雲母—多	暗褐色	良	図版60—8
4	鉢（土師器）	20.6 12.9 — 胴最大径 21.6	⅔	口縁部内外—ヨコナデ 体部内面—ナデ 体部外面—上から下へのヘラ削り		粗粒砂・雲母—多	橙褐色	良	図版60—7

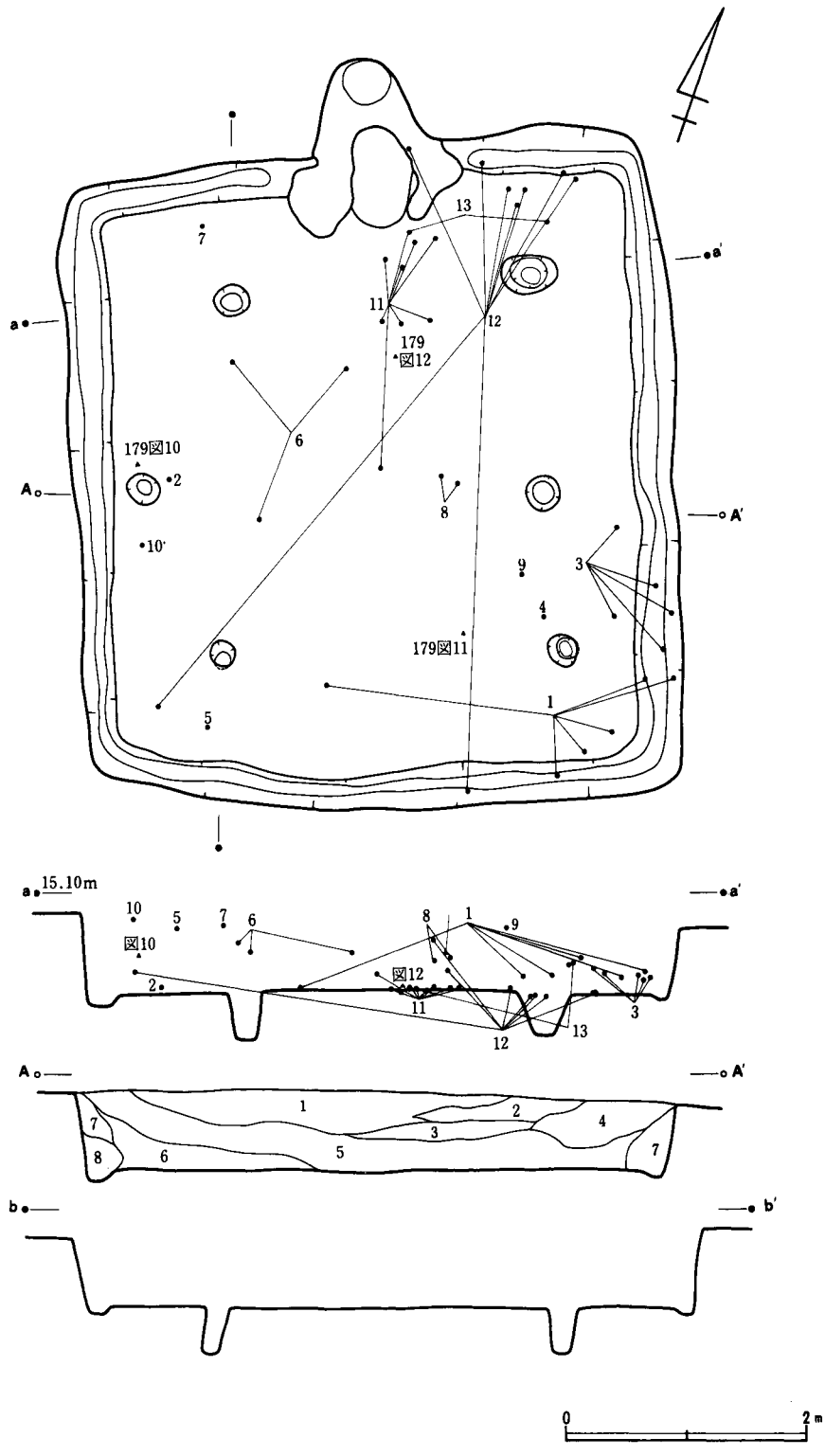
013住居跡

プラン 長方形　**規模** 5.5×5.0m　**主軸方向** N—21°—W

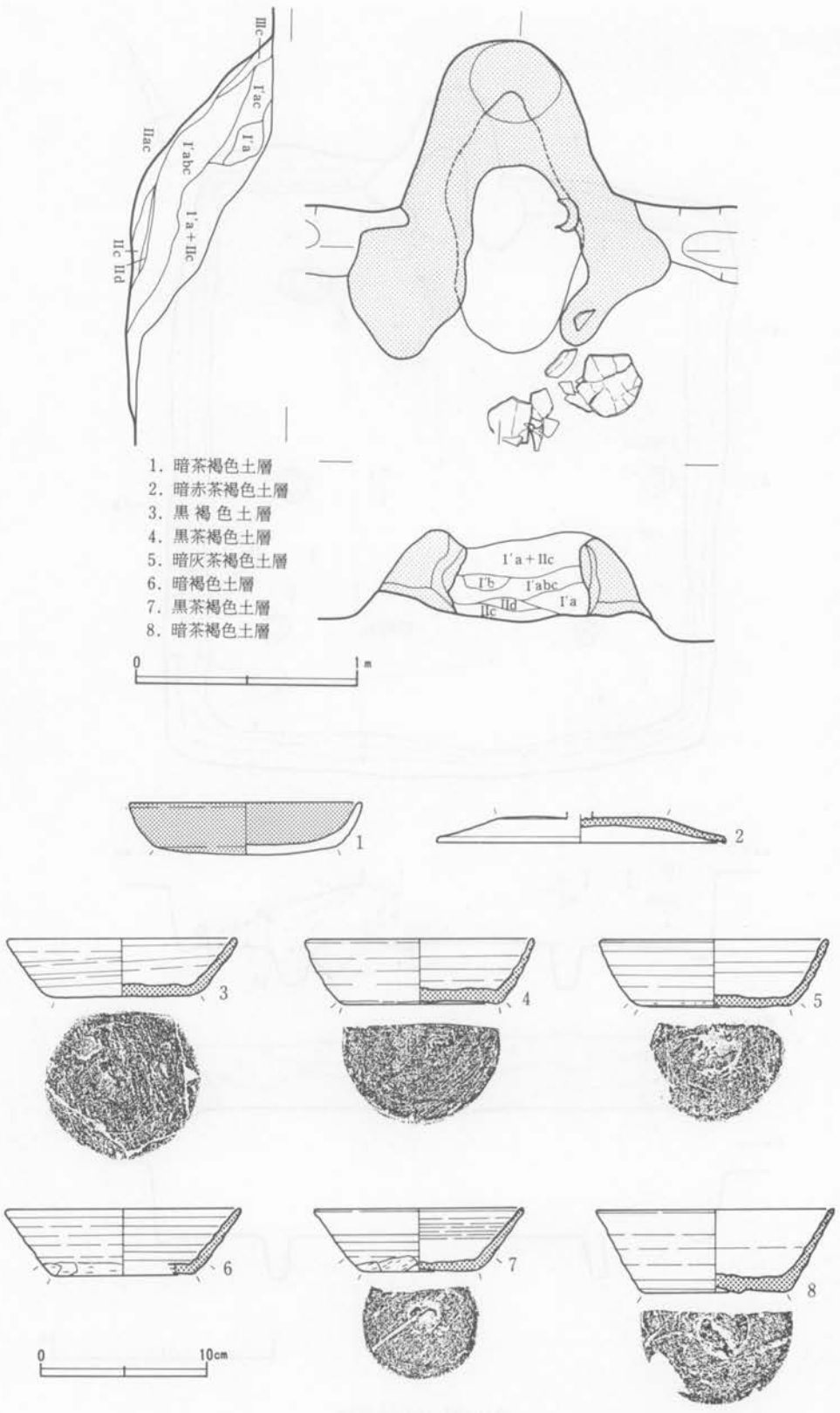
所見 比較的大形の住居跡である。現存壁高50～70cm，周溝は幅15cm，深さ5～10cmで全周する。カマドは北壁中央部に設けられ，煙道部は壁外に大きく張り出す。柱穴は径20～40cmとなり，並びは整然としないが六本柱となるものであろう。

遺物の出土量は多く土師器坏・甕，須恵器・蓋・坏・甕（甑？）の他に鉄器として刀子，棒状鉄製品がある。1は内外面ともに赤彩されたロクロ使用の坏である。2の蓋は端部の折り返しが弱いもので鈕を欠損している。須恵器坏は口径・底径の差が比較的小さいもので，器高の低いものと高いものの二種がある。甕は11のように口唇部をつまみ出し，胴下半を細いヘラミガキで仕上げるものと，12のように口唇部は僅かにつまみ出すが胴部は幅広いヘラ削りを施すもの，14のように薄手の作りで「く」の字口縁を呈するものがあり，バラエティに富んでいる。

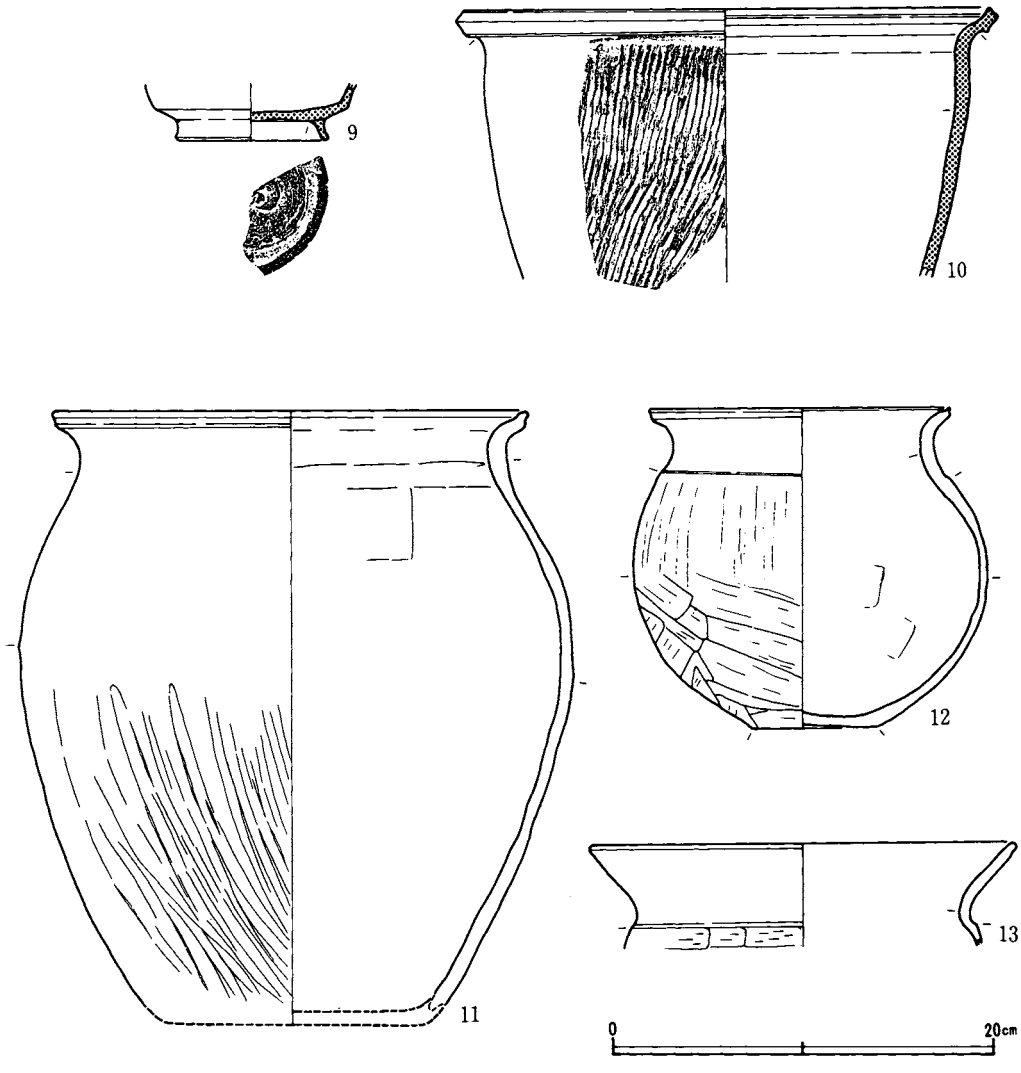
時期 花前Ⅰ期



第104図　013住居跡



第105図　013住居跡カマド及び出土遺物



第106図　013住居跡出土遺物

013住居跡出土遺物

挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
1	坏 (土師器)	13.8 3.1 10.9	1/3	体部内面一ヘラ磨キ 底部一不定方向の手ヘラ削り		中粒砂一多	赤褐色	良	内外面ともに赤彩 図版61－1
2	蓋 (須恵器)	17.4 〈1.5〉	1/4	天井部一手ヘラ削り 内外面一ヨコナデ	R	微粒砂・長石一少 雲母一多・密	灰褐色	堅緻	
3	坏 (須恵器)	13.6 3.5 8.6	2/3	体部内外一ヨコナデ 底部一回ヘラ切り、一定方向の手ヘラ削り	R	長石一多・雲母一少	灰白色	良	図版61－2
4	坏 (須恵器)	13.6 3.8 9.5	1/2	体部内外一ヨコナデ 体部下端一手ヘラ削り 底部一回ヘラ切り、一定方向の手ヘラ削り	R	長石・雲母一多	灰白色	良	図版61－3

挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
5	坏 (須恵器)	13.5 3.95 9.0	1/4	体部内外一ヨコナデ 体部下端一回ヘラ削りか 底部一回ヘラ切り後，一定方向の手ヘラ削り	R	粗粒砂・長石一多	灰褐色	良	
6	坏 (須恵器)	14.0 3.9 8.5	1/3	体部内外一ヨコナデ 体部下端一手ヘラ削り 底部一切不明，手ヘラ削り	不明	雲母一多・長石一微量	灰白色	やや甘	
7	坏 (須恵器)	12.7 3.7 7.6	1/3	体部内外一ヨコナデ 体部下端一手ヘラ削り 底部一回ヘラ切り，一定方向の手ヘラ削り	R	長石一多	灰色	良	
8	坏 (須恵器)	14.2 4.9 8.6	1/3	体部内外一ヨコナデ 底部一回ヘラ切り後，手ヘラ削り	R	長石一多	灰色	良	
9	高台付坏 (須恵器)	— 〈3.1〉 高台径 8.1	1/3	体部内外一高台・ヨコナデ 底部一回ヘラ切り後，回ヘラ削り		長石一多	青灰色	良	
10	甑 (須恵器)	27.4 14.2 — —	1/8	頸部内面～口縁外面一ヨコナデ 胴部内面一ナデ 頸部外面～胴部外面一叩キ		雲母一多・長石一微量	灰色	良	
11	甕 (土師器)	25.0 〈30.7〉 胴最大径 29.2	底部を欠く	口縁内外一ヨコナデ 胴部内面一ナデ 胴部外面一ヘラナデ 胴部下半一ヘラ磨キ		粗粒砂・長石一多 雲母一少	暗淡褐色		図版61—4
12	甕 (土師器)	17.5 16.6 6.5 胴最大径 18.5	完形	口縁内外一ヨコナデ 胴部内面一ヘラナデ 胴部外面一上から下へヘラ削り 胴部下半一ヨコ方向ヘラ削り 底部一木葉痕		粗粒砂一多	暗褐色	良	図版61—5
13	甕 (土師器)	22.0 〈5.3〉	1/3	口縁内外一ヨコナデ 胴部内面一ヘラナデ 胴部外面一ヘラ削り		中粒砂一多・雲母一少	赤褐色	良	

014住居跡

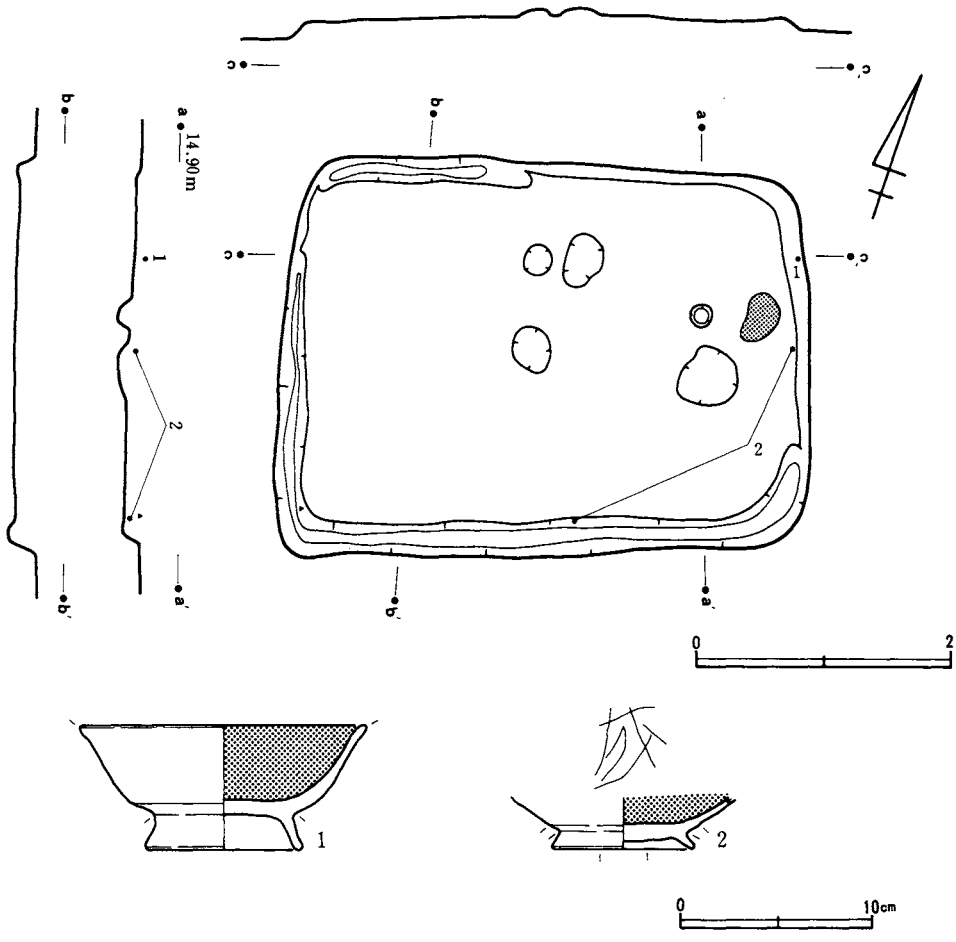
プラン 長方形　**規模** 3.0×4.2m　**主軸方向** N—75°—E

所見 東西方向が長軸となる住居跡で，現存壁高は5～15cmとなり遺存状態は悪い。周溝は北壁と東壁の一部を除いて巡り，幅8～15cm，深さ4cmを測る。カマドは殆ど残っていないが東壁側中央部に山砂と焼土の推積が認められ，この位置にカマドが設けられたと考えられる。

実測し得た遺物は，内黒処理された高台付坏2点と，不明鉄製品1点である。

2は口縁部を欠失した高台付坏であるが，内面に焼成後線刻が認められる。この線刻は稚拙な文字ではあるが「成」と表記したものであろう。

時期 花前IX期



第107図　014住居跡及び出土遺物

014住居跡出土遺物

挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
1	高台付坏（土師器）	14.6 6.4 高台径 8.2	⅓	体部内面一ヘラ磨キ 体部外面一ヨコナデ 体部下端一回ヘラ削り 高台部～底部一ヨコナデ		粗粒砂一多	乳橙色	良	内黒 図版61－7
2	高台付坏（土師器）	— 〈2.6〉 高台径 7.6	体部½	体部内面一ヘラミガキ 体部外面一ヨコナデ 体部下端一回ヘラ削り 高台内外一ヨコナデ 底部一回糸切りか		中粒砂一多	乳橙色	良	内黒 内面見込み部に「成」の線刻 図版61－6

018住居跡

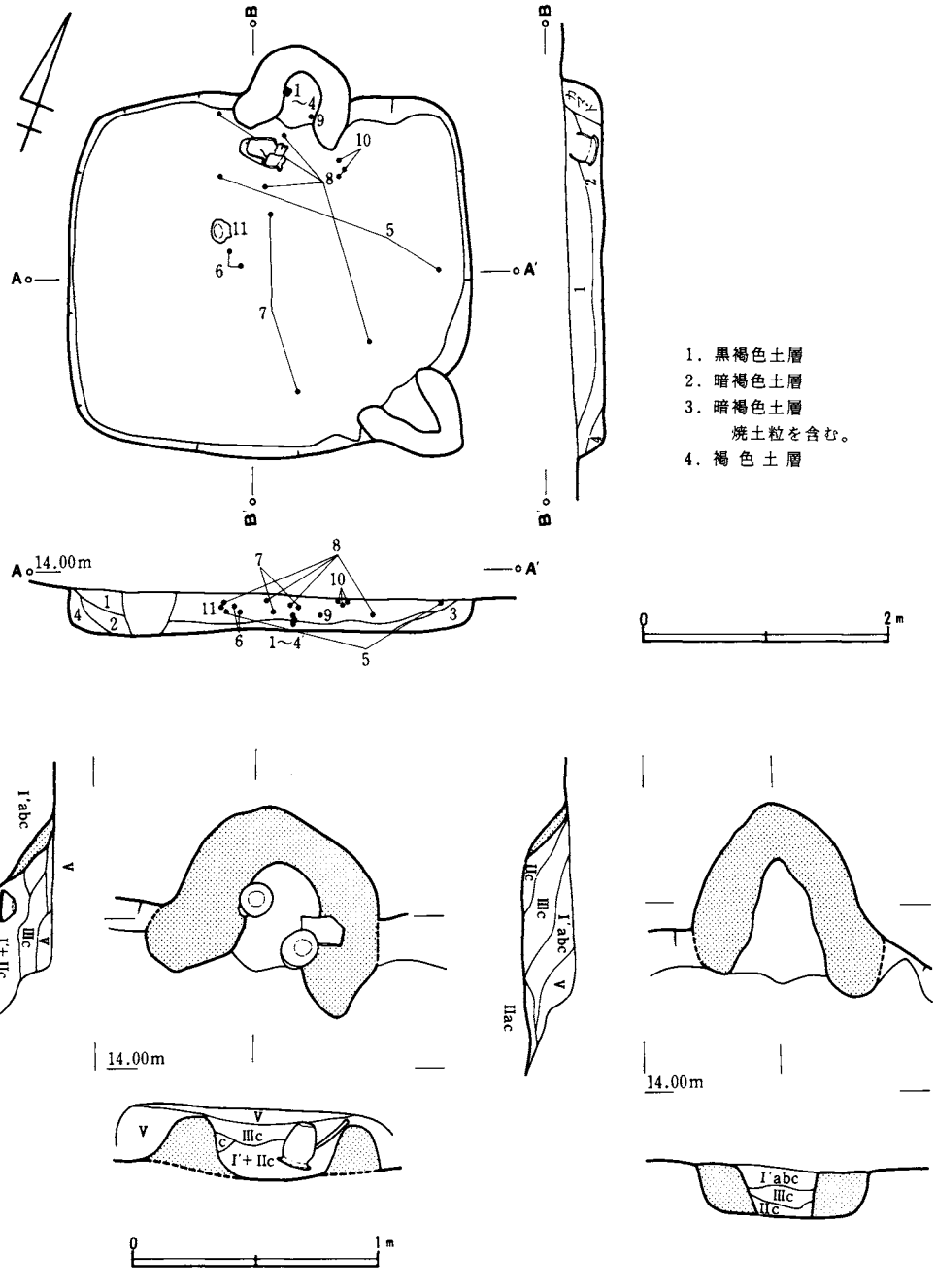
プラン　方形　　**規模**　2.9×3.2m　　**主軸方向**　N－21°－W

所見　北壁中央部と南東隅の壁の二ケ所にカマドを設けた住居跡である。住居廃絶時まで使用されていたカマドは北カマドと考えられ，坏，甕がカマド内から出土している。柱穴，周溝ともに検出されなかった。

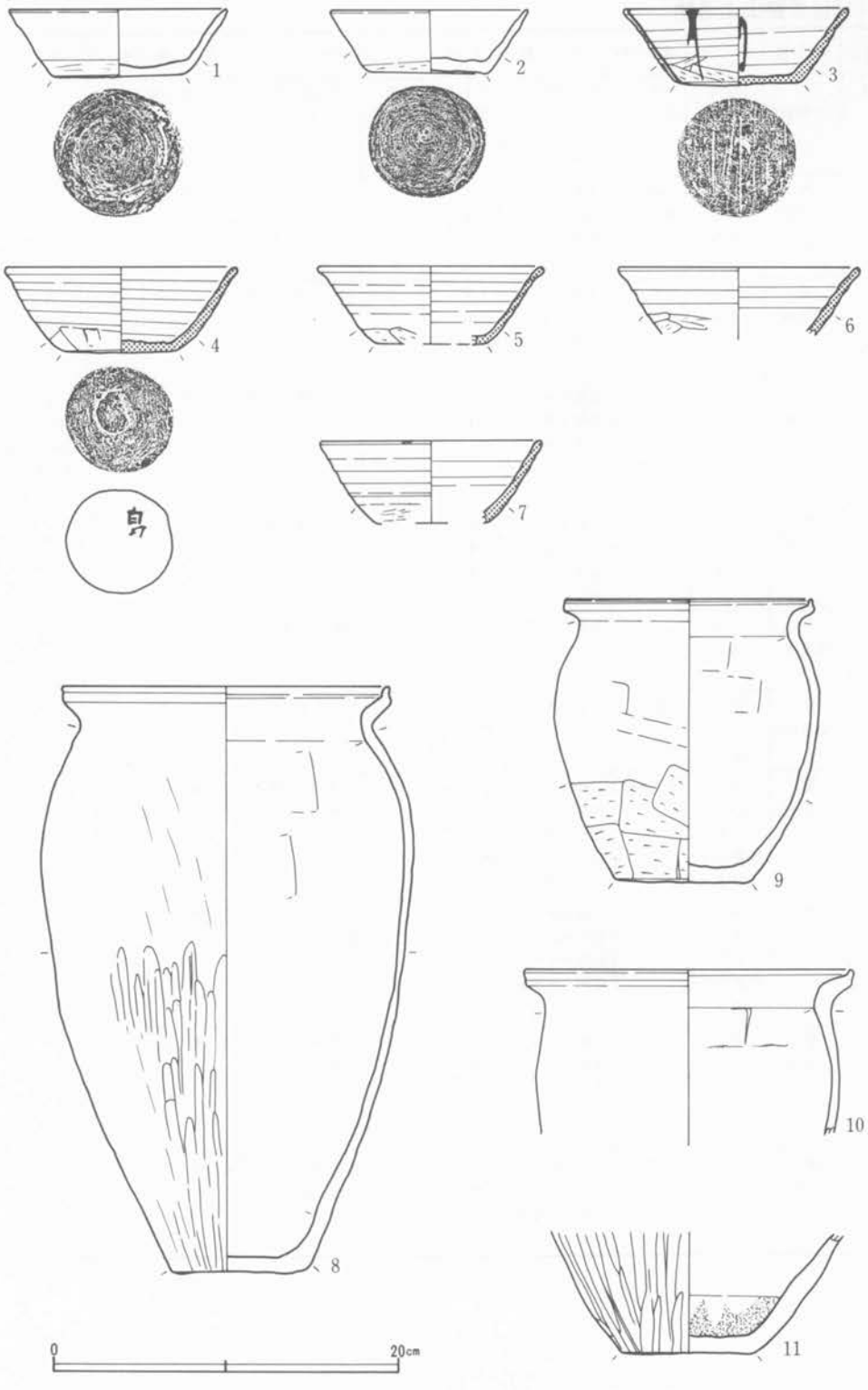
遺物は土師器坏・甕，須恵器坏があり，比較的良好なセット関係を示している。

1～4は北カマド内で倒立した状態で重なって出土している。また4の須恵器坏底部には墨書が認められる。判断し難いが一応「畠」と読みたい。甕は口唇部をつまみ出すタイプのもので，胴下半部を細いヘラミガキで調整する8・11のものと，幅広いヘラ削りを施し，小形となる9のタイプがある。

時　期　花前VI期



第108図　018住居跡



第109図　018住居跡出土遺物

018住居跡出土遺物

挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
1	坏 (土師器)	12.4 3.9 7.4	口縁⅓欠損	体部内外一ヨコナデ 体部下端一回ヘラ削り 底部一回ヘラ切り，回ヘラ削り	R	中粒砂，スコリア一少	明褐色	良	
2	坏 (土師器)	11.3 3.8 6.9	口縁⅙欠損	体部内外一ヨコナデ 体部下端一回ヘラ削り 底部一切り不明，回ヘラ削り	L	中粒砂，粗粒砂一多 スコリア一少	橙褐色	良	図版62—1
3	坏 (須恵器)	12.6 4.5 7.2	完形	体部内外一ヨコナデ 体部下端一手ヘラ削り 底部一回ヘラ切り，一定方向の手ヘラ削り	R	長石・雲母一多	灰色	良	火襷痕 図版62—2
4	坏 (須恵器)	13.2 4.8 6.2	完形	体部内外一ヨコナデ 体部下端一手ヘラ削り 底部一回ヘラ切り，一定方向の手ヘラ削り	L	長石・雲母一多	灰褐色	良	内面に「〆」の線刻 底部に「畠」?の墨書，図版62—3
5	坏 (須恵器)	12.8 4.4 6.4	⅛	体部内外一ヨコナデ 体部下端一手ヘラ削り 底部一切り不明，手ヘラ削り		長石一多，雲母一少	灰色	良	
6	坏 (須恵器)	13.6 〈3.7〉 —	⅛	体部内外一ヨコナデ 体部下端一手ヘラ削り		中粒砂一多 長石一少	灰色	良	
7	坏 (須恵器)	12.8 4.6 6.6	口縁⅛	体部内外一ヨコナデ		雲母一多，長石一少	灰白色	やや甘	口唇部に油煙附着
8	甕 (土師器)	18.9 33.1 7.1 胴最大径 21.6	ほぼ完形	口縁内外一ヨコナデ 胴部内面一ナデ 胴部外面一ヘラ削り 胴部下半一ヘラ磨キ 底部一木葉痕有り		中粒砂，雲母一多 長石一少	暗褐色	良	胴外面〜下半スス附着 図版62—4
9	甕 (土師器)	14.1 16.1 7.7 胴最大径 15.2	完形	口縁内外一ヨコナデ 胴部外面一ナデ 胴部下半一ヘラ削り 底部一木葉痕		中粒砂・雲母・長石一多	暗褐色	良	図版62—5
10	甕 (土師器)	18.6 〈9.3〉 — 胴最大径 17.5	⅛	口縁部内外一ヨコナデ 体部内面一ヘラナデ 体部外面一ナデ		中粒砂・雲母一多	橙褐色	良	
11	甕 (土師器)	— 〈7.0〉 7.7 —	底部〜胴下半のみ	胴下半内面一ナデ 胴下半外面一ヘラ磨キ 底部一木葉痕		粗粒砂・長石・雲母一多	暗褐色	良	体部下端内面〜底部一炭化物付着

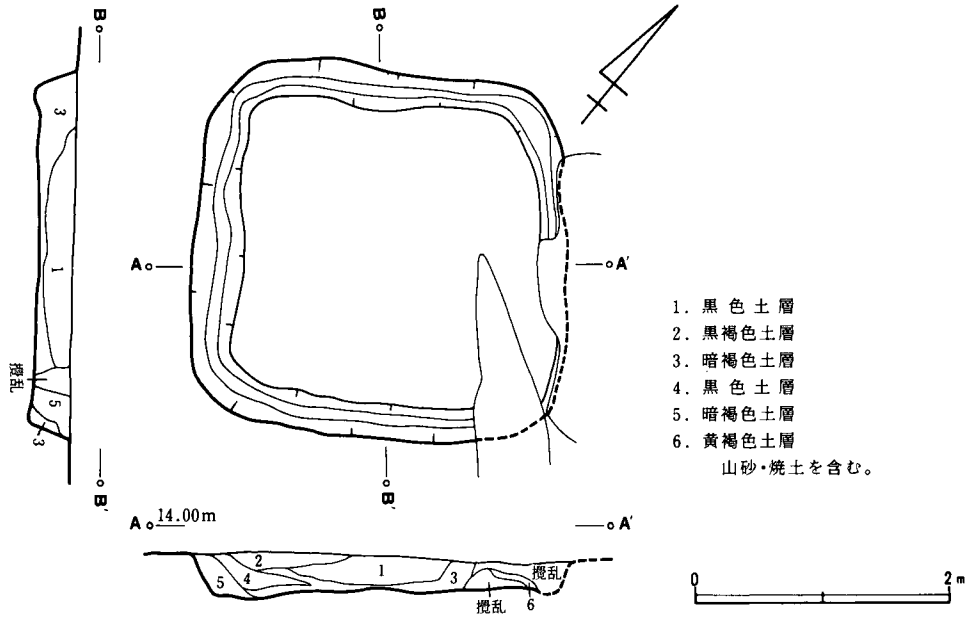
019住居跡

プラン　方形　　**規　模**　一辺2.9m　　**主軸方向**　N－54°－E

所　見　東壁と南壁の一部は抜根による攪乱のため大きく崩されている。攪乱を受けた東壁中央部では焼土・山砂を少量検出しており，この部分にカマドが構築されていた可能性がある。現存壁高は約30cm，周溝は幅10～15cm，深さ5cmで全周するものと思われる。また柱穴は検出されなかった。

図示できる遺物は1点も無く，時期決定する事ができる資料が無い。

時　期　不明



第110図　019住居跡

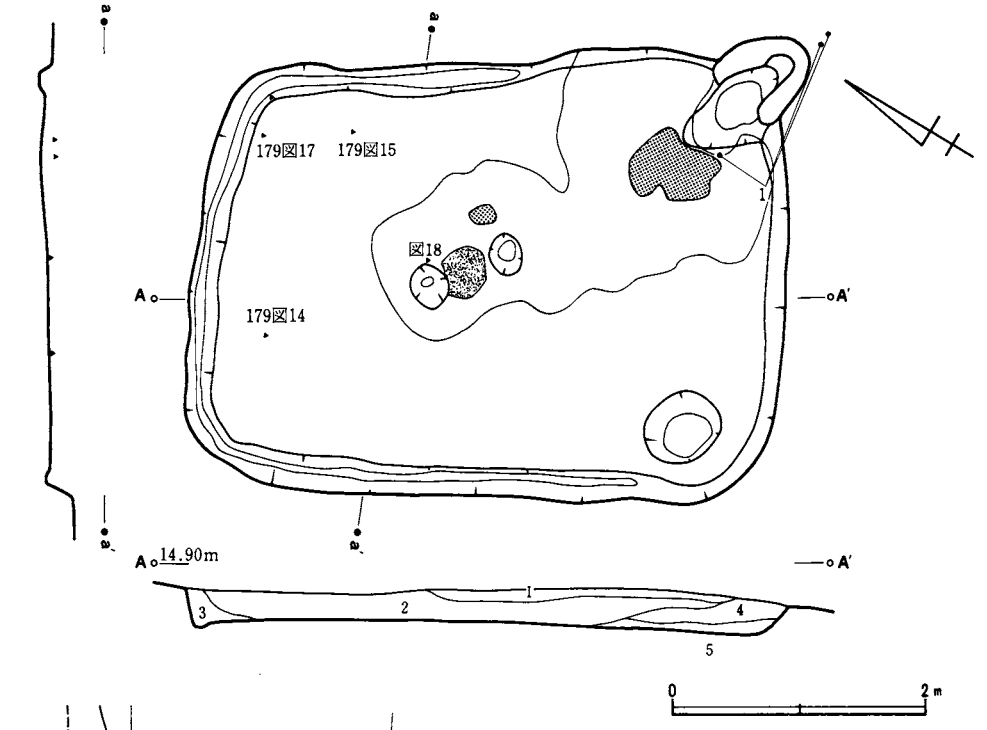
020住居跡

プラン　長方形　　**規　模**　3.4×4.7m　　**主軸方向**　N－60°－E

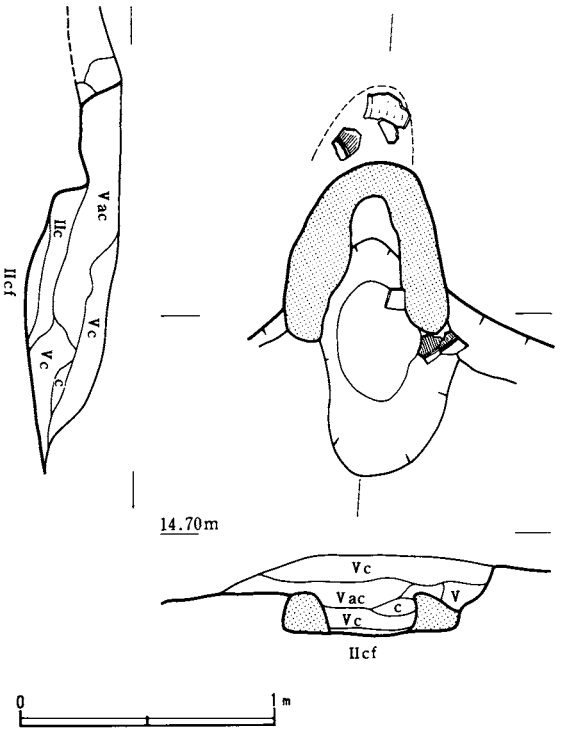
所　見　東壁の南隅にカマドをもつ住居跡で，カマド前方部に焼土の堆積が認められる。また住居中央部には炉と考えられる焼きしまった部分があり，その両脇には径30cm，深さ5～10cmのピット2基を検出した。さらにカマドと炉の周辺の床面は極めて固く踏みしめられた状態となっていた。現存壁高は5～25cm，周溝は東壁の一部と南壁を除いて，幅10cm，深さ5cmで巡っている。

遺物はカマド周辺から出土した土師器甕と埴輪の他に，羽口，多量の鉄滓，用途不明の鉄製品があり，製鉄に関連した遺構かとも考えられる。

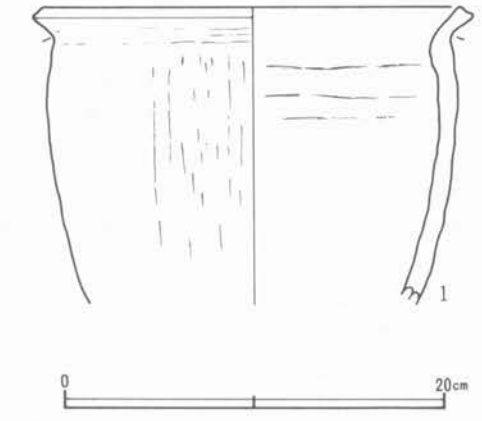
時　期　不明（花前Ⅷ期以降？）

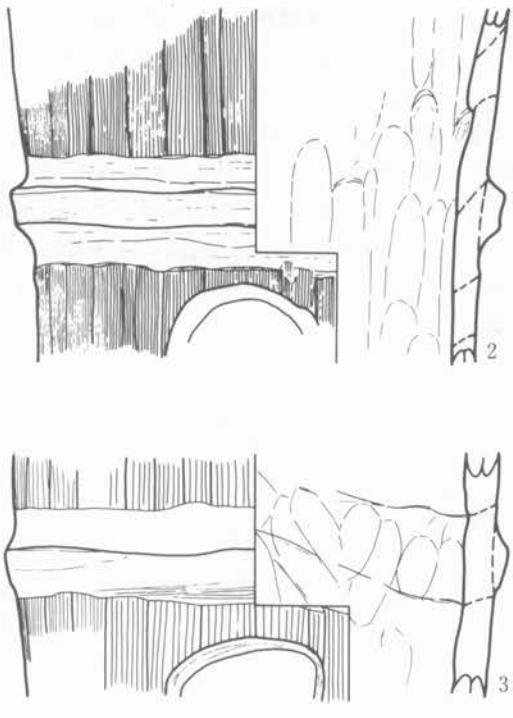


1. 黒色土層
2. 暗褐色土層
   焼土粒を多く含む。
3. 褐色土層
4. 茶褐色土層
5. 黄褐色土層
   ロームブロックを含む。



第111図　020住居跡





第112図　020住居跡出土遺物

020住居跡出土遺物

挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
1	甕（土師器）	22.0 〈15.6〉 — 頸部径 20.9	¼	胴部内面～口縁—ヨコナデ 胴部外面—縦方向（上から下へ）のヘラ削り		中粒砂・粗粒砂—多 雲母—少	赤褐色	良	
2	普通円筒	凸帯径 18.2	⅓	外面—縦方向のハケ目単位20本／1.8cm凸帯部はヨコナデ 内面—指頭による縦方向のナデ		中粒砂—多 スコリア（酸化鉄粒）—少	乳橙褐色	良好	
3	普通円筒	凸帯径 18.8		外面—縦方向のハケ目単位8本／2cm凸帯部は木口によるヨコナデ 内面—粘土帯巻上げ（左回り）明瞭、指頭によるナデ		中粒砂—多 スコリア（酸化鉄粒）—少	暗褐色	良	

021住居跡

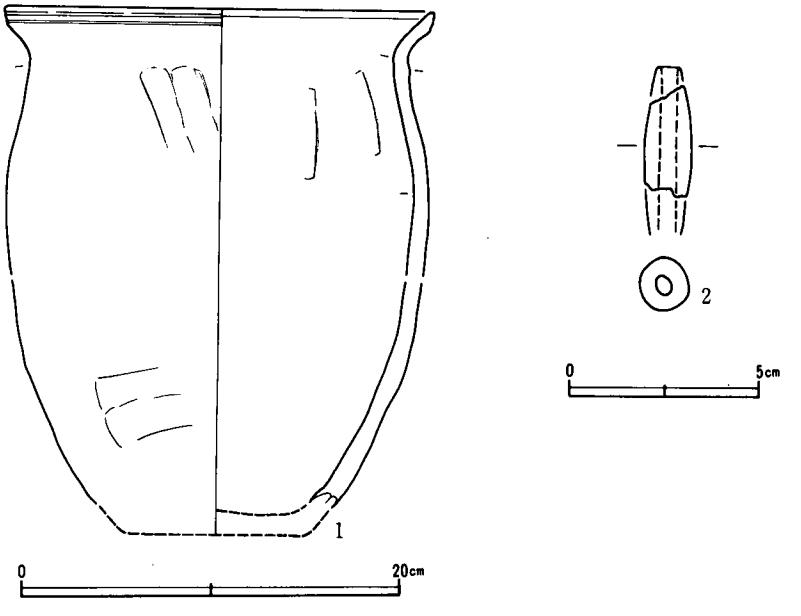
プラン 長方形　**規模** 3.9×3.2m　**主軸方向** N—27°—W

所見 長方形の住居跡で，カマドは北壁に設けられ，外方へ大きく張り出す。北壁の西半分は攪乱のため遺存しない。現存壁高は15～20cmを測る。柱穴，周溝ともに検出されなかった。

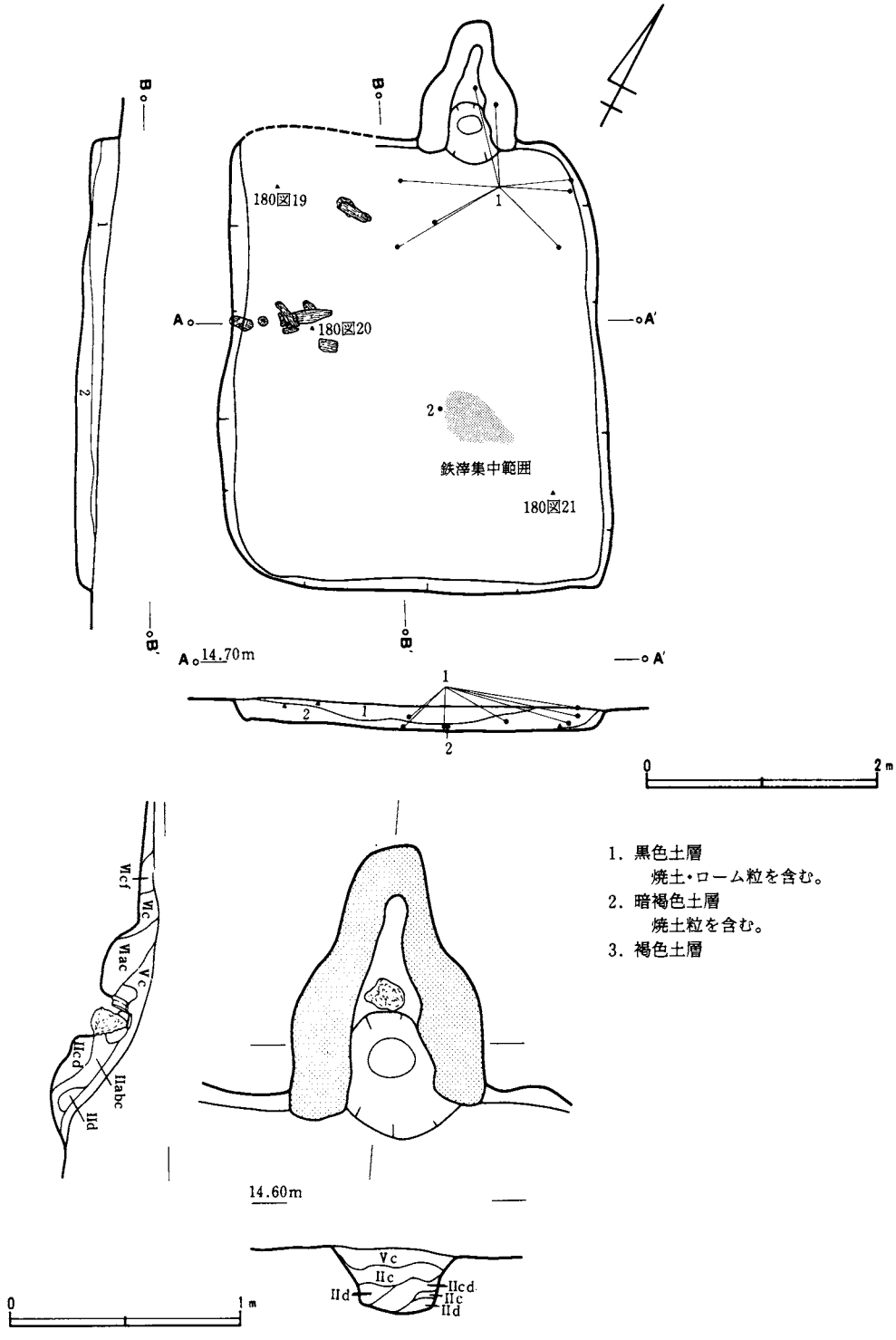
出土遺物は少量の土器，土錘，鉄製品，多量の鉄滓がある。

土器で復原し得たものは僅かに甕1点だけである。鉄製品は馬具の一種（兵庫鎖か？）と考えられるもの（180図19），紡錘車（180図20）等があり，鉄滓も住居跡中央から，やや南寄りの地点で集中的に検出された。またカマド内にも大型の鉄滓が出土している。鍛冶炉など直接的に製鉄に関連する遺構ははないが，遺物の内容や出土状態から，カマドを利用した製鉄関連の住居跡とも考えられる。

時期 不明（花前VI期以降か）



第113図　021住居跡出土遺物



1. 黒色土層
   焼土・ローム粒を含む。
2. 暗褐色土層
   焼土粒を含む。
3. 褐色土層

第114図　021住居跡

021住居跡出土遺跡物

挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
1	甕（土師器）	22.6 (27.0) — 胴最大径 22.5	⅓	口縁部内外一ヨコナデ 胴部内面一ヘラナデ 胴部下半内面一ナデ 胴部上半外面一縦方向ヘラ削リ 胴部下半外面一横方向ヘラ削リ		中粒砂，雲母一多	淡灰褐色	やや甘	
2	土錘								

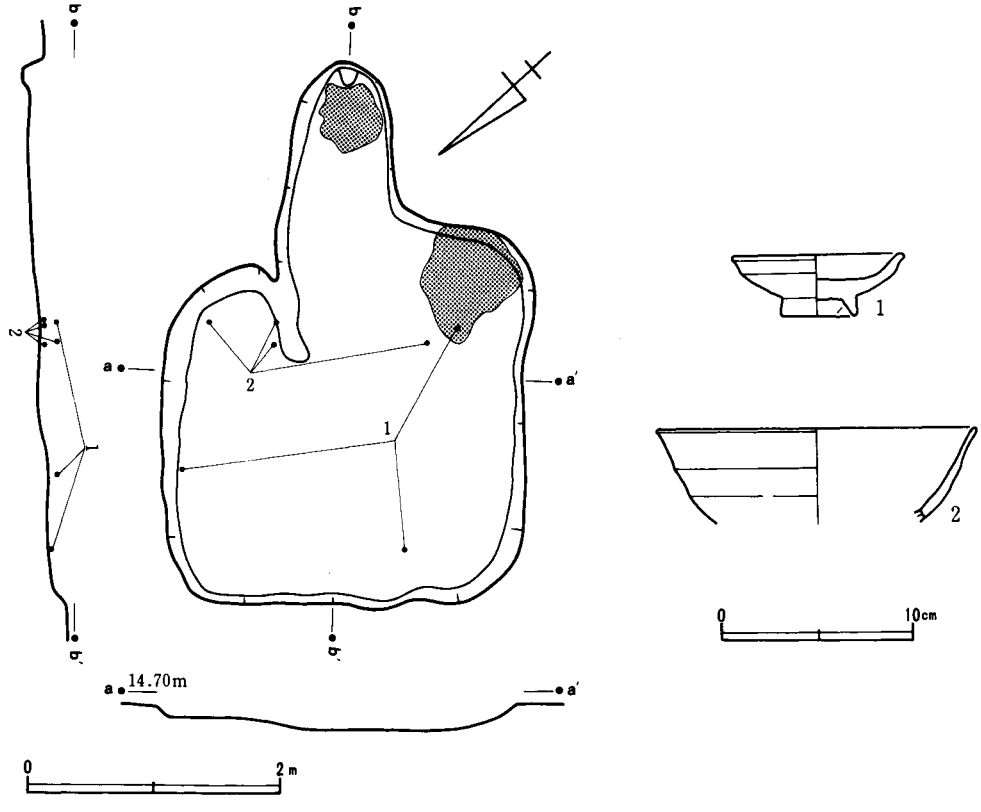
029住居跡

プラン　不整方形　　**規模**　長軸4.25m，短軸2.9m　　**主軸方向**　N－120°－E

所見　東壁に幅0.8～0.9m，長さ1.2m程の細長い張り出しをもつ遺構である。この張り出し部先端と東壁の南隅の二ケ所に焼土の堆積が認められ，張り出し部はカマド掘方の痕跡かと考えられる。また柱穴，周溝ともに検出されず，特異な形状となる住居跡と考えられる。現存壁高は10cm程度で，全体に遺存状態は悪い。

出土遺物も僅少である。1は土師器の高台付皿で小形のものである。2は土師器坏の口縁部で小破片のため復原径には多少の誤差があると思われる。

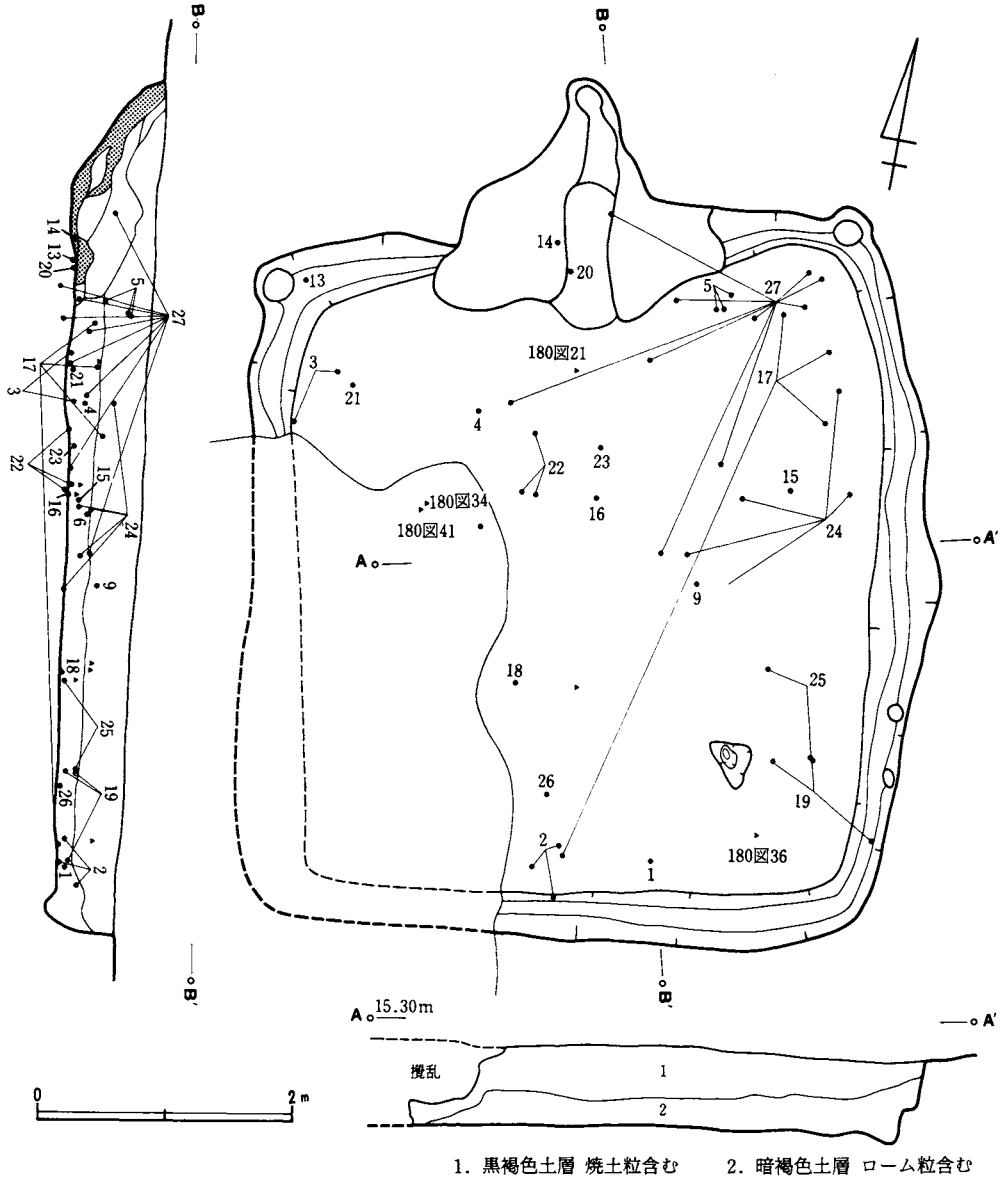
時期　不明（花前Ⅷ期以降か）



第115図　029住居跡及び出土遺物

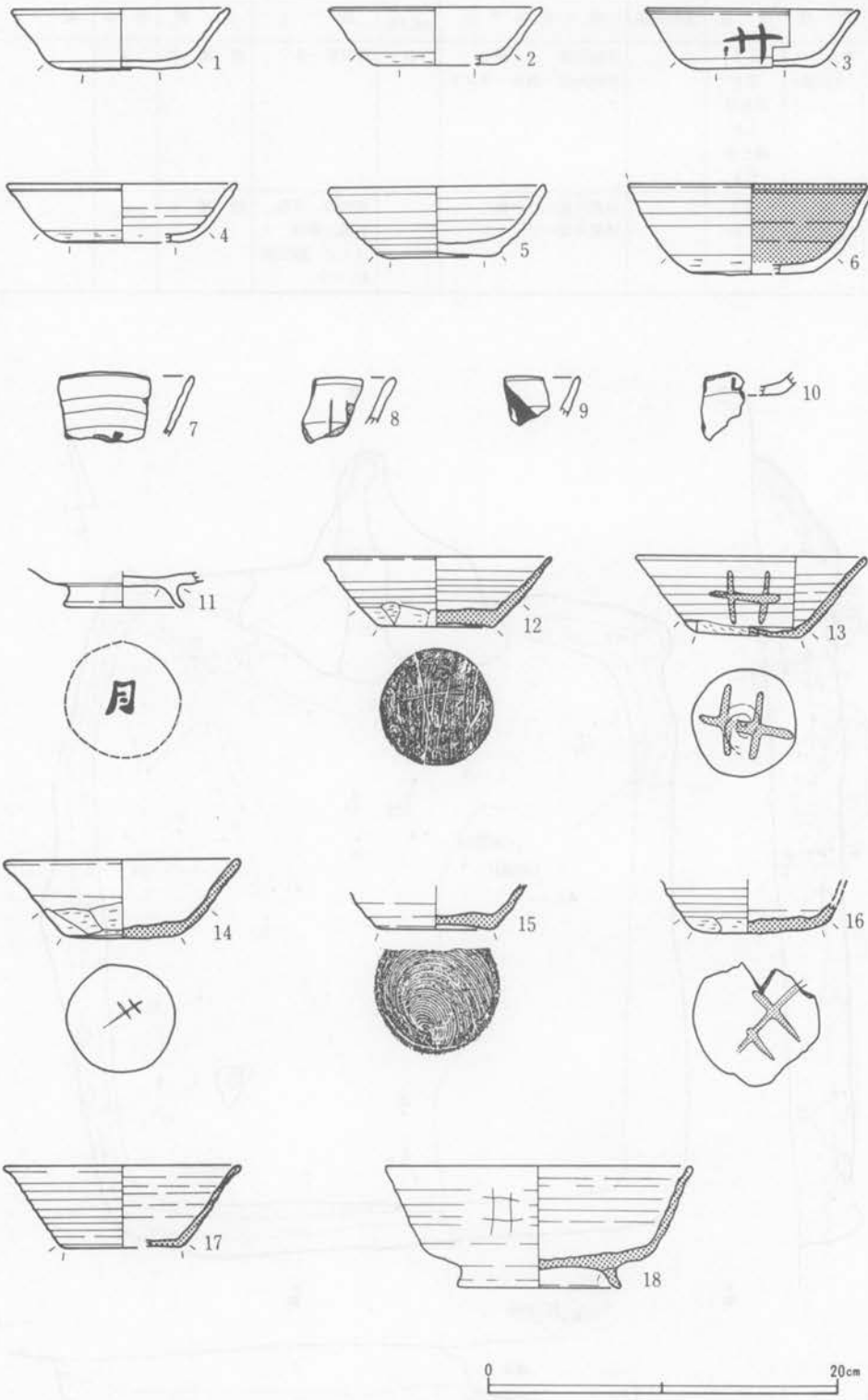
029住居跡出土遺物

挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
1	高台付皿（土師器）	8.7 3.3 高台径 4.0 高台高 0.9	½	体部内面一ヘラ磨か 体部外面～高台一ヨコナデ	R	中粒砂一多	橙褐色	良	
2	坏（土師器）	16.8 〈4.9〉 —	¼	体部内面一ヘラ磨キ 体部外面一ヨコナデ		粗粒砂，長石，石英，雲母，スコリア，(酸化鉄粒)一少	橙褐色	良	

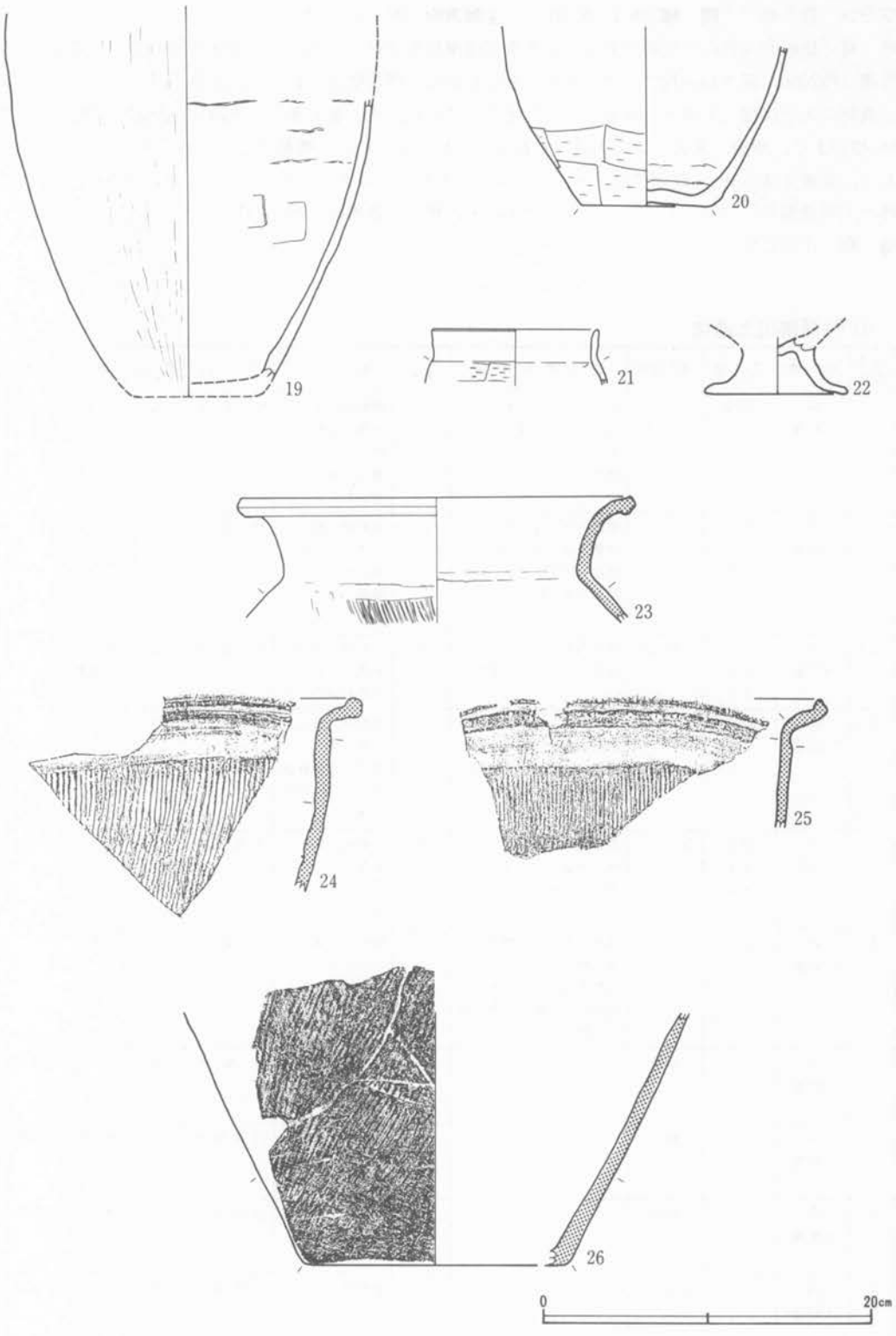


1．黒褐色土層 焼土粒含む　　2．暗褐色土層 ローム粒含む

第116図　030住居跡



第117図　030住居跡出土遺物



第118図　030住居跡出土遺物

030住居跡

プラン 長方形　**規　模** 5.7×5.2m　**主軸方向** N－12°－W

所　見 比較的大形の住居跡であるが，西南部は攪乱を受けるため，その全体を知ることはできない。周溝は幅20cm，深さ10cm程で全周するものと思われる。現存壁高は47～55cmを測る。

遺物の大半は覆土下層から床面にかけて出土しており，その量も多い。土器は土師器坏・甕，須恵器坏・甕があり，墨書，朱書，線刻の認められるものがかなりある。墨書には「艹」・「月」と判読不明のもの，朱書には「艹」，線刻では「艹」と「井」がありバラエティに富んでいる。また鉄製品も多く，棒状不明鉄製品（180図23～35），刀子（180図39），焼印状鉄製品（181図41）などがある。

時　期 花前VI期

030住居跡出土遺物

挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
1	坏（土師器）	12.2 3.6 7.0	1/3	体部内外一ヨコナデ 体部下端～周縁一回ヘラ削り 底部一回糸切り	R	細粒砂，長石，石英，白色針状物，スコリア，雲母一少 密	橙褐色	良	
2	坏（土師器）	12.2 3.3 7.2	1/3	体部内外一ヨコナデ 体部下端一回ヘラ削り 底部一欠失するが，回糸切りと思われる		細粒砂一長石，石英，白色針状物，スコリア，雲母一少 密	橙褐色	良	図版63－1
3	坏（土師器）	12.2 3.4 7.1	口縁1/6を欠く	体部内外一ヨコナデ 体部下端一回ヘラ削り	R	中粒砂，長石，石英，スコリア，白色針状物一少	橙褐色	良	体部外面に「艹」の墨書 図版63－2
4	坏（土師器）	12.8 3.4 7.6	1/4	体部内外一ヨコナデ 体部下端一回転ヘラ削り 底部一回糸切り，回転ヘラ削り		中粒砂，長石，石英一多 雲母，白色針状物，スコリア一多	橙褐色	良	
5	坏（土師器）	12.2 4.1 5.8	1/3	体部内外一ヨコナデ 体部下端一回ヘラ削り 底部一回糸切り	R	中粒砂，長石，石英一スコリア一少 密	乳橙褐色	良	図版63－3
6	坏（土師器）	14.0 5.2 7.0	1/3	体部内面一ヘラ磨き 体部外面一ヨコナデ 体部下端一回ヘラ削り 底部一切り離し不明，回ヘラ削り		細粒砂，雲母，スコリア一少 密	淡褐色	良	内黒
7	坏（土師器）	－ － －	口縁部			中粒砂，長石，石英一多 雲母一少	赤褐色	良	体部外面に墨書 図版63－5
8	坏（土師器）	－ － －	口縁部			細粒砂一少	淡黄褐色	良	体部外面に墨書 図版63－5
9	坏（土師器）	－ － －	口縁部			中粒砂一多	淡黄褐色	良	体部外面に墨書 図版63－5
10	坏（土師器）	－ － －	底部			細粒砂一少	淡黄褐色	良	体部下端に墨書 図版63－5
11	皿（土師器）	－ 2.0 6.8	口縁欠く	体部下端一回ヘラ削り 高台内外一ヨコナデ 底部一回糸切り		中粒砂，スコリア一少	乳橙褐色	良	底部に「月」の墨書 図版63－4

挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
12	坏 (須恵器)	13.0 4.0 6.8	口縁¼欠く	体部内外一ヨコナデ 体部下端一手ヘラ削り 底部一切り離し不明，一定方向の手ヘラ削り	R	中粒砂一少 密	灰色	良	図版63—6
13	坏 (須恵器)	13.1 4.6 6.0	口縁¼を欠く	体部内外一ヨコナデ 体部下端一手ヘラ削り 底部一回ヘラ切り後，一定方向の手ヘラ削り	R	中粒砂，長石，石英，雲母一多 密	灰色 口縁内外巾1.5cm程は暗灰色	良	体部外面および底部に「卄」の朱書 図版63—7
14	坏 (須恵器)	13.1 4.3 6.3	口縁¼を欠く	体部内外一ヨコナデ 体部下端一手ヘラ削り 底部一切り離し不明，一定方向の手ヘラ削り	R	粗粒砂，長石，石英一多 雲母一少	暗赤褐色	良	底部に「キ」線刻 酸化焔焼成 図版63—8
15	坏 (須恵器)	— 〈2.6〉 6.6	底部⅔	体部内外一ヨコナデ 底部一回糸切り後，無調整	R	粗粒砂，長石，石英一多	灰色	良	
16	坏 (須恵器)	— 2.9 7.2	⅕	体部内外一ヨコナデ 体部下端一手ヘラ削り 底部一回ヘラ切り後，一定方向の手ヘラ削り	R	細礫，長石，石英一多 粗	灰色	良	底部に「卄」の朱書
17	坏 (須恵器)	13.2 4.6 6.7	⅕	体部内外一ヨコナニデ 体部下端一回ヘラ削りか 底部一切り離し不明，不定方向の手ヘラ削り	不明	粗粒砂，長石，石英，雲母一多 粗	黒褐色	良	
18	高台付坏 (須恵器)	17.6 6.8 高台径 9.4 高台高 1.1	⅓	体部内外～高台一ヨコナデ 底部一切り離し不明，回転ヘラ削り	R	粗粒砂，長石，石英，雲母一多	黒褐色	良	体部外面に「卄」の線刻 図版63—9
19	甕 (土師器)	 〈22.5〉 —	胴下半⅓	胴部内面一輪積痕を残す 胴部外面一縦方行の細いヘラ磨キ		細礫，長石，石英，雲母一多	赤褐色	良	
20	甕 (土師器)	— 11.0 7.9	胴下半のみ	胴部内面一ヘラナデか 胴部外面一調整不明 胴部下端一ヘラ削り 底部一木葉痕あり		細礫，長石，石英，雲母一多	淡赤褐色	良	外面には山砂が付着
21	甕 (土師器)	10.0 〈3.3〉 — 頸部径 10.2	¼	口縁内外一ヨコナデ 胴部内面一ヘラナデ 胴部外面一横位のヘラ削り		粗粒砂一多 雲母一少	暗褐色	良	
22	台付甕 (土師器)	— 3.4 8.8	脚部のみ	脚部内外一ヨコナデ		粗粒砂雲母一多 長石，石英一多	暗褐色	良	
23	甕 (須恵器)	〈23.8〉 7.2 — 頸部径 (18.8)	口頸部¼	口縁内外一ヨコナデ 胴部内面一ヘラナデ 胴部外面一平行叩キ		中粒砂，長石，石英，雲母一多	黒褐色	良	
24	甑？ (須恵器)	(24.0) — —	口縁⅙	胴部内面～口縁一ヨコナデ 胴下半内面一指頭による押圧の後，ヨコナデ 胴部外面一平行叩キ		中粒砂，雲母一多 長石，石英一少	灰白色	やや甘	

挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
25	甑？ 甕（須恵器）	(28.8) — —	口縁⅙	口縁内外—ヨコナデ 頸部内面—ヘラナデ 胴部内面—指頭による押圧の後，ヨコナデ		中粒砂，長石，石英，雲母—多	黒褐色	良	
26	甕（須恵器）	— 〈15.1〉 16.3	胴下半のみ	胴部内面—横方行のナデ 胴部外面—平行叩キ 胴部下端—叩キ後，横方向のヘラ削り		中粒砂，雲母—多 長石，石英—少	灰白色	甘	

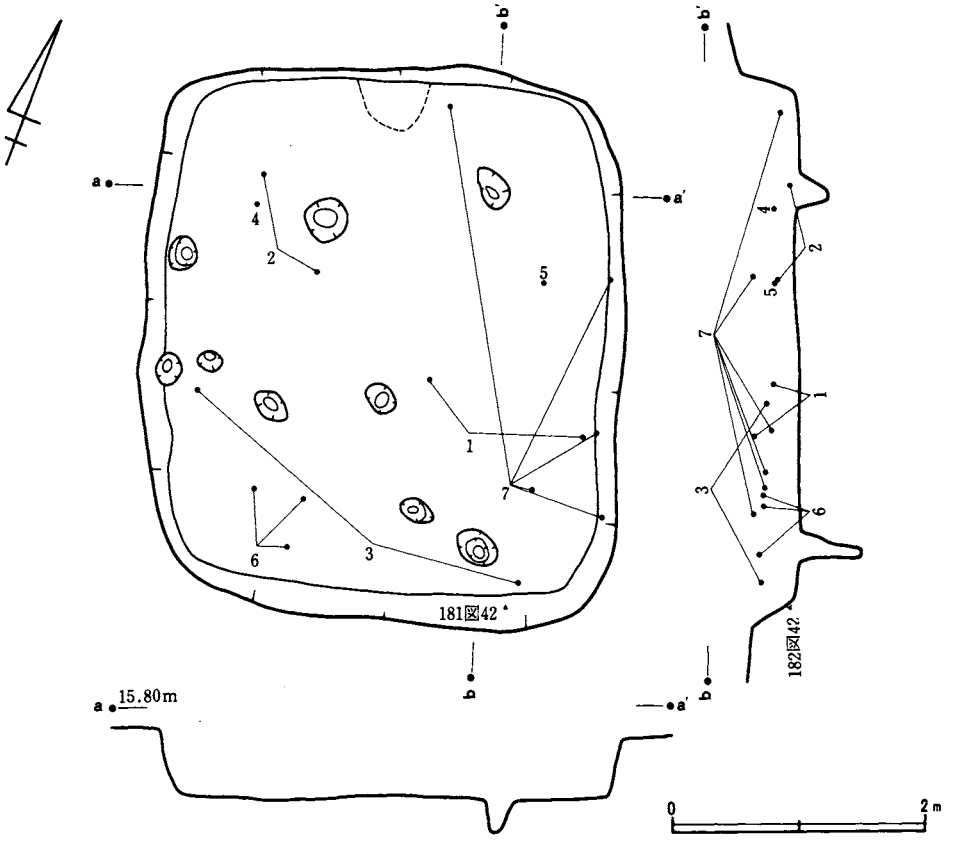
035住居跡

プラン 長方形　**規模** 4.2×3.7m　**主軸方向** N—21°—W

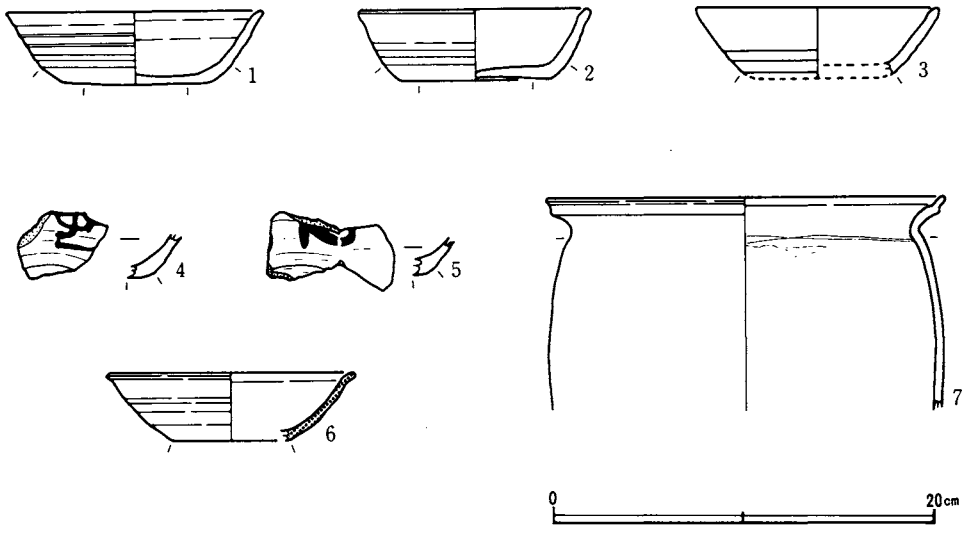
所見 壁の中央部に僅かであるがカマドの痕跡を残す住居跡である。現存壁高は40～50cmを測る。周溝は検出されず，またピットも数多くあるが並びが整然とせず，柱穴とするには疑問が残る。

遺物はほとんど床面から浮いた状態で出土している。土師器坏には墨書されたものもある。また不明鉄製品（181図42）も出土している。

時期 花前Ⅶ期



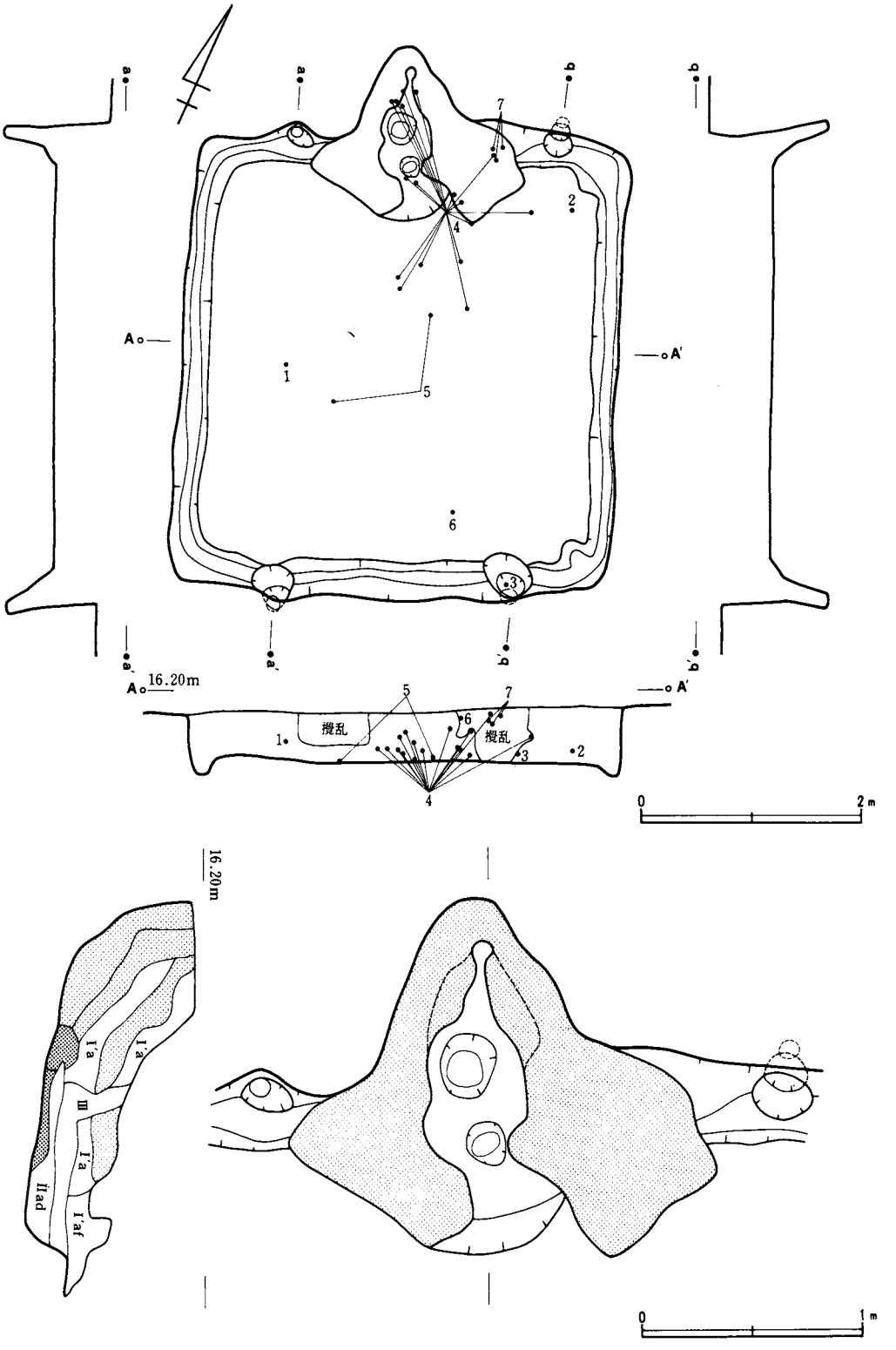
第119図　035住居跡



第120図　035住居跡出土遺物

035住居跡出土遺物

挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
1	坏 (土師器)	13.4 3.9 7.2	1/3	体部内外一ヨコナデ 体部下端一回ヘラ削り 底部一回糸切り後，周縁回ヘラ削り	R	中粒砂，スコリア（酸化鉄粒）一少 密	淡黄褐色	良	外面2/3（全体）は黒色処理されたかのようになるが，ススの付着か
2	坏 (土師器)	12.0 3.8 8.0	1/8	体部内外一ヨコナデ 体部下端一回ヘラ削り 底部一回糸切り後，周縁回ヘラ削り	不明	中粒砂，スコリア（酸化鉄粒）一少	乳橙色	良	
3	坏 (土師器)	12.6 〈3.6〉 —	底部1/3欠く	体部内外一ヨコナデ 体部下端一回ヘラ削り		中粒砂，スコリア（酸化鉄粒）一少	乳橙色	良	
4	坏 (土師器)	— — —	破片	体部内外一ヨコナデ 体部下端一回ヘラ削り		中粒砂一多	乳橙色	良	体部外面に墨書
5	坏 (土師器)	— — —	破片	体部内外一ヨコナデ 体部下端一回ヘラ削り		中粒砂一多	暗褐色	良	体部外面に墨書
6	坏 (須恵器)	12.8 3.5 6.1	1/4	体部内外一ヨコナデ 底部一回糸切り		中粒砂一微量 密	灰色	堅緻	
7	甕 (土師器)	20.8 〈11.2〉 胴最大径 20.8	1/4	口縁部内外一ヨコナデ 頸部内面一ヘラナデ 胴部外面一ナデ		中粒砂・雲母一多 長石・石英一少	暗褐色	良	



第121図　036住居跡

036住居跡

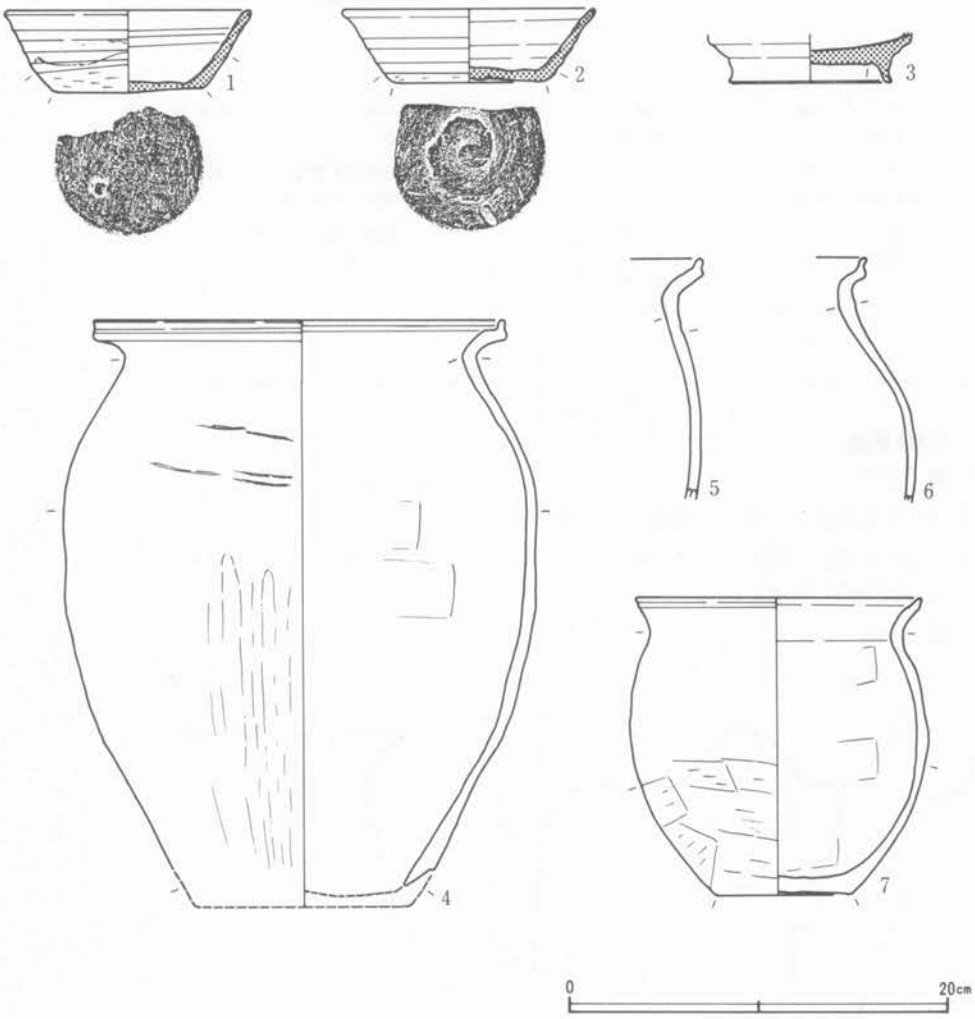
プラン　正方形　　**規　模**　一辺４ｍ　　**主軸方向**　Ｎ－24°－Ｗ

所　見　比較的遺存状態の良い住居跡である。柱穴は周溝内に４ケ所設けられ，特異な四本柱の形態をとる。深さはいずれも45cm程度となる。周溝は幅20cm，深さ10～15cmで全周する。現存壁高は40～50cmを測る。

遺物量は多くないが，床面直上とカマド周辺から出土するものが多い。

土師器甕はすべて口唇部をつまみ出すタイプのもので，器形の大小がある。また須恵器坏は口径と底径の差が比較的小さいものである。

時　期　花前Ⅱ期



第122図　036住居跡出土遺物

036住居跡出土遺物

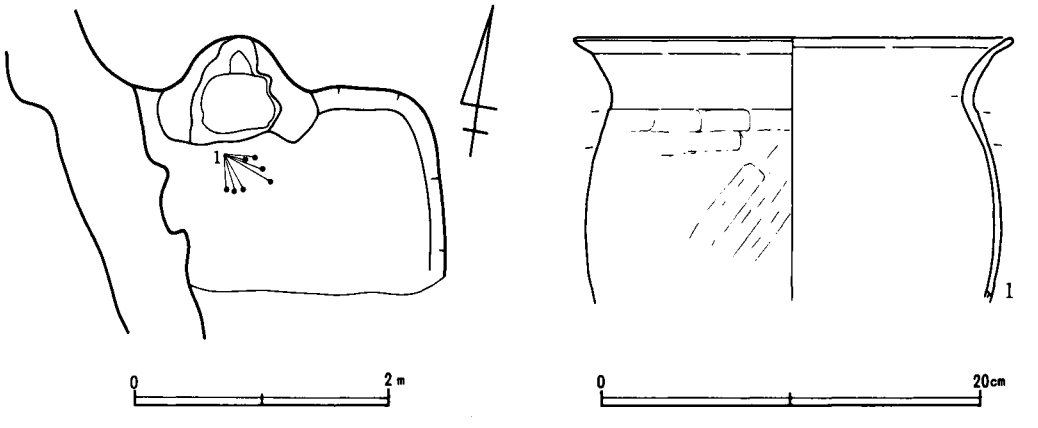
挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
1	坏 (須恵器)	12.7 4.3 7.7	½	体部内外一ヨコナデ 体部下端一回ヘラ削り 底部一切り離し不明，二方向の手ヘラ削り	R	細礫，長石，石英一多 雲母一少	灰色	良	図版64－1
2	坏 (須恵器)	13.2 3.9 8.0	⅔	体部内外一ヨコナデ 体部下端一回ヘラ削り 底部一回ヘラ切り後，数方向の手ヘラ削り	L	粗粒砂，長石，石英一少 雲母一多	灰白色	良	
3	高台付坏 (須恵器)	— 〈2.5〉 高台径 8.4 高台高 1.0	体部～口縁欠く	体部内面一ヨコナデ 高台部内外一ヨコナデ 底部一回ヘラ後，回ヘラ削り	R	細礫，長石，石英一多	青灰色	良	
4	甕 (土師器)	21.6 〈29.6〉 — 胴最大径 25.2	⅗底部欠く	口縁内外一ヨコナデ 胴部内面一ヘラナデ 胴部下半一わずかに細いヘラ削りを残す。		粗粒砂，長石，石英，雲母一多	暗褐色	良	図版64－2
5	甕 (土師器)	口縁径 (25.0)	⅙	口縁内外一ヨコナデ 胴内面一ヘラナデ		中粒砂・雲母・長石・石英一多	明黄褐色	良	
6	甕 (土師器)	口縁径 (19.6)	¼	口縁内外一ヨコナデ		中粒砂・雲母・長石・石英一多	赤褐色	良	
7	甕 (土師器)	14.9 15.5 7.2 胴最大径 15.7	⅔	口縁部内外一ヨコナデ 胴部内面一ヘラナデ 胴部外面一ナデ 胴部下半一幅広のヘラ削り 底部一木葉痕		細礫・長石・石英・雲母一多	暗褐色	良	図版64－3

038住居跡

所　見　北壁のカマドとその周辺だけを検出したもので，形状，主軸方向などを知ることはできない。検出された範囲内では柱穴，周溝ともに認められない。

出土遺物も僅かに甕1点だけである。この甕は武蔵型と呼ばれるもので，口縁部は「く」の字と，「コ」の字状の中間的な形態を示している。

時　期　不明（花前IV～V期か）

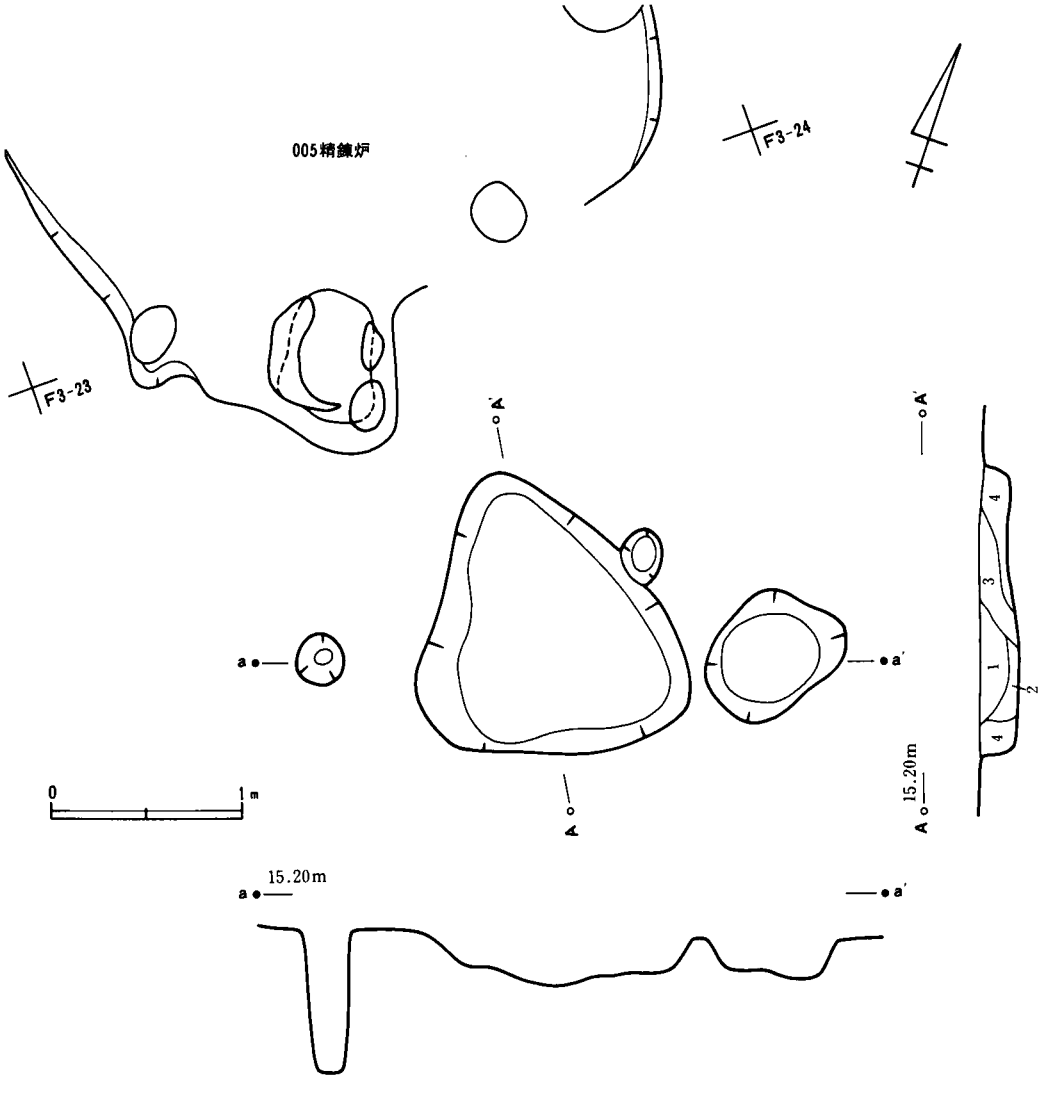


第123図　038住居跡及び出土遺物

038住居跡出土遺物

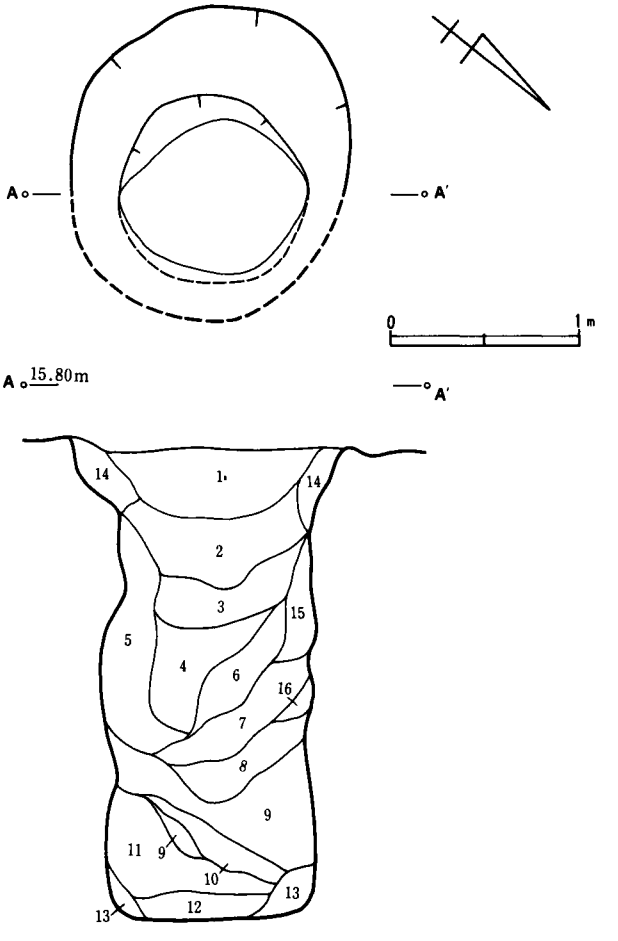
挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
1	甕 (土師器)	22.7 〈13.0〉 — 胴最大径 21.7	1/3	口縁部内外—ヨコナデ 胴部内面—ナデ 胴部上位—横位のヘラ削り 胴部中位—斜位のヘラ削り		中粒砂—多	赤褐色	やや甘	

土坑



1. 黒色土 焼土粒,暗褐色土粒を含む。
2. 黒色土 1層に近い,暗褐色土粒は少なく,木炭粒を含む。
3. 茶褐色土 焼土,焼土粒を含む。
4. 暗茶褐色土 わずかに焼土粒を含む。

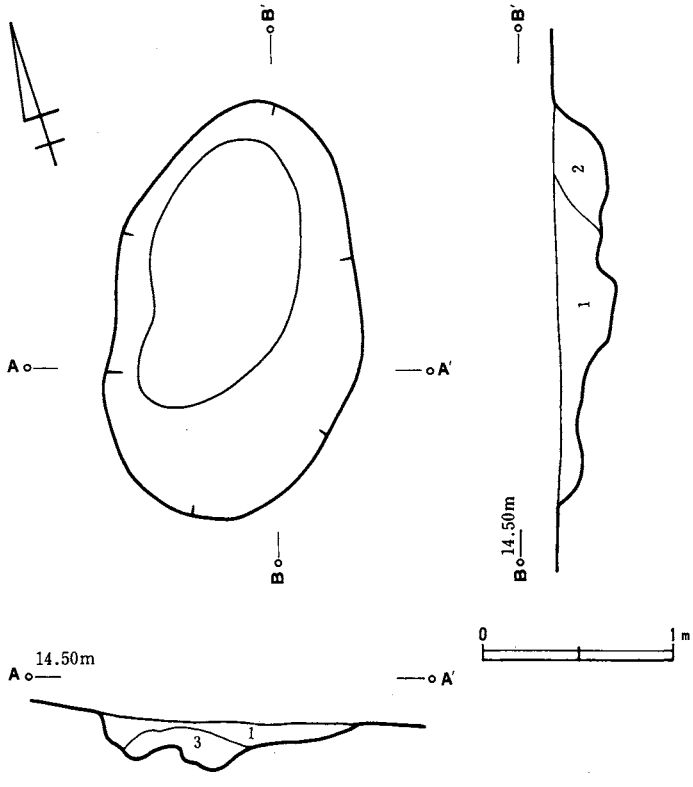
第124図 006土坑



第125図　015土坑

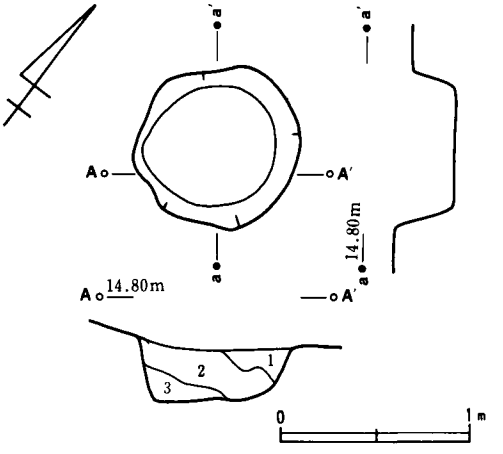
217—013—015土坑

1. 茶 褐 色 土　ローム粒・炭化物粒をわずかに含む。ややしまりがある。
2. 暗茶褐色土　1層に若干の黄褐色土を含む層。
3. 茶 褐 色 土　1層に5cm程の茶褐色土のブロックを含む層。
4. 茶 褐 色 土　1層よりローム粒の割合が大きい。
5. 茶 褐 色 土　ローム粒・小さいロームブロックを，たいへん多く含む。
6. 茶 褐 色 土　5層に近いがロームブロックの割合が小さい。
7. 黄茶褐色土　小さいロームブロックを少し含む。ややしまりを欠く。
8. 暗茶褐色土　7層に黒褐色土が混入。全くしまりがない。
9. 黄茶褐色土　ローム粒・茶褐色土粒の堆積。しまりがない。
10. 暗茶褐色土　小さいロームブロック・炭化物粒をわずかに含む。
11. 茶 褐 色 土　黒褐色土・ローム粒を含む。ややしまりがある。
12. 黒黄褐色土　茶褐色土をわずかに含む。非常にしまっていて粘性がある。
13. 黒 褐 色 土　黄褐色土を含む。
14. 黄茶褐色土　暗褐色土を含む。しまりがある。
15. 黄茶褐色土　ローム粒をわずかに含む。全くしまりがない。
16. 暗茶褐色土　7層の特に暗い部分。



1. 暗褐色土 焼土粒,焼土ブロック(最大7～8cm)を含む,茶褐色土も混じる。
2. 暗褐色土 1層と同様の焼土粒,ブロックを含む。
3. 暗褐色土 大量の焼土粒を含む。

第126図　022土坑



1. 黒色土＋暗褐色土
2. 黒色土＋暗褐色土＋ロームブロック
3. 暗褐色土

第127図　026土坑

精錬炉

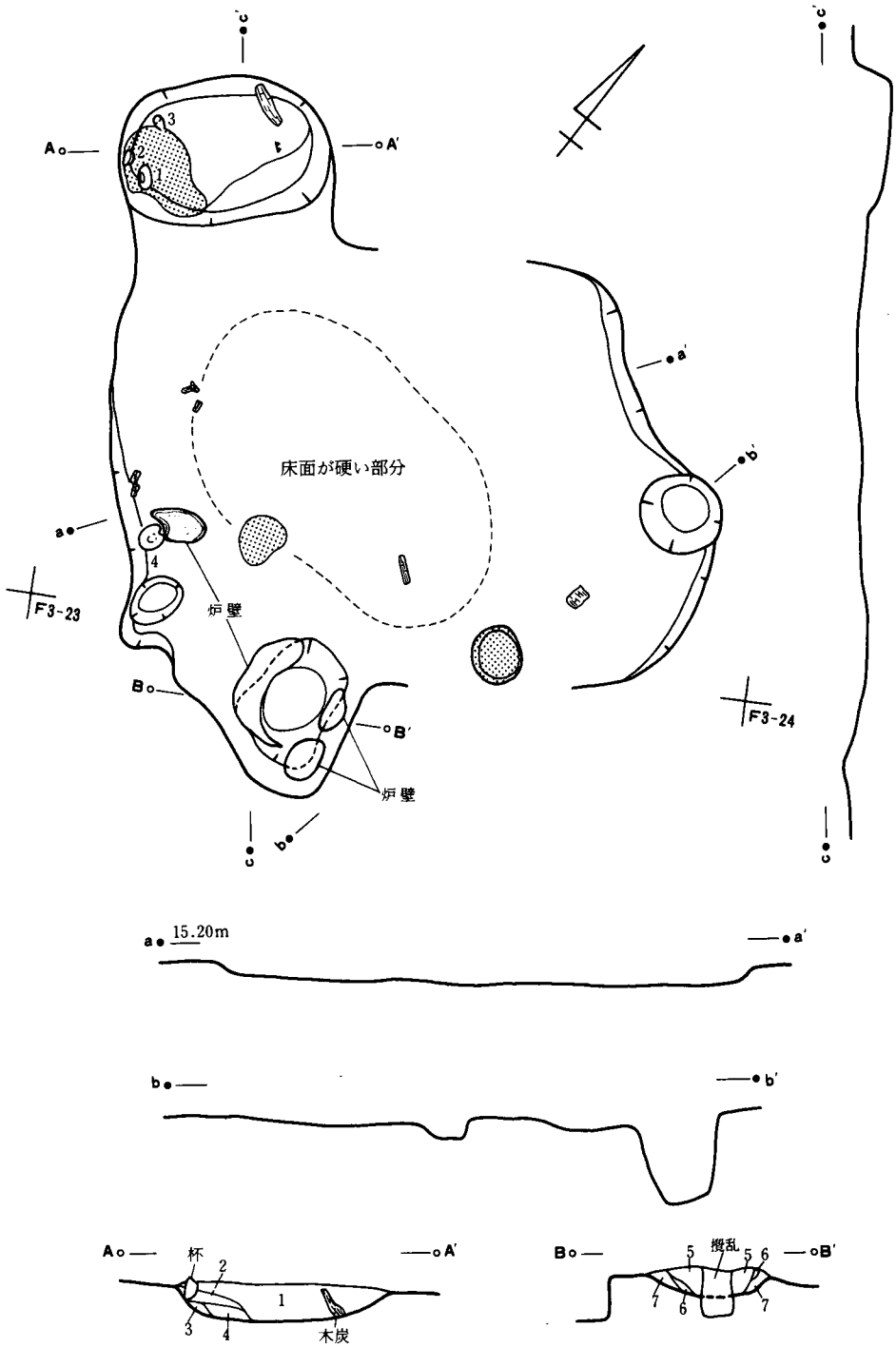
005精錬炉（第128図）

位　置　F３－18，23グリッド　製鉄に関係する遺構の中で台地の平坦部分の最も奥まった所にある。精錬炉の平均的な標高は約15mである。

構　造　遺構はトレンチャーによる攪乱がひどく，不明確な部分が多い。炉本体の形状も残りが悪く明確でないが掘りこみは，長径７０cm，短径45cm，深さ（現存部分）15cmほどの浅いすり鉢状の不整長円形である。東西に３ヶ所，茶褐色土が残っていて，炉壁もしくはうらごめと思われる。これらをもとに炉の内のりを考えると約35×50cmの円形ないし長円形が推定されるが，この茶褐色土についての詳しい観察を行なわなかったため，規模・構造は確定できない。

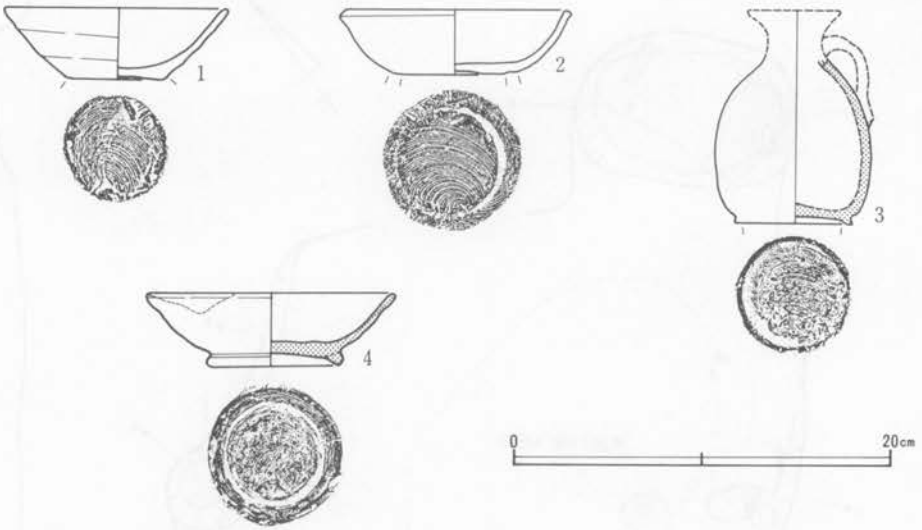
炉本体の北西から北東にかけて，固くしまっている部分（1.2×2.0mほどの長円形）が残っていて，精錬炉に伴う，作業面と考えられる。この固い床面の周囲には，大小４つのピットが確認されている，北西側のピットは最も大きく，長径1.2m，短径0.8m，深さ0.25mほどの長円形で南西側には焼土が堆積している。また炭化材や炭化物粒も多く，土器，鉄器，鉄滓も，少なくない。北東側のピットは最も深く，径0.45mぐらいの円形で深さは0.5mである。炉のすぐ北東側にあるピットは焼土の堆積が確認されている。炉やこれらのピットを囲むようにして巡っている浅い落ちこみを，本精錬炉の原形と断定するのは，多少の疑問が残るが，現時点では，これを外形として，おさえておくことにする。ただ本遺構の南側に006土坑があり，検出状況等からも関連があることは確実と思われる。

遺物は土器をはじめとして鉄滓，炉壁片，炭化材，焼土等が散在しており，点数は多い方で



1．黒　色　土　鉄滓・土器片等が多い。ややしまりを欠く。
2．茶 褐 色 土　焼土を多く含む。
3．暗茶褐色土　焼土・炭化物粒を含む。
4．茶 褐 色 土　焼土・炭化物粒・ローム粒を含む。
5．暗茶褐色土　小さな焼土ブロック・炉壁片を含む。
6．赤 褐 色 土　7層が焼土化したもの。
7．茶 褐 色 土　わずかに焼土を含む。うらごめ（?）

第128図　005精錬炉



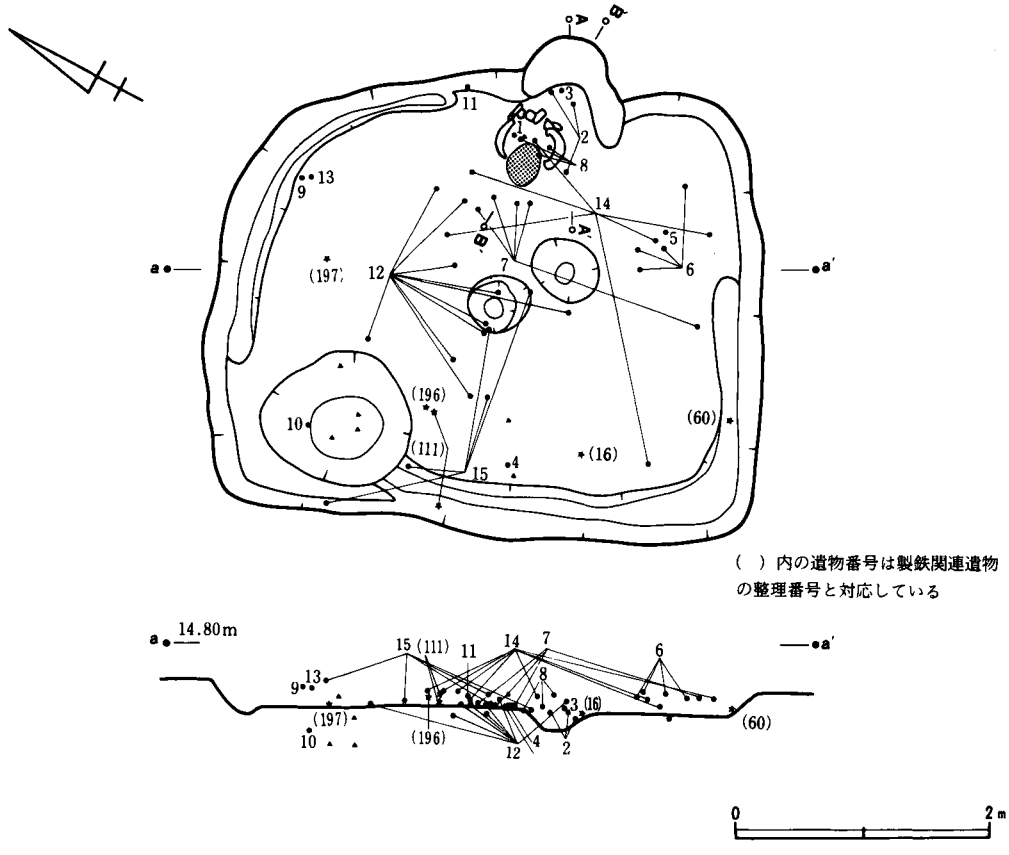
第129図　005精錬炉出土遺物

005精錬炉出土遺物

挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
1	坏 （土師器）	11.7 3.8 5.4	完形	体部内外一ヨコナデ 底部一回糸切り		細粒砂，赤色スコリアー多 密	橙褐色	良	図版59－7
2	坏 （土師器）	11.8 3.4 5.4	3/4	口唇部一貼り出しが，著しく強い 体部内外一ヨコナデ 底部一回糸切り，周縁ヨコナデ，外縁回糸切り痕有り		細粒砂一多 密	暗褐色	良	底部内面「メ」線刻 図版59－8
3	手付小瓶 （灰釉）	－ － 6.1 胴最大径 8.3	口頸部欠損	胴部外面一ヨコナデ 底部一回糸切り，周縁ヨコナデ		微粒・細粒砂 密	地一暗灰色 釉一暗緑色	良	黒笹14号窯式
4	埦 （灰釉）	13.0 3.8 7.2	口縁部1/8欠損	体部内外一ヨコナデ 高台部内外一ヨコナデ 底部一回糸切り，周縁ヨコナデ		細粒砂，細礫一少 密	地一灰色 釉一淡緑色	良	折戸53号窯式併行静岡旗指窯の製品か？ 図版59－9

ある。鉄滓は78点が出土したが，いずれも磁着度（小結参照）3，4に限られている。埦形滓は発見されていない。

時　期　花前Ⅷ期



第130図　009住居跡

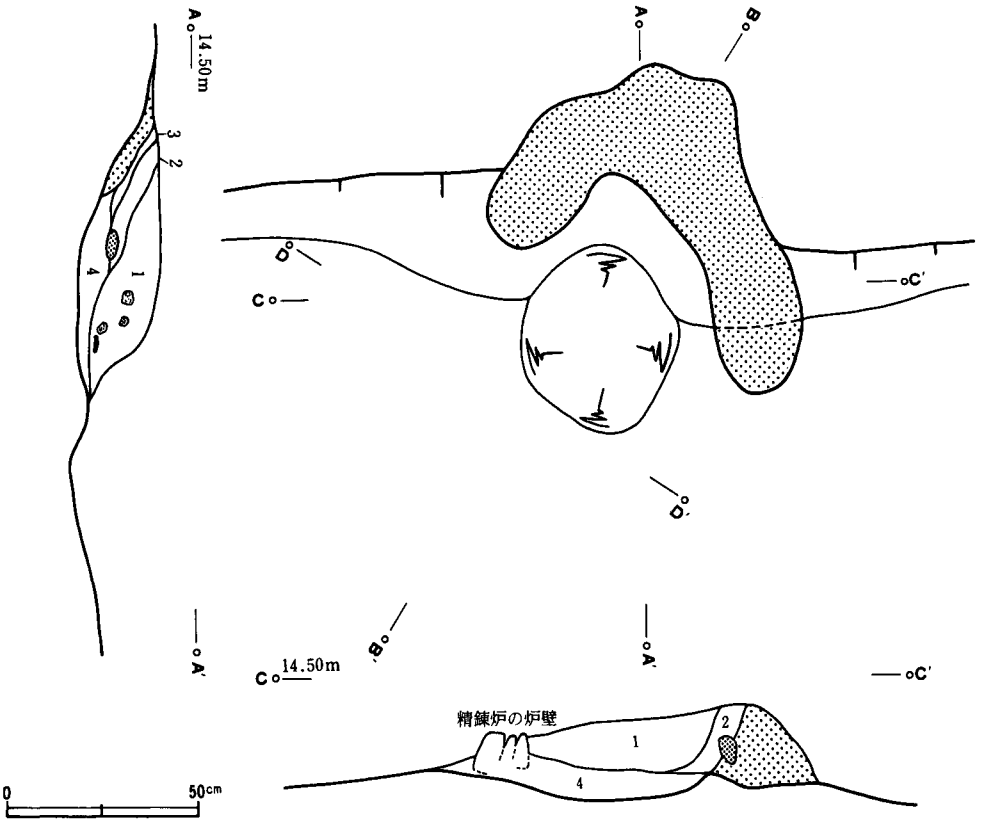
009住居跡（第130～132図）

プラン　長方形　　**規　模**　4.3×3.6m　　**主軸方向**　N—64°—E

所　見　北東のコーナー部が大きく湾曲し，不整長方形を呈する住居である。東壁にカマドを構築し，周溝は北東と南西の２ヶ所で検出され，幅20cm，深さ５cmを計る。壁高は，約20cmである。カマドの西側に精錬炉が構築されるが，土層断面や検出状況から判断して，カマドの廃棄後に作られたものと考えられる。

遺物は土師器坏・甕・甑と須恵器甕がある。14の甑は口縁直下に２個の把手状の突起が添付されるが形状は粗雑で小さく，また，胴最大径よりも内側に付くことから，把手としての役目は果さず，把手付甑の最も退化した形態と考えられる。また15の甕も，胴部外面にタタキの痕跡もなく，胎土，焼成も従来の須恵器と異なり，時代的には須恵器生産の末期の所産ではないかと考えられる。

時　期　花前IX期



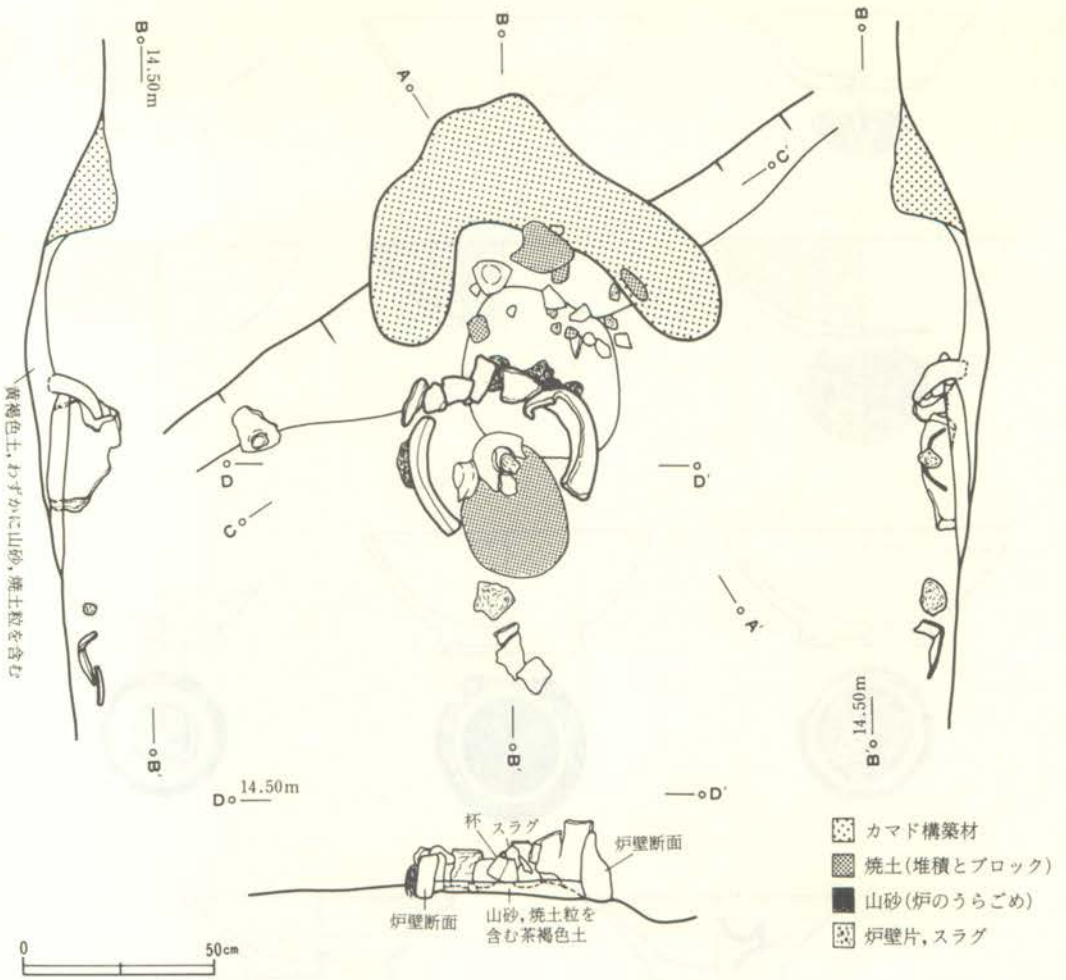
1．灰黒色土　焼土ブロック・炉壁片を含む。下位に遺物が多い。
2．茶褐色土　焼土粒・山砂を含む。下位に遺物が多い。
3．灰茶褐色土　2層に4層が混じる。
4．黄褐色土　わずかに山砂・焼土粒を含む。

第131図　009住居跡カマド

009住居跡内精錬炉

位　置　精錬炉は前述したようにカマドの手前（西側）に作られている。炉はカマドの焚き口部分と重複しており，土層の観察等からカマドよりも若干新しい時期の構築と推定される。

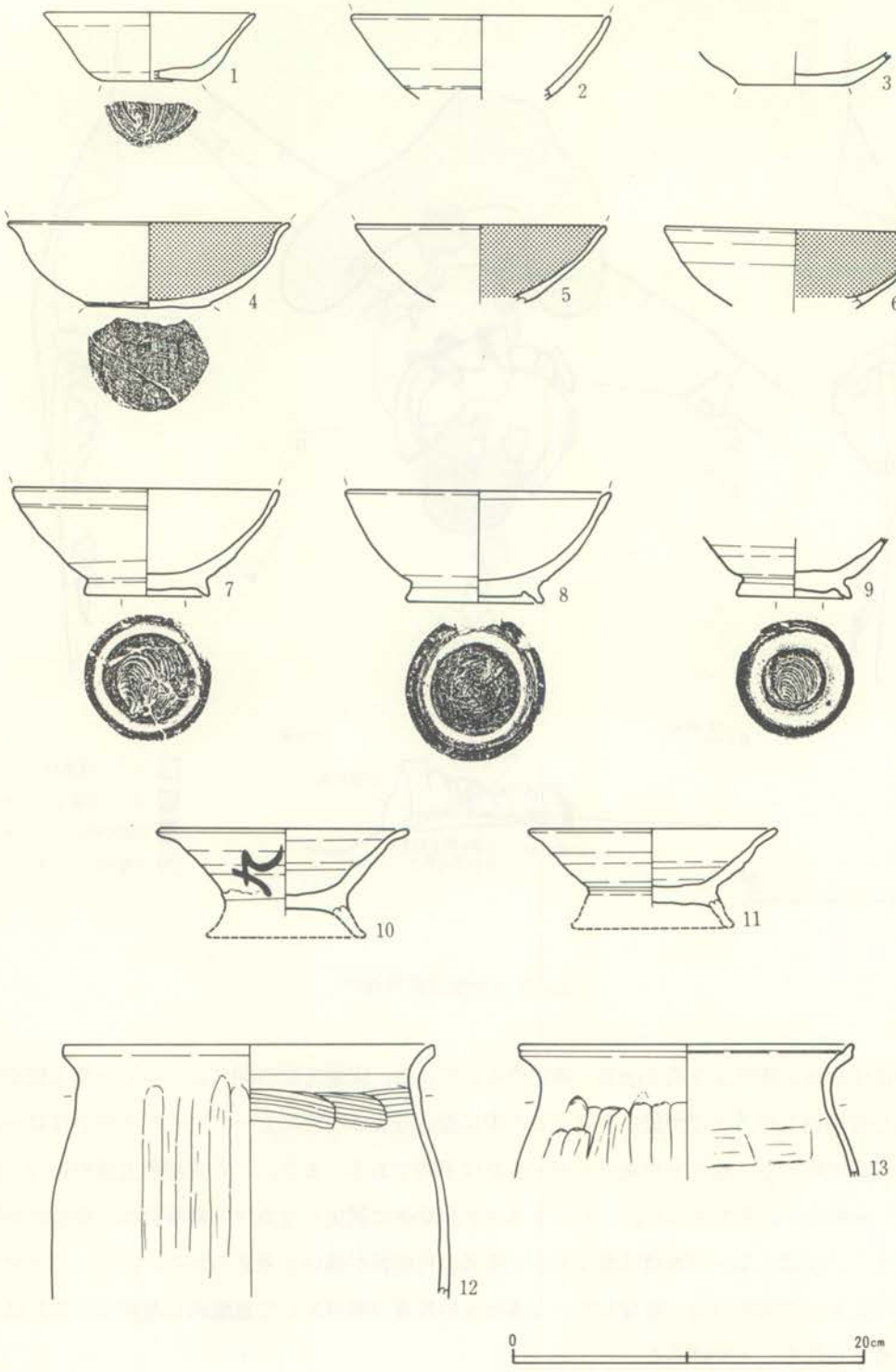
構　造　炉本体は径50cmほどの円形ないし長円形に炉壁が残っていた。炉壁は大形の破片が残っているものと、小形のものとの2通りがある。大形の炉壁は長さ40cmほどのもので炉の南北に2つあって，ちょうど「こ」の字状に向かい合っている。小形のものは，炉の東側にあって大形の炉壁の間を埋めるように並んでいる。発見されたのは長径が5cm～10cmの5個である。これらの炉壁は製錬炉の炉壁を再利用している可能性が高い。また炉壁と炉壁の間や炉壁の外側（うしろ側）には，スサを含まない山砂が所々に残っている。この山砂はうらごめと考えられ，本来炉壁の外側全体を覆っていたと思われる。炉の西側からは炉壁は検出されていない，また焼土の堆積もこの部分から炉外へ流れている，これらのことから羽口の挿入口あるいは，開口部等がこの部分にあった可能性が考えられる。



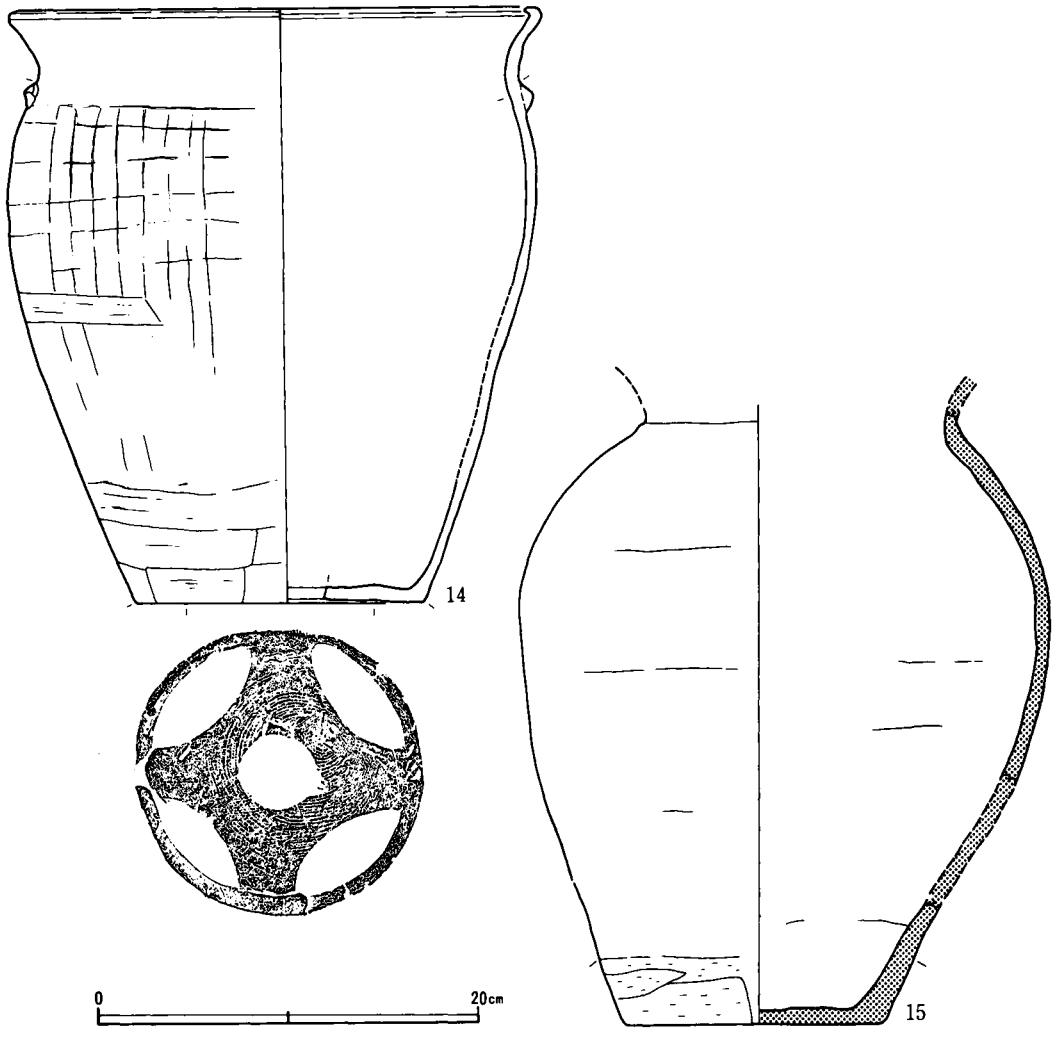
第132図　009住居跡精錬炉

炉は住居跡の床面より約5㎝高い所に作られている，床面と炉の間には，山砂と焼土粒を少量含む黄褐色土があって炉壁は下端をこの中に差込むような形で立っている。その下はローム層の床面で炉の下に掘り方があったかどうかは不明である。また，この黄褐色土層が炉の下部構造（調整土）にあたるのか，それともカマド廃棄後に流失したカマド構築材の一部なのか確認することはできないが堆積状態などから後者の可能性が強いと考えられる。ただし、カマドの使用によって床面が良く乾燥している場所を炉設置の場所として意識的に選択したことは充分に考えられることではある。

遺物は土器の他に鉄滓，炉壁片，焼土ブロック等がある。炉の中央からは，土師器の坏が伏せた状態で発見されているが精錬炉とは直接関係ないものと思われる。他には，製鉄関係の遺物が確認されていて興味をひく。



第133図　009住居跡出土遺物

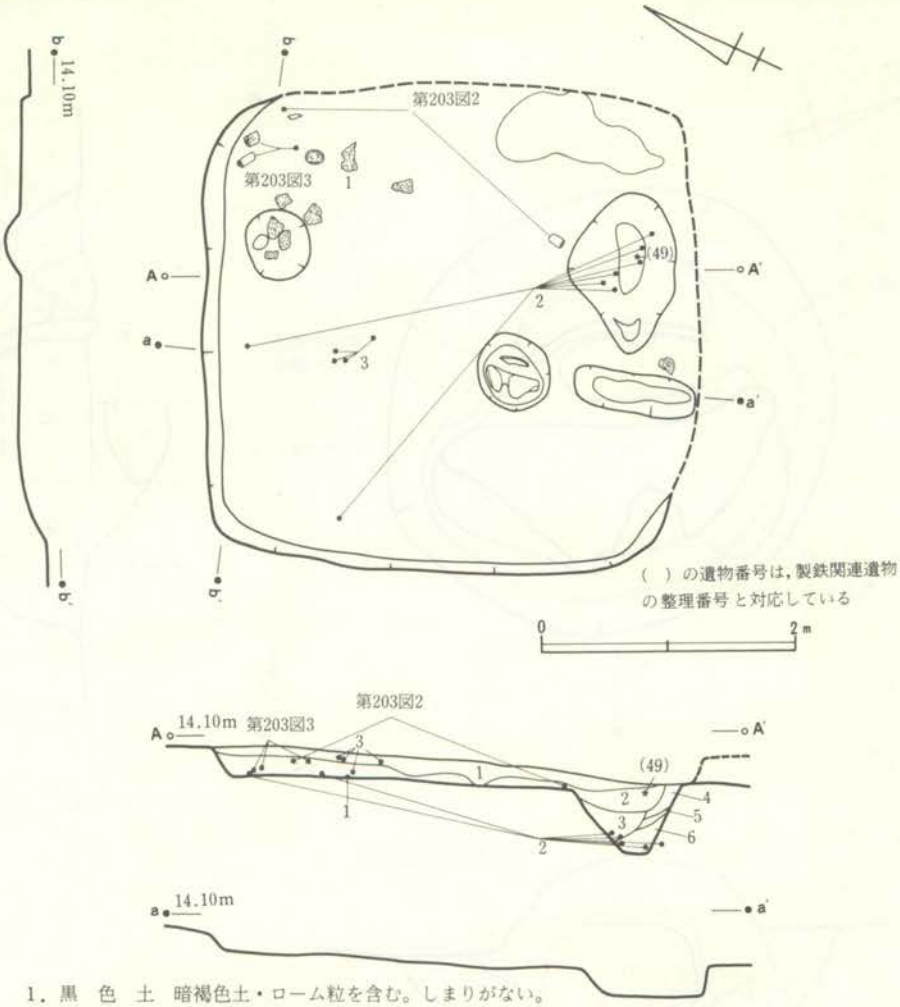


第134図　009住居跡出土遺物

009住居跡出土遺物

挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
1	坏 (土師器)	(11.6) 3.9 5.4	1/5	体部内外ーヨコナデ 底部ー回糸切り		粗粒砂。アマリアー多	淡褐色	良	
2	坏 (土師器)	(14.6) ー ー	1/3	体部内面ーヨコナデ後，ヘラ磨キ 体部外面ーヨコナデ		粗粒砂ー多 長石・雲母・スコリアー少	淡褐色	良	
3	坏 (土師器)	ー 〈2.0〉 6.1	底部のみ	体部内面ーヨコナデ後，ヘラ磨キ 体部外面ー手持ヘラ削り 底部ー回糸切り後，手ヘラ削り		中粒砂ー多，粗粒砂・雲母ー少	内ー赤褐色 外ー淡褐色	良	

挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
4	坏 (土師器)	(15.8) 4.9 7.0	1/4	体部内面—ヨコナデ後，ヘラ磨キ 体部外面—ヨコナデ 底部—切り不明，手ヘラ削り		粗粒砂・雲母—少 密	暗赤褐色	良	内黒
5	坏 (土師器)	(14.1) 〈4.5〉 —	1/8	体部内面—ヨコナデ後，ヘラ磨キ 体部外面—ヨコナデ		中粒砂—多，雲母—少	明赤褐色	良	内黒
6	坏 (黒色土器？)	(14.6) 〈4.6〉 —	1/8	体部内面—ヨコナデ後，ヘラ磨キ 体部外面—ヨコナデ		中粒砂—多，雲母—少	黒褐色	良	内黒
7	高台付埦 (土師器)	14.6 6.0 高台径 7.1	口縁1/4を欠損	体部内面—ヘラ磨キ 体部外面～高台—ヨコナデ 底部—回糸切り		中粒砂—粗粒砂—多 雲母—少	暗褐色	良	体部内面に一部赤彩の痕跡を残す
8	高台付埦 (土師器)	14.9 6.3 高台径 7.9	口縁1/6欠損	体部内面—ヨコナデ後，ヘラ磨キ 体部外面，底部—ヨコナデ		粗粒砂—多，雲母—少	内—暗褐色 外—橙褐色	良	図版60—1
9	高台付埦 (土師器)	— 〈3.5〉 6.5	口縁部欠損	体部内外面～高台—ヨコナデ 底部—回糸切り		中粒砂—多，雲母—少	橙褐色	良	
10	高台付坏 (土師器)	14.0 〈4.5〉 —	高台部欠損	体部内外—ヨコナデ 底部—ヨコナデ		粗粒砂・長石・雲母・スコリア—多	橙褐色	良	体部外面に「九」の墨書 図版60—2
11	高台付坏 (土師器)	13.8 〈4.2〉 —	高台部・口縁部2/3欠損	体部内外—ヨコナデ 底部—ヨコナデ		粗粒砂，長石—多	橙褐色	良	
12	甕 (土師器)	20.9 〈14.1〉 — 胴最大径 22.6	1/4	口縁内外—ヨコナデ 頸部内面—木口状工具によるナデ 胴部内面—ヘラナデ 胴部外面—ヘラ削り		細粒砂，雲母—多	暗褐色	良	
13	甕 (土師器)	18.8 〈7.3〉	1/8	口縁部内外—ヨコナデ 胴部外面—ヘラ削り		細粒砂・雲母—多	橙褐色	良	
14	甑 (土師器)	26.5 31.0 15.1 胴最大径 15.1	1/2	口縁部内外—ヨコナデ 胴部内面—ヘラナデ 胴部外面～下半—縦ヘラ削り後，ヨコヘラ削り 周縁—ヘラ削り 底部—回糸切り		中粒砂—多・長石—少	灰黄褐色	良	体部外面に粘土帯積み上げ痕を残す 図版60—3
15	甕 (須恵器)	— 〈31.7〉 13.7 胴最大径 13.6	口頸部欠損	胴部内外—ナデ 胴部下端～底部—手ヘラ削り		長石，粗粒砂—多	暗灰色	良	図版60—4



1．黒　色　土　暗褐色土・ローム粒を含む。しまりがない。
2．暗褐色土　焼土粒を含む。
3．黒　色　土　しみ状に暗褐色土を混入する。
4．黒褐色土
5．黄褐色土　ローム粒が主体となる。
6．黒褐色土　基本的に4層と同一だが焼土粒を多く混入する。

第135図　023住居跡

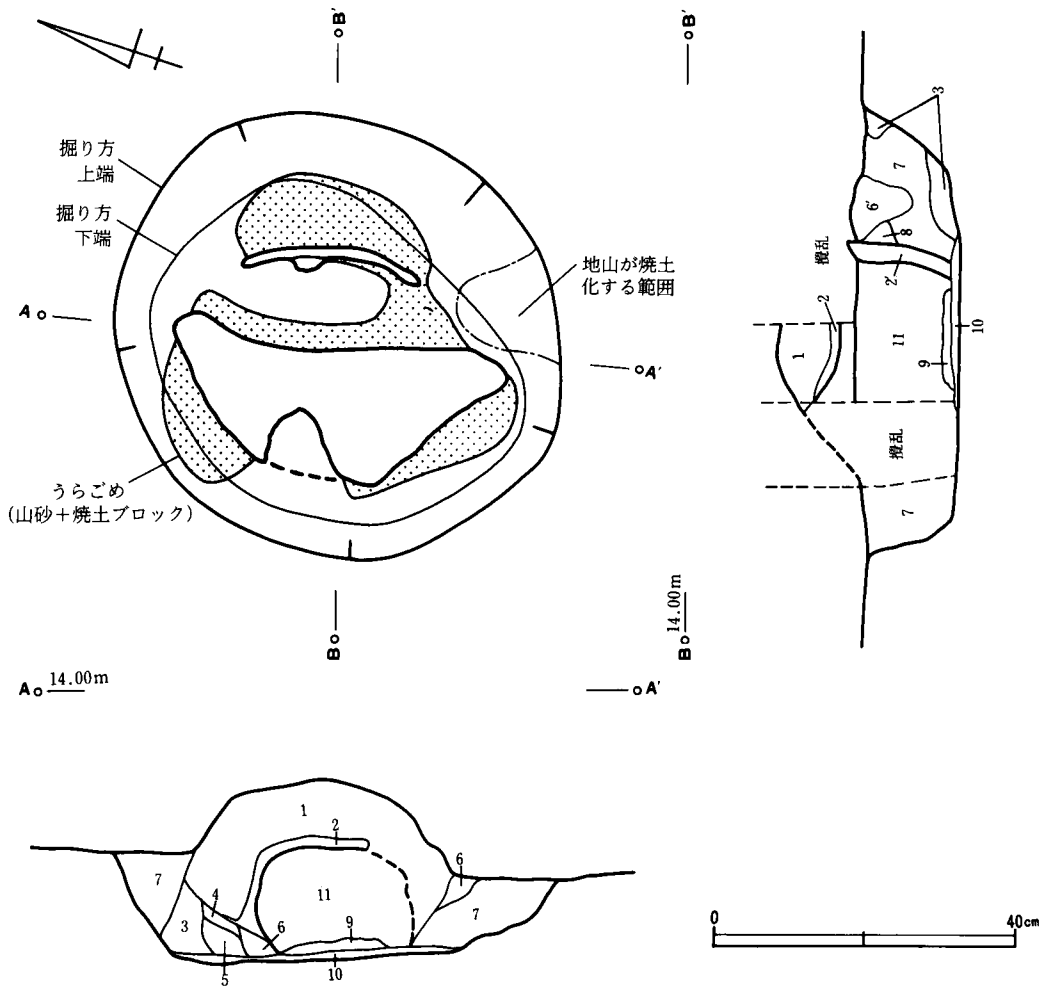
023住居跡（第135図）

プラン　正方形　　**規　模**　3.6×3.6m　　**主軸方向**　不明

所　見　北壁と南壁が削平されるため，全体の形状を知ることはできない。また，南東隅に山砂が散在してあり，カマドが存在した可能性を示すが，どの位置に構築されていたかは，不明である。住居中央のやや南寄りに精錬炉が構築され，鉄滓の出土量も極めて多い。

遺物は羽口・鉄滓などの製鉄に関連するもの以外に土師器坏・甕・甑がある。3は把手付の甑と考えられるが，009住居跡出土の甑と比較して，把手は大型になるものと推定でき，把手としての機能を充分に果すものである

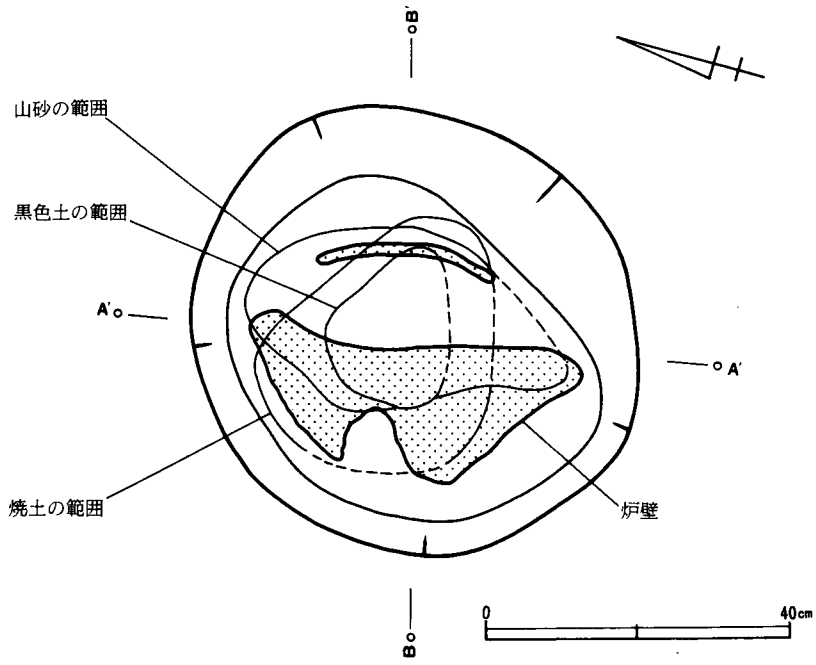
時　期　花前X期



1. 炉壁1. 山砂，粘土が固ったもの，熱を受け固くなっている。
2. 炉壁2. 炉壁内面もしくはごく内面に近いところ。溶けてはいないがきわめて固く焼けている。
2'. 炉壁3. 製錬炉の炉壁片を転用したと考えられる炉壁内面
3. 焼土
4. 黒色土 やわらかい。
5. 山砂＋黒色土 やわらかい。
6. 山砂
6'. 山砂 焼けている。
7. 黒色土＋山砂＋焼土ブロック＋ローム粒 全体にやわらかい。
8. 粘土
9. 鉄滓
10. 山砂
11. 黒色土 山砂・焼土粒を含むやわらかい。

※ 1～8までが炉の構築に関係するものと考えられる。

第136図　023住居跡内精錬炉(1)



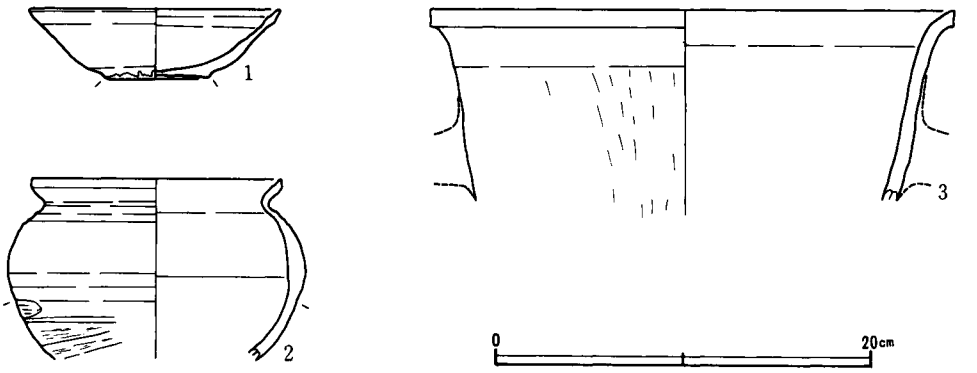
第137図　023住居跡内精錬炉(2)

023住居跡内精錬炉

精錬炉は前述のように住居跡の中央やや南寄り，最も南東側のピットの長軸の延長線上にある。炉底面の高さは床面から約15cm低い，標高13m65cmほどの位置にある。

炉全体は根による攪乱が多く，不明な点が多い。炉の外形は不整円形ないし長円形で径は40×35cm弱と推定される。炉壁は炉底面から約25cmまで残っている。西側の炉壁は粘土と山砂で作られ，あたかも円形のドーム状に残っている。東側は製錬炉の炉壁を再利用したものと思われる。炉壁の外と炉底には山砂と焼土ブロックの混ざったうらごめがある。炉底部分のさらに下には山砂が敷かれ下部構造となっている。第136図の3～5，7層は攪乱を受けた可能性があって本来的に下部構造に関係していたかどうかは疑問である。炉の掘り方は径60cm，深さ15cmほどの浅い円形のピットとなる。掘り方の南側は地山が焼土化しており焚き口部の可能性がある。また西側の炉壁の中央部分には径10cmほどの穴があいている。内面が焼けていること，うらごめが途切れることから挿入口の可能性がある。炉底部分からは鉄滓が出土している。

鉄滓を含めた遺物は全体にわたって出土するが羽口片，炉壁片は北側のピット周辺に，鉄滓は精錬炉と近接するピット内に集中する傾向がある。製鉄関係の遺物としては，椀形滓，鍛造剝片，鉄塊，獣脚鋳型（49）などがある。



第138図　023住居跡出土遺物

023住居跡出土遺物

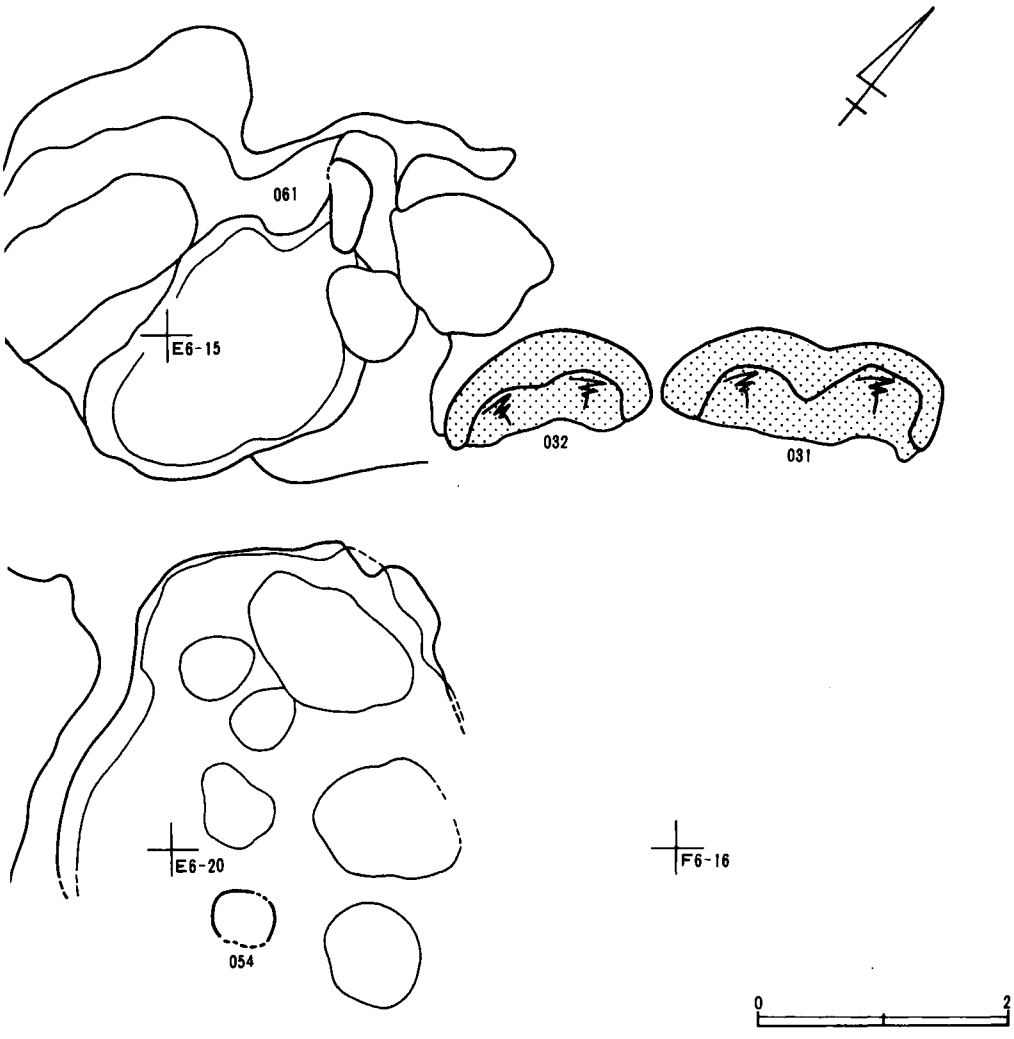
挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
1	坏 (土師器)	13.1 3.7 5.6	ほぼ完形	体部内外ーヨコナデ 底部ー回糸切リ		中粒砂，細礫ー多 スコリアー少	暗褐色	良	図版62ー6
2	甕 (土師器)	13.1 〈9.6〉 ー 頸部径 11.6	1/3	胴部内外ーヨコナデ 胴部下半ー回ヘラ削リ		中粒砂ー多 雲母，スコリアー少	暗褐色	良	図版62ー7
3	甑 (土師器)	28.4 〈10.1〉 ー	1/4	口縁部内外ーヨコナデ 体部内面ー調整不明		中粒砂ー多	灰褐色	良	二ケ所に把手がつくと思われる

斜面部（製鉄関連遺構、他）

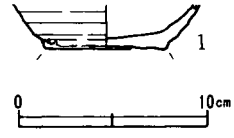
031・032カマド状遺構（第139図）

位　置　E6ー15・F6ー11グリッド　斜面部中位，標高約9.5m。061製錬炉，065土坑の東側

所　見　いずれもカマド様に山砂が堆積する遺構で，031は奥行0.8m，幅2.2m，032は奥行0.7m，幅1.6mほどの規模を持っている。位置的に1つの遺構として捉えるべきものかもしれない。ごく近くに製錬炉，精錬炉等が密集するところから，製鉄に関係がある遺構と思われるが，性格・時期等の詳細はわからない。



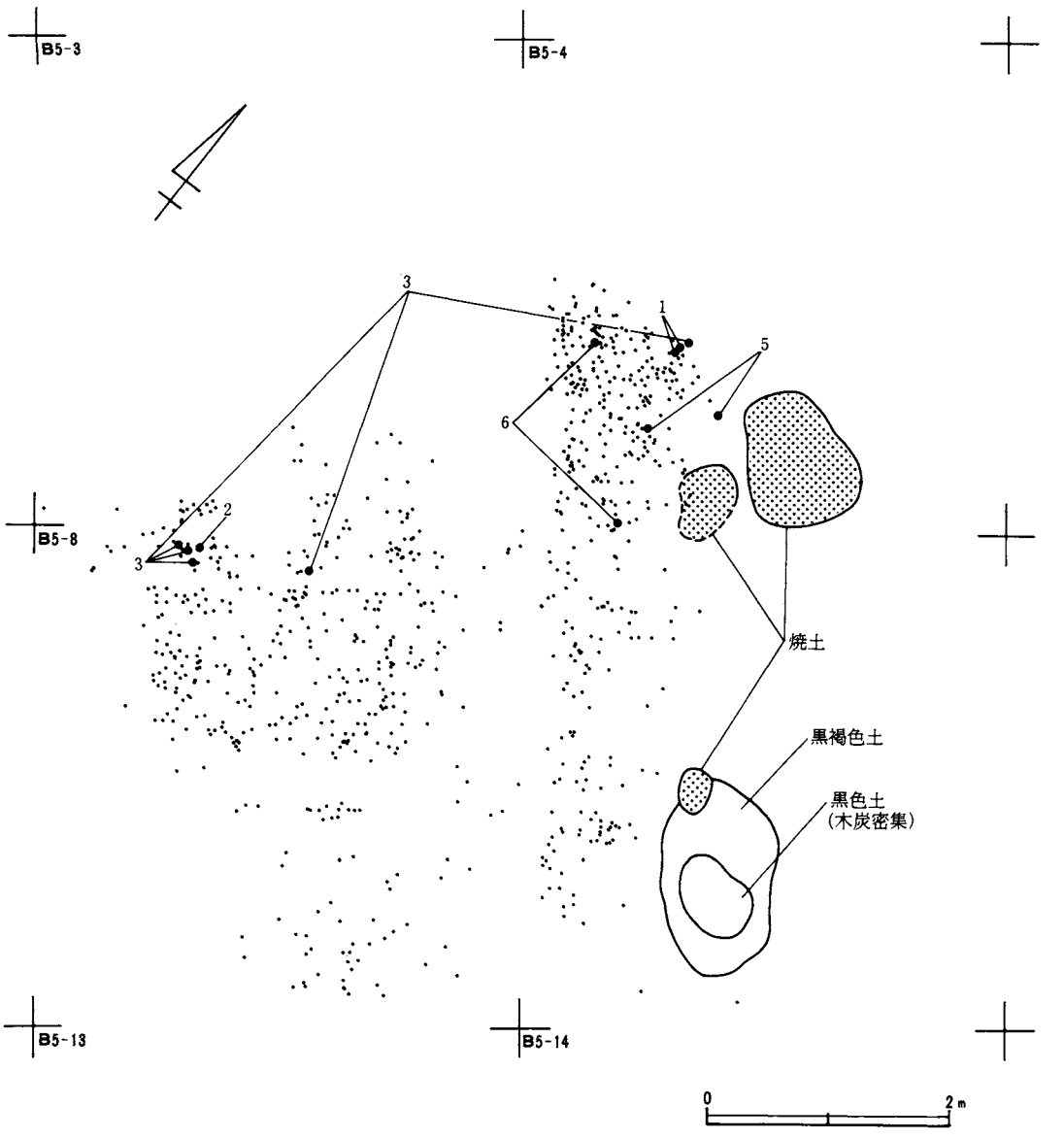
第139図　031・032カマド状遺構



第140図　031カマド状遺構出土遺物

031カマド状遺構出土遺物

挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
1	坏 (土師器)	— 2.3 6.4	底部3/3	体部内外—ヨコナデ 底部—回糸切り	R	粗粒砂—多 スコリアー少	乳橙色	良	

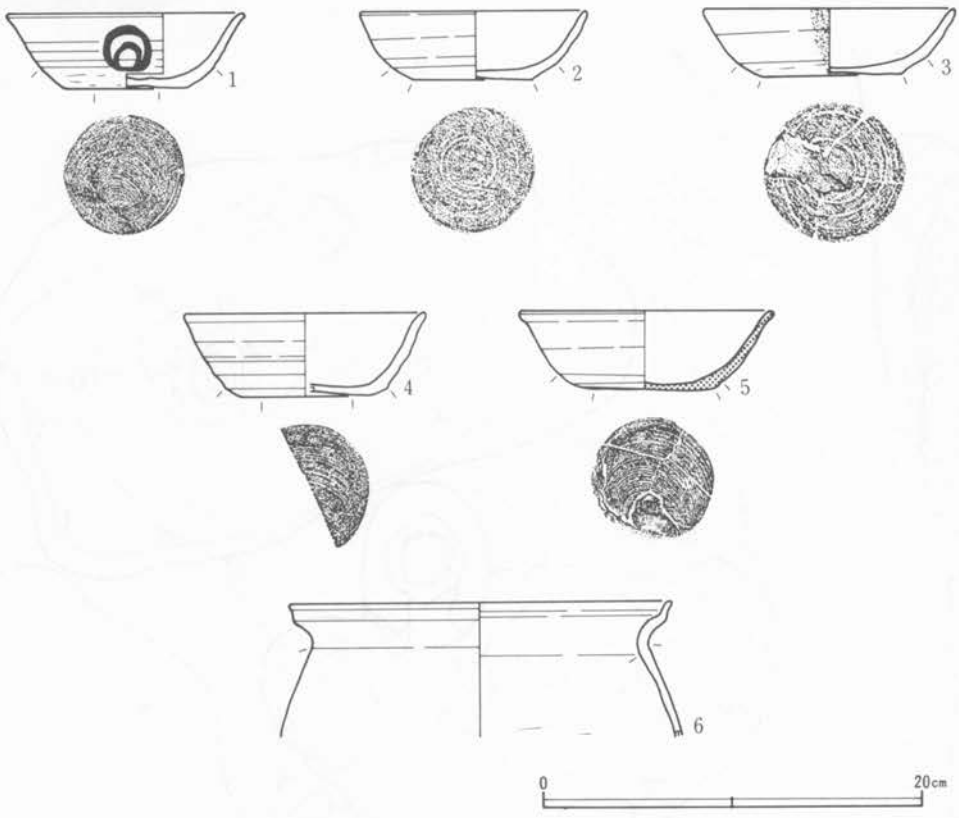


第141図　042遺物集中地点

042遺物集中地点（第141図）

位　置　B5－3，4，8，9グリッド　標高は12.5m前後，斜面部の近く。

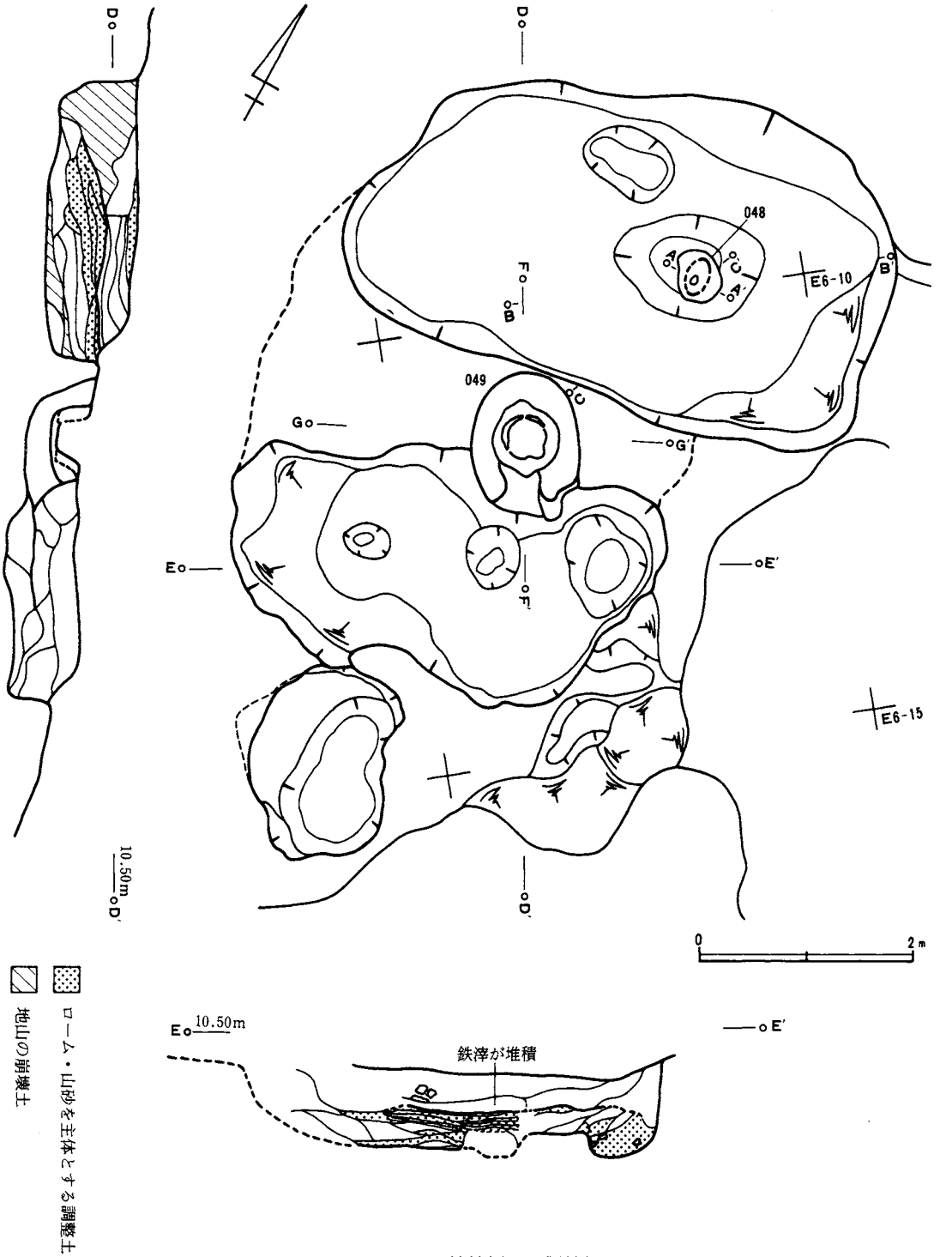
所　見　上記のグリッドにおいて鉄滓，土器等が集中して発見された。明らかな掘り方等は確認されず遺構としてとらえることはできないがB5－8グリッド及びB5－4，9グリッドの北西側に鉄滓の集中する部分がある。土器は鉄滓分布範囲の北側部分に片寄って出土している。鉄滓分布範囲の北東側には，焼土の堆積が3ヶ所，木炭の密集が1ヶ所確認される。これらの状況から精錬炉の存在が推定されるが鍛造剝片等も未検出であり，可能性を指摘するにとどめたいと思う。



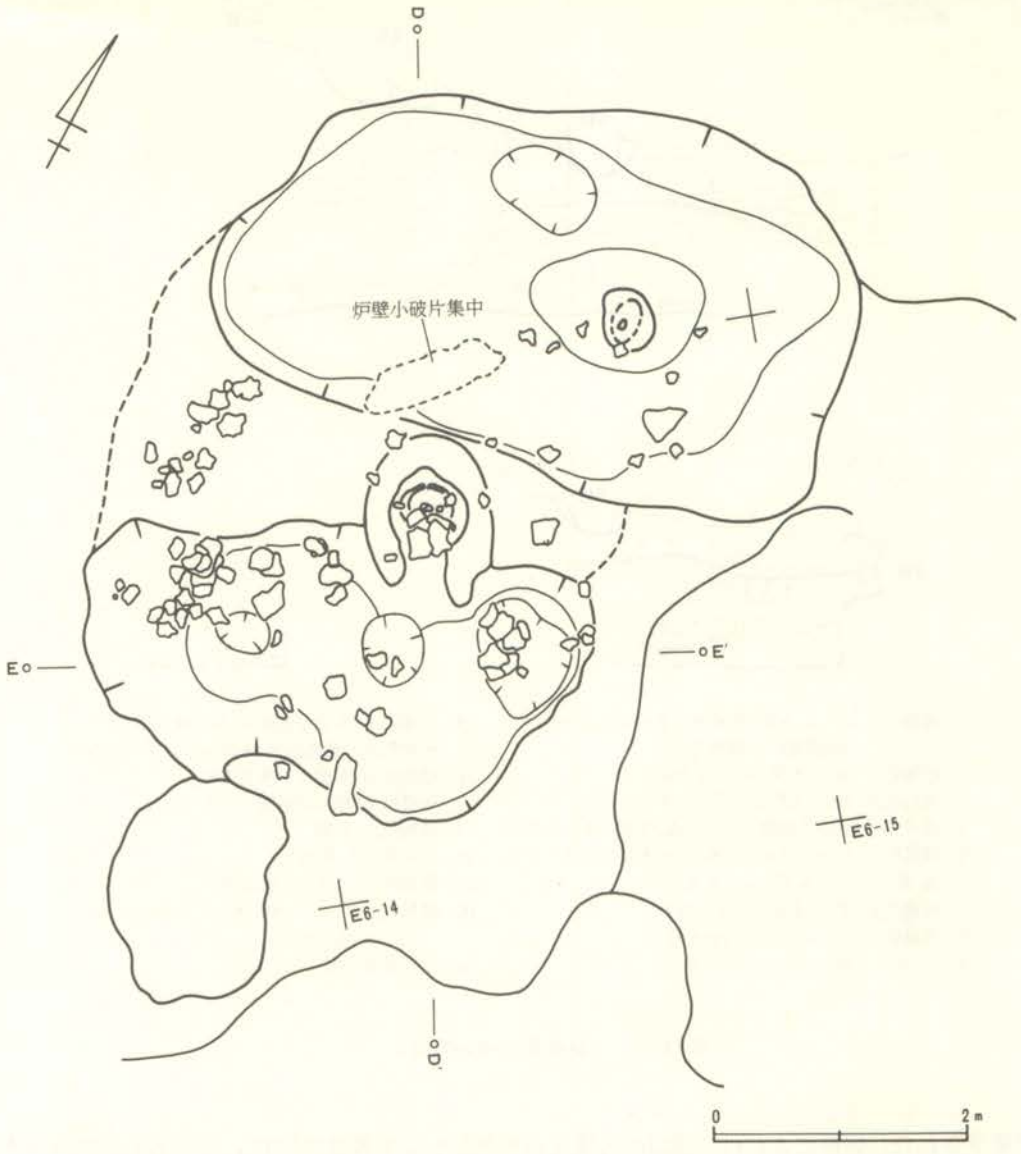
第142図　042遺物集中地点出土遺物

042遺物集中地点出土遺物

挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
1	坏 (土師器)	12.3 4.0 6.5	1/4	体部内外一ヨコナデ 体部下端一回ヘラ削り 底部一回糸切り，周縁回ヘラ削り	R	中粒砂一多	乳橙色	良	体部に「◎」墨書と，スス付着 図版64－4
2	坏 (土師器)	12.1 3.7 6.5	3/4	体部内外一ヨコナデ 体部下端一回ヘラ削り 底部一切り離し不明：回ヘラ削り	L	粗粒砂・雲母一多 長石・石英一少	淡赤褐色	甘	図版64－5
3	坏 (土師器)	13.3 3.6 7.2	3/4	体部内外一ヨコナデ 体部下端一回ヘラ削り 底部一切り離し不明，回ヘラ削り	R	粗粒砂，雲母一多 長石，石英一少	淡赤褐色	甘	体部内面にスス付着 図版64－6
4	坏 (土師器)	12.6 4.2 6.6	1/3	体部内外一ヨコナデ 体部下端一回ヘラ削り 底部一回糸切り，周縁回ヘラ削り		粗粒砂，スコリアー少	乳橙色	やや甘	図版64－7
5	坏 (須恵器)	13.3 4.0 6.5	1/2	体部内外一ヨコナデ 体部下端一回ヘラ削り 底部一回糸切り離し	R	中粒砂一多	黒灰色	やや甘	外面にスス付着 図版64－8
6	甕 (土師器)	20.2 〈8.2〉 —	1/3	口縁内外一ヨコナデ 体部内面一横方向のヘラナデ 体部外面一ナデ		粗粒砂・長石・石英一多 雲母一少	橙褐色	良	



第143図　048精錬炉・049製錬炉

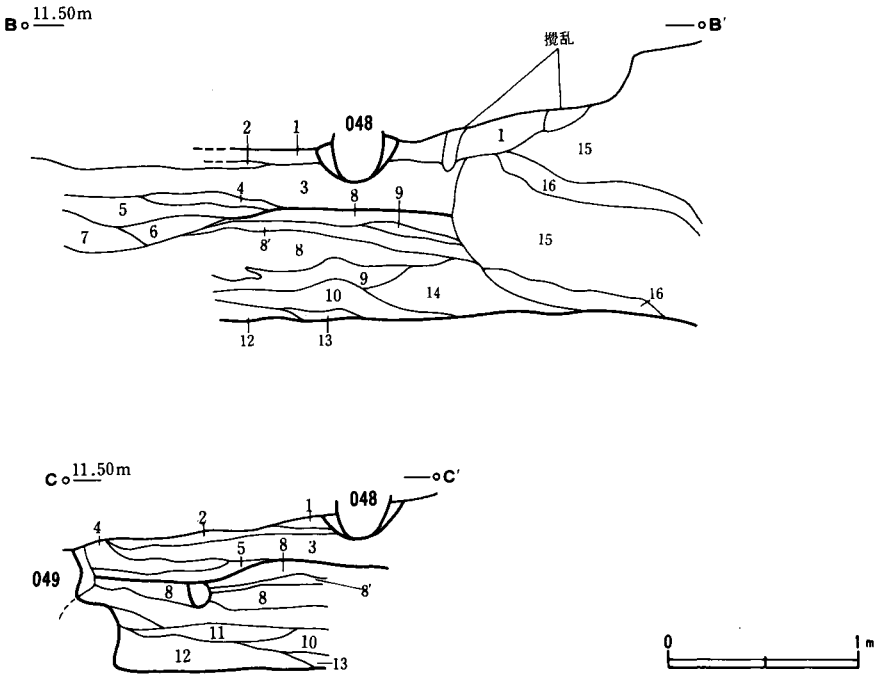


第144図　049製錬炉〈炉壁出土状況図〉

048精錬炉（第143，145，146図）

位　置　E 6 —04，09グリッド　斜面部東寄り中位，炉底部の標高は約10.6mほどである。049製錬炉の後背部の中に構築されている。

構　造　残っている炉壁の一部分から推定される炉の内径は20～30cm，形状は円形ないし長円形，現存炉壁高は20cm強である。西側には羽口の挿入部分が残っていた。掘り方は長径35cm，短径20cmほどの長円形で，すり鉢状となる。炉壁の内面は海綿状になっていて鉄滓が付着している。炉壁の材質はスサ入り粘土，炉の東西の部分だけが残っている。西側の部分は炉壁が炉外の方へ湾曲し，羽口を挿入するように作られている。羽口は一部分が挿入されたままの状態



1. 黄褐色土 ローム主体,暗褐色土をわずかに含む。
   048構築時の調整土(?)
2. 暗褐色土 焼土・木炭の粒子を含む。
3. 黒褐色土 焼土・木炭の粒子をわずかに含む。
4. 黄灰色土 地山の崩壊土(?)砂質,木炭片を少し含む。
5. 暗褐色土 ロームブロックを含む,木炭片を多く含む。
6. 黒 色 土 ロームブロックを含む。
7. 暗褐色土 焼土・木炭の粒子を含む。
8. 黄褐色土 ローム主体で山砂を含む。
8'. 〃 特に山砂の割合が多い。
9. 暗褐色土 小さな木炭片,焼土塊を含む。
10. 暗褐色土+黄褐色土 木炭片をわずかに含む。
11. 暗褐色土 木炭片を多く含む。
12. 暗褐色土 地山の崩壊土を多く含む。
13. 暗褐色土 砂質
14. 灰茶褐色土 粘質土
15. 黄褐色土 ブロック状のローム
16. 暗褐色土 ローム主体,木炭片を含む,しまりがない。

地山は砂質凝灰岩

第145図　048精錬炉・049製錬炉

で発見された。観察によれば，羽口の送風孔が水平面となす角度は約30°，挿入部分の炉壁が水平面となす角度は約55°であった。

炉の下に特別な構造はみられないが，炉の構築に伴なって周囲にロームを貼って調整している（第146図—1層)。なお049製錬炉のところで詳しく述べるが，それ以下の層（第145図の2～5層）も本炉に伴う調整土の可能性がある。

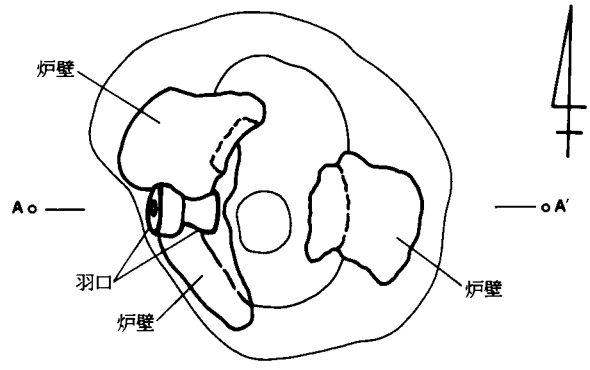
その他　炉の周囲は平均10cm前後にわたって焼土化している。

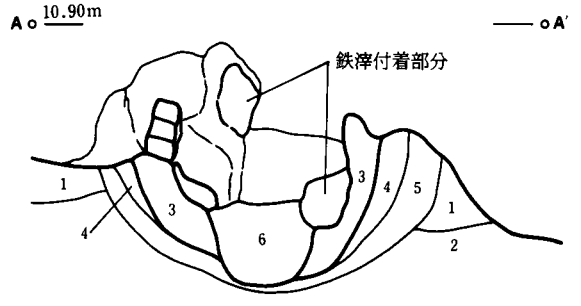
本炉の周辺からは鋳型等の鋳造に関係すると思われる遺物が多く出土しており，鋳鉄製品を製作していた可能性がある。

操業回数は不明だが炉を改築していることを示す痕跡は発見できなかった。

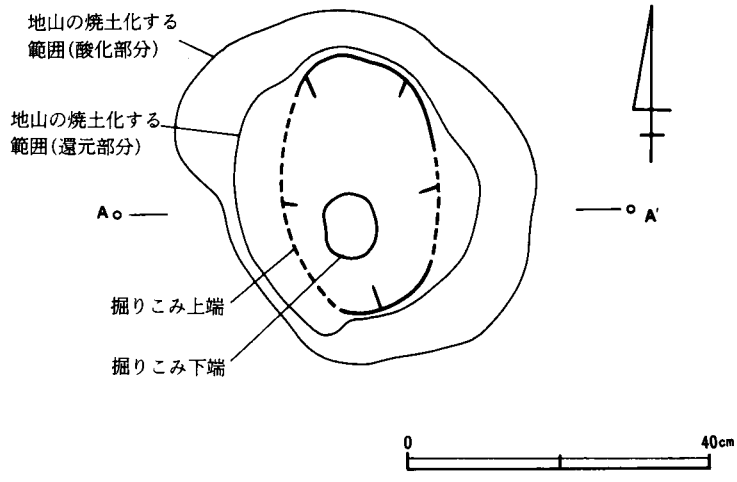
049製錬炉（第143～145，147～149図）

位　置　E 6 —04，08，09グリッドを中心に構築される。斜面部東寄りの中位，炉底部分の標

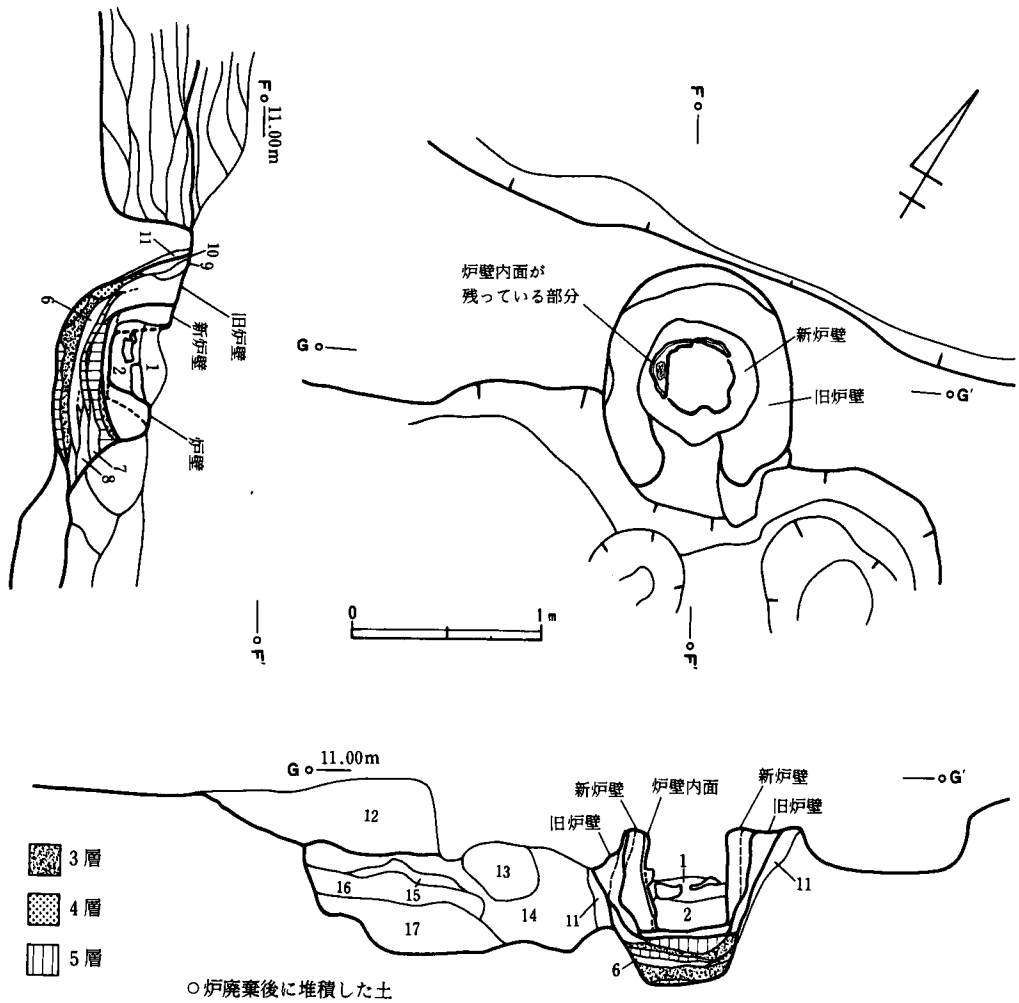




1. 黄褐色土 ローム,作業面の調整土
2. 黒褐色土
3. 紫青色土 焼けた粘土を含む山砂 (炉壁かうらごめ)
4. 灰黄褐色土 (1,2層の焼土化還元部分)
5. 赤褐色土 (1,2層の焼土化酸化部分)
6. 黒褐色土 スラグを含む,砂質土。



第146図　048精錬炉

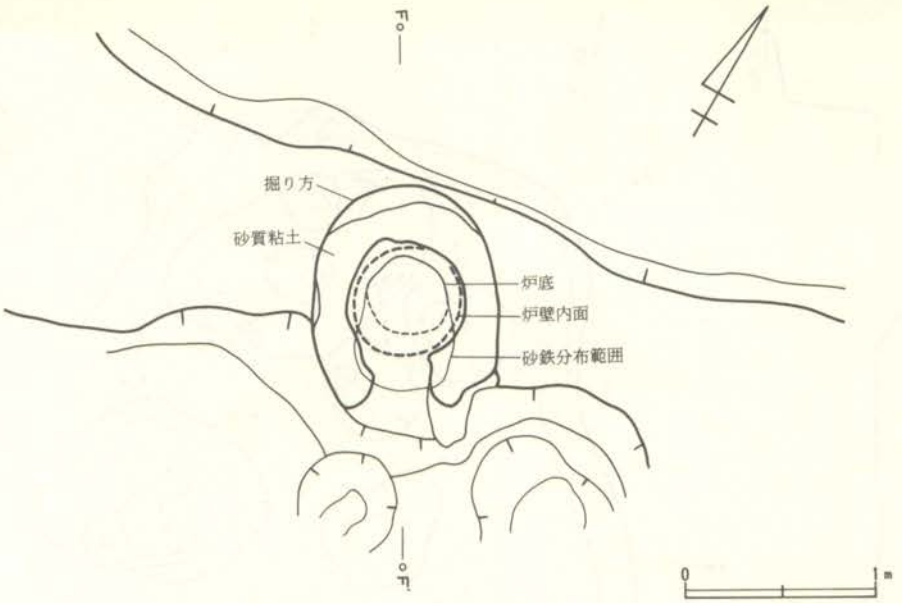


第147図　049製錬炉主体部分(1)〈新炉〉

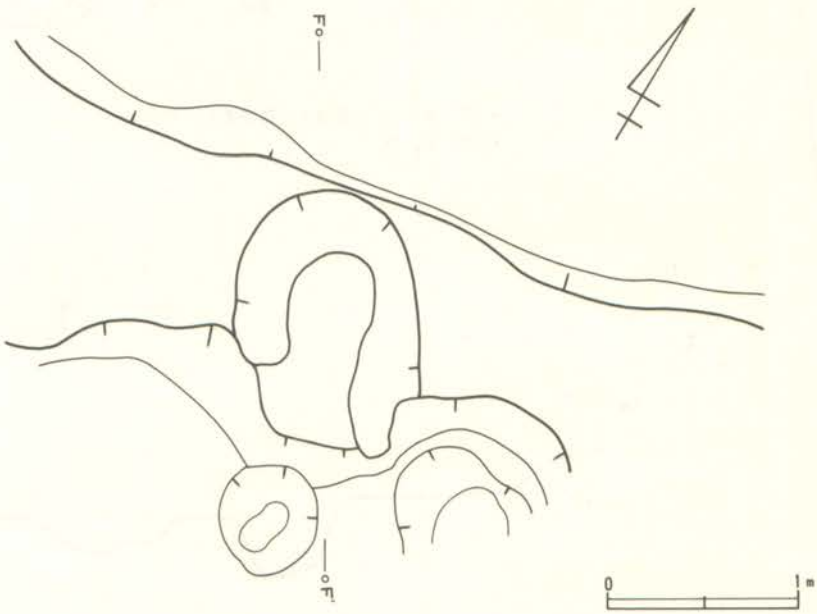
高はおよそ10.5～10.6m。

構　造　半地下式の竪形炉で，新炉の推定内径は40cm，現存高は最も残りの良い部分で60cmほどの円筒形である。旧炉も新炉と同形態だが若干大きく推定内径は60cmほどであったと思われる。主体部分の掘り方は130cm×60cmほどの半長円形である。

新炉については西側の半分弱について溶解した炉壁の内面が残っている。上位20cm弱はなめらかな面で，中位20cmは鉄滓が多く付着して，おうとつがある。それ以下の部分は内面は残っておらず還元色をした砂質の部分が露出している。新炉の炉壁はスサ入り粘土で作られ，厚さ



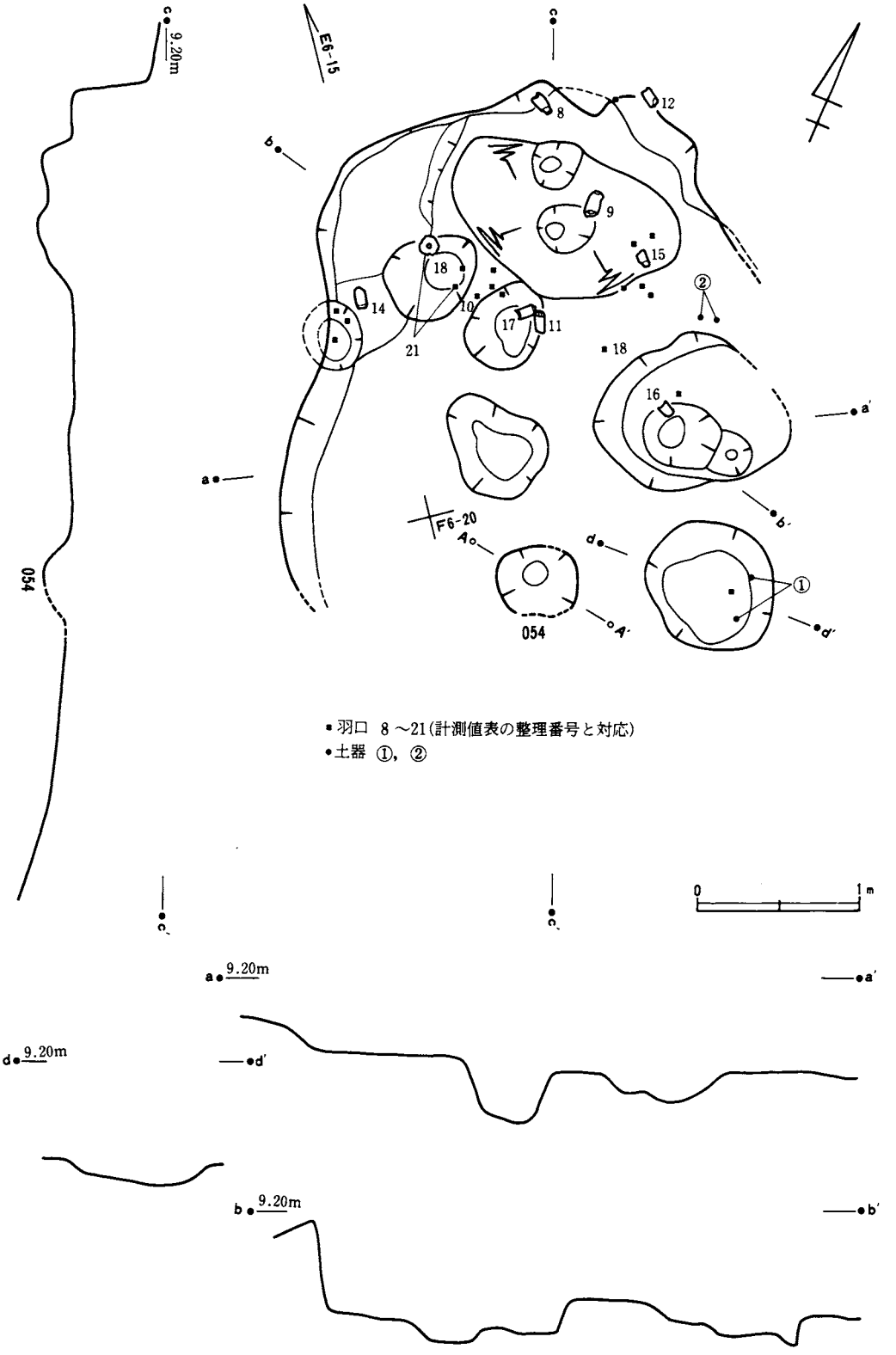
第148図　049製錬炉主体部分(2)〈旧炉〉



第149図　049製錬炉主体部分(3)〈握り方〉

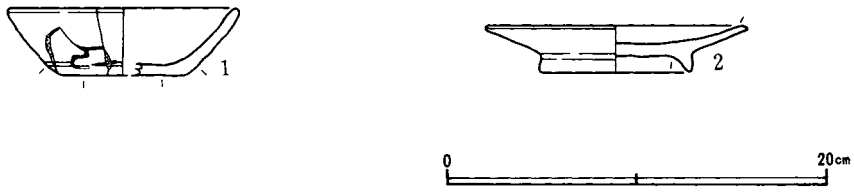
は約15cm，そのうち10cm弱が熱を受け還元し，残りも焼土化（酸化）している。旧炉の炉壁も同様にスサ入り粘土で作られ，還元部分，酸化部分に分かれている。

炉底の下は，砂鉄・山砂・焼土を主体とする土がいくつもの薄い層を形成し，版築状になっている（3～11層）。この下部構造は最も厚い部分で約25cmを計り，本遺跡の他の製錬炉と比べ



▪羽口 8～21(計測値表の整理番号と対応)
●土器 ①, ②

第150図　054精錬炉・062土坑



第151図　062土坑出土遺物

062土坑出土遺物

挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
1	坏 (土師器)	12.0 3.5 6.4	⅓	体部内外一ヨコナデ 体部下端一回ヘラ削り 底部一回糸切り後周縁回ヘラ削り		中粒砂一少	暗橙色	良	体部外面に墨書
2	高台付皿 (土師器)	13.5 2.4 高台径 8.0 高台高 0.8	¼	体部内面一ヘラ磨キ 体部外面～高台一ヨコナデ 底部一回ヘラ削り		微粒砂・スコリア・雲母一少密	橙褐色	やや甘	

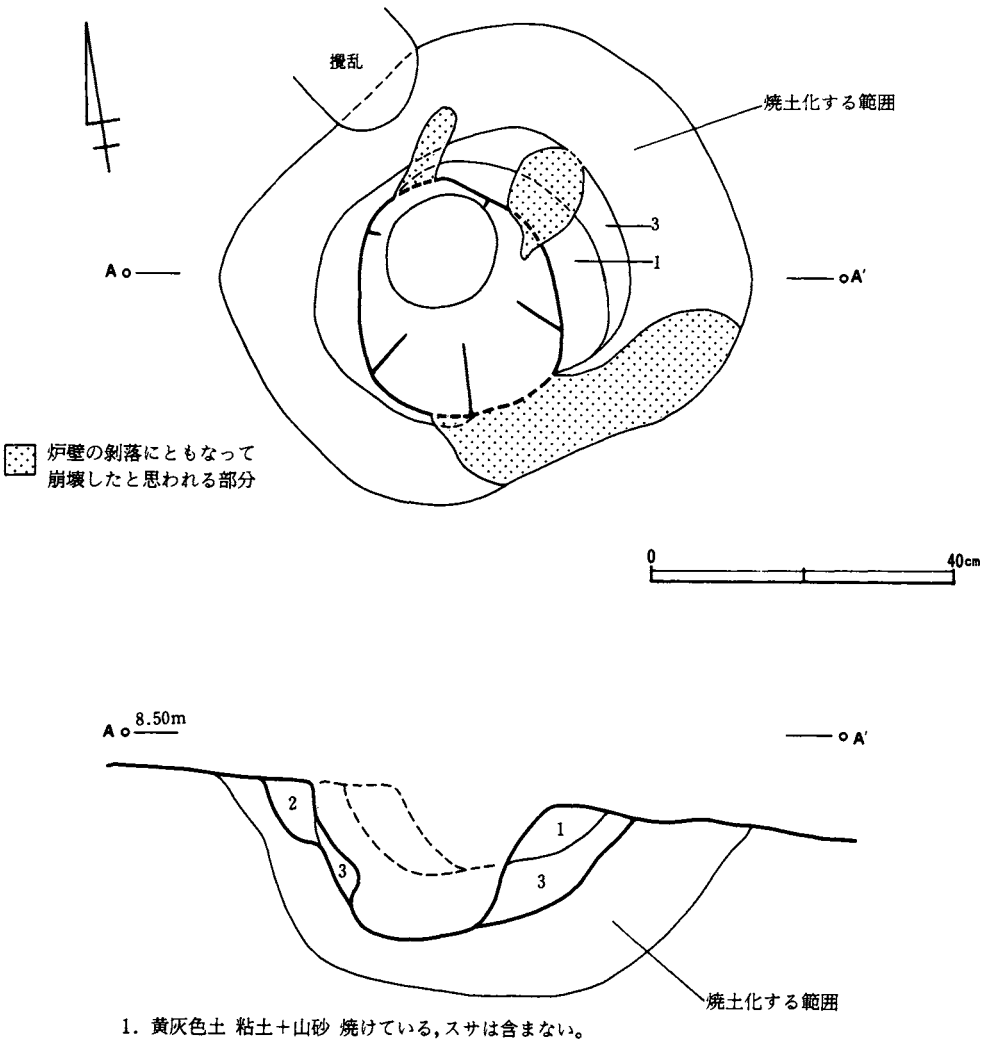
て最も良く残っている。おそらくは湿気抜きを目的としたものと考えられる。これに対して12～17層は，山砂・焼土・ロームを主体とする土で版築状にはならない。この部分については荒掘り後の埋め戻しが考えられるが，何か古い落ち込みが自然堆積で埋まった可能性もあって確実に本製錬炉の構築に伴うものとは言い切れない。

前庭部は東西幅4m，南北奥行2mほどの不整形である。炉の主体部分は前庭部の中心から，やや東へずれた位置にある。掘り方は確認面から70～80cmの深さまで達していて，中心には大小3つのピットが東西方向にほぼ等間隔で並んでいる。掘り方底面から上，30～40cmの部分はローム・山砂を主とする土が版築状に重なっている。この上面は固く締まっていて，ある時期の炉に伴う作業面と考えられる。さらにこの上には10ないし15cmほどの厚さで鉄滓が堆積している。炉壁片も多くはこれより上の層で検出される。

炉の北側には東西幅5m，南北奥行2.5～3mほどの不整方形の落ち込みがあって，一応これを049製錬炉に伴う後背部分と考えている。確認面からの掘り込みは70～90cmほどで前庭部同様ローム・山砂を主体とする土によって版築状に埋め戻されている。底面から50～70cmのところに固く締まった面があって，ある時期の作業面と思われる。後背部の中には048精錬炉があることも合わせて考え，この面より下を049製錬炉に伴う調整，上を048精錬炉に伴う調整（の可能性もあるもの）として理解しておきたい。また，この後背部分には地山の崩壊土が多く含まれており，形状が途中で何回か変わっている可能性がある。

その他　操業回数は炉の構造からみて少なくとも2回以上であったことが確認される。炉壁片等の出土量は他の炉に比べて少なく，前庭部以外からも相当量が出土している点が注目される。

前庭部の南側に接するピットは採掘坑と考えられる。



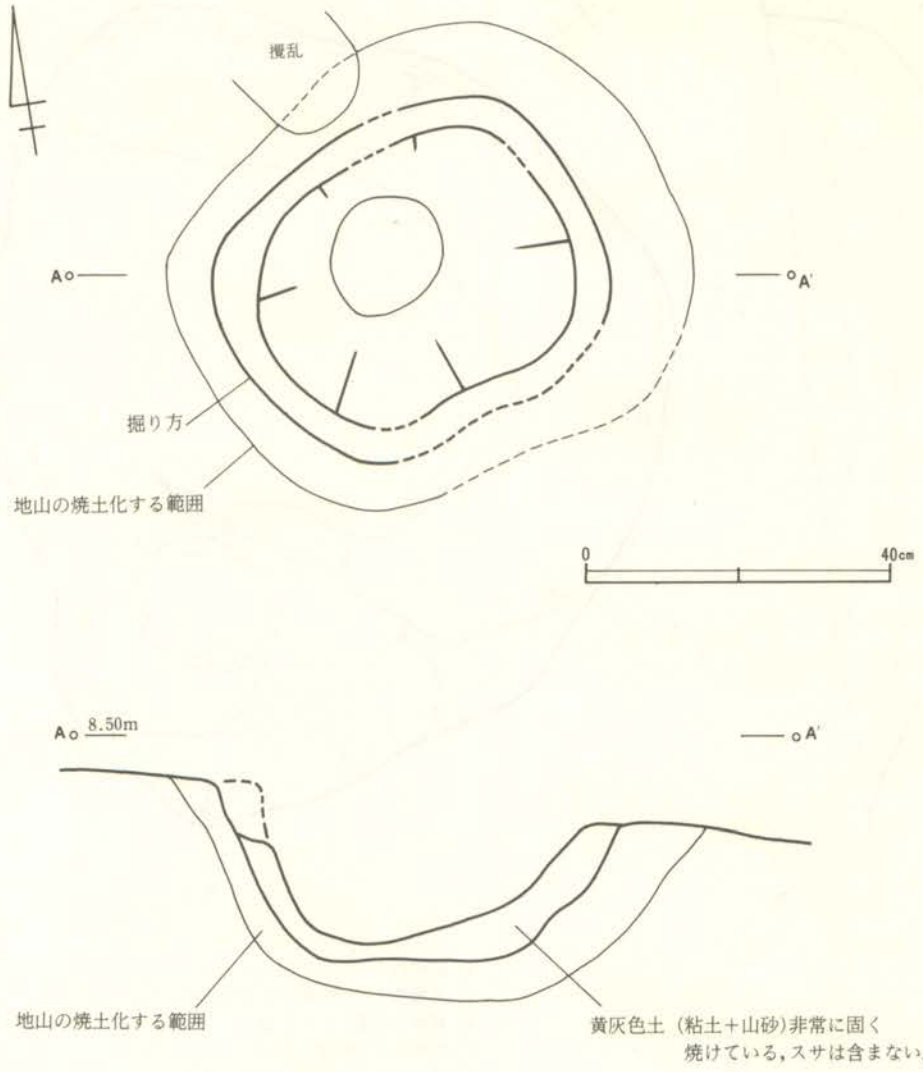
第152図　054精錬炉(1)〈新炉〉

054精錬炉（第150，152，153図）

位　置　F６－20グリッド　斜面部下位に位置し，炉底面の標高は約8.2m。今回調査された精錬炉の中で最も低い所にある。北側には062土坑がある。

構　造　土層断面の観察から新炉・旧炉の２つが確認された。新炉の炉壁内面は剝落してしまって規模は明らかでないが径20cm前後の円形ではないかと思われる。掘り方は長径40cm，短径30cmほどの長円形で，深さ20cm弱のすり鉢状となる。

旧炉の方も炉の規模は不明である。掘り方は新炉より，ひと回り大きく長径50cm，短径40cmほどの不整円形で深さは20cm強のすり鉢状である。旧炉掘り方の回りは５～10cmにわたって，地山が焼土化している。



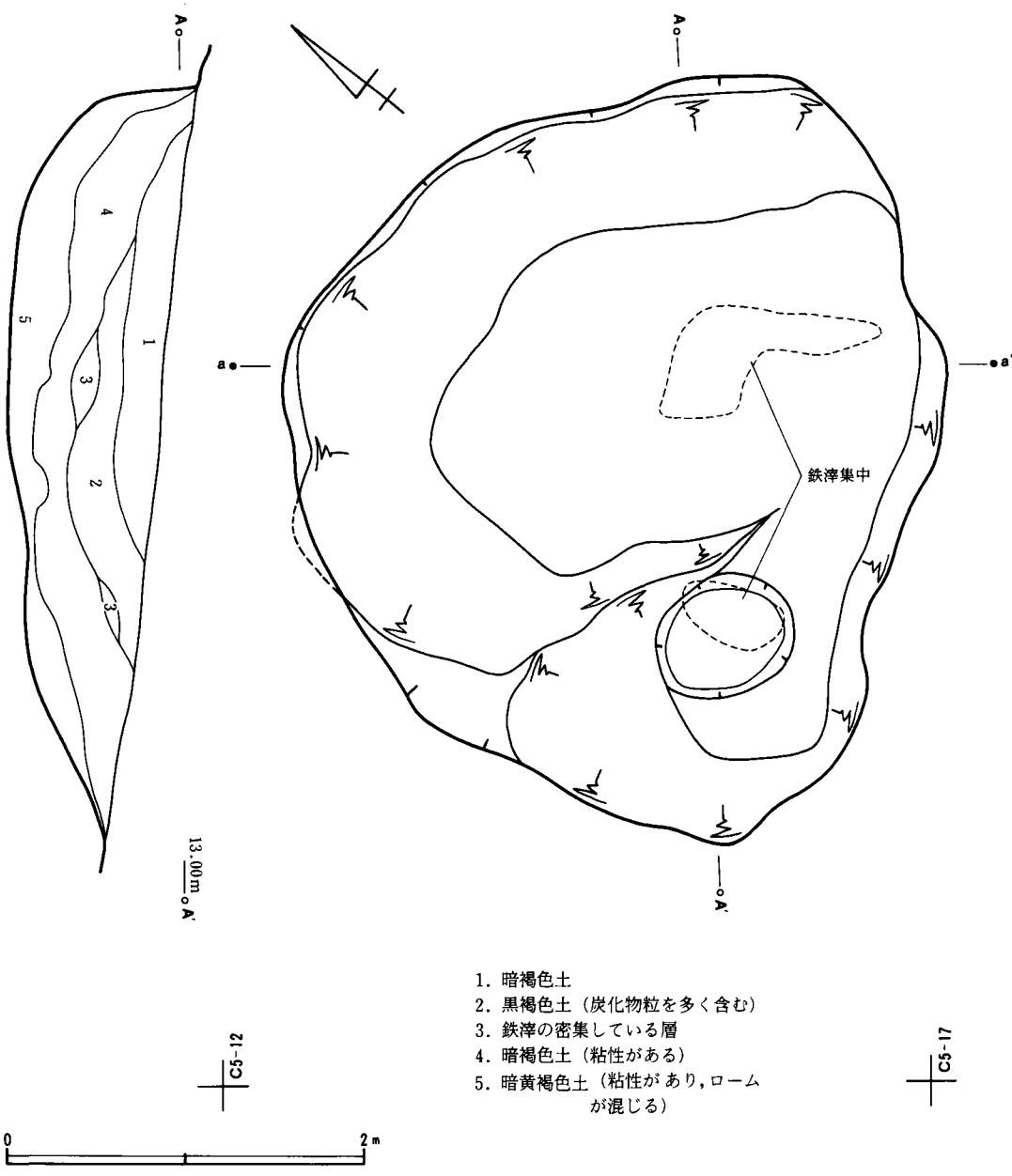
第153図　054精錬炉(2)〈旧炉〉

062土坑（第150図）

位　置　E 6 －14, 15, 20グリッド　斜面部下位，およその標高8.6m。すぐ南側には054精錬炉がある。

所　見　大小７つのピットとそれらを囲むようにして巡る深さ20cm強の落ち込みによって構成される。当初は山砂か粘土の採掘坑ではないかと考えていたが，他の採掘坑と比べるとピットの規模がやや小さいこと，羽口が集中して発見されたこと，などから近くの製鉄遺構と関係する作業面の可能性もある。

遺物は図示した土器の他に羽口が集中して発見され，注目される（計測可能なものが14点，他に細片が20点近くある）。

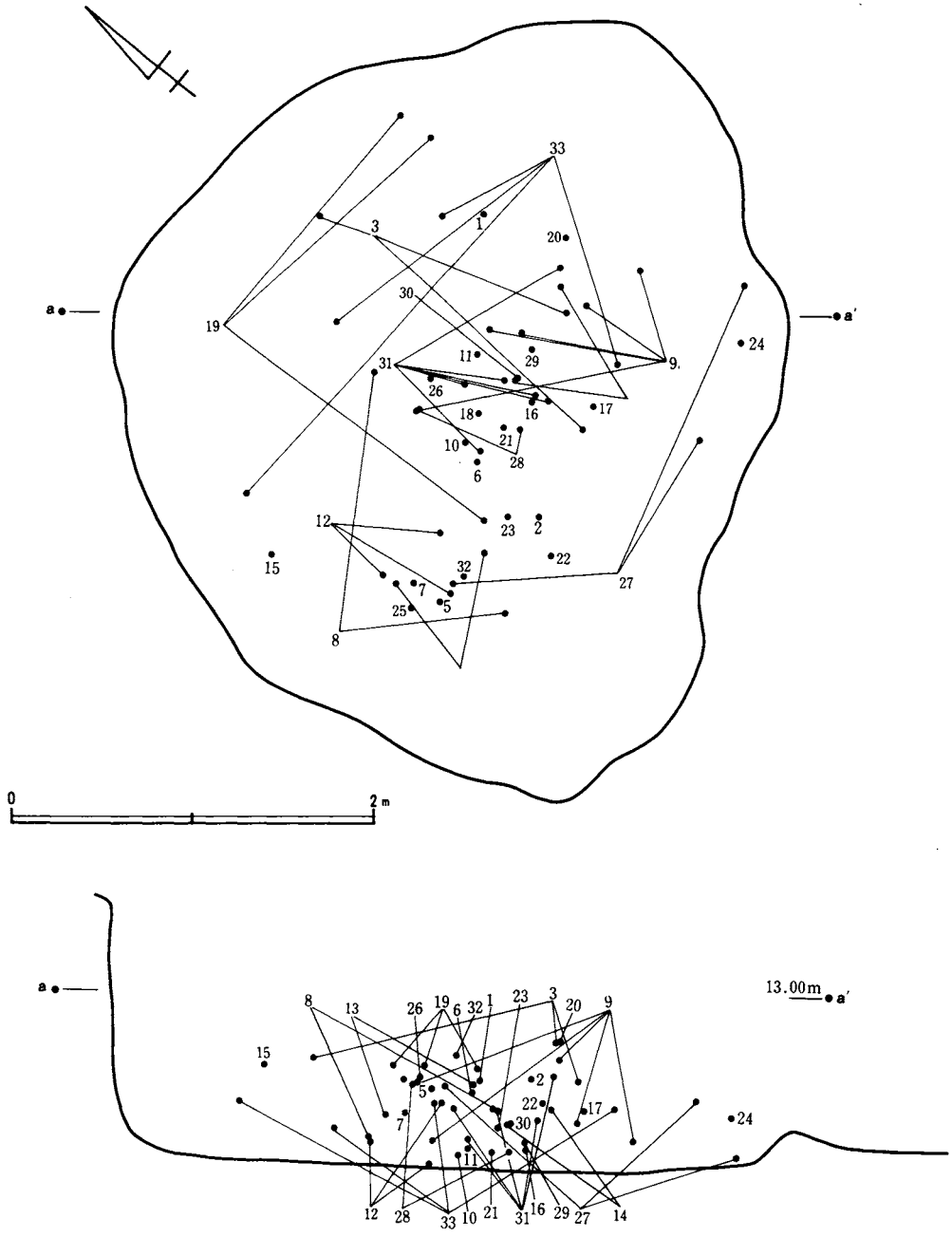


第154図　056土坑(1)

056土坑（第154，155図）

位　置　C５—12グリッド　平坦面から斜面部へ移行する際，底面の標高約12m，058，060，070炭窯と接している。

構　造　長軸4.3m，短軸3.7mの三角形に近い不整形を呈する斜面部にかかって構築されるため，南側の壁がほとんど残っていない。北側の壁高は1.4m前後である。覆土の中層から下層にかけて，多量の土器と鉄滓を出土する。遺物量がきわめて多く遺物の時期にも差がある。時期・性格ともに不明。



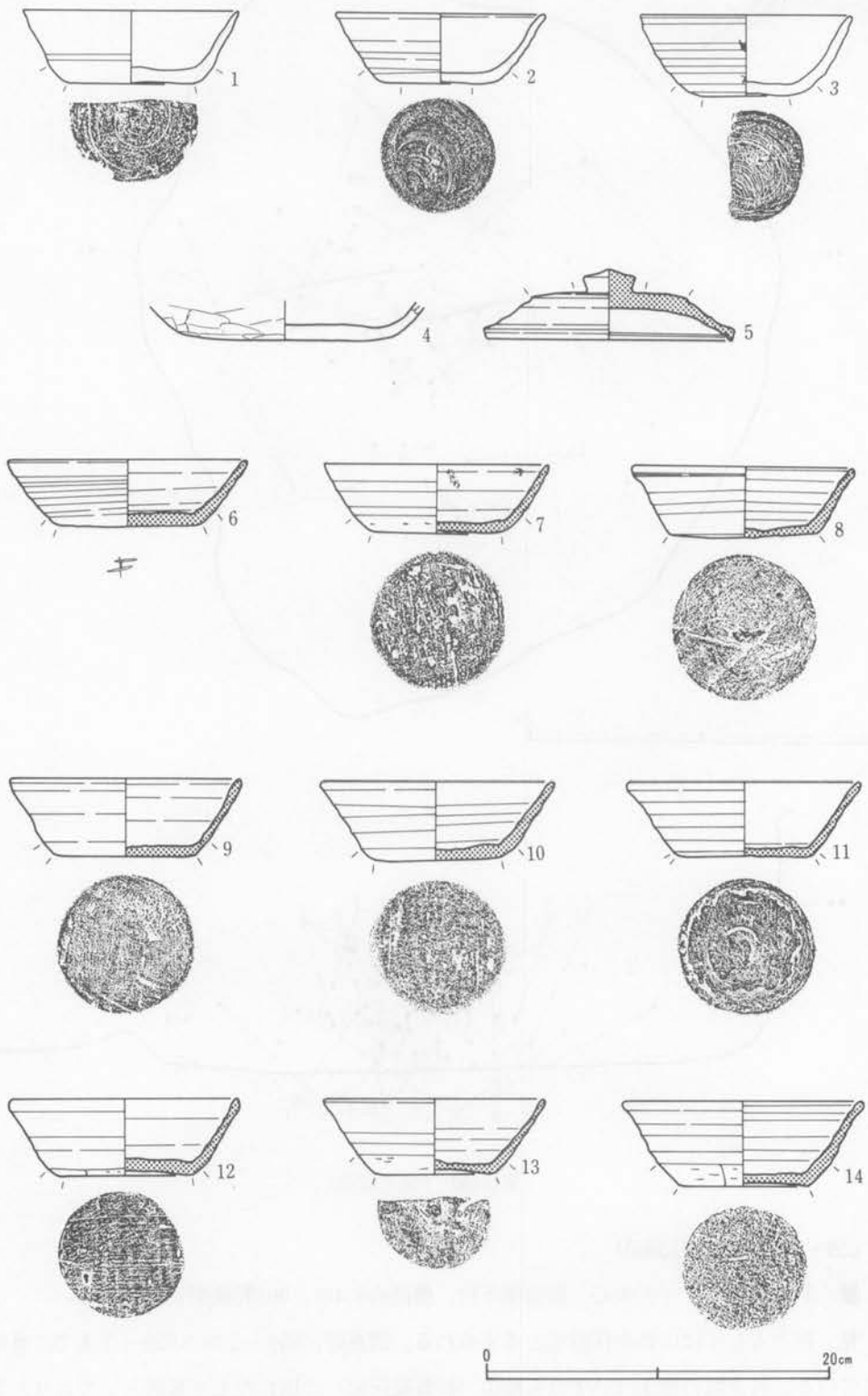
第155図　056土坑(2)

059・064土坑（第159図）

位　置　E６－14グリッド中心　斜面側下位、標高約8.4m。063製錬炉と重複する。

所　見　粘土もしくは山砂の採掘坑と考えられる。調査時に059－１から059－５までの番号が付いている。各土坑の覆土はいずれも地山（砂質凝灰岩）の崩れた土を基調としており，若干の鉄滓，炉壁材を含んでいる。

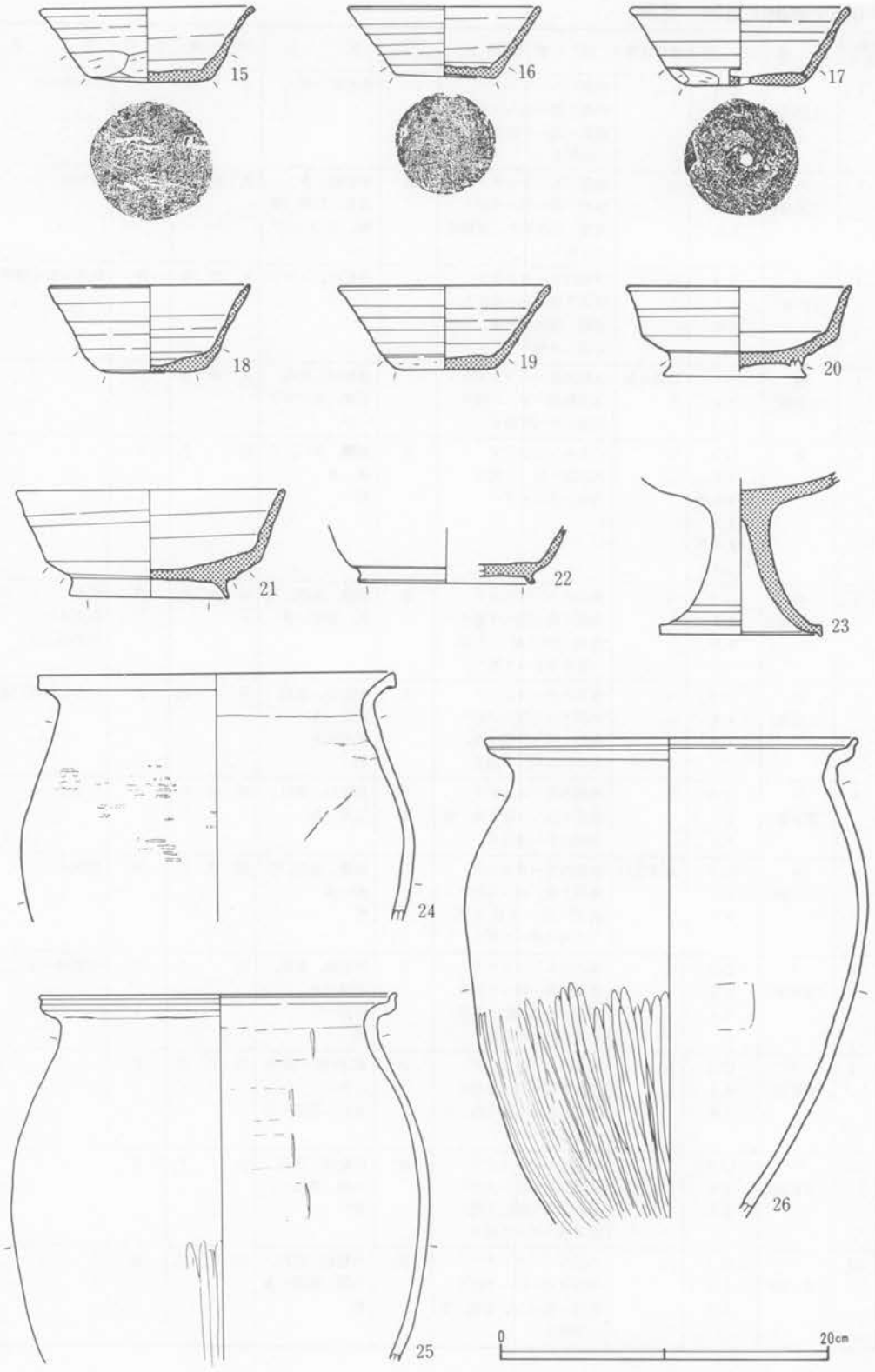
時　期　不明。063製錬炉との新旧関係も不明である。



第156図　056土坑出土遺物

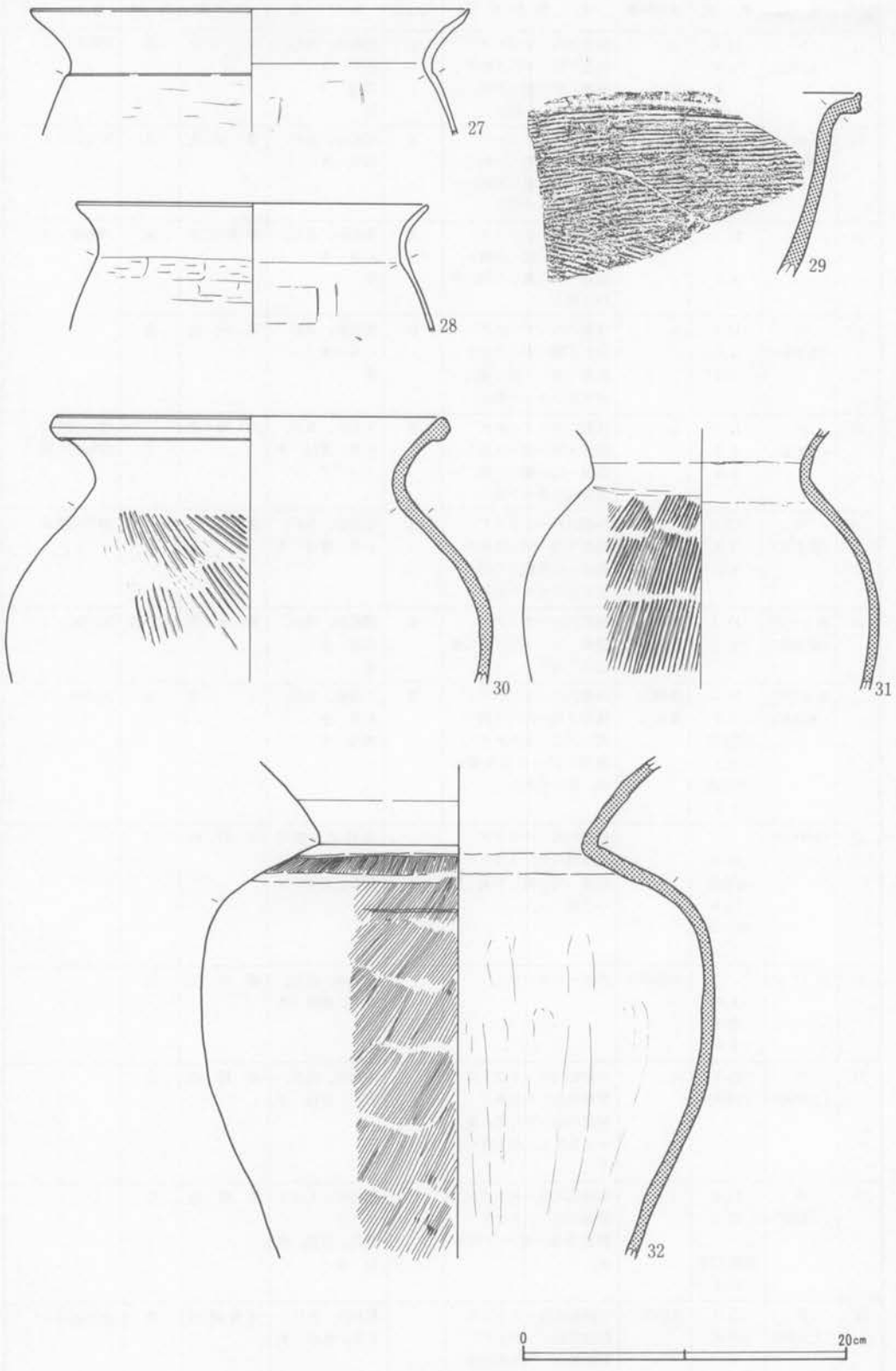
056土坑出土遺物一覧表

挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
1	坏 (土師品)	12.4 4.3 7.5	3/5	体部内外一ヨコナデ 体部下端一回ヘラ削り 底部一回ヘラ切り後、回ヘラ削り		中粒砂一多	赤褐	甘	図版65－1
2	坏 (土師器)	12.1 4.1 6.8	1/2	体部内外一ヨコナデ 体部下端一回ヘラ削り 底部一回糸切り、周縁回ヘラ削り	R	中粒砂一多 長石、石英、雲母、スコリア一少	乳褐色	甘	図版65－2
3	坏 (土師器)	12.0 4.7 6.6	1/4	体部内外一ヨコナデ 体部下端一回ヘラ削り 底部一回糸切り後，一部に回ヘラ削り		中粒砂，スコリア一少 密	乳橙色	良	体部外面に墨書
4	盤 (土師器)	— 〈2.4〉 12.8	口縁を欠く	体部内面一ヘラミガキ 体部外面一手ヘラ削り 底部一手ヘラ削り		細粒砂，長石，石英，スコリア一少	乳橙色	良	
5	蓋	14.0 4.0 つまみ径 3.2 つまみ高 1.4	1/3	つまみ一ヨコナデ 天井部一回ヘラ削り 内外一ヨコナデ	R	細礫，長石，石英一多 粗	灰色	良	
6	坏 (須恵器)	13.7 3.8 8.0	1/2	体部内外一ヨコナデ 体部下端一回ヘラ削り 底部一切り離し不明，一方向の手ヘラ削り	R	細礫，長石，石英，雲母一多	灰褐色	良	底部に「キ」の線刻あり 図版65－3
7	坏 (土師器)	13.0 4.0 7.6	1/3	体部内外一ヨコナデ 体部下端一回ヘラ削り 底部一回ヘラ切り後，一定方向の手ヘラ削り	L	粗粒砂，長石，石英一多 雲母一少 粗	灰色	良	体部に油煙付着
8	坏 (須恵器)	12.6 4.1 8.6	1/2	体部内外一ヨコナデ 底部一回ヘラ切り後，数方向に手ヘラ削り	L	粗粒砂，長石，石英一多	暗灰色	良	図版65－4
9	坏 (土師器)	13.0 4.4 8.0	ほぼ完形	体部内外一ヨコナデ 体部下端一回ヘラ削り 底部一回ヘラ切り後，一方向の手ヘラ削り	R	細礫，長石，石英一多 粗	暗灰色	良	図版65－5
10	坏 (須恵器)	13.4 4.5 7.4	1/3	体部内外一ヨコナデ 体部下端一回ヘラ削り 底部一切り離し不明，一方向の手ヘラ削り	R	粗粒砂，長石，石英一多 雲母一少 粗	灰色	良	図版65－6
11	坏 (須恵器)	13.4 4.2 7.8	1/3	体部内外一ヨコナデ 体部下端一回ヘラ削り 底部一回ヘラ切り後、手ヘラ削り	R	細粒砂，雲母一多 長石，石英一少	灰白色	良	
12	坏 (須恵器)	13.0 4.4 7.5	1/4	体部内外一ヨコナデ 体部下端一手ヘラ削り 底部一切り離し不明，一定方向の手ヘラ削り	R	細粒砂，長石，石英，雲母一少 密	灰色	良	
13	坏 (須恵器)	12.7 4.3 7.0	1/4	体部内外一ヨコナデ 体部下端一回ヘラ削り 底部一回ヘラ切り後，手ヘラ削り	R	中粒砂，長石，石英，雲母一多 粗	灰色	良	

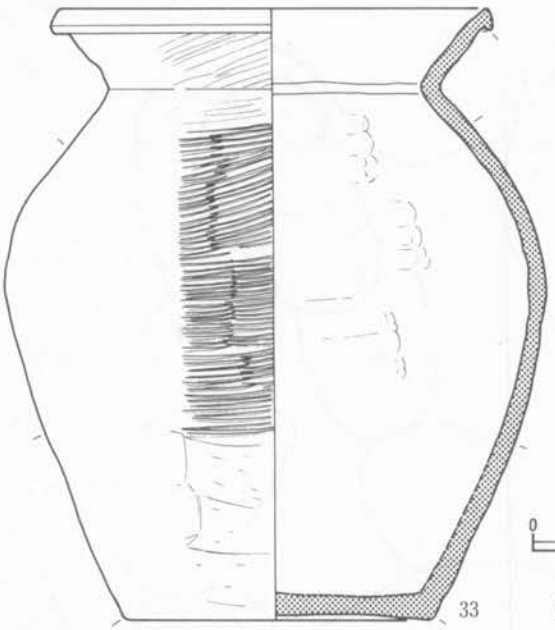


第157図　056土坑出土遺物

挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
14	坏 (土師器)	13.6 4.9 7.4	1/3	体部内外ーヨコナデ 体部下端ー手ヘラ削り 底部ー切り離し不明，二方向の手ヘラ削り	L	粗粒砂，長石，石英ー多 雲母ー少 粗	灰色	良	図版65ー7
15	坏 (須恵器)	12.6 4.7 7.6	2/3	体部内外ーヨコナデ 体部下端ー手ヘラ削り 底部ー切り離し不明，一方向の手ヘラ削り	R	粗粒砂，長石，石英ー多	青灰色	良	図版65ー8
16	坏 (土師器)	11.6 4.4 6.2	3/4	体部内外ーヨコナデ 体部下端ー回ヘラ削り 底部ー切り離し不明，手ヘラ削り	R	粗粒砂，長石，石英ー多 粗	暗青灰色	良	図版65ー9
17	坏 (須恵器)	13.0 4.8 7.4	1/5	体部内外ーヨコナデ 体部下端ー手ヘラ削り 底部ー回ヘラ切り後，一定方向の手ヘラ削り	R	粗粒砂，長石，石英ー多 粗	暗灰色	良	
18	坏 (須恵器)	12.2 5.2 6.4	1/2	体部内外ーヨコナデ 体部下端ー回ヘラ削り 底部ー切り離し不明，一定方向の手ヘラ削り	R	中粒砂，長石，石英，雲母ー多 スコリアー少	灰褐色	やや甘	酸化焔焼成 図版65ー10
19	坏 (須恵器)	12.9 4.9 6.2	1/4	体部内外ーヨコナデ 体部下端ー回ヘラ削り 底部ー切り離し不明，一定方向の手ヘラ削り	R	粗粒砂，長石，石英，雲母ー多	灰褐色	やや甘	酸化焔焼成
20	高台付坏 (須恵器)	13.4 〈4.8〉 —	体部2/3高台部を欠く	体部内外ーヨコナデ 底部ー回ヘラ切り離し後回ヘラ削り	R	細粒砂，長石，石英ー多 密	青灰色	堅緻	図版66ー1
21	高台付坏 (須恵器)	16.0 6.5 高台径 9.7 高台高 1.0	体部5/6 高台1/3	体部内外ーヨコナデ 体部下端ー回ヘラ削り 高台内外ーヨコナデ 底部ー回ヘラ切り離し後，回ヘラ削り	R	中粒砂，長石，石英ー多 雲母ー少	灰色	良	図版66ー2
22	高台付坏	— 〈3.3〉 高台径 10.8 高台高 0.5		体部内外ーヨコナデ 高台部内外ーヨコナデ 底部ー切り離し不明，回ヘラ削り		中粒砂，雲母ー多 長石，石英ー少	灰白色	甘	
23	脚付盤	— 〈9.4〉 底径 9.9	脚部のみ	内外ーヨコナデ		粗粒砂，長石，石英，雲母ー多 粗	暗灰色	良	
24	甕 (土師器)	21.6 〈14.7〉 —	1/4	口縁部内外ーヨコナデ 胴部内面ーヘラナデ 胴部外面ー平行叩キ後，ナデを施し，叩キ痕を消す		中粒砂，長石，石英，雲母ー多	赤褐色	良	
25	甕 (土師器)	21.6 22.0 — 胴最大径 25.4	1/3	口縁部内外ーヨコナデ 胴部内面ーヘラナデ 胴部外面ー縦ヘラ削り後，ナデ		粗粒砂，スコリアー少 長石，石英，雲母ー多	暗褐色	良	
26	甕 (土師器)	22.5 〈28.8〉 — 胴最大径 24.5	底部欠く	口縁部内外ーヨコナデ 胴部内面ーヘラナデ 胴部外面ーヘラ削り後，ヨコナデ 胴部下半ー細いヘラ削り		粗粒砂，長石，石英，雲母ー多	淡黄褐色	良	図版66ー3

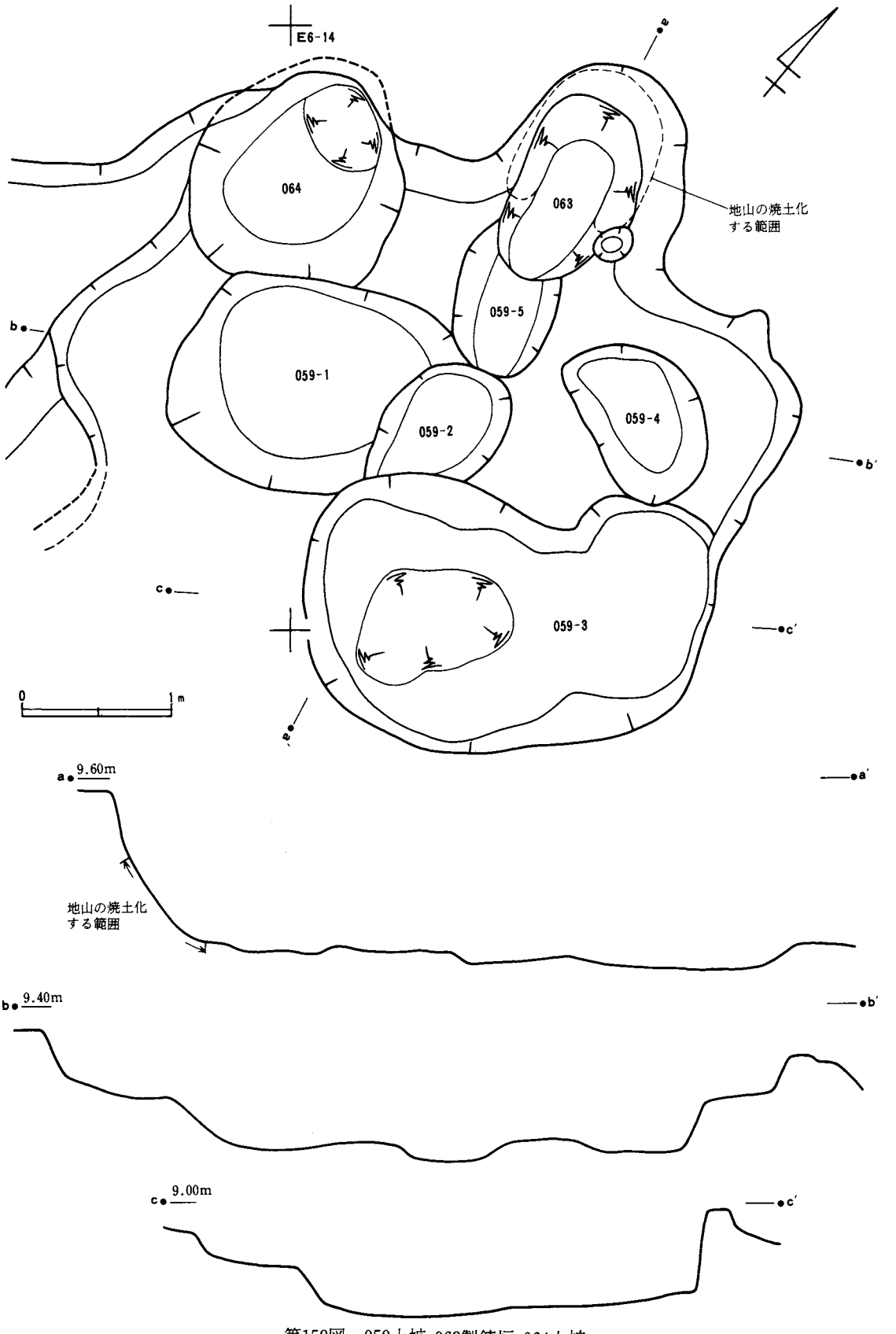


第158図　056土坑出土遺物

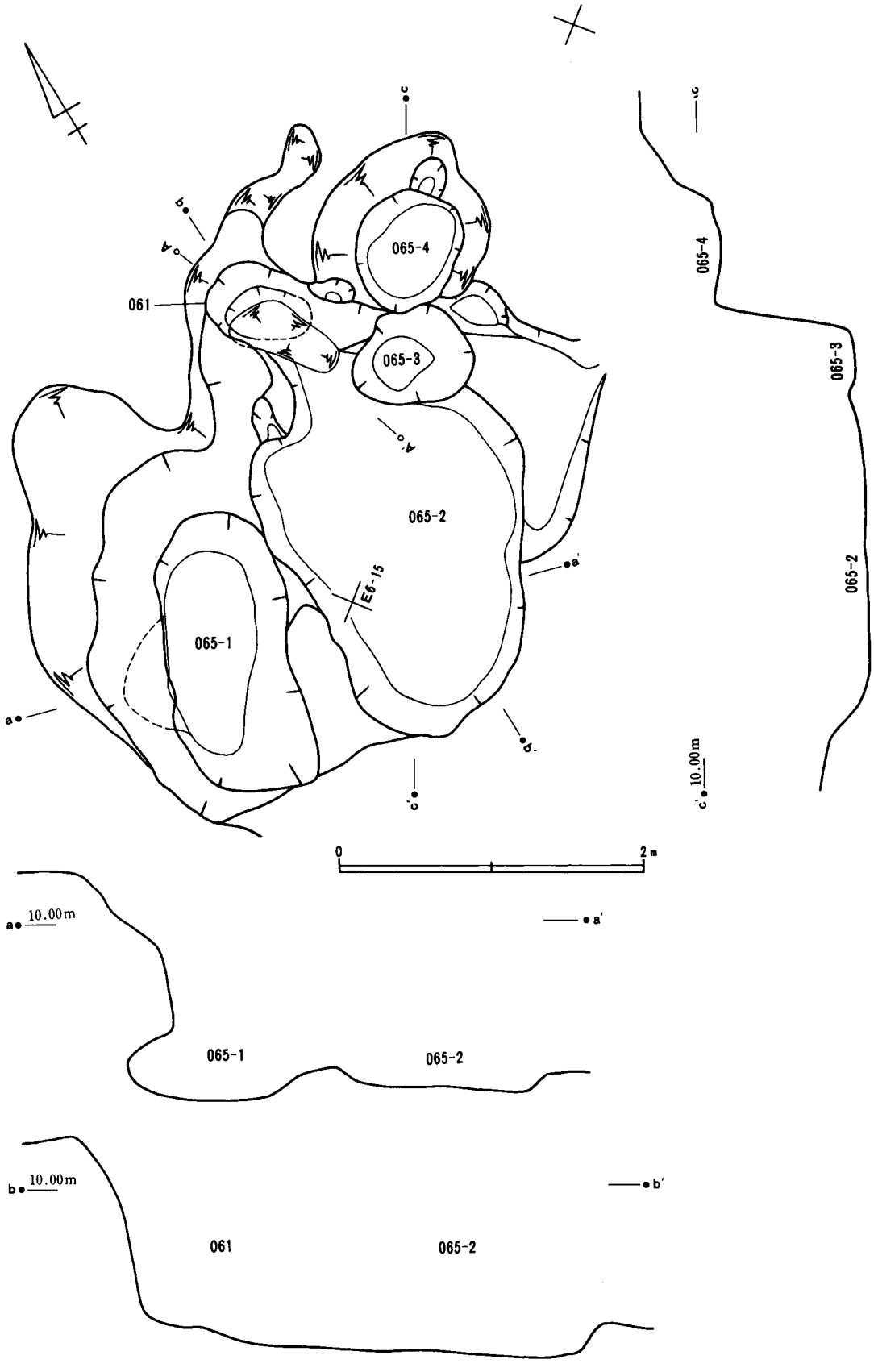


第158図　056土坑出土遺物

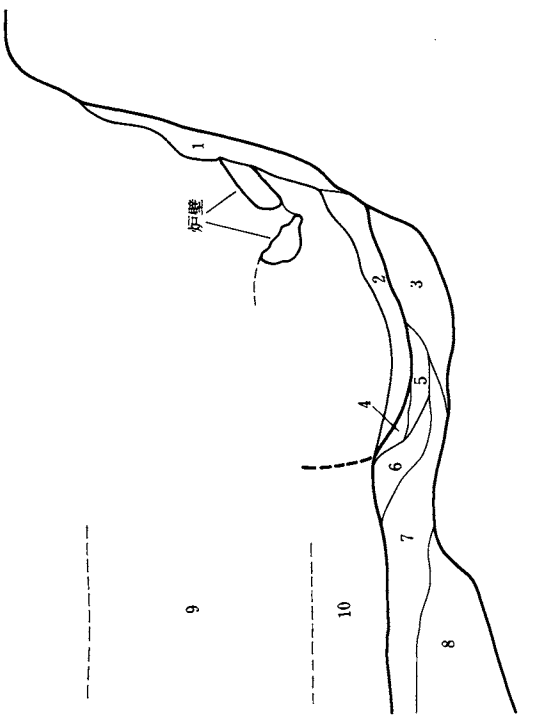
挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
27	甕（土師器）	〈7.7〉 — 頸部径 22.2		胴部外面—横方向のヘラ削り		中粒砂，雲母—多	橙褐色	良	
28	甕（土師器）	21.6 〈7.9〉 — 頸部径 19.0		口縁部内外—ヨコナデ 胴部内面—ヘラナデ 胴部外面—横方向のヘラ削り		中粒砂—多	赤褐色	良	
29	甑（須恵器）		⅓	口縁部内外—ヨコナデ 胴部外面—平行叩キ		中粒砂，長石，石英，雲母—多	灰色	良	
30	甕（須恵器）	24.0 〈16.2〉 —	¼	口縁部内外—ヨコナデ 胴部内面—ナデ 胴部外面—平行叩キ		中粒砂—少 密	灰褐色	甘	
31	甕（須恵器）	— 〈15.4〉 頸部径 13.4 胴最大径 22.1	頸部～胴部½	口縁部内外—ヨコナデ 頸部内面—ヘラナデ 胴部外面—平行叩キ		中粒砂，長石，石英，雲母—多 粗	灰色	良	図版66—4
32	甕（須恵器）	— 〈29.9〉 — 頸部径 17.4 胴最大径 31.8	胴部⅓ 頸部¼	頸部内外—ヨコナデ 胴部内面上位—ナデ 胴部内面—下から下へのナデ 胴部外面上位—叩キ後、ナデ 胴部外面—平行叩キ		粗粒砂、長石、石英、雲母—多 粗	灰色	良	図版66—5
33	甕（須恵器）	22.7 32.7 16.0 頸部径 17.4 胴最大径 28.4	⅔	口縁部—ヨコナデ 頸部外面—平行叩キ後、ナデ 胴部内面—指頭によるナデ 胴部外面—平行叩キ 胴部下端—ヘラ削り		細粒砂、雲母—多 長石、石英—少	黒灰色	やや甘	図版66—6



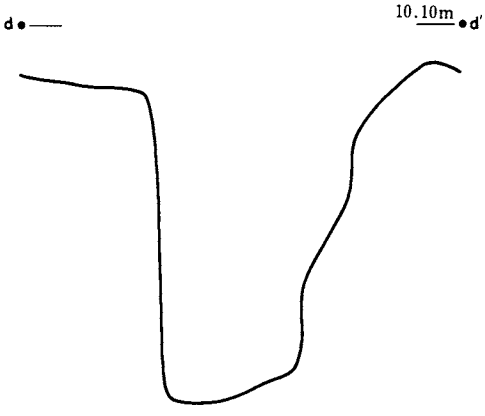
第159図　059土坑・063製錬炉・064土坑



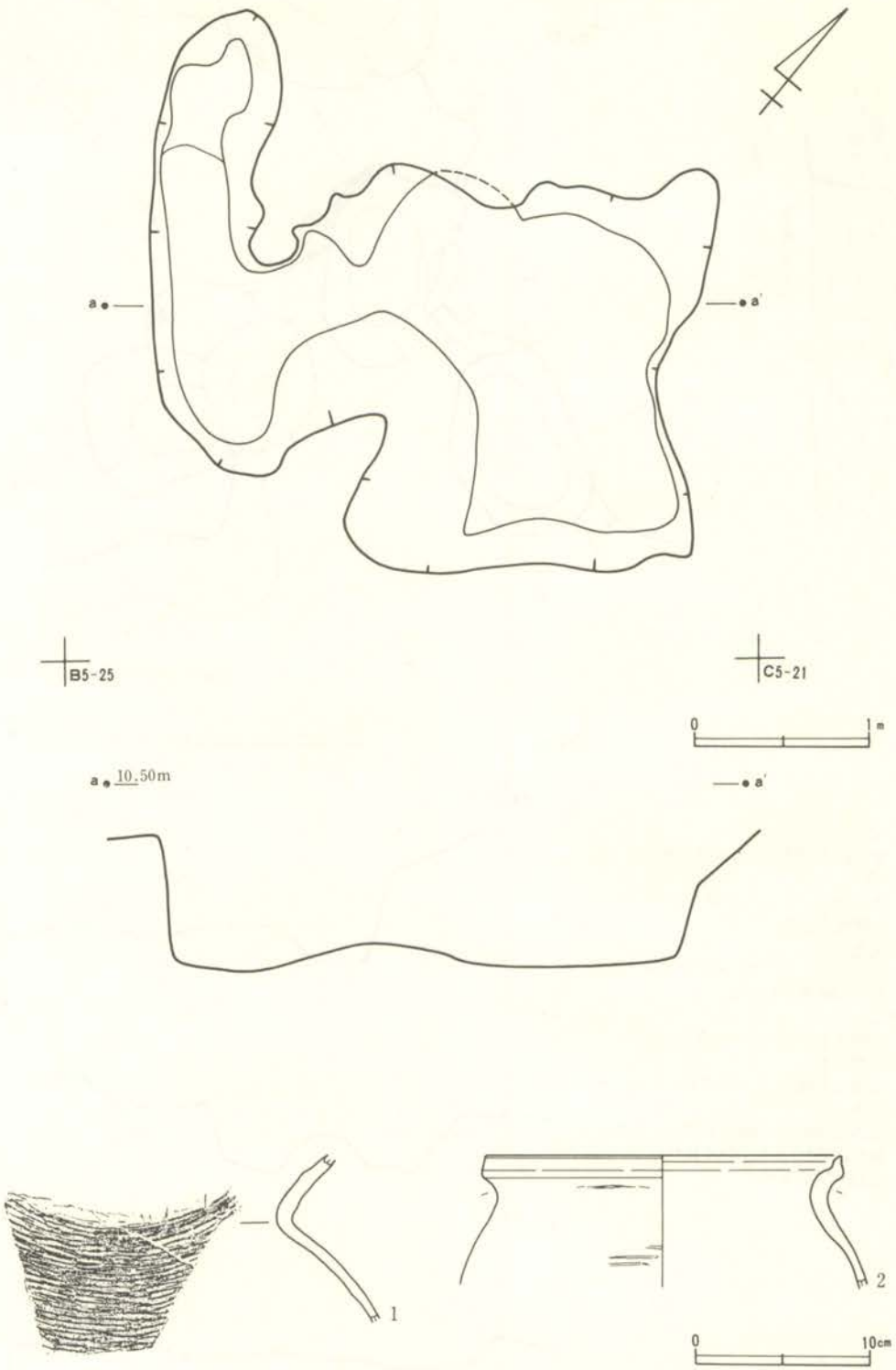
第160図　061製錬炉・065土坑



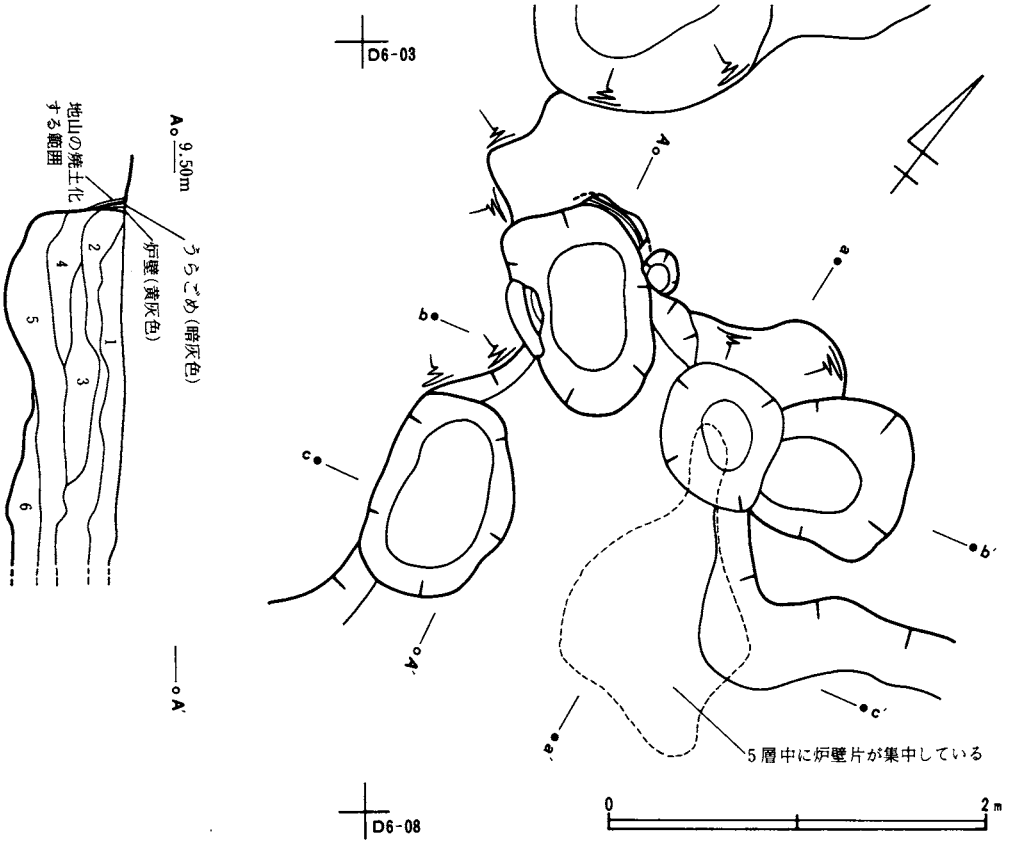
1. 炉壁 スサ入り粘土,内面は崩壊している。
2. 暗青色土 炉壁の細かいものが堆積している。熱を受け還元した炉底部と考えられる。
3. 地山の崩壊土に焼土ブロック,若干の木炭片を含む。
4. 焼土ブロック 炉壁の酸化した部分が堆積。
5. 暗灰色土 地山崩壊土と暗褐色土が混合,焼土粒を含む。
6. 淡黄褐色土 地山崩壊土を主とし,木炭粒,焼土粒を少し含む。
7. 暗黄灰色土 地山崩壊土を主とし,所々に炉壁の細片を多く含む。
8. 黒灰色土 砂質,炉壁の細片を多く含む,少量のスラグも含む。
9. 炉壁材をブロック状に多量に含む。
10. スラグを少量含む,黒色土,黒褐色土

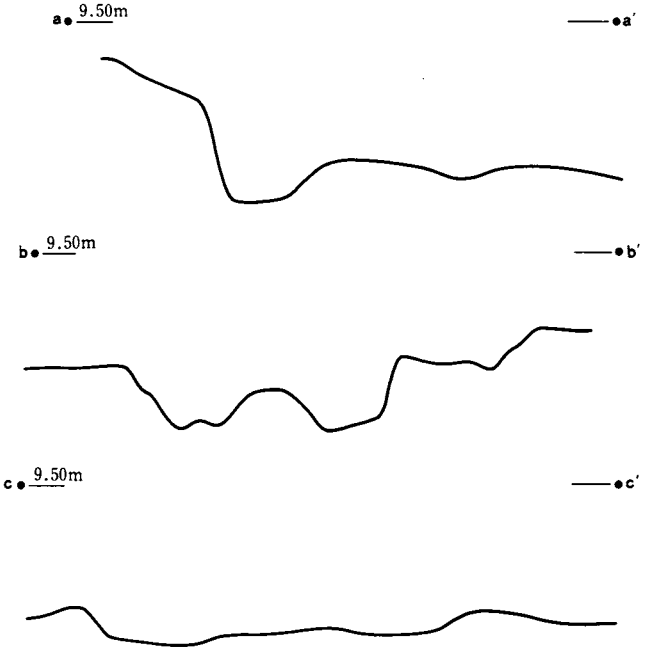


第161図　061製錬炉主体部分



第162図　066土坑及び出土遺物

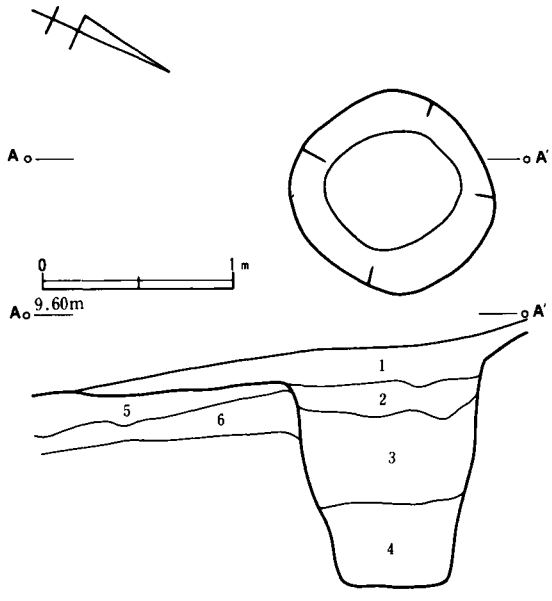




1. 暗褐色土
   焼土粒,炭化物粒,山砂粒を含む。
2. 黒 色 土
   焼土の小ブロック(炉壁?),炭化物,
   山砂粒を含む。
3. 茶褐色土
   焼土の小ブロック(炉壁?)を多く含む,
   地山の崩壊土も含む。
4. 黒 色 土
   炉壁片をブロック状に含む。
5. 暗茶褐色土
   大きな炉壁片,スラグを多く含む。
6. 茶褐色土
   粘質土,地山の崩壊土をブロック状に
   含む,炉壁片もわずかに含む。

※ 地山は砂質凝灰岩

第163図　067製錬炉



1. 暗褐色土　地山の崩壊土を含む。
2. 暗褐色土　1層より小さなブロックを含む。
3. 灰茶褐色土 地山の崩壊土を多く含む。
4. 灰茶褐色土 3層よりさらに多量の崩壊土を含む。
5. 黒茶褐色土 パミス,木炭粒をわずかに含む。
6. 地　山（砂質凝灰岩）

第164図　068土坑

063製錬炉（第159図）

位　置　E 6－14グリッド　斜面部の下半，炉床と推定される部分は標高8.2～8.3m

構　造　おそらく半地下式竪形炉であったと思われる。現存する掘り方は長径1.6m，短径1.2m，高さ1mほどの長円形の土坑。この土坑内の地山（砂質凝灰岩）の一部分が焼土化しているため，製錬炉の掘り万であろうと推定されたものである。炉壁や山砂は全く検出されず炉本体の構造，規模，操業回数等は全くわからない。

採掘坑と重複していて必ずしも明確ではないが炉本体を中心として東西各2mほどのところに広がっている隅丸方形の浅い落ちこみを一応前庭部としてとらえたい。後背部，その他のピット等の施設は未確認。

その他　時期を決定できる遺物は発見されていない。

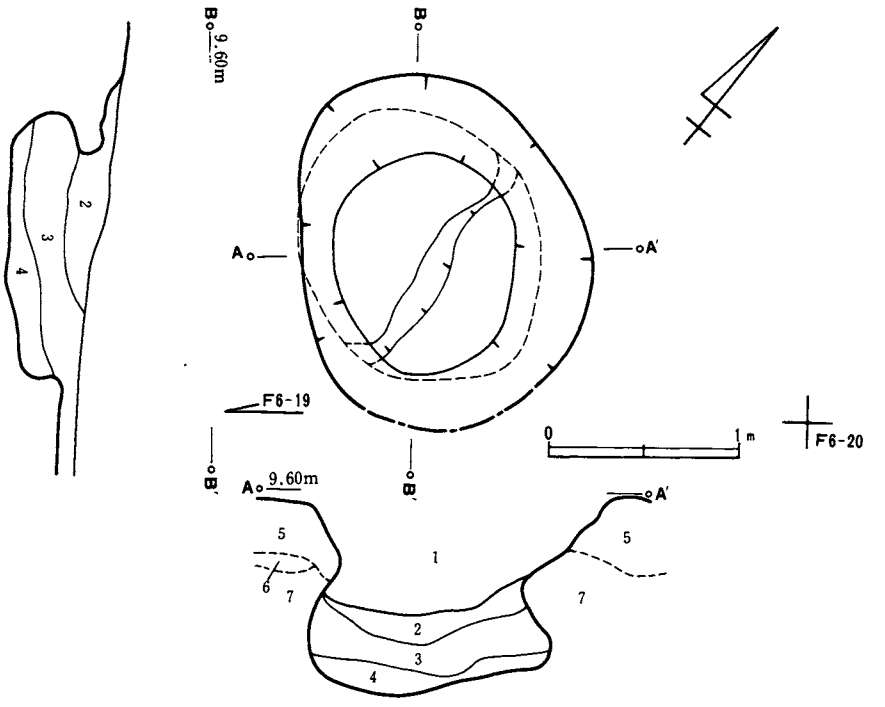
061製錬炉（第160，161図）

位　置　E 6－10グリッド　斜面部の下位，炉床と考えられる部分の標高はおよそ9.30m

構　造　半地下式の竪形炉と推定される。炉壁の残り方等から内径60×40cm弱の長円形の本体部分が推定される。炉壁の現存高は1m弱である。炉壁は，内面の大部分が崩れてしまっているが北西側の一部についてだけ，溶解して青紫色に還元した内面が残っている。現状では，地山（砂質凝灰岩）と炉壁（スサ入り粘土）の間には山砂等の間層を観察することはできない。従ってうらごめがあったかどうかは不明である。また，炉底と考えた2層中には炉壁の細片が混入しているが、これらが人為的に敷かれたものか，崩壊土の自然堆積を利用したものなのか，も不明である。7層の上面はたいへん固くしまっている。この固い面は，8層中にも一枚観察することができた。このことから，7・8層は炉の構築にあたって版築状に調整された土と考えることができる。

本製錬炉は，粘土採掘坑と考えられる065土坑と重複しているために，炉に伴う付属施設は，はっきりとしない。けれども調査時に065－2とした土坑は，061製錬炉の前庭部と考えてさしつかえないだろう。後背部や周囲のピットについては確定できるものはない。

遺物は炉内に残っていた炉壁片が主なものであるが分析を全く行っていないので，炉の上部構造等については言及できない。その他に時期を確定できるような遺物はない。



1. 黒 色 土 表土層，ローム粒を少し含む，しまりがない。
2. 暗茶褐色土 砂粒を含む，粘性が若干ある。
3. 暗茶褐色土 砂粒を含む，粘性はない。
4. 暗茶褐色土 地山の崩壊土を含む。
5. 黒褐色土 ローム粒を含む，スラグ小片も含む。
6. 灰茶褐色土 地山への漸移層
7. 地 山（砂質凝灰岩）

第165図　072土坑

操業回数について炉本体に直接的な根拠は何も残されていない。しかし調整土（7，8層）の中に炉壁片が含まれることなどを考えれば，複数回の操業が行われた可能性も否定できない。

065土坑（第160図）

位　置　E 6－9，10，14，15グリッド　斜面部下位，061製錬炉と重複する。

所　見　粘土あるいは山砂の採掘坑と考えられる。調査時に065－1から065－4までの番号が付けられている。このうち，065－2は061製錬炉の前庭部と考えられる。065－1は形状などからみて採掘坑として間違いあるまい。065－3，065－4については一応，採掘坑としてとらえておくが，061製錬炉の付属施設である可能性もある。

時　期　不明。061製錬炉との新旧関係も不明である。

066土坑（第162図）

位　置　B 5－20グリッド　斜面部の西側，底面の標高は約9.5m

所　見　長径3.0m，短径2.2m，深さ0.6～0.8mの不整形の土坑。本遺構の周辺からは鍛造剝片が検出されている。また覆土中からは土師器片が発見されていて，製鉄関連遺構との関係が示唆されるが時期・性格ともに今ひとつ明確でない。

067製錬炉（第163図）

位　置　D６－03グリッド　斜面部下半，炉底部の標高は8.7～9.1mと推定される。

構　造　半地下式の竪形炉と推定される。炉本体の内径は残っている炉壁面をもとに推定すれば，径60～80cmの円形ないし長円形であろう。炉壁の現存高は南側の最も残りの良いところで50cm弱である。炉壁は南北２ケ所で部分的に残っているが，内面は全て剝がれ落ちていて，外側のごく一部分だけが残っている。うらごめは暗灰色のスサ入り粘土主体の層で炉壁材や焼土を含んでおり，最も厚いところで５cmほど残っている。下部構造は，炉底面が確認できず不明である。

付属施設は，前庭部と思われる広がりと土坑状の落ちこみが３ヶ所あるが，土坑については採掘坑の可能性もある。後背部等の施設は不明である。

その他　時期決定のできる遺物は全くない。ただ炉の南東側に大形の炉壁片が集中して堆積している部分がある。おそらく067製錬炉の炉壁であろう。炉壁の分析は全く行っていないので炉の上部構造，操業回数等は不明である。

068土坑（第164図）

位　置　D６－04グリッド　斜面部下位，底面の標高は約8.2m。東側のごく近い位置に041炭窯がある。

所　見　径１m強の円形の土坑で，確認面からの深さは1.0～1.2mほどである。覆土は地山の崩壊土を主とする土で，遺物はほとんど発見できなかった。時期・性格ともに不明。

072土坑（第165図）

位　置　F６－14グリッド　斜面東側の下位，底面の標高は約8.6m

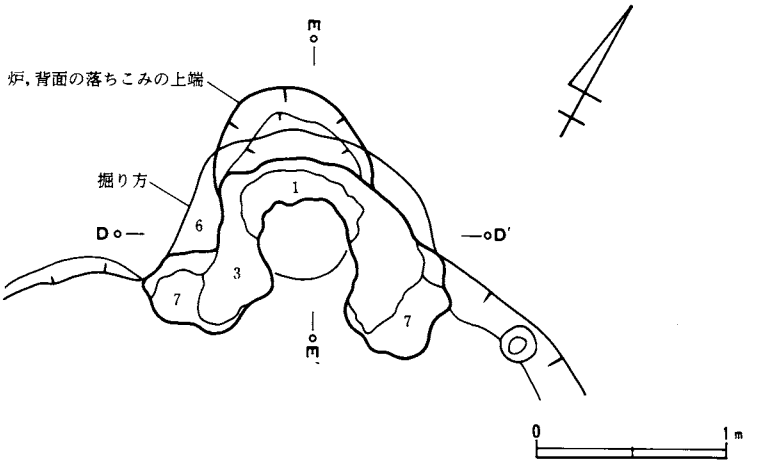
所　見　開口部径1.0～1.2m，最大径1.6～2.0m，底径1.2～1.5m，深さ1.0mほどの不整円形の袋状土坑。表土層から掘りこまれている。斜面東側の遺構確認のトレンチ調査中に検出された。遺物等は全く発見されず，時期・性格は不明。

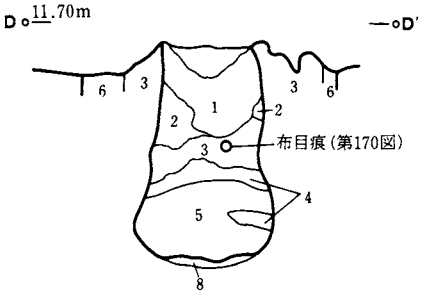
073製錬炉（第166～170図）

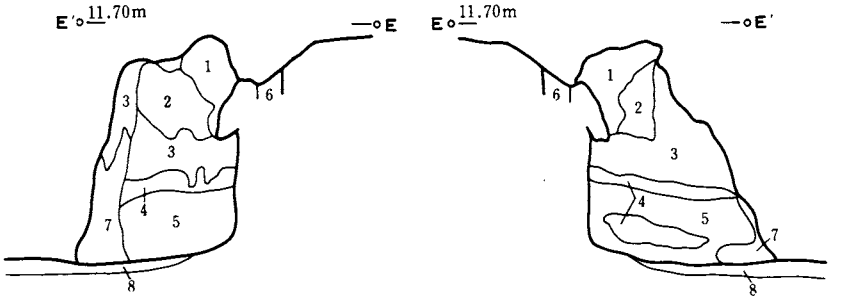
位　置　E６－02グリッド　斜面部中位，標高約11.5m，炉底面の標高はおよそ10.5mであったと思われる。

構　造　円筒形の半地下式竪形炉と推定され，内径0.6m，外径1.0×1.4m，現存高は1.2mほどである。炉内の観察により炉本体の構築手順を次のように想定することができる。１．荒掘り，２．山砂を使って炉内を整える，３．スサ入り粘土を使って炉壁面を作る。但し炉の前庭部側は山砂ではなく粘土を用いて炉を覆う。

炉壁は炉の奥（北側）上半にアメ状に溶けた部分が残っているがこれは元の位置から，ずり落ちた可能性がある。側面において、炉壁内面が残っているところも現存部分の上位に限られる。炉の中位から下位にかけては，炉壁は一部分しか残っておらず，うらごめと思われる山砂が露出している。また炉壁が残っている部分でも内面は剝落している。これらのことと，炉の

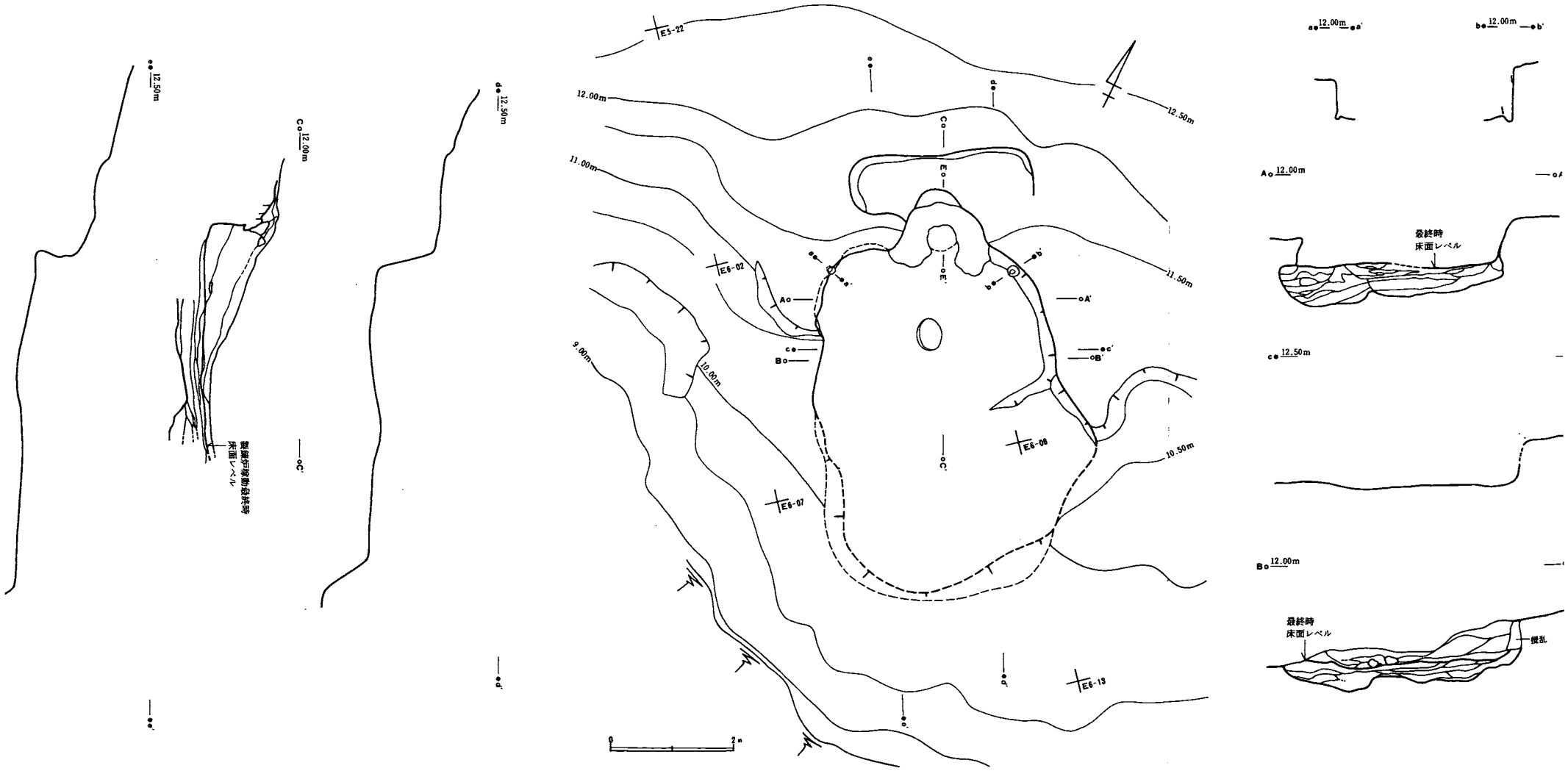




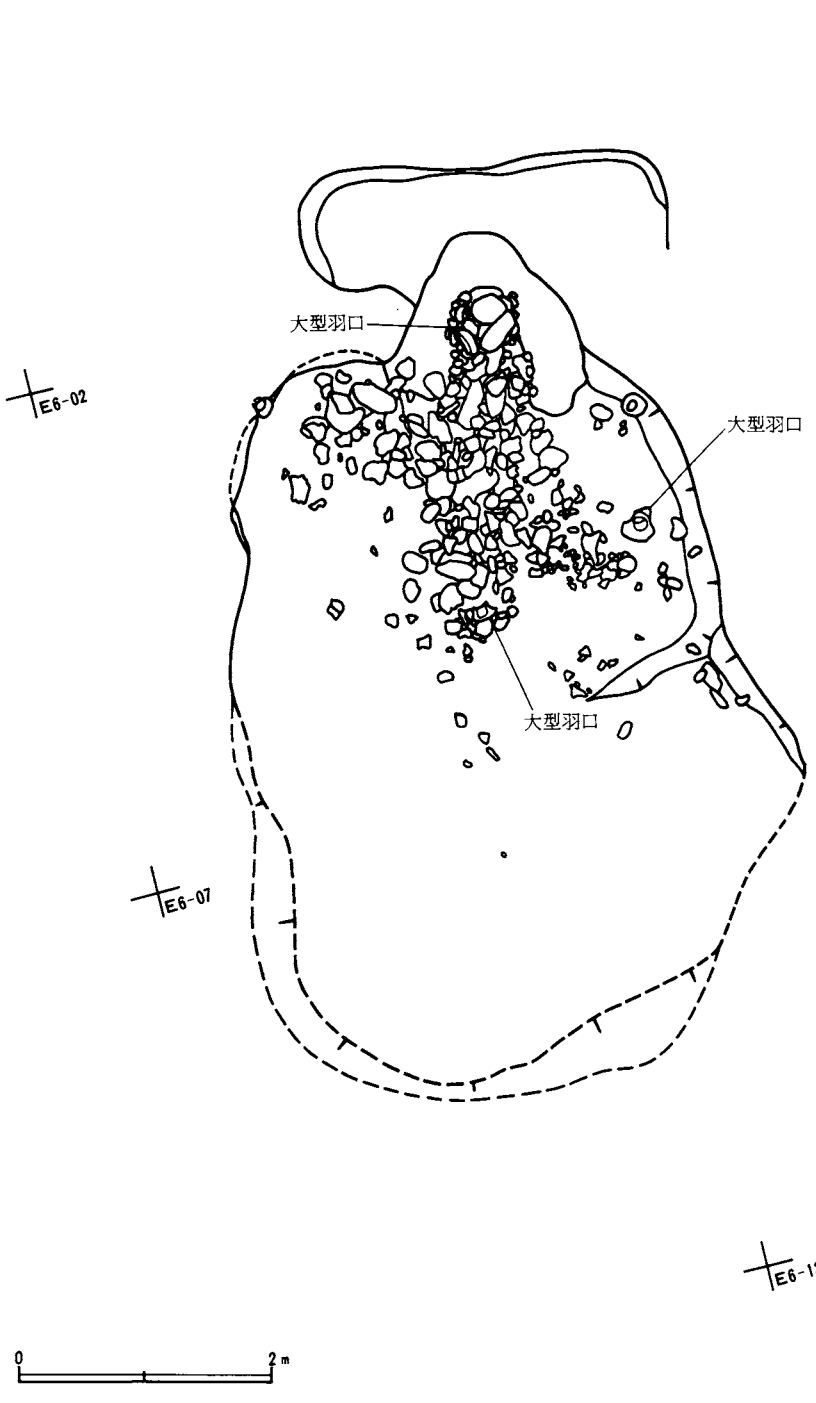


1．炉壁$_1$．アメ状に溶けている部分
2．炉壁$_2$．炉壁の内面が残っている部分（スサ入り粘土）
3．炉壁$_3$．炉壁の内面が剝落してしまった部分（スサ入り粘土）
4．うらごめ$_1$．熱を受け焼土化（酸化）している部分（山砂）
5．うらごめ$_2$．焼土化していない部分（山砂）
6．うらごめ$_3$．基本的には5層と同一（焼土ブロックを含む山砂）
7．うらごめ$_4$．炉の前庭部側を覆っていたと考えられる部分（粘土）
8．調整土 山砂主体，焼土粒，スラグの小塊を含む，壁材は含まない。

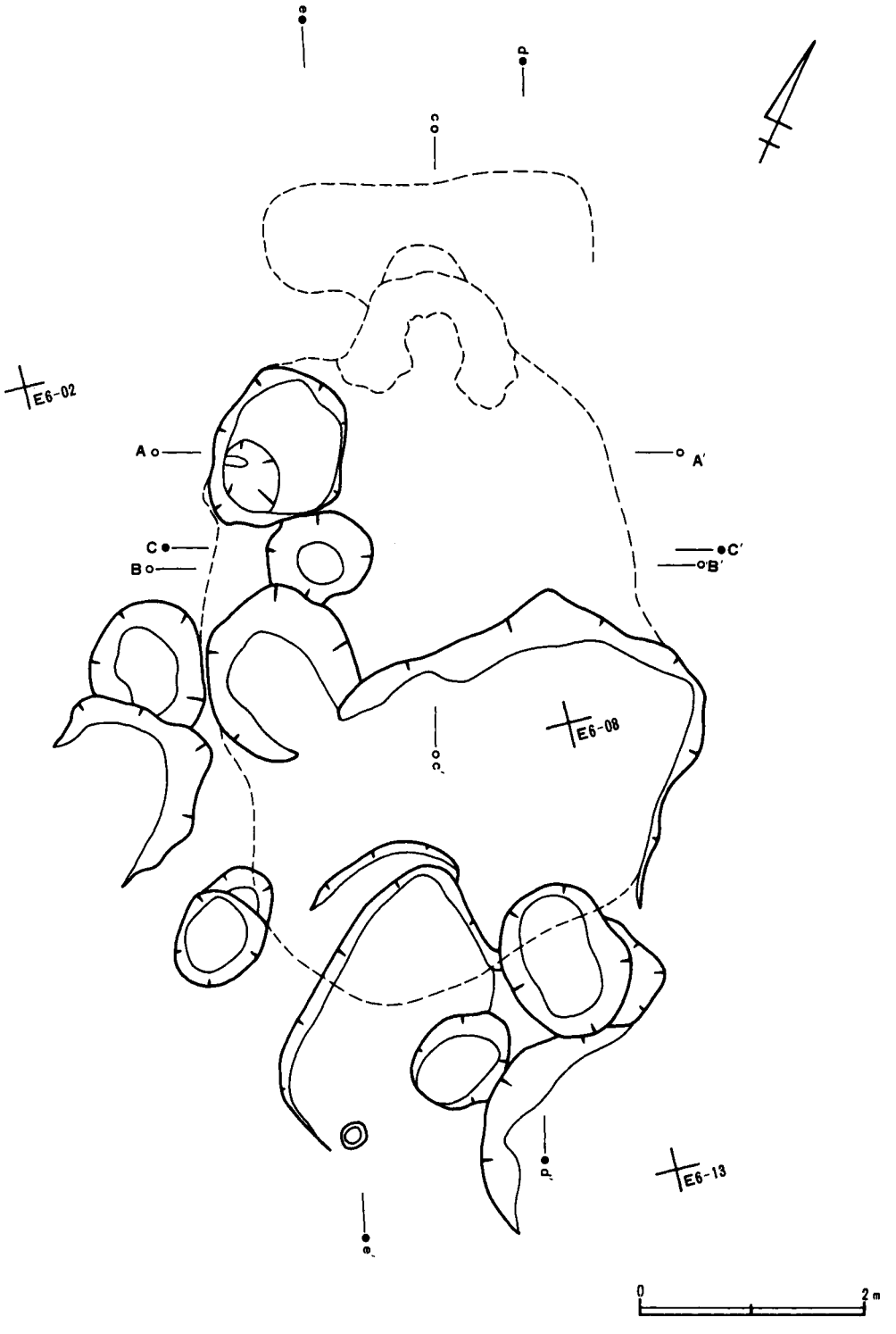
第166図　073製錬炉〈炉体，平面図及び内面見通し図〉



第167図　073製錬炉

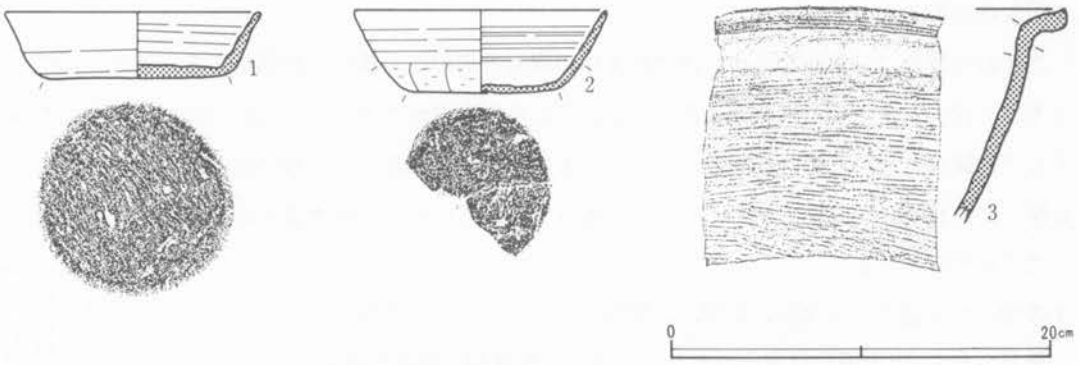


第168図　073製錬炉〈炉壁出土状況図〉



第169図　073製錬炉〈下部構造〉

第170図　073製錬炉〈内面布目痕〉



第171図　073製錬炉出土遺物

073製錬炉出土遺物

挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
1	坏 (須恵器)	13.3 3.5 9.6	¾	体部内外ーヨコナデ 底部ー切り離し不明，手ヘラ削り	R	粗粒砂・長石・石英・雲母ー多	灰色	良	
2	坏 (須恵器)	13.2 4.3 8.0	½	体部内外ーヨコナデ 体部下端ー手ヘラ削り 底部ー切り離し不明，手ヘラ削り	R	粗粒砂，長石，石英，雲母ー多	灰色	良	
3	甕 (彰恵器)		⅛	口縁部内外ーヨコナデ 頸部内面ーヘラナデ 胴部内面ー指頭による，押への後，一部ヘラナデ 胴部外面ー平行叩キ		中粒砂・長石・石英・雲母ー多	黒灰色	やや甘	

内面形態がいわゆる「下ぶくれ」であることから考えて，本来は円筒形であった炉が何かの要因（たとえば「炉内のかき出し」など）で現在のような形になったものと思われる。

下部構造については炉本体部分の「切り取り」移動を行ったために不明の点が多い。前庭部では粘性のある暗褐色土や褐色土を主体とした土が4～10cmほどの厚さで版築状に堆積している。これらの土は鉄滓や炉壁片を含んでいないので製錬炉操業前の調整土と考えられる。同様の調整は，炉本体の下および背面にも行われていた可能性が高い。

炉の南側に東西約4m，南北約5.5mのややゆがんだ隅丸長方形をした平担部分がある。土層の観察からこの平担部分は下にあった土坑（採掘坑か？）を埋め戻して作られていることがわかる。ところで本製錬炉の炉壁と鉄滓の平面的な出土状況をみると、この平担部の北側ほぼ半分に集中している。これは必ずしも平担部全体が前庭部として機能していない可能性が強いことを示している。前庭部として確実にとらえられるのは平担部北側半分までとするのが妥当であろう。また平担部中央北寄りにはごく浅い落ちこみがあってこの中からは鉄滓が集中して発見されている。平担部の成形は前にも述べたように粘性の高い土による版築で基本的に鉄滓，炉壁を含まない土層である。しかし最も北西寄り（前庭部西側の肩にあたる部分）の土坑には鉄滓と炉壁片を多く含んだ土が充てんされており，この土坑だけは製錬炉操業中に開口していた可能性がある。

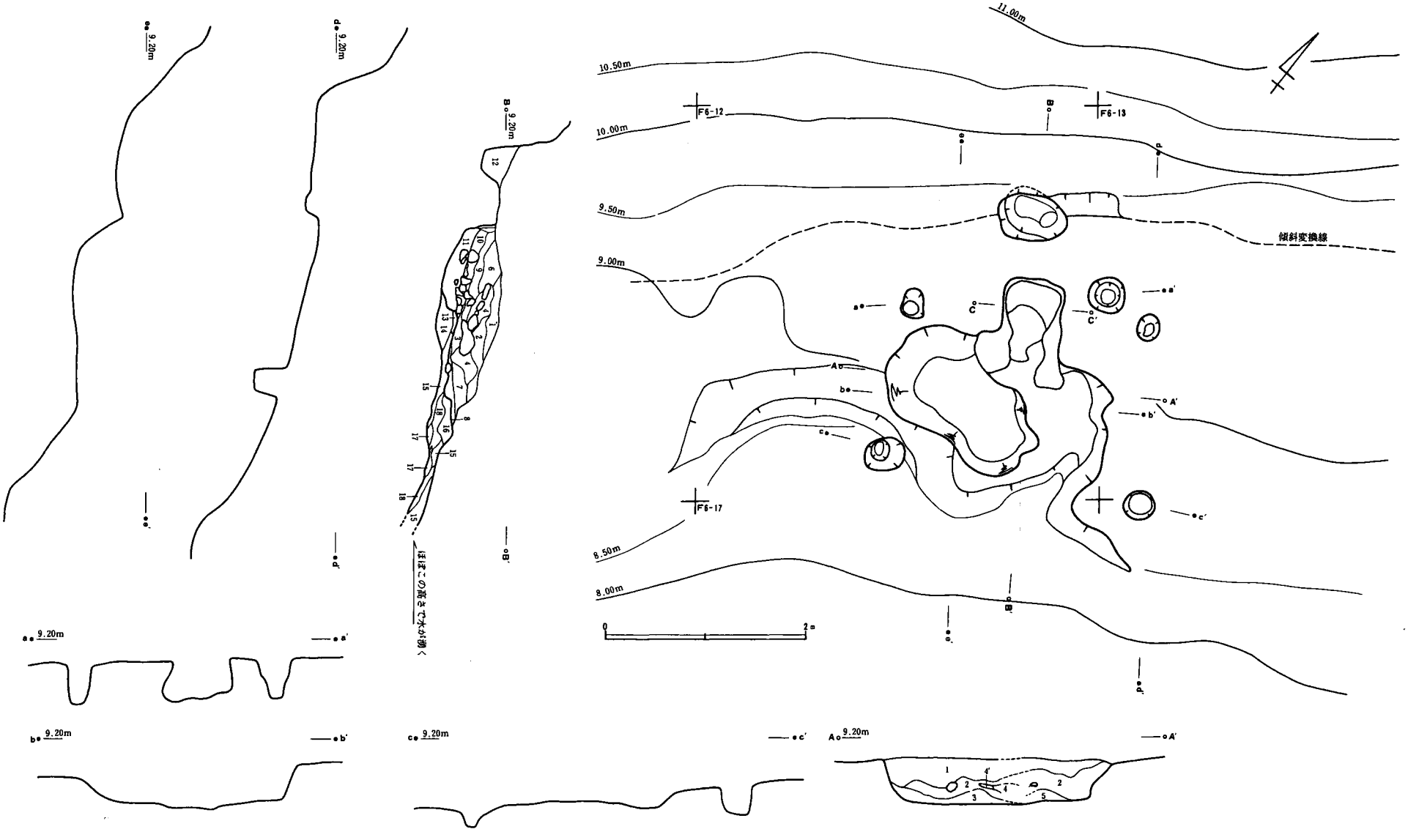
本体の後背部には東西約3m，南北約1mの隅丸方形のごく浅い平担部がある。この平担部は本体と接する所で扇形に落ちこんでいる。これらは炉内から出土した大型羽口も合わせて考えれば製錬炉背後からの送風施設に関係するものと考えられる。この他に前庭部の両肩にあたる部分で径15～20cmの柱穴状のピットが2本みつかっている。上屋構造との関連が考えられるが実態は不明である。

その他　出土遺物には土器，鉄滓，炉壁等がある。図示した土器は全て前庭部中央の東壁際から発見された。出土層位は覆土のかなり上層で本製錬炉の時期を確定する資料とはなり得ない。鉄滓，炉壁は前述のように平担部北側に集中する。炉壁の分析はほとんど行っていないが現時点で3点の大型羽口が確認されている（第167図），炉の操業回数について積極的な根拠はないが出土個数から見て複数回の操業の可能性がある。

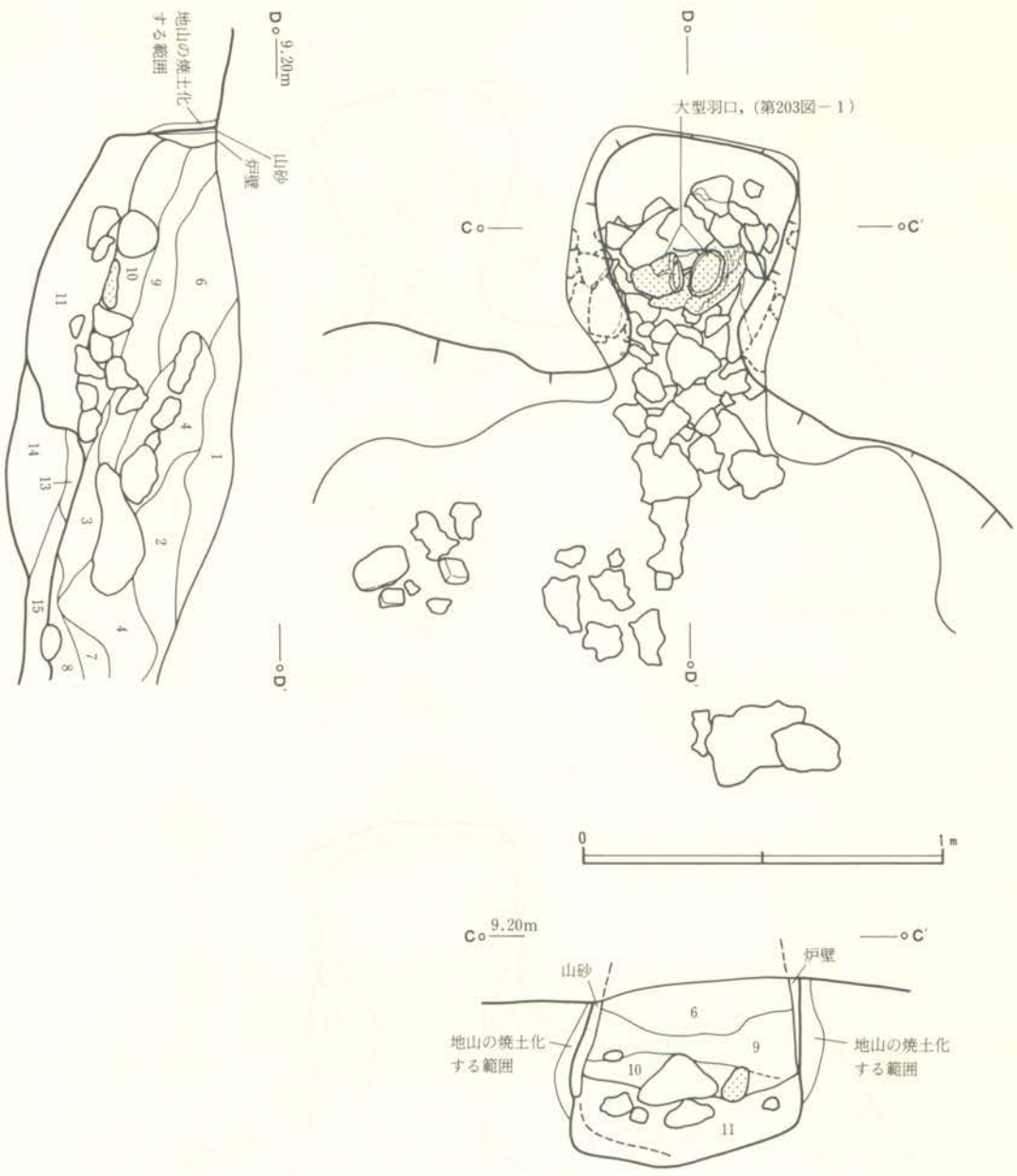
炉本体の奥壁中位には炉壁を作った時に使ったと思われる。布の圧痕と整形に使った工具痕が残っていた（第169，170図，図版52）これらの痕跡は，スサ入り粘土の上で見つかったので，炉壁の成整形に関係するものと思われる。又，これらの圧痕は炉壁の最も内側につけられたものではないから，炉壁の製作が何回かに分けて行われたらしいことが推測される。

074製錬炉（第172～175図）

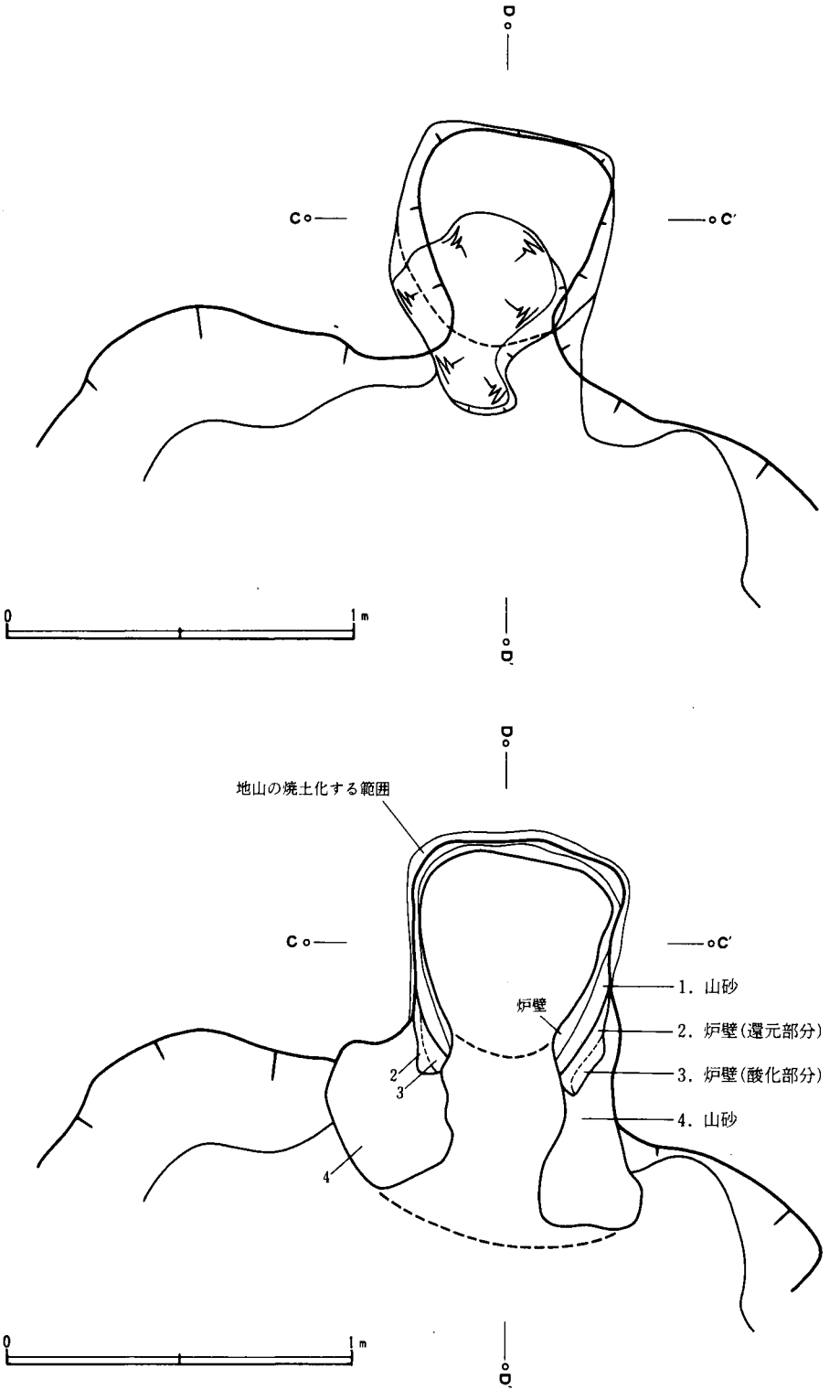
位　置　F6－12グリッド　斜面部下位，本遺跡で発見された製錬炉のうち最も東側に位置し，標高も最も低い。炉底と推定される部分の標高はおよそ8.6～8.7m，湧水する高さとほぼ同じである。



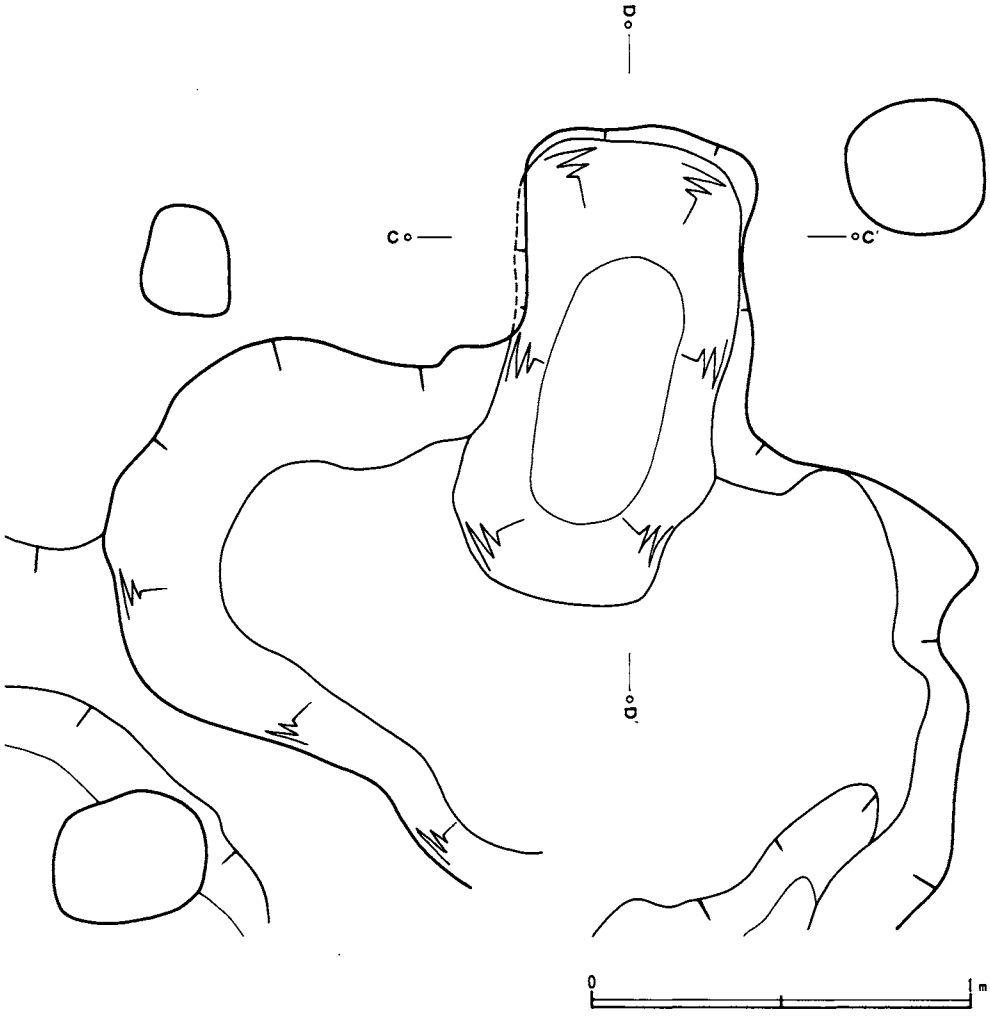
第172図　074製錬炉



第173図　074精錬炉主体部分(1)〈炉壁出土状況・セクション〉



第174図　074精錬炉主体部分(2)〈平面・構造〉



第175図　074精錬炉主体部分(3)〈掘り方〉

構　造　他の炉と同様，半地下式の竪形炉と考えられる。本体の大きさは60cm×60cmほどの隅丸三角形，もしくは卵形で炉壁の現存高は約50cmである。炉壁の状況からみて本体の内のりは若干小さくなる可能性がある。

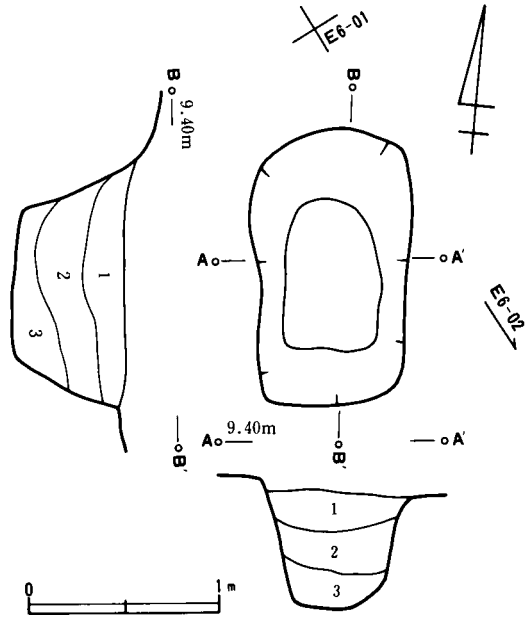
炉壁はスサ入り粘土で厚さおよそ4cmが残っていて，おおむね還元している。ごく一部（炉南東端）を除いては炉壁内面は残っておらず、かなりの部分が剝落しているものと思われる。炉壁の外側にはスサを含まない山砂がうらごめとして使われているが平均的な厚さは4cmと薄く，部分によっては全く山砂のないところもある。さらに外側は地山が熱を受け，平均4cmぐらいが焼土化している。本体の手前つまり南側は炉がこわされてしまっており，その構造を正確に知ることはできない。現在残されている状況から推測すれば，炉壁は他と同様のスサ入り粘土で，その外形にはスサを含まない山砂（第174図－1）が5cm前後の厚さで貼られている。さらに外には本炉構築以前に操業していた製錬炉の炉壁を再利用してうらごめを補強している。これらの炉壁片は片面が溶解してアメ状になっている，特に左側の炉壁はその溶解した面が外側を向いている（これはうらごめの土を貼りつけやすくするためとも考えられる）現在残っている炉壁は2点で20×30cmほどの不整形で厚さは10cm弱である。この炉壁の外側には再びスサを含まない山砂を貼っている。ただし現存する山砂の範囲は前庭部側へ流失している可能性が高く，本来的な姿であるとは考えにくい。

炉の下部構造についても不明な点が多い。これは最終的に炉壁内面，および炉底がかなり壊されているから（第173図11層）で，前庭部側の様子から推測するに，他の製錬炉と同じように簡単な版築状の下部構造があったものと思われる。

前庭部は幅がおよそ2.3m，長さ1m強の隅丸長方形に近い不整形をしている。荒掘り後地山の崩壊土を主とする土を充てんし，平担面を作っている。後背部は掘り込み等は確認されなかったが地山全体を整形して平担にしているようである。他には本製錬炉に伴うと思われるピットが6本発見されている。これらのピットは本炉の主体部分及び前庭部を取り囲むように配置されていて，上屋に関係するものではないかと考えられる。

その他　遺物は炉壁，鉄滓等があるが製錬炉の時期を確定できるものはない。この中で特に注目されるのは，大型羽口（第203図－1）で，炉本体の中から出土している。この出土位置から炉の奥壁（後背部）側に装着されていたのではないかと考えられる。

覆土の状態は次のとおりである（第172，173図）。1～10は稼動終了後に堆積した土と考えられ，そのほとんどが地山（砂質凝灰岩）の崩壊土を主体とする層で炉壁片，焼土粒も多く含まれる。ただし鉄滓は量的に少ない。11は還元色に焼けた山砂を主体とする土，鉄滓小塊，炉壁片を多く含んでいる。この層の上面あたりがおおむね炉底に相当するものと推定される。12は木炭の細片を含む暗褐色土。13～18は地山の崩壊土と砂質土を主体とする調整土と考えられる。崩壊土の粒子が細かく熱を受け焼土化しているものが多いことが1～10とは異なる。16の上面は固くしまっている。



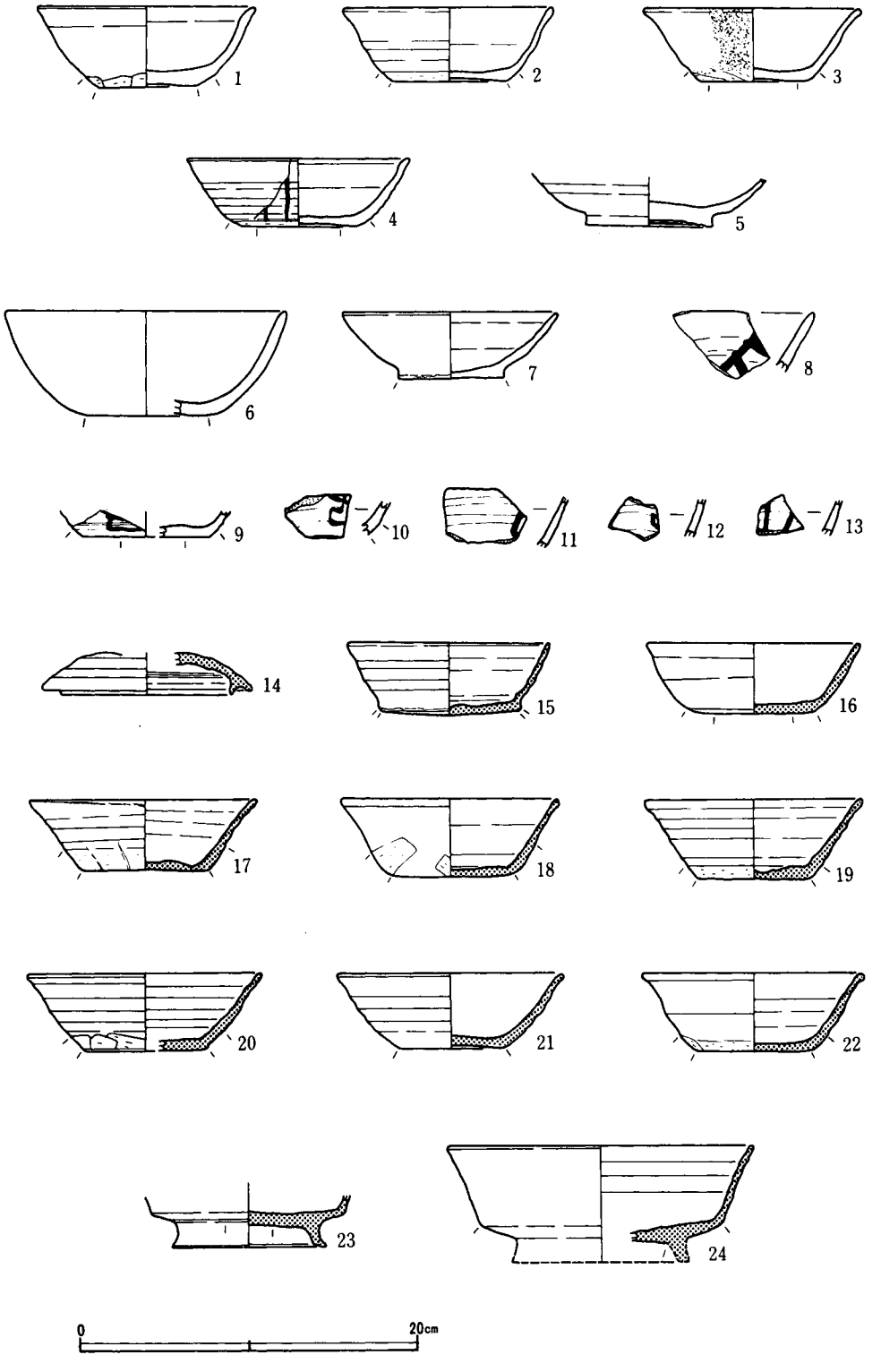
1. 灰褐色土 焼土粒・スラグを含む，粘性大
2. 暗灰褐色土 地山の崩壊土をブロック状に含む，粘性大
3. 黒灰褐色土 上面で湧水する，底面直上で，スラグ，炉壁片が多く出土する。

第176図　079土坑

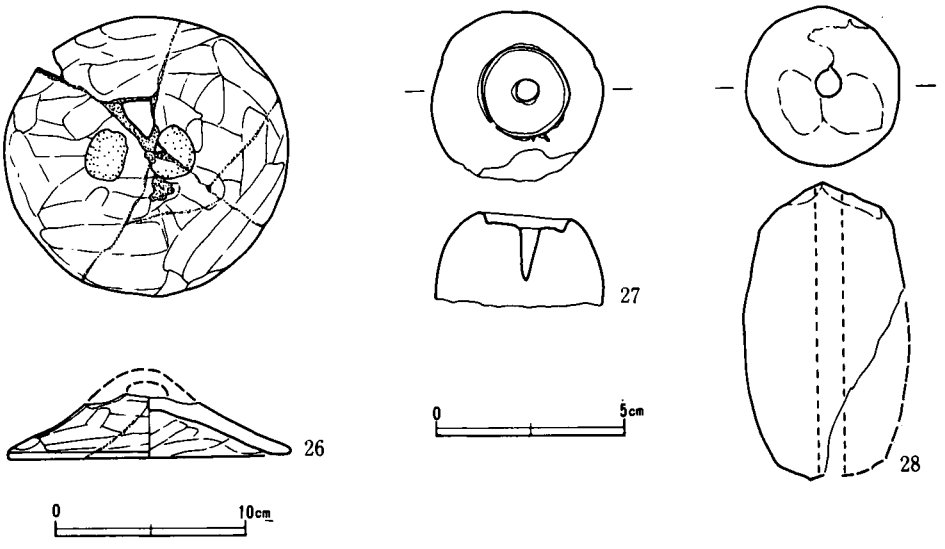
079土坑（第176図）

位　置　D６－05グリッド　斜面下位，底面の標高は約8.5～8.6m

所　見　長径1.4m，短径0.8m，深さ0.6mほどの方形の土坑。１，２層中に若干の平安時代の土器片を含む。また底面に密着した状態で炉壁片が出土している。さらに，放置すると中ほどまで湧水する。以上のことから製錬炉稼動と同時期の井戸跡ではないかと推定されるが，確定はできない。



第177図　グリッド出土遺物

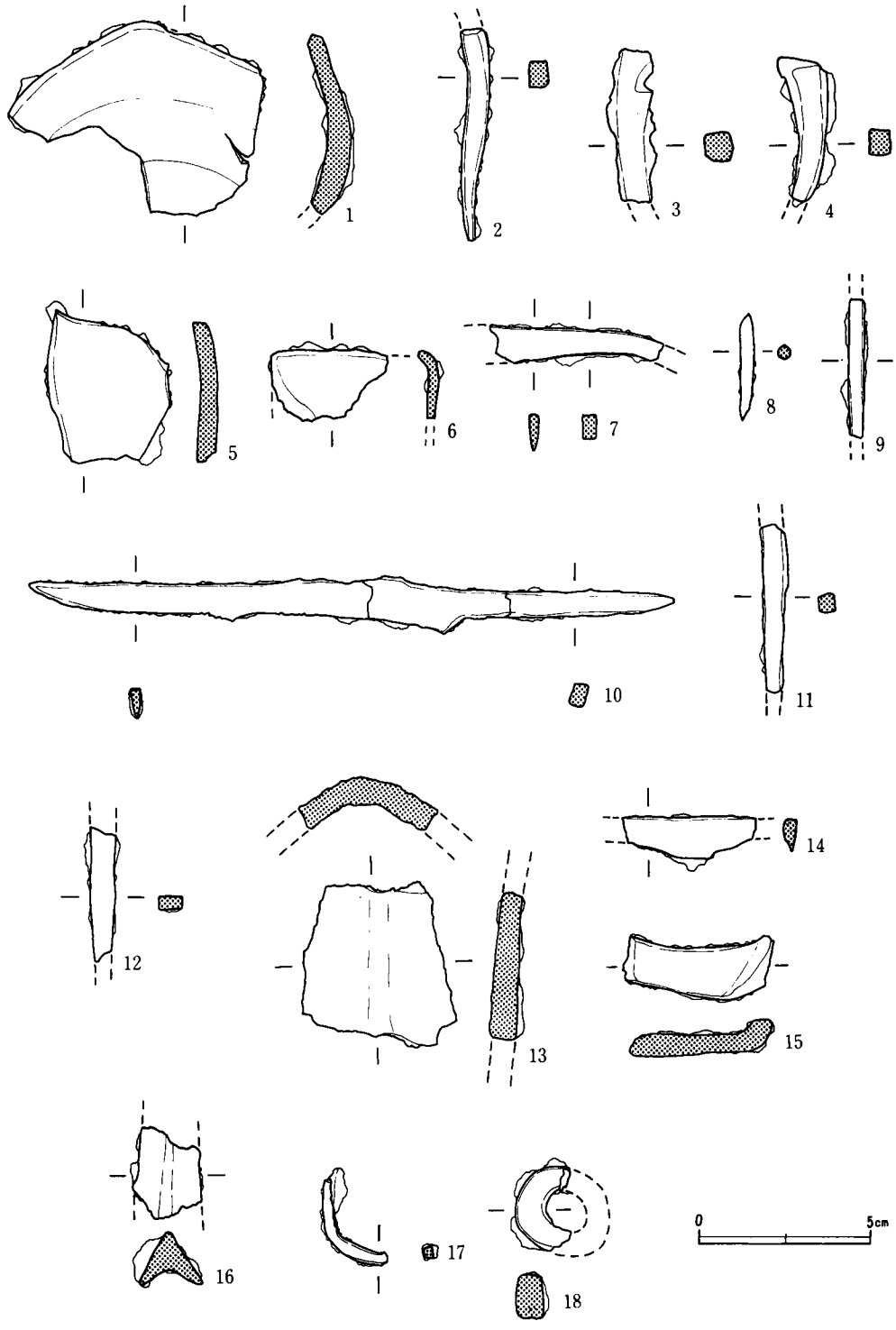


第178図　グリッド出土遺物

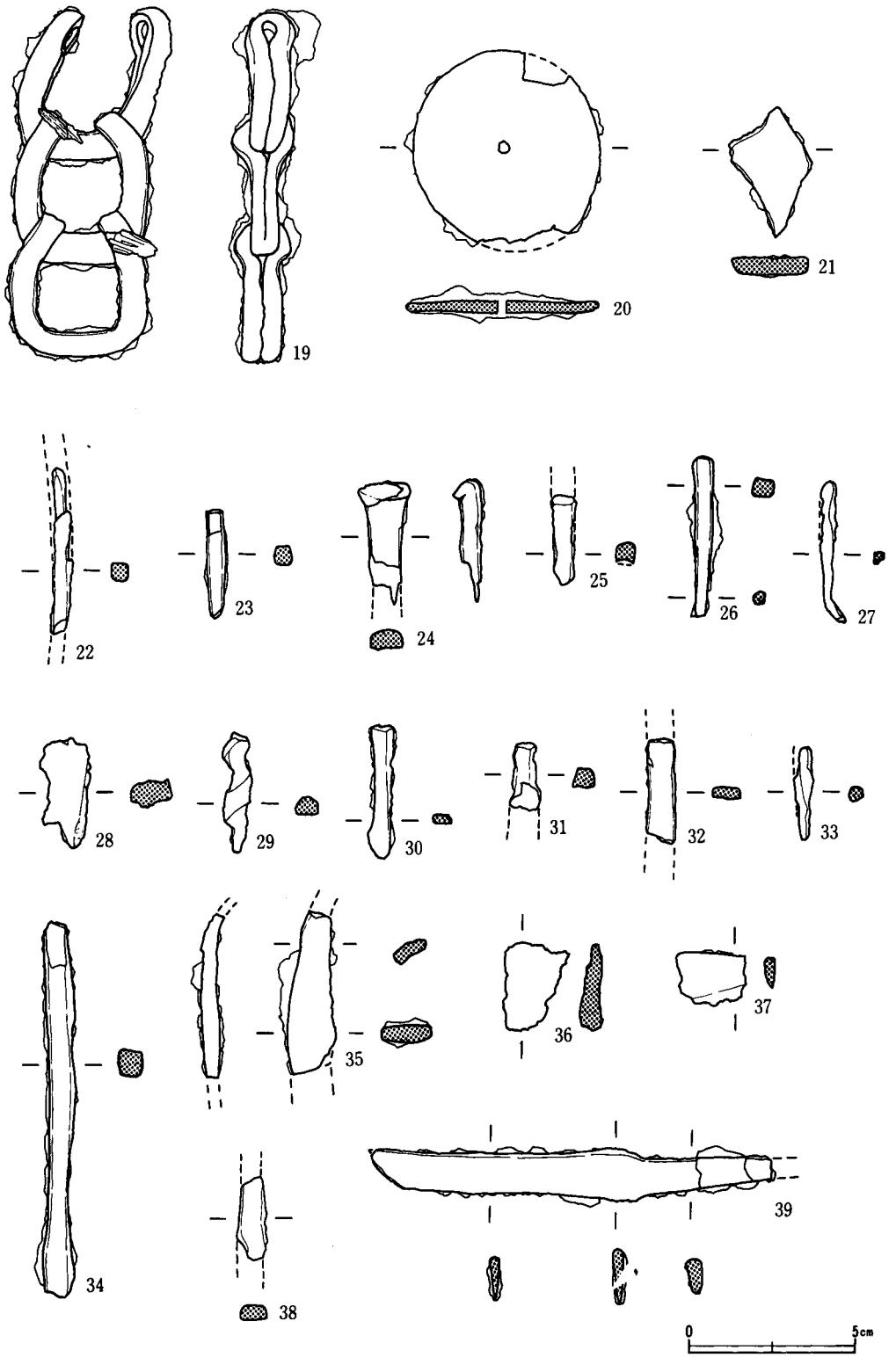
花前II－2本線部グリッド出土遺物

挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
1	坏 (土師器)	12.8 4.7 5.9	完形	体部内外一ヨコナデ 体部下端一手ヘラ削り 底部一回糸切り	R	中粒砂一多 スコリア(酸化鉄粒)一少	乳橙色	良	
2	坏 (土師器)	(12.3) 4.4 (6.8)		体部内外一ヨコナデ 体部下端一回ヘラ削り 底部一回糸切り	R	中粒砂一多 酸化鉄粒一少	乳橙色	やや甘	
3	坏 (土師器)	(12.7) 4.3 (6.4)	½	体部内外一ヨコナデ 体部下端一手ヘラ削り 底部一回糸切り	L	中粒砂，酸化鉄粒一多	乳橙色	良	体部内外と底部の一部分にかけて油煙付着 灯明皿使用
4	坏 (土師器)	(13.0) 3.9 (6.8)	⅓	体部内外一ヨコナデ 体部下端一回ヘラ削り 底部一回糸切り，周縁回ヘラ削り	R	中粒砂一多 酸化鉄粒一少	淡褐色	良	墨書
5	高台付皿 (土師器)	— 〈2.9〉 高台径 7.5	体部⅓ 底部全周	体部内面一ヘラ磨キ 体部外面一ヨコナデ 底部一回糸切り		細粒砂，スコリア，雲母一少	淡褐色	やや甘	内黒
6	埦 (土師器)	(16.6) 6.0 (7.2)	¼	体部内面一ナデ 体部外面一手ヘラ削り 底部一手ヘラ削り		中粒砂一多	乳橙色	甘	
7	坏 (土師器)	12.7 3.8 6.2	¼	体部内外一ヨコナデ 底部一回糸切り		中粒砂一多 スコリア(酸化鉄粒)一少	乳橙色	良	
8	坏 (土師器)	— — —	破片			中粒砂，酸化鉄粒一多	乳橙色	良	墨書
9	坏 (土師器)	— — —	底部⅓破片	体部内外一ヨコナデ 体部下端一回ヘラ削り 底部一回糸切り，周縁回ヘラ削り		中粒砂，酸化鉄粒一少 密	乳橙色	良	墨書

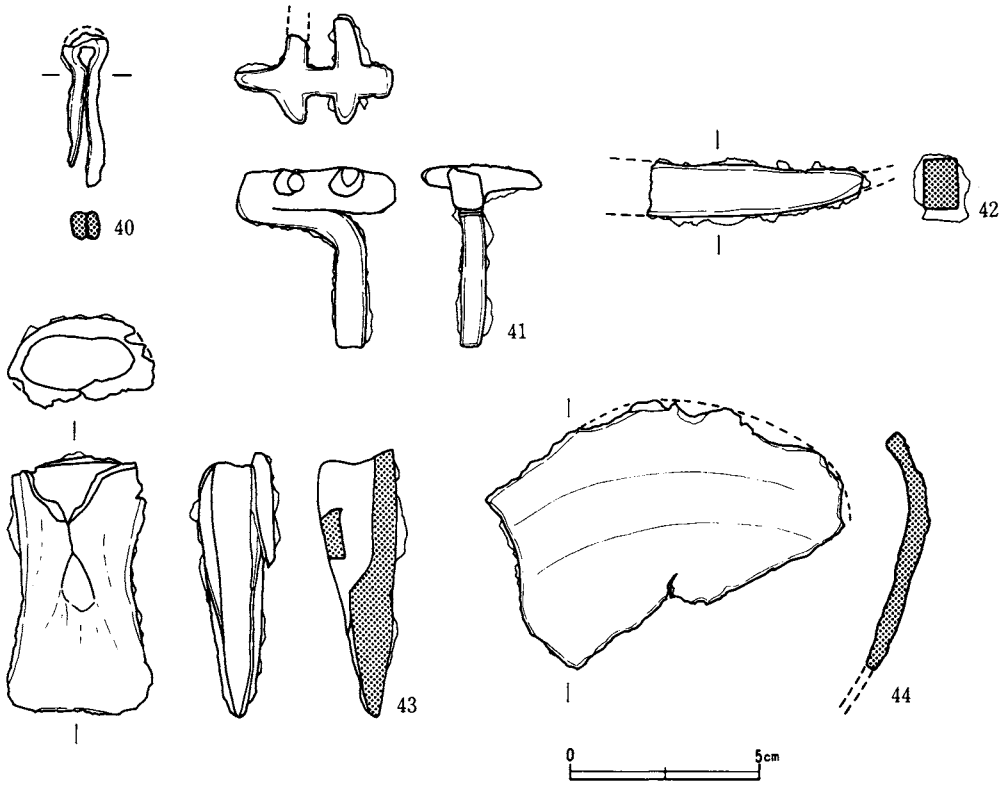
挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
10	坏 (土師器)	— — —	破片	体部内外—ヨコナデ 体部下端—回ヘラ削り				良	墨書
11	坏 (土師器)	— — —	破片	体部内外—ヨコナデ		中粒砂—多	乳橙色	良	墨書
12	坏 (土師器)	— — —	破片	体部内外—ヨコナデ		中粒砂—多	乳橙色	良	墨書
13	坏 (土師器)	— — —	破片	体部内外—ヨコナデ		中粒砂—多 酸化鉄粒—少	乳橙色	良	墨書
14	蓋 (須恵器)	12.4 〈2.4〉 カコリ径 10.0		内外—ヨコナデ		細粒砂—多 密	灰色	堅緻	
15	坏 (須恵器)	12.0 4.2 6.0	1/3	体部内外—ヨコナデ 端部—わずかに面取りする手ヘラ削り 底部—回ヘラ切り(無調整)	R	中粒砂・長石・石英—多	青灰色	堅緻	
16	坏 (須恵器)	12.5 4.0 7.0	1/2	体部内外—ヨコナデ 底部—回糸切り，周縁回ヘラ削り	R	中粒砂—多 長石・石英—少 密	灰色	良	
17	坏 (須恵器)	13.0 4.2 6.4	3/4	体部内外—ヨコナデ 体部下端—回ヘラ削り 底部—回ヘラ切り後，一定方向の手ヘラ削り	R	中粒砂・長石・石英—多 雲母—少	灰色	良	
18	坏 (須恵器)	12.8 4.5 7.0	1/3	体部内外—ヨコナデ 体部下端—回ヘラ削り？ 底部—切り離し不明，手ヘラ削り	R	粗粒砂・石英・長石—多 雲母—微量	暗灰色	良	
19	坏 (須恵器)	13.2 4.6 6.6	1/2	体部内外—ヨコナデ 体部下端—回ヘラ削り，底部—回ヘラ切り(無調整か？)	R	中粒砂・長石・石英・雲母—多	灰色	良	
20	坏 (須恵器)	13.6 4.4 6.8	1/6	体部内外—ヨコナデ 体部下端—手ヘラ削り 底部—切り離し不明，手ヘラ削り		粗粒砂・長石・石英・雲母—多 粗	灰褐色	良	
21	坏 (須恵器)	13.2 4.4 6.4	1/2	体部内外—ヨコナデ 体部下端—回ヘラ削り 底部—回糸切り	L	粗粒砂—多 長石・石英—少	灰白色	甘	
22	坏 (須恵器)	(12.8) 4.5 (6.8)	1/3	体部内外—ヨコナデ 体部下端—手ヘラ削り 底部—回糸切り	R	中粒砂—多	橙褐色	良	酸化焔焼成の須恵器 体部内面にわずかに油煙付着
23	高台付坏 (須恵器)	— 〈3.0〉 高台径 9.0 高台高 1.1	底部完形 体部欠く 底部—回	体部内外—ヨコナデ 高台部内外—ヨコナデ ヘラ削り周縁ヨコナデ	R	粗粒砂・長石・石英—多	青灰色	良	
24	高台付坏 (土師器)	18.0 〈5.5〉 —	1/6	体部内外—ヨコナデ 体部下端～底部—回ヘラ削り		中粒砂・長石・石英・雲母—多	灰色	良好	



第179図　鉄製品



第180図　鉄製品

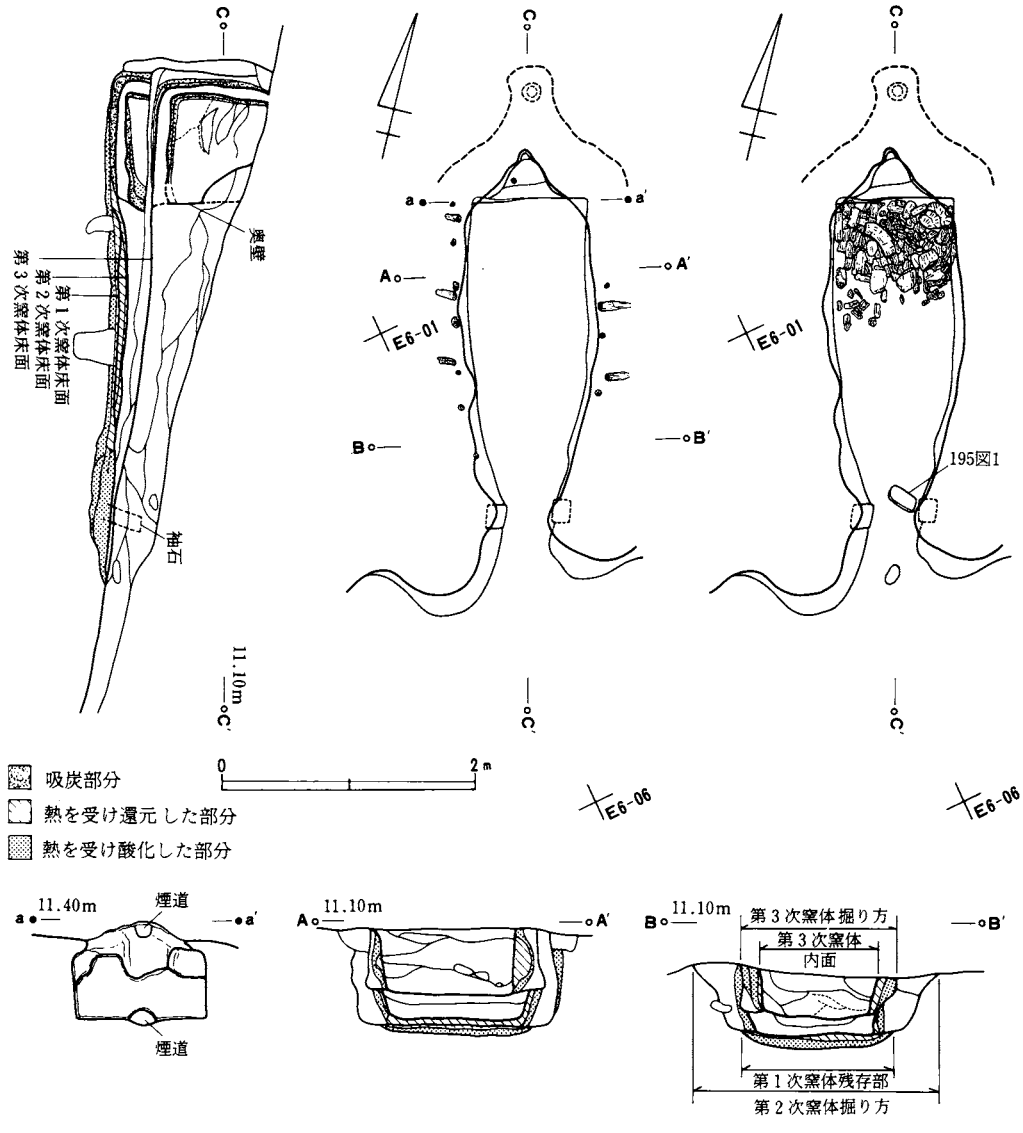


第181図　鉄製品

花前II－2遺跡本線部出土鉄製品一覧表

挿図No.	出土遺構	製品名	現存計測数値（cm）（g）				備考
			長	巾	厚	重量	
179図1	005	板状鉄製品	7.5	5.6	0.4～0.7	50.1	
2	009	棒状鉄製品	6.2	0.5	0.3～0.8	7.6	頭部を欠損する釘か
3	〃	〃	4.5	0.6～0.7	0.5～0.8	9.4	
4	〃	〃	4.2	0.6	0.7	16.7	
5	〃	板状鉄素材	3.6	3.5～4.6	0.5	33.2	
6	〃	板状鉄製品	3.4	2.1	0.3	4.0	
7	〃	刀子	5.1	身 1.0 茎 0.7	身 0.3 茎 0.4	5.0	関部は不明瞭
8	011	棒状鉄製品	3.1	0.4	0.4	0.8	丸釘の可能性あり
9	〃	〃	4.0	0.4	0.3	2.6	
10	013	刀子	身 12.1 茎 6.7	身 0.9 茎0.5～1.3	身 0.3 茎 0.4	21.0	
11	〃	棒状鉄製品	4.7	0.3～0.6	0.3～0.5	5.0	
12	〃	〃	3.8	0.5～0.8	0.2～0.4	2.3	
13	014	不明鉄製品	4.2	2.8～4.5	0.7	53.9	大きく屈曲する
14	020	刀子	3.9	0.6～1.5	0.4	2.9	刀子の刃部破片
15	〃	不明鉄製品	4.3	1.3	0.5～0.7	11.5	

挿図No.	出土遺構	製品名	現存計測数値(cm)(g) 長	巾	厚	重量	備考
16	〃	〃	2.5	1.7～2.0	0.2～1.2	6.2	断面形態が特異
17	〃	〃	4.2	0.5	0.4	1.7	
18	〃	〃	2.4	1.0	1.2	7.8	環状となるか
180図19	021	兵庫鎖？	10.7	0.8	1.0～1.3	94.0	一部に木質部が附着 図版67－1
20	〃	紡錘車	径 5.7 軸径 0.3		0.2～0.4	33.9	銹化著しい。 図版67－2
21	〃	板状鉄素材	3.9	2.4	0.5	11.4	端部は切断面か
22	029	棒状鉄製品	4.9	0.6	0.5	3.7	
23	030	〃	3.2	0.6	0.5	2.6	
24	〃	釘？	3.5	0.9	0.5	6.6	頭部の一部を欠損
25	〃	棒状鉄製品	2.6	0.6	0.6	3.0	
26	〃	〃	4.7	0.3～1.0	0.4～0.5	4.3	
27	〃	〃	4.2	0.3	0.3	1.4	
28	〃	〃	3.2	1.5	0.5	4.4	
29	〃	〃	3.0	0.7	0.5	3.4	端部はねじられる錐のようなものか
30	〃	〃	3.9	0.5～0.8	0.3～0.5	2.8	
31	〃	〃	2.0	0.7～0.9	0.6	1.9	
32	〃	〃	3.0	0.8	0.3	2.4	
33	〃	〃	2.7	0.2～0.6	0.4～0.5	1.0	
34	〃	〃	11.0	0.8	0.7	19.7	
35	〃	〃	4.8	0.2～0.7	0.3～0.5	6.9	
36	〃	板状鉄製品	2.5	1.2～1.9	0.2～0.7	4.2	
37	〃	刀子	2.1	1.2～1.4	0.3	2.4	刀子の刃部破片
38	〃	棒状鉄製品	2.4	0.8	0.4	1.8	
39	〃	刀子	身 8.2 茎 4.0	身 1.2 茎 0.7	身 0.4 茎 0.6	15.9	図版67－3
181図40	〃	不明鉄製品	4.1	0.7～1.2	0.7	5.4	
41	〃	焼印？	4.8	4.2	0.5～0.9	22.3	「卄」の焼印具か。 図版67－4
42	035	不明鉄製品	5.9	0.8～1.6	0.9	27.2	
43	042	鉄斧	6.6	2.9～3.7		63.8	刃先角度25° 図版67－5
44	054	板状鉄製品	9.4	1.4～6.0	0.2～0.4	46.9	大きく彎曲する。



第182図　037炭窯

037炭窯

位　置　E5—21，E6—01グリッド　斜面部炭窯群の最も東に位置し，079土坑と隣接する。稼動最終時の床面の高さは標高約10.50～10.20m。

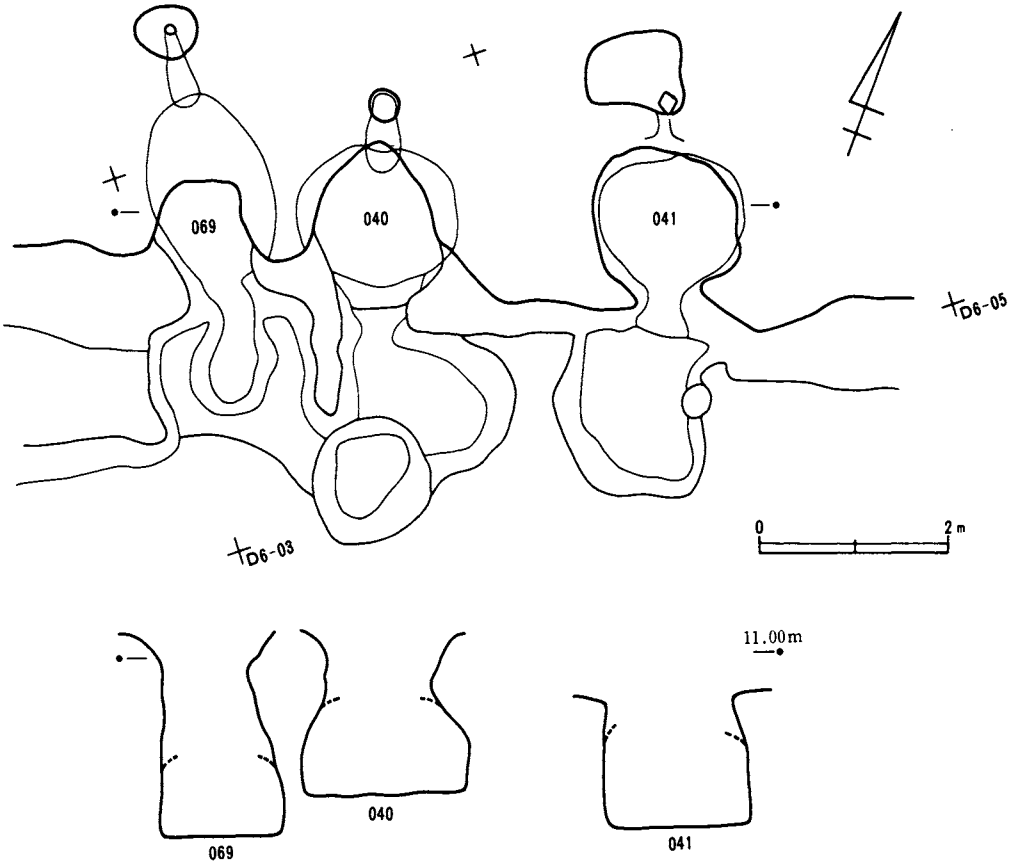
構　造　窯体の内のりは奥壁の幅約1.0m，奥壁の現存高約1.0m，奥壁から袖石までの長さ約2.5m，奥壁から煙道までの長さ約0.9mほど（最終稼動時の窯体を計測，それ以前の窯体はひと回りないしふた回り大きくなるものと思われる。）で平面形は長方形もしくは羽子板状である。窯体の内壁は，吸炭・還元して，硬質で黒色，灰色をしている。その外側には，酸化して赤色化する部分がある。うらごめは，床面を整えるのに用いられた窯壁片や焼土ブロック，木炭片

を多く含む暗褐色土や粘土と，側面の壁を作るのに用いられたスサ入りの粘土の２種類がある。ただし，これらの土が明確に使い分けられていたと考えるよりも，前回の操業時の窯壁片等を全て取り除かないで床面とし，側面を新しく調整したとするのが妥当のようである。

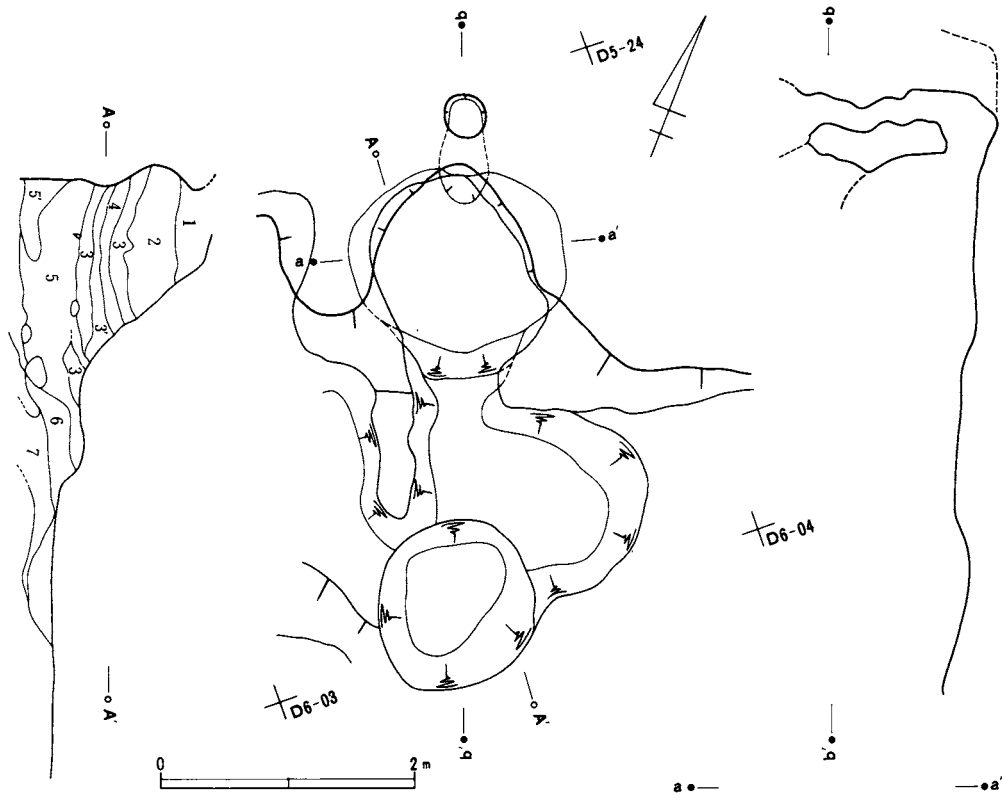
煙道部分はまず全てを掘り抜いてから煙道を作り，あとで奥壁と煙道の間に土を充てんしている。各煙道の奥壁に近い所では煙道の天井部分が溶けてつらら状になっているのが観察された。

焚き口には左右に袖石が埋めこまれていた。また，焚き口の閉そくにも石が使われたようで１つだけが残されていた（195図－１）。さらに両側壁の外側には天井部もしくは上屋の構築に関係したと思われる柱痕が発見されている。これらの柱は，垂直に立つ細いものと，窯体中央に向かって斜めに立つやや太いものの２種類があって，ほぼ等間隔で並んでいる。

その他　中央部より奥壁に近い部分からは炭が詰まったままの状態で発見されている。



第183図　炭窯群〈東側部分〉



1. 黄褐色土 (ローム)＋暗褐色土,しまりがない。
2. 暗褐色土 大量の凝灰岩ブロックを含む。
3. 茶褐色土 焼けた凝灰岩をブロック状に含む。
4. 暗灰褐色土 2層と同質だがブロックが大きく,色調も明るい。
5. 灰茶褐色土 多量の焼けた凝灰岩と木炭粒を含む,5'は特に凝灰岩ブロックが多い。
6. 黒褐色土 木炭粒,粘土粒,焼けた凝灰岩粒を多く含む。
7. 茶褐色土 木炭粒,粉状の焼けた凝灰岩と多くの凝灰岩ブロックを含む。

※ 1～6は,窯が廃棄された後に流入堆積した土
7層以下は窯の稼動中に堆積した土と考えられる。

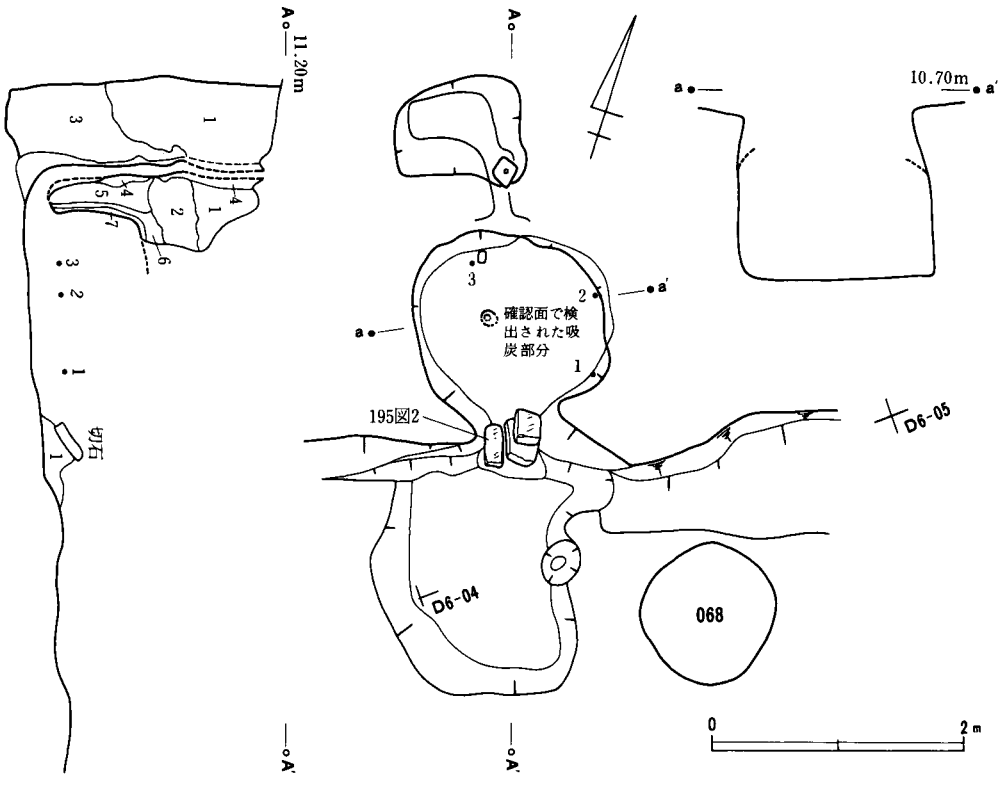
第184図　040炭窯

040炭窯

位　置　D５—23，D６—03グリッド　西の069，東の041炭窯と共に東側の一群を形成している。砂質凝灰岩の地山を掘りこんで作られている。

構　造　窯本体は径およそ1.5～1.8mのドーム状の不整円形と推定され南側に開口部分を持つ。床面から天井部までの高さは１mほどであったと思われる。窯体の奥壁から煙道部中央まではおよそ40cm離れている。本炭窯は遺存状態が悪く，煙道部分の構造，窯体内部の状況等は不明である。窯本体の南側には，1.5×1.8mほどの不整形の前庭部がある。窯体の床面とほぼ同じ高さの平担面で作業場所と考えられる。さらにこの平担部の南に径およそ1.2mのごく浅い円形の落ちこみがあるが炭窯にともなうものかどうかは不明である。

その他　時期を確定できる遺物は発見されていない。



1. 暗褐色土
2. 山　砂
3. 白色粘土
4. 黒褐色土 吸炭部分
5. 山　砂
6. 山　砂 焼けて赤褐色になっている。
7. 山　砂 焼けて青灰色になっている。

第185図　041炭窯

041炭窯

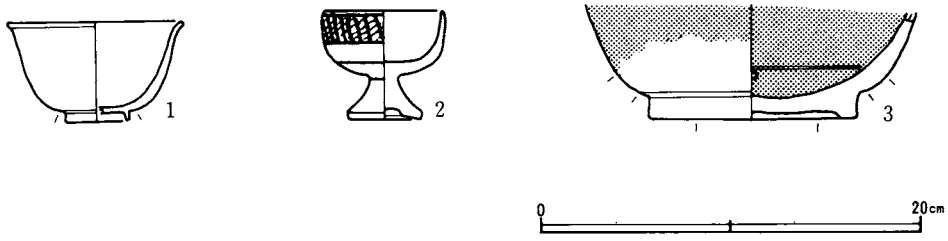
位　置　D５－24，D６－04グリッド　前述の040炭窯の東側。窯体の床面の標高は，約10.20mで砂質凝灰岩の地山を掘りこんで構築されている。

構　造　本体部分は径およそ1.5mのドーム状の不整円形と推定され，南側に開口部分がある。床面から天井部までの高さは1.0～1.5mぐらいであったと思われる。

煙道部分は，径が1.0×0.8m，深さ２m強の不整方形の掘り方を持つ。煙道は，この掘り方の最も南東寄りに作られ，径は，約３cmで，周囲に厚さ10cmほどの吸炭部がある。煙道部分の掘り方は，粘土と暗褐色土でうらごめされている。また煙道と奥壁との距離は，60cmぐらいである。さらに本炭窯では，遺構確認の時に別の煙道が見つかっている。この煙道は，窯本体の中央やや西寄り（エレベーションａ－ａ′ライン上）に位置し，径約４cmで周囲に吸炭する部分（厚さ約５cm）がある。窯内面は熱を受け還元して青灰色となっている。

本体の南側に1.5m×1.8mのほぼ方形の前庭部がある。ごく浅い掘りこみの平担面で，窯体床面よりやや高く作業場所と考えられる。

その他　本炭窯からは近世のものとみられる陶磁器類が見つかった（第186図）。図示した３点



第186図　041炭窯出土遺物

041炭窯出土遺物

挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
1	椀 （陶器）	8.9 5.2 高台径 3.4	1/3	高台部一ヘラ削り 釉全体に貫入がある		素地一灰褐色の緻密の胎土	釉一灰色	良	
2	仏飾具 （磁器）	6.2 5.7 3.7	2/3	内面一見込み 外面一格子文様		素地一乳向色の緻密な胎土	染付一淡青色	良	
3	鉢 （陶器）	— — —	1/3	体部内外一ヨコナデ 体部下端一回ヘラ削り 高台内外一ヨコナデ 底部一回ヘラ削り		素地一黄白色の中粒砂一多	釉一黄土色	良	内面に三又トンチの痕跡有り

は床面からやや浮いた状態で出土した。この他にも切石片や内耳鍋片等が発見されている。また，開口部分からは，閉そくに使ったと思われる石が3点発見されている。これらの切石は使用時の状態をほぼ保っていると推定される。

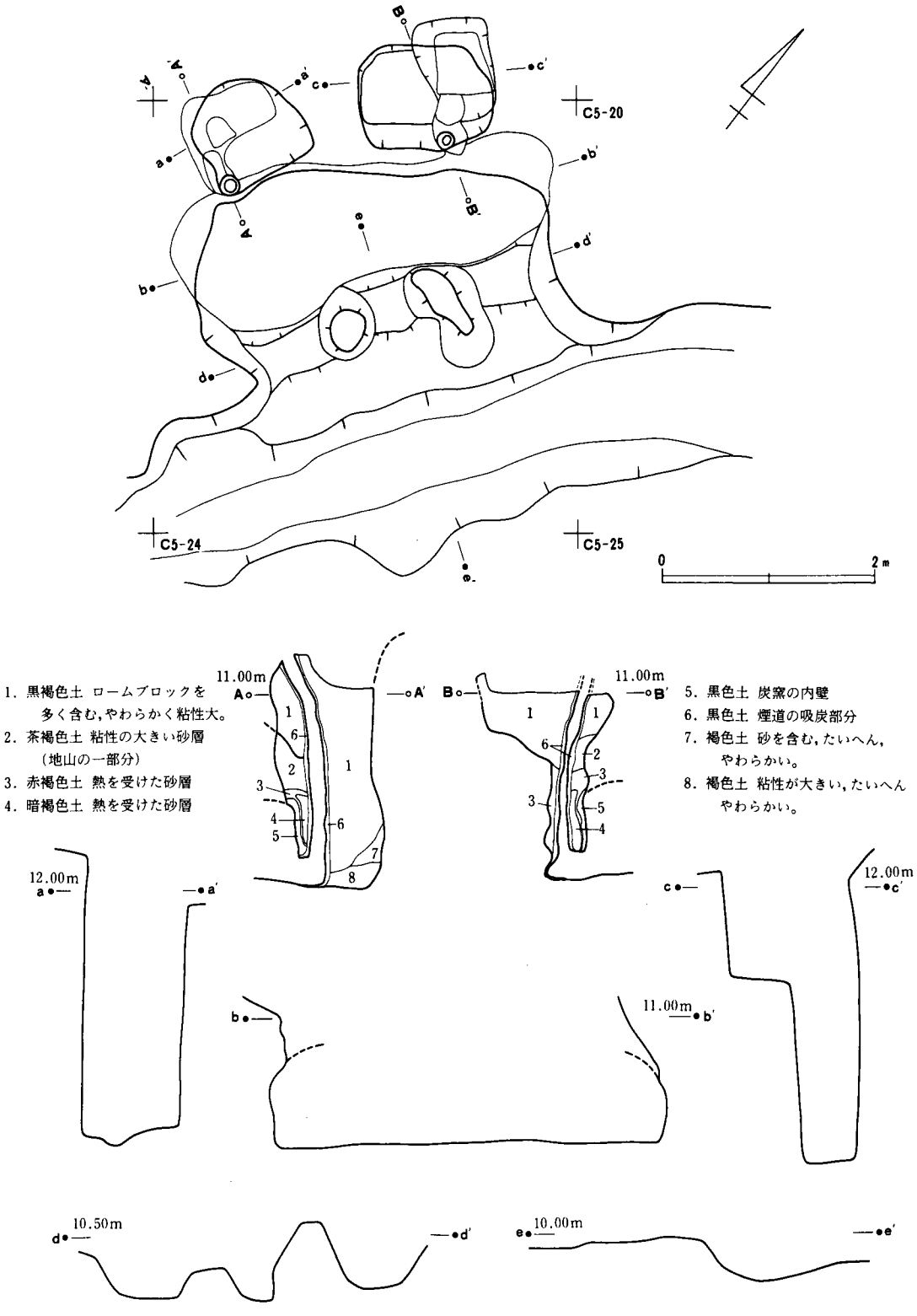
044炭窯

位　置　C5—14，19グリッド　東側に070，西側に058，070，060炭窯があって西側の一群を形成している。窯体床面の標高は，9.2mほどである。

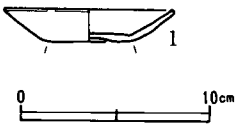
構　造　窯体は幅約3.0m奥行き約1.2m～1.5mのドーム状の不整方形と推定され，北西側に煙道部が2ケ所，南東側に開口部分を3ケ所持っている窯体内壁は還元・吸炭している。床面から天井部分までの高さは，1.0m～1.2mぐらいだったと思われる。

西側の煙道部分は，径が1.0×0.9m，深さが2.7mほどの不整方形の掘り方を持つ、煙道はこの掘り方の南側の隅に作られ，径は約10cm，周囲の吸炭部分は，約5cmの厚さである。煙道部分と窯体奥壁はほとんど接している。東側の煙道も基本的には，西側のものと同じ構造を持つ，東側の煙道は掘り方が2つ検出された。深い方は，径11.0×0.7m，深さ2.7m，浅い方は1.2×0.8m，深さ1mほどで，どちらも方形をしている。この2つの掘り方には新旧関係があって，浅い掘り方が新しいと思われ，修復あるいは，改築をした可能性がある。煙道は南東辺の中央にあって，径約10cm，吸炭部の厚さは約5cmで西側と同様，こちらも奥壁とごく近いところに位置する。掘り方は，東西2つとも軟質の黒褐色土，褐色土でうらごめされている。

本炭窯も他の炭窯と同様，南東側に前庭部を持っていた可能性が高いが溝状遺構と重複して


C5-20
C5-24
C5-25
0
2m
1. 黒褐色土 ロームブロックを多く含む,やわらかく粘性大。
2. 茶褐色土 粘性の大きい砂層（地山の一部分）
3. 赤褐色土 熱を受けた砂層
4. 暗褐色土 熱を受けた砂層
5. 黒色土 炭窯の内壁
6. 黒色土 煙道の吸炭部分
7. 褐色土 砂を含む,たいへん,やわらかい。
8. 褐色土 粘性が大きい,たいへんやわらかい。
11.00m
12.00m
10.50m
10.00m

第187図　044炭窯



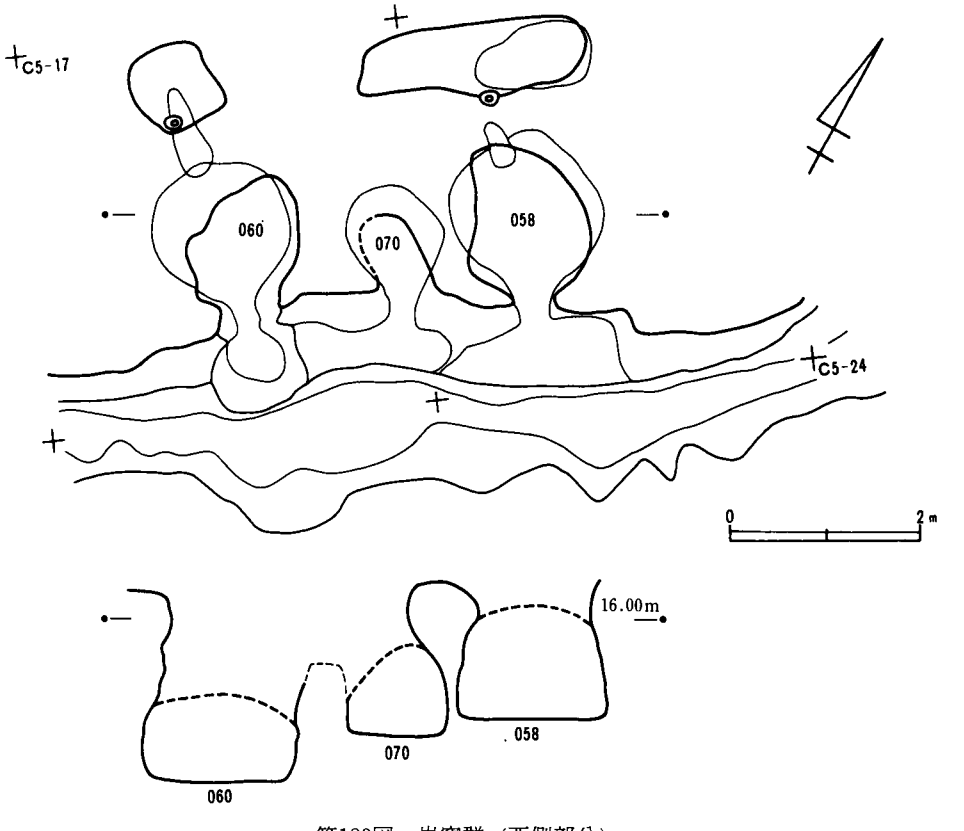
第188図　044炭窯出土遺物

044炭窯出土遺物

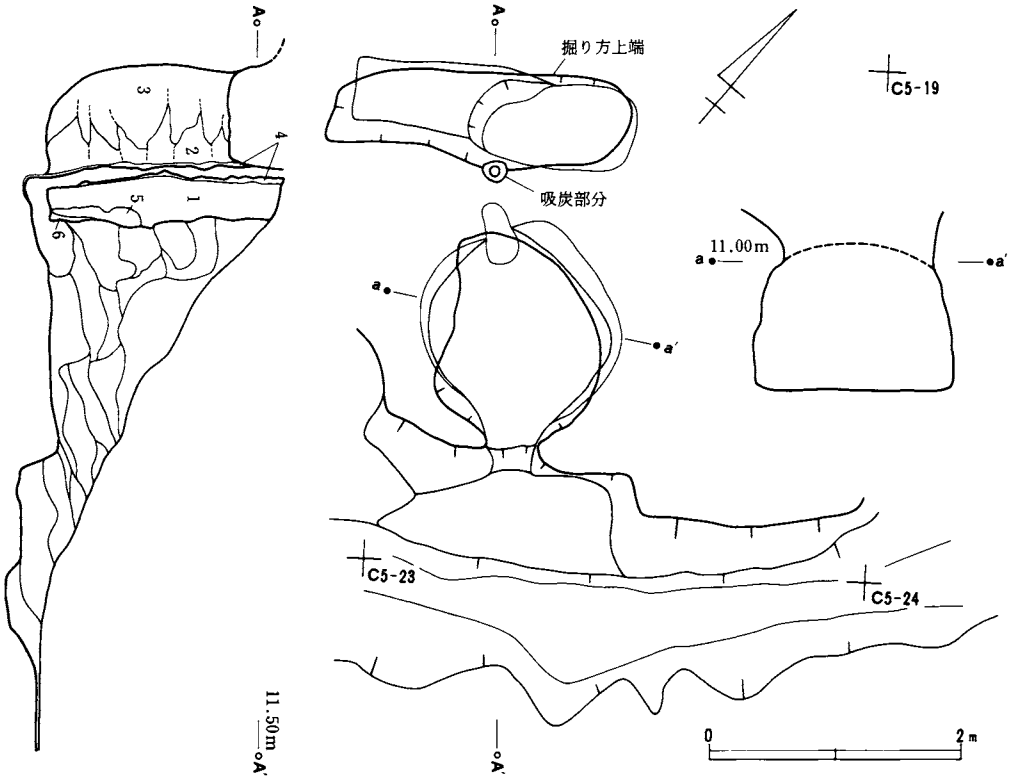
挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	ロクロ回転方向	胎土	色調	焼成	備考
1	かわらけ	8.8 1.7 4.4	⅓	体部内外ーヨコナデ 底部ー回糸切り		細粒砂・雲母ー多	乳橙色	良	

おり明らかでない。

その他　覆土からは，若干の遺物が出土している（第188図）が，年代を確定することはできない。



第189図　炭窯群〈西側部分〉



1. 地　山
2. 暗褐色土
3. 黄褐色土（ローム層）
4. 吸炭部分
5. 地山が焼土化する範囲(酸化部分)
6. 地山が焼土化する範囲(還元部分)

第190図　058炭窯

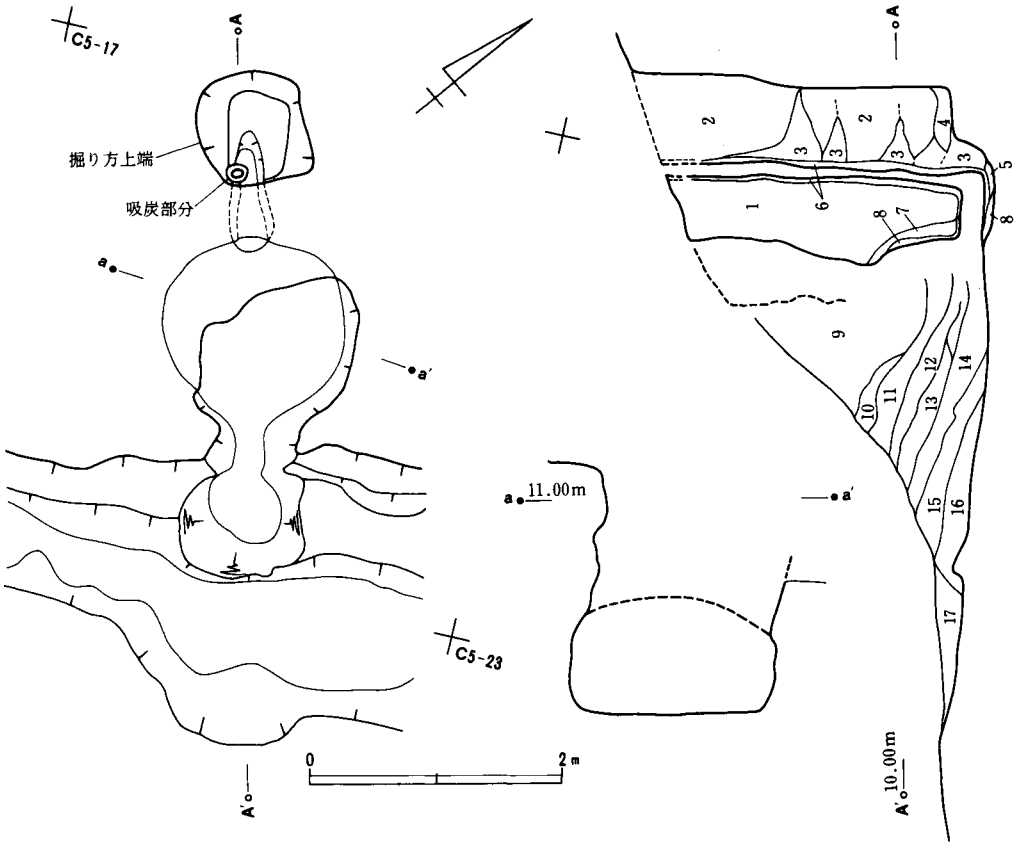
058炭窯

位　置　C５—18グリッド　斜面部の西側に位置し，060，070，044，071の各炭窯と一群を形成する。床面は標高約10m，砂質の地山を掘りこんで作られている。

構　造　本体部分は，径1.5～1.8mのドーム状の円形ないし長円形と推定され，南東側に開口部を持つ。床面から天井部までの高さは，1.2mほどであったと思われる。窯体の内壁は還元している。

煙道部分は，径が2.4×７m，深さは現存1.8mほどの掘り方を持つ。煙道はこの掘り方の南側の長辺のほぼ中央に作られ，径は確認面で約５cm，周囲２cmほどが吸炭している。煙道と窯体奥壁の距離は50cmほどである。掘り方は，ロームと暗褐色土を交互につめてうらごめとしている。

開口部の南東側には，前庭部が確認されるが，溝状遺構と重複し，大きさ等は不明である。この前庭部は，おおむね平担で窯体の床面から約30cmほど低くなっている。本炭窯に伴う作業場所と考えられる。



1. 地　山 砂質凝灰岩
2. 暗茶褐色土 ロームブロック,多くの山砂を含む。
3. 暗茶褐色土 ローム粒,山砂粒を含む。
4. 地山の崩壊土
5. 粘　土
6. 吸炭部分
7. 地山が焼土化する範囲(酸化部分)
8. 地山が焼土化する範囲(還元部分)
9. 暗褐色土
10. 地山の崩壊土
11. 暗灰褐色土 炭のブロックや天井部片を多く含む。
12. 灰褐色土　地山の崩壊土や粘質土を含む。
13. 暗灰褐色土
14. 暗灰褐色土 焼土,炭,灰を含む。
15. 暗灰褐色土 地山の崩壊土を含む。
16. 地山の崩壊土に炭,焼土が混入する。
17. 暗灰褐色土 炭化物粒,焼土粒を含む。

第191図　060炭窯

その他　第190図土層断面図の中で説明のないものは，全て，本炭窯の稼動終了後に流れこんだ土で炭窯の構築物，焼土，灰，等を含む褐色土層である。

060炭窯

位　置　C５－17グリッド　今回発掘された炭窯の中で最も西側にある。東側に070炭窯がある。床面の標高はおよそ9.3mで，砂質凝灰岩の地山を掘って作られている。

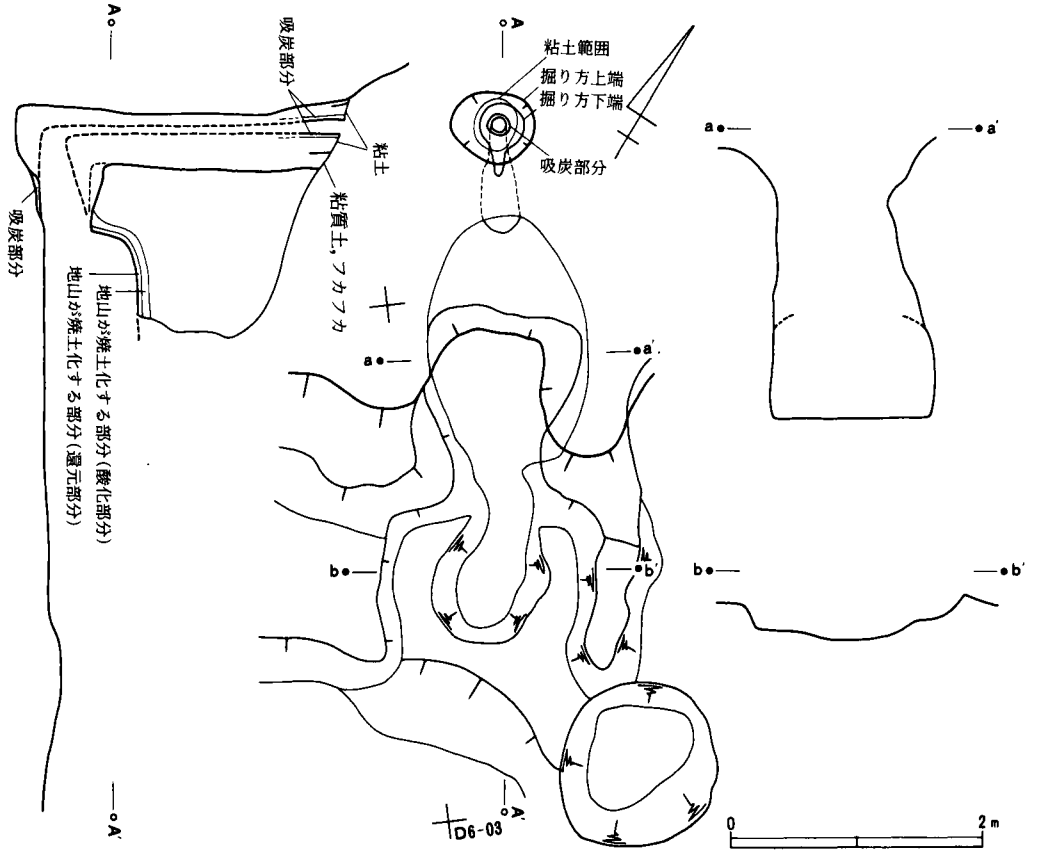
構　造　本体部分は径およそ1.4mのドーム状の円形と推定され，南東側が開口する。床面から天井部までの高さは，１mと思われる。窯体の内面は還元している。

煙道部分の掘り方は，径が0.9×0.9m，深さ2.4mほどの不整方形で煙道は南隅に作られている。煙道の径は５cm，その外側に厚さ２cm程の吸炭部分がある。煙道と窯体奥壁の距離は約50cmである。第191図の２層～５層はうらごめに関係する土で，基本的に２種類の土を交互につめ

ていることがわかる。

開口部の南東側には，小さな前庭部がある前庭部はおおむね平担で窯体の床面とほぼ同じ高さである。ただ，さらに南東側の溝状遺構と重複しており，もともと，この程度の大きさであったと断定はできない。本炭窯の土層断面を見る限りでは，溝状遺構の方が炭窯よりも新しいようである。

その他　第191図の9層～16層は，稼動終了後に流れこんだ土である。また17層は，溝状遺構の覆土と考えられる。



第192図　069炭窯

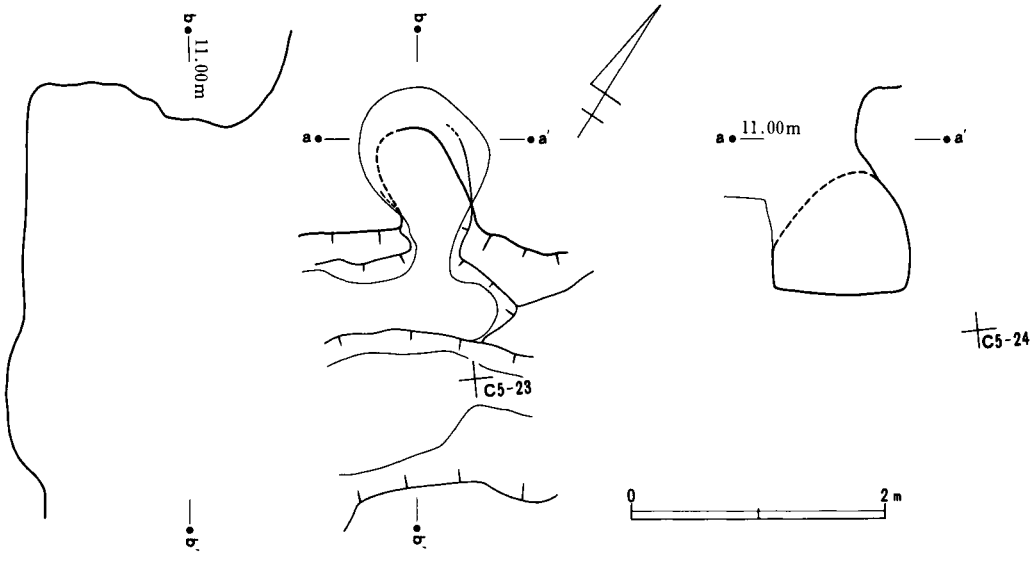
069炭窯

位　置　D5－18，23グリッド　040，041炭窯と東側の一群を形成する。

構　造　本体部分は径2.2m×1.3mほどのドーム状の長円形と推定され，南側に開口部分を持つ。床面から天井部分までの高さは，およそ90cmぐらいであったと思われる。窯体内面は還元して青灰色となっている。

煙道部分の掘り方は，60cm前後の不整円形で煙道は中央に作られている。煙道は径20cm弱の円形で周囲に２～３cmの吸炭部分がある。さらにその外側には10cmほどの厚さで粘土が認められる。煙道と窯体奥壁との距離は70cmほどである。

開口部の南側には，径1.6mほどの不整方形の前庭部がある。開口部から続く部分は窯体床面と同じ高さで，周辺は若干高くなっている。また南側の部分は，残りが悪く，状況は不明である。



第193図　070炭窯

070炭窯

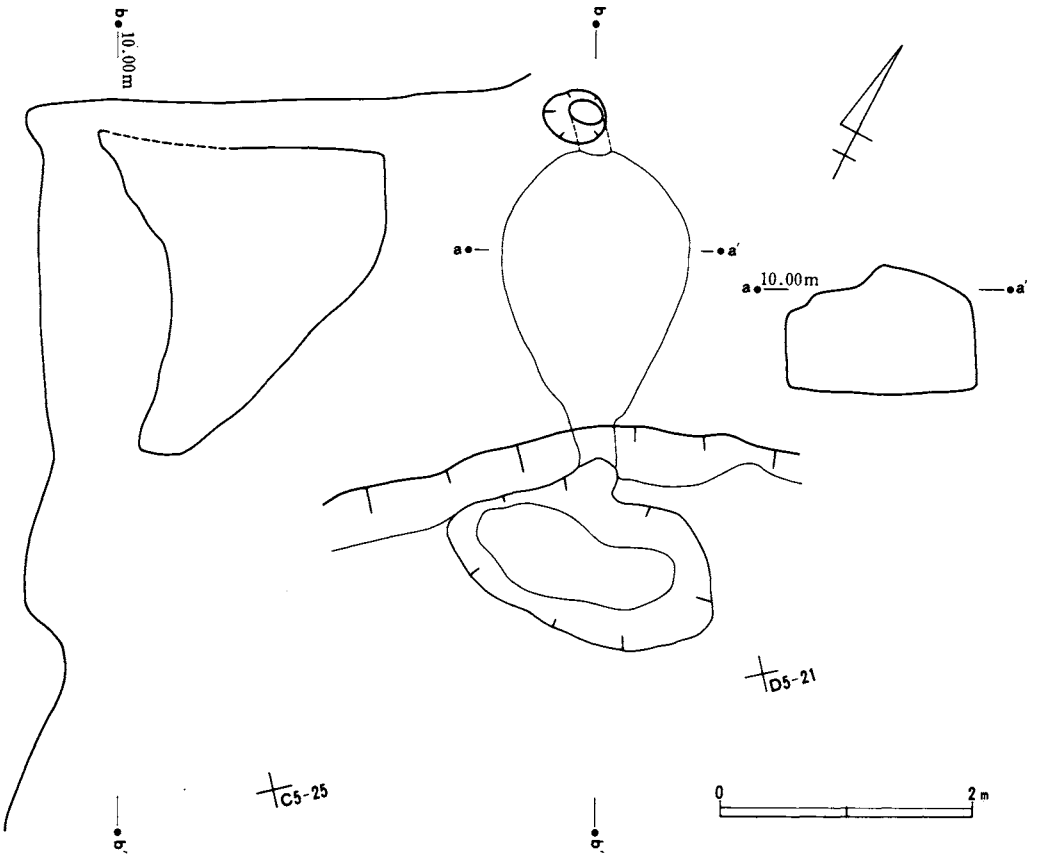
位　置　Ｃ５－17，18グリッド　西側の一群，058と060炭窯の間に位置する。窯体床面の標高は，およそ，9.8mほどである。

構　造　本体部分は径1.8mぐらいの円形と推定され，南側の一部が開口している。床面から天井までの高さ約90cm。

煙道は確認することができなかった。

開口部の南側には前庭部がある。窯体床面とほぼ同じ高さの平坦面で作業場所と考えられるが，さらに南側の溝状遺構と重複しており，規模等は不明である。

その他　本炭窯は窯体内面等に熱を受けた跡を確認することができなかった。煙道がないこと，他より窯体の規模が小さいこと，などを合わせて考えれば構築途中に何らかの原因で未完成のまま放棄されたものと思われる。



第194図　071炭窯

071炭窯

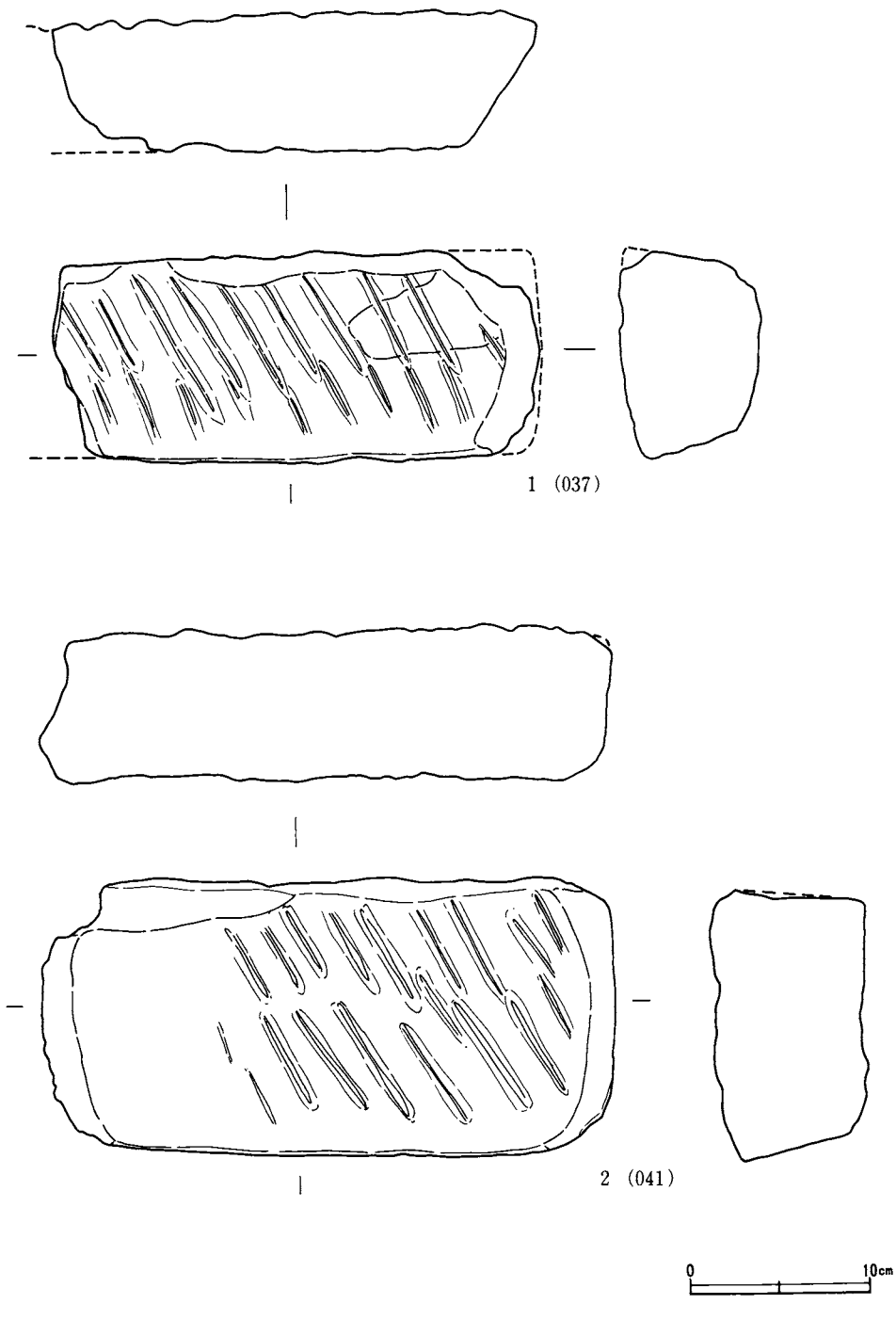
位　置　C５－15，20グリッド他　西側の一群の最も東寄り，床面の標高は9.2mぐらい。

構　造　本体部分は2.4m×1.5mほどの，いちぢく形でドーム状の天井部を持ち南側に向かって開口している。床面から天井までの高さは約１mである。

煙道部分は径およそ40cm強の円形の掘り方を持つと推定される。煙道掘り方と奥壁の距離は約40cmである。

開口部の南側には，２m×1.2mほどの不整長円形の前庭部がある。ごく浅い落ちこみで，窯体床面よりやや低い。

その他　この炭窯は，今回調査した中で最も残りの良いものである。しかし発掘調査時にかなりの時間的制約を受けたため，煙道部分の構造，窯体の内面等は未調査のままであり，詳細は不明である。



第195図　037・041炭窯閉そく石

炭窯の閉そく石について（第195図）

今回の調査では037，041の２基から開口部をふさぐのに使われたと思われる切石が発見された。特に041の３点はその出土状況からみて閉そく時のままの状態と考えられる。

１は037から出土したもの。現存長27cm，幅11cm，厚さ7.5cmで表，裏の両面に工具痕と思われる斜めの平行な沈線がついている。熱を受け黒色化している部分がある。

２は041出土。現存長31.5cm，幅15cm，厚さ８cmで１と同様に両面に工具痕がある。出土した３点のうち最も西側から見つかったもので，一番小さい。

正確な石質は不明だが１，２とも同じ石で非常にやわらかい。本遺跡の近くで採れるという話もある。おそらく軟質砂岩などと同系のものではないだろうか。

グリッド出土の磁器

ここで図示する磁器は花前II－２遺跡本線部Ｇ５・Ｇ６グリッドにあたる斜面部から出土したものである。

製品は染付を主体に，白磁を含み，碗・皿・鉢・猪口がある。いずれも肥前伊万里系の製品と考えられるが以下，器種ごとに記述する(1)。

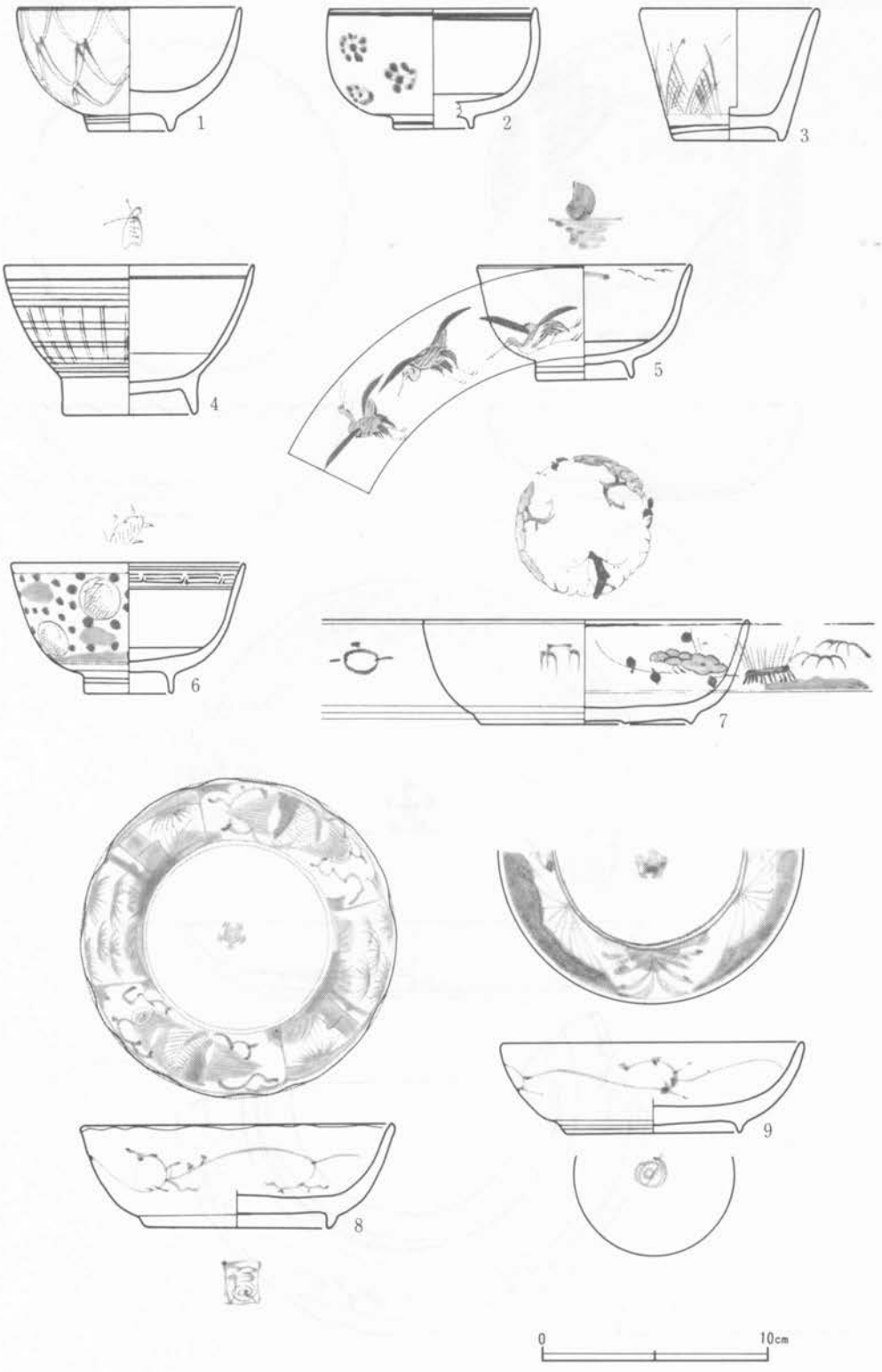
碗（第196図１・２・４～６）

器形から４つのタイプに分けられる。１は所謂「くらわんか茶碗」で，全体に厚手の作りとなる。胎土は緻密で，灰白色を呈し，上釉は淡い青味白（10.0G8.5／0.5）(2) 呉須のコバルトは淡い青味灰（2.0ＰＢ4.5／3.5）となる。文様は体部外面に二重網目文を描く。この文様は18世紀代に盛行するもので，器形から言っても18世紀前半代に生産されたものと考えられる。

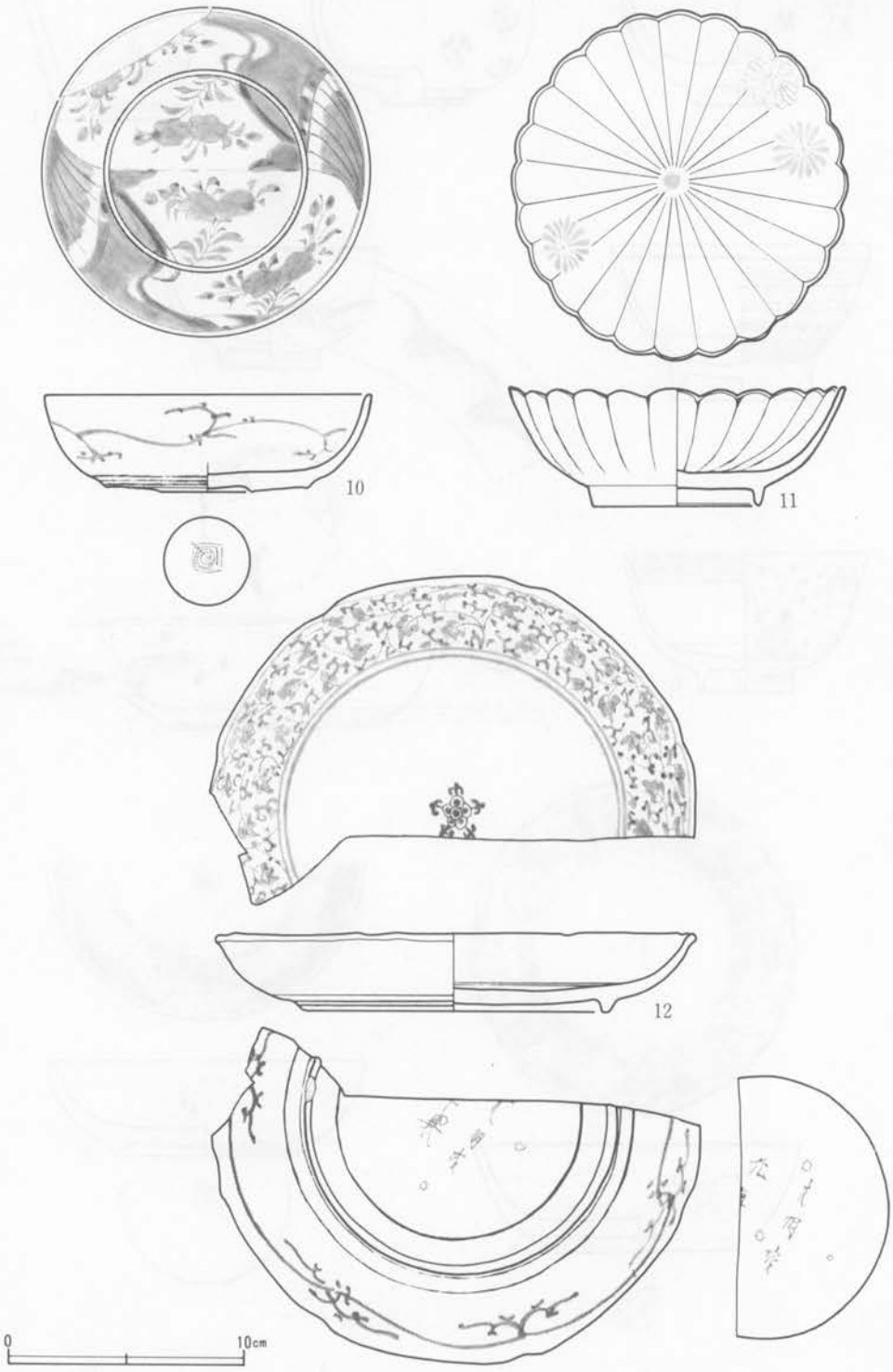
２は張り出した腰部から，直立気味に立ち上がる器形で，体部外面に花文が描かれている。胎土は緻密で灰白色を呈し，上釉は淡い青味白（10.0G8.5／0.5），呉須のコバルトは暗い青（1.5ＰＢ3.5／3.5）に発色する。

４～６は所謂「広東碗」と呼ばれるものだが，形態から見て二分できる。一つは４に見られるように，「八」の字状に開いた，高い高台をもち，体部は腰の張りが弱く，直線的にのびるものである。胎土は緻密で灰白色を呈し，上釉は青味がかった白色（2.0G7.0／1.0），呉須はやや濃い青（3.5ＰＢ2.5／5.0）となる。

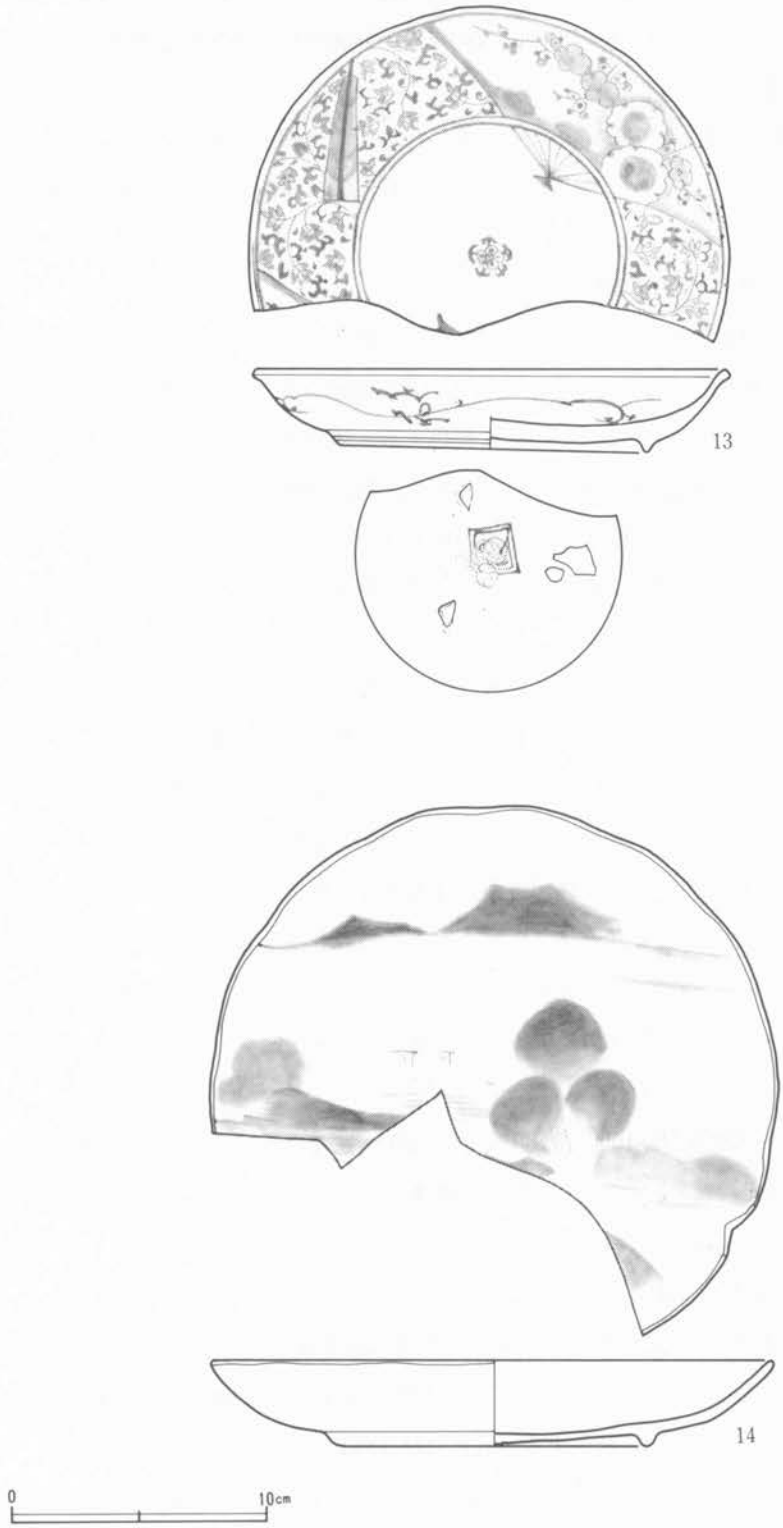
もう一つは５・６のように，高台は「八」の字状にやや開き気味になり，体部は，腰が少し張り出して，口縁が僅かに外反するものである。５は体部内外面に鳥文，見込み部に舟文が描かれる。上釉は青味白（10.0G8.5／0.5），呉須は暗い青（1.5ＰＢ3.5／3.5）を呈する。また６は体部外面に点斑文と草文，体部内面に雷文，見込み部に草文（？）を描いている。上釉は



第196図　磁器



第197図　磁器



第198図　磁器

うす青（2.5P B8.5／2.0），呉須はこい青（3.5P B2.5／5.0）に発色している。

以上の3点はいずれも天明～慶応年間（1780年代～1860年代）の製品と考えられる。

猪口（第196図3）

高台部から口縁に至るまで直線的になる器形で，体部には網干し文（？）が描かれる。胎土はきめ細く，白色を呈し，上釉は明るい緑味灰(2.0G7.0／1.0)，呉須は青味灰(2.0P B4.5／3.5）に発色する。

鉢（第196図7～9，第197図10・11）

高台部の形態で二種に分けられ，また染付と白磁の製品がある。

7・10は蛇ノ目凹形高台となるもので，7は灰白色の緻密な胎土に，青味白(10.0G8.5／0.5)の上釉，呉須はこい青（3.5P B2.5／5.0）に発色する。体部外面には2種の文様を1対として2対，見込み部には松竹梅文を1単位として3単位，見込み部中央には松竹梅を円形に配した文様を描いている。また10の上釉は青味白(10.0G8.5／0.5)，呉須は暗い青(1.5P B3.5／3.5)に発色する。体部外面には唐草文，見込み部には雨に花文を配する。底部の銘は「福」を崩した，いわゆる〝渦福〟字銘と思われる。

8・9・11は輪高台となる一群である。8は輪花になる鉢で，胎土は灰白色，上釉は緑味灰（10.0G7.0／1.0），呉須は暗い青（7.5B3.0／2.0）に発色する。体部外面には唐草文，見込み部には，竹林と筍文，見込み部中央にはコンニャク判による五弁花が施文される。底部には「福」の銘がある。9の胎土も緻密で白色を呈し，上釉は緑味灰（10.0G7.0／1.0），呉須は暗い青（7.5B3.0／2.0）に発色する。体部外面には唐草文，見込み部には扇に草文，見込み部中央にはコンニャク判による五弁花が施文されるが，この五弁花は8と比較してやや崩れた形となっている。11は白磁の鉢で，型打成形によって作り出されている。見込み部には花弁全体を浮き出させた菊花文が二つ，花弁の輪郭だけを浮き出した菊花文が一つ配せられる。胎土は極めて緻密で，白色を呈している。

以上の鉢は元禄～天明年間（1690～1780年代）に盛行する器形や手法の特徴を備えているが，7に関しては上釉や呉須のコバルトの発色，文様構成が他の鉢と異なっており，天明～慶応年間（1780～1860年代）の製品と考えられる。

皿（第197図12～第198図14）

12は体部外面に唐草文，見込み部に唐草文と中央部に五弁花を染付したもので，底部には「大明成化年製」の銘が入る。胎土は灰白色を呈し，上釉は青味白（10.0G8.5／0.5），呉須のコバルトは青（4.0P B3.5／8.0）に発色する。底部には3個以上のハリ支えの痕跡を残している。13も体部外面に唐草文，見込み部に唐草文と扇文を描き，扇文の中には梅花文を配している。また中央部には五弁花を染付している。底部には「福」と考えられる銘が入る。胎土は灰白色の緻密なもので，上釉は明るい緑味灰（2.0G7.0／1.0），呉須は暗い青（6.5P B2.5／3.5）に発色する。底部には砂・胎土目の痕が残り，また割れ口には鉛ガラスを用いて接着する焼継が

認められる。14は見込み部にだけ山水文を染付したもので，部分的に墨弾きの手法を用いて描かれている，また内外面ともに，粗い貫入が走っている。胎土は灰白色を呈し，上釉は青味白（10.0G8.5／0.5），呉須はこい青（3.5PB2.5／5.0）に発色する。底部には3個以上のハリ支えの痕跡が認められる。

いずれの皿も元禄～天明年間（1690～1780年代）の製品と考えられるが，13のように鉛ガラスによる焼継の接着法は寛政年間以降明治頃までに流行したものと言われており，17～18世紀の上手物が伝世していることを物語った資料と言える。

花前II－2遺跡出土の磁器には，この他にも明治時代以降の製品と考えられるものも出土している。また陶器類も出土しているが今回の報告では，前述した江戸時代の製品と考えられる資料の中で，主立ったものだけを取り扱っており，充分に整理を行ったとは言えない状態となってしまった。近年，江戸時代以降の遺物についても注目が払われるようになってきており[3]，今後も注意深く検討を加えていかなければならないと考えている。

註

(1) この項については九州陶磁文化館大橋康二氏より多大なる御教示をいただいた。なお本文中における年代観，用語については下記に文献にもとづいて表記したが，筆者の理解力不足のために誤った使用，表記があるかもしれない。すべては筆者の責任であることを明記しておく。
大橋康二　1984「肥前陶磁の変遷と出土分布――発掘資料を中心として――」『国内出土の肥前陶磁』佐賀県立九州陶磁文化館

(2) 色調についてはマンセル記号を用いて表記している。

(3) 江戸時代以降の遺物を体系的に取り扱った報告書は多々あるが，下記の文献および博物館における展示図録等は評価すべき点が多いものである。
動坂貝塚調査会　1978　『文京区動坂遺跡』
五島美術館　1984　特別展『江戸のやきもの』図録
佐賀県立九州陶磁文化館　1984　『国内出土の肥前陶磁』図録

第3章　小　　結

第1節　縄文時代

今回検出された遺構は，早期の炉穴2基，前期の住居跡1軒，竪穴状遺構3基，後期の住居跡1軒，土坑2基であり，遺物も整理箱で7箱程であった。

早期については，グリッドより撚糸文土器を検出したが，隣接する花前II－1遺跡[(1)]のような礫片を伴う集中箇所は見い出せず，総数も極めて少量であった。

前期については，諸磯期の住居1軒の他に3基の竪穴状遺構を検出したが，竪穴状遺構についてはプランや床面が不明瞭であり，柱穴や炉跡も検出されないため，住居跡とは分けて扱った。

当該期の遺構については，西南に隣接する花前II－1遺跡において，諸磯期の住居跡が1軒，東北に対面する花前I遺跡からは黒浜期の住居跡9軒・浮島期の住居跡2軒が検出されており，花前I遺跡の台地に比べて諸磯式土器を伴出する傾向が強くうかがわれる。

後期は堀之内期の住居跡1軒，土坑2基を検出しただけで，多数の遺構・遺物は検出されなかった。これは花前I遺跡でも同様であり，この地区における当該期の散在性を表わしているように思われる。

遺物については，034住居近接地より有孔球状土製品が検出されており，小島氏[(2)]が紡錘車としての可能性を強く示唆するとおり，底面には擦痕が認められる。類例としては市川市姥山貝塚より検出されたものと極めてよく似ており，他に県内では市川市堀之内貝塚，流山市上貝塚などに見られる。

註

(1)　「常盤自動車埋蔵文化財調査報告書I」で報告した花前II－1遺跡

(2)　小島俊彰　「有孔球状土製品」『考古学研究』第27巻第1号　1980年6月

第2節　古墳時代

検出した遺構は和泉期の住居跡3軒と鬼高期の住居跡2軒である。この中で良好な資料を提供するものは和泉期の002・009住居跡である。この二軒の住居跡から出土した土器群の器種は，坩・高坏・甕・壺から構成される。また，この出土土器を見る限りでは，ほぼ同時期のものと考えられる。さらに二軒の住居跡は近接した位置関係にあり，後述する矢船遺跡での和泉期の住居跡のあり方と類似している。

鬼高期の出土土器は僅かで，甕と坏が1点のみである。この資料だけで判断を下すのは難しいが，鬼高期のなかでも比較的古式の形態を示すものと考えられる。

この他に当該期の遺物としては，珠文鏡と管玉があげられる。両者ともに遺構に伴なう資料ではないが，遺物の性格からいって，古墳時代中期以前の資料と考えている。

花前II－1・II－2遺跡で検出した主な遺構・遺物は，この程度であるが，古墳時代の全時期を通して追うことはできず，古墳時代後期後半における資料が欠落している。奈良・平安時代に入ると花前遺跡群は大きな展開を示しているが，古墳時代後期後半に断絶が認められる点は検討を加えていかなければならない。

第3節　奈良・平安時代

1．編年について

編年については，先に花前I遺跡の報告において，土師器・須恵器坏形土器と土師器甕形土器の形態分類をもとに共存関係の抽出を行なった。その結果，8世紀から10世紀にかけて6期の区分を示したが，今回，花前II－1・II－2遺跡の資料を追加し再度検討を加えた。

新たに資料が増加したことによって前回示した編年案はさらに細分が可能となった。しかしながら前回の共存関係の抽出から得られた各期の土器組成については，全体の流れとして変化はなく，資料操作の蓋然性の高さを示すものと考えている。

以下，各期ごとの資料について言及する。(付図参照)

I期　当該期は，須恵器をほとんど共伴しない段階と，須恵器を多く共伴する段階とに細分が可能となるが，花前遺跡群では資料的に不充分であり，大きくI期として把握している。ただし前者をI期古段階とするならば，ここでは土師器坏(1・2)，土師器甕(7)，須恵器蓋(8)で構成されている。甕は口唇部をつまみ出し，胴下半部に細い篦磨きを施すという，本遺跡では奈良・平安時代を通じて最も普遍的な手法をとるタイプであるが，口唇つまみ出しや，口頸部の外反，肩部の張りがいずれも弱い点が特徴である。また須恵器蓋もカエリを有した器形となるものである。

I期新段階では，土師器坏に北武蔵地方で見られるようなもの（3・4）とロクロ使用による全面赤彩されたもの（5）が認められる。土師器甕には小形のもの（6）も出現する。須恵器蓋にはカエリを有するもの（9）の他に，端部を折り曲げたタイプ（10）も共伴する。また順恵器坏（11～14）は底径が9～10cmと比較的大きく，口径は底径の1.5～1.6倍の法量値を示すものが多い。この他には長頸瓶（15），鉢（16）などが認められる。

年代的には，7の甕が古墳時代から当該地域に認められる特徴的なものであり，また5の坏は武蔵地域で8世紀第2四半期に出現する盤状坏[(1)]の影響を受けて成立したものと考えられる点，須恵器蓋にカエリを残している事などから8世紀初頭～8世紀第2四半期に比定できるものと考えている。

なお10・15の製品は東海地方からの搬入品であり，I期では，武蔵地域や東海地方との交流

が強く現れている。

II期　土師器では全体量としては少ないがロクロ未使用による坏(17.18)，盤(19・20)，甕(21～23)がある。甕には口縁「く」の字状となる薄手の作りのもの（21）もあるが，主流は口唇部が強くつまみ出され，胴下半に細い篦磨きを施すもの（23）である。

須恵器はⅠ期新段階と並んで，量的に豊富である。蓋にはカエリを持つものは消失しており，すべて端部が折り曲げられたもの(24)である。坏は体部が直線的に立ち上がるものが多く(25・26)，底径もⅠ期に比してやや小さく8～9cm前後となる。また口径の1.6～1.7倍の法量値を示している。

実年代を考えるにあたっては，印旛郡印西町の木下別所廃寺3号住居跡出土の一括資料[2]と比較したい。ここでは平城京Ⅲに比定し得る畿内の土師器高坏A[3]が出土しており，共伴する須恵器坏は花前II期として把握した須恵器坏と酷似している。平城宮Ⅲの年代は8世紀中葉を中心とした年代が与えられている[4]ことから，II期は8世紀第2四半期後半から第3四半期と考えたい。

III・IV期　この段階は良好な一括資料が少なく，またⅢ・Ⅳ期の区分が最も不明瞭であり問題を残している。今回示した資料も恣意的である点は否めない。

Ⅲ期の土師器ではロクロ未使用による坏（31）の他に，ロクロ使用による坏（32・33）が出現する。この坏は箱形を呈するもので，全体にシャープさに欠けた作りである。甕の主流となるタイプは従前と同じく口唇部つまみ出しと胴下半に細い篦磨きを施すもの（35）である。須恵器坏は直線的に開き気味に立ち上がるもの（36・37）と，器高がやや高く，体部も僅かに彎曲して立ち上がるもの（38）がある。

Ⅳ期では土師器坏にロクロ未使用によるものが在存せず，すべて箱形を呈した坏（40・41）になる。須恵器坏はⅢ期とほとんど変化はないが，43のように底径がさらに小さくなるものも出現してくる。

年代決定となり得る資料は少ないが，45は武蔵地方南比企の製品であり，器形的には前内出1号窯製品と似たものである。このことからⅣ期を9世紀第1四半期として，その前段階とみなしたⅢ期を8世期第4四半期と考えたい[5]。

V期　土師器坏は箱形を呈しているが，体部下端の篦削りがシャープに加えられ(46)，また内黒処理された坏（47）が出現するのもこの段階である。須恵器坏は前段階のものと比して器形に大きな変化が認められる。Ⅳ期までは器高は4cm前後のものが大半であったのに対してⅤ期では4.5～5.0cm前後となり，急激に深い器形となるものが目立ってくる。このようにⅣ期とⅤ期における須恵器坏の器形変化は著しく，Ⅳ・Ⅴ期の中にこれを繋ぐ資料が加わる可能性がある。

年代的には次期のⅥ期との関係から9世紀第2四半期に比定できる。

VI期　土師器・須恵器ともに資料的に豊富である。土師器では皿（54・55）が新たに加わって

くる。また坏も体部は直線的になりながらも開き気味になり，器形に大小の区別が認められる（56～61）。甕（63）は相変らず口唇部つまみ出し，胴下半部は細い篦磨きのものが主体であるが，このVI期を最後としてこのタイプの甕は以降激減する。須恵器坏はV期に見られた器高の高いもの（65～69）であるが，底径はさらに小さくなり，口径は底径の2倍前後の数値を示す。また口縁部が外反するもの（65・66）も出現してくる。

実年代の決定には71の武蔵地方の須恵器坏を用いている。この坏は回転糸切り無調整となり，口縁端部が外反するもので，新久A地点1号・2号窯の製品に見られる特徴と酷似している[6]。また富寿神宝を伴なった佐倉市江原台遺跡H26・H61号住居跡出土の一括資料[7]とVI期で示した資料の類似点も多く，以上の事から9世紀第3四半期に比定し得ると考えている。

VII期　土師器が最も盛行する段階であり，同一器種の中にも数多くのバラエティがある。皿には従来の形態のもの（74）と，耳皿（75）とがある。坏（76～81）にはVI期までの体部が直線的になるものの他に，全体に丸味をおびたものが目立ち始める。また鉢（82・83）も一般的に見られる。甕（84・85）では，従来の口唇つまみ出し，胴下半部を細い篦磨きをするタイプが激減するのに対して，口唇外面が面取りされたかのようにシャープな形となり，胴部外面に縦方向の篦削りを施すタイプのものが多くなる。

須恵器では，蓋がほとんど消滅し，またVI期に見られた器高の高いものも量的に減っている。それに変って武蔵地方の南比企・末野各窯址の製品（87～90）が際立っている。しかしながら全体に，供膳形態の須恵器は少量となってくる。また灰釉陶器（91・92）も共伴する。

VII期の特徴としては，従前の主流を占めていた，いわゆる「常陸型」または「下野型」甕が減少するのに伴って，在地的須恵器[8]も減少することである。また在地的須恵器の減少を補うかのように北武蔵地方からの搬入品が目立っている。

年代については90に見られる須恵器皿の器形が武蔵地方の御殿山25号窯，花園支群2号窯に認められる点[9]と灰釉陶器が黒笹90号窯式の製品であること[10]をを考え合せ，VI期に後続することから9世紀第4四半期から10世紀第1四半期に比定できる。

VIII期　土師器坏にはVII期から継続する器形のもの（94～96）と，小形の皿と言うべきもの（97・98）がある。また甕もVII期から出現した縦方向の篦削りを施すタイプ（99）である。

須恵器の供膳形態がほとんど姿を消してしまうのもこの段階である。灰釉陶器は黒笹14号窯式の小瓶（100）と折戸53号窯式の埦（101）があるが，土師器にみられる特徴や，須恵器供膳形態の消滅からVII期に後続するものであることは明白である。

以上のことから10世紀中頃の年代を与えたい[11]。

IX期　土師器坏ではVIII期に見られた器形と類似したもの（102～104）の他に，高台付坏（105～108）に多くのバラエティが認められる。土師器甕（109・110）にも甑（108）にも縦方向の篦削りが施されている点はVIII期と同様である。須恵器では甕（111）が認められるだけであり，灰釉陶器の共伴も現存のところでは検出されなかった。

年代決定については，根拠とするものが何も無いのが現状であるため，問題を残すが，Ⅷ期に続くものとして10世紀後半を考えたい。

X期　土師器坏として表示したもの（113～117）の中で，113～114は前回の報告で土師質須恵器の分類で扱ったものである。今回，これらの遺物を再検討したが，前回の分類による概念規程が不充分であり，土師器，須恵器以外の土器の存在についてもさらに検討を加えた上で，もう一度取り扱いたいと考えているので，今回はあえて区別せず土師器の節疇として図示している。甕（119）はロクロ未使用によるもので，この段階ではⅦ期からⅨ期にみられた縦方向の箆削りを施すタイプの甕は認められなくなっている。

Ⅸ期同様に実年代の根拠は無いが，Ⅸ期からX期への土器群の変化は，やや断絶が認められることから11世紀代の土器群として考えたい。

以上，花前遺跡群の資料をまとめて奈良・平安時代土器の編年を試みたが，今後の検討を要する点はもちろんであり，また他地域との相互比較も行った上で，さらに充実したものとすることを課題としたい。

註

(1)　玉口時雄他　1981　『シンポジウム盤状坏一奈良時代土器の様相』東洋大学未来考古学研究会・相武古代研究会

(2)　比田井克仁他　1979　『木下別所廃寺跡第二次発掘調査概報』　千葉県教育委員会

(3)　石田広美　1983　「下総における八世紀代の搬入土器」『シンポジウム　房総における奈良・平安時代の土器』史館同人・市立市川考古学博物館

(4)　奈良国立文化財研究所　1976　『平城宮発掘調査報告Ⅶ』

(5)　高橋一夫・宮昌之　1983　「北武蔵の窯址」『シンポジウム　奈良・不安時代土器の諸問題』　神奈川考古同人会

(6)　註(5)に同じ

(7)　高田博他　1977　『佐倉市江原台遺跡発掘調査報告書』Ⅰ　千葉県教育委員会・㈶千葉県文化財センター
富寿神宝から導き出された年代決定については佐々木和博氏の示した論を踏襲している。
佐々木和博　1981　『下総国古代土器編年試論(1)—下総国分遺跡を中心として—』史館13

(8)　在地的須恵器とは，8世紀代から当該地域で普遍的に見られる須恵器であり，胎土に，雲母・長石・石英が多量に含まれる一群である。明確な古窯址が発見されていない下総地方であるので，これらの在地的須恵器の産地を推定するならば常陸地方の製品である可能性が高いと考えられる。

(9)　服部敬史他　1983　『シンポジウム　奈良・平安時代土器の諸問題』　神奈川考古同人会

(10)　檜崎彰一　1982　『愛知県古窯跡群分布調査報告』Ⅲ　愛知県教育委員会

(11)　註(10)の文献では折戸53号窯式の年代を10世紀後半としているが，今回の花前編年ではⅦ期からⅧ期への移行が比較的スムーズである事から，檜崎編年で得られた年代よりも，やや上って10世紀中頃を中心とした年代をとりたい。

2．製鉄関連遺物について

鉄滓について

花前遺跡群で取り上げた鉄滓は，総数183320点，4368823.7ｇになる。遺跡ごとの内訳を見ると，花前Ⅰ遺跡1689点[(1)]，75024.2ｇ，花前Ⅱ－1遺跡1086点，35762ｇ，花前Ⅱ－2側道部239点，8601ｇ，花前Ⅱ－2遺跡本線部180306点，4249436.5ｇとなり，圧倒的に花前Ⅱ－2本線部から出土する鉄滓が多い。しかし，これらの出土量の多少にかかわらず，鉄滓の1点ずつを磁着度によって分類した結果，興味深い特徴が指摘できることが判明した。

第1表　遺跡別鉄滓出土量

遺構No・グリッド	花前Ⅰ住居		花前Ⅰ土坑		花前Ⅰグリッド		花前Ⅰ総計		花前Ⅱ－1住居		花前Ⅱ－1グリッド		花前Ⅱ－1総計		花前Ⅱ－2側道グリッド		
時期																	
5	個 81	% 18.1	個 70	% 30.0	個 189	% 18.8	個 340	% 20.1	個 15	% 1.6	個 4	% 2.9	個 19	% 1.7	個 41	% 17.2	個 %
4	220	49.1	55	23.6	450	44.6	725	42.9	506	53.3	95	69.3	601	55.3	151	63.2	
3	91	20.3	24	10.3	199	19.7	314	18.6	369	38.9	33	24.1	402	37.0	42	17.6	
2	18	4.0	47	20.2	134	13.3	199	11.8	58	6.9	5	3.6	63	5.8	5	2.1	
1	38	8.0	37	15.9	36	3.6	111	0.7	1	0.1			1	0.1			
計	448	100	233	100	1008	100	1,689	100.1	949	100	137	99.9	1,086	99.9	239	100.1	
5	g 4,699.5	% 23.8	g 2,596	% 25.3	g 8,497.7	% 18.9	g 15,793.2	% 21.1	g 677	% 2.1	g 185	% 4.4	g 862	% 2.4	g 2,407	% 28.0	g %
4	8,563.4	43.4	3,236	31.6	21,586.6	47.9	33,386	44.5	19,335	61.7	3,577	84.2	22,912	64.1	5,124	59.6	
3	4,336	22.0	1,870	18.3	8,611	19.1	14,817	19.7	10,656	34.0	626	10.5	11,282	31.5	1,008	11.7	
2	779	4.0	1,776	17.3	4,720	10.5	7,275	9.7	659	2.1	37	0.9	696	1.9	62	0.7	
1	1,360	6.9	763	7.5	1,630	3.6	3,753	5.0	10	0.1			10	0.1			
計	19,737.9	100.1	10,241	100	45,045.3	100	75,024.2	100	31,337	100	4,425	99.9	35,762	100	8,601	100	

遺構No・グリッド	花前Ⅱ－2住居		製錬炉		精錬炉付住居		精錬炉		炭窯		土坑		グリッド		花前Ⅱ－2総計		
時期																	
5	個 33	% 3.7	個 116	% 0.9	個 24	% 2.2	個	%	個 5	% 10.2	個 28	% 2.3	個 717	% 0.4	個 923	% 0.5	個 %
4	650	73.2	3,690	29.2	559	51.7	60	60.6	38	77.6	902	73.2	30,500	18.6	36,399	20.2	
3	173	19.5	4,705	37.3	421	38.9	38	38.4	6	12.2	269	21.8	59,181	36.0	64,793	35.9	
2	32	3.6	2,724	21.7	78	7.2	1	1.0			34	2.7	38,148	23.2	41,017	22.7	
1			1,379	10.9									35,795	21.8	37,174	20.6	
計	888	100	12,614	100	1,082	100	99	100	49	100	1,233	100	164,341	100	180,306	99.9	
5	g 1,182	% 7.4	g 2,243	% 0.7	g 1,125	% 5.9	g	%	g 2,550	% 22.1	g 1,858	% 4.0	g 59,249	% 1.5	g 68,207	% 1.6	g %
4	11,726	73.7	119,255	38.9	12,058	63.3	4,494	83.1	6,827	59.1	39,283	83.9	1,259,540.5	32.8	1,453,183.5	34.2	
3	2,626	16.5	107,311	35.0	5,487	28.8	901	16.7	2,170	18.8	57,320	11.3	1,477,033	38.4	1,600,848	37.7	
2	384	2.4	35,173	11.4	387	2.0	12	0.2			361	0.8	603,242	15.8	644,559	15.2	
1			42,970	14.0									439,669	11.4	482,639	11.4	
計	15,918	100	306,952	100	19,057	100	5,407	100	11,547	100	46,822	100	3,843,733.5	99.9	4,249,436.5	100.1	

分類方法

鉄滓については，その成因によって製錬滓，鍛錬鍛冶滓，精錬鍛冶滓などに分けられる。その他に鉄塊も存在することは明らかであり[2]，成因差による鉄滓の分類や，鉄塊の区別が必要と思われる。しかしながら正確な分類を実施するためには，その成分組成などの科学的分析が必要となり，限られた時間と予算の中で，全てについて分析を行なうことは不可能である。そこで今回実施した分類方法では，取り上げた鉄滓（鉄塊も含む）について，磁着度の強弱によって5段階に分けて集計した。

磁着度の決定は，磁石（使用した磁石は，すべて同一の磁力を有する）から何cmの距離で磁着するかを4段階に分け，その距離の遠いものを5，以下，近づくにつれ4・3・2とした。また全く磁着しないものを1としている[3]。

分類結果

集計は各遺跡の遺構ごとに行ない，第1表～第15表に提示しているが，各表の上段は個体数，下段は重量（g）となっている。

個体数と重量での各磁着度の比率を見た場合，相互の相関関係が認められる[4]。このため以下の記述では煩雑さを除くため個体数から見た結果を中心に取扱っていく。

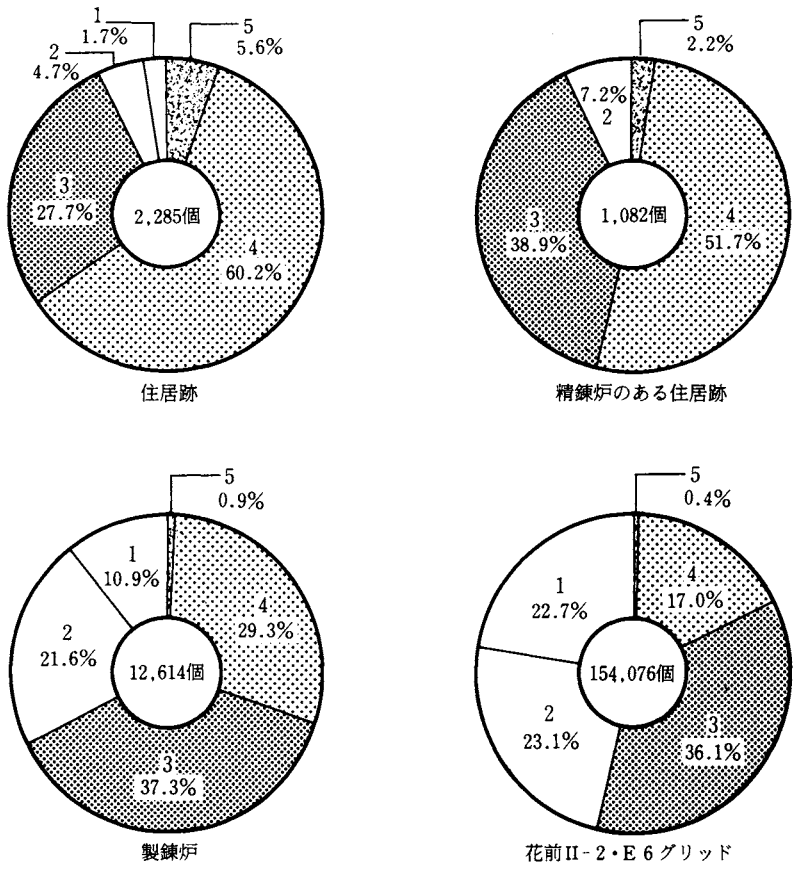
第199図は鉄滓の出土する遺構のうち，住居跡，精錬炉ある住居跡，製錬炉から出土したものを集計したものである。また花前II－2・E6グリッドの結果も示しているが，これは，E6グリッド内は，製錬炉・精錬炉・土坑が密集した地点で，花前II－2遺跡の特徴を最も良く表わした所であるために採用した。(附図参照)

この結果から言えることは，住居跡と精錬炉ある住居跡出土の鉄滓組成が酷似している点である。各磁着度ごとの比率には多少の差があるが，磁着度3以上のものが9割以上となり，強磁着度の鉄滓が主体となっている。

これに対して製錬炉では，磁着度3以上は6割強で，特に磁着度4以上の比率では，住居跡，精錬炉ある住居跡では6割前後になるのに対して，製錬炉では3割程度にとどまり，2倍近くの差が見られる。またE6グリッドの場合では，強磁着度鉄滓の比率がさらに低下している。

このような磁着度別鉄滓の出土比率は，製錬炉から住居跡へという流れの中で，鉄滓の意識的選択，すなわち使用に耐えうる鉄滓の選別が行われていた事を示していると言えよう。

次に，個々の遺構内における鉄滓の分布状況を磁着度別に示したものが第200・201図である。ここで取り上げた遺構は，花前II－2遺跡本線部で検出された精錬炉ある住居跡（009・023），鉄滓を多く出土した住居跡（013），土器と鉄滓を多く出土した土坑（056）である。いずれも磁着度3以上になる高磁着度の鉄滓が多いが，遺構内における鉄滓の分布状況には顕著な集中等は認められなかった。今回は図示できなかったが，磁着度のバラエティが比較的豊富な073製錬炉前庭部での鉄滓分布にも特に目立った傾向はなく，先にも述べた鉄滓の意識的選択は製錬炉から離れた別の地点で行われていたのではないだろうか。



第199図　出土地点による磁着度別鉄滓組成図

時期別に見た鉄滓の出土量では次のような指摘ができる。

時期決定し得る資料は土器を伴なう遺構で出土する鉄滓であり，特に住居跡出土の資料を使用する事が容易である。

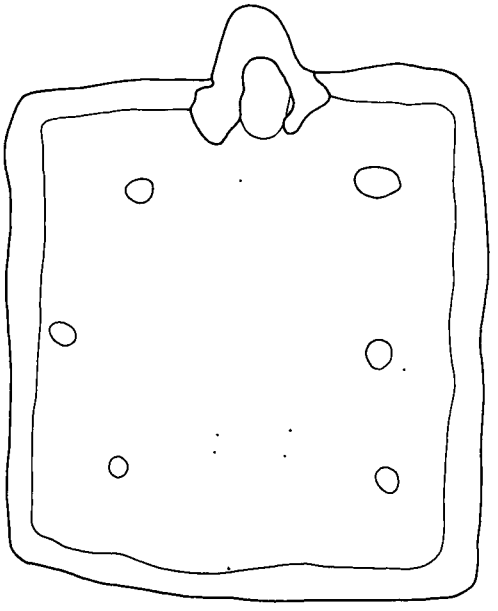
花前Ⅰ遺跡では，花前II期の住居跡出土鉄滓が全体の1割，花前VI・VII期の住居跡出土鉄滓が8割強となっている。

花前II－2遺跡の住居跡出土鉄滓は，鍛冶炉のある009・023を除いて見ると，花前Ⅰ遺跡と同様に，花前II期に1割強，花前VI～IX期で5割近くを占めている。また009・023も含めた形で集計すると花前IX・X期に全体の7割近い集中が認められる。

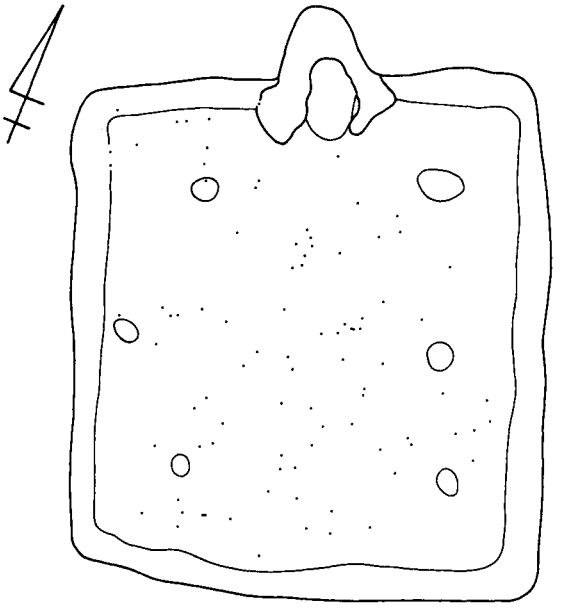
以上のような集中傾向を花前遺跡群全体を通して検討してみると次のようにまとめることができる。

1）花前遺跡群に鉄生産の係りをもつ集団が出現するのは花前II期（8世期第3四半期）であるが，この段階ではまだ活発な生産に入ってはいないと言える。

2）花前VI期（9世紀第3四半期）からの鉄生産の活動は極めて活発であり，花前VII期（9世

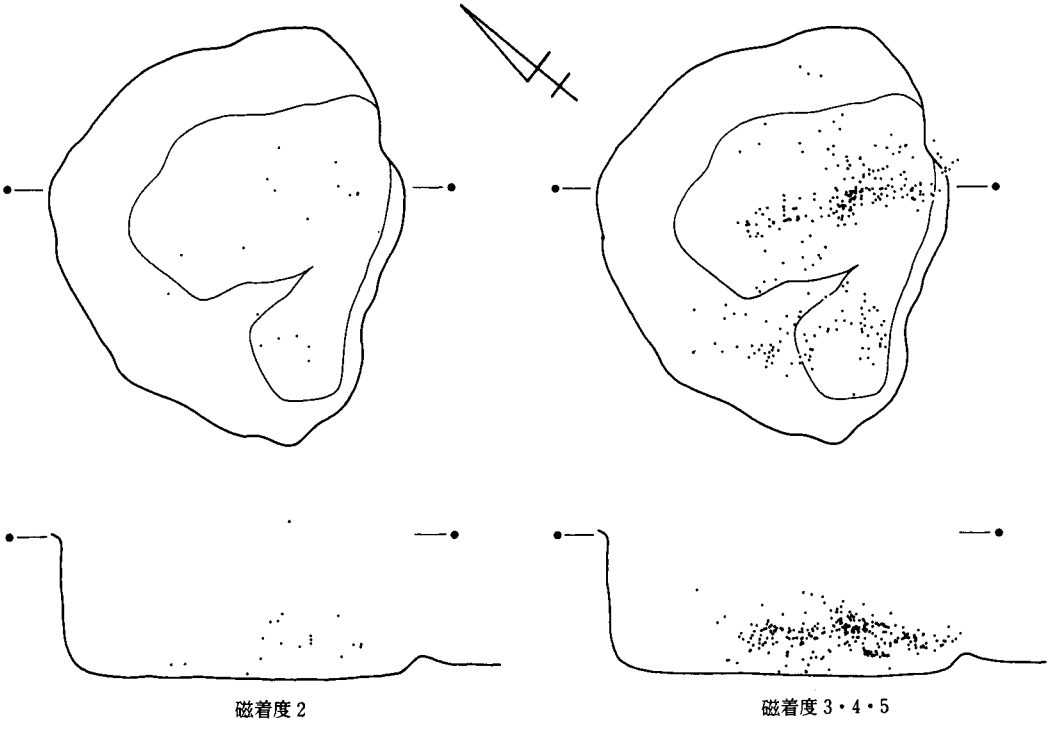


磁着度２



磁着土３・４・５

013住居跡

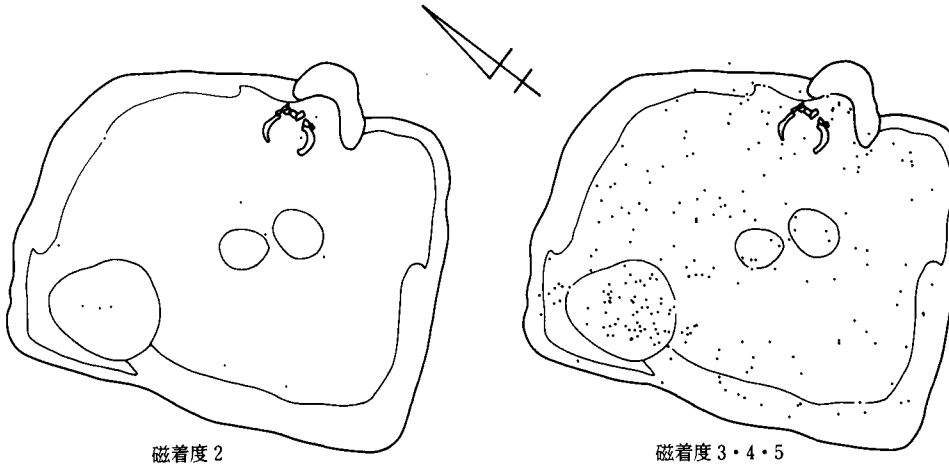


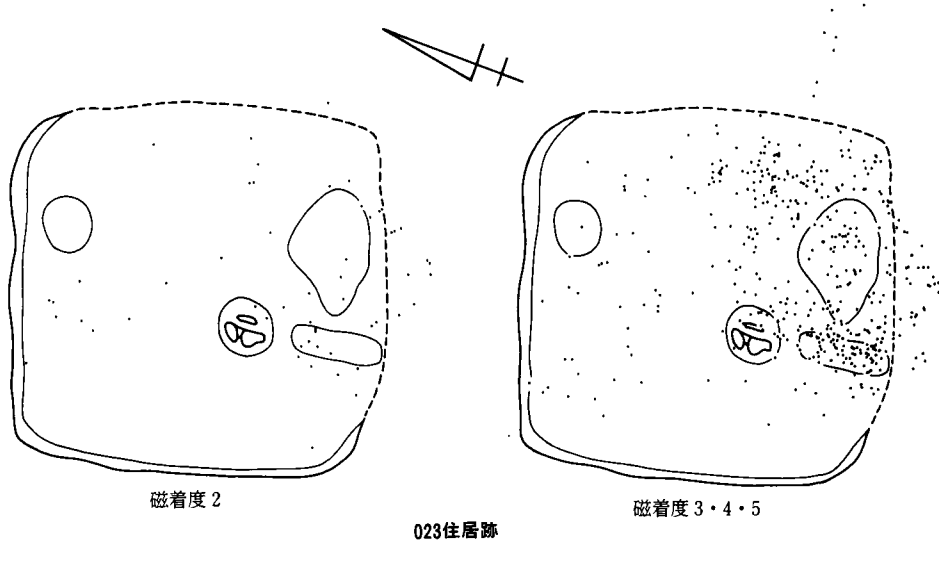
磁着度２

磁着度３・４・５

056土坑

第200図　鉄滓出土状況図（花前Ⅱ-2遺跡本線部）





第201図　鉄滓出土状況図（花前II-2遺跡本線部）

紀第4四半期～10世紀第1四半紀）までは花前遺跡群全体にわたって製鉄に係った集落が営まれていたと考えられる。

3）花前Ⅷ期（10世紀中頃）以降，鉄生産に係った集団は花前Ⅱ－1・Ⅱ－2遺跡だけとなり花前Ⅰ遺跡では，この段階での製鉄作業は終焉をむかえていたと考えられる。

4）上記の結果を踏まえた上で，製錬炉使用から始まる，一元的鉄生産は，花前遺跡群全体にわたって製鉄作業が営まれた花前Ⅵ・Ⅶ期にあると考えられるのではないだろうか。

註

(1) 報文「常磐Ⅱ」の中では，1818点と報告しているが，集計に誤りがあったので，今回の報告で訂正する。

(2) (財)千葉県文化財センター　1982　「研究紀要7」

(3) 磁着度による分類は流山市中ノ坪遺跡出土の鉄滓について行なわれており，磁着度5を磁石に付いて持ち上げられる，4・磁石に強く引かれる。3・磁石に引かれる。2・やや磁石に引かれる。1・磁着しない，となっている。しかし，この場合では相対的な傾向は出るが，分類を行なう個々人の感覚差に違いがあり，誤差を含むと考えられる。また花前遺跡群での磁着度分類についても，磁石の置き方や，鉄滓の形状の大小により，磁界に入る面積差があり，問題となる点は多い。

今後，磁着度による分類を行なう際には，共通の条件を整える必要性は充分にある。

穴沢義功　1982　「古代製鉄炉の第一次製品について」　たたら研究会昭和57年度大会　発表要旨

(4) 磁着度の強弱は，換言すれば個々の鉄滓に含まれる鉄分の差によるものであり，強磁着度のものほど鉄分が多くなり，重量も多くなると考えられる。このことは個体数と重量との比率を比較した場合に，強磁着度資料の方の重量比率が，個体数比率よりも高くなる傾向にあることからも指摘できる。

第2表　花前Ⅰ遺跡住居跡

遺構No.・グリッド	001		002		003		004		011		014		016		019		024	
時　期	II		III		X		VII		VII		I		II		VIII		VII	
	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%
5			1	50.0	3	60.0			3	7.5			2	15.4	2	33.3	2	50.0
4	9	100	1	50.0			1	33.3	21	52.5			8	61.5	2	33.3		
3							1	33.3	12	30.0							2	50.0
2							1	33.3	4	10.0	1	100	3	23.1	2	33.3		
1					2	40.0												
計	9	100	2	100	5	100	3	99.9	40	100	1	100	13	100	6	99.9	4	100
	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%
5			9	17.0	22.5	81.8			113	9.6			14	8.0	12	8.8	108	49.5
4	555	100	44	83.0			8	1.7	650	55.0			74	42.3	20	14.6		
3							184	40.2	296	25.0							110	50.5
2							266	58.1	123	10.4	16	100	87	49.7	105	76.6		
1					5	18.2												
計	555	100	53	100	27.0	100	458	100	1,182	100	16	100	175	100	137	100	218	100

第2表つづき

遺構No.・グリッド	027		028		037		039		040		041		042		046		047	
時　期	VI?		VI		VII		VII		VII		II		III		VI		VII	
	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%
5	7	33.3	3	42.9	1	33.3	11	14.9	8	9.4	1	4.0	1	100				
4	10	47.6	1	14.3	2	66.7	23	31.1	39	45.9	13	52.0			13	76.5	1	250
3	3	14.3	1	14.3			31	41.9	17	20.0	2	8.0			4	23.5	2	50.0
2							2	2.7	1	1.2	3	12.0					1	25.0
1	1	4.8	2	28.6			7	9.5	20	23.5	6	24.0						
計	21	100	7	100.1	3	100	74	100.1	85	100	25	100	1	100	17	100	4	100
	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%
5	199	20.7	153	53.1	25	22.9	439	17.9	633	12.1	75	11.3	24	100				
4	105	10.9	12	4.2	84	77.1	216	8.8	2,725	52.0	435	65.5			455	80.1	6	10.2
3	655	68.0	83	28.8			1,200	48.9	1,149	21.9	22	3.3			113	19.9	20	33.9
2							58	2.4	36	0.7	55	8.3					33	55.9
1	4	0.4	40	13.9			540	22.0	694	13.3	77	11.6						
計	963	100	288	100	109	100	2,453	100	5,237	100	664	100	24	100	568	100	59	100

遺構No.・グリッド	048		057		058		計	
時　期	不　明		VII		VI			
	個	%	個	%	個	%	個	%
5			5	16.7	31	32.0	81	18.1
4	1	100	21	70.0	54	55.7	220	49.1
3			4	13.3	12	12.4	91	20.3
2							18	4.0
1							38	8.5
計	1	100	30	100	97	100.1	448	100
	g	%	g	%	g	%	g	%
5			655	37.0	2,218	46.5	4,699.5	23.8
4	11	100	1,076	60.8	2,087.4	43.8	8,563.4	43.4
3			39	2.2	465	9.7	4,336	22.0
2							779	4.0
1							1,360	6.9
計	11	100	1,770	100	4,770.4	100	19,737.9	100.1

第3表　花前Ⅰ遺跡土坑

遺構No.・グリッド	006		010		計	
時　期	不　明		不　明			
	個	%	個	%	個	%
5	2	40.0	68	29.8	70	30.0
4	2	40.0	53	23.2	55	23.6
3	1	20.0	23	10.1	24	10.3
2			47	20.6	47	20.2
1			37	16.2	37	15.9
計	5	100	228	99.9	233	100
	g	%	g	%	g	%
5	219	49.1	2,377	24.3	2,596	25.3
4	181	40.6	3,055	31.2	3,236	31.6
3	46	10.3	1,824	18.6	1,870	18.3
2			1,776	18.1	1,776	17.3
1			763	7.8	763	7.5
計	446	100	9,795	100	10,241	100

第4表　花前Ⅰ遺跡グリッド・地点不明等

遺構No.・グリッド	03		04		07		08		09		10		11		13		14	
時　期	—		—		—		—		—		—		—		—		—	
	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%
5	4	28.6	3	30.0	10	52.6	15	10.5			14	21.2	4	80.0			6	25.0
4	8	57.1	3	30.0	5	26.3	91	63.6	28	66.7	27	41.0	1	20.0	2	100	12	50.0
3	2	14.3	4	40.0	4	21.1	28	19.6	12	28.6	21	31.8					6	25.0
2							9	6.3	2	4.8	4	6.1						
1																		
計	14	100	10	100	19	100	143	100	42	100.1	66	100.1	5	100	2	100	24	100
	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%
5	150	20.2	251	29.0	421	57.3	1,591	26.2			1,347	28.1	55	67.9			750	45.3
4	544	73.2	309	35.6	188	25.6	3,110	51.2	1,004	84.7	2,271	47.4	26	32.1	121	100	757	45.8
3	49	6.6	307	35.4	126	17.1	1,095	18.0	162	13.7	969	20.2					147	8.9
2							283	4.7	20	1.7	202	4.2						
1																		
計	743	100	867	100	735	100	6,079	100.1	1,186	100.1	4,789	99.9	81	100	121	100	1,654	100

第4表つづき

遺構No・グリッド	15		16		17		18		19		20		21		22		23	
時　期	—		—		—		—		—		—		—		—		—	
	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%
5	22	39.3	8	12.5	38	38.0	1	33.3	4	50.0	3	33.3	5	33.3	3	25.0		
4	18	32.1	23	35.9	29	29.0	1	33.3	3	37.5	3	33.3	3	20.0	4	33.3	1	100
3	8	14.3	5	7.8	24	24.0	1	33.3	1	12.5	2	22.2	3	20.0	3	25.0		
2	8	14.3	28	43.8	9	9.0					1	11.1	4	26.7	2	16.7		
1																		
計	56	100	64	100	100	100	3	99.9	8	100	9	99.9	15	100	12	100	1	100
	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%
5	370.7	20.9	270	10.0	602.2	23.6	51	63.0	233	62.5	110	31.1	102	43.8	275	21.9		
4	902	50.9	1,444	53.7	1,268.6	49.8	15	18.5	71	19.0	55	15.5	11	4.7	180	14.3	8	100
3	366	20.7	69	2.6	547	21.5	15	18.5	69	18.5	90	25.4	44	18.9	504	40.2		
2	133	7.5	906	33.7	130	5.1					99	28.0	76	32.6	296	23.6		
1																		
計	1,771.7	100	2,689	100	2,547.8	100	81	100	373	100	354	100	233	100	1,255	100	8	100

第5表　花前II－1遺跡住居跡

遺構No・グリッド	24		27		不明地点		計	
時　期	—		—					
	個	%	個	%	個	%	個	%
5	1	1.3			48	14.7	189	18.8
4	53	67.1	9	100	126	38.5	450	44.6
3	9	11.4			66	20.2	199	19.7
2	16	20.2			51	15.6	134	13.3
1					36	11.0	36	3.6
計	79	100	9	100	327	100	1,008	100
	g	%	g	%	g	%	g	%
5	45	2.2			1,873.8	10.8	8,497.7	18.9
4	1,522	74.4	133	100	7,647	44.2	21,586.6	47.9
3	222	10.8			3,830	22.2	8,611	19.1
2	257	12.6			2,318	13.4	4,720	10.5
1					1,630	9.4	1,630	3.6
計	2,046	100	133	100	17,298.8	100	45,045.3	100

遺構No・グリッド	013・031・032		016		022		計	
時　期	VII		VII		IX			
	個	%	個	%	個	%	個	%
5	6	0.7			9	6.0	15	1.6
4	406	51.9	12	70.6	88	59.1	506	53.3
3	315	40.2	5	29.4	49	32.9	369	38.9
2	56	7.2			2	1.3	58	6.1
1					1	0.7	1	0.1
計	783	100	17	100	149	100	949	100
	g	%	g	%	g	%	g	%
5	214	0.9			463	8.2	677	2.1
4	14,968	60.6	574	60.7	3,793	66.8	19,335	61.7
3	8,903	36.0	372	39.3	1,381	24.3	10,656	34.0
2	631	2.5			28	0.5	659	2.1
1					10	0.2	10	0.1
計	24,716	100	946	100	5,675	100	31,337	100

第6表　花前II－1遺跡グリッド

遺構No・グリッド	E1		E2		G2		H2		I2		計							
時　期	—		—		—		—		—									
	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%
5									4	3.0	4	2.9						
4	1	100							94	71.2	95	69.3						
3			2	100	1	100	1	100	29	22.0	33	24.1						
2									5	3.8	5	3.6						
1																		
計	1		2	100	1	100	1	100	132	100	137	99.9						
	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%
5									185	4.4	185	4.4						
4	13	100							3,564	84.2	3,577	84.2						
3			115	100	50		15	100	446	10.5	626	10.5						
2									37	0.9	37	0.9						
1																		
計	13	100	115	100	50	100	15	100	4,232	100	4,425	99.9						

第7表　花前II－2遺跡住居跡

遺構No・グリッド	003		011		012		013		014		018		020		021		029	
時　期	V		I		IX		I		IX		VI		不　明		不　明		不　明	
	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%
5							2	1.9	3	5.3			1	0.6	4	2.5		
4	1	100	10	83.3	21	50	79	76.7	50	87.7	1	100	108	67.5	98	60.1	27	79.4
3			2	16.7	19	45.2	15	14.6	4	7.0			46	28.8	55	33.7	7	20.6
2					2	4.8	7	6.8					5	3.1	6	3.7		
1																		
計	1	100	12	100	42	100	103	100	57	100	1	100	160	100	163	100	34	100
	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%
5							155	5.2	139	24.3			40	2.2	170	6.0		
4	95	100	65	41.4	634	66.3	2,416	80.7	423	74.0	44	100	1,310	72.2	2,023	71.0	570	94.2
3			92	58.6	240	25.1	349	11.6	10	1.7			438	24.2	601	21.1	35	5.8
2					82	8.6	75	2.5					26	1.4	53	1.9		
1																		
計	95	100	157	100	956	100	2,995	100	572	100	44	100	1,814	100	2,847	100	605	100

遺構No・グリッド	030		035		036		038		計									
時　期	VI		VII		II		不　明											
	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%
5	21	7.3	2	25.0					33	3.7								
4	238	82.3	5	62.5	9	81.8	3	42.8	650	73.2								
3	20	6.9			2	18.2	3	42.8	173	19.5								
2	10	3.5	1	12.5			1	14.3	32	3.6								
1																		
計	289	100	8	100	11	100	7	99.9	888	100								
	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%
5	598	11.3	80	45.2					1,182	7.4								
4	3,900	73.7	57	32.2	109	76.8	80	35.9	11,726	73.7								
3	703	13.3			33	23.2	125	56.0	2,626	16.5								
2	90	1.7	45	22.6			18	8.1	384	2.4								
1																		
計	5,291	100	177	100	142	100	223	100	15,918	100								

第8表　花前II－2遺跡精錬炉付住居

遺構No・グリッド	009		023		計													
時　期	IX		X															
	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%
5	8	2.7	16	2.1	24	2.2												
4	217	72.3	342	43.7	559	51.7												
3	62	20.7	359	45.9	421	38.9												
2	13	4.3	65	8.3	78	7.2												
1																		
計	300	100	782	100	1,082	100												
	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%
5	248	4.0	877	6.8	1,125	5.9												
4	4,389	71.0	7,669	59.6	12,058	63.3												
3	1,439	23.3	4,048	31.4	5,487	28.8												
2	103	1.7	284	2.2	387	2.0												
1																		
計	6,179	100	12,878	100	19,057	100												

第9表　花前II－2遺跡製錬炉

遺構No・グリッド	049		049周辺		061		067		073		074		計					
時　期	—		—		—		—		—		—							
	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%
5	113	3.4									3	0.1	116	0.9				
4	1,365	41.5	121	34.9	634	17.7	146	21.0	1,424	30.3			3,690	29.2				
3	154	4.7	169	48.7	1,906	53.1	487	69.8	1,987	42.3	2	50.0	4,705	37.3				
2	312	9.5	57	16.4	1,049	29.2	65	9.3	1,239	26.4	2	50.0	2,724	21.7				
1	1,340	40.8							39	0.8			1,379	10.9				
計	3,284	100	347	100	3,589	100	698	100.1	4,692	99.8	4	100	12,614	100				
	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%	個	%				
5	2,160	2.6							83	0.1			2,243	0.7				
4	31,620	38.4	8,500	52.0	25,927	36.1	10,940	44.5	42,268	38.0			119,255	38.9				
3	1,840	2.2	6,212	38.0	36,908	51.4	12,620	51.4	49,091	44.2	640	83.1	107,311	35.0				
2	3,930	4.8	1,655	10.0	9,021	12.6	1,000	4.1	19,437	17.5	130	16.9	35,173	11.4				
1	42,710	52.0							260	0.2			42,970	14.0				
計	82,260	100	16,367	100	71,856	100.1	24,560	100	111,139	100	770	100	306,952	100				

第10表　花前II－2遺跡精錬炉

遺構No・グリッド	005		054		計													
時　期	VIII		—															
	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%
5																		
4	41	52.5	19	90.0	60	60.6												
3	37	47.5	1	5.0	38	38.4												
2			1	5.0	1	1.0												
1																		
計	78	100	21	100	99	100												
	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%
5																		
4	4,136	82.9	358	85.2	4,494	83.1												
3	851	17.1	50	11.9	901	16.7												
2			12	2.9	12	0.2												
1																		
計	4,987	100	420	100	5,407	100												

第11表　花前II－2遺跡炭窯

遺構No・グリッド	037		044		058		060		計									
時　期	—		—		—		—											
	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%
5							5	11.9	5	10.2								
4	1	100	1	100	5	100	31	73.8	38	77.6								
3							6	14.3	6	12.2								
2																		
1																		
計	1	100	1	100	5	100	42	100	49	100								
	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%
5							2,550	23.6	2,550	22.1								
4	28	100	55	100	670	100	6,074	56.3	6,827	59.1								
3							2,170	20.1	2,170	18.8								
2																		
1																		
計	28	100	55	100	670	100	10,794	100	11,547	100								

第12表　花前II－２遺跡土坑

遺構No.・グリッド	007		055		056		066		079		計							
時　期	—		—		—		—		—									
	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%
5					28	2.5					28	2.3						
4	2	50.0	9	81.8	812	73.0	78	76.5	1	33.3	902	73.2						
3	1	25.0	2	18.2	241	21.6	23	22.5	2	66.7	269	21.8						
2	1	25.0			32	2.9	1	1.0			34	2.7						
1																		
計	4	100	11	100	1,113	100	102	100	3	100	1,233	100						
	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%
5					1,858	5.2					1,858	4.0						
4	291	97.6	1,015	98.0	28,801	81.2	9,141	91.9	35	63.6	39,283	83.9						
3	5	1.7	20	2.0	4,479	12.6	796	8.0	20	36.4	5,320	11.3						
2	2	0.7			349	1.0	10	0.1			361	0.8						
1																		
計	298	100	1,035	100	35,487	100	9,947	100	55	100	46,822	100						

第13表　花前II－２遺跡グリッド不明地点

遺構No.・グリッド	B 5		C 5		E 4		E 5		E 6		F 3		F 4		F 5		F 6	
時　期	—		—		—		—		—		—		—		—		—	
	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%
5			1	0.4					638	0.4	1	8.3	5	4.6			25	0.4
4	456	70.5	193	76.3	69	94.5	10	76.9	26,154	17.0	6	50.0	71	65.7	43	87.8	1,814	29.6
3	147	22.7	59	23.3	4	55	3	23.1	55,681	36.1	4	33.3	23	21.3	6	12.2	2,318	37.9
2	44	6.8							36,564	23.7	1	8.3	9	8.3			1,223	20.0
1									35,039	22.7							741	12.1
計	647	100	253	100	73	100	13	100	154,076	99.9	12	99.9	108	99.9	49	100	6,121	100
	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%
5			730	4.4					48,317	1.4	50	43.5	330	16.1			6,310	2.3
4	11,731	81.2	13,950	83.9	1,850	99.0	300	93.8	1,036,456	30.5	45	39.1	1,370	6.7	820	85.4	106,505	38.2
3	2,352	16.3	1,940	11.7	18	1.0	20	6.3	1,334,377	39.2	15	13.0	235	11.4	140	14.6	109,517	39.3
2	362	2.5							558,910	16.4	5	4.3	120	5.8			39,300	14.1
1									421,855	12.4							17,200	6.2
計	14,445	100	16,620	100	1,868	100	320	100.1	3,399,915.5	99.9	115	99.9	2,055	100	960	100	278,832	100.1

遺構No.・グリッド	G 3		G 4		G 5		H 5		不明地点		計							
時　期	—		—		—		—		—									
	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%
5	3	4.5			1	0.8	2	9.5	41	1.6	717	0.4						
4	29	43.9	138	68.7	70	55.6	17	81.0	1,430	55.5	30,500	18.6						
3	22	33.3	63	31.3	55	43.7	2	9.5	794	30.8	59,181	36.0						
2	12	18.2							295	11.5	38,148	23.2						
1									15	0.6	35,795	21.8						
計	66	99.9	201	100	126	100.1	21	100	2,575	100	164,341	100						
	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%	個	%	個	%	個	%
5	88	7.6			90	3.2	125	30.9	3,209	2.7	59,249	1.5						
4	532	46.1	2,660	72.1	1,950	69.8	265	65.4	81,106	67.3	1,259,540.5	32.8						
3	346	30.0	1,030	27.9	755	27.0	15	3.7	26,273	21.8	1,477,033	38.4						
2	188	16.3							9,357	7.8	608,242	15.8						
1									614	0.5	439,669	11.4						
計	1,154	100	3,690	100	2,795	100	405	100	120,559	100.1	3,843,733.5	99.9						

第14表　花前II－2遺跡E 6グリッド内（小グリッド別）斜面部

遺構No.・グリッド	01		02		03		04		05		06		07		08		09	
時　期	—		—		—		—		—		—		—		—		—	
	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%
5					18	5.1	6	6.9									34	0.3
4	1	20.0	4	22.2	107	30.4	73	83.9	7	43.8	6	16.7	443	33.2	324	38.0	3,154	28.3
3	2	40.0	7	38.9	165	46.9	7	8.0	8	50.0	6	16.7	460	34.5	277	32.5	4,806	43.2
2	2	40.0	7	38.9	62	17.6	1	1.1	1	6.3	24	66.7	297	22.2	213	25.0	2,652	23.8
1													135	10.1	39	1.6	487	4.4
計	5	100	18	100	352	100	87	99.9	16	100.1	36	100.1	1,335	100	853	100.1	11,133	100
	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%
5					1,290	9.8	848	24.7									2,937	1.1
4	60	30.0	122	22.8	5,135	38.9	2,338	68.0	1,232	78.0	312	15.6	17,582	45.4	12,886	47.2	110,205	42.0
3	100	50.0	124	23.1	5,390	40.8	246	7.2	342	21.7	370	18.5	11,200	28.9	9,476	34.7	107,116	40.8
2	40	20.0	290	54.1	1,385	10.5	5	0.1	5	0.3	1,320	65.9	6,971	18.0	4,690	17.2	38,754	14.8
1													2,995	7.7	250	0.9	3,542	1.3
計	200	100	536	100	13,200	100	3,437	100	1,579	100	2,002	100	38,748	100	27,302	100	262,554	100

遺構No.・グリッド	10		11		13		14		15		18		19		20		不　明	
時　期	—		—		—		—		—		—		—		—			
	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%
5	3	0.4			389	2.0	179	0.2	3	2.9			3	0.0	2	0.2	1	2.7
4	275	34.0	22	29.3	5,737	30.2	11,754	13.8	175	46.8	366	7.7	3,333	11.7	345	36.1	28	75.7
3	371	45.7	36	48.0	9,826	51.7	28,383	33.2	201	36.3	1,251	16.2	9,499	33.2	371	38.8	5	13.5
2	162	20.0	17	22.7	2,809	14.8	22,998	26.9	137	10.8	557	11.7	6,440	22.5	184	19.2	1	2.7
1					232	1.2	22,150	25.9	20	3.3	2,603	54.5	9,317	32.6	54	5.6	2	5.4
計	811	100.1	75	100	18,993	99.9	85,464	100	536	100.1	4,777	100.1	28,592	100	956	99.9	37	100
	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%
5	260	1.2			15,280	2.9	25,127	1.6	755	2.9			130	0.0	190	0.5	1,500	19.1
4	9,568	42.8	1,100	39.6	241,079.5	45.6	394,762	24.7	12,160	46.8	19,200	20.7	175,970	24.0	26,695	65.1	6,050	77.0
3	10,250	45.9	1,500	54.0	230,438	43.6	615,827	38.6	9,433	36.3	34,000	36.6	287,906	39.3	10,445	25.5	214	2.7
2	2,255	10.1	180	6.5	39,944	7.6	321,651	20.2	2,801	10.8	10,000	10.8	125,570	17.1	2,989	7.3	60	0.8
1					1,470	0.3	238,520	14.9	848	3.3	29,600	31.9	143,930	19.6	670	1.6	30	0.4
計	22,333	100	2,780		528,211.5	100	1,595,887	100	25,997	100.1	92,800	100	733,506	100	40,989	100	7,854	100

第15表　花前II－2遺跡側道部グリッド

遺構No.・グリッド	I 3		I 4		I 5		不明地点		計									
時　期	—		—		—		—											
	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%
5	3	14.3	30	19.2	8	13.1			41	17.2								
4	12	57.1	95	60.9	43	70.5	1	100	151	63.2								
3	5	23.8	30	19.2	7	11.5			42	17.6								
2	1	4.8	1	0.6	3	4.9			5	2.1								
1																		
計	21	100	156	99.9	61	100	1	100	239	100.1								
	g	%	g	%	g	%	g	%	g	%								
5	86	11.5	1,631	25.3	690	48.8			2,407	28.0								
4	487	65.0	4,023	62.6	606	42.9	8	100	5,124	59.6								
3	166	22.2	767	11.9	75	5.3			1,008	11.7								
2	10	1.3	10	0.2	42	3.0			62	0.7								
1																		
計	749	100	6431	100	1,413	100	8	100	8,601	100								

羽口について

花前II－1・II－2の両遺跡から出土した羽口は，大小の二種に分けられる。小形羽口で内外径を推定し得るもの40点，小破片116点，大形羽口で内外径を推定し得るもの15点がある。

小形の羽口の内外径平均値は，内径2.5cm，外径7.8cmとなり，大形羽口の平均値は内径7.7cm，外径13.5cmとなる。

この内外径比を表わしたものが第202図である。左が小形羽口，右が大形羽口である。ただし，座標の取り方が，小形と大形では逆転させて図示している。これは，上記した平均値からも言えることだが，小形羽口の外径と大形羽口の内径が極めて近い数値を示している点を指摘するためである。すなわち小形羽口の外径は6.4～10.0cmの幅の中におさまり，また大形羽口も6.2～9.4cmの内径を示している。当初，この数値結果から，大形羽口としたものは，小形羽口を炉壁に固定する際の挿入口かとも考えていたが，074製錬炉出土例（第203図1）のように遺存状態の良好なものを観察すると，大形羽口本体と炉壁が融着した状態となりながらも，接合面は明瞭であり，この内径部に小形羽口を改めて挿入すると考えるには否合理的であり，またこのように想定した状態で出土する資料は1点もない[1]。

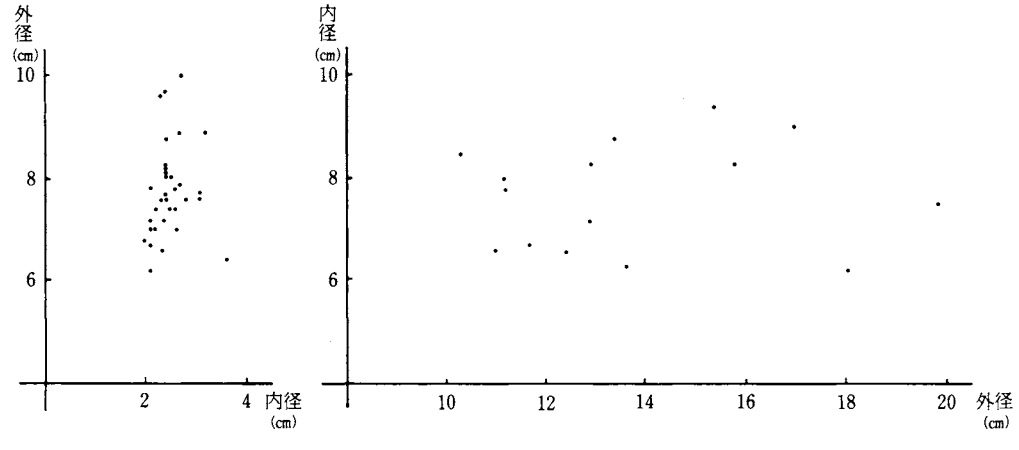
大小の羽口の内外径が一致するのは，大形羽口を製作する際に，小形羽口の外径を1つの基準としていた可能性もあるのではないだろうか[2]。

羽口の使用方法は，強制送風と自然通風が考えられる。高橋一夫氏は半地下式竪形炉の場合に，大形羽口は炉の側壁に挿入し，自然通風によるものとして考えている[3]。花前遺跡群出土の大形羽口で使用方法を明らかにすることができるものは少ないが，出土状態や炉壁の接合・復元によって今後検討を加えていかなければならない問題と考えられる。

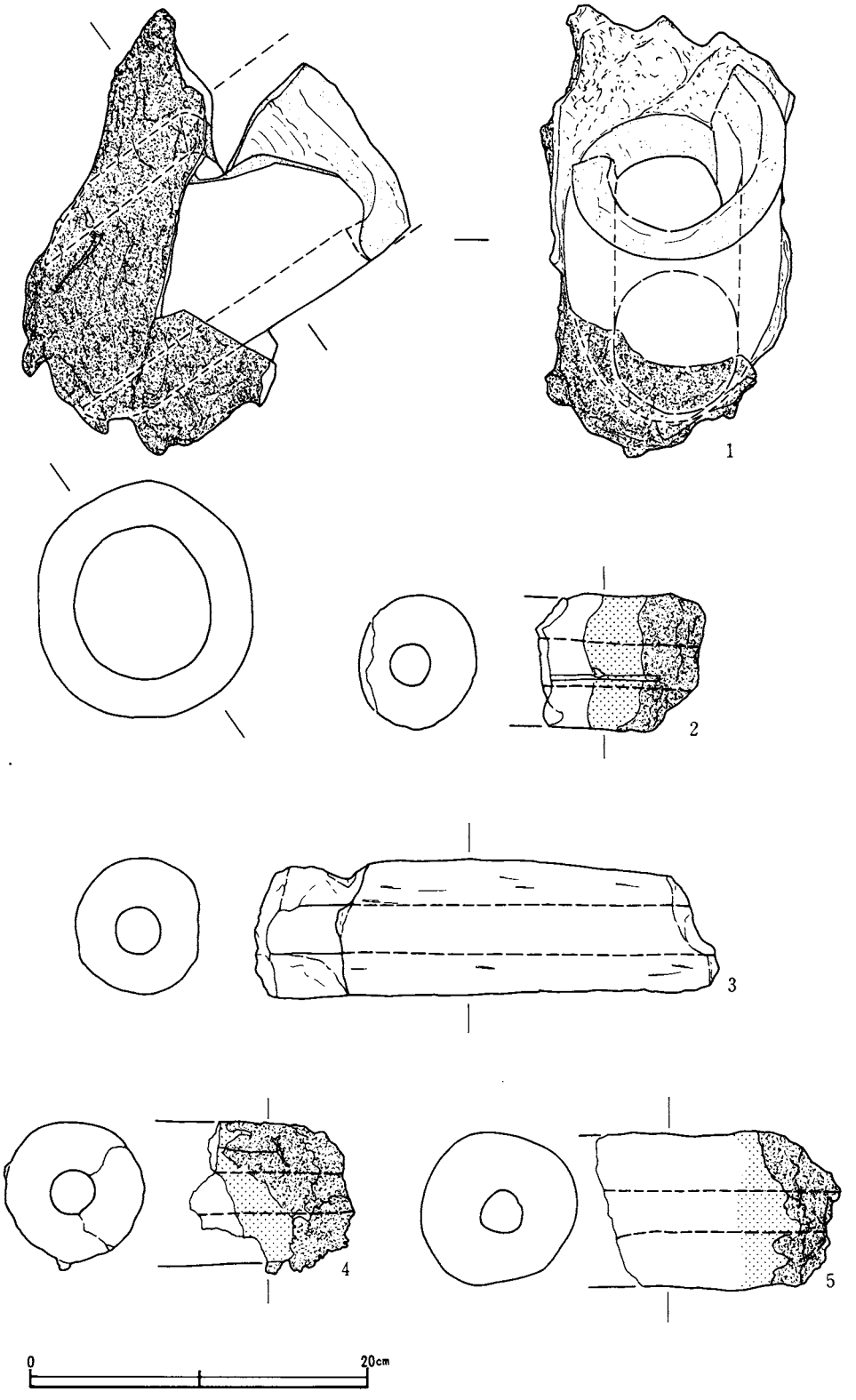
註

(1) 挿入口説の否定は高橋一夫氏によってなされている。
高橋一夫　1983　「古代の製鉄」『講座日本技術の社会史』第5巻　日本評論社

(2) 穴沢義功氏の御教示による。



第202図　羽口内外径比



第203図　羽口

花前II－2遺跡出土羽口計測値表

整理No.	挿図No.	出土地点	外径 cm	内径 cm	遺存部位	備考
1		021	6.2	2.1	中位	
2	203図2	023	7.7	2.4	先端	
3	203図3	〃	7.4	2.5	中位	
4		〃	6.6	2.3	先端	
5		041	7.0	2.2	〃	
6		056	6.8	2.0	〃	
7		061	7.8	2.6	〃	
8		062	7.2	2.4	〃	
9		〃	8.3	2.4	〃	
10		〃	8.9	3.2	〃	最先端部を欠く
11		〃	8.3	2.4	後部	
12		〃	9.7	2.4	先端	
13	203図4	〃	8.0	2.5	〃	
14		〃	8.2	2.4	〃	
15		〃	8.0	2.4	中位	
16		〃	7.4	2.6	先端	最先端部を欠く
17		〃	7.0	2.6	後部	
18		〃	7.0	2.2	中位	
19		〃	7.6	2.8	先端	
20		〃	7.8	2.6	後部	
21		〃	8.8	2.4	先端	
22		066	8.9	2.7	先端	
23		〃	7.6	3.1	〃	
24		〃	7.6	2.4	〃	
25		〃	7.4	2.4	〃	
26		〃	7.6	2.4	〃	
27		〃	7.6	2.3	〃	
28		067	15.4	9.4	中位	大形羽口
29		〃	19.8	7.5	先端	〃
30		073	17.0	9.0	〃	〃
31	203図1	074	13.4	8.2～8.8	〃	〃
32		〃	12.9	8.3	中位	〃
33		E 6－04	6.7	2.1	先端	
34		E 6－14	11.7	6.7	〃	大形羽口
35		〃	11.2	7.8	〃	〃
36		〃	9.8	—	〃	内径推定不可能
37		〃	10.3	8.5	〃	大形羽口
38		〃	13.6	6.3	〃	〃
39		〃	12.9	7.2	〃	〃
40		〃	11.2	8.0	〃	〃
41		〃	15.8	8.3	〃	〃
42		E 6－15	8.0	2.4	〃	
43		E 6－18	11.0	6.6	先端	大形羽口
44		E 6－19	18.0	6.2	〃	〃
45		〃	12.4	6.6	〃	〃
46		F 6－01	7.0	2.1	〃	
47		〃	7.4	2.2	〃	
48		不明	9.6	2.3	〃	
49		〃	7.6	2.4	中位	
50		〃	8.1	2.4	〃	

その他の製鉄関連遺物について

ここでは鉄素材の生産から，鉄製品の製作までの一連の工程の中で，使用された道具や，副次的な産出物と思われるもののうち，鉄滓，羽口，炉壁を除いた遺物を扱うこととし，その主なものは，鉄製品の鋳造に関係すると考えられるものである。

説明の煩雑さを避けるために便宜的に次の4つに大別した。

Ⅰ．鋳型　他の遺跡の調査例等から明らかに鋳型とわかるもの
　　内面もしくは外面に鋳型として使われた跡（還元化，鉄の付着等）を残すもの

Ⅱ．鋳造関係　鋳型として使われた確証はないが形，成整形が鋳型に類似するもの

Ⅲ．るつぼ　埦形ないし，それに類する形で，内面に鉱滓の付着するもの

Ⅳ．その他　製鉄関連の遺物と思われるが，どの工程で使われたのかが不明なもの

各項目は必要に応じてさらに細分した。しかし，これらの分類はあくまでも便宜的なものであって，厳密なものではないことを断っておく。

Ⅰ．鋳型（第204～210図）

A．容器　鉢，鍋のような容器の鋳型と考えられる。かなり大形であったらしいが，全体の器形がわかるものはない。また破片も少なく，個体数も少なかったと思われる。

1．外型（1，5，6）製品の外側にある鋳型と考えられ，内側が平滑である。

1．おそらく口縁部分にあたるものと思われる。横方向に幅3.5㎜，深さ2㎜弱の2本の沈線（製品では隆線）を持つ。内面は還元している。胎土はスサを含まない砂質の粘土で，外側に薄くスサ入り粘土が付着する。049製錬炉出土

5．6．胴部外型の一部分と思われる。内面は還元している。胎土は内側がスサを含まない砂質の粘土，その外側をスサ入り粘土が覆っている。5はＥ6－19グリッド，6は012住居跡出土

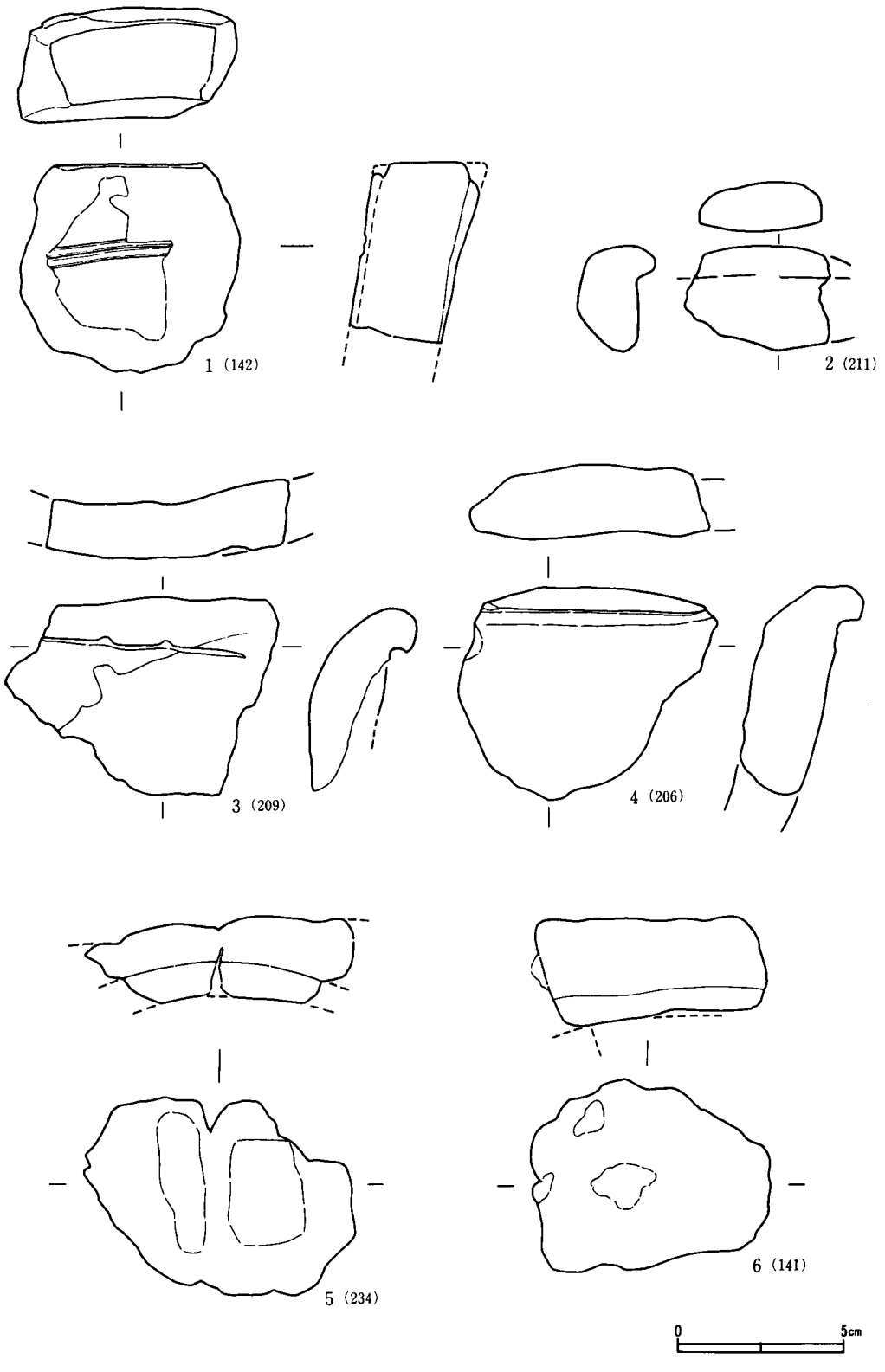
2．内型（2～4，7～11）内側の鋳型，外面が平滑

2．口縁部分にあたると考えられる，右側面の一部を除いて完形。上端部が屈曲しているがこれは，製品の端部が外に曲がっていたためと思われる。外面還元。胎土はスサを含まない。Ｅ6－03出土

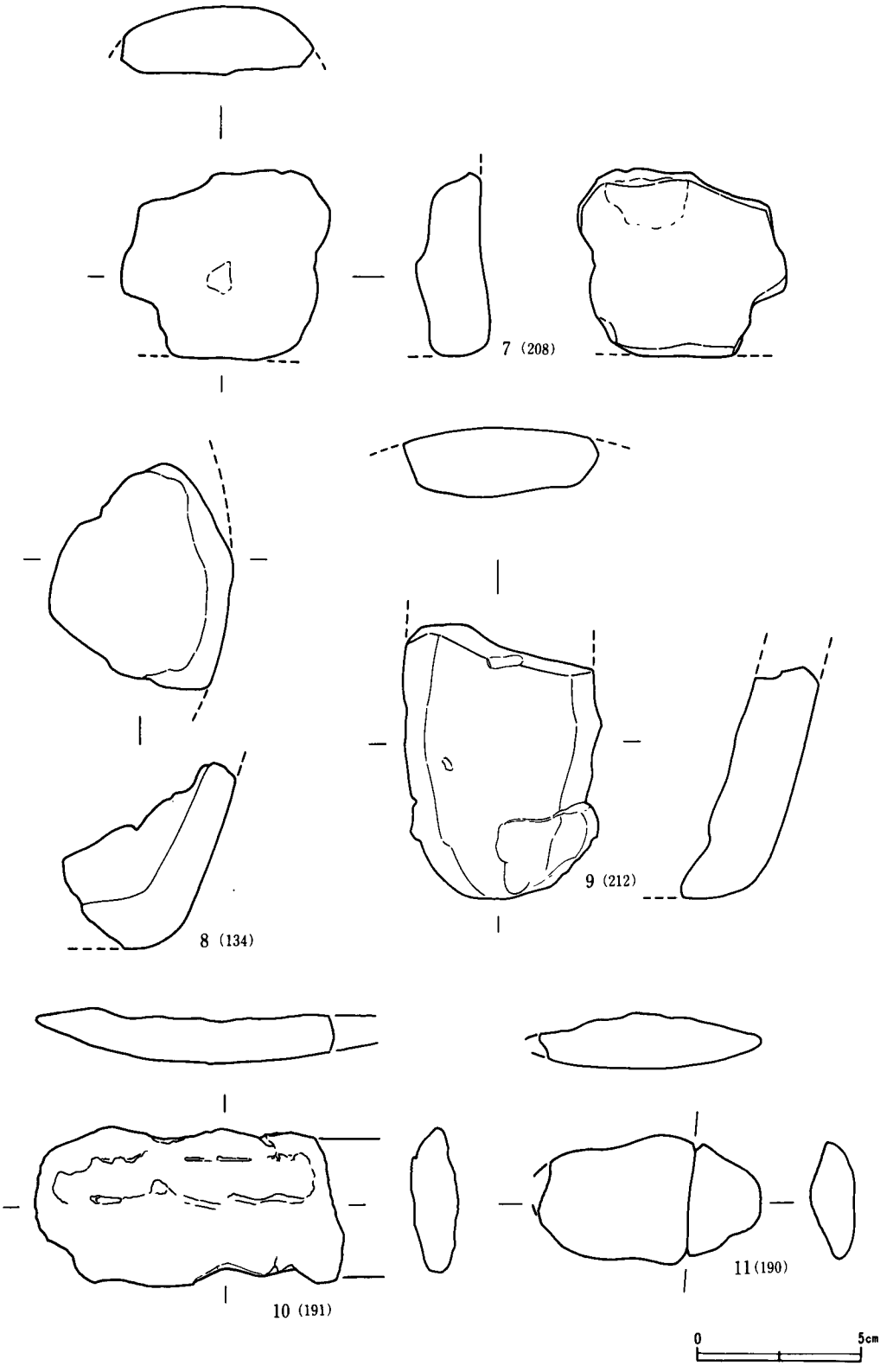
3．4．同様に口縁にあたる部分であろう。外側は還元しており剝離が激しい。スサを含まない粘土で作られる。3，4ともにＥ6－09出土

7．底部の型か。外面，下端は平滑，外側と下端は約90°の角度をなす。未使用と思われ還元していない。

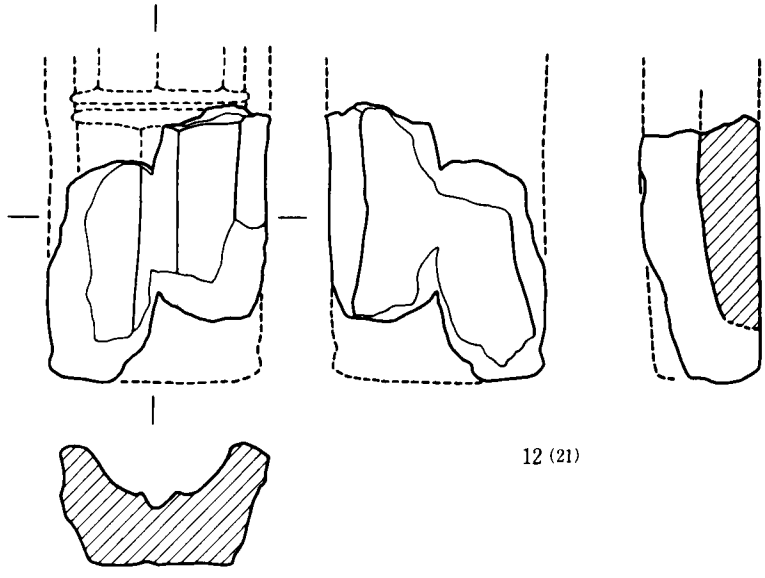
8．おそらく底部の型。外側と下端はきわめて平滑で良く還元している。外側と下端の作る角度は約110°，外側1～1.5cmは砂質の胎土でその内側にスサ入り粘土が重ねられている。推定される径は約24cm。Ｆ5グリッド出土

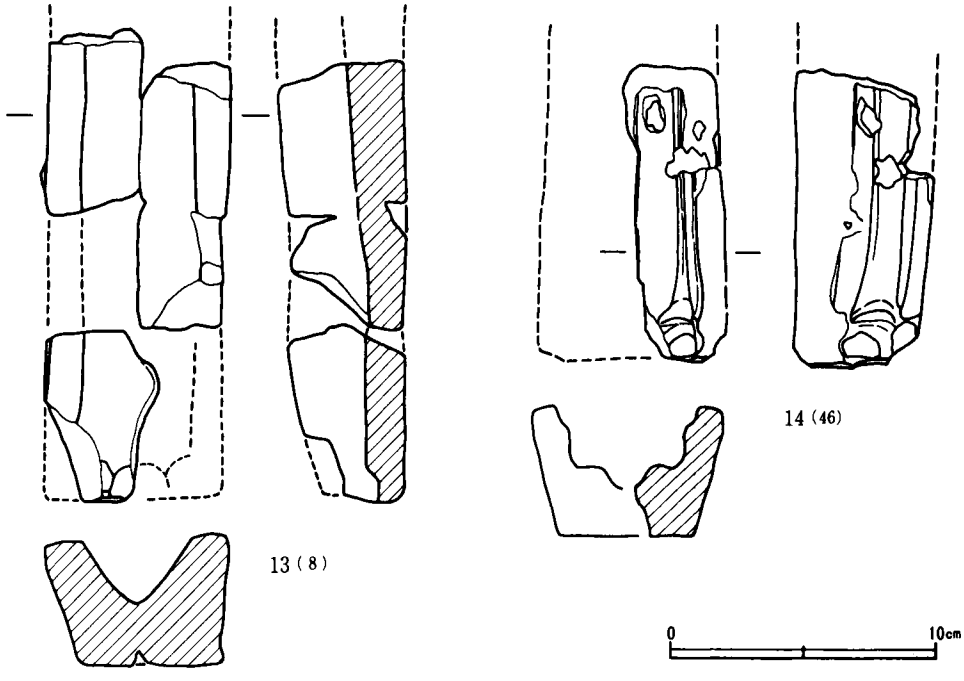


第204図　製鉄関連遺物１（鋳型）

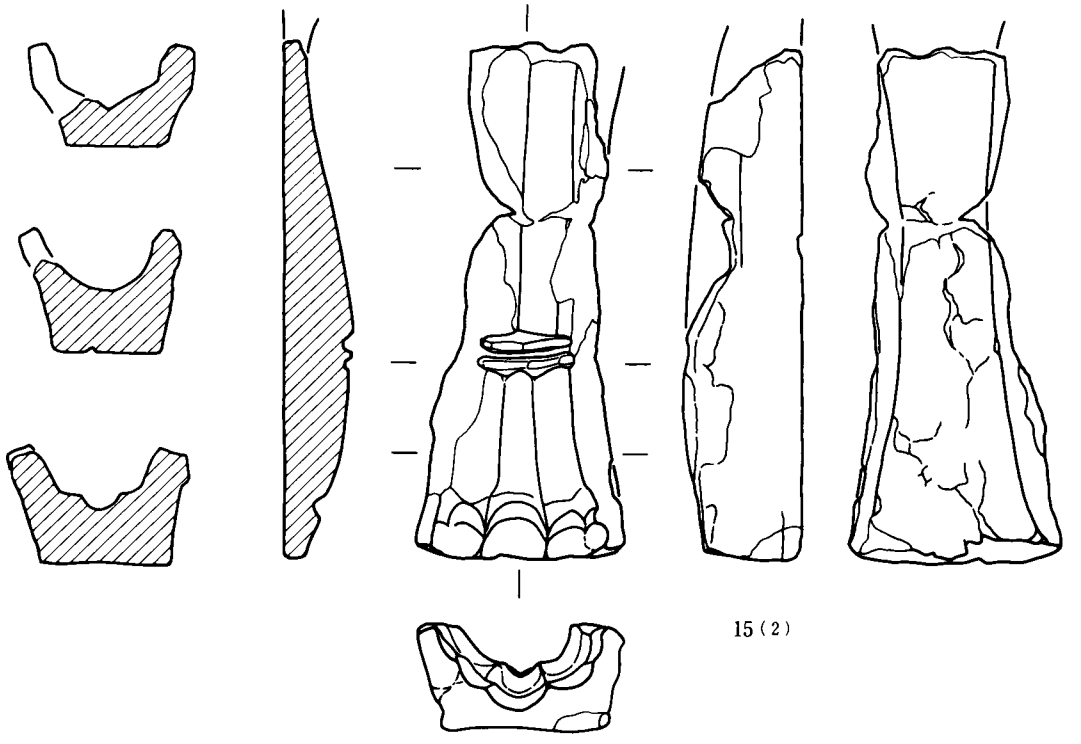


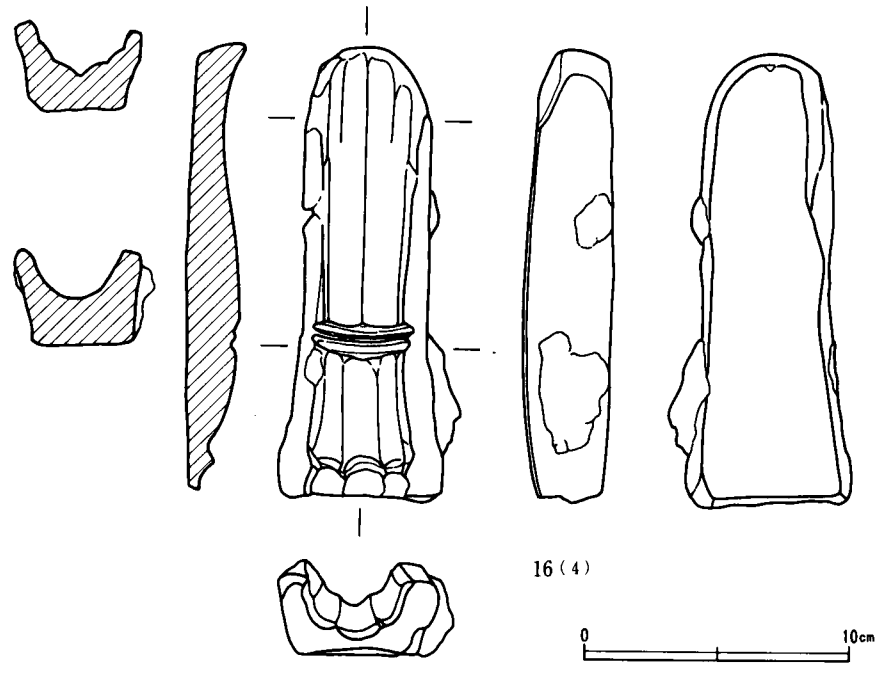
第205図　製鉄関連遺物２（鋳型）



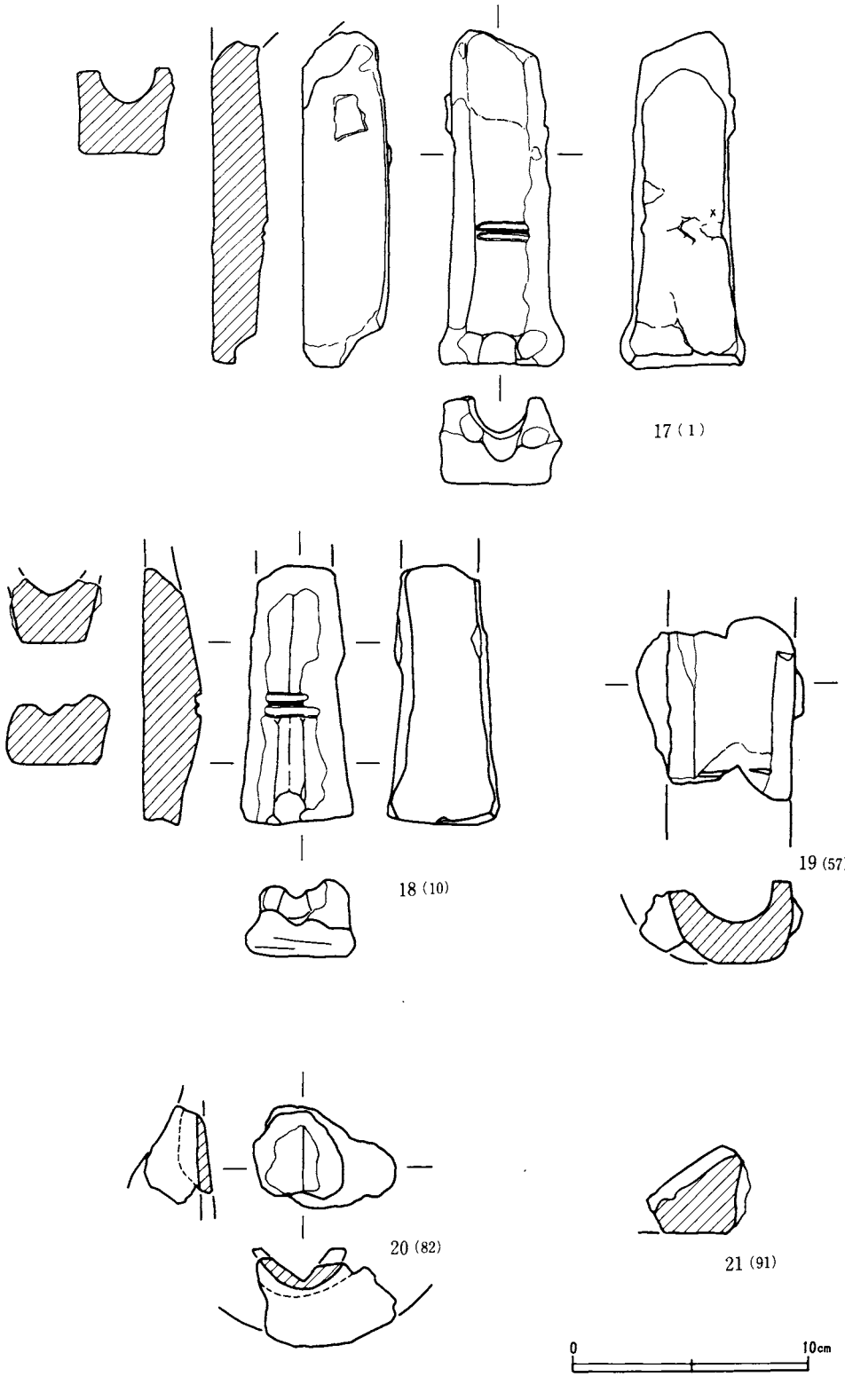


第206図　製鉄関連遺物３（鋳型）

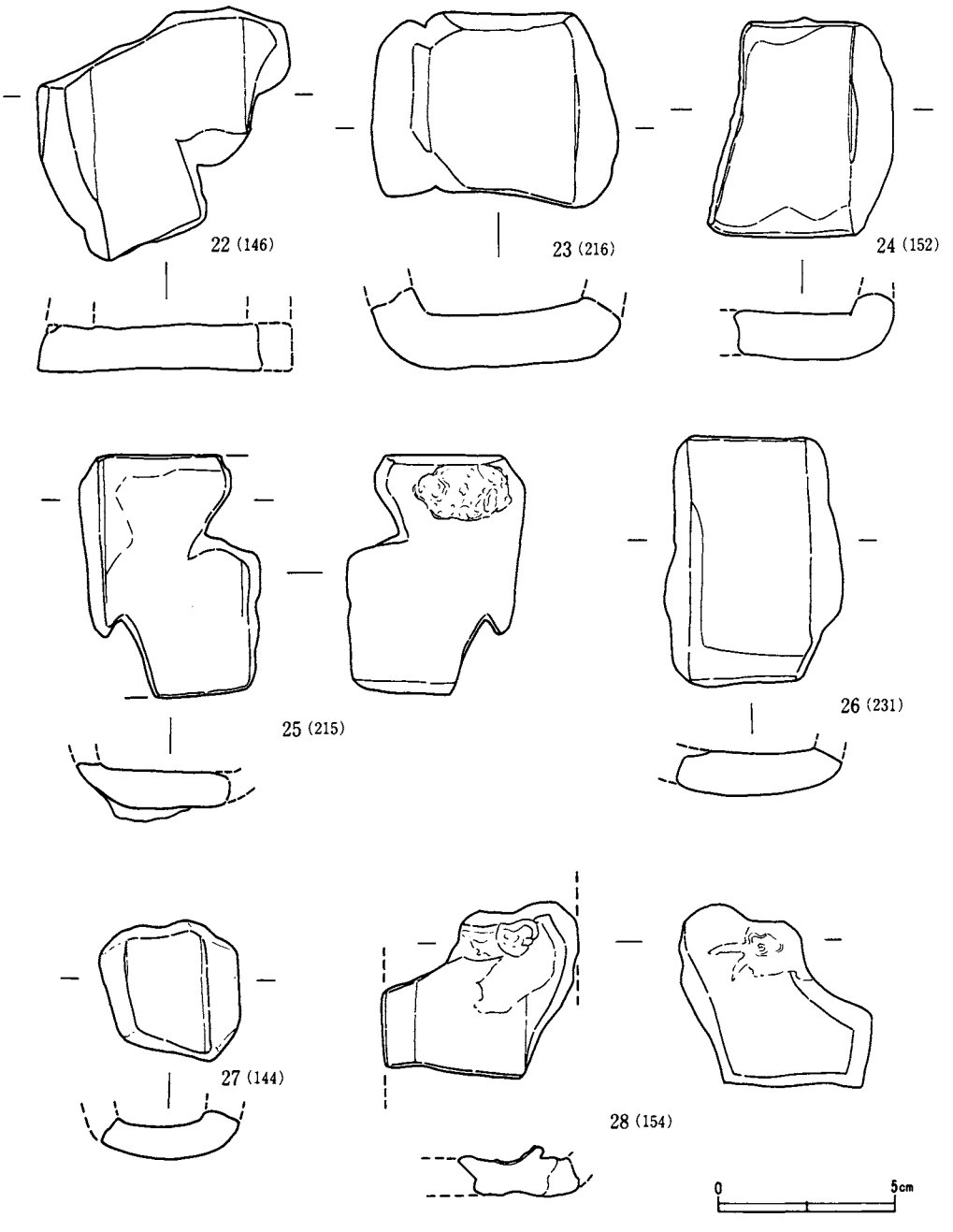




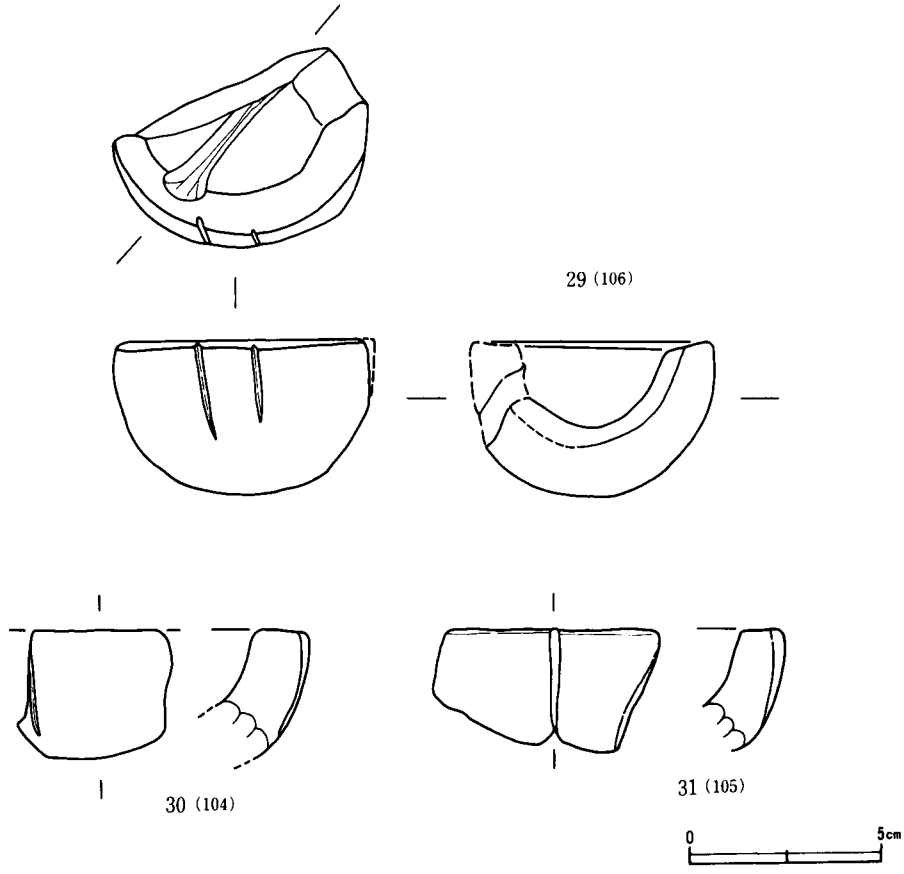
第207図　製鉄関連遺物4（鋳型）



第208図　製鉄関連遺物５（鋳型）



第209図　製鉄関連遺物 6 （鋳型）



第210図　製鉄関連遺物７（鋳型）

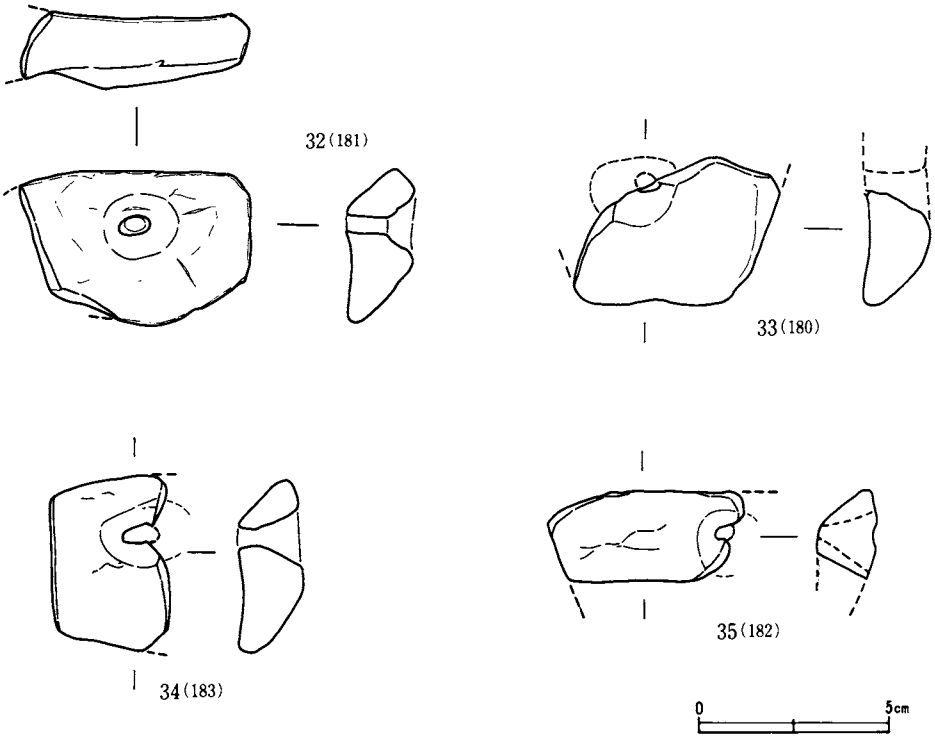
9．おそらく底部の鋳型，幅６cm，厚さは２cmぐらい，還元せず未使用かと思われる。Ｅ６－04出土

10．胴部の内型か。外側は平滑，内面は指頭痕が残る。底に近い部分と思われ，径は28cmぐらいである。現存長は9.3cm，幅4.7cm，スサを含まない粘土，Ｅ６－10出土。還元は一部のみで未使用の可能性もある。

11．胴部の内型か。10より小型である。現存長6,7cm，幅3.9cm，厚さ1.5cm，ほぼ完形。推定径は約28cm。スサを含まない粘土で作られ，一部だけが還元する。割れ口に鉄が付着している。

Ｂ．脚部　獣脚の鋳型と考えられる。本遺跡では斜面部を中心にして総破片数100点を超える脚部の鋳型が発見されたが，ここでは器形全体のわかるもの，特徴的なものを選んで図示している。

12．発見された中で最も大きい，推定内幅６cm，中央横線から下端までが9.6cm。内面還元。全体に雑な作り，同じタイプで別個体の破片が若干ある。



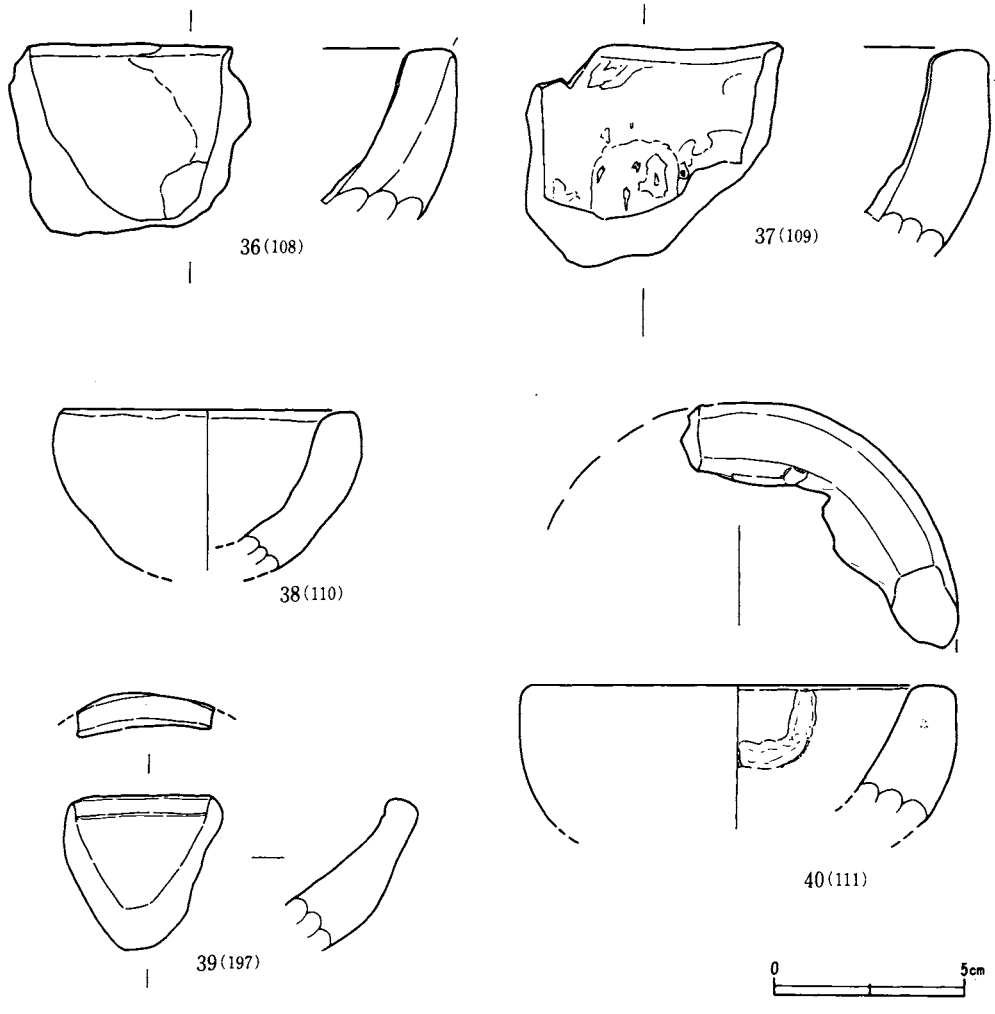
第211図　製鉄関連遺物８（鋳造関係）

13. これも大形の型，内側の幅４cm，全体に表現力の乏しい型で特に先端の爪の部分はほりが浅く稚拙である。脚部も単純な三角形で中央の横線も無い可能性がある。内面は還元している。同タイプ別個体の破片が若干ある。Ｅ６－04，09出土

14. 推定内幅5.4cm，全体にほりの深いダイナミックな型である。一番右の図は鋳型の内側の側面図だが３ケ所にわたって鉄が付着しており，鉄製の脚部を鋳造していたことがわかる。若干の同タイプ破片があるが１セット（３本ないし４本）には足りない。スサを含まない粘土で作られ，内面は平滑，よく還元している。

15. 現存長20.4cm，最大内幅6.2cm，中央の横線から下端までの長さは6.8～8.4cm，脚上端を欠くがほぼ全体を知ることができる。発見された鋳型の中で最も整った形をしている。上半部は稜線が３本，きっちりと角を付け直線的である。横線はまん中より下にあって２本接している。下半部は２本の稜線で３本の指を表現している，全体に丸味を持ち量感がある。胎土はスサを含まない砂質土で，内面はかなり平滑に仕上げてある。内面はよく還元している。同タイプの破片はかなり少ない。

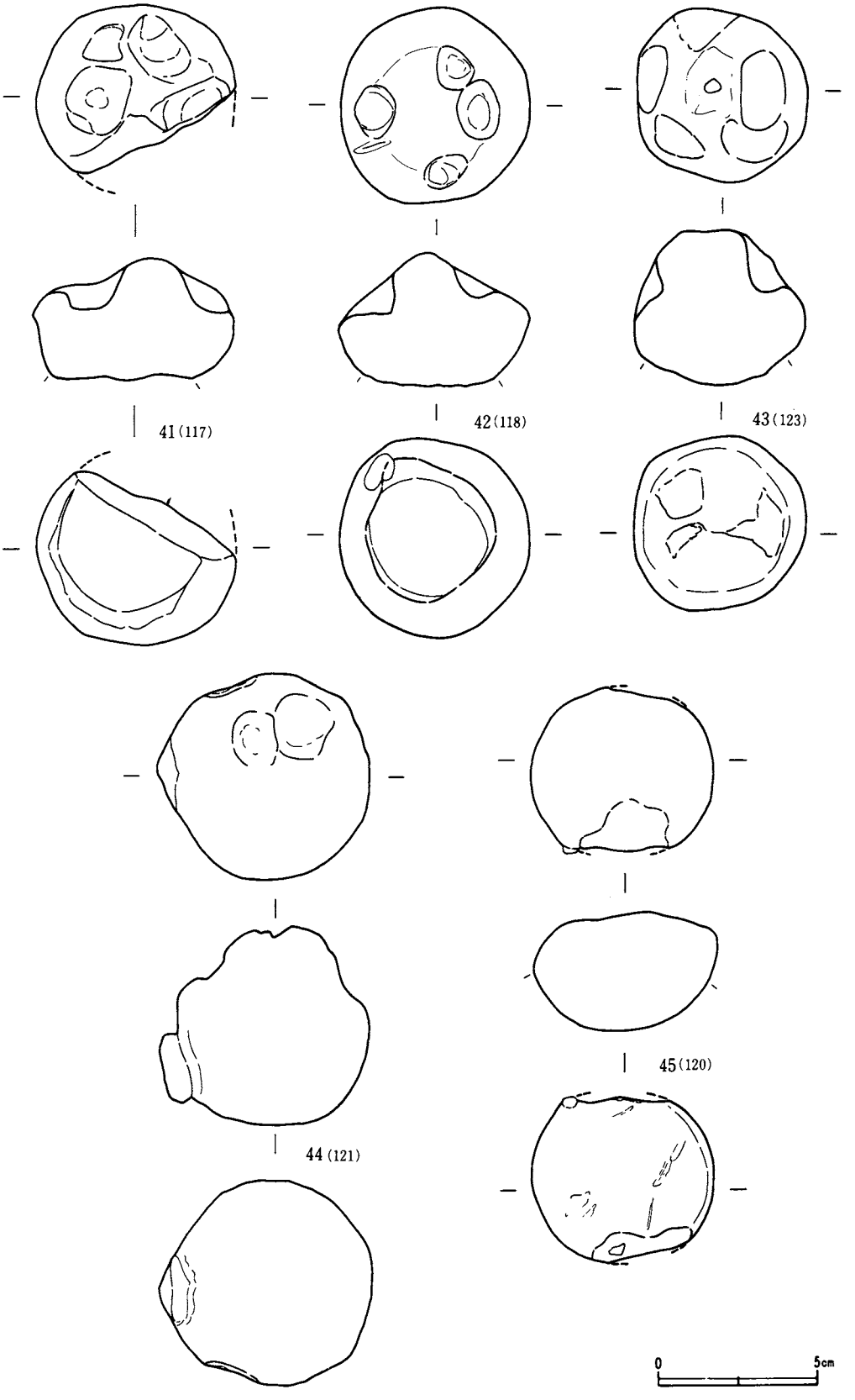
16. 唯一の完形，全長17.8cm，最大内幅4.0cm，中央の横線から下端までは５～6.4cm，



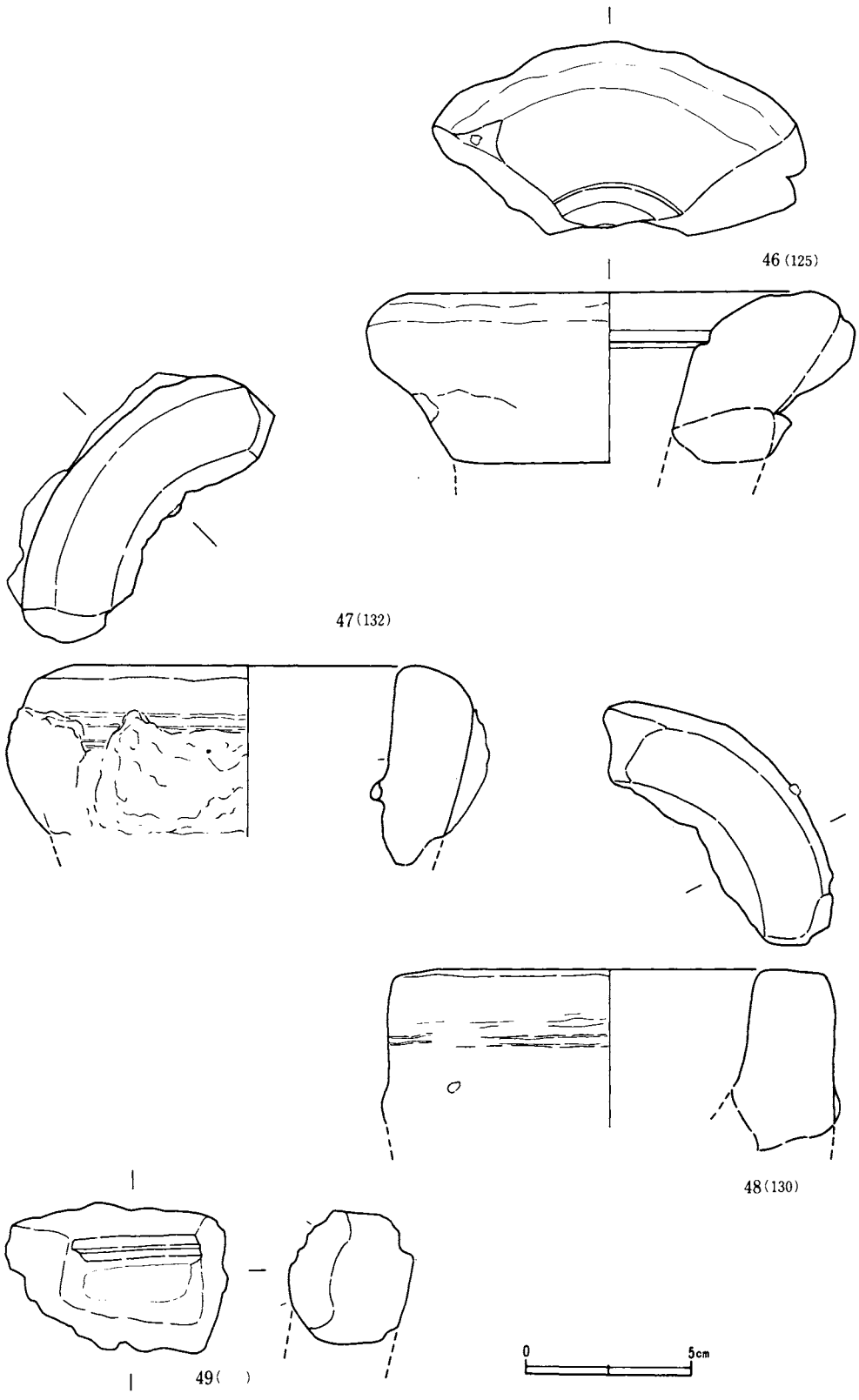
第212図　製鉄関連遺物９（るつぼ）

全体に繊細で，こじんまりとした印象を受ける。上端近くは稜線５本，うち２本は途中で切れて３本となる。曲線的な感じを受ける。横線は下⅓ほどの所にあって２本が接している。下半は４本の稜線で５本の指を表現している。内面は平滑で還元している。型はスサを含まない土だが，外面にはスサ入り粘土が付着している部分がある。本遺跡跡の主体で最も破片数が多い。Ｅ６－04出土

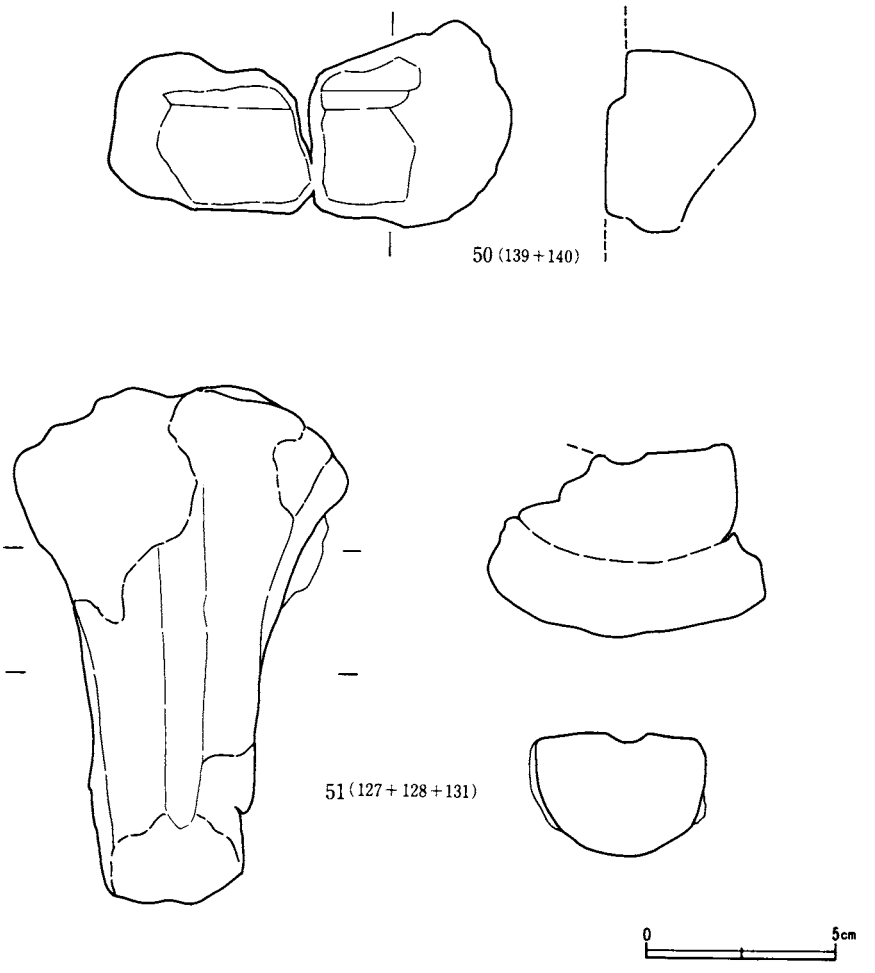
17. 小形のタイプ，ほぼ全体の形を知ることができる。現存全長14.3cm，下端部内幅2.8cm，横線は２本で中央やや下寄りにある。上・下半とも稜線を持たない。爪先は３つ残っていて，ほりは深いが，全体に反りもなく，めりはりの無い感じを受ける。内面は平滑，還元部分は上半の½弱でそれ以下は全く還元しない，同タイ



第213図　製鉄関連遺物10（その他）



第214図　製鉄関連遺物11（その他）



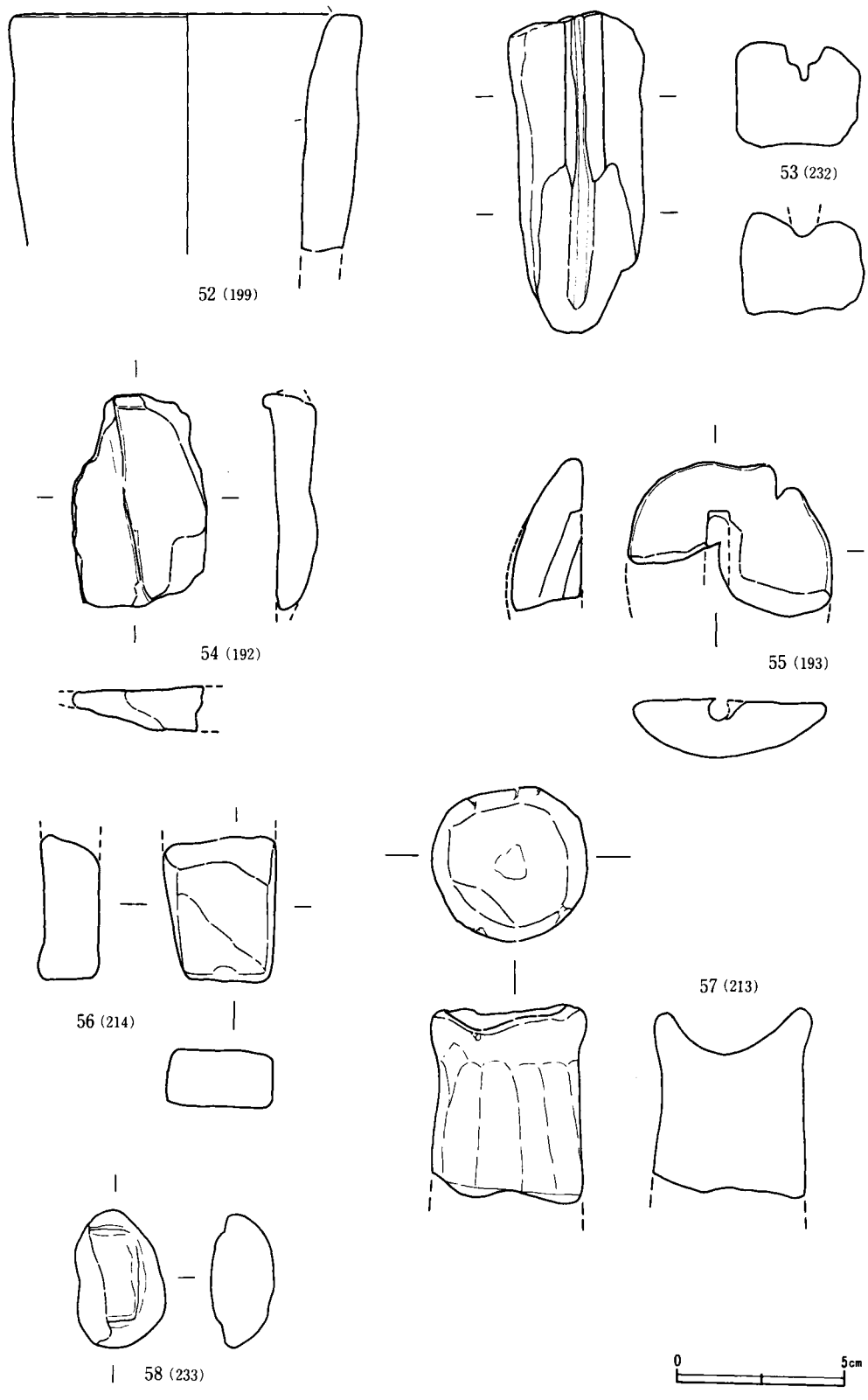
第215図　製鉄関連遺物12（その他）

プ別個体でも同様の還元状態を示す。外面にスサ入り粘土が若干付着する。E 6 —05出土

18. 同じく小形のタイプ，現存長11.2cm，下端内幅約3.2cm，上半は中央の稜線1本だけが残っている。横線は2本でやや太い。下半は2本の稜線が残り，3本の指を表現している。爪先のほりは浅いが全体の反りはかなり強い。砂質だが内面は平滑，全く還元しない。外面一部にスサ入り粘土付着。E 6 —04出土

19・20. 鋳型の外側にスサ入り粘土が付着した破片，横線の残る19は中位，20は上半の破片，双方とも内面は還元している。19は側面に，20は側面と底面に2回にわたって，粘土に覆われている。19はE 6 —09，20はE 6 —18出土。

21. 小破片　内面に鉄のようなものが5㎜ほどの厚さで付着。鋳造の失敗例？E 6 —13出土



第216図　製鉄関連遺物13（その他）

C．ふた　鋳型のふたと考えている。長方形の粘土板の左右両端を折り曲げるか両端に粘土帯を貼り付けるかして断面が「かすがい」状になるように成形している。

22～28．現存長5.5～7.0cm，内面幅2.1～4.2cm，厚さ0.8～1.2cmほどのばらつきがある。内面は平滑，27を除いてすべて還元する。総破片数39点で25を始め半数以上の外側にスサ入り粘土が付着，28は内面に鉄が付着する。埼玉県猿貝北遺跡ではこのふた状鋳型が脚部の鋳型と一体となって出土し，外側はスサ入り粘土で覆われている例があるという(酒井清治氏の御教示による)。本遺跡も同様の使用法であったと推定される。22はＥ６－09，23はＥ６－06・08，24はＥ６－10，25はＥ６，26．28はＥ６－19，27はＥ６－06出土

D．不明　何に使われたか不明だが鋳型であることは間違いない，３点とも同一タイプ

29～31．29が最も残りが良い外径6.6cm，内径4.4cm，ほどの半球形と思われ，中央に幅0.5cm，深さ0.6cmの沈線がある。外側には別の鋳型を合わせる目印としたと思われる焼成後につけられた沈線がある。胎土は砂質，内面は平滑，29のみ還元しない，すべてＥ６－10出土

II．**鋳造関係**（第211図）

32～35．発見した破片がすべて還元しないので鋳型とは区別した。用途不明，形状はほぼ同一で長径５～６cm，短径４～５cm，中央上位にろうと状の穴を持つ，焼成前の穿孔で外が1.5×２cm，内側は0.5×１cmほどの長円形。内側は平滑で穴より上が外反する。外は指頭痕等が残り雑な作り。胎土は砂質，総数６点，32～35はＥ６－10出土。

III．**るつぼ**（第212図）総数９点出土，胎土に砂粒を多く含み，焼成は良好

36．口径17.0cm，内面にアメ状の鉱滓付着，内側は口縁端部まで還元。37．推定口径13.6cm，内面アメ状鉱滓付着，内面と口縁外側まで還元，Ｇ５出土。38．推定口径7.5cm，現存高4.4cm，全面還元，Ｆ５出土。39．推定口径12.0cm，内外面とも一部還元，009住居出土。40．推定口径11.4cm，内面一部に鉄滓付着，全面還元，009住居出土

IV．**その他**（第213～216図）

A．**スタンプ状土製品**

41～45．径は平均６cm，高さ４～６cmの球形ないし球形をつぶした形。上半には指でつまんだ跡が残る。指は全て右手，下半は何かに押しあてたようにつぶれるものが多く，その部分のみが還元する。胎土は砂質のスサ入り粘土，11点出土した。41・45はＥ６－19，42はＦ５，43はＥ６－06，44はＥ６出土

B．**円筒状土製品**

46～50．スサを含む粘土で作られ砂質でもろい。全体に厚手の作り，推定される外径は13～15

cm，内径は9cmほど。何かをはめこんだのか内面に段がつくものが多い。46・48はＦ６－06，47はＥ６－04出土，49，50は地点不明。

C．不　明

51．浅い溝を持つ土製品にスサ入り粘土が巻かれている。全体の形状不明，還元しないＥ６－04出土。52．口径10.5，現存高7.1cm，円筒状，胎土にスサは含まない，内外面に鉄分付着，るつぼの可能性もある，Ｅ６－04出土。53．現存長9.6cm，最大幅4.1cm，いびつな角柱状の一面に断面半円形の溝をつける，この溝はさらに一段下がる。半円形の溝の部分は平滑，胎土はスサを含まない，還元しない，Ｅ６－04出土。54．木わくに押しつけて成形，スサを含まない，001住居出土。55．長径6.0，最大厚2.1cm，平らな面に棒状工具を用いて斜めの穴をあける，穴の内面のみ還元，鋳型と同じ胎土。56．一部のみ還元，胎土はスサを含まない，Ｅ６出土。57．径4.4cmほどの円筒形，頸部がわずかにくびれ，上端はくぼんで受部となる，鋳型と同じ胎土だが還元しない。58．現存長4.1cm，表面に沈線が径2.8cmほどの方形に巡る磨めつが激しく原形等不明，鋳型と同じ砂質の胎土。

以上，見てきたように本遺跡の製鉄関連遺物は思いのほか豊富であった。特に鋳造関係の遺物には注目すべきものが多い。中でも脚部の鋳型は埼玉県の大山遺跡，台耕地遺跡，猿貝北遺跡で類例が知られている（酒井清治，田中正夫氏の御教示による）。台耕地，猿貝北の例は，製鉄関連遺構を伴うこと，時期的に近似していることなど本遺跡と類似点が多く興味深い。形態的な比較はもちろんのこと製品の流通問題も含め，今後検討しなければいけない問題である。

炉壁について

炉壁は製錬炉，住居跡，土坑等広い範囲で確認されたが特にＥ６グリッドを中心とした斜面部から取り上げた炉壁は多量で鉄滓の総量を上回ると思われる。ところで何回も述べてきたように今回の整理では炉壁について全く検討を加えられなかった。遺構に残された炉壁は炉の中位部分が多く炉上半，炉底の様子を知ることはできない。また操業回数を復元する手掛りも炉壁の分析にある。さらに本遺跡の場合，炉壁の中に製鉄関連遺物が多数混入している。分析を進めれば資料の増加は確実であり，新事実の発見も予想される。このように炉壁資料の分析は製錬炉の構造や作業工程を検討する上で避けて通れない問題といえる。まして近ごろ囁かれだした鉄滓や炉壁の「不要論」や「廃棄論」などは，もってのほかである。

３．製鉄関連遺構について

製錬炉は全部で６基が調査されたが061，063，067の各製錬炉は遺存状態が悪く，本体部分の構造の推定は不充分であった。しかし掘り方等から考えると６基全てが半地下式の竪形炉であったと言って良い。本体について言えば内径は60cm前後の円筒形ないしは長円筒形と推定される。炉高は最も残りの良いもので１ｍ弱しか残っておらず全体の高さは不明である。炉壁は一般にスサ入りの粘土で作られ，周囲はスサを含まない粘土，山砂でうらごめされている。炉の下部及び前庭部は049を始めとして，おおむね版築状になっており湿気抜きを意識的に行っていたらしいことが，うかがわれる。前庭部は炉壁等が散在した状態で発見されるものが多く，最終的に放棄された状態だと思われるが，稼動時の使われ方は明らかにすることができなかった。炉の後背部にはテラス状の遺構（073）や大型羽口の出土状態（073，074）などから送風施設があったことが想定される。073や074から発見されたピットによって上屋の存在が推定されるが具体的な構造は明らかでない。操業回数については炉の改築，大型羽口の数などを参考に２ないし３回までは確認できる。

精錬炉の構造は大体次のようである。掘り方は径60cm前後の円形，炉本体は径20～50cmほどの円形ないし，長円形である。炉壁はスサ入りの粘土が基本で，山砂のうらごめがある。下部構造は特にみられないが場所の選定に気を使っているらしく（009，048），湿気抜きは意識されていたものと思われる。なお，鋳造関係の遺物を出す炉と鍛造剝片を出す炉を比べても基本的な構造に変化はないようである。精錬炉には製錬炉の炉壁が再利用されている例がある（009，023）また，製錬炉を切って精錬炉が作られているものもある（048）。これらのことから，精錬炉のあるものは製錬炉よりも時期的に新らしくなる可能性がある。

4．墨書土器について

花前遺跡群から出土した墨書土器（朱書・ヘラ書き・線刻も含む。）を再整理した結果，139点の資料を確認した。これを遺跡・遺構ごとにまとめたものが以下の表である。この表の作成にあたっては既報告分の資料もすべて再確認したため，報告時における資料数より，多少増加している。

これを概観すると，遺跡群全体としては文字が書かれたものが極めて少なく，記号を書いたものが殆どである。また文字を書いたと思われるものの中でも，判読し難い資料が多く，花前遺跡群で主体となる時期の資料は記号が書かれたものが中心となり，また特徴といえる。

次に遺跡ごとの墨書等を見ると，花前Ⅰ遺跡では76点，Ⅱ－1遺跡33点，Ⅱ－2遺跡30点となり，花前Ⅰ遺跡での出土数が圧倒的に多い。また花前Ⅰ遺跡では「◎」を主体とし，花前Ⅱ－1遺跡では「☆」，花前Ⅱ－2では多種にわたる文字・記号が認められ，各遺跡で明瞭な違いが出ている。これらをさらに，花前編年に従って，時期を明らかにし得る資料をもとにして検討を加えることにする。

花前ⅠではⅥ期に出現する墨書・朱書土器が最も古く，046・058の資料を代表とする。ここではすべて「◎」か「○」およびこれらの変形したものであり，土師器には墨書，須恵器には朱書で表記することを原則としており，この原則を逸脱するものは，058住居跡の須恵器に墨書するもの2例だけである。

次の段階であるⅦ期では011・024・037・039・040・047・057の資料を提示できる。やはり前段階同様に「◎」を基本とするが，011・040・057の資料の中に各1点ずつ「☆」が書かれる。Ⅶ期では須恵器そのものが減少するために朱書される須恵器は037・057出土の2点だけである。しかしながらⅥ期に見られた朱・墨の使い分けは行なわれていたと言っても良いであろう。時期を確定し得る墨書等はこのⅦ期で終わる。

花前Ⅱ－1では墨書・朱書に線刻・ヘラ書きの資料が加わる。

Ⅰ期では019出土の須恵器に線刻が認められる。またⅡ期に相当する013・031・032の一部の資料にも線刻が認められる。

Ⅲ期において001出土の墨書資料1点が出現し，また線刻も008に存在する。Ⅳ期にも線刻の資料が1点認められる。

以上のⅠ～Ⅳ期までは，須恵器に線刻されたものが中心で，墨書は僅かに1点である。

Ⅵ期では017の資料を提示し得るが，花前Ⅰ遺跡の同時期のものに比べて類例は少なく，須恵器に記入した朱書の「◎」が1例である。また007出土例もこの時期のものと考えられ，出土数こそ少ないが，朱書「◎」が中心になると考えられる。

Ⅶ期は資料の最も多い時期で，006・015・013・031・032が相当する。主体は「☆」であるが，この記号を付した墨書土師器7例，線刻による土師器1例，内黒の土師器1例，須恵器7例と

なり，朱書のものは認められない。また花前Ⅰ遺跡で多く見られた「◎」もⅡ－1遺跡のこの段階では1点もないのが特徴的である。この他には006の須恵器甕底部に「月」の文字を記入した1例があるが，これに関しては焼成前によるものか，焼成後によるものか判断が難しい。しかし花前遺跡群で多く出土する字体などと比較すると達筆であり，他の墨書，朱書，線刻と同一視できず，ここでは一応，焼成前のヘラ書きとして扱う。

続くⅨ期では022から1点墨書土師が出土しているが，墨書された部位の大半が欠損しており，どのような文字・記号が書かれていたか不明である。

このように花前Ⅱ－1遺跡では8世紀から9世紀前半までは須恵器に記号を線刻することに始まり，Ⅵ期以降の9世紀後半から「◎」と「☆」の墨書，朱書，線刻が中心となり，花前Ⅰで見られた土師器，須恵器の違いによる表記方法の統一性が乱れているようである。あえてこのような表記方法の原則を看取するならばⅥ期に見られた朱・墨の使い分けは，Ⅶ期において墨書の土師器と線刻の須恵器という形に変化しているといえるかもしれない。

花前Ⅱ－2遺跡では花前Ⅰ・Ⅱ－1よりもさらに複雑な様相を示している。

墨書等の土器が出現するのはⅤ期からで，003と056の資料がある。056の資料は「☆」の墨書と「キ」の線刻と思われるものだが，墨書土器は当該期の土器群には見られない器形で，Ⅵ期以降に普遍化する器形であり，線刻の資料も底部調整の際にできる擦痕の可能性がある。003では「○」の墨書と「◎」を朱書した須恵器が各1点ある。この「○」墨書須恵器底部には判読不能な二文字がある。あえて読むならば「官取」であろうか。

Ⅵ期の資料としては018・030の出土土器があげられる。墨書で明瞭なものは・「艹」・「月」と文字をかいた018の資料がある。018の資料（第109図4，図版62－3）の底部に書かれた文字は「畠」と読みとれるかもしれない。朱書は「艹」があり，須恵器に書かれている。線刻は「キ」・「艹」・「メ」がある。ここにおいても朱・墨の使い分けがあるように見受けられる。

Ⅶ期では035・042・062の資料があり，すべて墨書となる。記載された記号は「◎」1点と，「𠂉」2点がある。後者の記号はグリッド出土の資料も含めてⅡ－1遺跡の中で最も量の多いものであり，また他の花前Ⅰ・Ⅱ－1遺跡では類例のない資料である。

Ⅷ期以降，墨書等の資料は減少する。Ⅷ期では005の線刻の資料1点がある。Ⅸ期では墨書と線刻が各1点出土しており，前者は「九」，後者は「成」の文字を書いている。

このように花前Ⅱ－2遺跡では文字を記した資料が多いという点で特徴的である。

以上，花前遺跡群に見られる墨書等を時期ごとに検討した結果，次のような点を指摘できる。

まず，須恵器に見られる線刻は花前Ⅰ期から見られる。しかし墨書との関係を明確に有し，墨書と同じレベルで把握できるものはⅦ期の「☆」だけである。また墨書の出現もⅢ期から認められるが，「☆」と同様に遺跡群全体にわたって何らかの関係をもつものはⅥ・Ⅶ期に見られる「◎」・「○」・「☆」であり，朱書にも同じことがいえるであろう。

このV期以降の普遍的な記号である「◎」・「○」・「☆」は，出土する地点の集中やばらつきこそあるが，すべての遺跡から出土しており，相互に関連していることが窺える。これに対して花前II－2で出土する墨書等の中にはこの遺跡以外では検出されない文字・記号(「𠂉」・「艹」・「月」・「九」・判読不可能な文字）があり，花前I・II－1遺跡出土の資料との関連性が認められないものである。この点から花前II－2の独自性も看取できる。

では，この遺跡相互の関連と独自性は何を意味するものであろうか。VI期以降の時期は花前遺跡群の製鉄に関する遺構・遺物が顕著に認められる段階である。この中で花前II－2だけは鉄の生産工程の第1段階としての製錬から始まっており，鉄及び鉄器生産の一元的な工程を追うことができる。しかし他の二遺跡では製錬に係わる遺構・遺物は認められない。墨書等から見た結果を，製鉄に係わる背景と結びつける事はあまりに短絡的であるかもしれないが，無関係とは言い難く，検討を要する課題である。

時期ごとに見た墨書土器の広がりには，花前遺跡群の集落内・集落間の交流や構成を解明する上で重要な問題を含んでおり，今後，他遺跡での墨書土器のあり方と比較・検討を加えていかなければならないであろう。

※出土地点は各遺跡での遺構番号を示す。

※※表記方法として線刻は焼成後，ヘラ書きは焼成前によるものとして統一している。

※※※総数は個体数を示し，器種に示した合計数と一致するが，表記部位の数値は1個体に2ヶ所以上の記入がある資料も存在するため，総数よりも数値が大きくなるものもある。

花前Ⅰ遺跡墨書土器一覧表

出土地点	文字・記号	表記方法	区分	総数	器種				表記部位				備考
					坏	鉢	皿	その他	体内	体外	底内	底外	
011	☆	墨書	土師	1		1				1			
〃	○	墨書	土師	2	2					2			
〃	不明	墨書	土師	1	1					1			
〃	不明	線刻	須恵	1	1					1			時期の異なる流れ込みの資料
024	◎	墨書	土師	2	2					2			
028	◎?	墨書	土師	1	1					1			
037	□	墨書	土師	1	1					1			
〃	◎	墨書	土師	2	1		1		1	1			
〃	○?	墨書	土師	1	1					1			
〃	◎?	朱書	須恵	1	1					1			
039	◎	墨書	土師	1	1					1			
040	◎	墨書	土師	3	3					3			
〃	◎	墨書	土師(内黒)	2	2					2			
〃	⊙	墨書	土師	1	1					1			
〃	☆	墨書	土師	1	1					1			
041	◎	墨書	土師	1	1					1			040からの流れ込みの資料と考えられる
046	○?	朱書	須恵	1	1							1	
047	◎	墨書	土師	2	2				2				
057	☆?	朱書	須恵	1	1			1	1				蓋の内面に記入
058	◎	墨書	土師	11	11					11			
〃	◎	墨書	土師(内黒)	2	2					2			
〃	◎	墨書	土師(内黒)	1			1			1			
〃	◎	墨書	須恵	2	2					2			
〃	◎	朱書	須恵	4	4					4			
〃	○?	朱書	須恵	3	3					3			小破片のため◎の可能性もある
1号掘立柱	◎	墨書	土師	1	1					1			
7号掘立柱	◎	朱書	須恵	1	1							1	
9号掘立柱	◎	墨書	土師	1	1					1			
〃	◎	朱書	須恵	1	1					1			
10号掘立柱	◎	朱書	須恵	1	1					1			
グリッド	◎	墨書	土師	7	7					7			
〃	◎	墨書	土師(内黒)	1	1					1			
〃	○	墨書	土師	1	1					1			
〃	○	墨書	土師(内黒)	1	1					1			
〃	◎	墨書	土師	2	2					2			
〃	☆?	墨書	土師	1	1					1			
〃	不明	墨書	土師	1	1					1			「阝」か?

出土地点	文字・記号	表記方法	区分	総数	器種				表記部位				備考
					坏	鉢	Ⅲ	その他	体内	体外	底内	底外	
グリッド	市	墨書	土師	1	1							1	
〃	⊙	墨書	土師	1	1					1			
〃	◎	朱書	須恵	3	3					3			
〃	不明	朱書	須恵	1	1					1			
〃	不明	朱書	須恵	2				2	2				蓋の内面に記入
計				76									

花前II－1遺跡墨書土器一覧表

出土地点	文字・記号	表記方法	区分	総数	器種				表記部位				備考
					坏	鉢	皿	その他	体内	体外	底内	底外	
001	巳	墨書	土師	1	1							1	
003	木	線刻	須恵	1	1							1	
004	十	ヘラ書き	須恵	1				1		1			甑の胴部に記入
006	☆	墨書	土師	3	3					3			
	不明	墨書	土師	2	2					1		1	
	月	ヘラ書き	須恵	1				1				1	甕の底部に記入
007	◎?	朱書	須恵	1	1							1	時期の異なる流れ込みの資料
008	井	線刻	須恵	1	1				1				
015	☆	線刻	須恵	2	2					2			
017	◎	朱書	須恵	1	1					1			
019	米	線刻	須恵	1	1						1		
〃	十	線刻	須恵	1	1							1	
〃	井	線刻	須恵	1	1							1	
013・031・032	☆	墨書	土師	4	4					4			
〃	☆	線刻	土師	1	1				1				
〃	☆	線刻	土師(内黒)	1	1				1				
〃	不明	墨書	土師(内黒)	1	1					1			
〃	☆	線刻	須恵	5	5				4		1		
〃	不明	線刻	須恵	1	1				1				小破片のため不明
〃	井	線刻	須恵	1	1						1		
〃	十	ヘラ書き	須恵	1	1							1	
022	不明	墨書	土師(内黒)	1	1					1			
計				33									

花前II－2遺跡墨書土器一覧表

出土地点	文字・記号	表記方法	区分	総数	器種				表記部位				備考
					坏	鉢	皿	その他	体内	体外	底内	底外	
003	○・□□	墨書	須恵	1	1					1		1	底部には2文字記入
〃	◎	朱書	須恵	1	1					1			
〃	キ	線刻	須恵	1	1							1	
〃	卄	線刻	土師(内黒)	1	1				1				
005	×	線刻	土師	1	1						1		
009	九	墨書	土師	1	1					1			
014	成	線刻	土師(内黒)	1	1						1		
018	□・×	墨書 線刻	須恵	1	1						1	1	墨書は「畠」か？
030	卄	朱書	須恵	2	2					1		3	一個体は体部と底部に記入
〃	キ	線刻	須恵	2	2							2	
〃	卄	線刻	須恵	1	1					1			
〃	月	墨書	土師	1			1					1	
〃	卄	墨書	土師	1	1					1			
〃	不明	墨書	土師	5	5					5			
035	𠂉	墨書	土師	1	1					1			
〃	不明	墨書	土師	1	1					1			
042	◎	墨書	土師	1	1					1			
056	☆？	墨書	土師	1	1					1			主体となる時期と異なる
〃	キ	線刻？	須恵	1	1							1	底部調整の時の擦痕の可能性もある
062	𠂉？	墨書	土師	1	1					1			
グリッド	𠂉？	墨書	土師	3	3					3			
〃	不明	墨書	土師	3	3					3			
計				32									

第5節　江戸時代以降

この時代に属する遺構は花前II－2遺跡本線部で検出した炭窯9基だけである。しかしながら炭窯の年代観について確実に決定し得るものは037と041だけであり，他の炭窯については形態や構築方法の類似点から判断して，当該期の遺構とした。

また遺物では伊万里磁器を中心として良好な資料が出土しているが，遺構に伴なったものは少なく，今後に問題を残している。

遺物から得られる年代観の上限は17世紀後半であり，それ以降明治時代まで確実に年代を追うことができる。検出した炭窯についてもこの間に操業されたものと考えて良いのではないだろうか。

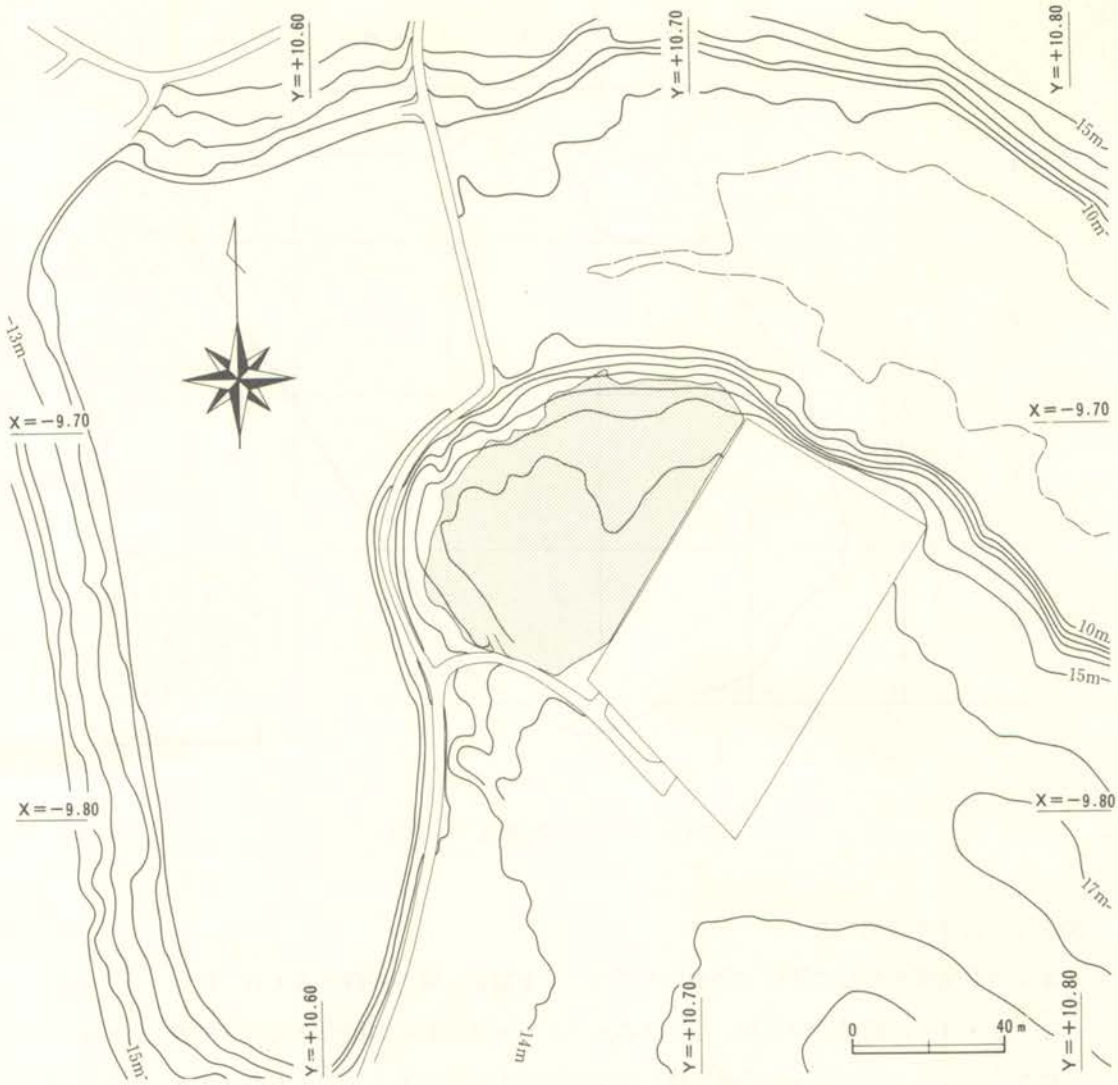
花前II－1遺跡では代官屋敷跡と考えられる遺構が検出されている[(1)]。そこでの出土遺物から考えられる年代は，今回の報告資料と矛盾しない。花前II－2遺跡本線部と花前II－1遺跡は同一の台地上に乗る遺跡であり，代官屋敷跡の中心部から炭窯までの距離は，直線にして約300mである。また花前II－2遺跡では，炭窯の他には当該期の遺構は検出しておらず，これらの操業について密接な関係を示すと考えられる遺構は代官屋敷以外には，現在までのところ無い。こうした場合，代官屋敷と関係する遺構は花前II－1・II－2両遺跡にまたがって，約20,000㎡を占めることになる。

当時の屋敷として構成される遺構や面積については，文献史料の調査も加えて検討を要する問題である。

註

(1)　鈴木定明　1982　「常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」　㈶千葉県文化財センター

第III篇　矢船遺跡（217—012）

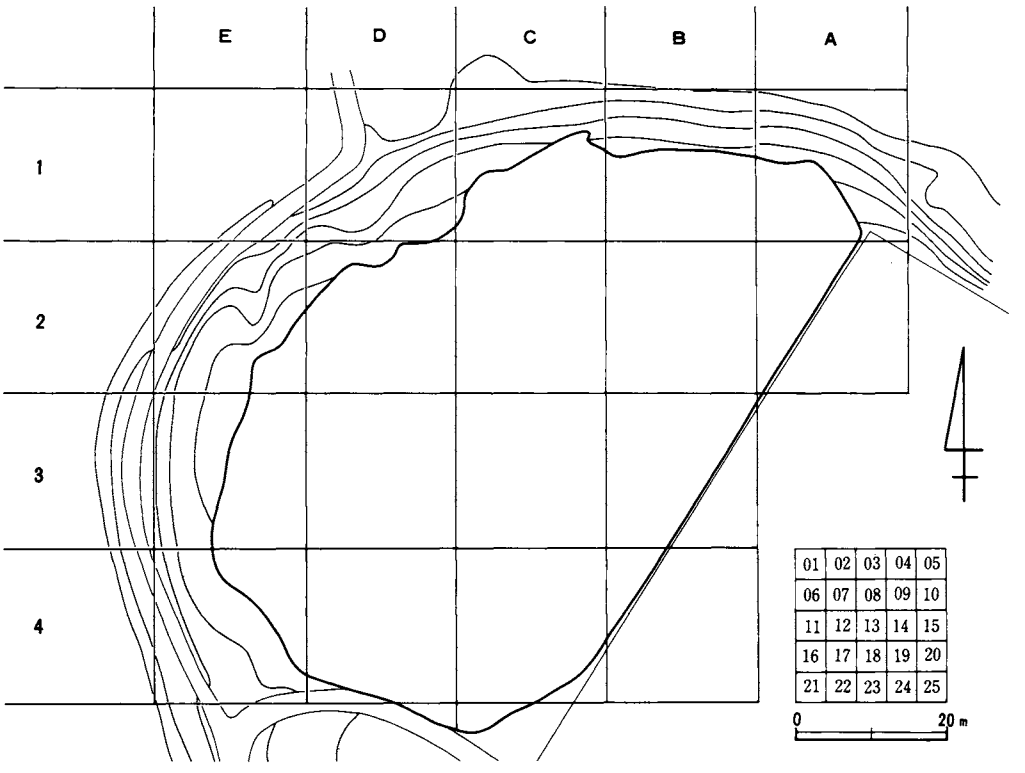


第217図　矢船遺跡と周辺の地形（1/2000）

矢船遺跡は，柏市船戸字矢船1519他に所在する。

遺跡は通常，下総台地と呼ばれている沖積台地の上にあって標高およそ15～16mで，周辺の低地（水田）との比高は５～6.5m程である。地形的にみると，利根川から西へ入りこむ谷の最も奥まった所に位置している。この谷は途中からさらにいくつかの小さな谷に分かれ，その１つが遺跡の南東から北側を通って南西方向へ回りこんでいる（第217図参照）。前篇で報告した花前Ⅱ－１遺跡，同Ⅱ－２遺跡や花前Ⅰ遺跡は同じ谷に面して立地している。特に花前Ⅱ－１遺跡は，北東方向に直線距離でわずかに400mしか離れていない。

発掘調査は，台地平担部の北西側3400㎡についておこなった。期間は，1979７月１日～９月



第218図　グリッド配置図（1/1000）

30日までの3ケ月間である。

まず公共座標をもとに20m×20mの大グリッドを設定し東から西へA・B・C…，北から南へ1・2・3…の記号を付けた。従って各大グリッドはこれらの組合せによって表示されることになる（なお，グリッドと公共座標の関係は次のとおりである。南北方向：A列とB列の境がY＝＋10.70のライン，東西方向：1列と2列の境がX＝－9.70のライン）。さらにこの大グリッドを4m×4mの小グリッド25個に分割し01から25までの番号を付した（第218図参照）。

発掘は，表土剝ぎ終了後，縄文時代以降の遺構の確認作業から始められた。同時に塚と考えられる墳丘の調査が進められた。7月の下旬からはこれらと併行して，旧石器時代の遺構・遺物の有無を確認するために2m幅のトレンチを2m間かくで設定し，発掘区域の北西側から調査を開始した。旧石器時代については遺物のまとまりが確認された段階で，順次トレンチを拡張し調査を続けた。さらに8月の中旬からは，古墳時代の住居跡の調査も開始された。調査はおおむね，9月の末まで続けられ，旧石器時代のブロック11ケ所，古墳時代の住居跡2軒，土坑1基等の成果をあげた。なお当初「塚」と考えられていた墳丘は調査の結果ビニールごみなどが発見され，ごく最近の単なる盛り土であることがわかったため本報告では除外した。

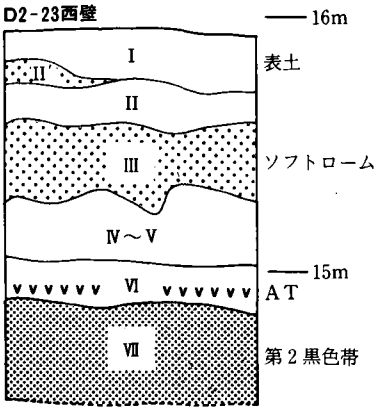
第２章　遺構と遺物

第１節　旧石器時代

１．層位と文化層

①　自然層

自然層は武蔵野ローム層上面に至るまで９枚に分層し得た。層厚は表土より武蔵野ローム層上面まで，約２ｍとなっている。



第219図　標準層序

（第Ｉ層）表土層，暗褐色土層。粘性，しまりともなく空隙が大きい。厚さ約50cm。

（第II'層）いわゆる新期テフラ層。黄褐色で粘性がある。厚さ約20～30cm。遺構内では局所的に存在する。

（第II層）ソフトロームへ至る漸移層。暗褐色土層であり，粘性，しまりとも上層に比べ強くなる。縄文土器の包含層である。厚さ約50cm。

（第III層）いわゆるソフトローム。黄褐色を呈し空隙が大きい。

第IV層以下がいわゆるハードローム層にあたる。調査時には，Ｖ層の第Ｉ黒色帯の存在が不明瞭であり，IV層とＶ層との分層はできず，結果としてIV－Ｖ層という表記にせざるを得なかった。

（第IV～Ｖ層）上記の理由で一括して一枚の層と暫定的に捉えておく。厚さ約50cm。褐色硬質ローム。

（第VI層）ＡＴ（姶良Ｔｎ火山灰）を含む黄褐色硬質ローム。厚さ約20cm。

（第VII層）武蔵野台地の第II黒色帯に対比される。粘性があり，色調は暗褐色。厚さ約70～80cm。

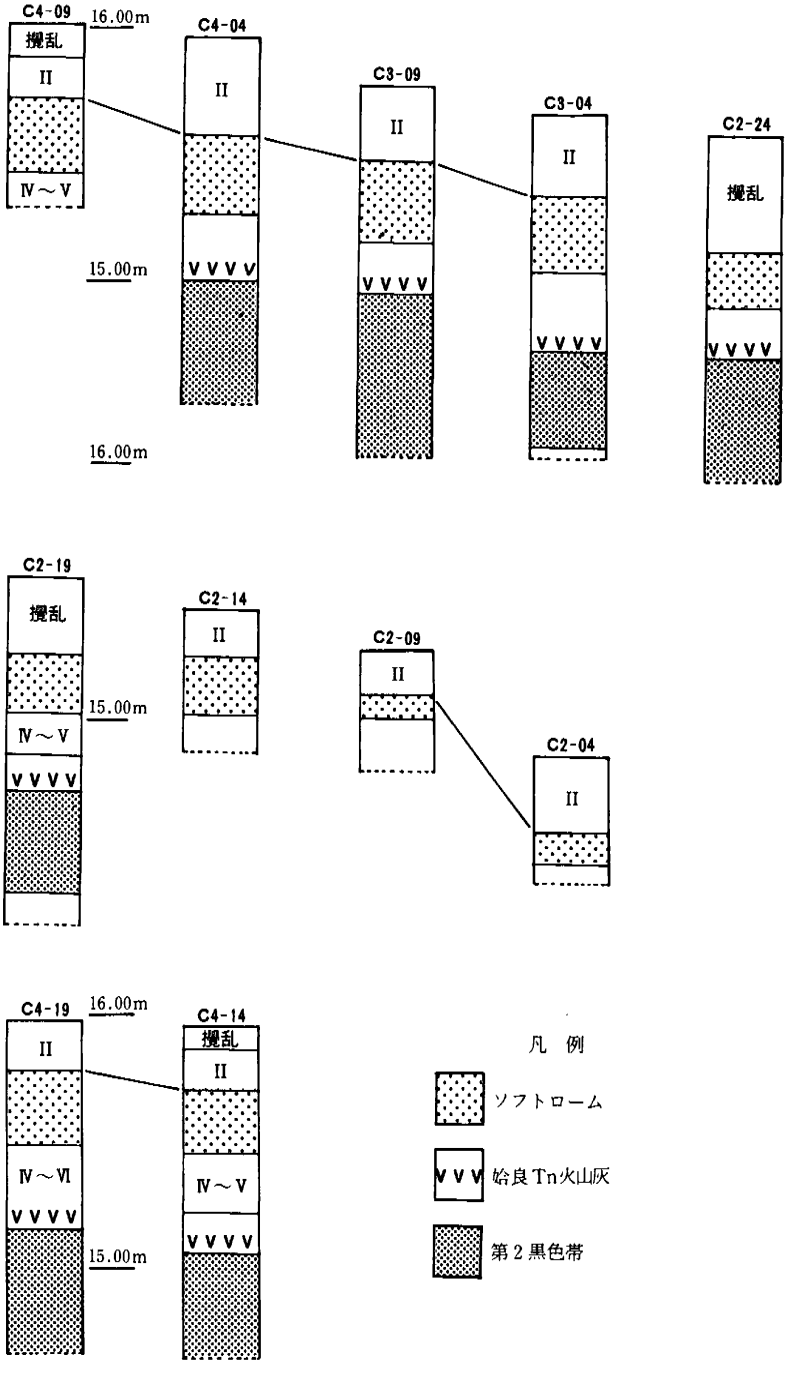
VII層に関しては上下二枚に分層することはできなかった。

（第VIII層）褐色硬質ローム。粘性がある。立川ローム層最下層としてとらえられている。

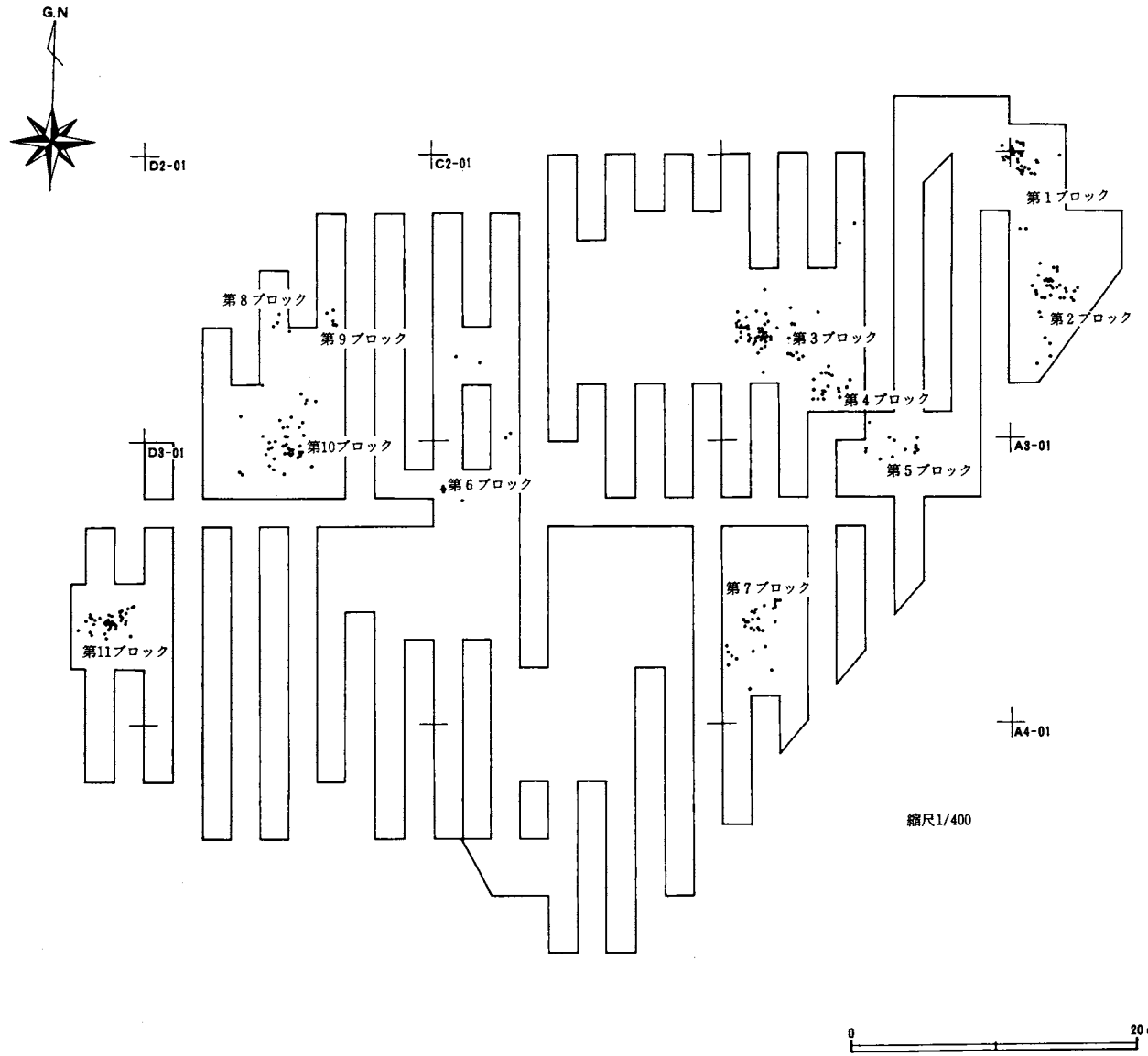
本遺跡の自然層は以上のように分層されるが，VII層が間層帯をはさみ上下二枚に区分できない点を除けば，下総台地西北部通有の自然層のあり方と言えそうである。

②　文化層

本遺跡では以下のとおり，４つの文化層に区分される。自然層としては，II層下部，III層，



第220図　遺跡土層断面図



第221図　旧石器時代ブロック配置図

IV—V層，VII層よりそれぞれ出土している。

（第1文化層）細身の木葉形尖頭器に代表される段階。ソフトロームに至る漸移層（II層）より出土している。単独出土であり，ブロックは形成しない。

（第2文化層）木葉形尖頭器に代表される段階。ソフトローム層中に包含される一群である。第11ブロックがこれに該当する。

（第3文化層）切り出し形のナイフに代表され，遺構として礫群を伴う段階。ソフトローム層とハードローム層の境界付近より出土する傾向にある。武蔵野台地のIV層下段階に対比される。第1～7，10ブロックが該当する。

（第4文化層）平担打面を有する大型の縦長剝片を素材とするナイフ形石器に代表される段階。VII層中より出土する傾向にある。第8，9ブロックが該当する。

2．ブロックと出土遺物

本遺跡では，ブロックより280点の遺物が出土した。内訳は石器164点，礫116点となっている。

ブロックは11カ所で検出された。その内訳は礫群としての性格を有するブロックが6カ所，石器群のまとまりが5カ所である。

第1表　第1ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	黒曜石		安山岩		砂岩		珪質頁岩		頁岩		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	1	50									1	14.3
角錐状石器												
尖頭器												
石錐												
掻器					1	100					1	14.3
削器												
ピエス・エスキーユ												
彫刻刀形石器												
二次加工ある剝片												
使用痕ある剝片												
礫器												
石斧												
敲石												
台石												
磨石												
剝片	1	50	1	100			2	100	1	100	5	71.4
砕片												
石核												
削片												
小計	2	100	1	100	1	100	2	100	1	100	7	100
礫・礫片			6	24	19	76					25	100
総計	2		7		20		2		1		32	

第1ブロック

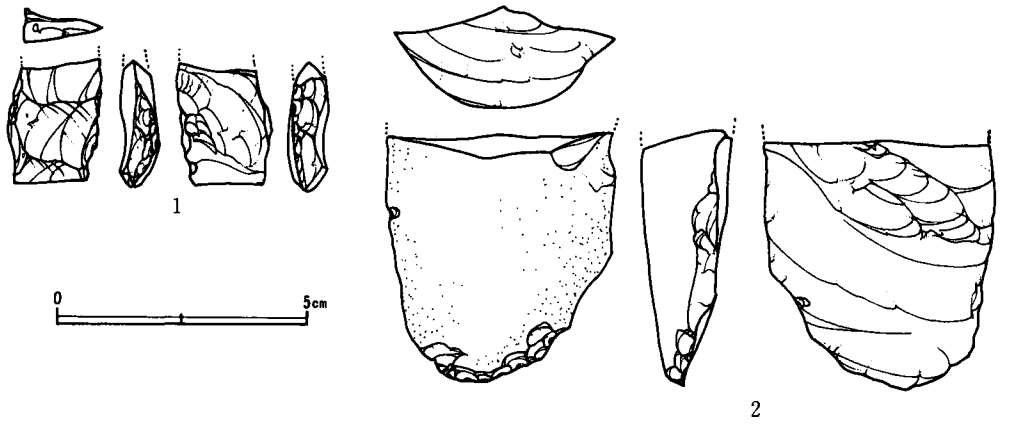
（出土状況）

ソフトローム上部よりハードローム上部（IV～V層）に至る層準より出土しているが，特に両者の境界付近に集中している。レベル差は，約50cm。斜面部に位置しているが遺物はほぼ水平に堆積する傾向にある。平面分布は長径約4m，短径約2.2mの範囲にあり，良くまとまっており，疎密の差は識別し得ない。

（出土遺物）

総計32点出土している。内訳は石器群7点，破砕礫25点となっており，石器群はさらにナイフ形石器1点，掻器1点，剝片5点という器種構成となっている。

礫はいずれも受熱により表面が赤化



第222図　第１ブロック出土遺物実測図

し，また表面が剝落しておりブロック内に飛散している。

１は二側縁加工のナイフ形石器である。横長剝片を素材としており，二側縁の刃つぶし加工は急角度でありほぼ直角に近い。先端部が欠損している。石材は夾雑物を若干含む漆黒色の黒曜石である。

２は幅広な大型剝片を素材とした掻器である。基部が欠損しており，剝片の先端部が部分的に二次加工されている。石材は砂岩である。

（技術的特徴）

全体的に石器群の数量が少なく，技術的側面は検討しがたい。

ただし，ナイフ形石器に代表されるように平坦な打面を有し，先端部が主要剝離面側に内湾する横長剝片を生産する技術基盤が存在したことは確実である。

（母岩別資料・接合資料とブロック）

石材は黒曜石，安山岩，砂岩，珪質頁岩，頁岩の５種をかぞえる。石器群については石材のバラつきがあり，数量的に偏りはない。一方礫群の構成礫については砂岩，安山岩の二種の石材がみられ，特に砂岩が数量的に優位である。母岩別資料は全体として11母岩に識別し得た。他のブロックとの関連性はない。

接合資料は，６例あるが，いずれも礫群中の構成礫どうしの接合例であり，ブロック内で良くまとまり，他のブロックとの接合関係はない。

（まとめ）

礫群である。礫群の構成礫はいずれも加熱され変成をうけ，いずれも破砕礫となっている。

また石器群は礫に比して極めて少なく，しかも破損例が多く，母岩別資料が多岐にわたる。以上の点から本ブロックは，廃棄の様相が色濃い傾向にあるものと言えよう。

第2表　第1ブロック母岩別資料石器組成表

器種 / 母岩	ナイフ形石器	角錐状石器	尖頭器	石錐	掻器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剝片	使用痕ある剝片	礫器	石斧	敲石	剝片	砕片	石核	礫	計
黒曜石 1	1																1
2													1				1
安山岩 1																1	1
2																5	5
3													1				1
砂岩 1					1											9	10
2																3	3
3																3	3
4																4	4
珪質頁岩1													2				2
頁岩 1													1				1

第3表　第1ブロック接合資料一覧表

接合資料	内訳	内容	数量
1	破砕礫片	A 1－21－6＋A 1－21－12＋A 2－01－ 9	3
2	破砕礫片	A 2－01－10＋A 2－01－ 4	2
3	破砕礫片	A 1－21－ 4 ＋A 1－21－ 8 ＋A 1－21－ 5	3
4	破砕礫片	A 2－01－15＋A 1－21－13＋A 2－01－17＋A 2－01－ 7	4
5	破砕礫片	B 2－05－ 3 ＋A 2－01－ 2 ＋B 2－05－ 5 ＋A 1－21－ 2 ＋A 1－21－11	5
6	破砕礫片	A－ 1－21－ 1 ＋A－ 2－ 1－11	2

第4表　第1ブロック出土石器計測表

No	遺物番号	器種	大きさ (cm) 長さ	幅	厚さ	刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	打面の形状	欠損の有無	欠損部位	使用痕の有無	使用痕	石材	その他
1	A-2-01-12	掻器	4.9	4.7	1.7	－	43.4	222－2	先端	－	有	基部	無	－	砂岩	
2	B-2-05.4	ナイフ形石器	2.4	1.8	0.7	－	4.0	222－1	一側縁	－	有	先端	－	－	黒曜石	

第2ブロック

（出土状況）

ソフトローム上部よりハードローム上部に至るまで出土しているが，最も濃密な層準はハードローム上部である。最大レベル差は約50cmであるが，遺物集中部分では約25cmとあまりない。第1ブロックと同様に斜面部に位置しているが，垂直分布はほぼ水平である。

平面分布は長径約6.9m，短径約3.5mとなっており北方に向かうにしたがって遺物量が漸増する。

（出土遺物）

総計32点出土している。内訳は石器群が11点，破砕礫が21点となっている。

第5表　第2ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	黒曜石		安山岩		頁岩		珪質頁岩		チャート		砂岩		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器														
角錐状石器														
尖頭器														
石錐														
掻器														
削器														
ピエス・エスキーユ														
彫刻刀形石器														
二次加工ある剝片									1	25			1	9.1
使用痕ある剝片														
礫器														
石斧														
敲石														
台石														
磨石														
剝片	1	100	2	100	2	100	2	100	3	75			10	90.9
砕片														
石核														
削片														
小計	1	100	2	100	2	100	2	100	4	100	0		11	100
礫・礫片			12	57.1					7	33.3	2	9.5	21	100
総計	1		14		2		2		11		2		32	

石器群は二次加工ある剝片1点と剝片10点からなる。二次加工ある剝片は利器の断片かと思われるが原形を復元するには至らない資料である。

剝片はいずれも平坦な打面で，背面側に複数の加撃方向の剝離面を有する横長剝片である。

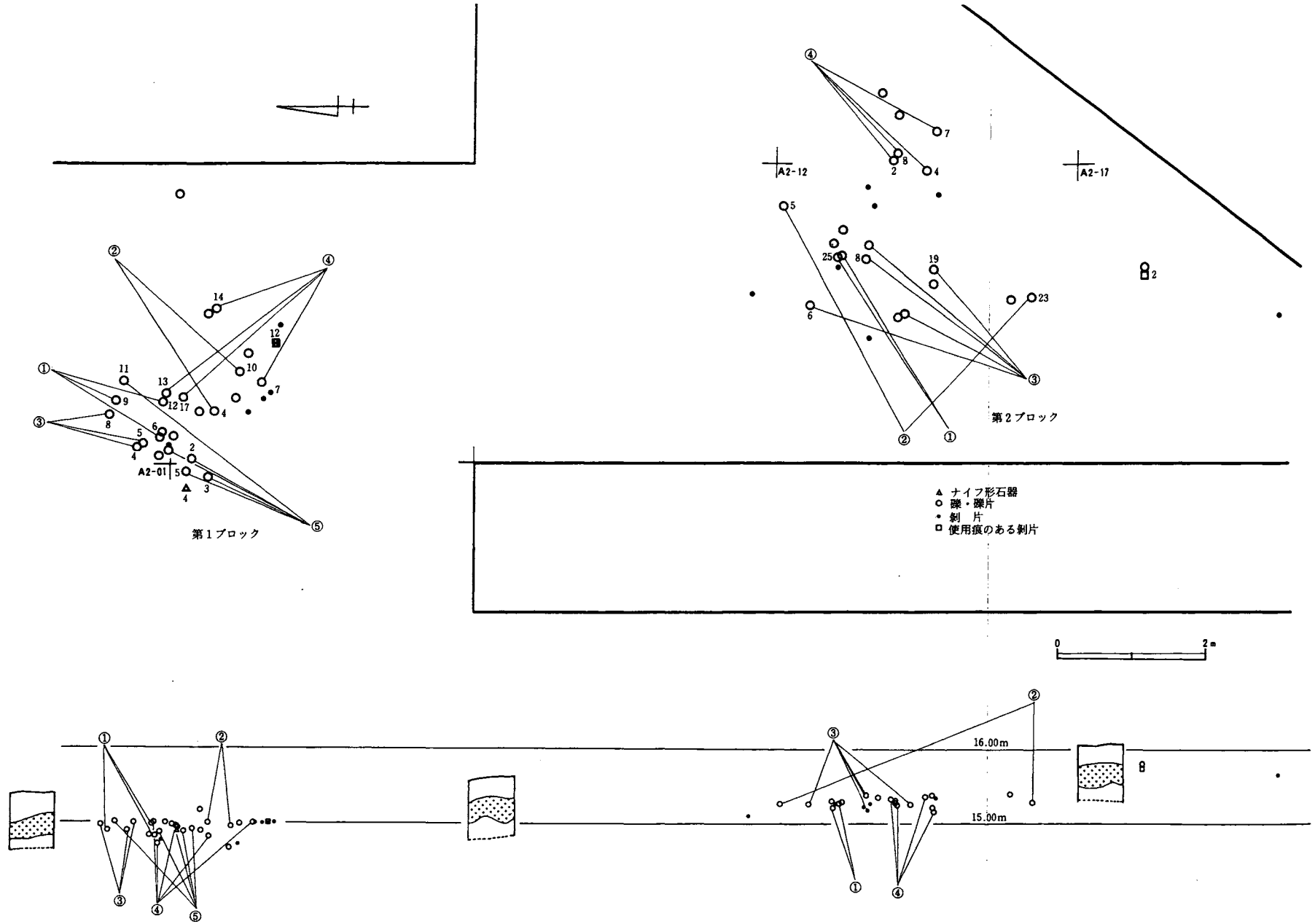
破砕礫は受熱により，いずれも赤化し，表面がクレータ状に剝落している。

（技術的特徴）

第1ブロックと同様に石器群の数量的な保証がなく評価しがたい。ただし，横長剝片などからは第1ブロックと技術的な共通性が看取される。

第6表　第2ブロック母岩別資料石器組成表

器種 / 母岩	ナイフ形石器	角錐状石器	尖頭器	石錐	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剝片	使用痕ある剝片	礫器	石斧	敲石	剝片	砕片	石核	礫	計
黒曜石 1													1				1
安山岩 1																5	5
2																2	2
3																4	4
4																1	1
5													1				1
6													1				1
頁岩 1													1				1
2													1				1
珪質頁岩1													1				1
2													1				1
チャート1									1								1
2													1				1
3													2			7	9
砂岩 1																1	1
2																1	1



第223図　第1・2ブロック遺物出土状況図

第7表　第2ブロック接合資料一覧表

接合資料	内　　訳	内　　容	数量
1	破砕礫片	A 2－11－ 8 ＋A 2－11－25	3
2	破砕礫片	A 2－11－ 5 ＋A 2－11－ 9 ＋A 2－11－23	3
3	破砕礫片	A 2－11－ 6 ＋A 2－11－12＋A 2－11－13＋A 2－11－19＋A 2－11－24	5
4	破砕礫片	A 2－11－ 4 ＋A 2－12－ 2－ 2 ＋A 2－12－ 7 ＋A 2－12－ 8	4
5	剝片の分断資料	A 2－11－ 7 （3点）	3

（母岩別資料・接合資料とブロック）

石材は黒曜石，安山岩，頁岩，珪質頁岩，チャート，砂岩の6種となっている。母岩別資料は16種あるが，特に器種ごとの偏りはない。

接合資料は5例ある。内訳は破砕礫片の接合資料4例，石器の欠損資料1例となっている。

（まとめ）

本ブロックの基本的性格は礫群である。構成礫はいずれも表面が赤化した破損礫であり，ブロック内で良く接合する。第1ブロックとの類縁関係は，母岩別資料や接合資料からは検証できなかったが，時期的には近接していることが想定される。

第8表　第3ブロック出土石器組成表

石材 ＼ 器種	黒曜石		安山岩		珪質頁岩		チャート		頁岩		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	3	9.7									3	5.3
角錐状石器												
尖頭器												
石錐												
掻器												
削器					1	5					1	1.8
ピエス・エスキーユ												
彫刻刀形石器												
二次加工ある剝片					1	5					1	1.8
使用痕ある剝片			1	25			1	100			2	3.5
礫器												
石斧												
敲石												
台石												
磨石												
剝片	4	12.9	3	75	5	25					12	21.1
砕片	24	77.4			13	65			1	100	38	66.7
石核												
削片												
小計	31	100	4	100	20	100	1	100	1	100	57	100
礫・礫片												
総計	31		4		20		1		1		57	

第3ブロック

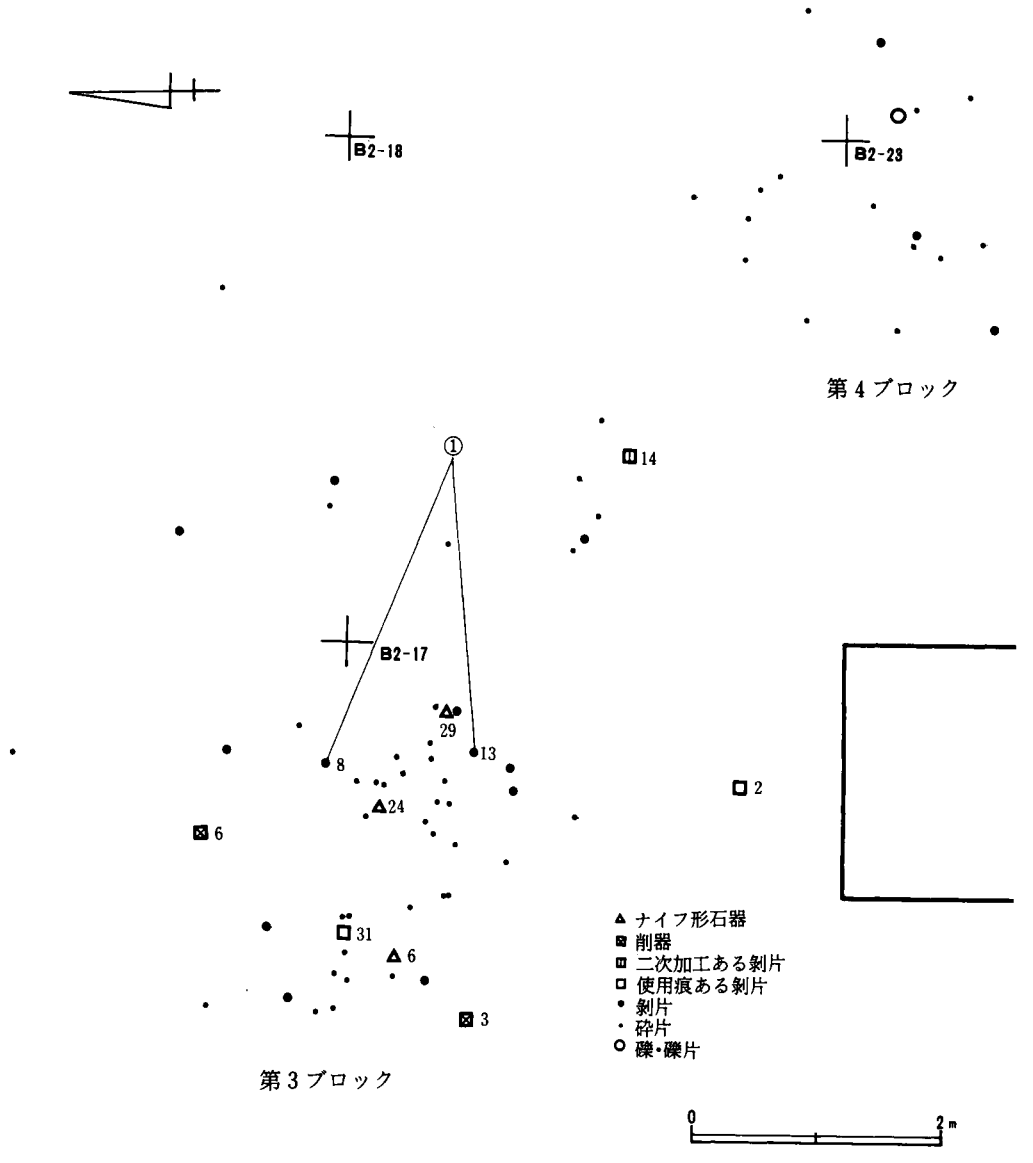
（出土状況）

ソフトローム上部よりV層に至るまで出土しているが，最も集中している層位はハードローム上部（IV～V層）である。最大レベル差約70cm，集中部分では約30cmとなっている。全体としてほぼ水平堆積を示す。

平面形は長径約6m，短径約5.5mとなっており西半部に集中部分が存在する。器種ごとの分布に偏りはみられない。

（出土遺物）

総計57点出土した。石器組成はナイフ形石器3点，削器1点，二次加工ある剝片1点，使用痕ある剝片2点，剝片12点，砕片38点となってい



第224図　第3・4ブロック遺物出土状況図

る。

1～3はナイフ形石器である。いずれも横長剝片を素材としており二側縁加工，切り出し形を呈する。

4は同様に横長剝片を素材とした削器である。下端部と一側縁に二次加工がほどこされている。

（技術的特徴）

石核がなく剝片生産技術については不明な点が多いが，ブロック内に残存する剝片は平坦な打面より求心的に加撃することによって得られた横長剝片によって構成されることが推察される。

石器調整の痕跡は調整剝片があることからその存在が肯定されよう。

（母岩別資料，接合資料とブロック）

石材は黒曜石，安山岩，珪質頁岩，チャート，頁岩の4種，母岩は7種をかぞえる。

母岩別資料は器種ごとの組成に偏りはあまりない。チャート製の使用痕ある剝片を除き，他の利器はいずれも剝片および砕片と共存している。したがって利器については，本ブロック内で製作された可能性が高い。

接合資料は一例ある。大型剝片の分断資料でありアクシデンタルな割れ方を呈している。

（まとめ）

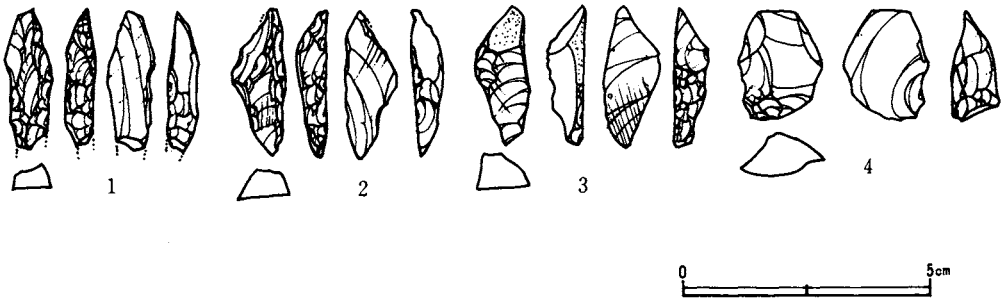
横長剝片を素材とした黒曜石製のナイフ形石器を主要な組成とした一群である。技術的側面については，利器の素材となり得るような大型剝片が存在せず，調整剝片（砕片）が多く存在することから石器調整の段階を強く反映したブロックと言えよう。時期的には第1，第2ブロックの礫群とはほぼ同時期であり，本ブロックを場の機能の違いとして捉えられ，礫群と一体化して考えることも可能である。

第9表　第3ブロック母岩別資料石器組成表

器種 / 母岩	ナイフ形石器	角錐状石器	尖頭器	石錐	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剝片	使用痕ある剝片	礫器	石斧	敲石	剝片	砕片	石核	礫	計
黒曜石 1	3												4	24			31
安山岩 1									1				3				4
珪質頁岩 1					1								2	6			9
2								1					3	6			10
3														1			1
チャート 1									1								1
頁岩 1														1			1

第10表　第3ブロック接合資料一覧表

接合資料	内訳	内容	数量
1	剝片の分断資料	B 2－11－ 8 ＋B 2－16－13	2



第225図　第３ブロック出土遺物実測図

第11表　第３ブロック出土石器計測表

No.	遺物番号	器種	大きさ（cm） 長さ	幅	厚さ	刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	打面の形状	欠損の有無	欠損部位	使用痕の有無	使用痕	石材	その他
1	B-2-16-24	ナイフ形石器	2.7	0.9	0.6	60°	1.4	225－1	二側縁	有	基部	無	－	－	黒曜石	
2	B-2-16-6	〃	2.8	1.2	0.7	50°	1.7	〃－3	〃	－	無	－	〃	－	〃	
3	B-2-16-29	〃	2.9	1.1	0.6	45°	1.7	〃－2	〃	－	〃	－	有	刃こぼれ	〃	
4	B-2-16-3	削器	2.2	0.8	0.8	－	2.4	〃－4	－	－	〃	－	無	－	珪質頁岩	
5	B-2-16-31	使用痕ある剝片	3.8	2.4	1.3	－	10.2	－	－	－	〃	－	有	刃こぼれ	安山岩	
6	B-2-16-2	〃	4.1	3.4	0.8	－	8.0	－	－	平坦	無	－	有	〃	チャート	

第12表　第４ブロック出土石器組成表

器種＼石材	珪質頁岩 数量	%	黒曜石 数量	%	花崗岩 数量	%	計 数量	%
ナイフ形石器								
角錐状石器								
尖頭器								
石錐								
掻器								
削器								
ピエス・エスキーユ								
彫刻刀形石器								
二次加工ある剝片								
使用痕ある剝片								
礫器								
石斧								
敲石								
台石								
磨石								
剝片	3	23.1					3	17.6
砕片	10	76.9	4	100			14	82.4
石核								
削片								
小計	13	100	4	100	0		17	100
礫・礫片					1	100	1	100
総計	13		4		1		18	

第４ブロック

（出土状況）

ソフトローム下半部に至るまで幅広く分布しているが，特に集中しているのはハードローム上部である。最大レベル差約60cm。

平面形は長径約３m，短径約2.2mとなっておりほぼ均一な分布密度を呈する。

（出土遺物）

総計18点出土した。内訳は礫１点，剝片３点，砕片14点となっている。

剝片・砕片はいずれも幅広な横長剝片によって構成されており，その面構成より平坦な打面から求心的に加撃され生産されたことを物語る。

礫は長さ8.2cm，幅4.8cm，厚さ2.3cm，重さ122.5ｇであり，特に敲打痕，摩耗痕は観察されなかった。

（技術的特徴）

前項で示したとおり横長剝片を生産した痕跡がうかがわれる。

第13表　第４ブロック母岩別資料石器組成表

器種 / 母岩	ナイフ形石器	角錐状石器	尖頭器	石錐	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剝片	使用痕ある剝片	礫器	石斧	敲石	剝片	砕片	石核	礫	計
珪質頁岩1														1			1
2													3	9			12
黒曜石 1														4			4
花崗岩 1																1	1

（母岩別資料，接合資料とブロック）

石材は珪質頁岩，黒曜石，花崗岩の３種，母岩別資料は４種をかぞえる。

珪質頁岩２は隣接する第３ブロックとの共通性があり，互いの同時性が推察される。接合資料はない。

（まとめ）

利器がなく，調整剝片が優占しており，剝片は少ない。石材としては珪質頁岩を主体としている点が注目される。珪質頁岩の母岩別資料は第３ブロックとの共通性が認識される。

第14表　第５ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	黒曜石		安山岩		頁岩		珪質頁岩		砂岩		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器							1	20			1	10
角錐状石器												
尖頭器												
石錐												
掻器												
削器							1	20			1	10
ピエス・エスキーユ												
彫刻刀形石器												
二次加工ある剝片												
使用痕ある剝片												
礫器												
石斧												
敲石												
台石												
磨石												
剝片			2	100	1	100	2	40			5	50
砕片	2	100					1	20			3	30
石核												
削片												
小計	2	100	2	100	1	100	5	100	0		10	100
礫・礫片									1	100	1	100
総計	2		2	1		5		1		11		

第５ブロック

（出土状況）

漸移層からハードローム層上部に至るまで広範に分布しているが，特にソフトローム層中より多く出土した。最大レベル差約１m。

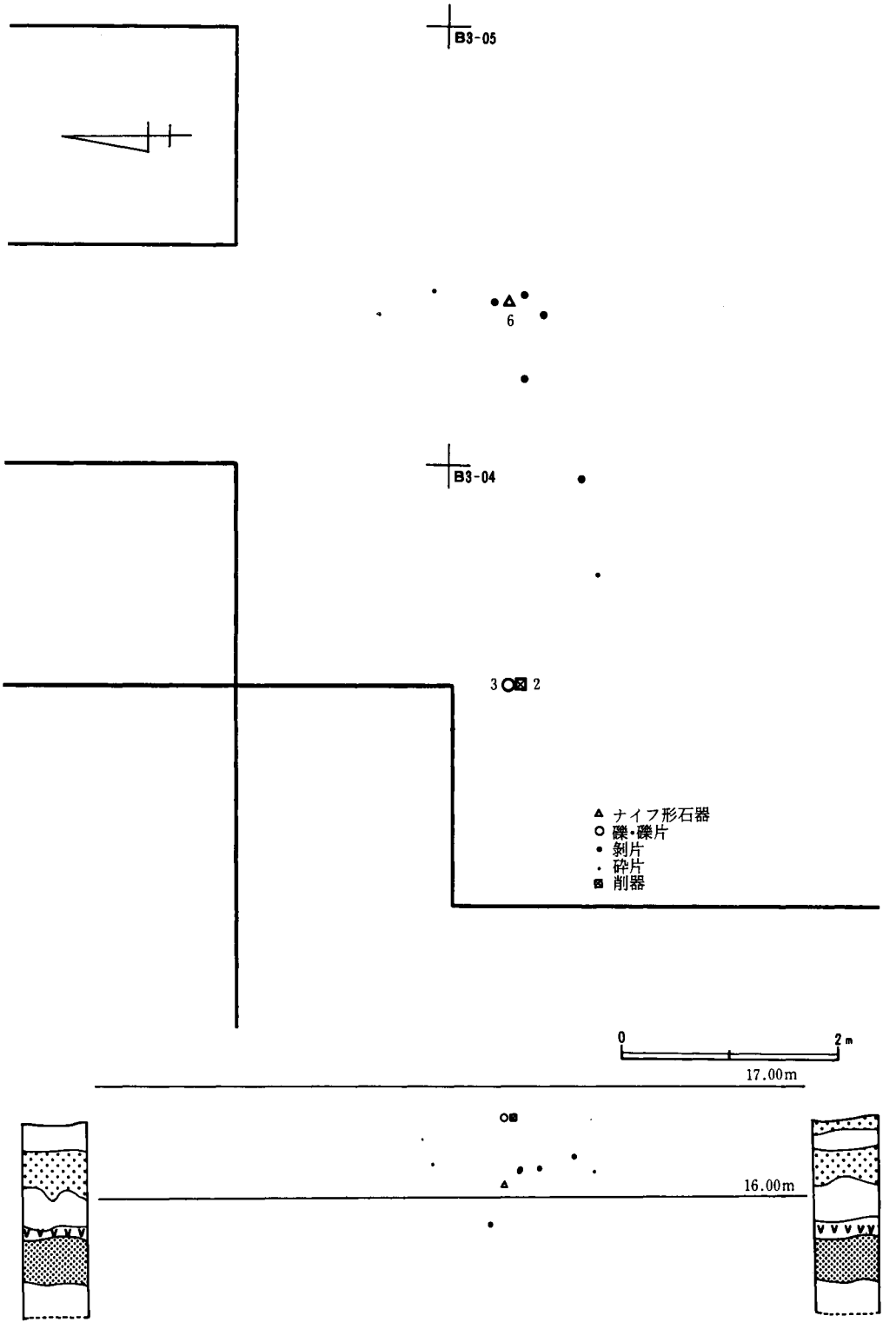
平面形は長径約3.5m，短径約1.4mであり東西方向に細長く分布している。

（出土遺物）

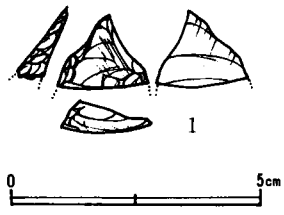
総計11点出土した。内訳は礫１点，石器群10点である。石器組成はナイフ形石器１点，削器１点，剝片５点，砕片３点となっている。

１はナイフ形石器である。幅広な剝片を素材となっているものと思われるが，先端部の破片のため詳細は不明である。

（母岩別資料，接合資料とブロック）



第226図　第5ブロック遺物出土状況図



第227図　第５ブロック出土遺物実測図

石材は黒曜石，安山岩，頁岩，珪質頁岩，砂岩の５種をかぞえ，数量に比して石材がヴァラエティに富む。母岩別資料については器種ごとの偏りは特にない。接合資料はない。

（まとめ）

数量が11点と極めて貧弱であり，内容的評価はなし得ない。

第15表　第５ブロック母岩別資料石器組成表

器種 / 母岩	ナイフ形石器	角錐状石器	尖頭器	石錐	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剝片	使用痕ある剝片	礫器	石斧	敲石	剝片	砕片	石核	礫	計
黒曜石 1														2			2
安山岩 1													2				2
頁岩 1													1				1
珪質頁岩1	1				1								2	1			5
砂岩 1																1	1

第16表　第５ブロック出土石器計測表

No.	遺物番号	器種	大きさ（cm） 長さ	幅	厚さ	刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	打面の形状	欠損の有無	欠損部位	使用痕の有無	使用痕	石材	その他
1	B-3-04-6	ナイフ形石器	1.5	1.8	0.6	—	0.9	227—1	一側辺？	—	有	基部	無	—	チャート	
2	B-3-03-2	削器	2.9	1.8	0.6	—	2.2	—	—	—	有	打面部	〃	—	珪質頁岩	

第17表　第６ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	安山岩 数量	%	不明 数量	%	計 数量	%
ナイフ形石器						
角錐状石器						
尖頭器						
石錐						
掻器						
削器						
ピエス・エスキーユ						
彫刻刀形石器						
二次加工ある剝片						
使用痕ある剝片						
磨石						
剝片						
砕片						
石核						
削片						
小計	0		0			
礫・礫片	1	20	4	80	5	100
総計	1		4		5	

第６ブロック

（出土状況）

ハードローム上部（IV～V層）よりレベル差がほとんどなく重なりあうように出土している。

（出土遺物）

礫片４点，礫１点，計５点出土したにとどまる。礫片はいずれも熱せられ破砕している。完形礫は片面にスス状の黒色付着物が観察される。

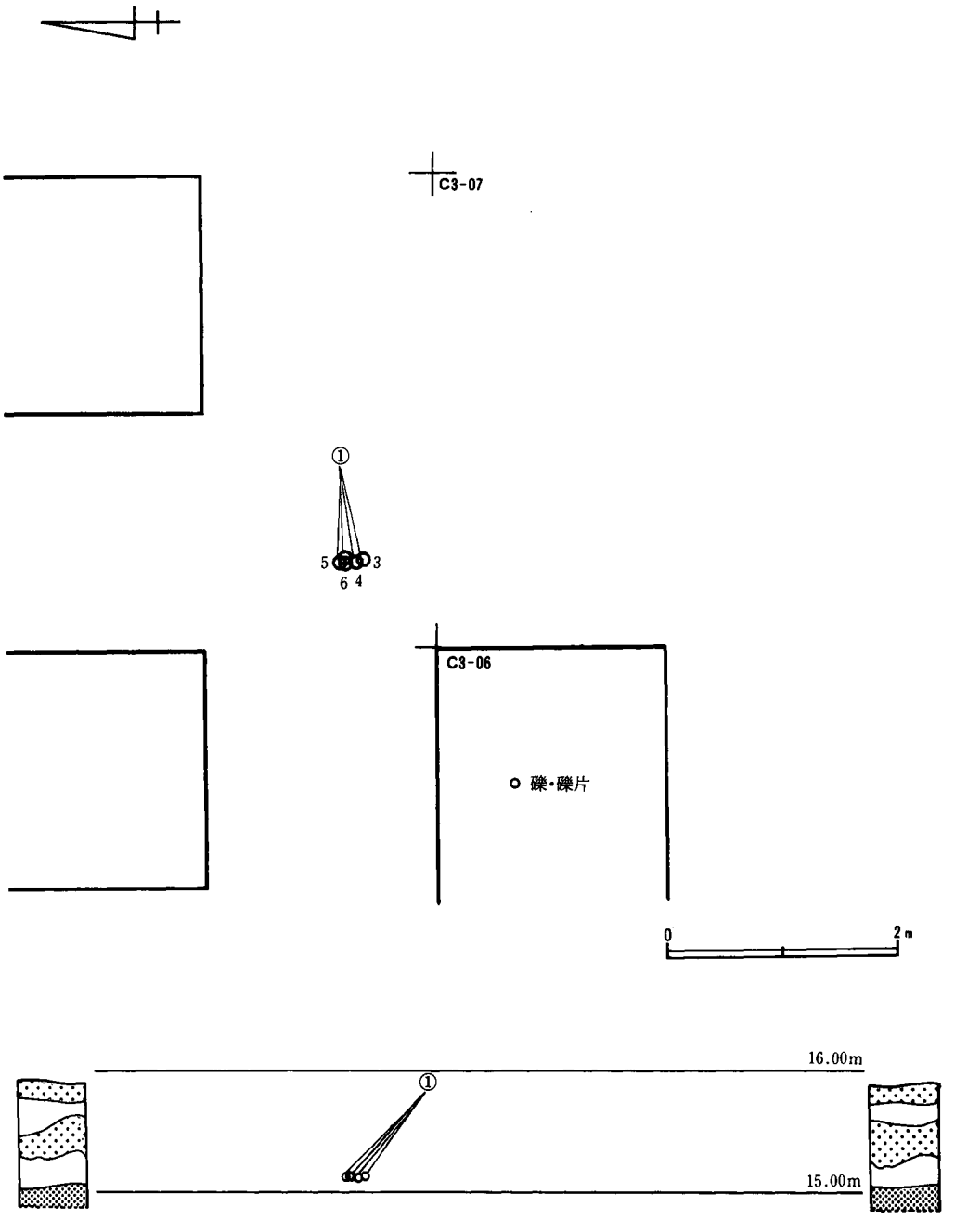
（母岩別資料，接合資料とブロック）

母岩別資料は２種である。

接合資料は第10ブロックとの破砕礫の接合例がある。

（まとめ）

ごくせまい範囲に分布する礫２個体分のブロックである。接合資料より第10ブロックとの同時性が検証された。



第228図　第６ブロック遺物出土状況図

第18表　第６ブロック母岩別資料石器組成表

器種 / 母岩	ナイフ形石器	角錐状石器	尖頭器	石錐	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剝片	使用痕ある剝片	礫器	石斧	敲石	剝片	砕片	石核	礫	計
安山岩	1															1	1
不明	1															4	4

第19表　第６ブロック接合資料一覧表

接合資料	内訳	内容	数量
1	破砕礫片	C３－01－２＋C３－01－３＋C３－01－５＋C３－01－６＋D３－03－４＋D３－03－10	6

第７ブロック

（出土状況）

ソフトローム上部よりハードローム上面にかけて出土している。特に集中している層準はソフトロームとハードロームの境界付近である。最大レベル差約50cm，密集部分では約25cmとなっている。

（出土遺物）

総計34点出土した。そのうち28点が破砕礫片であり，石器群は６点をかぞえる。

第20表　第７ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	安山岩 数量	%	砂岩 数量	%	チャート 数量	%	頁岩 数量	%	不明 数量	%	計 数量	%
ナイフ形石器												
角錐状石器												
尖頭器												
石錐												
掻器												
削器												
ピエス・エスキーユ												
彫刻刀形石器												
二次加工ある剝片					1	20					1	16.7
使用痕ある剝片												
礫器									1	100	1	16.7
石斧												
敲石												
台石												
磨石												
剝片					4	80					4	66.7
砕片												
石核												
削片												
小計	0		0		5	100	0		1	100	6	100
礫・礫片	5	17.9	2	7.1	7	25.0	1	3.6	13	46.2	28	100
総計	5		2		12		1		14		34	

石器組成は二次加工のある剝片１点，使用痕ある剝片１点，剝片４点となっている。

１は片刃礫器である。扁平な円礫を素材として一端に粗雑な調整をほどこしてある。全面にわたって赤化しており，熱せられた公算が高い。

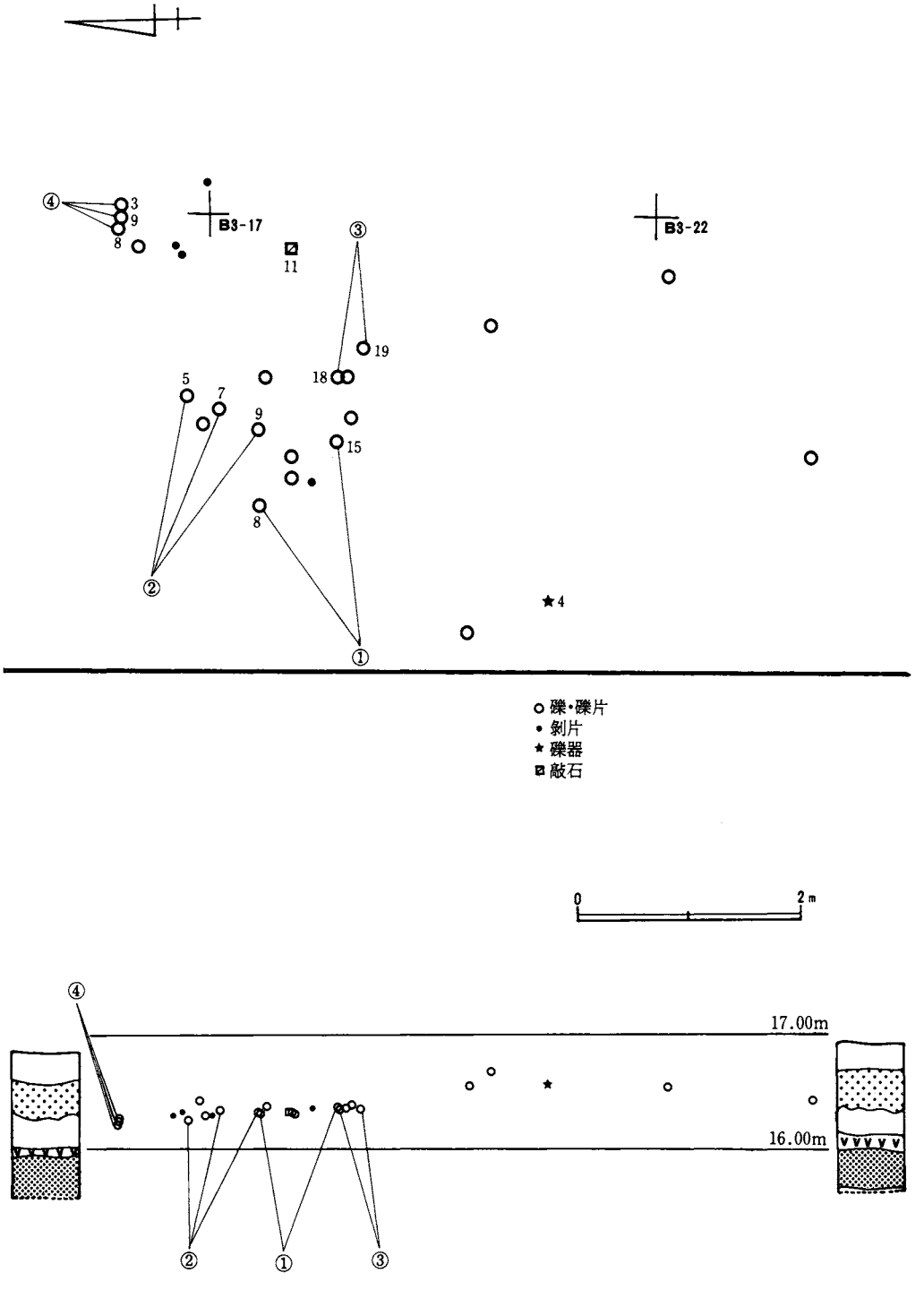
（技術的特徴）

幅広で横長に近い剝片やそれを素材とした利器が出土しているが，数量が少なく，技術的側面を評価するに至らない。

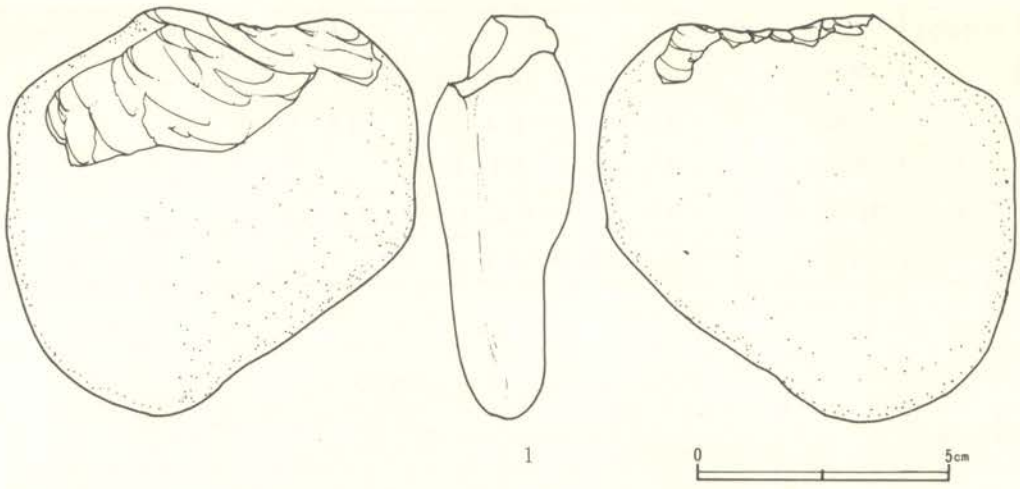
（母岩別資料，接合資料とブロック）

石材は不明を除き５種，母岩別資料は17種をかぞえる。出土量に比して母岩別資料が多く石器群は単独である場合がほとんどである。

礫群の構成礫は12個体となっており，



第229図　第７ブロック遺物出土状況図



第230図　第７ブロック出土遺物実測図

多岐にわたる。

接合資料は５例あるがいずれも破砕礫片どうしの接合例である。

（まとめ）

本ブロックの性格は礫群である。他のブロックとの接合例がなく，自己完結的である。

第21表　第７ブロック母岩別資料石器組成表

器種 / 母岩	ナイフ形石器	角錐状石器	尖頭器	石錐	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剥片	使用痕ある剥片	礫器	石斧	敲石	剥片	砕片	石核	礫	計
安山岩 1																3	3
2																	2
砂岩 1																1	1
2																1	1
チャート1								1					1				2
2													1				1
3													1				1
4																3	3
5																4	4
頁岩 1																1	1
不明 1										1							1
2																8	8
3																2	2
4																1	1
5																1	1
6																1	1
チャート6													1				1

第22表　第７ブロック接合資料一覧表

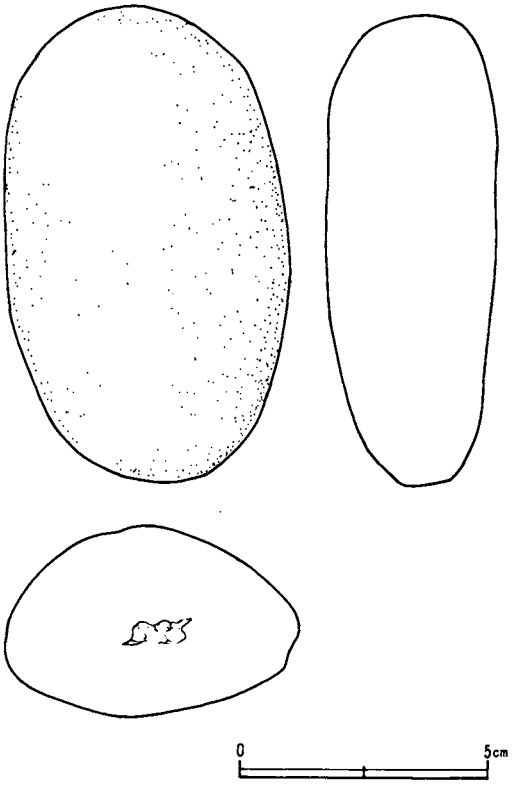
接合資料	内　訳	内　容	数量
1	破砕礫片	B３－16－８＋B３－16－15	3
2	破砕礫片	B３－11－５＋B３－16－９＋B３－16－7	6
3	破砕礫片	B３－16－17＋B３－16－19	2
4	破砕礫片	B３－11－8＋B３－11－９＋B３－12－３	3
5	破砕礫片	B３－16－18＋B３－16－16	4

第23表　第７ブロック出土石器計測表

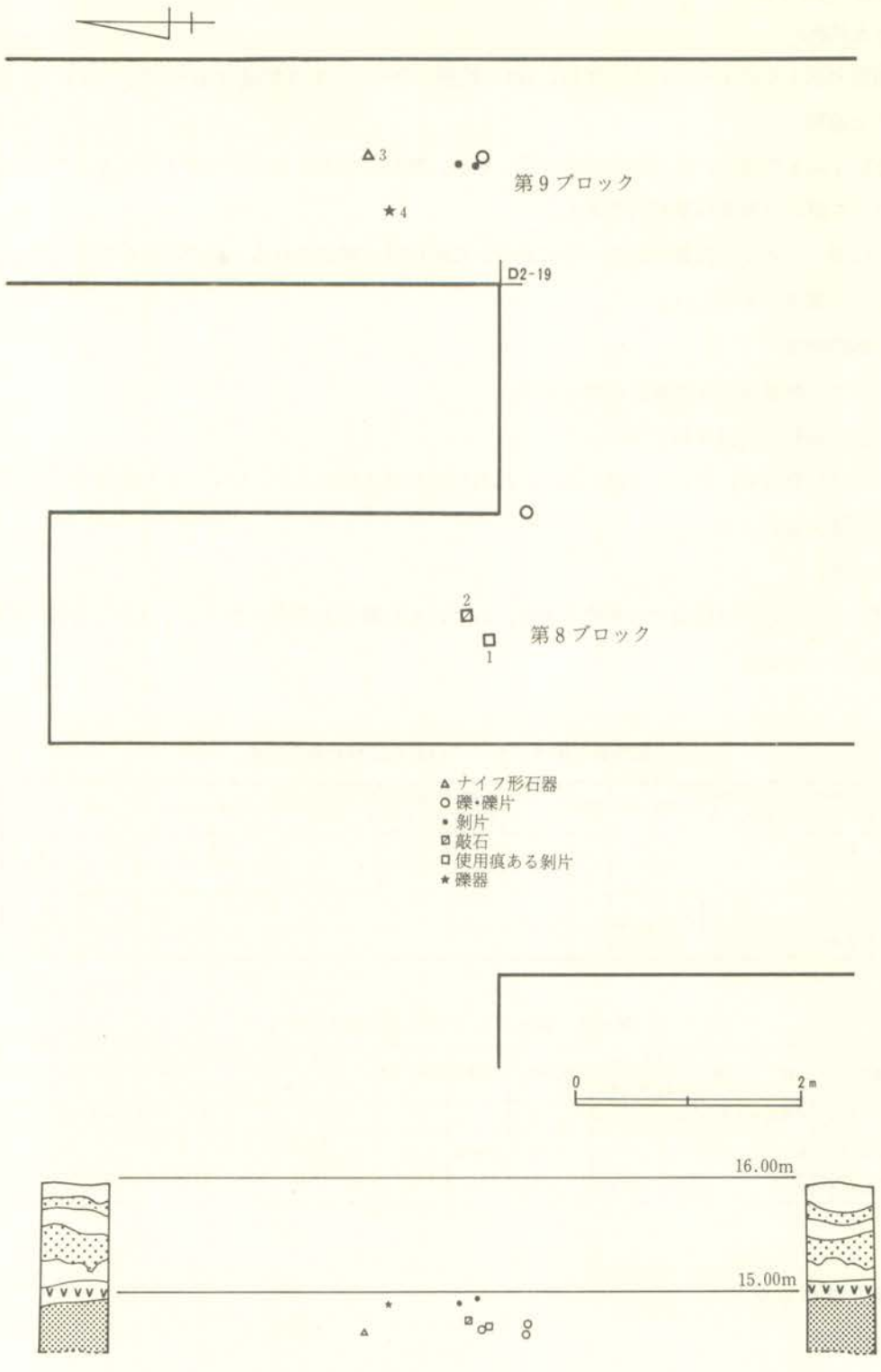
No.	遺物番号	器種	大きさ（cm）			刃角	重量(g)	捕図番号	調整の位置	打面の形状	欠損の有無	欠損部位	使用痕の有無	使用痕	石材	その他
			長さ	幅	厚さ											
1	B-3-16-4	礫器	8.0	8.2	2.6	－	217.0	230－1	一端	－	無	－	無	－	不明	表面赤化している

第24表　第８ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	頁岩		珪質頁岩		計	
	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器						
角錐状石器						
尖頭器						
石錐						
掻器						
削器						
ピエス・エスキーユ						
彫刻刀形石器						
二次加工ある剥片						
使用痕ある剥片			1	100	1	33.3
礫器						
石斧						
敲石	1	50			1	33.3
台石						
磨石	1	50			1	33.3
剥片						
砕片						
石核						
削片						
小計	2	100	1	100	3	100
礫・礫片	1	100			1	100
総計	3		1		4	



第231図　第８ブロック出土遺物実測図



第232図　第8・9ブロック遺物出土状況図

第8ブロック

（出土状況）

Ⅶ層中部より出土している。径約1.2mの範囲に分布しており散漫な出土状況を呈する。

（出土遺物）

総計4点と数量的に少ない。内訳は礫，敲石，磨石，使用痕ある剝片各1点となっている。このうち磨石は表面採集資料である。

1は敲石である。長軸方向の一端にわずかに敲打痕が観察される。全面的に摩耗痕もあり，磨石との兼用も考えられる。

（技術的特徴）

石器群の数量が少なく検討に堪えない。

（母岩別資料，接合資料とブロック）

石材は珪質頁岩，頁岩の2種がある。母岩別資料は4母岩あり，いずれも単独資料となっている。接合資料はない。

（まとめ）

ブロックとしては極めて小規模である。いずれも利器である点が本ブロックの石器群の特徴と言えそうである。

第25表　第8ブロック母岩別資料石器組成表

器種 / 母岩	ナイフ形石器	角錐状石器	尖頭器	石錐	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剝片	使用痕ある剝片	礫器	石斧	敲石	剝片	砕片	石核	礫	計
頁岩 1												1					1
2					1												1
3																1	1
珪質頁岩1									1								1

第26表　第8ブロック出土石器計測表

No.	遺物番号	器種	大きさ（cm） 長さ	幅	厚さ	刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	打面の形状	欠損の有無	欠損部位	使用痕の有無	使用痕	石材	その他
1	D-2-13-1	使用痕ある剝片	3.2	4.0	1.2	—	14.5	—	—	平坦	無	—	有	一側縁	珪質頁岩	
2	D-2-13-2	敲石	9.3	5.7	3.6	—	276.0	231−1	—	—	〃	—	〃	全面に磨痕	頁岩	
3	D-2-13-3	磨石	15.1	9.0	7.7	—	1020	—	—	—	〃	—	〃	〃	〃	

第9ブロック

（出土状況）

Ⅶ層の上部から下部に至るまで出土している。径約1.2mの範囲に分布しており第8ブロックと同様に散漫な分布状況を呈する。

（出土遺物）

第27表　第９ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	安山岩 数量	%	頁岩 数量	%	チャート 数量	%	計 数量	%
ナイフ形石器			1	100			1	25.0
角錐状石器								
尖頭器								
石錐								
掻器								
削器								
ピエス・エスキーユ								
彫刻刀形石器								
二次加工ある剝片								
使用痕ある剝片								
礫器	1	33.3					1	25.0
石斧								
敲石								
台石								
磨石								
剝片	2	66.6					2	50.0
砕片								
石核								
削片								
小計	3	100	1	100	0		4	100
礫・礫片					1	100	1	100
総計	3		1		1		5	

総計５点出土している。内訳は礫１点，礫器１点，ナイフ形石器１点，剝片２点となっている。

１はナイフ形石器である。平坦な打面を有する縦長剝片を素材として二側縁加工，先端部が欠損している。２は片刃の礫器である。円礫を素材としている。風化が著しく表面にはひび割れが観察される。

（技術的特徴）

ナイフ形石器より平坦な打面より縦長剝片を生産する技術基盤が背後に存在したことがうかがわれる。

（母岩別資料，接合資料とブロック）

石材は安山岩，頁岩，チャートの３種である。母岩別資料は５母岩あり，いずれも単独資料である。接合資料はない。

（まとめ）

石器群としてナイフ形石器，礫器を保有する。数量的に貧弱なブロックである。

第28表　第９ブロック母岩別資料石器組成表

母岩 / 器種	ナイフ形石器	角錐状石器	尖頭器	石錐	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剝片	使用痕ある剝片	礫器	石斧	敲石	剝片	砕片	石核	礫	計
安山岩１													1				1
２													1				1
３										1							1
頁岩１	1																1
チャート１																1	1

第29表　第９ブロック石器計測表

No.	遺物番号	器種	大きさ（cm） 長さ	幅	厚さ	刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	打面の形状	欠損の有無	欠損部位	使用痕の有無	使用痕	石材	その他
1	D-2-14-3	ナイフ形石器	3.8	3.4	0.8	—	14.0	233－1	二側縁	平坦	有	先端	有	刃こぼれ	頁岩	
2	D-2-14-4	礫器	9.1	7.0	5.1	—	442.0	〃－2	一端	—	無	—	無	—	安山岩	

第233図　第９ブロック出土遺物実測図

第10ブロック

（出土状況）

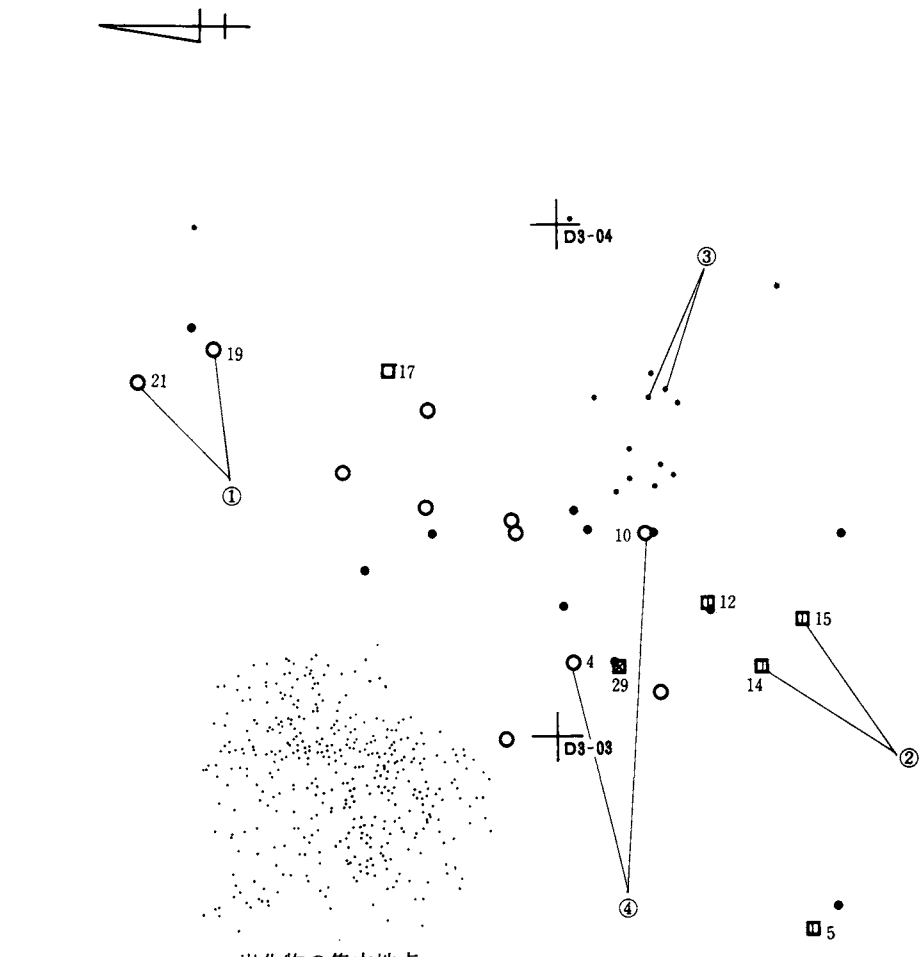
II層よりVII層上部に至るまで広範囲に出土しているが，集中している層準はソフトロームとハードロームとの境界付近である。レベル差約１m。本ブロックの位置する地区は北方へ傾斜する地形となっており，石器群も傾斜に沿って分布している。

平面形は長径約7.5m，短径約4.0mとなっており，利器，剝片，砕片，礫の分布にそれぞれ偏在性がある。

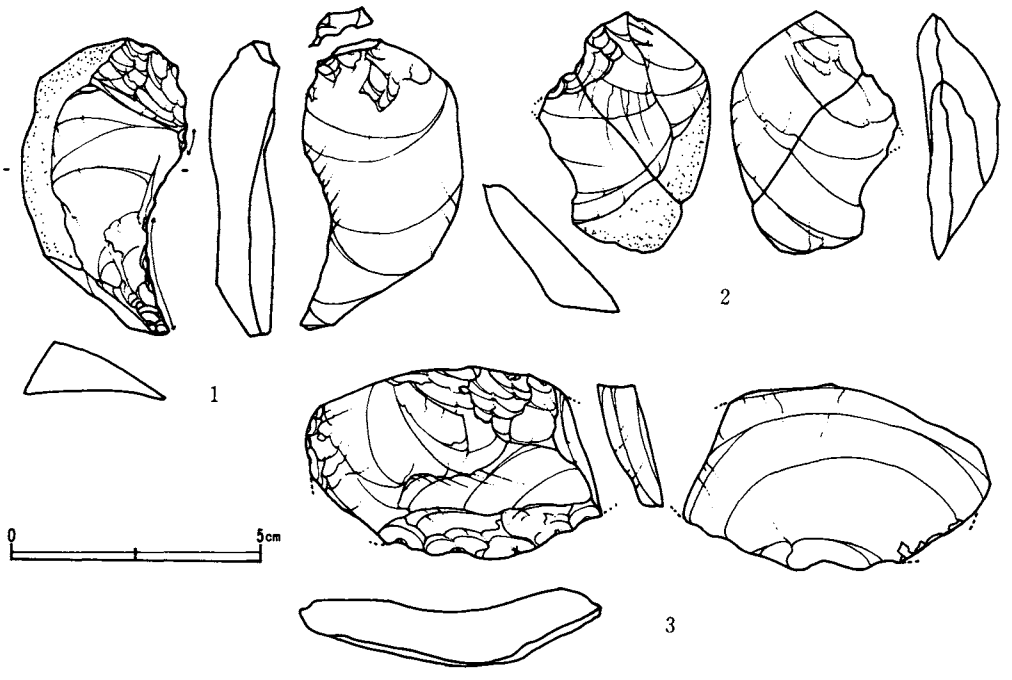
本ブロックの北西端には礫片のまとまりに近接して炭化物の集中地点がある。規模は経約2.5mの円形プランで確認面（ハードローム上面）より約50cmの深さがある。

（出土遺物）

総計42点出土した。内訳は石器群32点，礫，礫片10点となっている。石器組成は削器１点，二次加工ある剝片４点，使用痕ある剝片１点，磨石１点，剝片11点，砕片14点である。



第234図　第10ブロック遺物出土状況図



第235図　第10ブロック出土遺物実測図

第30表　第10ブロック母岩別資料石器組成表

器種 / 母岩	ナイフ形石器	角錐状石器	尖頭器	石錐	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剥片	使用痕ある剥片	礫器	石斧	敲石	剥片	砕片	石核	礫	計
安山岩 1																1	1
2												1					1
3													3				3
花崗岩 1																1	1
頁岩 1													1				1
2													1				1
3													1			1	2
4					1			2	1				1				5
珪質頁岩 1								1									1
2													1				1
3														1			1
4													1	7			8
5													1	6			7
チャート 1								1									1
2													1				1
3																3	3
玄武岩 1																2	2
不明 1																2	2

第31表　第10ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	安山岩		花崗岩		頁岩		珪質頁岩		チャート		玄武岩		不明		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器																
角錐状石器																
尖頭器																
石錐																
掻器																
削器					1	12.5										
ピエス・エスキーユ																
彫刻刀形石器																
二次加工ある剝片					2	25	1	5.6	1	50					4	12.5
使用痕ある剝片					1	12.5									1	3.1
礫器																
石斧																
敲石																
台石																
磨石	1	25														
剝片	3	75			4	50	3	16.7	1	50					11	34.4
砕片							14	77.8							14	43.8
石核																
削片																
小計	4	100	0		8	100	18	100	2	100	0		0		32	100
礫・礫片	1	10	1	10	1	10			3	30	2	20	2	20	10	100
総計	5		1		9		18		5		2		2		42	

礫片はいずれも受熱により破砕された資料である。

1，2は二次加工ある剝片，3は削器である。

1は平坦打面を有する横長剝片を素材としており剝片の先端部の一側縁に二次加工が観察される。

2は横長剝片を素材としており，左側縁上部に部分的な二次加工がある。二つに分断されているが，これは何らかの利器の製作を意図して実施された調整の途中でアクシデンタルに割れたものと考えられる。二次加工のある部分はもとの剝片の打面部にあたる。

3も1～2と同様に横長剝片を素材としている。全周にわたって二次加工が存在する。二次加工面は平坦である。

（技術的特徴）

まず剝片生産技術については石核が出土していないため詳細は不明である。ただし平坦打面を有し，先端部が内弯する幅の広い剝片を生産した技術基盤が存在したことは確実である。

石器調整技術についてはその段階を反映した調整剝片が存在することのみを付記するにとどめておく。

（母岩別資料，接合資料とブロック）

石材は不明を除き6種，母岩別資料は不明を入れ18種をかぞえる。

石器群については石材として珪質頁岩が多用されている。

母岩別資料は剝片，砕片類を中心としているが，中で注目すべき資料は頁岩4である。頁岩4の母岩別石器組成は二次加工ある剝片2点，削器，使用痕ある剝片，剝片各1点であり，ブロック外で製作され完成品としてブロック内に搬入されたことがうかがわれる。

全体的に利器は単独資料であることが多い。

接合資料は4例あり，破砕礫2例，石器群の接合例2例となっている。前者は熱によって破砕している礫片どうしの接合例，後者は調整途中の欠損例（接合資料2）と平担打面を有する横長剝片どうしの接合例（接合資料4）である。

特筆すべき点は接合資料4である。本資料は第6ブロックとの接合関係があり互いの同時性がうかがえる手がかりとなっている。

第6ブロックと本ブロックとは東西方向に約10mの距離を隔てて互いに対峙している。

（まとめ）

本ブロックの基本的性格は礫群であろう。炭化物の生因については，人為的か自然的要因によるものかは判然としない。

第32表　第10ブロック接合資料一覧表

接合資料	内　　訳	内　　容	数量
1	礫　　片	D2－23－19＋D2－23－21	2
2	二次加工ある剝片分断資料	D3－03－14＋D3－03－15	2
3	砕片2点	D3－03－26→D3－03－23	2
4	礫　　片	D3－03－4＋D3－03－10(第6ブロックに接合)	2

第33表　第10ブロック出土石器計測表

No.	遺物番号	器　種	大きさ (cm) 長さ	幅	厚さ	刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	打面の形状	欠損の有無	欠損部位	使用痕の有無	使用痕	石材	その他
1	D-3-03-29	削　器	6.0	3.7	1.0	—	26.5	235－3	一側縁	平坦	有	側縁	無	—	頁岩	
2	D-3-02-5	二次加工ある剝片	1.8	1.2	0.6	—	1.2	—	全面	—	〃	〃	〃	—	チャート	ピエス・エスキーユ(?)
3	D-3-03-12	〃	5.7	3.2	1.0	—	148.2	235－1	一側辺	平坦	無	—	有	刃こぼれ	珪質頁岩	
4	D-3-03.14 15	〃	4.8	3.4	1.5	—	17.5	235－2	一側縁部分的	—	〃	—	無	—	頁岩	接合
5	D-2-23-17	使用痕ある剝片	2.8	2.4	6.5	—	4.0	—	—	平坦	〃	—	有	刃こぼれ		
6	D-2-23.12	磨　石	4.8	5.7	3.7	—	19.4	—	—	—	有	半割	有	磨耗痕	安山岩	

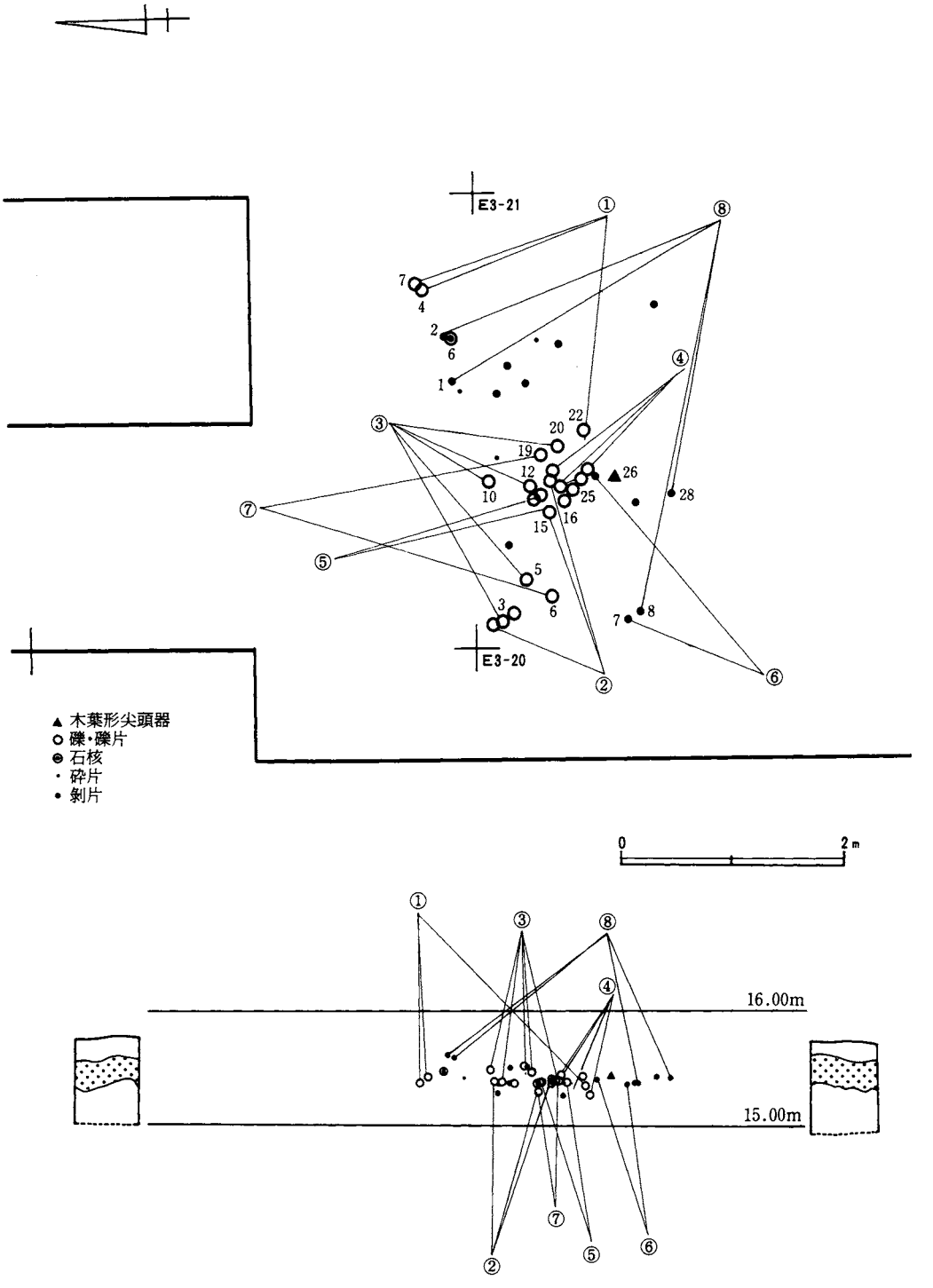
第11ブロック

（出土状況）

ソフトローム上部よりハードローム上面に至るまで分布しているが，最も分布が濃密な層準はソフトローム中である。全体の堆積状況はほぼ水平であり，剝片と相対的に重量の大きな礫片との間にはレベル的に大きな差異はない。

平面形は長径約3.5m，短径約2.2mの長楕円形を呈する。礫の多くは中央部に密に分布し，剝片がその周辺に散在する傾向にある。

（出土遺物）



第236図　第11ブロック遺物出土状況図

第34表　第11ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	黒曜石		安山岩		花崗岩		頁岩		不明		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器												
角錐状石器												
尖頭器												
石錐												
掻器												
削器			1	11.1							1	5.6
ピエス・エスキーユ												
彫刻刀形石器												
二次加工ある剝片												
使用痕ある剝片												
礫器												
石斧												
敲石												
台石												
磨石												
剝片			8	88.9			5	62.5			13	72.2
砕片	1	100					2	25.0			3	16.7
石核							1	12.5			1	5.6
削片												
小計	1	100	9	100	0		8	100	0		18	100
礫・礫片			6	26.1	5	21.7			12	52.8	23	100
総計	1		15		5		8		12		41	

出土状況より本ブロックの性格は礫群であることが知れるが，出土量は石器群が18点に対して礫群の構成礫23点となっており，数量的に拮抗していると言えよう。

石器組成は木葉形尖頭器１点，石核１点，剝片13点，砕片３点となっている。

１は石核である。基部が折断されたぶ厚い剝片の切断面，主要剝離面を折面として横長剝片を生産している。

２は木葉形尖頭器であろう。半両面加工となっており裏面および一側縁に自然面が残存している。また他の一側縁には素材剝片の打断面が残存している。片面には全面にわたって平坦な剝離面がみられる。全体の形状は左右非対称形となっており尖頭部に鋭さを欠くところから尖頭器というよりむしろ削器と考えたほうが良いのかもしれない。

礫群の構成礫はいずれも熱によって破砕されており完形礫は存在しない。

（技術的特徴）

石核より剝片を素材として横長剝片を生産する剝片生産技術が明らかとなったが生産されたうちブロック内に残された剝片は少ない。また木葉形尖頭器によりいわゆる「ポイント剝片」の存在も予想されたが，ブロック内では皆無であった。

先述の剝片生産技術により生産された横長剝片は小型で，木葉形尖頭器の目的剝片となり難い。生産された剝片がその後どのような器種の目的剝片となり得たかは不明である。

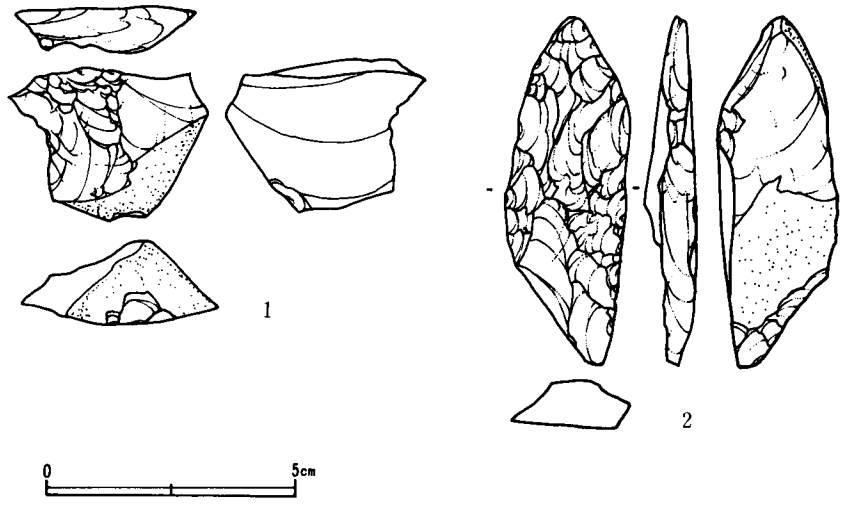
（母岩別資料，接合資料とブロック）

石材は不明な例を除き４種，母岩別資料は不明３種をあわせ計14種を識別し得た。

石材としては安山岩が他の石材に比して多い傾向にあるが，全体的に資料の数量が少なく，統計的な有意差は明らかにすることはできなかった。

母岩別資料のうち剝片生産技術を反映した好例は頁岩１である。他はいずれも器種に偏りがみられる。

頁岩１は先述した剝片素材の石核，剝片，砕片によって構成されている。平坦打面を有し，



第237図　第11ブロック出土遺物実測図

先端部が内弯した横長剝片が生産されたことを示している。

礫群は7個体出土したがいずれもブロック内で良く接合している。大きな推定径7～12cm程度の拳大の礫である。

接合資料は8例存在したが，礫6例，剝片の分断資料2例となっている。

（まとめ）

本ブロックは礫群である。石器群は利器の素材となり得る目的剝片はない。母岩別資料と接合資料より他のブロックとの類縁関係をうかがわせる資料はない。

第35表　第11ブロック接合資料一覧表

接合資料	内　訳	内　容	数量
1	破砕礫片	E 3－15－ 4 ＋E 3－15－ 7 ＋E 3－20－23	3
2	破砕礫片	E 3－20－ 2 ＋E 3－20－15＋E 3－20－15＋E 3－20－35	3
3	破砕礫片	E 3－20－ 3 ＋E 3－20－ 5 ＋E 3－20－10＋E 3－20－12＋E 3－20－20	5
4	破砕礫片	E 3－20－17＋E 3－20－18＋E 3－20－23＋E 3－20－36＋E 3－20－37	5
5	破砕礫片	E 3－20－13＋E 3－20－14＋E 3－20－16	3
6	剝片の分断資料	E 3－20－ 7 ＋E 3－20－25	2
7	破砕礫片	E 3－20－6＋E 3－20－19	2
8	剝片の分断資料	E 3－15－2＋E13－15－ 1 ＋E 3－20－ 8 ＋E 3－20	4

第36表　第11ブロック母岩別資料石器組成表

器種 / 母岩	ナイフ形石器	角錐状石器	尖頭器	石錐	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剝片	使用痕ある剝片	礫器	石斧	敲石	剝片	砕片	石核	礫	計
黒曜石 1														1			1
安山岩 1					1												1
2																1	1
3																3	3
4																2	2
5													2				2
6													6				6
花崗岩 1																5	5
頁岩 1													4	2	1		7
2													1				1
不明 1																3	3
2																6	6
3																3	3

第37表　第11ブロック出土石器計測表

No.	遺物番号	器種	大きさ (cm) 長さ	幅	厚さ	刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	打面の形状	欠損の有無	欠損部位	使用痕の有無	使用痕	石材	その他
1	E3-15-6	石核	2.9	4.0	1.6	—	16.0	237—1	—	平坦	無	—	—	—	頁岩	
2	E-20-26	槍先形尖頭器	6.9	2.3	1.0	—	16.7	237—2	半両面加工	—	無	—	—	—	安山岩	

第38表　ブロック外出土石器組成表

石材 / 器種	メノウ 数量	%	珪質頁岩 数量	%	不明 数量	%	計 数量	%
ナイフ形石器	1	100					1	25
角錐状石器								
尖頭器								
石錐								
掻器								
掻器								
削器			1	33.3			1	25
ピエス・エスキーユ								
彫刻刀形石器								
二次加工ある剝片								
使用痕ある剝片								
礫器								
石斧								
敲石								
台石								
礫器			1	33.3			1	25
剝片								
砕片			1	33.3			1	35
石核								
削片								
小計	1	100	3	100	0		4	100
礫・礫片					1	100	1	100
総計	1		3		1		5	

ブロック外出土石器

いずれもⅣ～Ⅴ層に対比される層準より出土した資料である。総計5点出土した。

1はナイフ形石器である。横長剝片を素材としており，二側縁加工，全体の形状を細身の切り出し形に整形している。

2はピエス・エスキーユである。上下両端に微細な刃がつぶれがある。截断面はない。

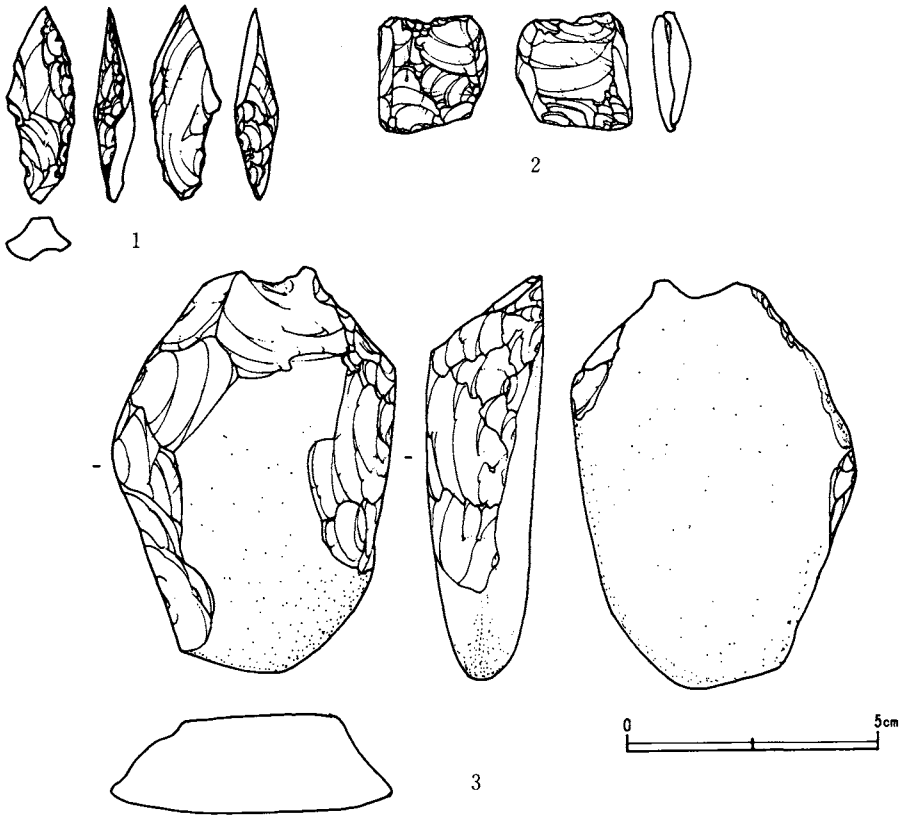
3は円礫と素材とした礫器である。片面加工であり，全周の約¾に調整がほどこされている。剝離面は大きく横長剝片が剝離されたことが理解される。したがって石核の可能性も否めない。

表面採集石器

出土位置が明らかではないものを一括した。

総計45点出土した。

1は使用痕ある剝片である。平坦打面を有する横



第238図　ブロック外出土遺物実測図

第39表　ブロック外出土石器計測表

No.	遺物番号	器種	大きさ (cm)			刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	打面の形状	欠損の有無	欠損部位	使用痕の有無	使用痕	石材	その他
			長さ	幅	厚さ											
1	C3-06-2	ナイフ形石器	3.9	1.4	0.3	35°	3.0	238－1	二側縁	－	無	－	無	－	メノウ	
2	A-2-06-1	ピエス・エスキーユ	2.3	2.2	0.7	－	4.4	〃－2	上下両端		〃	－	－	－	珪質頁岩	
3	B-3-21-4	礫器	7.9	5.5	2.4	－	226.0	〃－3	全周の約¾	－	〃	－	無	－	〃	

長剝片を利用しており，先端部に刃こぼれが連続的に観察される。

2は一側縁加工のナイフ形石器である。横長剝片を素材としている。基部が欠損している。

3は削器である。縦長剝片を素材として一側縁に二次加工がほどこされている。右側縁は平坦な第一次剝離面が残り，尖鋭ではない。上層の古墳時代の住居跡の覆土中より出土した。

4はナイフ形石器である。背面側に自然面を残す剝片を素材としており一側縁に刃つぶし加工の痕跡が残存している。基部は欠損している。

5は石核である。上下両端に節理面がみられ，全体の形状は両極加撃によってまず整えられ，のちに正面下半部にみられるように右方より横長剝片が一枚剝離されている。

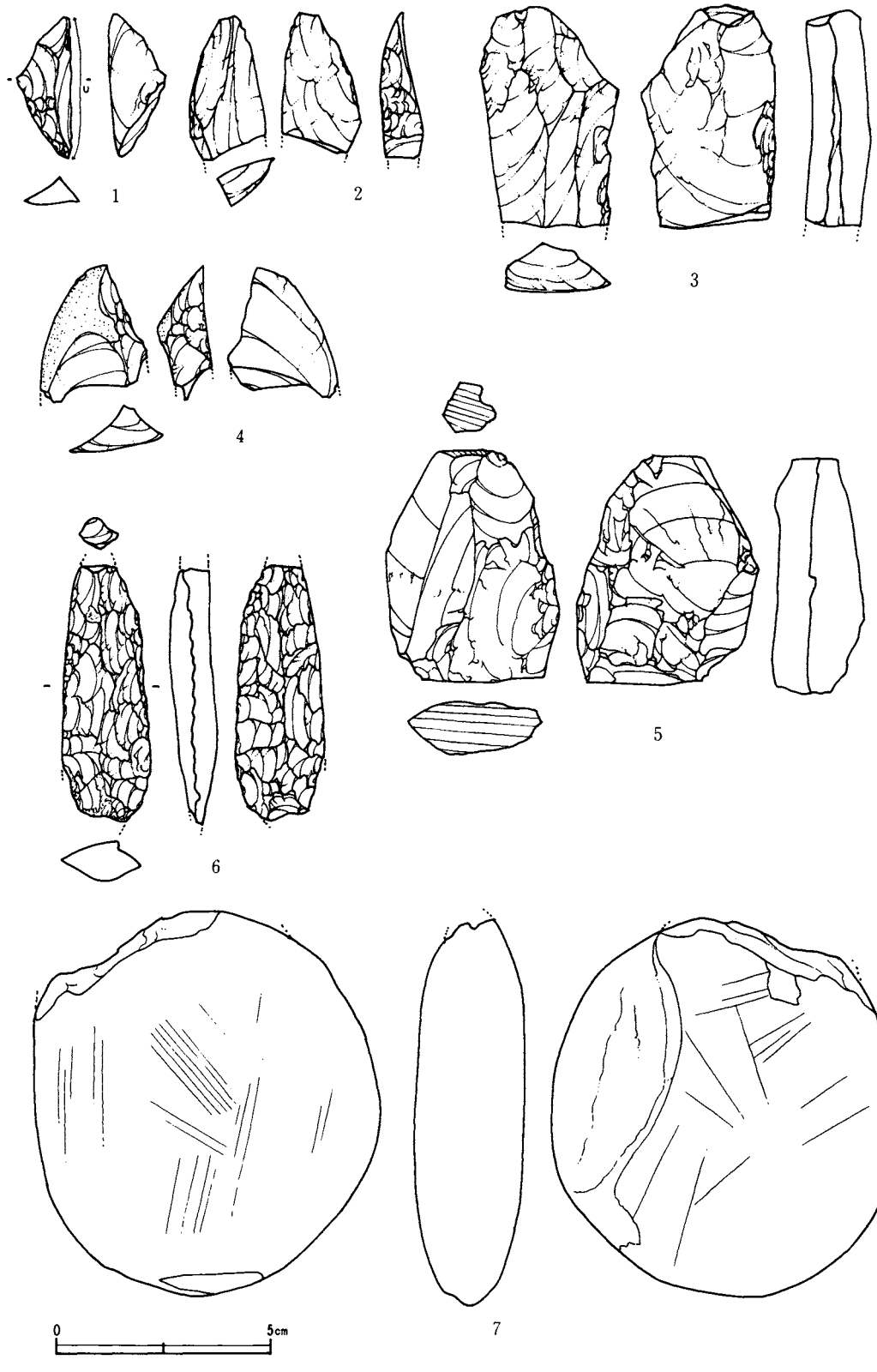
6は砥石である。円礫を素材として両面を利用している。方向は不規則である。上端部が加熱により赤化し脆弱となっており欠損している。

第40表　表面採集石器組成表

石材 / 器種	黒曜石		安山岩		玄武岩		花崗岩		流紋岩		頁岩		珪質珪岩		砂岩		チャート		不明		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器			1	50					1	100	1	33.3									3	11.5
角錐状石器																						
尖頭器											1	33.3									1	3.8
石錐																						
掻器																						
削器																						
ピエス・エスキーユ																	2	18.2			2	7.7
彫刻刀形石器																						
二次加工ある剝片			1	50													1	9.1			2	7.7
使用痕ある剝片													1	25							1	3.8
礫器																						
石斧																						
敲石																						
台石																						
砥石															1	100					1	3.8
剝片	2	66.6			1	100					1	33.3	1	25			5	45.5	10	38.5		
砕片	1	33.3											2	50			1	9.1			4	15.4
石核																	2	18.2			2	7.7
削片																						
小計	3	100	2	100	1	100	0		1	100	3	100	4	100	1	100	11	100	0		26	100
礫・礫片			4	21.1			2	10.5							4	21.1	2	10.5	7	36.8	19	100
総計	3		6		1		2		1		3		4		5		13		7		45	

第41表　表面採集石器計測表

No.	遺物番号	器種	大きさ(cm) 長さ	幅	厚さ	刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	打面の形状	欠損の有無	欠損部位	使用痕の有無	使用痕	石材	その他
1	C-2-19-4	槍先形尖頭器	5.8	2.0	1.0	—	12.5	239—6	—	—	有	両端	—	—	頁岩	
2	B-2-04.2	ナイフ形石器	3.0	2.5	1.1	—	6.3	〃—4	一側縁？	—	〃	基部	無	—	〃	
3	A-2-01-1	〃	3.3	1.7	1.0	—	5.0	〃—2	〃　？	—	〃	〃	〃	—	安山岩	
4	C-3-12-6	〃	3.4	1.6	0.5	—	1.7	—	〃　？	—	〃	先端部	—	—	流紋岩	風化が顕著
5	イ-001-2	二次加工ある剝片	5.2	3.1	1.3	—	25.5	239—3	—	平坦	〃	〃	無	—	安山岩	
6	C-、-21-2	使用痕ある剝片	1.8	3.0	0.7	—	2.0	〃—1	—	〃	無	〃	有	先端刃こぼれ	珪質頁岩	
7	C-3-14-12	ピエス・エスキーユ	2.5	1.8	0.6	—	3.2	—	長軸・短軸両方向	—	〃	—	—	—	チャート	
8	B-2-17-5	〃	2.6	1.4	0.9	—	3.8	—	長軸方向	—	〃	—	—	—	〃	
9	B-3-05	石核	2.7	4.5	2.9	—	41.0	—	—	—	有	下端	—	—	〃	
10	B-2-18-2	〃	5.1	4.1	2.0	—	49.5	239—5	—	平坦	無	—	—	—	〃	
11	B-3-11-3	砥石	8.5	8.0	2.3	—	226.0	〃—7	—	—	有	一端	有	研磨痕	砂岩	受熱により赤化



第239図　表面採集遺物実測図

第2節　縄文時代

グリッド出土の土器

今回調査が行われた部分からは縄文時代の遺構を検出することは，できなかった。しかし，グリッドから出土した縄文土器は，かなりの量にのぼる。ここではそれらを時期ごとに分類し若干の説明を加える。

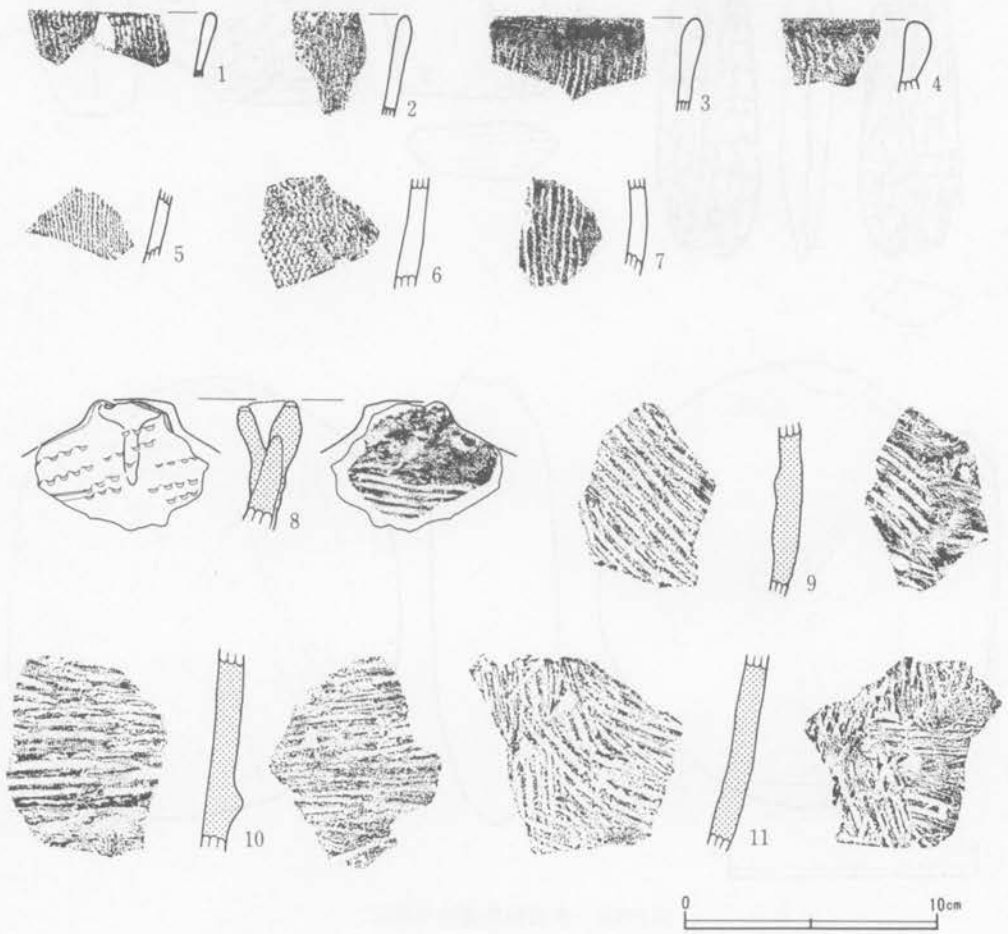
第1群　早期の土器（240図）（図版78）

A類　撚糸による文様を持つ土器（1～7）

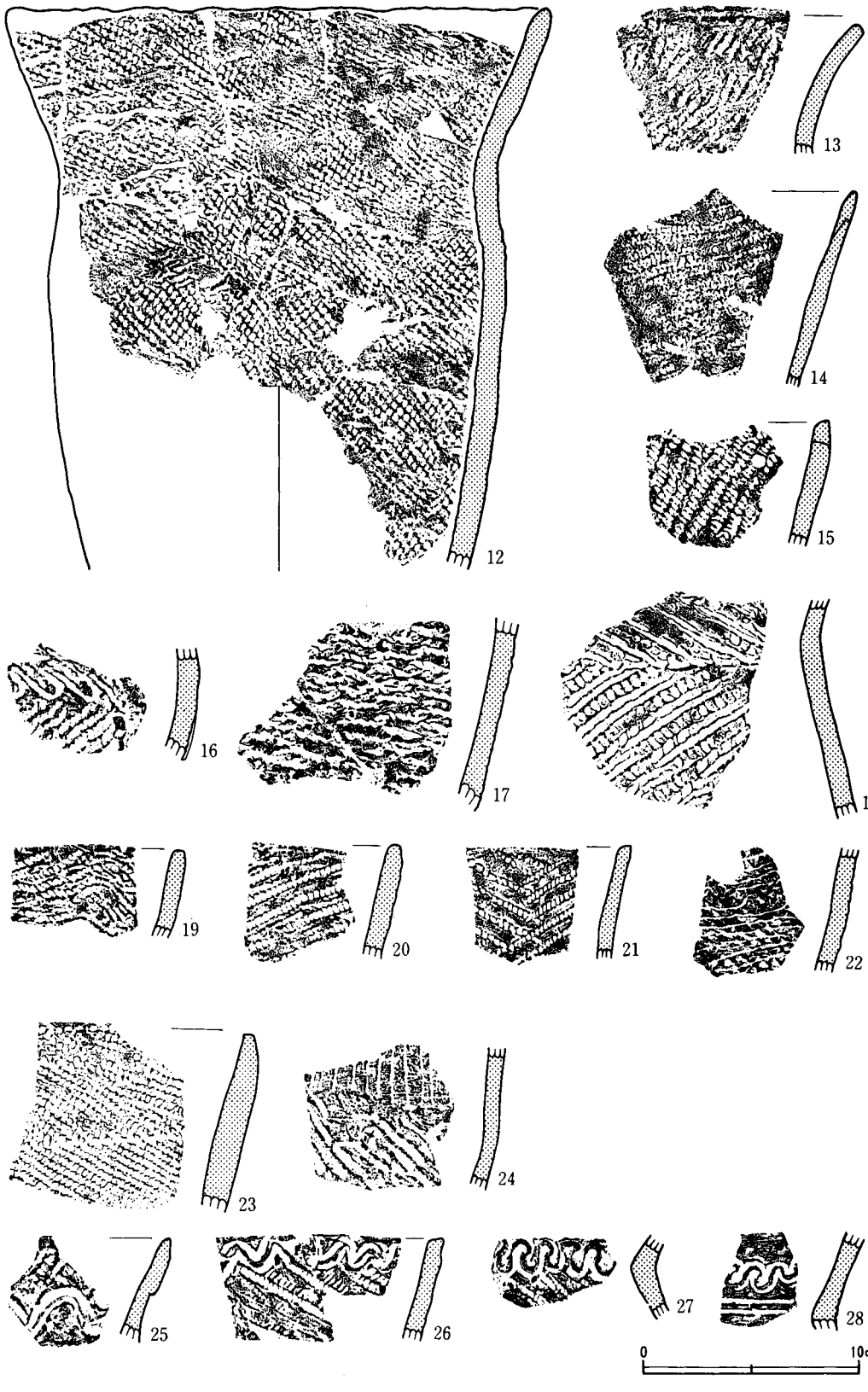
全て小さな破片で器形全体を推定できるものはない。口唇端部から文様をつけるもの(1)と小さな無文帯を持つもの（2～4）がある。焼成はみな良好で，胎土は砂粒を含んでいる。出土した地点に片寄りはみられない

B類　胎土に繊維を含み，貝殻による文様を持つ土器（8～11）

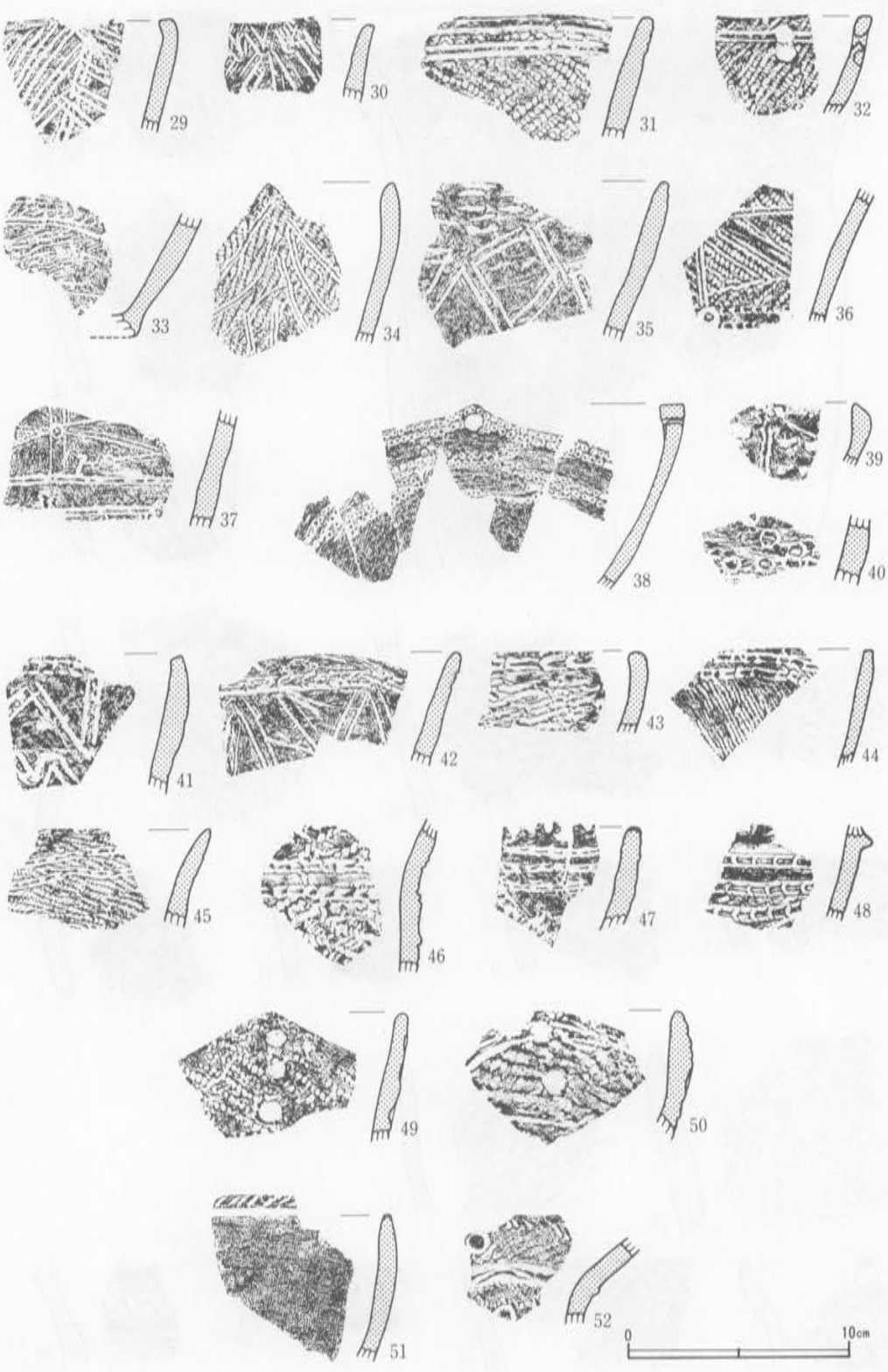
8は口縁部の破片。表の文様は貝殻腹縁の圧痕である。9～11は表・裏ともに条痕文を持



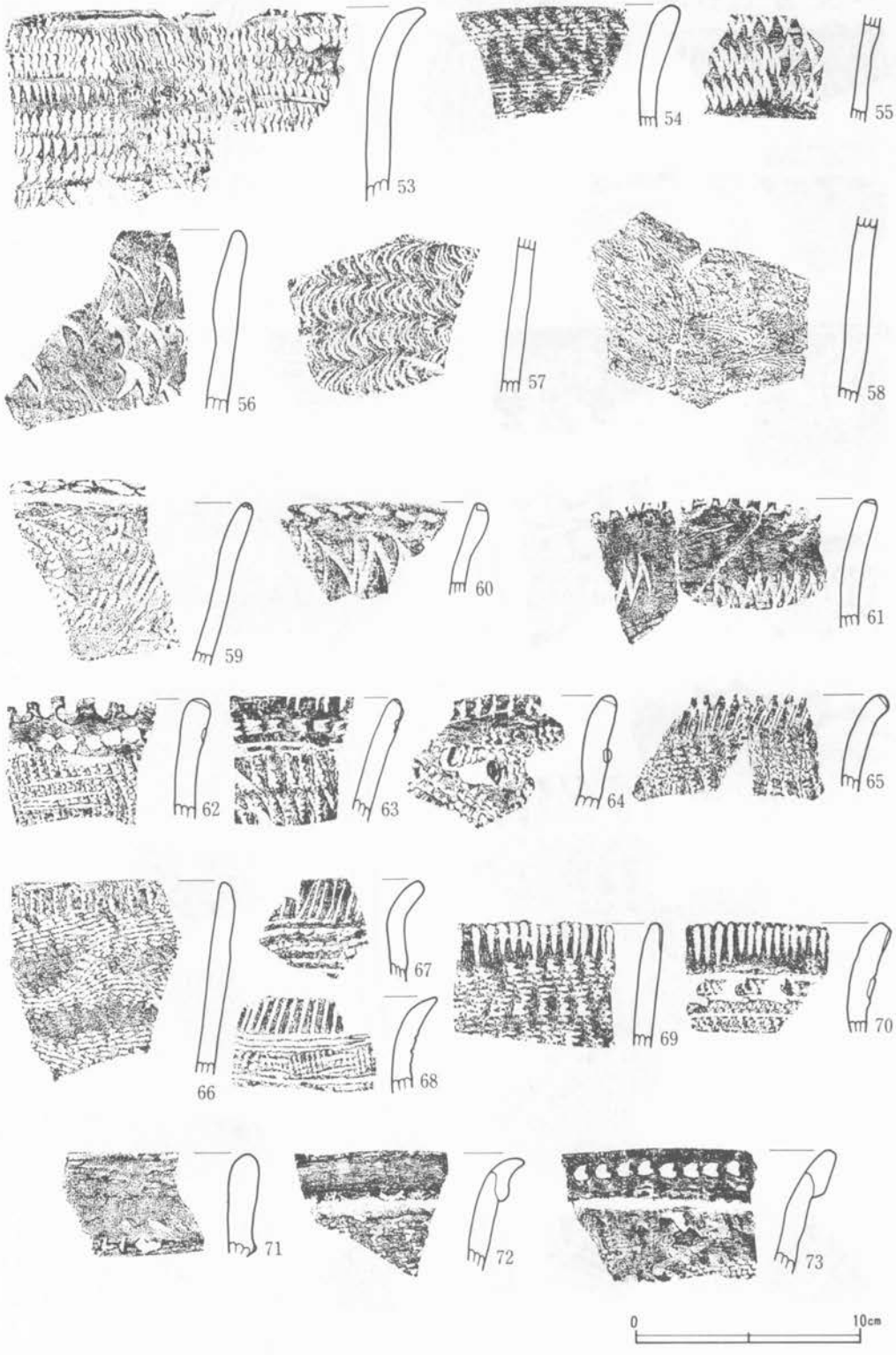
第240図　縄文時代早期の土器



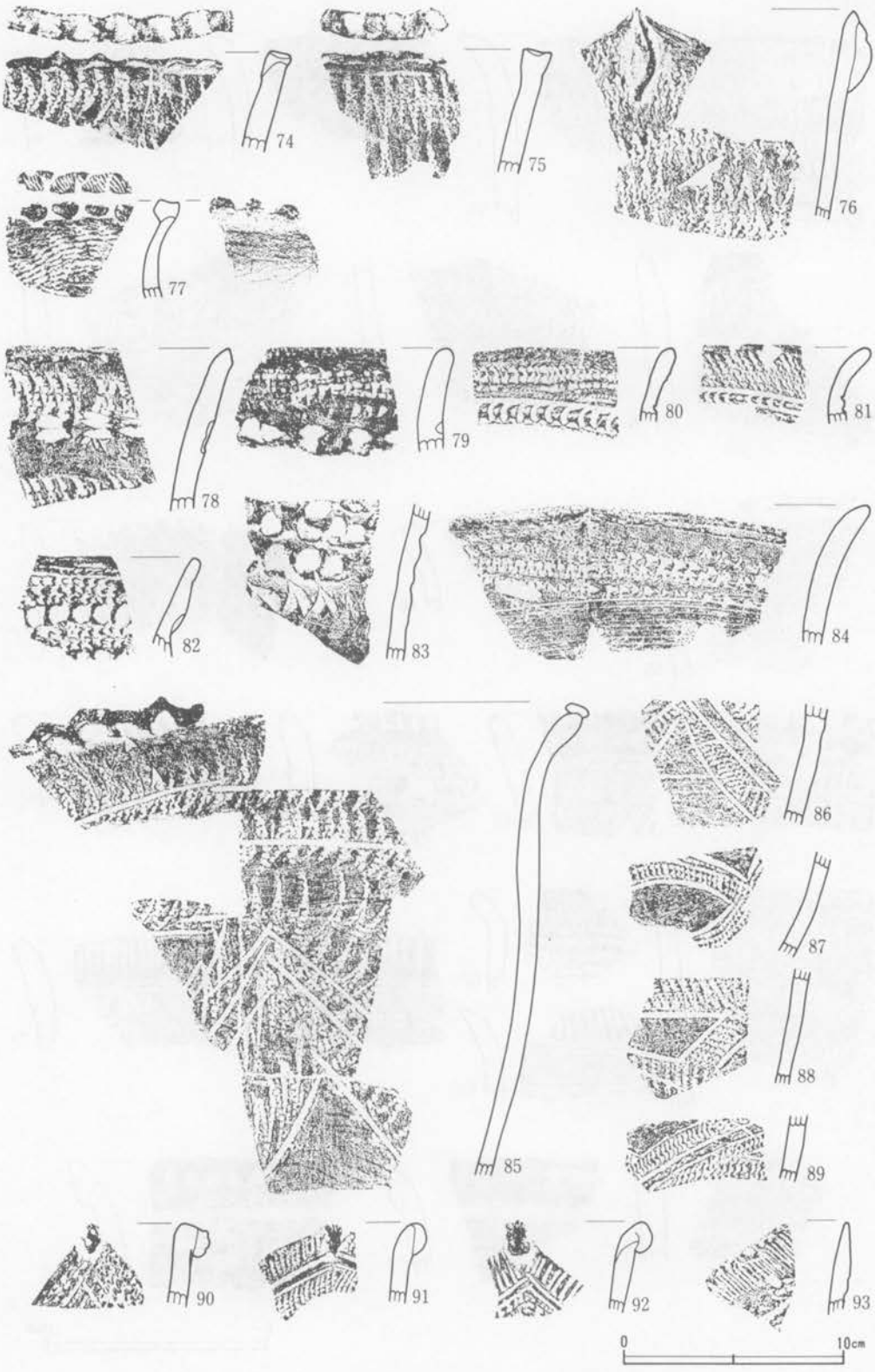
第241図　縄文時代前期の土器(1)



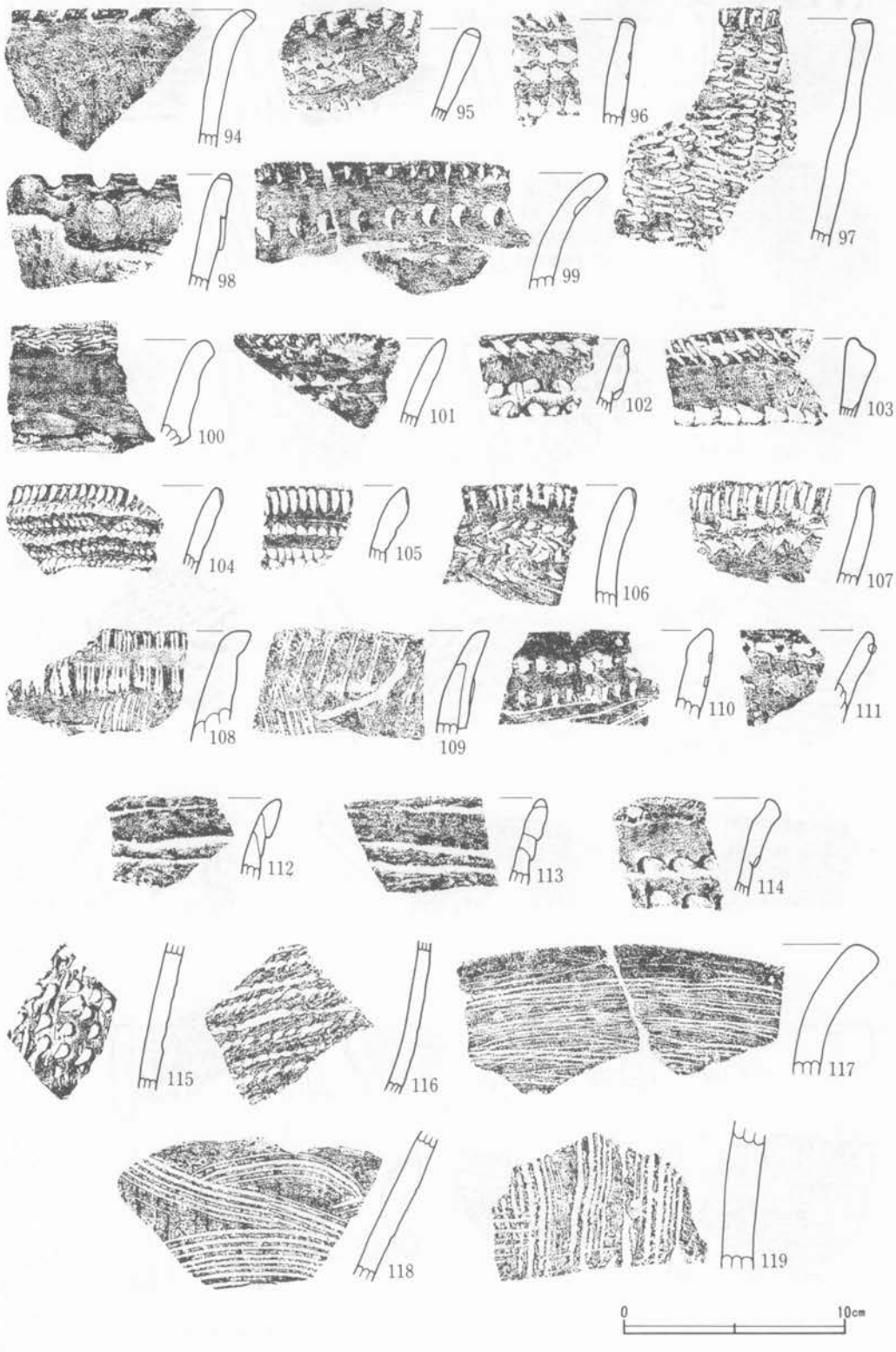
第242図　縄文時代前期の土器(2)



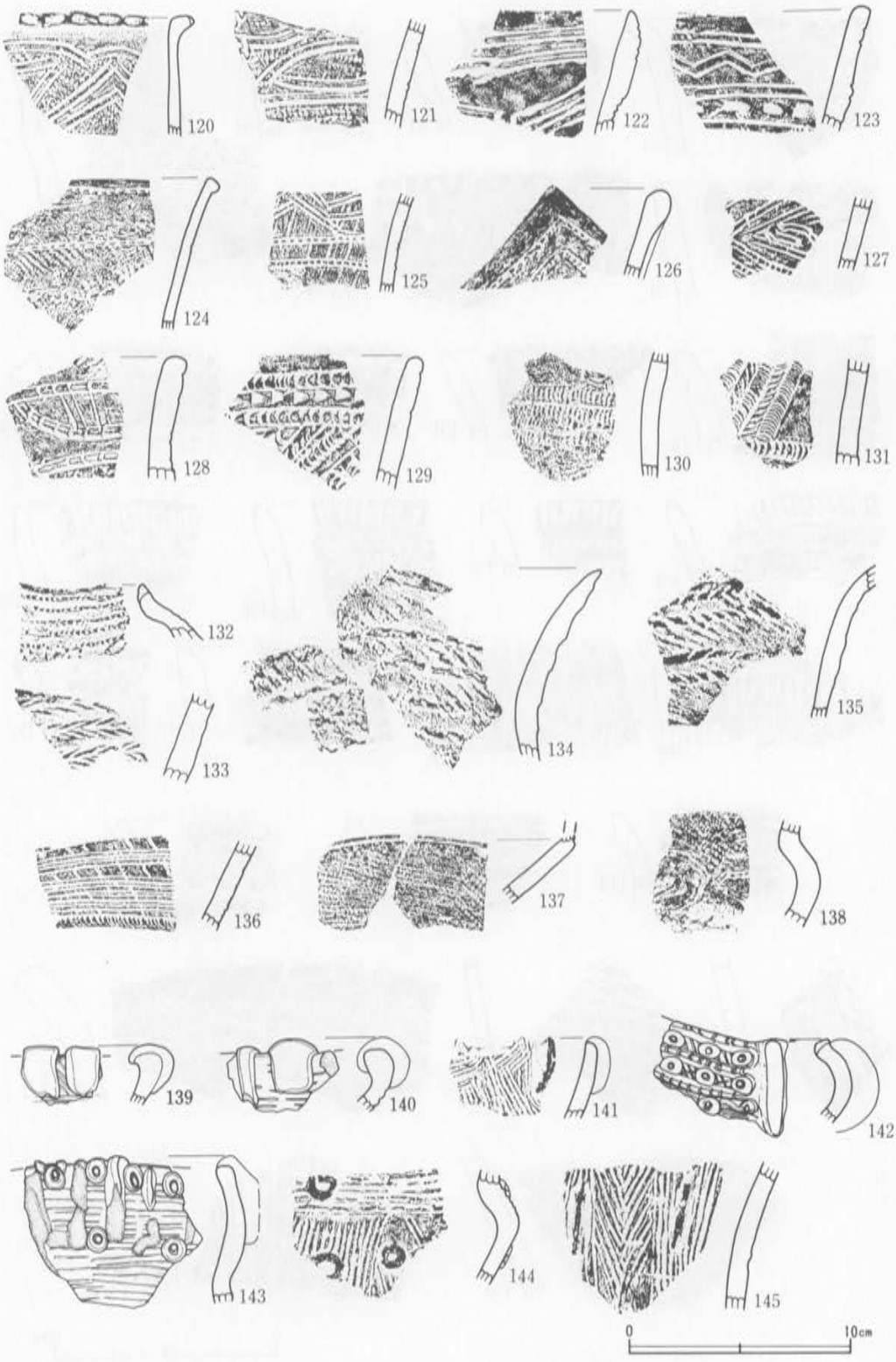
第243図　縄文時代前期の土器(3)



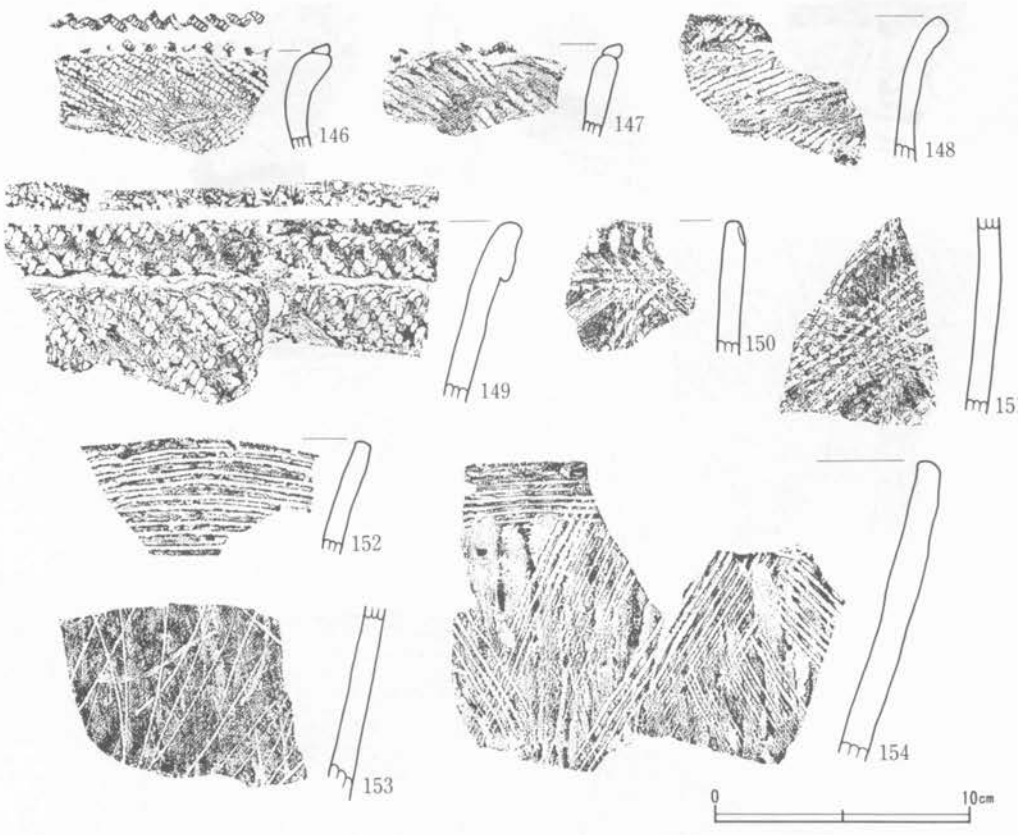
第244図　縄文時代前期の土器(4)



第245図　縄文時代前期の土器(5)



第246図　縄文時代前期の土器(6)



第247図　縄文時代前期の土器(7)

つもの，10は表に隆帯がある。施文にはアナダラ属の貝が使われたと思われる。出土地点に片寄りはない。

第2群　前期の土器（第241図～第247図）（図版78～83）

第2群の土器は，まず胎土に繊維を含むものと，含まないものに大別し，さらに文様をつけるのに用いた工具によって細分した。ただし文様が複数の工具によって構成されている場合があり，その時は，特徴的な文様によって分類を行い，複合した文様ごとには細分していない。

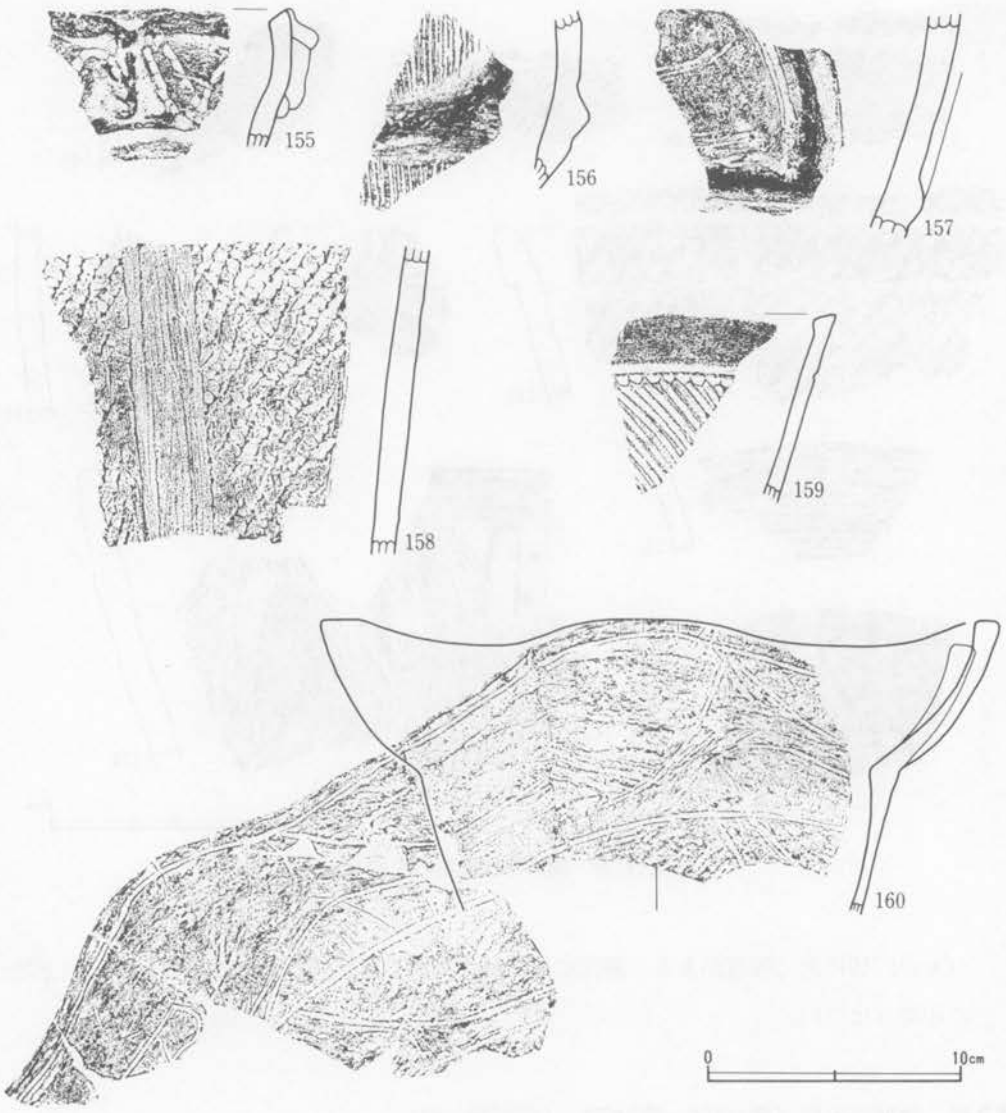
A類　胎土に繊維を含むもの（12～52）

A－1　文様が縄文だけで構成されるもの（12～22）

口縁の形は波状をなすものと平らなものの双方がある。施文される縄文は単節の斜縄文，附加条等様々である。胎土や焼成，整形なども多くのバラエティーがある。12はただ一つ器形の推定ができるもので推定口縁径27cm，全面に同一方向の単節縄文を施してある。

A－2　棒状工具によって施文されるもの（23・24）

23は棒状工具による刺突文を口唇部のすぐ下にめぐらしている。24は胴部の破片で縦方



第248図　縄文時代中期・後期の土器

向の平行沈線文を施している。双方ともに地文に縄文を持つ。

A－3　竹管様工具によって施文されるもの(25～48)，施文の方法によってさらに4つに分類される。

a．コンパス文（25～28，30，41）

地文に縄文を持つもの（25～27）と持たないもの（28，30，41）がある。地文を持たないものは，平行沈線文や有節平行沈線文と複合している。

b．平行沈線文（29～37）

地文に縄文を持つもの(31～34，36，37)と持たないもの(29，30，35)がある。35～37は刺突文や有節平行沈線文と複合している。

c．刺突文（36～40）

円形の刺突文を持つもの（36～38，40，52）と刺突してから器面を引きずるもの〈これは，有節平行沈線と同一の手法と思われる〉（35，36，39）の2種類がある。

d．有節平行沈線（41～48）

地文に縄文を持つもの（43～46）と持たないもの（41，42，47，48）がある。おおむね口縁に横位に施文されるものが多い。一段だけのものと，複数のもの（44～48）があり，他の文様（コンパス文，平行沈線文など）と複合している。

A－4　いわゆる指頭圧痕を持つもの（49，50）

縄文を地文として持つ。波状口縁の頂部に縦に複数が施文される。52は平行沈線文と複合する。

A－5　その他

51は無文の土器で，口唇に刻みがある。52は地文に縄文を持ち，刻みのついた横位の隆線と円形刺突文を持つ。

B類　胎土に繊維を含まないもの（53～154）

B－1　貝殻による文様を持つもの（53～93）

a．文様が貝殻文だけで構成されるもの（53～58）

貝の腹縁を使用した連続波状文（53，55～57）と背圧痕を連続して施文したもの（54，58）がある。使用される貝はハマグリ類によるものとアナダラ属によるものがある。

b．貝殻文を地文に持ち，口唇，口縁に文様を持つもの（59～70）

棒状工具あるいは半截竹管様工具で施文される。口唇部に刻みを持つもの（59～65）と口唇～口縁にかけて比較的ていねいに施文する一群（66～70）とがある。62～65，67～68，70の各土器は刺突文や平行沈線文と複合している。

c．貝殻文を地文に持ち，口唇，口縁に折り返しや貼り付けを施すもの（71～77）

71～73は口縁部に折り返し部を持つもので，折り返した部分は地文を持たない。71と73は折り返し部に刺突文を持つ。74～77は粘土を貼り付けているもの。74，75は口唇部に一段ないし二段の薄い粘土帯を貼り付けて，平坦にしている。さらにその上を指で押してアクセントをつけている。76は波状口縁の頂部に突帯を貼り付けている。77は口唇部に粘土粒あるいは，くねった粘土ひもを貼り付け，さらにその上から貝殻の背圧痕を施している。

d．貝殻文を地文に持ち，棒状工具，竹管様工具によって施文されるもの（78～84）

半截竹管様工具によるもの（78，80～82）と棒状工具によるもの（79，82～84）がある。82は両方の施文が複合している。84はこの他に刷毛目状の文様を持つ。

e．貝殻文を地文に持ち，磨り消しを伴うもの（85～89）

全て棒状工具による沈線で三角形，紡錘形を区画し，地文を磨り消している。85は口

唇部にくねった粘土帯を貼り付けている。おおむね，ていねいな作りである。

f．その他（90～93）

波状口縁の口縁部，磨り消し文，口唇直下の縦位の沈線文を特徴とする。

B－2　貝殻による地文を持たないもの（94～119）

a．口唇，口縁に文様を持つもの（94～111）

94～103は口唇部に文様を持つもの。無文のもの（94，98～100）と刺突文と複合するもの（95～97，99，101～103）がある。100は貝殻背圧痕を口唇に施している。

104～111は口縁に文様を持つもの。棒状工具による沈線(104～106)，半截竹管様工具による沈線（107～109)，刺突（110～111）がある。

b．輪積痕を残すもの（112～114）

輪積み痕下端に指頭押捺するもの（114）としないもの（112，113）がある。

c．棒状工具によって施文されるもの（115～116）

胴部に連続的な刺突が施される。

d．櫛歯状工具によって施文されるもの（117～119）

刷毛目様の文様が施文される。全体に厚手のものが多い。

B－3　地文に縄文を持つもの（120～138）

a．半截竹管様工具によって施文されるもの（120～131）

平行沈線文を施すもの（120～123)，有節平行沈線文を施すもの（124～129)，爪形文を施すもの（130，131）がある。

b．細い隆線を貼り付け，その上に刻みを施すもの（132～135）

c．その他（136～138）

B－4　こぶ状の突起や円形貼り付け文を持つもの（139～145）

C類　基本的にはB類に属すと思われるが，どこに分類すべきかが不明なもの（146～154）

146～149は地文に縄文を持つ，146は口唇に粘土帯を貼り付け口唇部にも縄文を施文する。149は折り返し部を持ち，口唇も含めて縄文を施している。150，151は同一個体の可能性もある。貝殻文の地文を持ち，その上に細い沈線で三角形の区画を施す。152～154は櫛歯状工具による文様を持つ土器で全体に厚手。

第3群　中期の土器（第248図－155～158）（図版84）

第4群　後期の土器（第248図－159～160）（図版84）

160は推定口径28.5cm，無文にもかかわらず，沈線区画の中をさらに磨いて，あたかも磨り消し文を表出するかのような整形をしている。

グリッド出土の石器

総計14点出土した。石器組成は石鏃4点，石匙2点，ピエス・エスキーユ1点，磨製石斧3点，打製石斧1点，磨石（片）1点，石皿（片）2点となっている。

以上の石器群はいずれも包含層中より出土しており，具体的に土器型式との時期的な相関関係は把握し得ない。

1．石鏃（図249—1～4）

1～2は凹基，3～4は平基の石鏃である。4については調整が粗雑で未成品の可能性が高い。

5は石匙の基部である。先端部が欠損している。形態的には縦型石匙と言えよう。

7も同様に石匙かと思われる。ただし，つまみ部が明瞭ではない。

6は石斧である。小型の礫を素材としており，刃部付近を入念に研磨している。

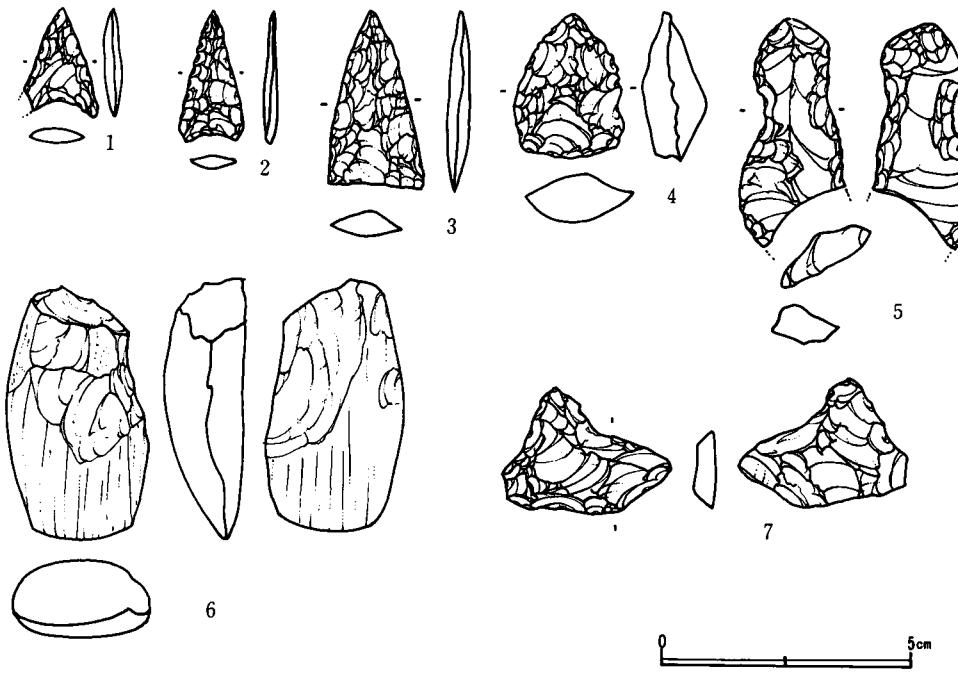
8は石皿の破片である。片面に凹みが三孔あり，凹石として捉えることも可能である。

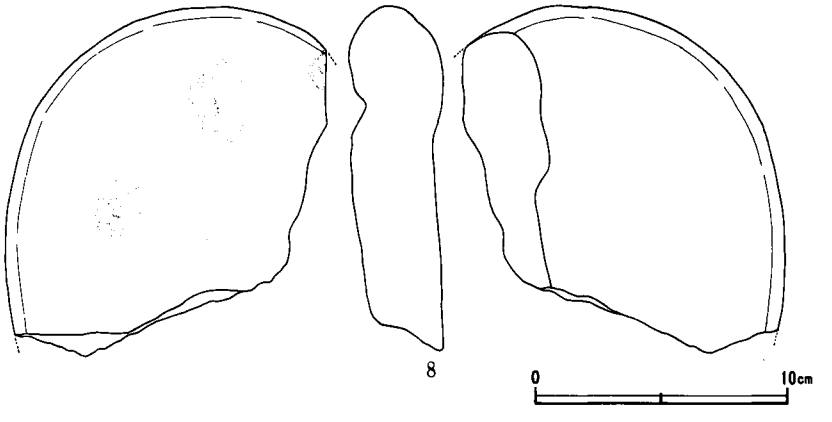
9は打製石斧である。本来定角式石斧であったらしく，基部に研磨痕が残存している。

10は乳棒状石斧である。先端部が再調整されている。

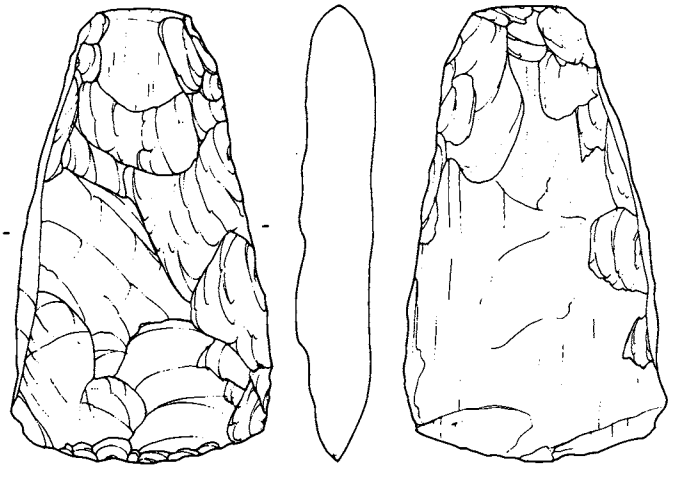
矢船遺跡縄文時代石器一覧表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ（cm）			重量(g)	挿図番号	欠損の有無	石材
			長さ	幅	厚				
1	D3—11—3	石鏃	3.5	1.9	0.5	2.8	249—3	無	安山岩
2	C4—06—2	石鏃	2.2	1.5	0.3	0.8	〃—1	片脚	チャート
3	C3—22—4	石鏃	2.5	1.3	0.3	0.7	〃—2	無	〃
4	C3—10—1	石鏃	2.8	2.2	1.1	6.7	〃—4	〃	〃
5	D3—05—1	石匙（？）	3.3	2.5	0.7	4.1	〃—7	〃	〃
6	B2—11—6	石匙	4.4	2.1	0.8	6.3	〃—5	有	珪質頁岩
7	D3—11—2	ピエス・エスキーユ	2.6	2.7	0.6	5.6	—	無	チャート
8	C3—09—2	磨製石斧	4.8	4.4	1.2	29.3	—	断片	緑泥片岩
9	C3—22—3	磨製石斧	13.4	6.0	3.2	331.0	250—10	有	緑泥片岩
10	B2—07—2	打製石斧	10.8	6.8	2.1	260.0	〃—9	無	砂岩
11	B3—16—20	磨製石斧	5.0	2.8	1.6	29.0	249—6	〃	玄武岩
12	B3—21—1	磨石	3.7	6.3	2.8	102.0	—	断片	砂岩
13	B3—16—1	石皿片	4.3	3.2	1.8	39.0	—	〃	安山岩
14	表採	〃	16.4	11.3	3.9	930.0	249—8	有	〃

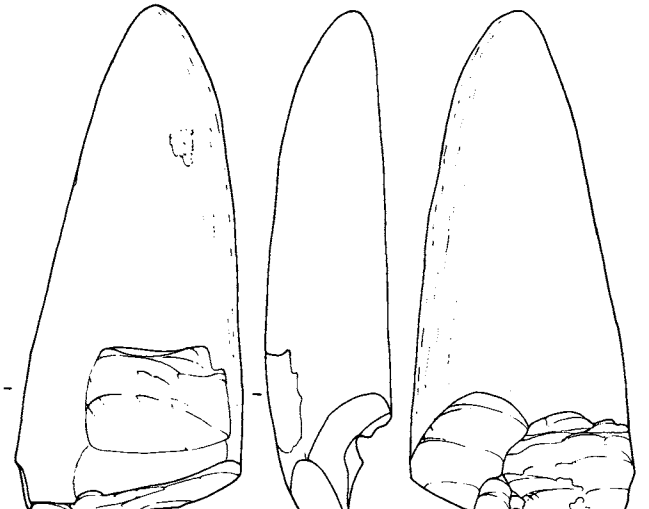




第249図　縄文時代石器実測図(1)



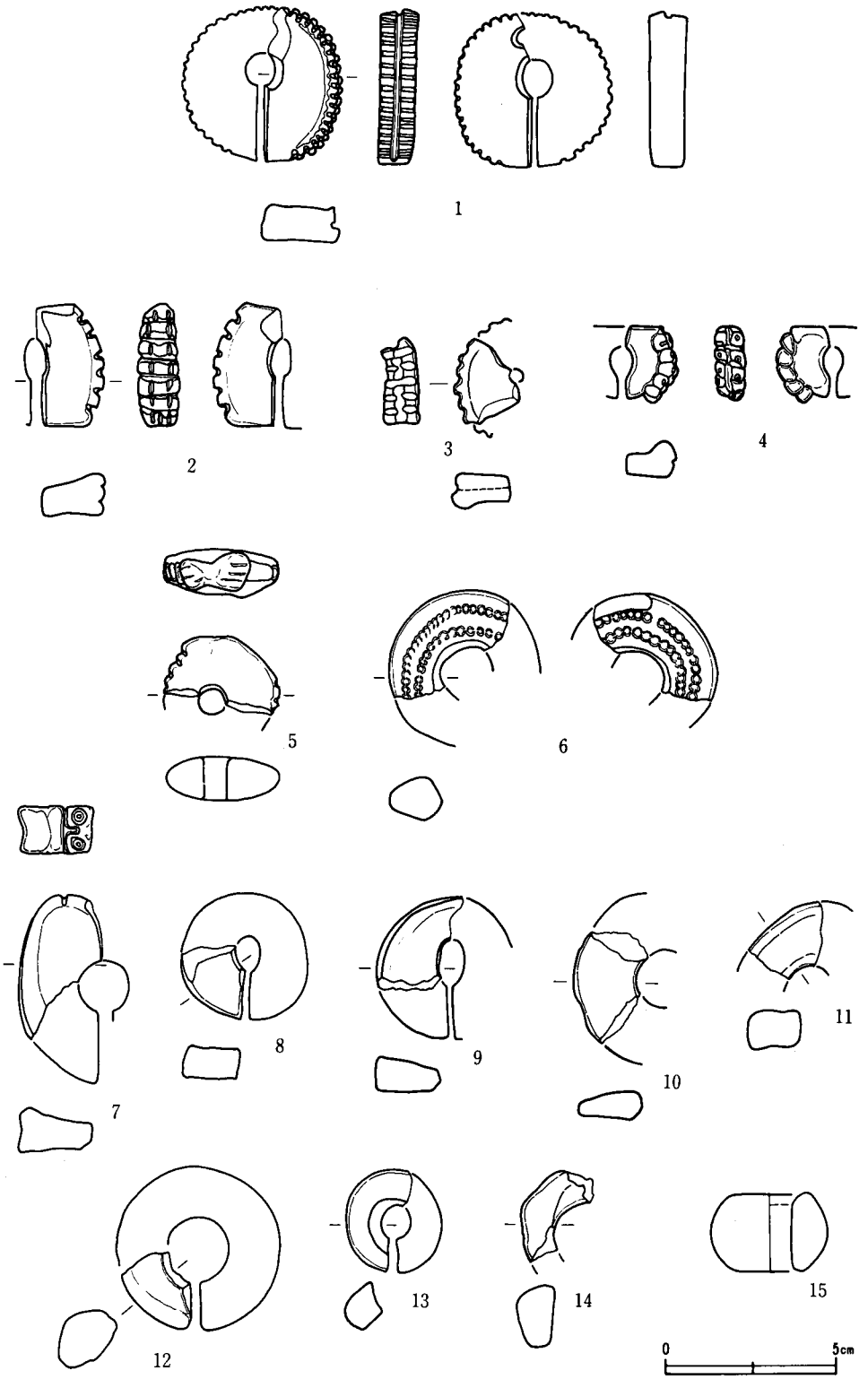
9



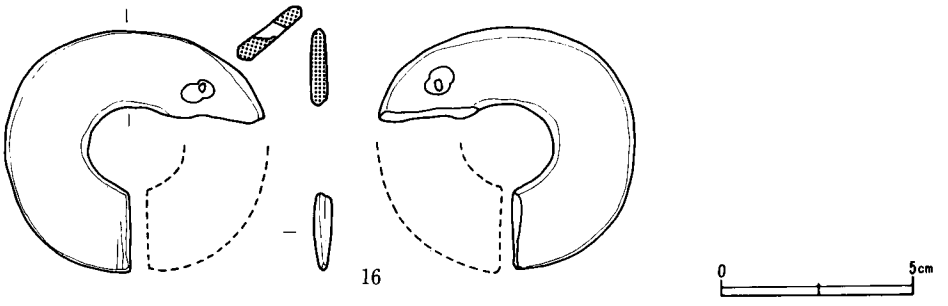
10

0 5cm

第250図　縄文時代石器実測図(2)



第251図　その他の遺物(1)



第252図　その他の遺物(2)

その他の遺物

玦状耳飾りが16点発見された(1～16)。16だけが石製，他は全て土製である。遺構にともなうものはなく，みな，縄文土器と同じ包含層から出土している。土器の年代からみて，これらの玦状耳飾りもほとんどが，縄文時代前期後半に属するものと推定される。平面的にみると，分布状況に著しい片寄りは認められない。しいて言えば，C－3グリッドの5個をはじめとして台地平担の中央部から多く発見されている。

1．現存長4.5cm，幅2.3cm，厚さ1.0cm，重さ12.7g発見された16点の中で最もていねいな作り。側面に沈線による文様を持つ。3㎜間隔ほどで1㎜幅の横の沈線を施文，その後縦方向の沈線を施文する。全面が赤彩されている。胎土，焼成とも良好。頂部に焼成後，二次的な穴が開けられている。C2－09グリッド出土。

2．現存長3.5cm，幅1.8cm，厚さ1.2cm，重さ7.6g側面に沈線による文様を持つ。縦に2本の沈線（幅約1㎜）を施文後，ほぼ5㎜間隔で横の沈線（幅約3㎜）を施文。全面赤彩D2－24グリッド出土。

3．幅1.8cm，厚さ1.0cm，重さ3.6g，1，2と同系の文様，5㎜間隔ほどで横の沈線を施文後，縦の沈線を施文。C3－12グリッド出土。

4．現存長3.0cm，幅1.5cm，厚さ1.0cm，重さ2.5g，16個のうち最も小さい，基本的には1～3と同系と思われる。まず径5㎜ほどの粘土粒を側面に貼りつけ，そのうえを円形の細い竹管様のもので刺突する。さらに粘土粒と粘土粒の間を沈線で区切っている。002住居出土。

5．推定径3.4cm，現存幅1.5cm，厚さ1.2cm，穴の径0.8cm，重さ7.4g両方の側面には，横方向の「きざみ」様の文様を施す。また頂部には，「ひょうたん」状の粘土帯（おそらく削り出したもので貼り付けではないと思われる。）があって浅いきざみが認められる。001住居出土。

6．推定径4.5cm，幅1.5cm，厚さ1.2cm，重さ10.2g，両面に径3㎜ほどの円形竹管による刺突文を2条連続して施文している。整形はていねいであるC2－22グリッド出土。

7．幅3.2cm，厚さ1.2cm，重さ9.2g，形状不明，円形にならずハート形のような形をとる可

能性がある。頂部のみに文様が残っている。細い沈線で方形の区画を作り，中を円形の竹管様のもので刺突している。やや砂質，C3－22グリッド出土。

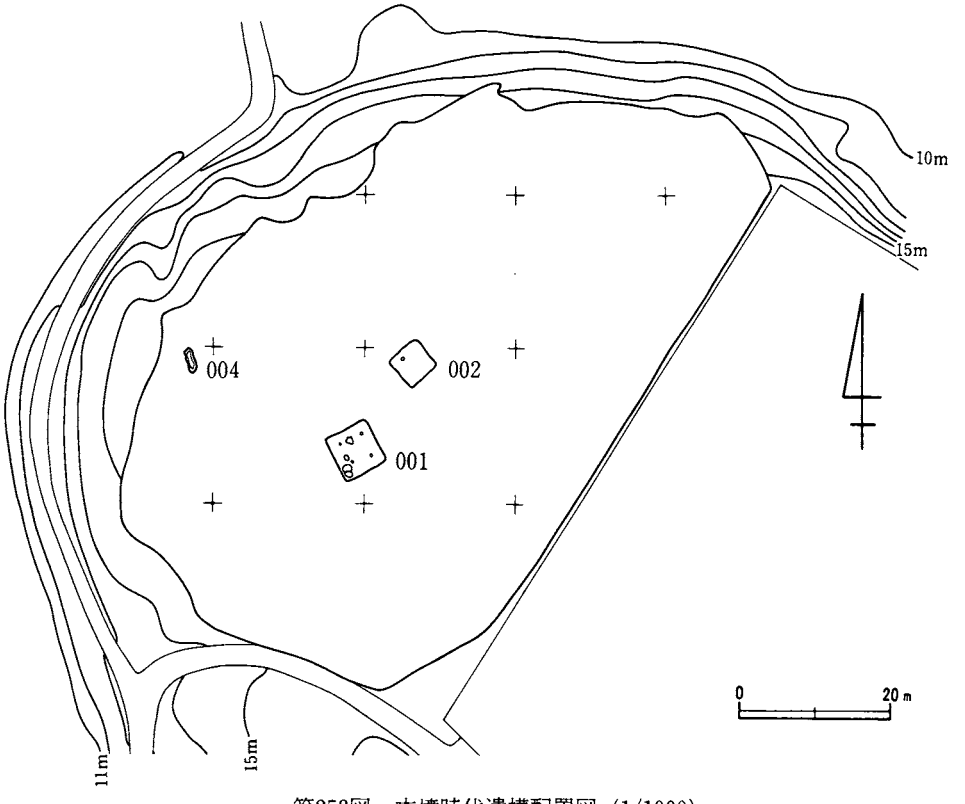
8～11．断面がおおむね四角形となる無文の破片。長方形に近いもの（8，11）や内側が薄くなるもの(9)，外側が薄くなるもの(10)などのバラエティーがある。8と9は同一個体の可能性もある。8．B3－16グリッド，9．B3－21グリッド，10．B3－03グリッド，11．001住居出土。

12～14．幅よりも厚みの方が大きい値をとる無文のもの，全体に整形が雑である。12．002住居，13．A2－07グリッド，14．D2－17グリッド出土。

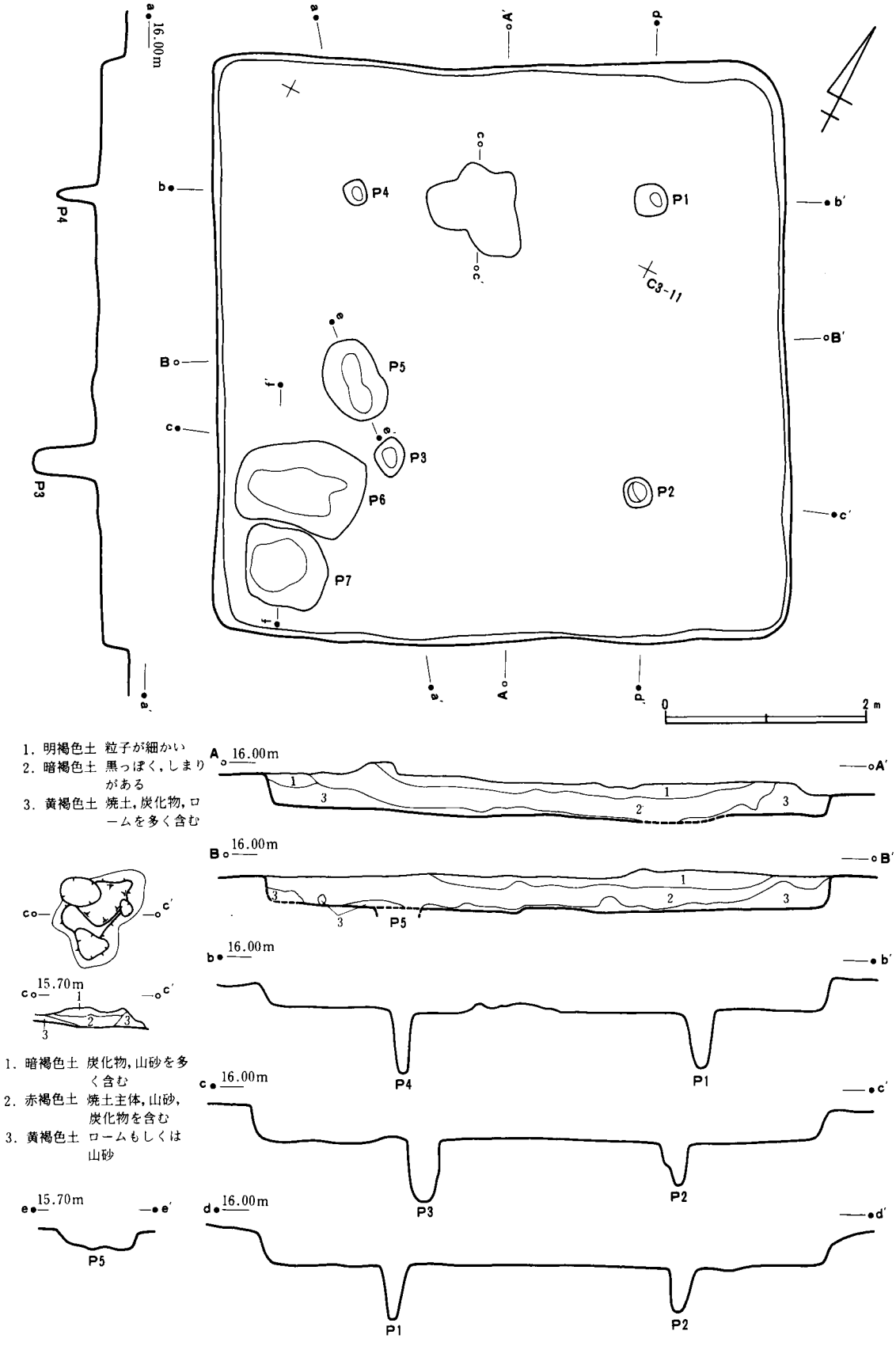
15は一見すると，12～14と同一のタイプと思われる。しかし，きわめてていねいにミガキが施され，色調も他のものより明るい。これら特徴は，むしろ土玉に近いものである。古墳時代のものである可能性もあるので，12～14とは区別した。

16．現存長6.4cm，幅2.1cm，厚さ0.5cm，重さ25.7g，肩の部分に両側から穴があけられている。面取り等も含めて，比較的ていねいな作り，片岩系の石材を使用，C3－10グリッド出土。

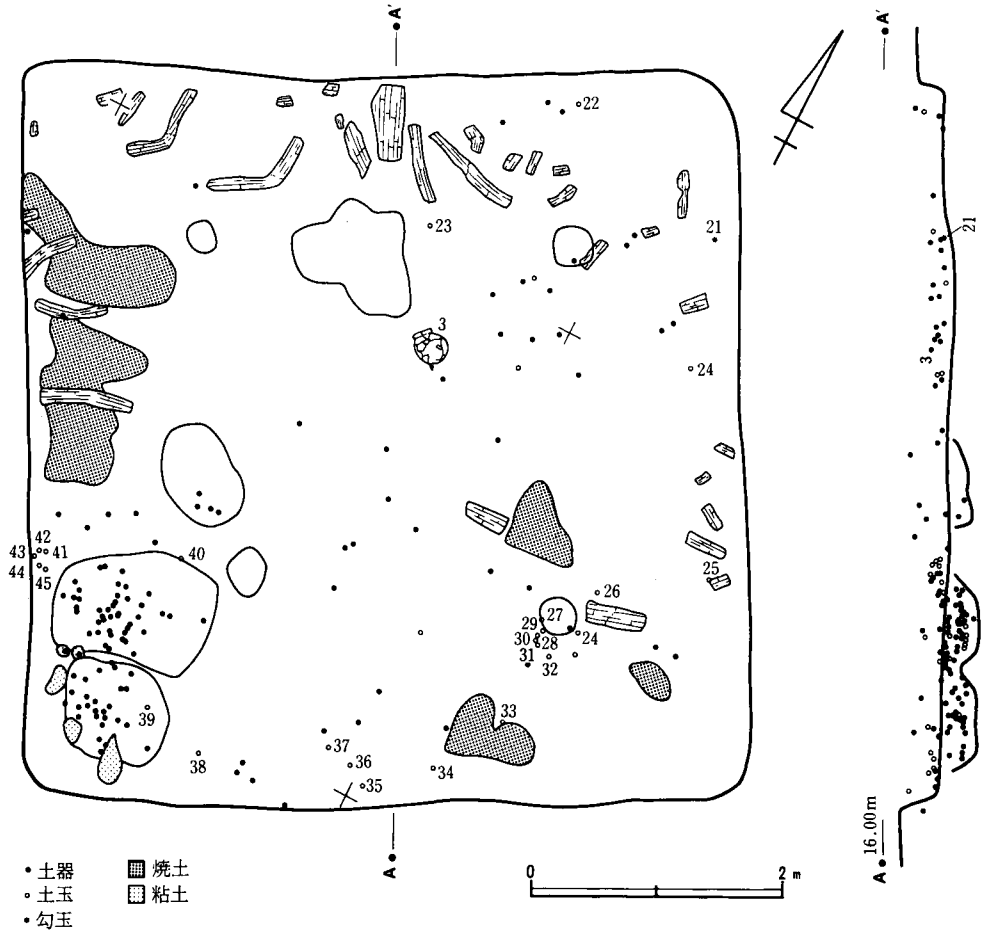
第3節　古墳時代



第253図　古墳時代遺構配置図（1/1000）



第254図　001住居跡



第255図　001住居跡遺物出土状況図

001住居跡

位　置　D 3－14，15，20，C 3－6，11，16グリッド

プラン　隅丸方形　　**規　模**　5.8m×5.8m

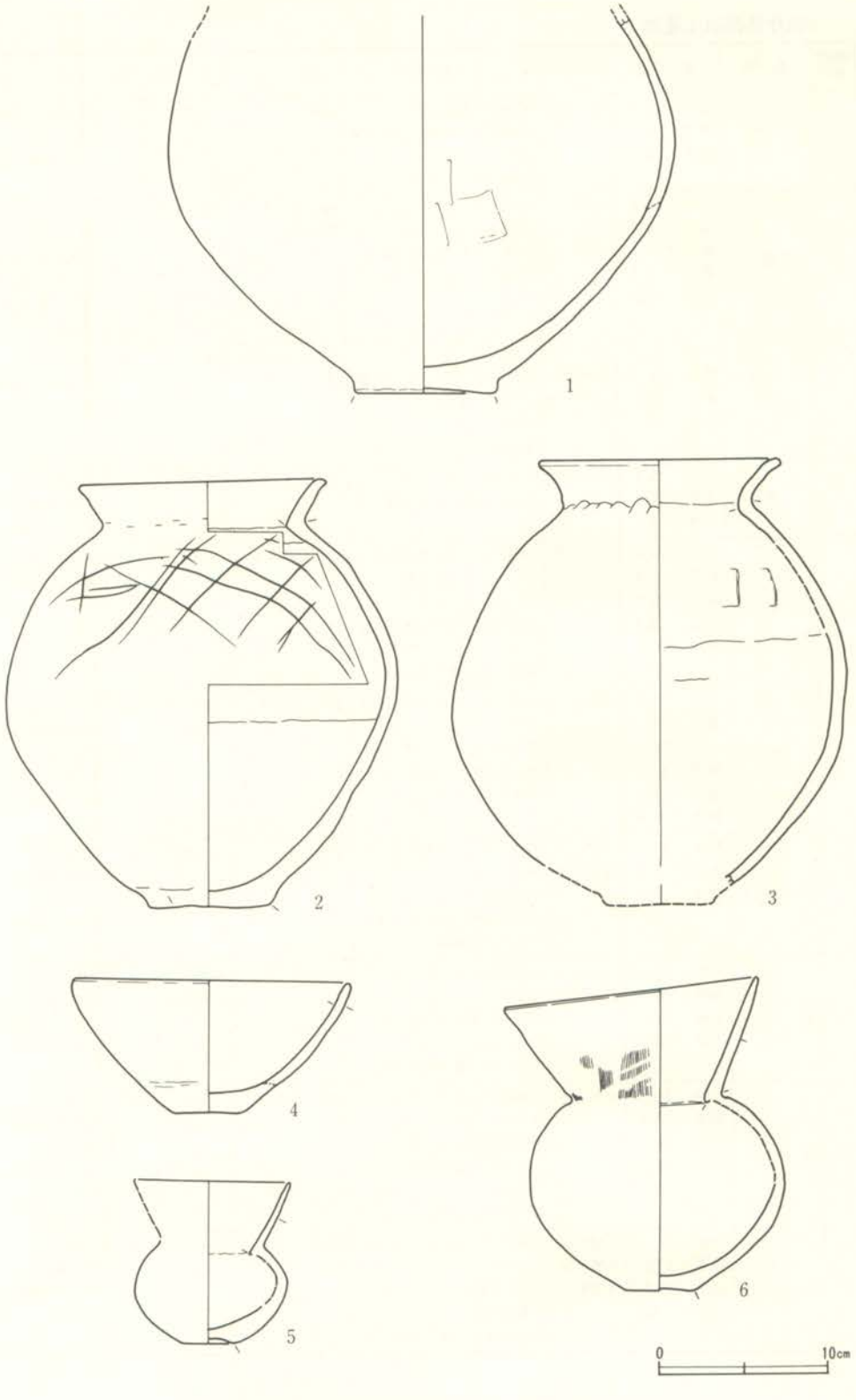
床面積　33.1㎡（1/40図面を計算した。柱穴・貯蔵穴は除いてある。以下同じ）

主軸方向　N－28°－W　　**現存壁高**　約30cm

炉　北側柱穴間のやや西寄り。90cm×90cm程の不整形。炉を覆う形で山砂の堆積がみられ注目される。

柱　穴　4本　　**貯蔵穴**　南西に3ケ所。新旧関係ははっきりしない。一部分に粘土が堆積。

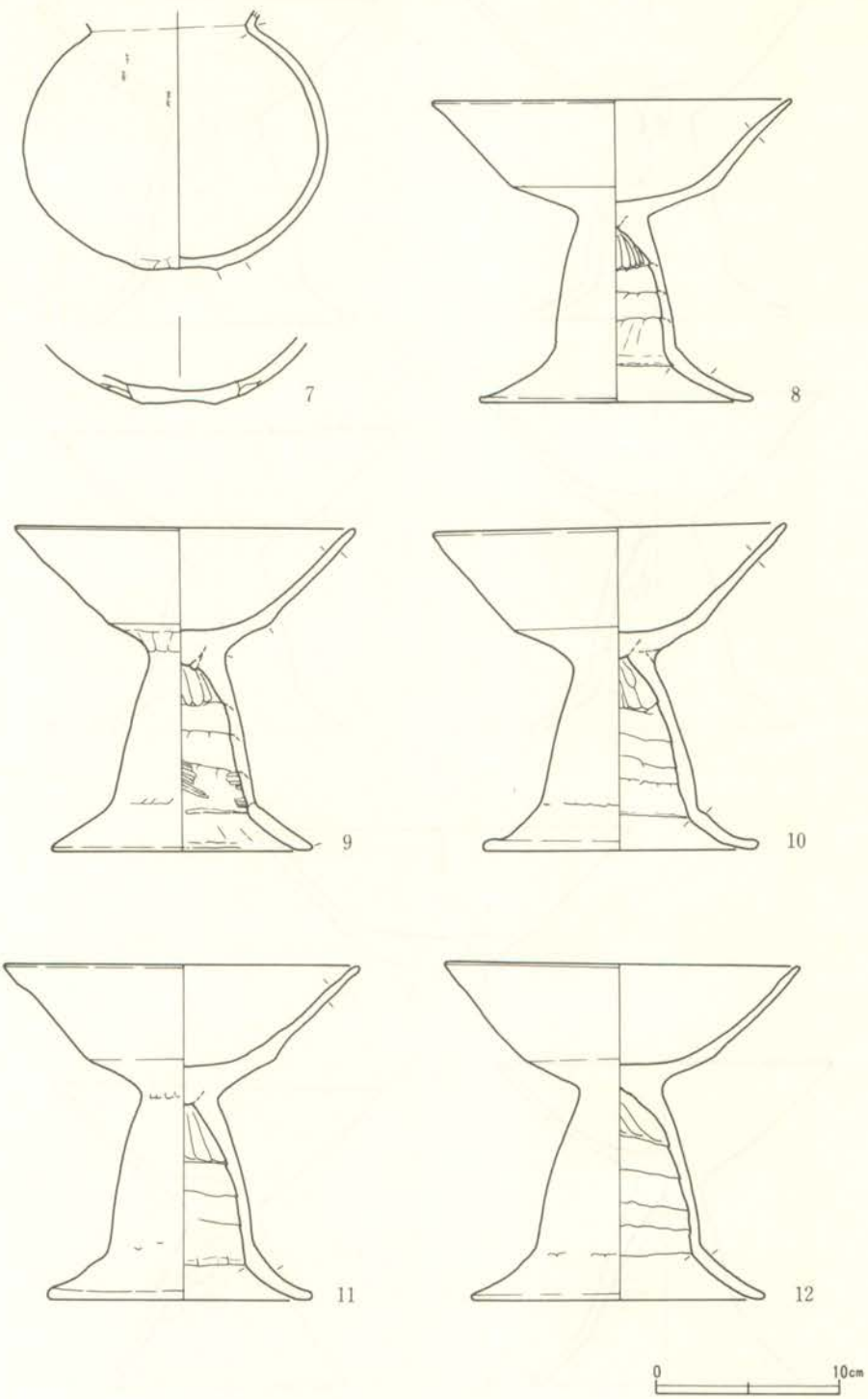
所　見　遺物は貯蔵穴を中心に約200点が出土している。焼土や炭化材の出土状況から考えて焼失家屋であろう。時期は5世紀と思われる。



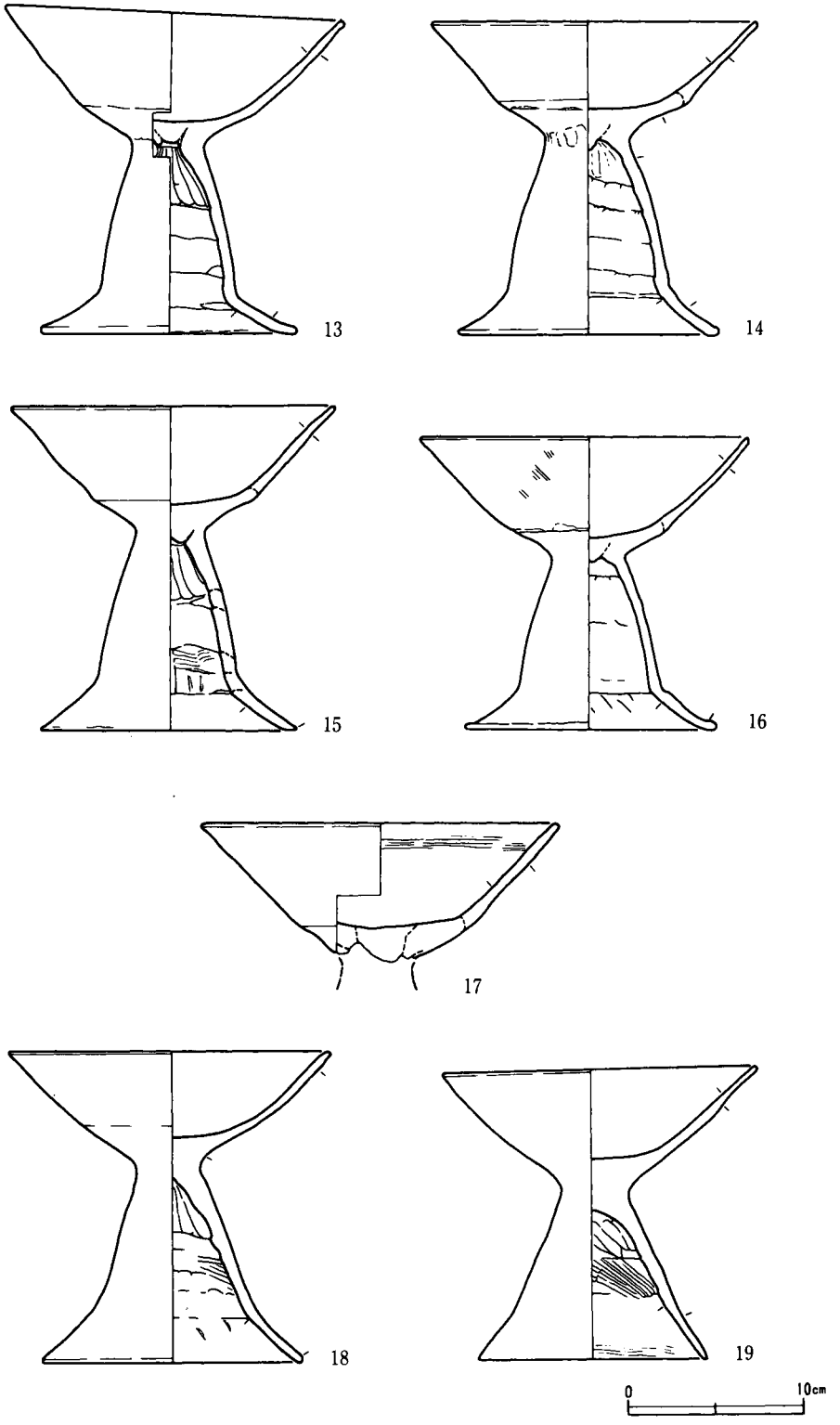
第256図　001住居跡出土遺物(1)

001住居跡出土遺物

挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	胎土	色調	焼成	備考
1	壺	器高 (22.2) 胴径 30.1 底径 8.5	胴のみ完存	粘土ひも積み上げ 胴部外面一斜め方向ナデ後縦位ヘラミガキ 胴部内面一ヘラナデ	砂粒	明褐色	良	黒斑(内外共底部の近く) スス(外側一部分)
2	甕	口径 14.1 器高 24.8 胴径 23.3 底径 7.1 頸径 11.9	完形	口縁内外一ヨコナデ 胴部外面一斜め方向のケズリ様ミガキ(巾1cm前後) 胴部内面一おそらくナデ	細砂粒一多 精選されている	褐色～赤褐色	良	図版87—1 胴下半の接合痕は分割作製の痕跡？ 胴上半に格子状の線刻一調整終了後焼成前，スス付着
3	甕	口径 14.2 器高 〈24.9〉 胴径 23.1 頸径 11.1	胴下半を除き完存	口縁内外一ヨコナデ 胴部外面一胴上半ケズリ様ミガキ，胴下半（ヘラ）ミガキ 胴部内面一（ヘラ）ナデ	砂粒，細砂粒一多	褐色	普	図版87—2 内外面とも剝離が激しい
4	鉢	口径 16.1 器高 7.7 底径 4.1	ほぼ完形	口縁内外一ヨコナデ 外面～底部一ケズリ様ミガキ	砂粒一多	褐色	良	図版87—3 黒斑(外面の約½) 赤彩？（内面）
5	小型坩	口径 (9.4) 器高 9.4 胴径 9.0 底径 3.0 頸径 6.1	ほぼ完形	口縁内外一ナデ整形後ヨコナデ後軽いヘラミガキ 胴部外面一ケズリ様ナデ後ヘラミガキ 胴部内面一指によるナデ	白色砂粒一多	暗褐色	良	図版87—4 スス(胴外面約½)
6	大型坩	口径 15.1 器高 16.3 ～18.1 胴径 15.2 底径 4.0 頸径 8.9	完形	口縁内外一ヨコナデ後ヘラミガキ 胴部外面一ハケ整形(8本／cm)後ケズリ様ミガキ 胴部内面一ナデ？	砂粒，細砂粒	褐色～赤褐色	良	図版87—5 黒斑(胴内外約¼) 赤彩(外面全体，内面頸部以上) 胴部内外面の剝離が激しい
7	大型坩	胴径 16.6 底径 4.0 頸径 9.0	頸部以下ほぼ完存	胴部外面一ハケ整形後ミガキ 胴部内面一ナデ 底部は成形手法がはっきりとわかる好資料	砂粒一多	乳白褐色	普	図版87—6 黒斑(外面胴下半の一部分) 赤彩（外面にこん跡）
8	高坏	口径 19.3 器高 16.2 底径 14.8 頸径 3.7	坏部⅓他は完形	口縁内外一ヨコナデ後ヘラミガキ 坏内外～脚外面一ていねいなヘラミガキ 脚部内外一横方向のナデ	砂粒一多	褐色～赤褐色	良	図版88—7 黒斑（坏内外面） スス(坏外面若干) 坏内面は剝離が激しい
9	高坏	口径 18.3 器高 17.4 底径 14.2 頸径 4.1	完形	口縁内外一ヨコナデ後ヘラミガキ 坏部外面下半一ケズリ 坏部外面～脚部外面一ヘラミガキ 脚部内面一ナデ	砂粒，細砂粒一多	褐色～赤褐色	良	図版88—8 黒斑(坏・脚部内面約½) 赤彩（坏内面のみ確認） 坏内面剝離
10	高坏	口径 19.0 器高 17.5 底径 15.0 頸径 4.5	口線部の一部を除き完形	口縁内外一ヨコナデ後ヘラミガキ 坏部内面一ヘラミガキ～脚部外面 脚部内外面一横方向のナデ	細砂粒一多 細礫	燈褐色	良	図版88—9 黒斑(脚内外一部) 赤彩（坏内面と外面全部）



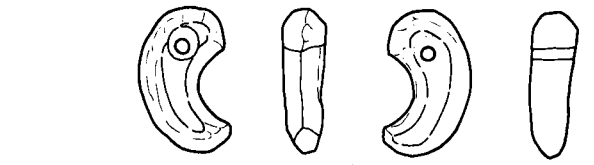
第257図　001住居跡出土遺物(2)



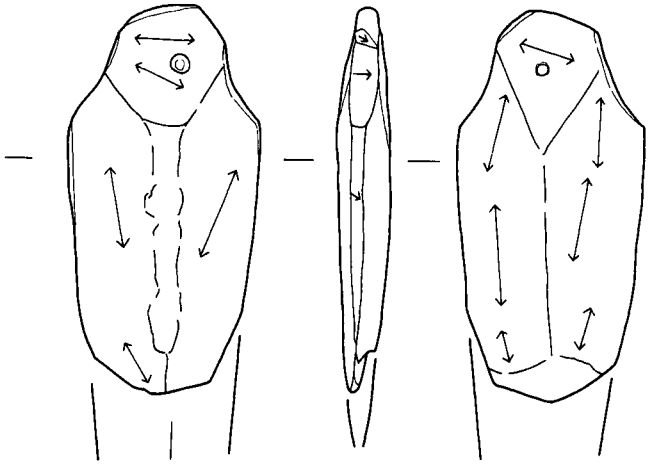
第258図　001住居跡出土遺物(3)

001住居跡出土遺物

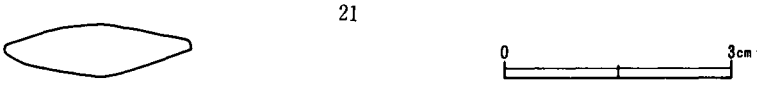
挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	胎土	色調	焼成	備考
11	高坏	口径 19.3 器高 18.0 底径 14.5 頸径 4.2	口縁部の一部を除き完形	口縁内外ーヨコナデ後ヘラミガキ 坏部内面ーヘラミガキ ～脚部外面 脚部内外面ー横方向のナデ	砂粒，細砂粒ー多	褐色	良	図版88ー10 黒斑（全面約⅓） ス ス（外面に若干）
12	高坏	口径 19.2 器高 18.2 底径 15.9 頸径 4.4	ほぼ完形	口縁内外ーヨコナデ後ミガキ 脚坏外面ーケズリ様ミガキ 脚部内外面ー横方向のナデ	細砂粒ー多	赤褐色	良	図版88ー11 黒斑（⅓，破片によって異なる．二次的加熱によるか？） 赤彩（坏内面，外面　全部）
13	高坏	口径 19.2 器高 18.6 底径 14.5 頸径 4.0	ほぼ完形	口縁ー横方向のナデ後軽いミガキ 坏内面ーミガキ 坏脚外面ーケズリ様ナデの後ヘラミガキ 脚内面ーナデ	砂粒，細砂粒ー多	明褐色	良	図版88ー12 黒斑（全体の約⅓） 赤彩（脚外面の一部だけで確認）二次的に被熱している
14	高坏	口径 18.3 器高 17.6 底径 14.8 頸径 4.8	完形	口縁ーヨコナデ後ヘラミガキ 坏内面～脚外面ーミガキ 接合部ーケズリ様ミガキ 脚内外面ーナデ	砂粒	褐色 赤褐色	良	図版89ー13
15	高坏	口径 17.9 器高 18.0 底径 14.3 頸径 3.8	ほぼ完形	口縁ーヨコナデ 坏外面，脚すそ部ーケズリ様ミガキ 脚外面ーヘラミガキ 脚内面ーナデ	砂粒ー極多	乳褐色	普	図版89ー14 黒斑（坏内面⅙） ス ス（口縁に若干） 全体に剝離が激しい
16	高坏	口径 18.3 器高 16.2 底径 14.2 頸径 4.1	ほぼ完形	口縁ーヨコナデ後ミガキ 外面ーハケ整形後ケズリ様ミガキ 脚内面ーナデ	砂粒ー多	赤褐色	良	図版89ー15 黒斑（脚すそ部に若干，坏外面¼）
17	高坏	口径 20.0	坏部¾	口縁ーヨコナデ後ミガキ 外面ーケズリ様ナデ後ミガキ 内面ーハケ整形後ミガキ	砂粒ー多	褐色	良	図版89ー16 黒斑（内½，外⅔） ス ス（口縁内外の一部分）
18	高坏	口径 18.3 器高 17.3 底径 14.8 頸径 3.6	口縁¼を除き完形	口縁ーヨコナデ後ミガキ 坏外面ーケズリ様ミガキ 脚外面ーヘラミガキ 脚内面ーナデ	砂粒，細礫ー多	褐色 赤褐色	普	図版89ー17 黒斑（脚内全面） 赤彩（脚外一部のみ確認）
19	高坏	口径 17.6 器高 15.6 ～16.3 底径 12.8 頸径 3.9	ほぼ完形	口縁ーヨコナデ後ミガキ 坏外面ーケズリ様ミガキ 脚外面ーヘラミガキ 脚内面ーナデ	砂粒ー多	燈色 乳白褐色	普	図版89ー18 黒斑（脚内一部分） 坏内面は剝離が激しい．



20



21

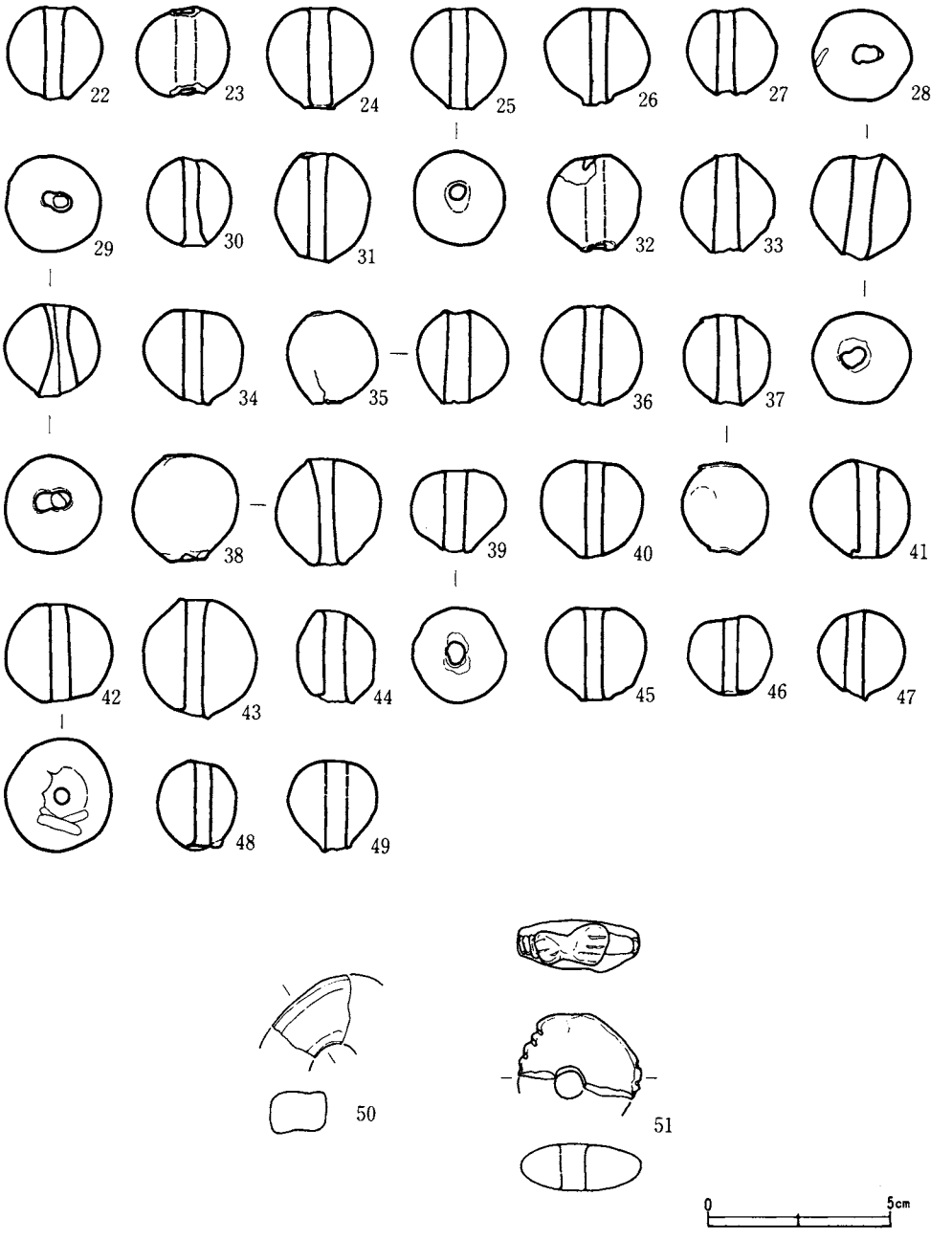


第259図　001住居跡出土遺物(4)

20は石製の勾玉で北東壁際の床面直上で発見された。完形品で長さは1.9cm，厚さ0.6cm，穴の径0.1cm強である。みかけは，濃緑ないし黒っぽい石であるが石材の詳しい名称は，不明である。穴は両側からあけられている。整形はまず，表・裏を，次に側面をみがいている。

21は剣形の石製模造品である。先端部を欠いていて，現存長5.1cm，幅2.5cm，厚さ0.7cm，穴の径0.1cmである。石材は滑石，出土位置は不明。

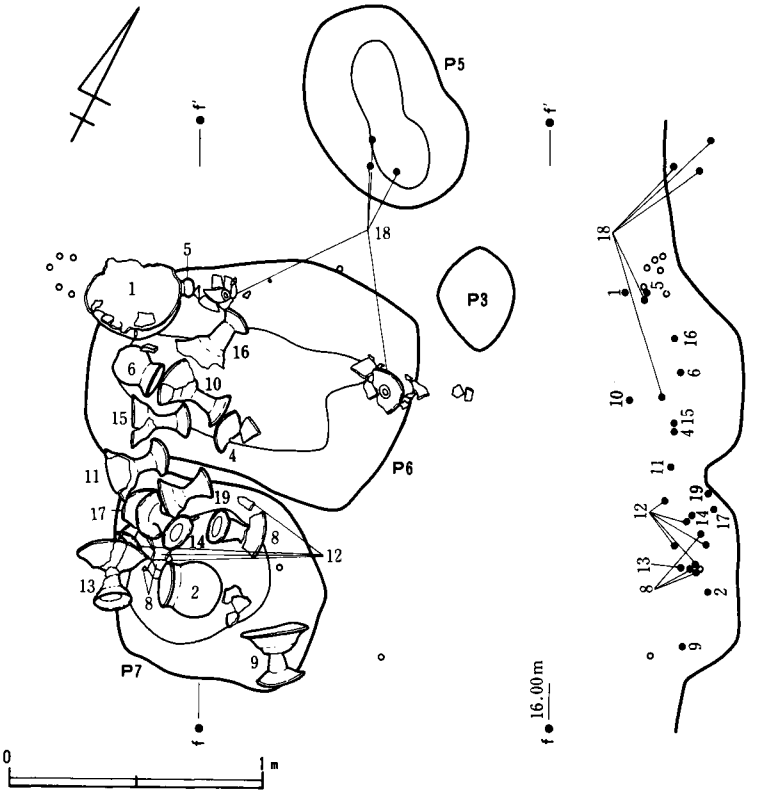
22～49は土玉である。出土状況には次のような傾向がある。(1)住居跡の北西部分からは全く出土しない。(2)北東部分からは出土するが，わずかである。(3)大部分は住居跡の南側に集中し，中でもＰ２の南側，Ｐ６の北西側に，特にまとまっている。それぞれ外面は比較的ていねいなミガキを施し平滑に整形している。穴は全て片側からの穿孔で，焼成前に図の下に向かっておこなわれている。穿孔にともなって穴の下の部分（時には上の部分も）には粘土のたまりがみられるが，焼成後にこれが剝落してしまったものもいくつかみられる(23，31)。細部を見れば，小さは違いはあるものの，形状・成・整形の手法等はおおむね同じで特徴は，以下のようである。最大径の平均は2.6cm（最小は23の2.4cm，最大は43の3.1cm）また重さは平均16.1ｇ（44の11.3ｇから43の27.6ｇまで多少ばらつくものの，大部分は11ｇ～19.5ｇの間におさまる）穴の径は0.4～0.6cmである。胎土は細砂粒を含んだものが多いがよく精選されている。色調は，明



第260図　001住居跡出土遺物(5)

褐色～褐色のものが多い，中には二次的な被熱して黒褐色に変色している破片もある。焼成は良好である。

50，51は覆土から出土した玦状耳飾の破片で縄文時代の遺物と思われる（第251図に集成）。



第261図　001住居跡貯蔵穴周辺遺物出土状況

002住居跡

位　置　C３－01，02，03，07、C２－17グリッド

プラン　方形　　**規　模**　4.6m×4.6m　　**床面積**　20.3m²

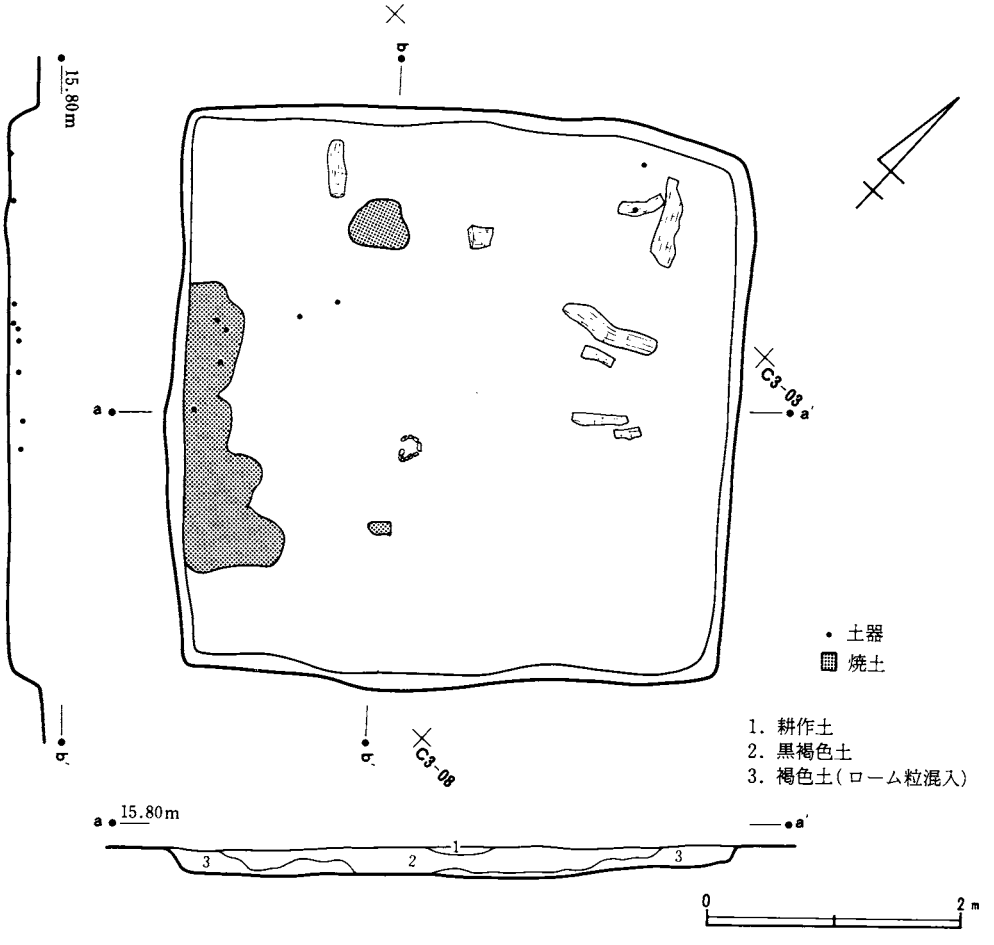
主軸方向　N－43°－W　　**現存壁高**　20～25cm

炉　北壁側寄り，やや西側。40×50cm程の不整円形

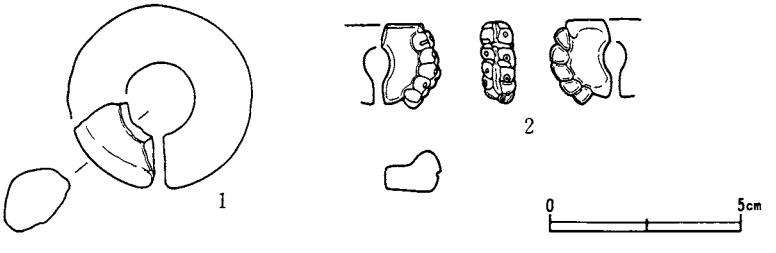
柱穴・貯蔵穴　発見できなかった

所　見　遺物は西側壁際を中心として約30点が出土している。焼土の推積がみられること，炭化材を出土していることなどから焼失家屋である可能性がある。発掘調査終了後，遺物の一部が紛失し時期決定は困難であるが，おそらく001住居跡と同時期と思われる。

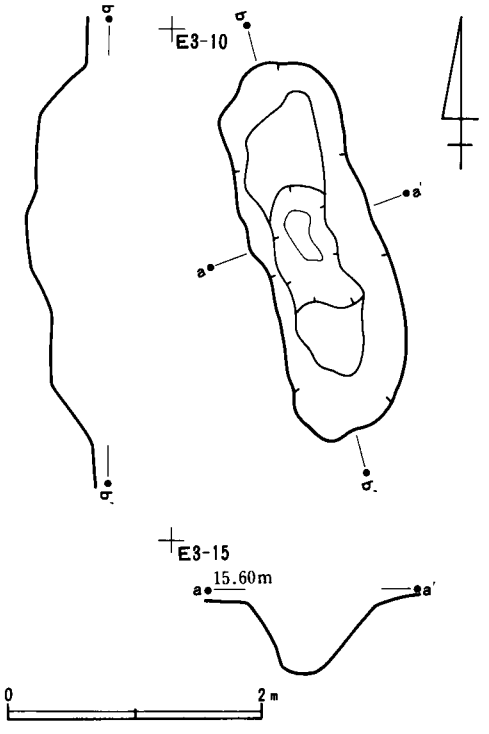
１，２は本住居跡の覆土から出土した玦状耳飾りの破片で縄文時代の遺物と考えられる（第251図に集成）。



第262図　002住居跡



第263図　002住居跡出土遺物



004土坑

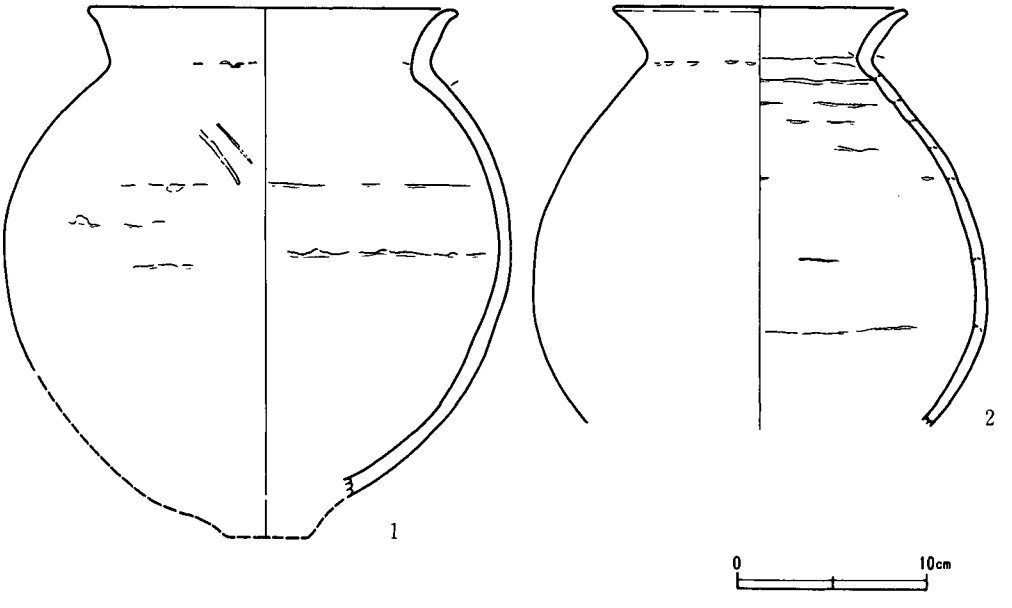
位　置　E３－10グリッド

プラン　長円形

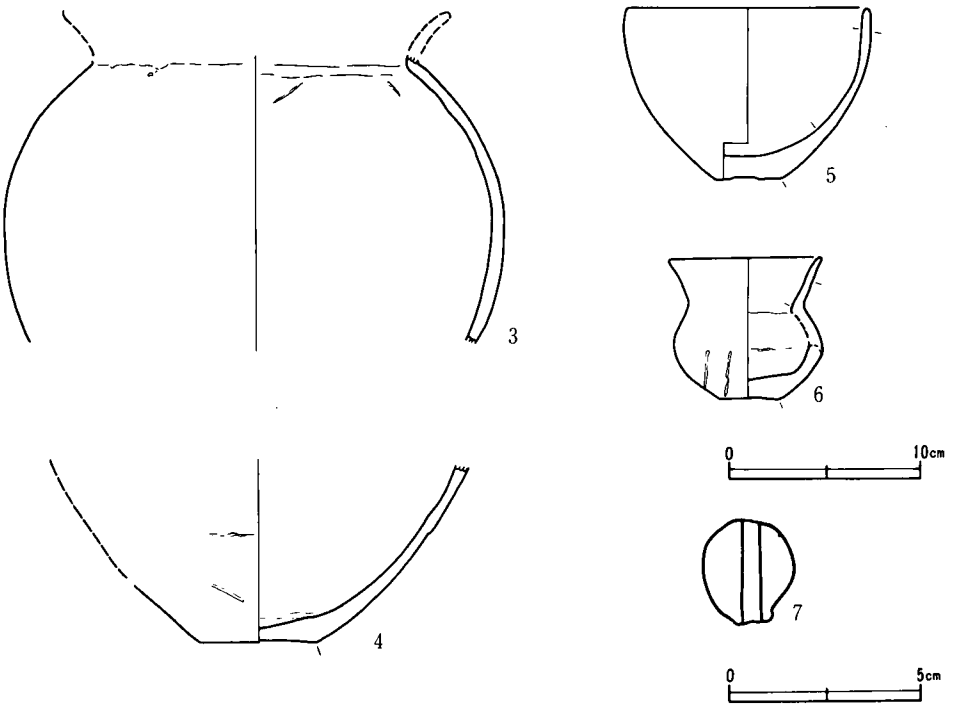
模　規　3.0m×1.0m

主軸方向　N－15°－W

所　見　確認面からの深さは約60cm
床面の中央付近にさらに一段落ちこみがある。
遺物の出土状況が不明なため，遺構の性格・時期等は確定できない。
出土した遺物は土師器がほとんどで，古墳時代中期のものと考えられる。



第264図　004土坑及び出土遺物(1)



第265図　004土坑出土遺物(2)

004土坑

挿図番号	器種	法量	遺存状態	成・整形手法	胎土	色調	焼成	備考
1	甕	口径 19.0 胴径 26.6 頸径 16.8	図示部分の⅔	口縁一ヨコナデ 胴部内外-ケズリ様ミガキ？	砂粒，細砂粒一極多	明褐色	良	図版90一1 胴上半に2本の沈線→砥石に転用か
2	甕	口径 15.2 胴径 23.9 頸径 11.8	図示部分の¾～⅘	口縁一ヨコナデ 胴部内外-ケズリ様ミガキ？	砂粒，細砂粒一多	褐色	良	図版90一2 黒斑(内外¾～⅘) スス（胴下半）
3	甕か壺	胴径 26.1 頸径 16.9	図示部分の⅓	胴部内外一ナデ	細砂粒一多	褐色 赤褐色	普	細片が多数接合 剝離が激しい
4	甕か壺	底径 4.0	½	胴部内外-ナデ，外面はケズリに近い	細砂粒一多	褐色	普	スス(内外一部分) 265図一3と同一個体か？
5	鉢	口径 〈12.5〉 器高 9.0 底径 3.4	上半の⅓を欠く	口縁一ヨコナデ 体部内外一ナデ 底部一粘土帯はりつけ	砂粒，細砂粒一多	褐色	普	図版90一3 黒斑（外面一部） スス（口縁一部）
6	小型坩	口径 7.8 器高 7.3 底径 3.0 胴径 8.2 頸径 6.1	口縁¼を欠く	口縁一ヨコナデ 体部外面一ミガキ 体部内面一ナデつけ	砂粒，細砂粒一多	褐色 暗褐色	良	図版90一4 黒斑(内外⅓～¼) 胴下半外面に2本の沈線→砥石に転用か？

第3章　小　　結

第1節　旧石器時代

――石器群の時期と性格――

①石器群の時期と変遷

本遺跡の石器群は大きく4期に区分される。

Ⅰ期は層位的にはソフトローム層直上に対比される。出土遺物は表面採集による木葉形尖頭器一点（図239－6）のみである。

Ⅱ期はⅢ層中に文化層を有する時期である。第11ブロックが該当する。木葉形尖頭器，石核が出土しており礫群が検出されている。

Ⅲ期は本遺跡で最も広範囲に遺跡が拡大した時期である。第1～7，10ブロックがこれに該当する。石器群としては切り出し形のナイフ形石器の他削器，掻器，二次加工ある剝片，使用痕ある剝片，礫器，ピエス・エスキーユなどが出土している。

剝片生産技術は平坦な打面より求心的に加撃することによって先端部が内湾する横長の剝片を生産している。石材は爽雑物を多量に含んだ黒曜石が主体となっている。

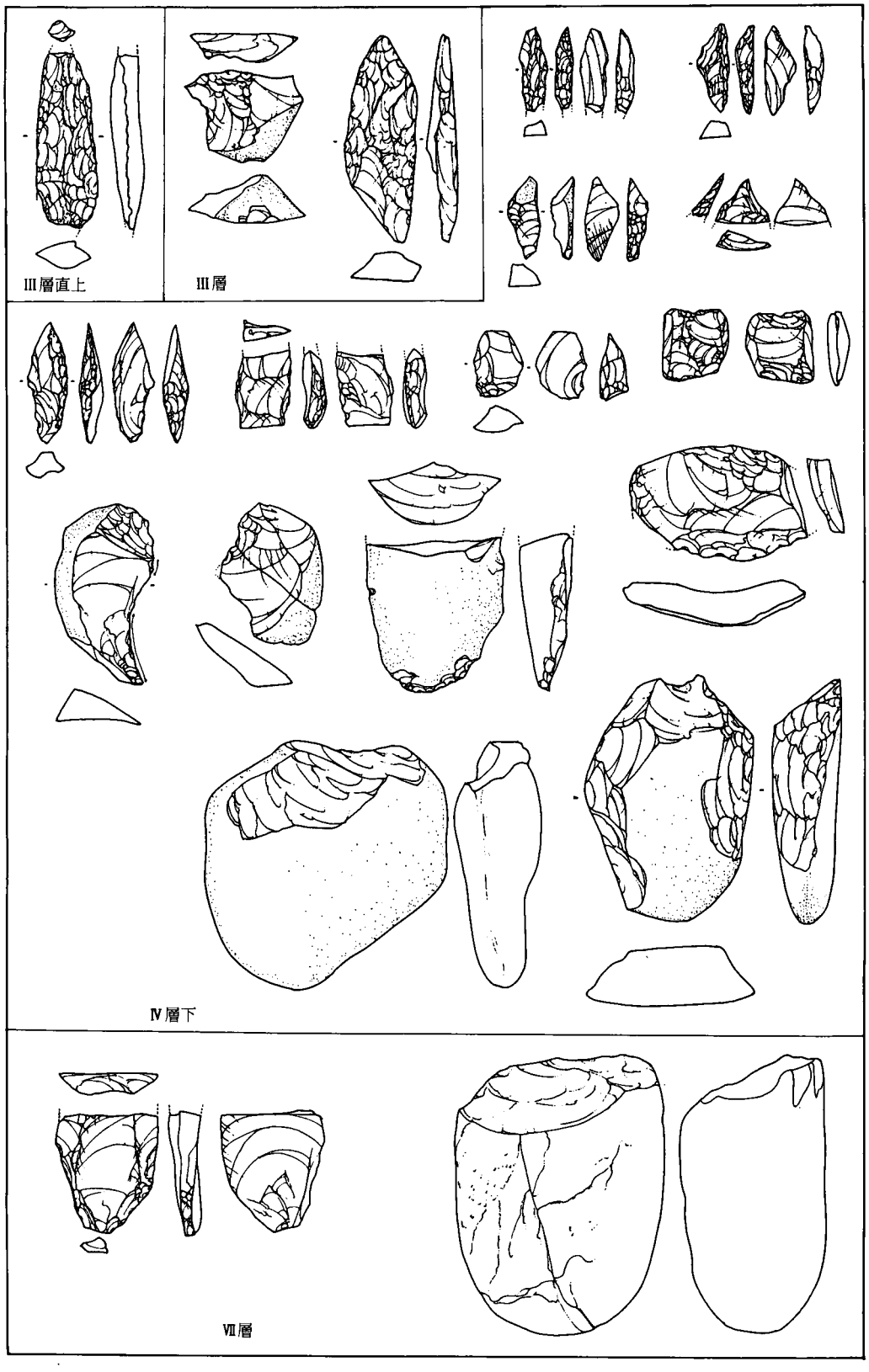
Ⅳ期は小規模なブロックが2カ所検出されているにとどまる。第8，9ブロックがこれに該当する。石器群は縦長剝片を素材としたナイフ形石器と礫器，使用痕ある剝片，磨石などが出土している。

②ブロックの性格

先述のとおり礫群が6カ所，石器群のまとまりが5カ所検出されているが互いのブロック間に接合関係がほとんどなく，各ブロック間の直接的なつながりは検証しがたい。わずかに第6ブロックと第10ブロックとに約10mの距離を隔てて接合している例があるにすぎない。

礫群はいずれも構成礫が熱変成をうけ，表面は赤化し，破砕礫となっており，完形礫の例はない。ブロック内では良く接合しているが完形に復元し得た例はなく，いずれも一部が欠落している。大きさを復元すると長径10cm内外の例が多く大きさの差異はあまりない。

石器群のまとまりは剝片生産の痕跡がほとんどなく，多くは石器調整を反映している。また利器はほとんど折損しており，機能の終焉がうかがわれ廃棄の色彩が濃い。こうした状況は目的剝片の欠落からも補完的に証明される。



第266図　矢船遺跡の石器群の変遷

第2節　縄文時代

今回の調査では遺構は全く発見することができなかった。

グリッド出土の土器をみると本遺跡の主体は縄文時代前期後半の浮島式，興津式，諸磯式であることがわかる。その他の遺物をみても主体を同様の時期として差しつかえないだろう。

総量の把握をしていないので正確な数字を出すことはできないが最も量が多いのは浮島式であり，諸磯・興津式は従である。

その他の遺物では，16点を出土した玦状耳飾りが注目される。文様や断面形態にバラエティーがあるが，遺構に伴うものが無いため所属時期がはっきりとせず，これらのバラエティーが，時間的な差によるものかどうかの検証はできなかった。

第3節　古墳時代

住居跡2軒，土坑1基が調査された。出土した土器の様相からみておおむね5世紀代のものと考えたい。

1号住居跡は遺物が豊富で，土器の組合せ，土玉，石製模造品ともにこの時期の特徴を良く表わしている。弥生時代から古墳時代前半にかけての遺跡が少ない柏地区においては好資料になるものと思われる。2号住居跡は1号住居跡に比べて規模，遺物ともに貧弱である。双方の住居跡とも火災を受けた可能性があり，遺物等を検討しても大体，同時期に存在したと考えて，問題なさそうである。

周辺の遺跡をみると隣接する花前II－1遺跡から同時期と思われる住居跡がやはり2軒検出されている。距離的にみても何らかの関係があったのは確実である。両遺跡の間には小さな谷があり，この谷は矢船遺跡の北側を通って西へ延びていく。2つの住居跡群がこの谷をはさんで向かい合うように位置することは興味深い。

結　　語

今回報告した花前II－1・II－2・矢船の各遺跡における遺構・遺物については，すでに前章までに記述しているので，ここでは，その中で特筆すべき点をいくつか上げ，また今後の問題点などを指摘したい。

花前II－1・II－2遺跡は旧石器時代から江戸時代までの長期間にわたる複合遺跡であるが，中でも奈良・平安時代の遺構・遺物について語るべき点が多い。特に製鉄関連遺構・遺物は数多く検出され，花前II－1・II－2遺跡だけでなく，既に報告された花前I遺跡を含めて，花前遺跡群として製鉄を生業とする集団を把握しなければならない。

また，この製鉄に係る問題については遺構，遺物から次のような点が指摘できる。

1）鉄滓の出土量から見て，花前II期と花前VI・VII期とIX・X期に大きなピークが存在する。また磁着度分類による結果から，製練炉で生産された鉱滓が，ある程度選別された上で住居跡へ持ち運ばれるという一連の流れがつかめる。

2）製錬炉について年代を決め得る資料が乏しいため判断が難しいが、やはり鉄滓等が急激に多く出土するようになる住居跡の時期が花前VI・VII期にあたる事から、この段階から製鉄に関する一元的な生産が始まるものと考えたい。

3）鉄器生産において鍛造のみならず鋳造も行なわれていた事は，鋳型の存在から明らかであり，この鋳型は花前IX・X期の遺物と共伴している。

4）鉄生産が最も広範に盛行する花前VI・VII期において，墨書・朱書が施された土器も数多く出現し、これらの墨書・朱書の分布状態に、花前の個々の遺跡間に強い連関と独自性が認められる。このことは鉄生産に係る専門工人集団における集落の構成の一端を示すものと考えられ、今後検討を要する課題である。

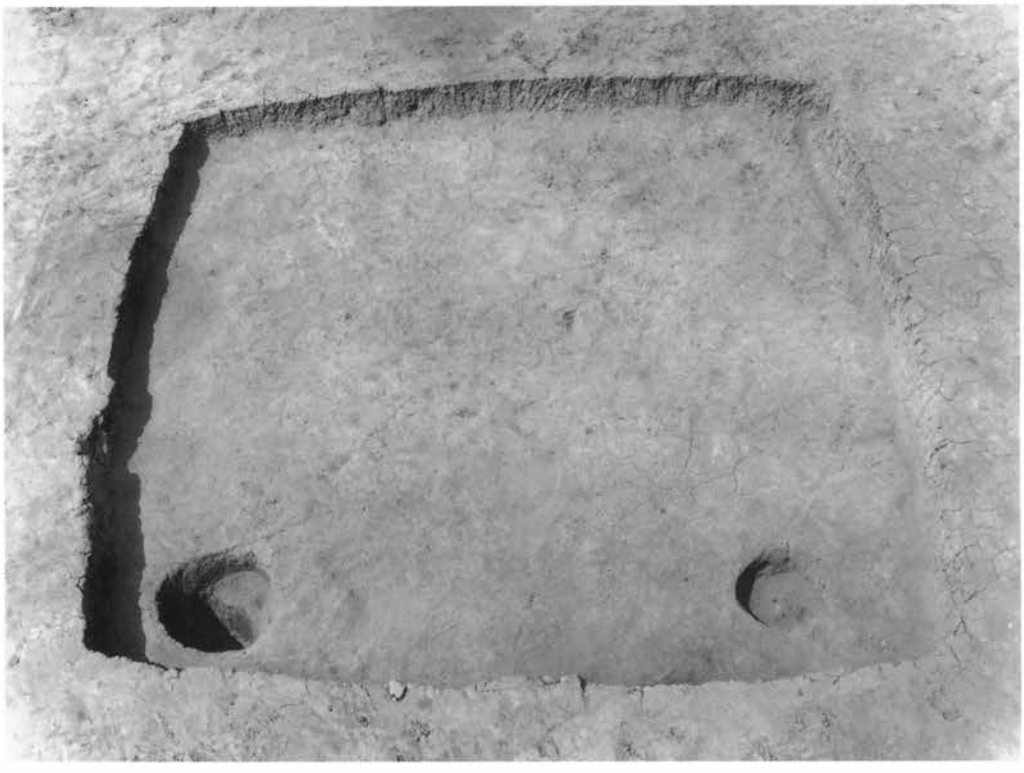
以上のような問題点とは別に，花前II－2遺跡で検出された073製錬炉が切り取り保存の処置を講ぜられ，博物館の展示に供せられた事も重要であろう。このような資料が学術資料としてはもちろんのこと，広く多くの人々の歴史に対する理解をさらに深めるために活用されるよう努力したいと考えている。

矢船遺跡では旧石器時代から縄文・古墳時代の遺構・遺物が検出された。この中で，縄文時代の遺構は認められないながらも，縄文前期の所産と考えられる玦状耳飾が多数出土しており，貴重な資料となっている。

さらに古墳時代の和泉期の住居跡と遺物は花前II－1遺跡の同時期の遺構・遺物とともに，類例の乏しい当該地域にあっては，和泉期を知る上での好資料である。

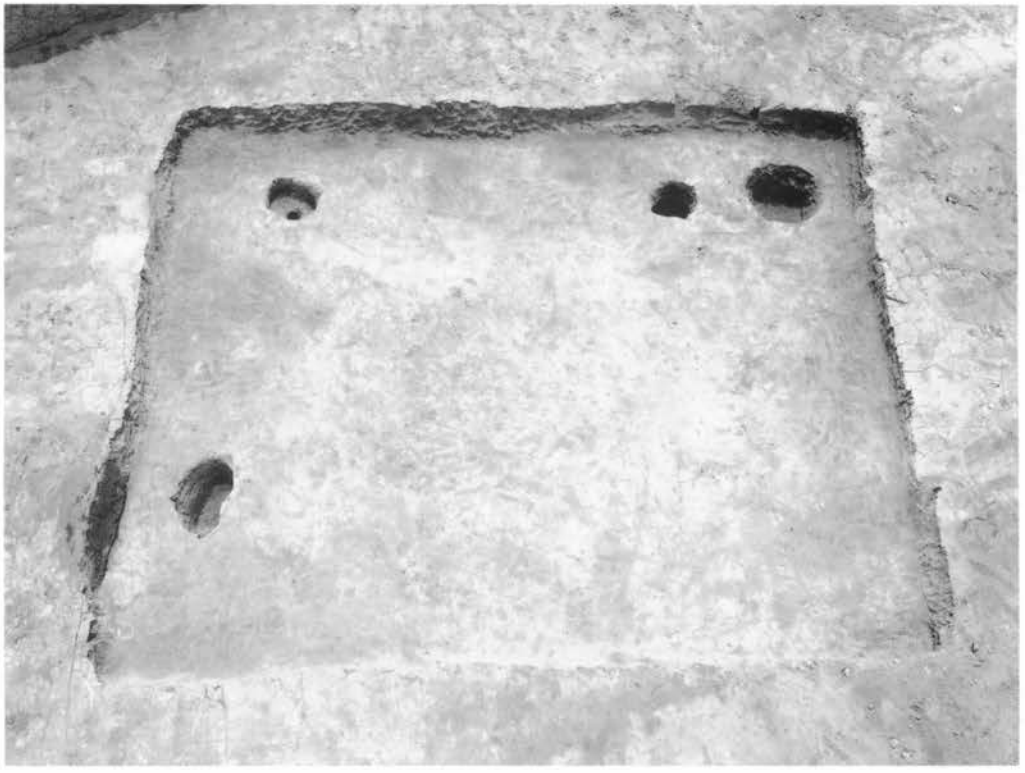
以上を今回の報告の結語とする。

写　真　図　版



002住居跡

002住居跡遺物出土状況

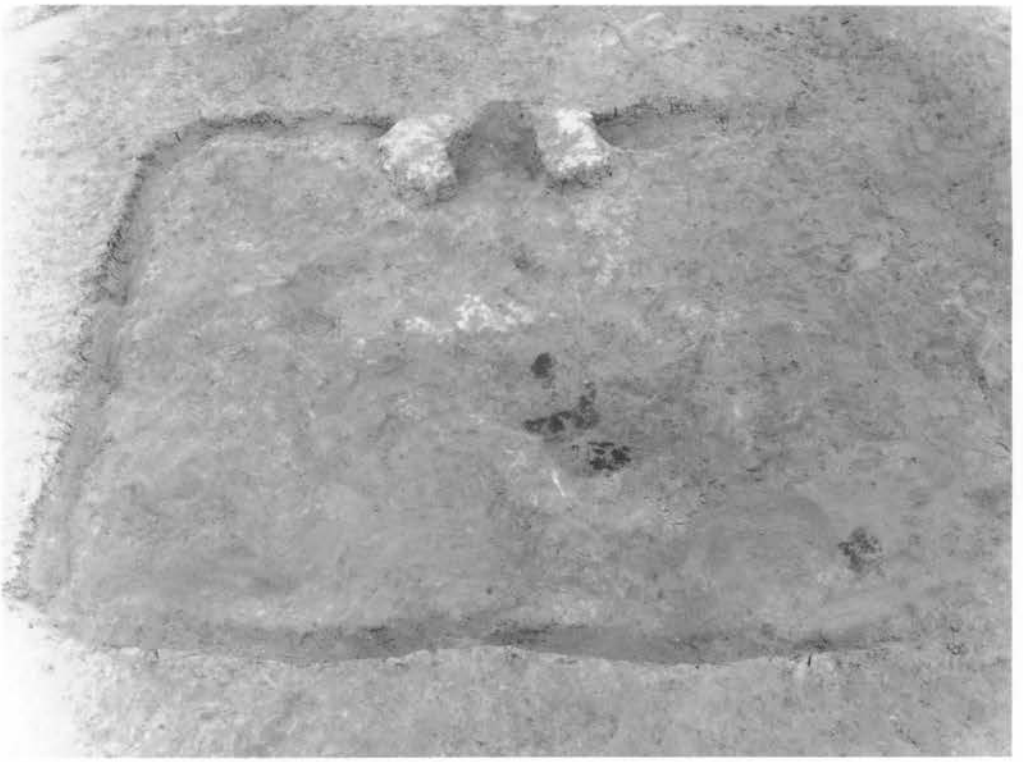


009住居跡

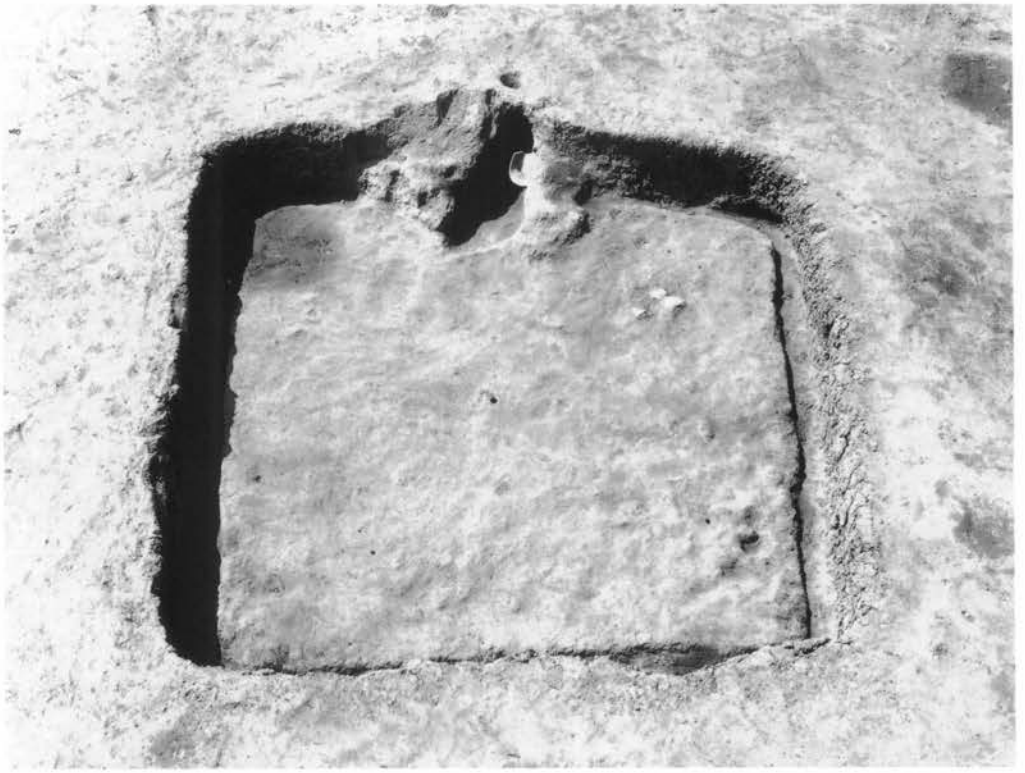
009住居跡貯蔵穴内遺物出土状況

010住居跡

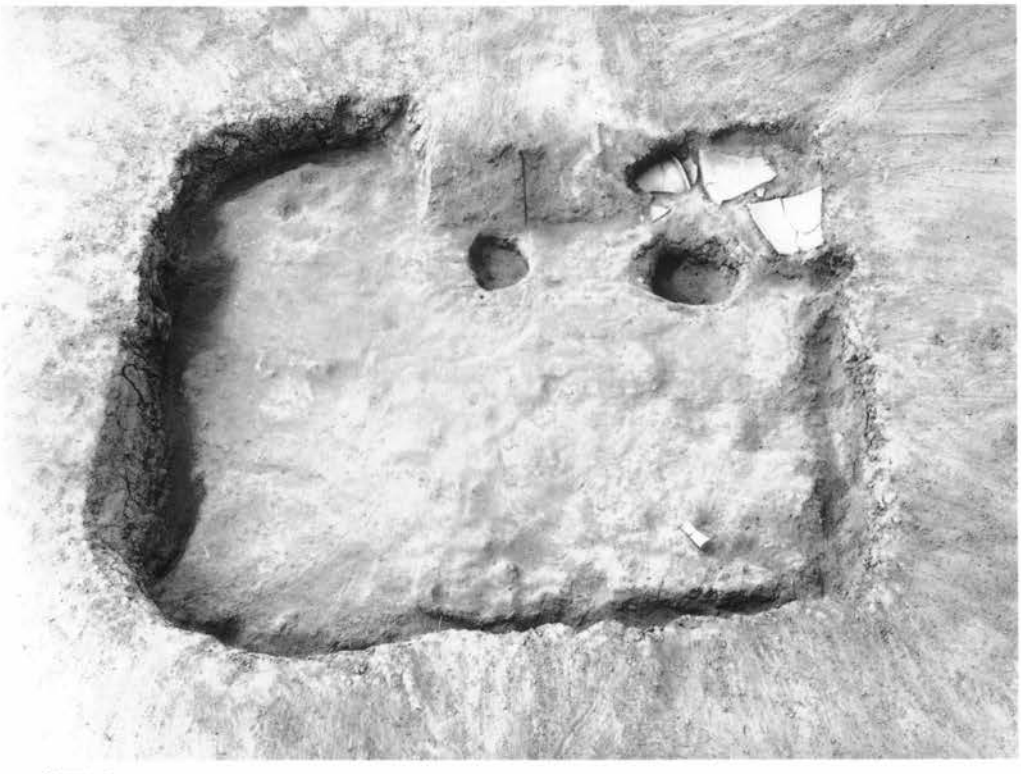
018住居跡



001住居跡



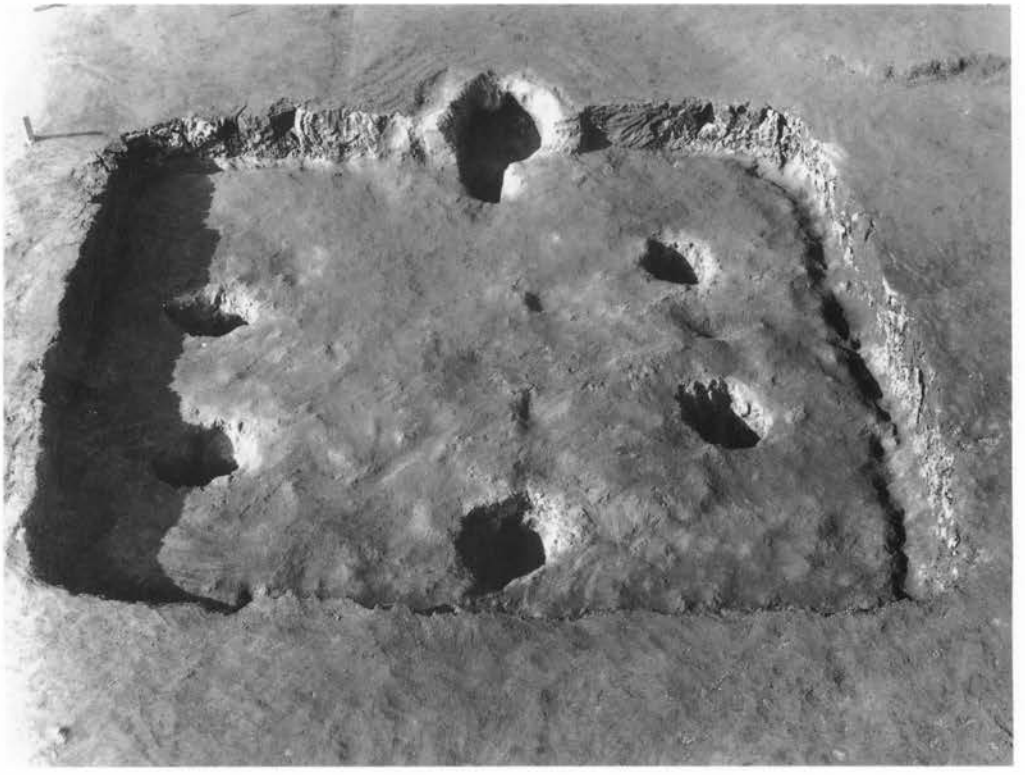
003住居跡



004住居跡

006住居跡

007住居跡遺物出土状況



007住居跡

008住居跡

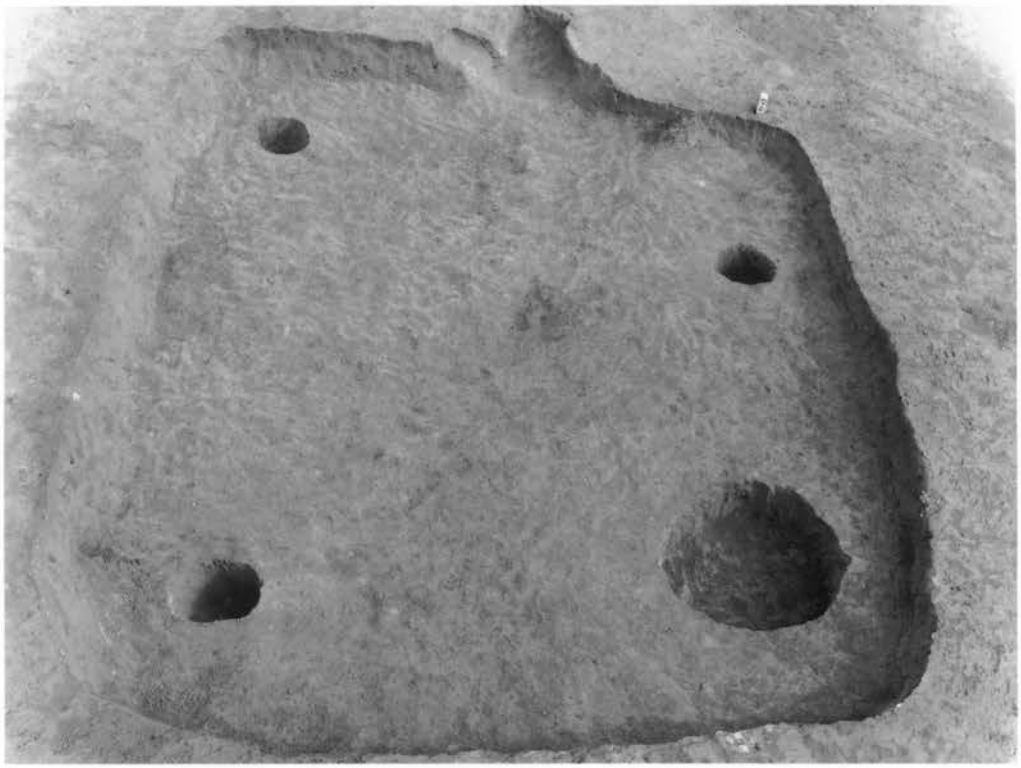
011住居跡

013住居跡

014住居跡

016住居跡

020・021住居跡



022住居跡

028住居跡

1

2

3

4

5

6

002住居跡出土遺物

1

2

3

4

5

6

002(1～4)・009(5・6)住居跡出土遺物

1

2

3

4

5

6

009(1・2)・001(3・4)・003(5・6)住居跡出土遺物

1

2

3

4

5

6

7

8

9

004（1～3）・005（4～7）・008（8・9）住居跡出土遺物

1

2

3

4

5

6

7

006(1～4)・007(5～7)住居跡出土遺物

1

2

3

4

5

6

7

8

011(3～5)・016(4)・017(5～6)・019(7・8)住居跡出土遺物

1

2

3

4

5

019住居跡出土遺物

1

2

3

4

5

019(1～3)・020(4・5)住居跡出土遺物

1

2

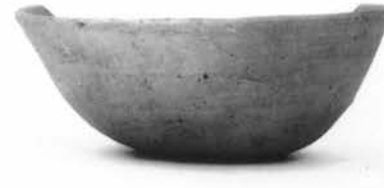
3

4

5

6

7



8

1

2

3

4

5

013・031・032住居跡出土遺物

1

2

3

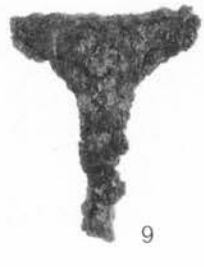
4

5

6

7

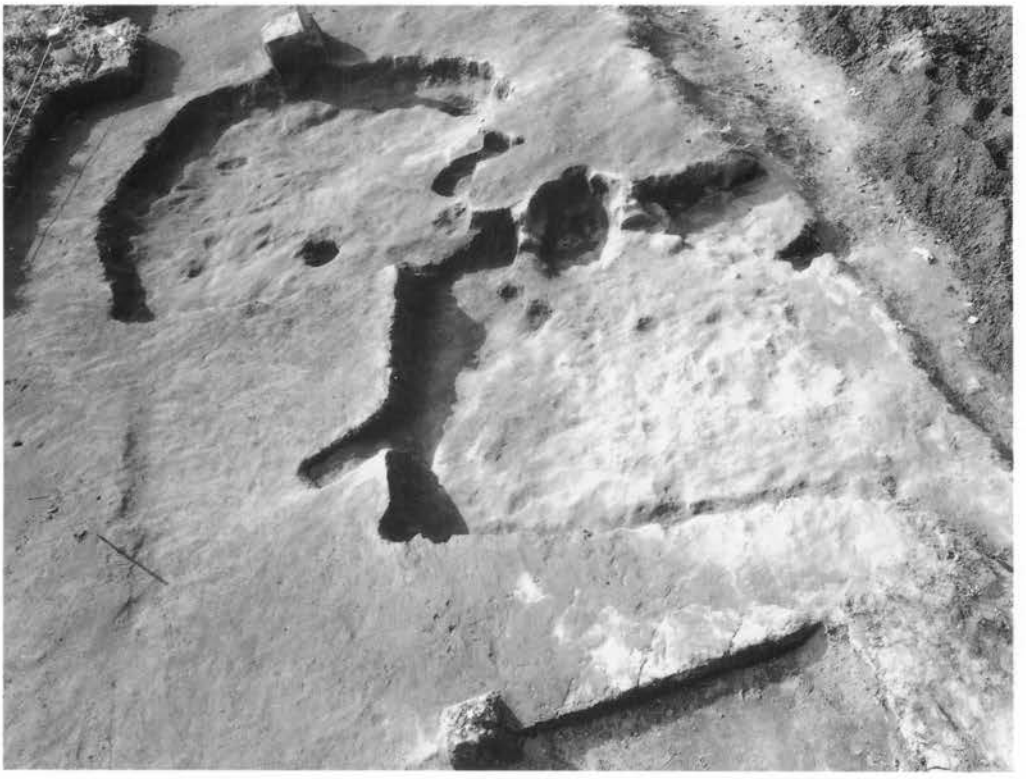
8



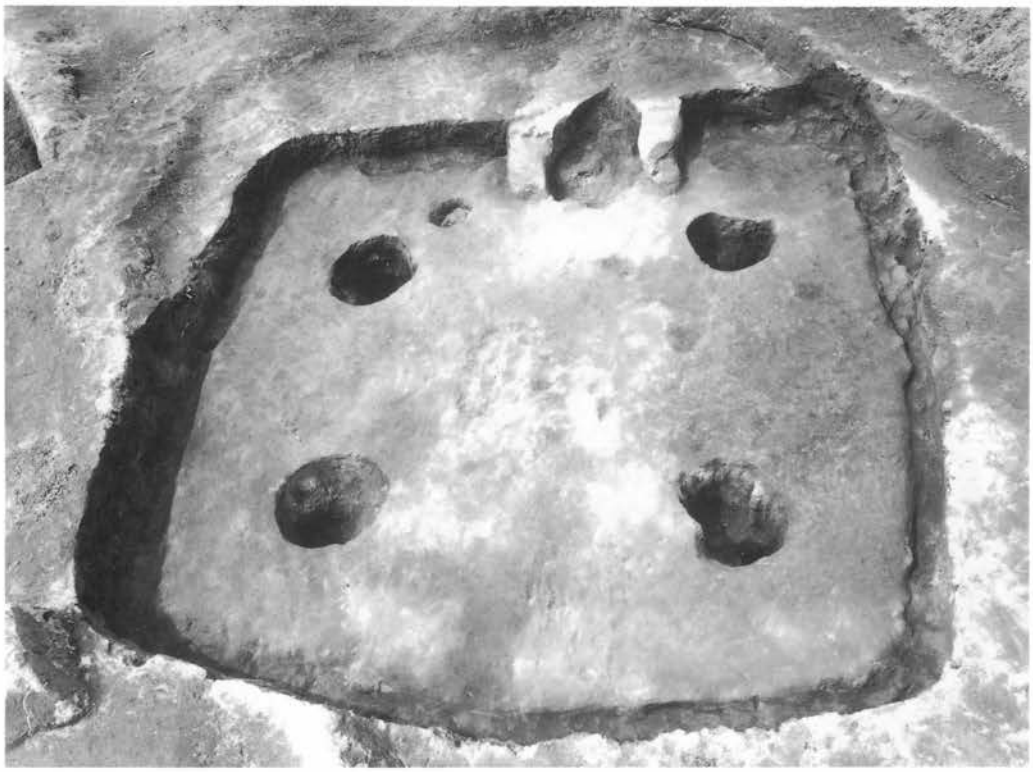
9

珠文鏡・鉄製品

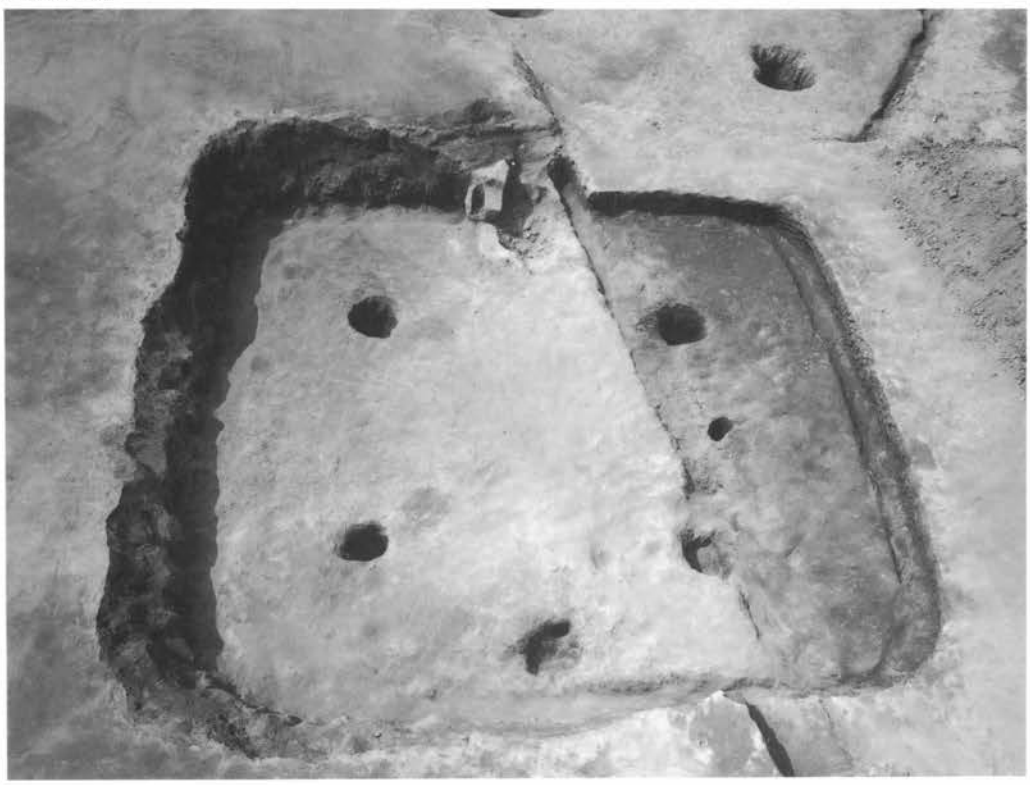
007住居跡



008（手前）・009住居跡



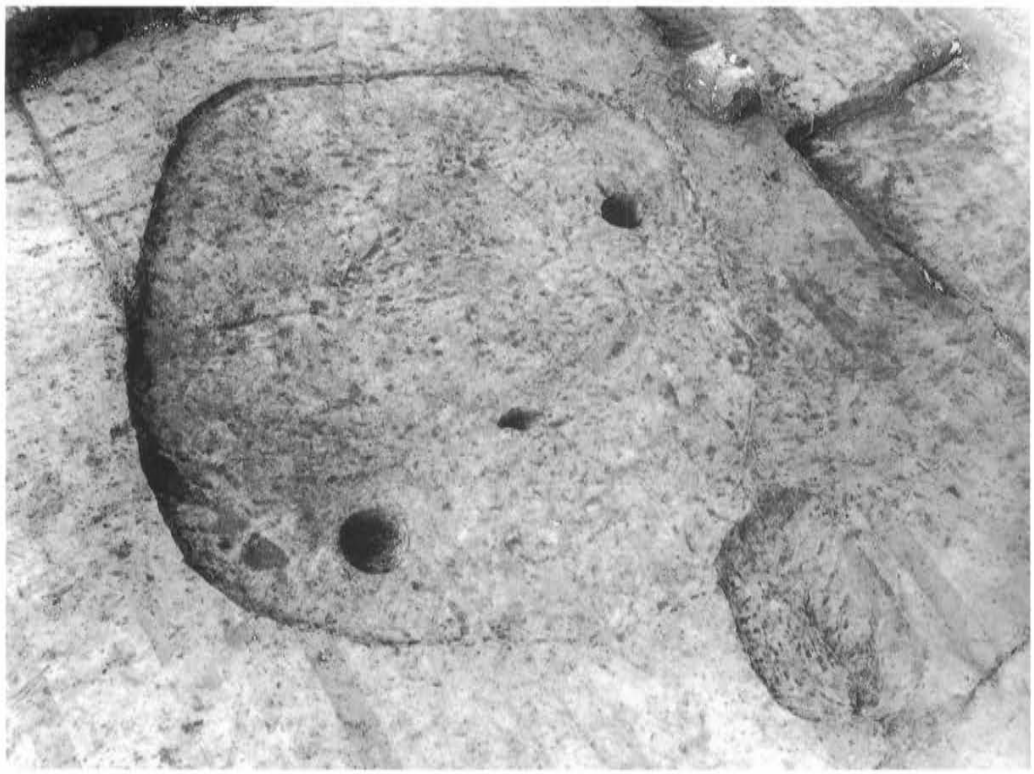
011住居跡



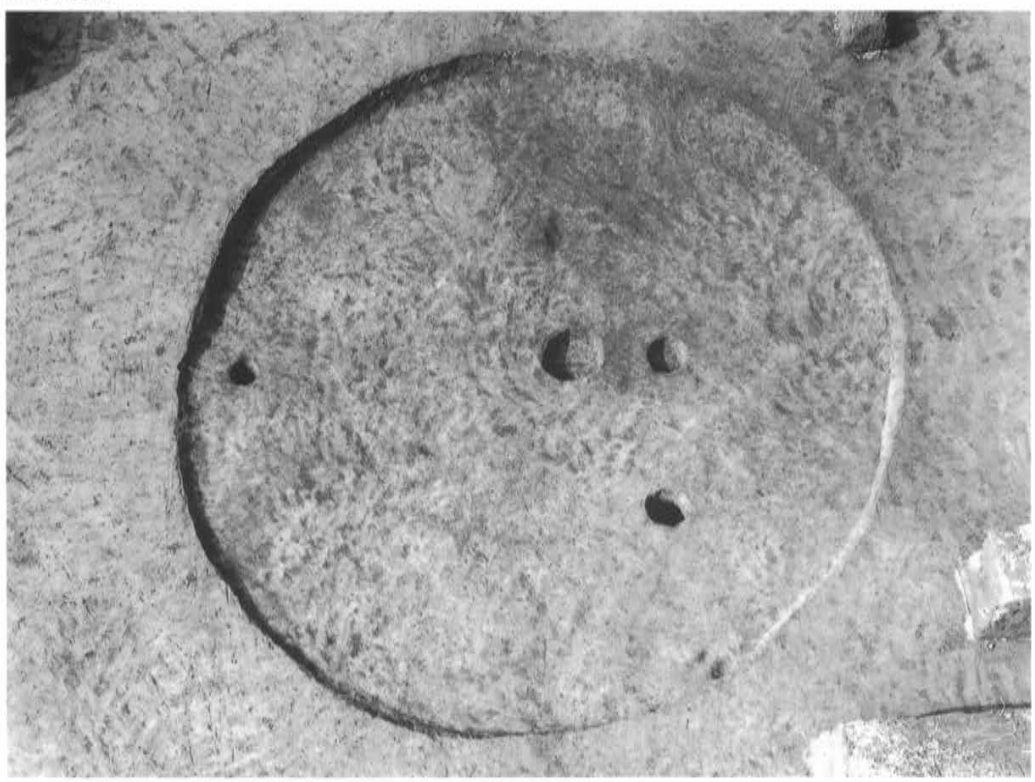
012住居跡

008炉穴

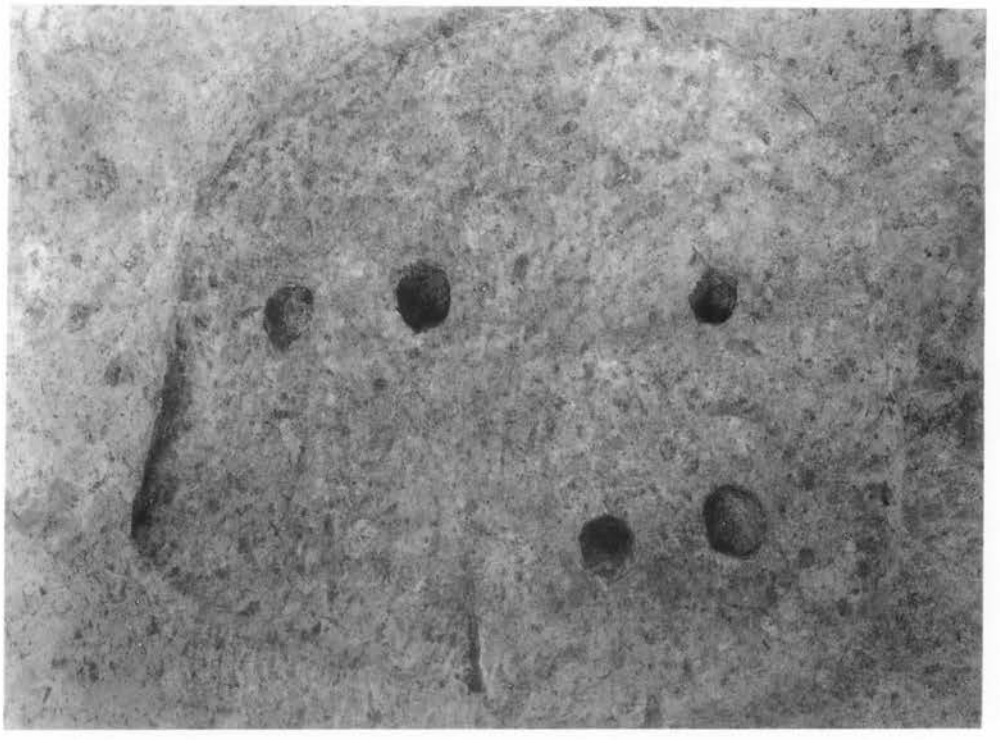
024炉穴



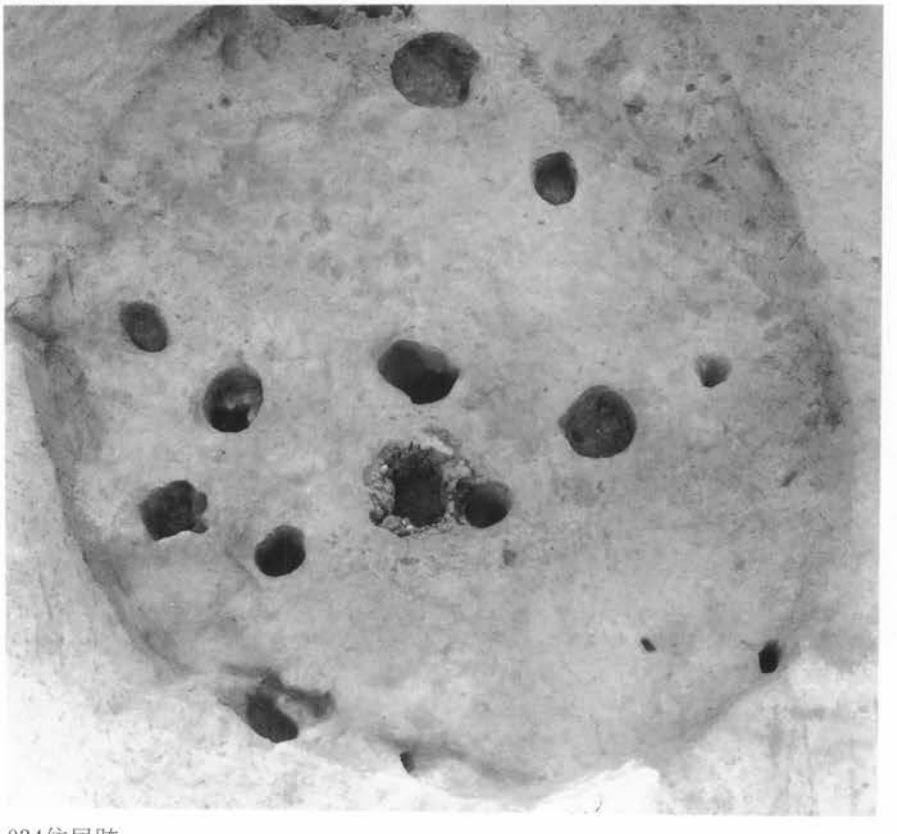
001住居跡



002住居跡



010住居跡

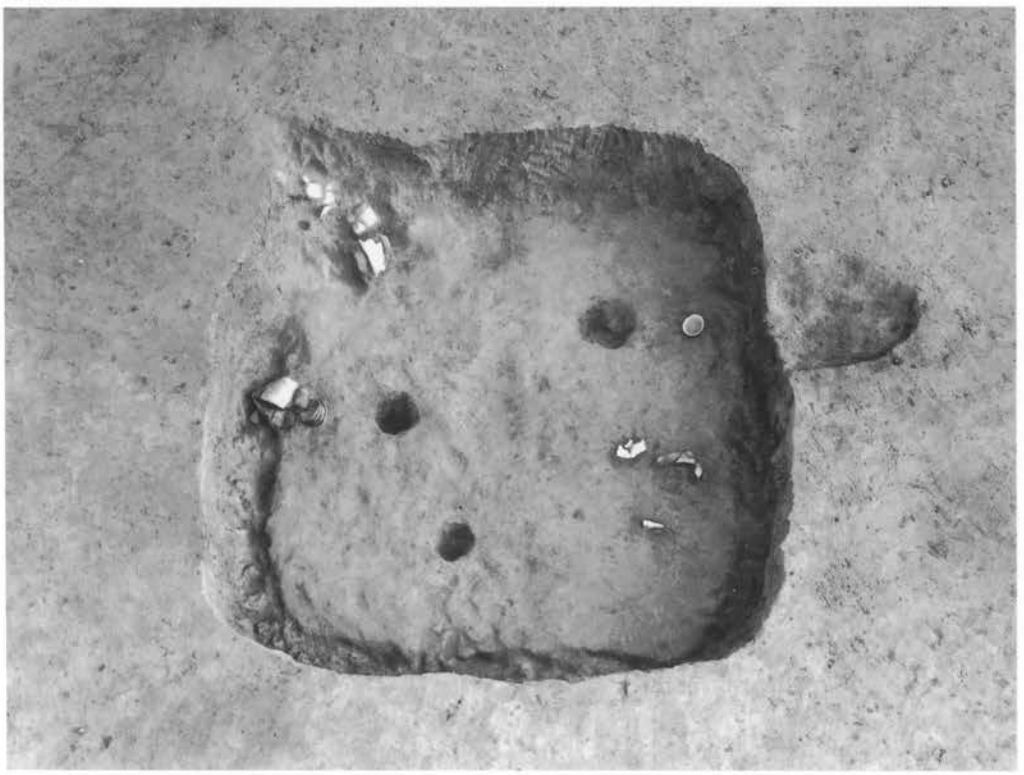


034住居跡

027土坑

028土坑

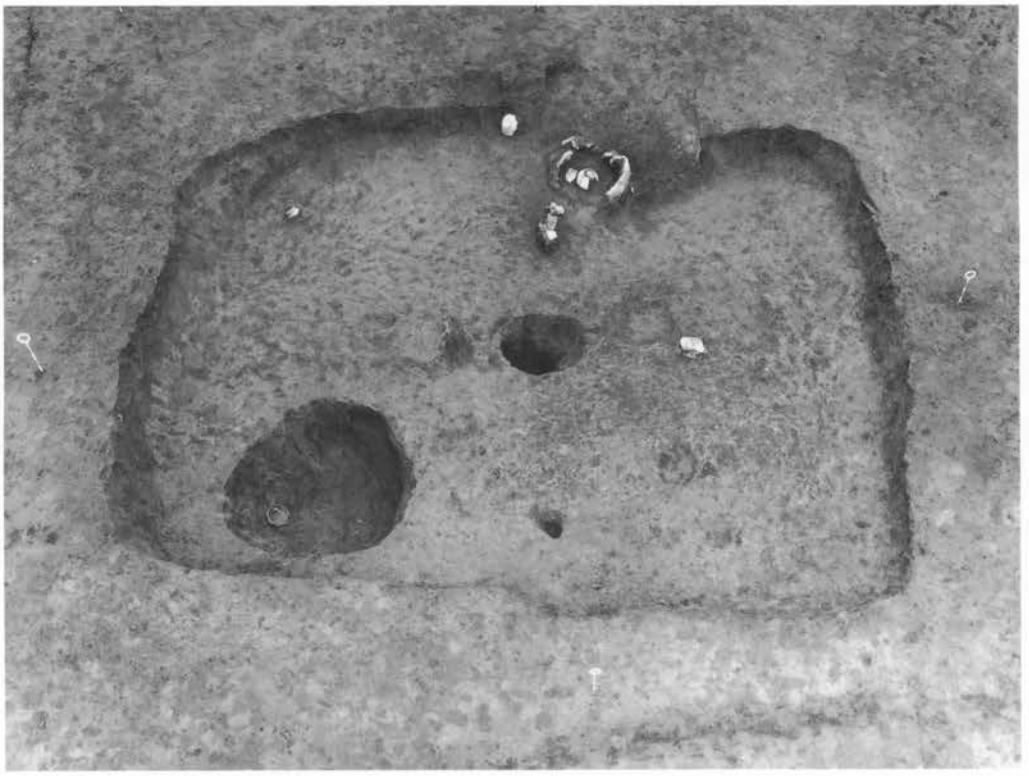
発掘風景



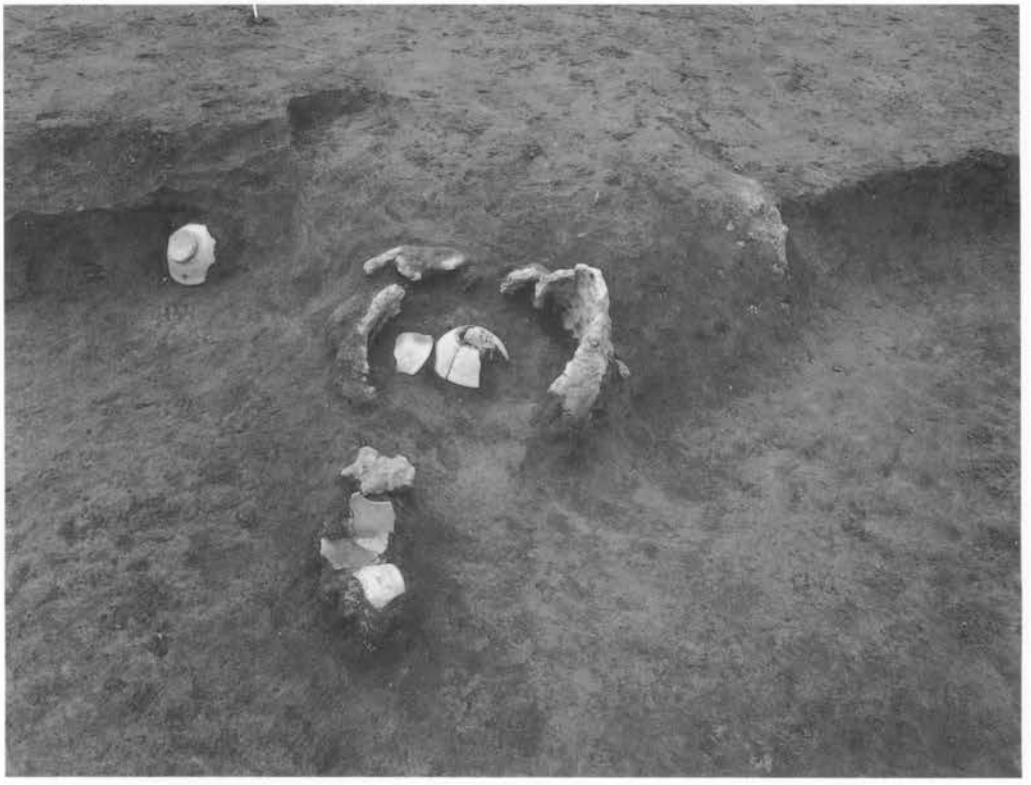
003住居跡

005精錬炉・006土坑

005精錬炉遺物出土状況



009住居跡

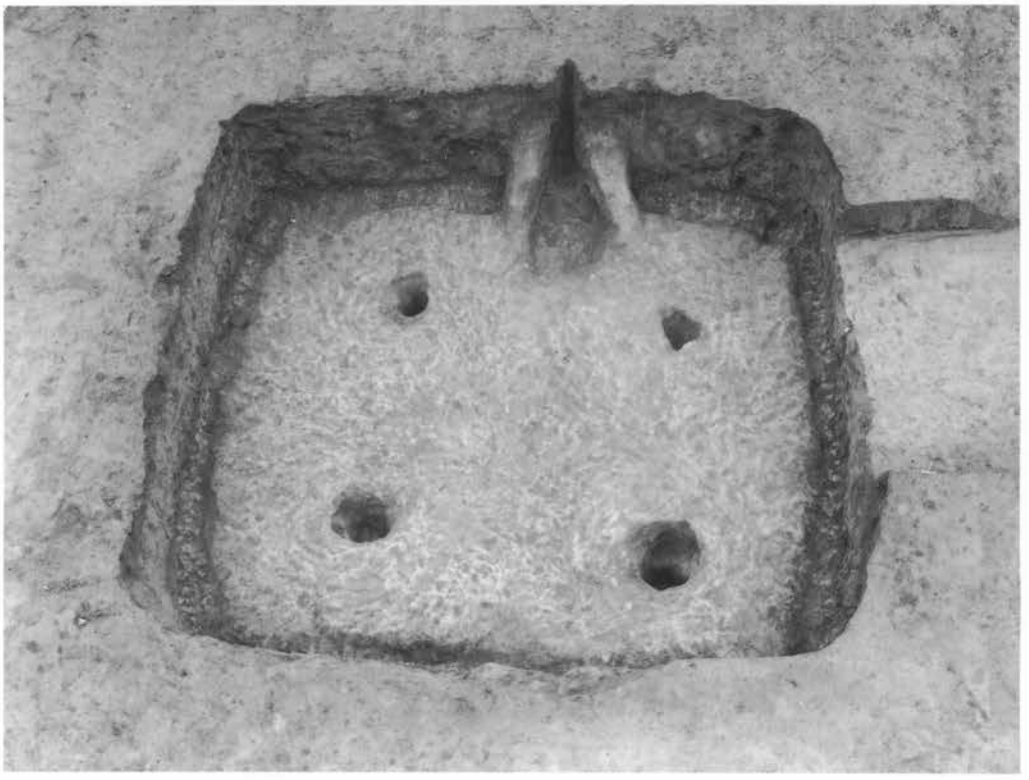


009住居跡内精錬炉

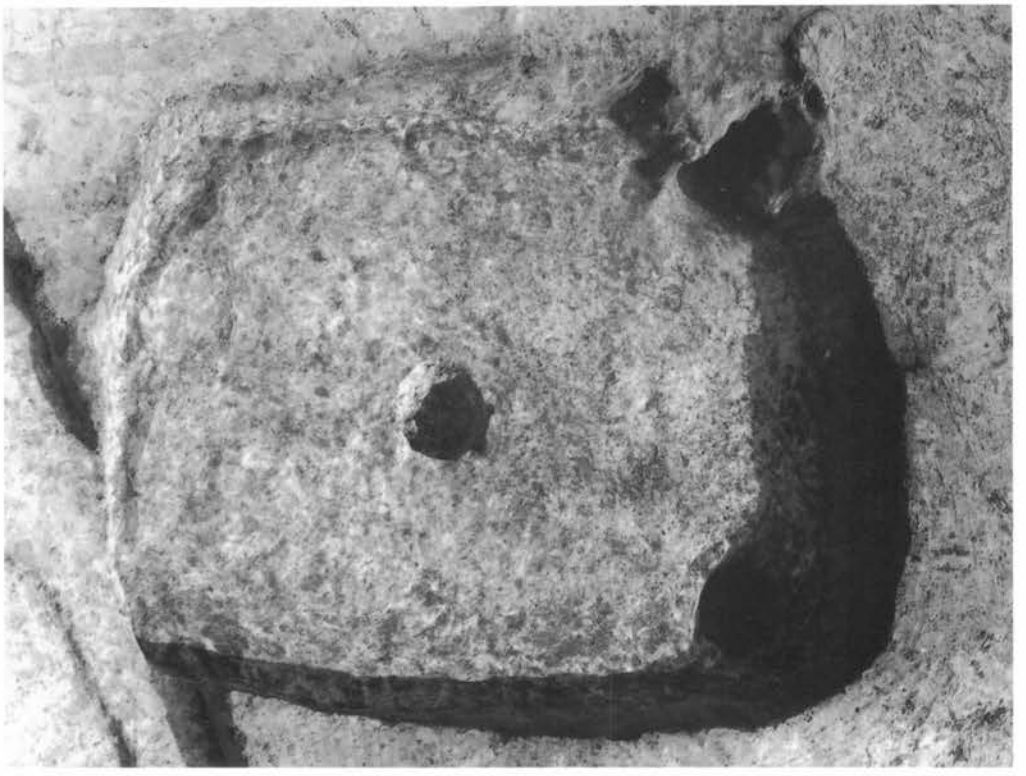
009住居跡内精錬炉

009住居跡内精錬炉

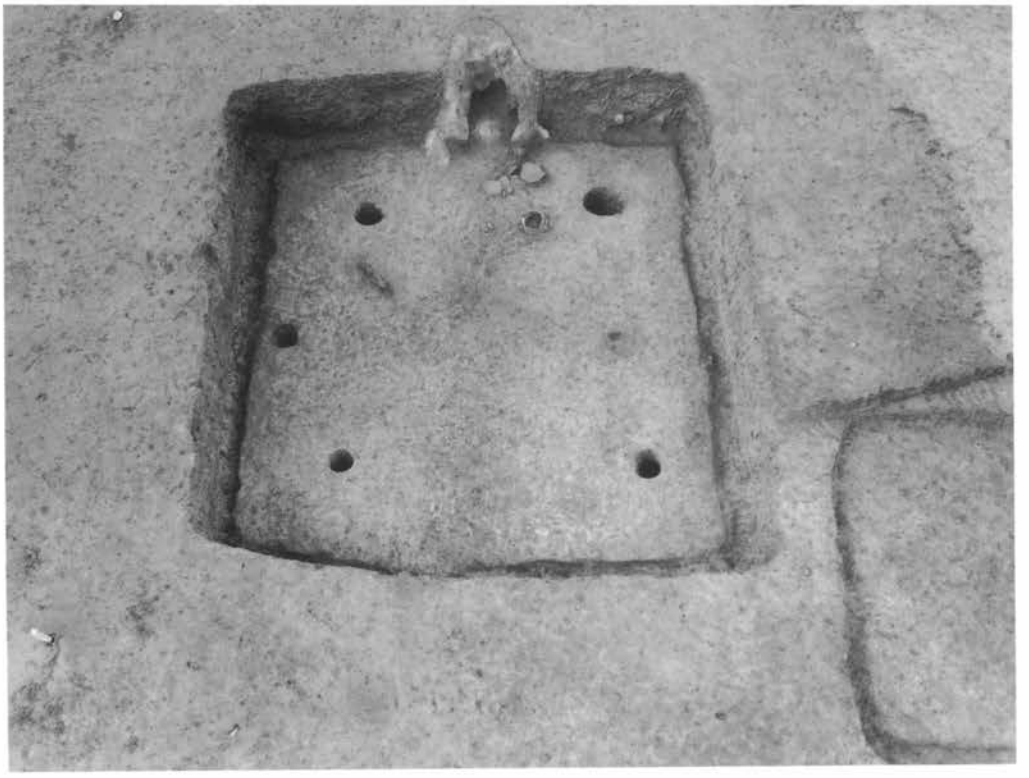
009住居跡内精錬炉



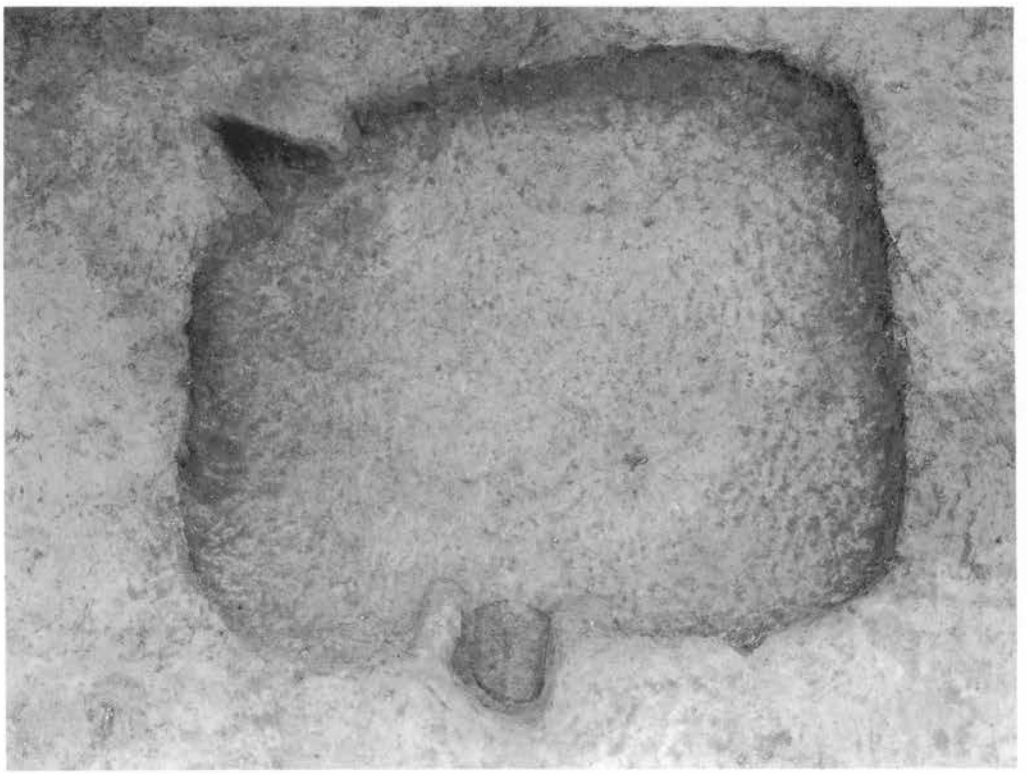
011住居跡



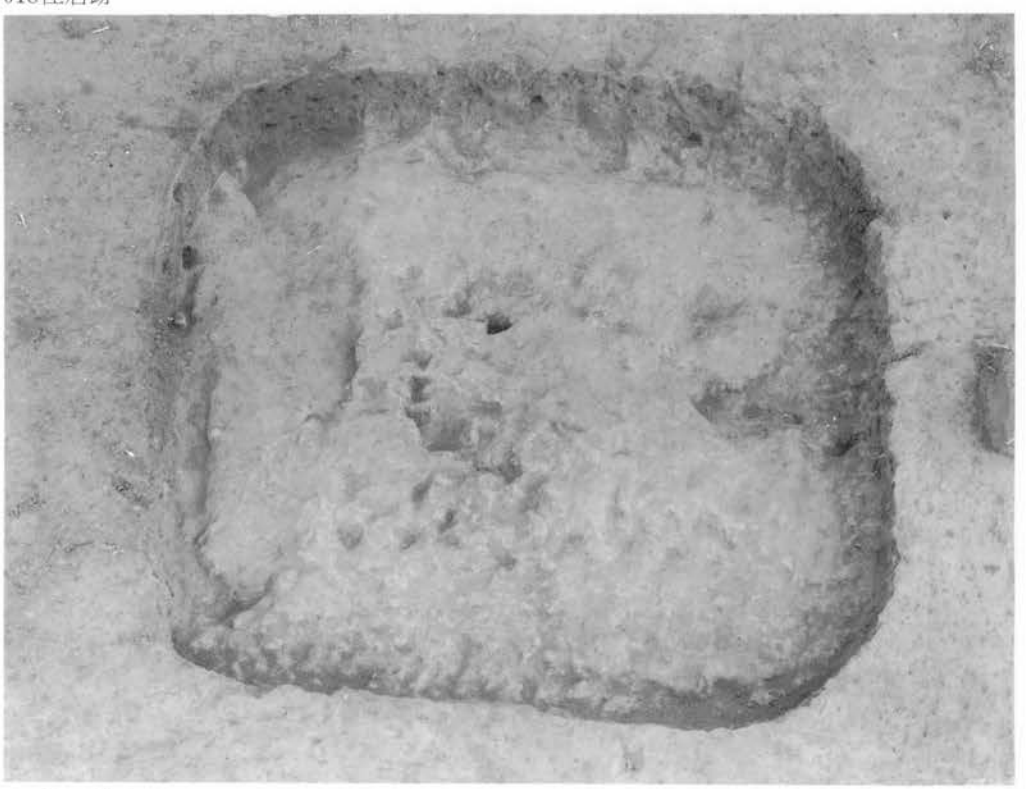
012住居跡



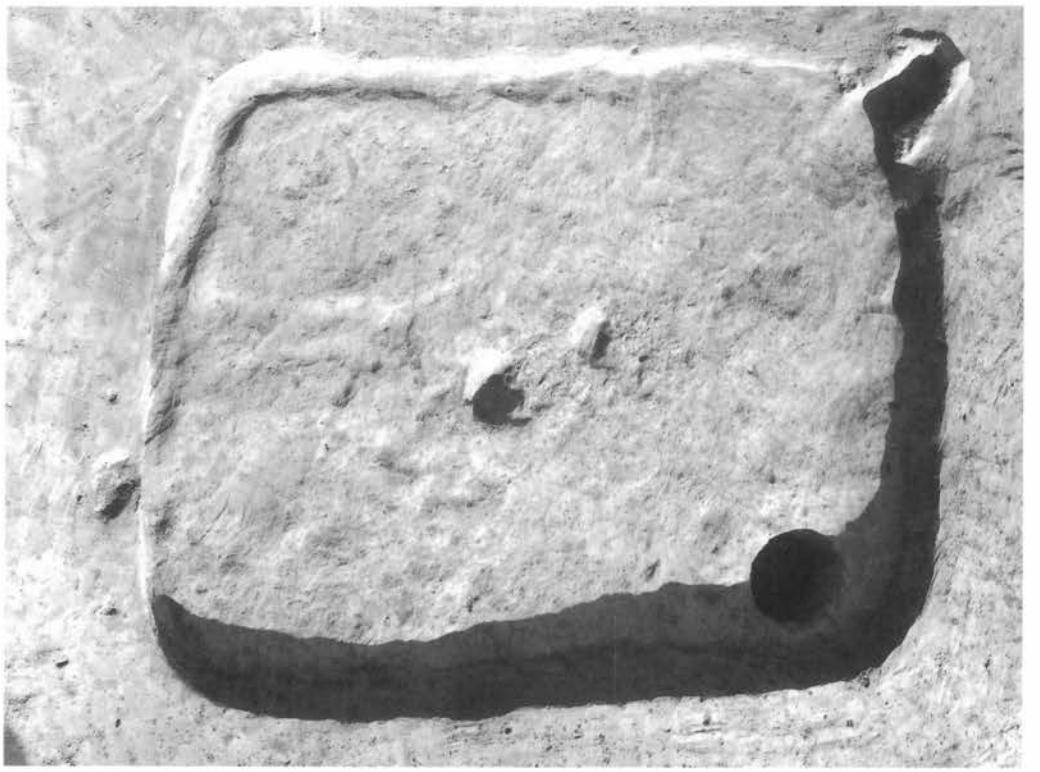
013住居跡



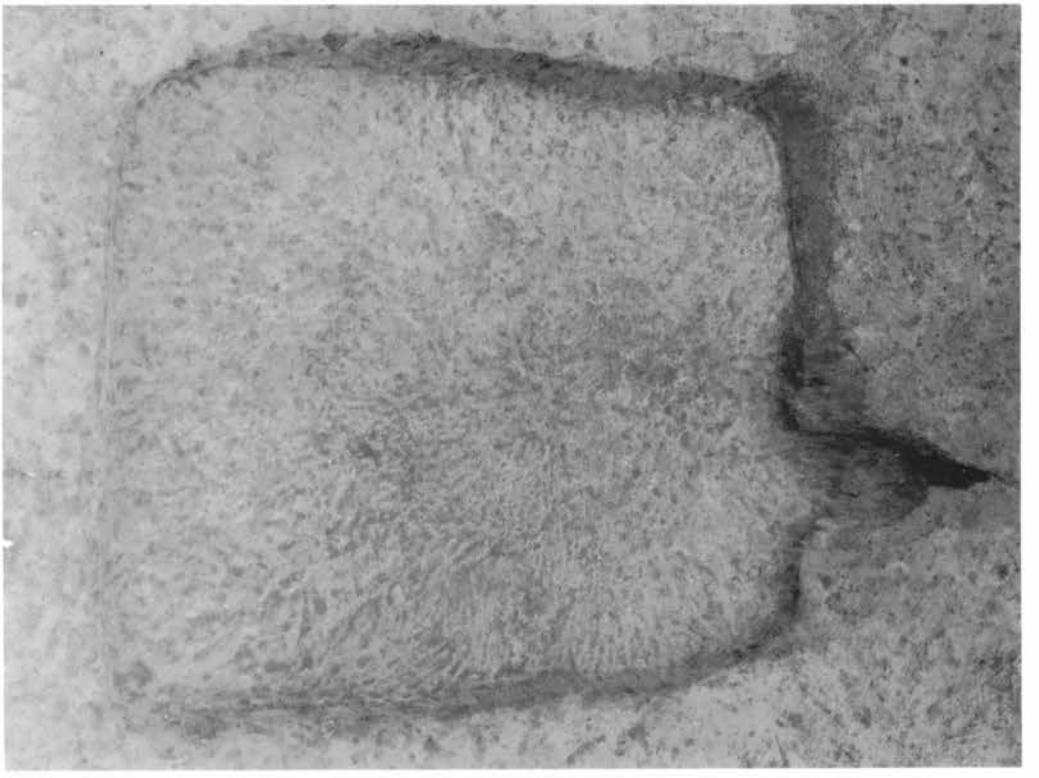
018住居跡



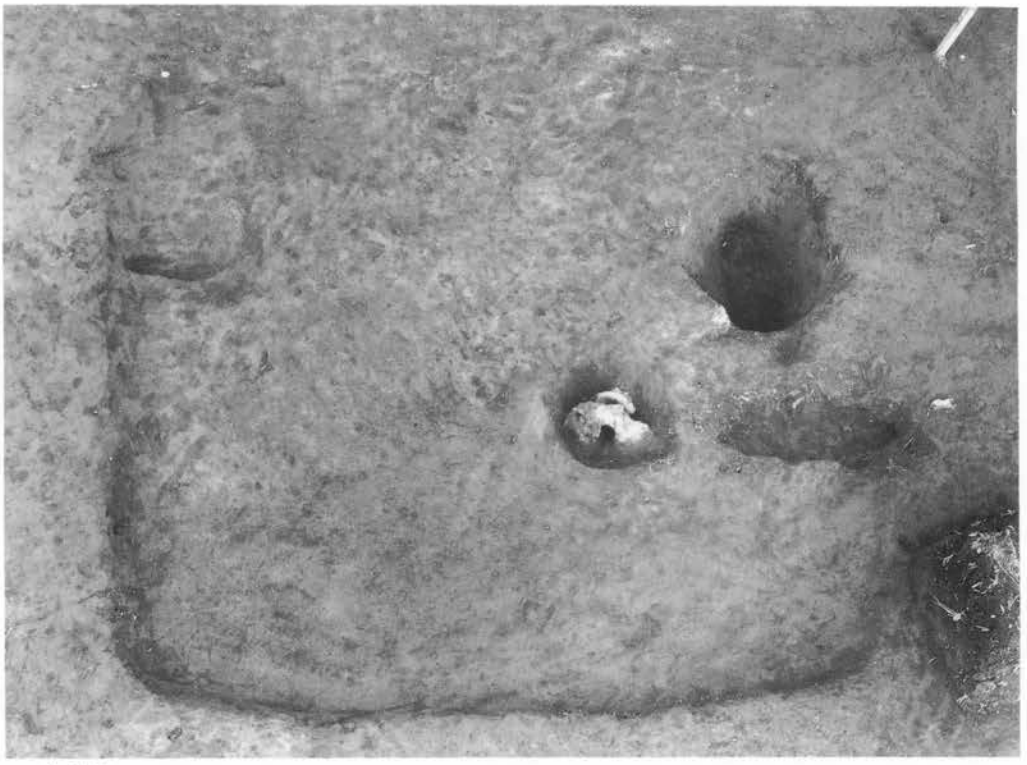
019住居跡



020住居跡



021住居跡



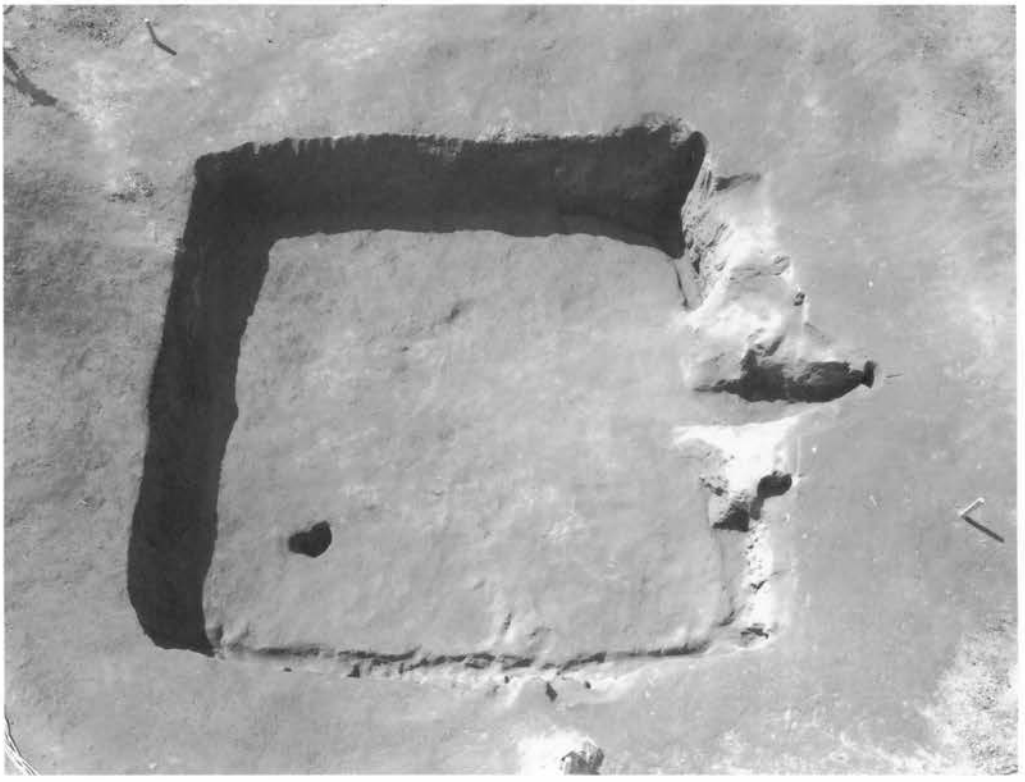
023住居跡

023住居跡遺物出土状況

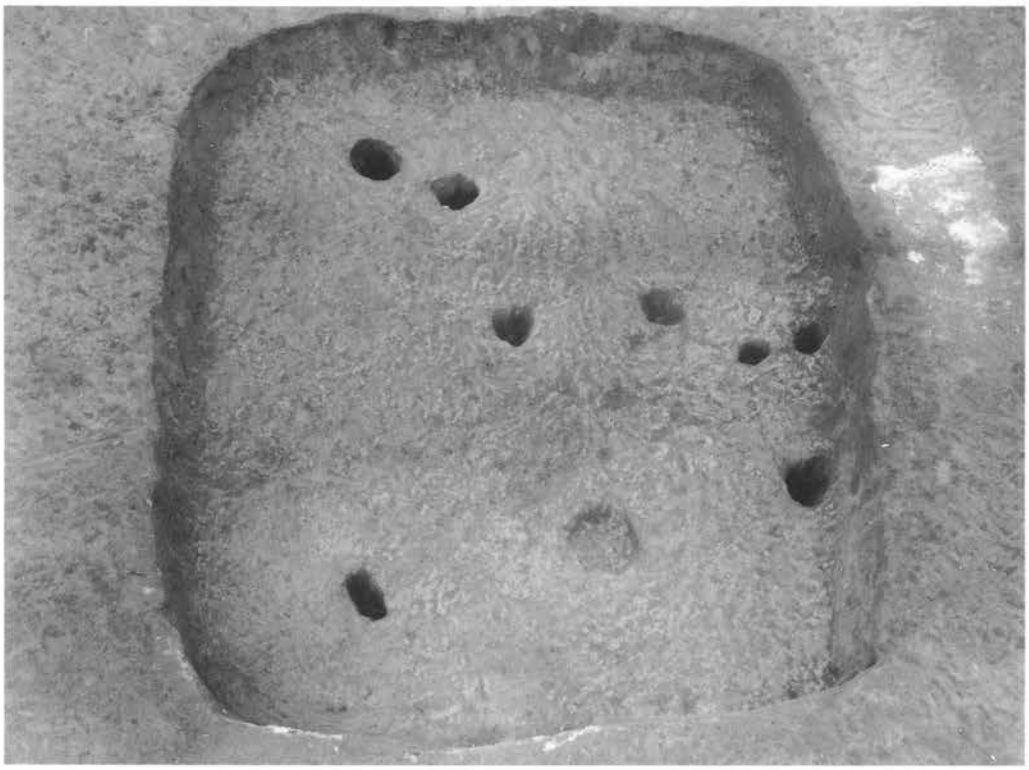
023住居跡内精錬炉

023住居跡内精錬炉

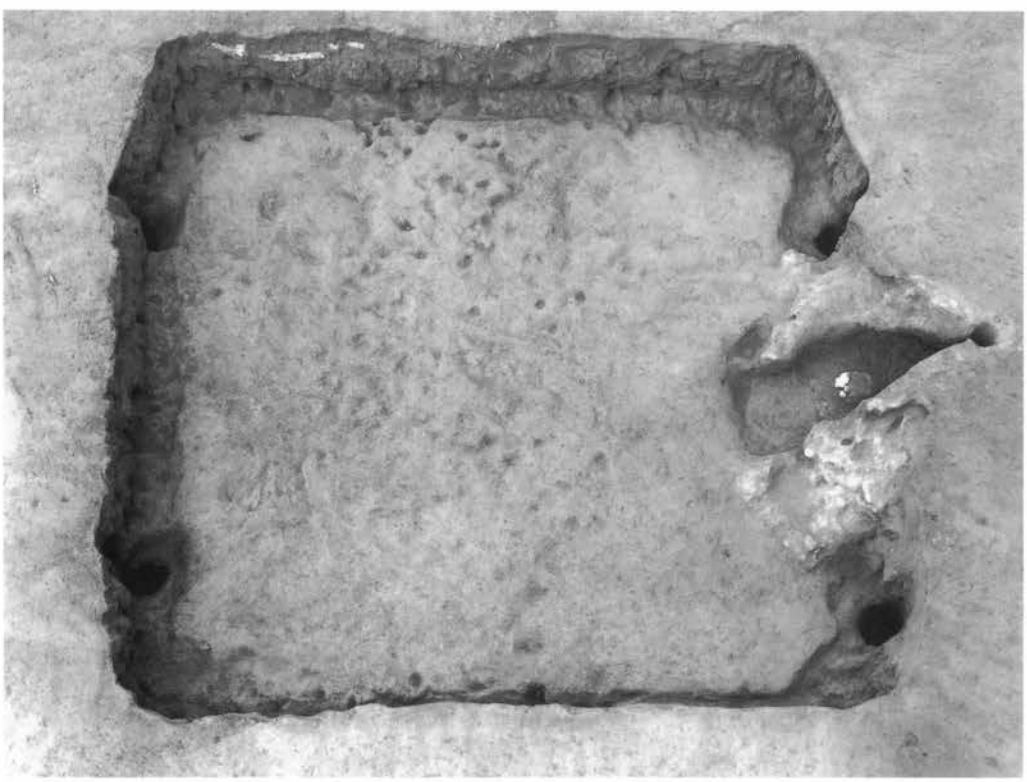
029住居跡



030住居跡



035住居跡



036住居跡

斜面部遠景

斜面部発掘風景

斜面部発掘風景

斜面部遺構群（049・061・063製錬炉他）

048精錬炉

048精錬炉・049製錬炉

049製錬炉主体部分

049製錬炉主体部分

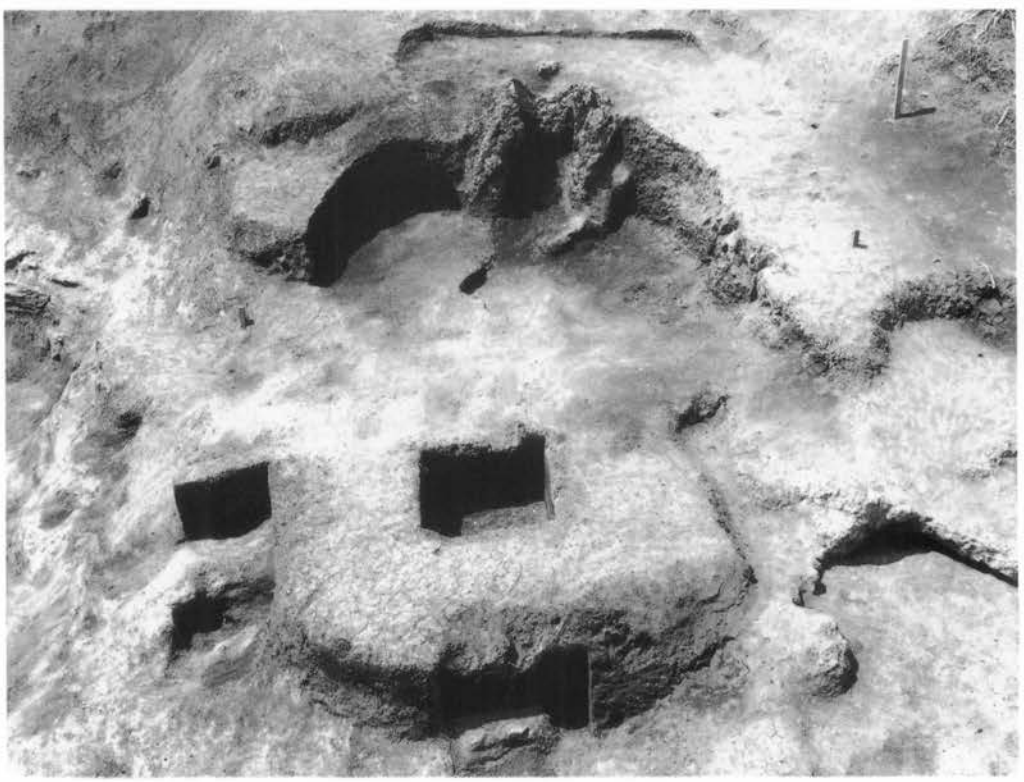
049製錬炉土層断面G－G′

049製錬炉土層断面E－E′

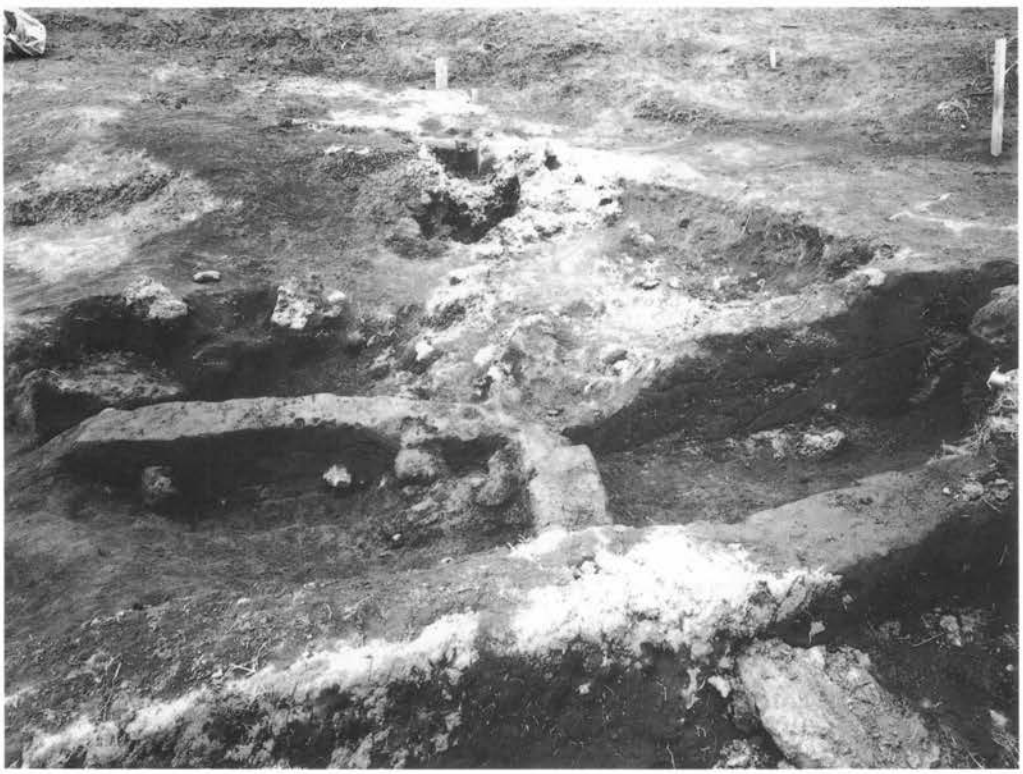
054精錬炉

061製錬炉

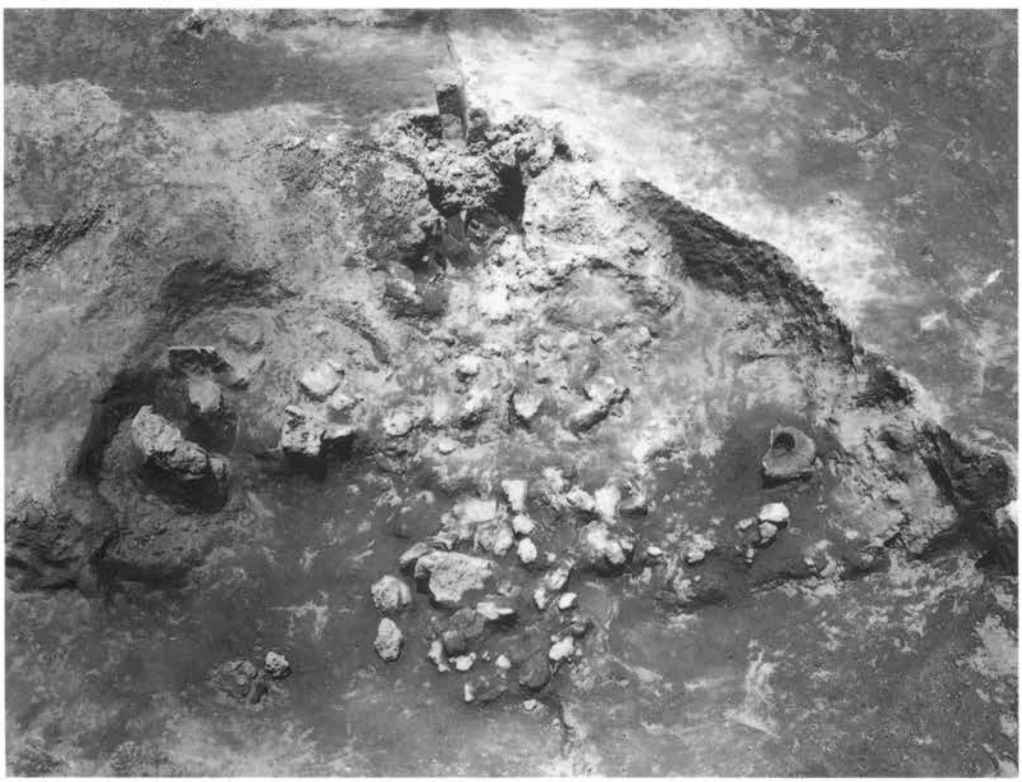
067製錬炉



073製錬炉

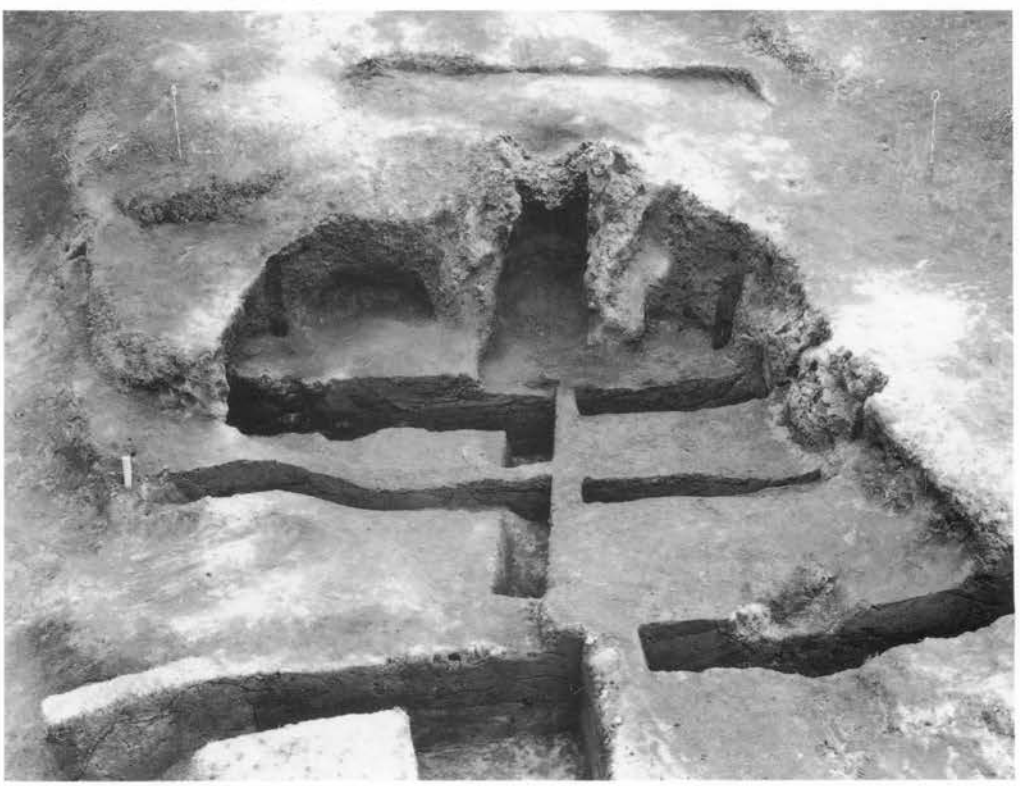


073製錬炉遺物出土状況



073製錬炉遺物出土状況

073製錬炉主体部分遺物出土状況



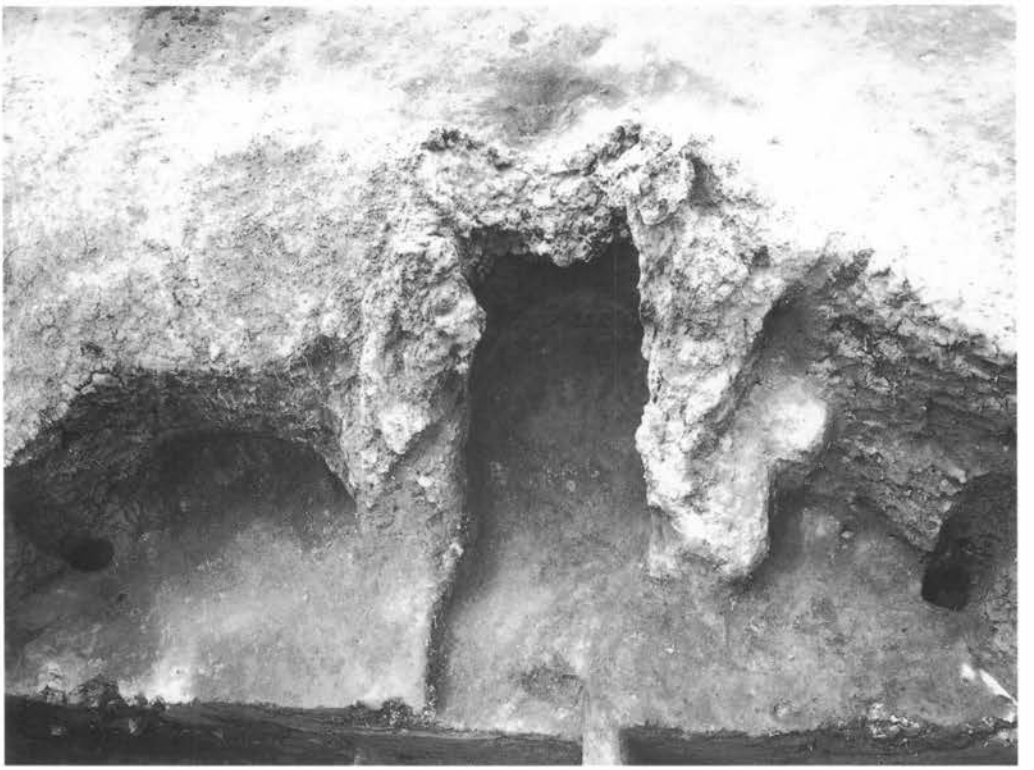
073製錬炉下部構造土層断面

073製錬炉土層断面A－A′

073製錬炉土層断面A－A′

073製錬炉土層断面C－C′

073製錬炉土層断面

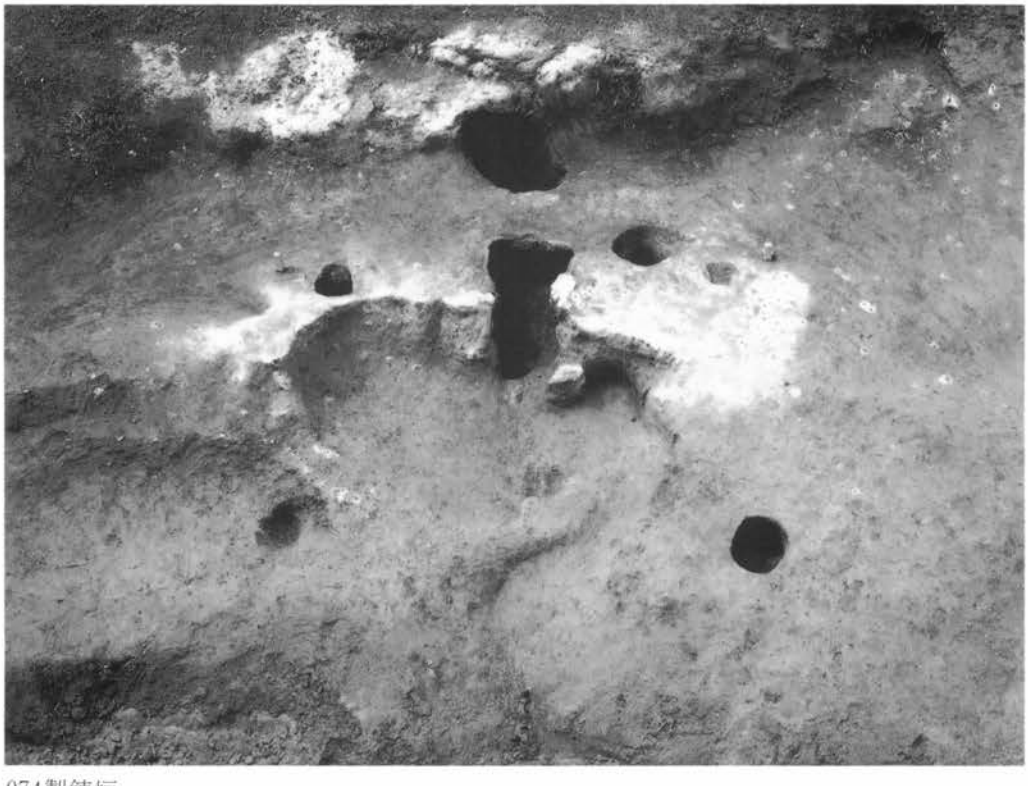


073製錬炉主体部分

073製錬炉主体部分

073製錬炉主体部分布目痕

073製錬炉後背部分テラス



074製錬炉

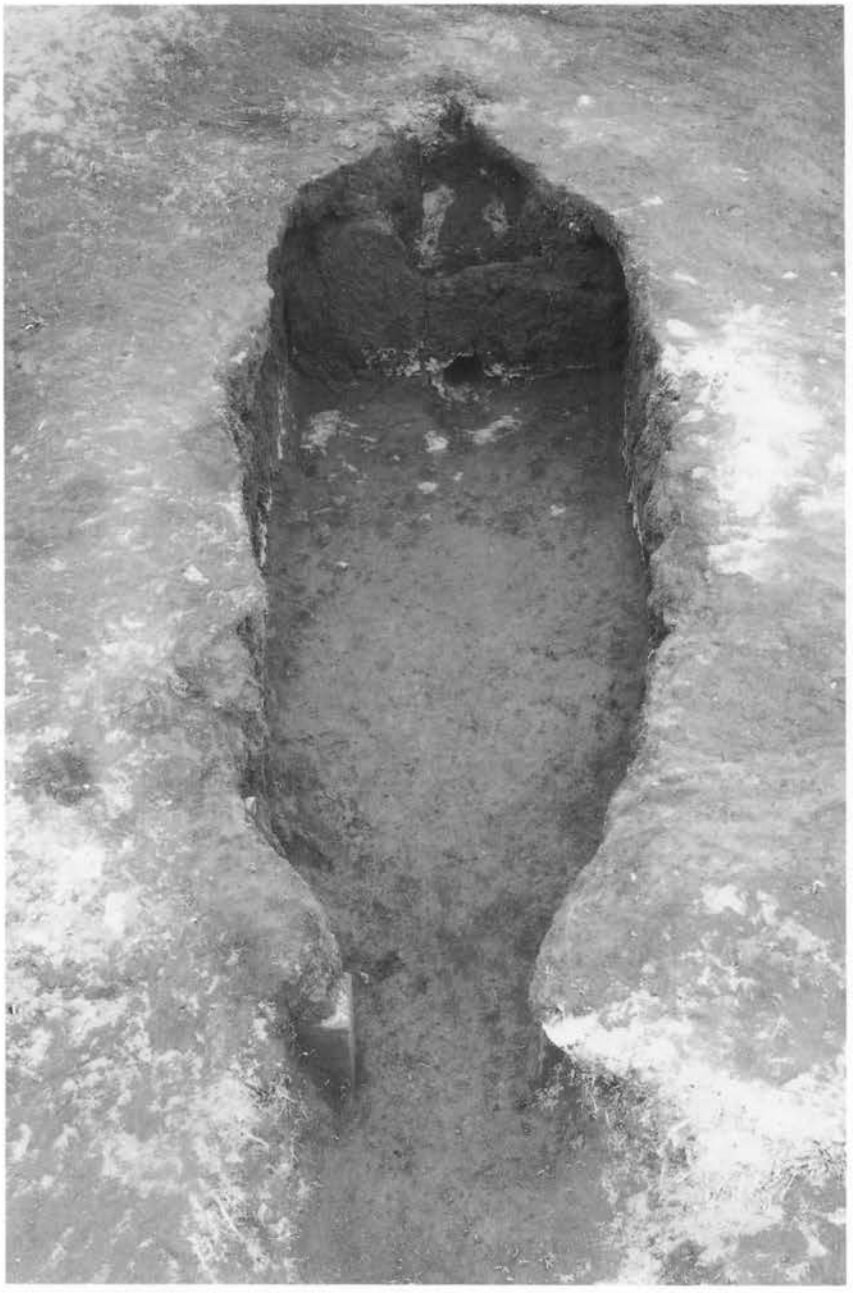
074製錬炉

074製錬炉内炉壁出土状況

056土坑

054精錬炉（手前）と062土坑遺物出土状況

炭窯群（西側，060・070・058）



037炭窯

037炭窯煙道部断面C－C′

037炭窯窯体断面A－A′

040炭窯

044炭窯

1

2

3

4

5

6

7

8

9

003住居跡（1～6）・005精錬炉（7～9）出土遺物

1

2

3

4

5

7

6

8

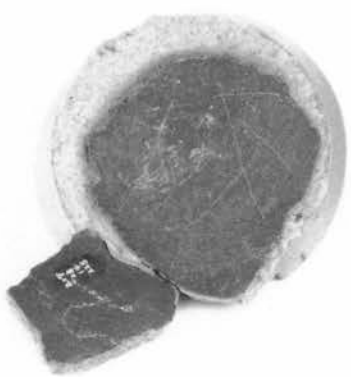
009（1～4）・011（5・6）・012（7・8）住居跡出土遺物

1

2

3

6



4

5

7

013（1～5）・014（6・7）住居跡出土遺物

1

2

3

6

4

5

7

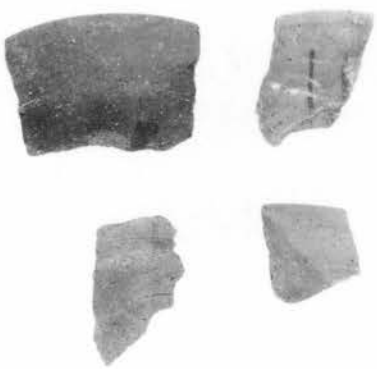
018（1～5）・023（6・7）住居跡出土遺物

1

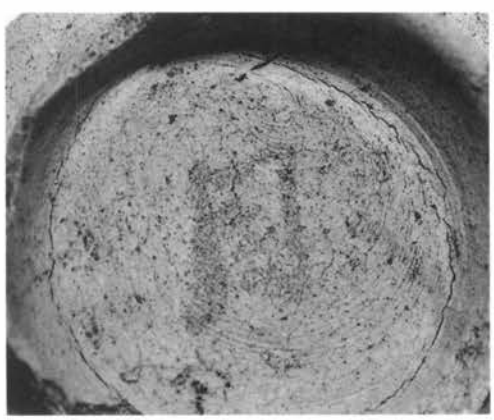
2

3

4



5



6

7

8

9

030住居跡出土遺物

1

3

2

4

5

6

7

8

036（1～3）住居跡・042（4～8）遺物集中地点出土遺物

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

056土坑出土遺物

1

2

3

4

5

6

056土坑出土遺物

1

2

3

4

5

6

7

1

2

3

4

5

製鉄関連遺物

矢船遺跡調査前(北から)

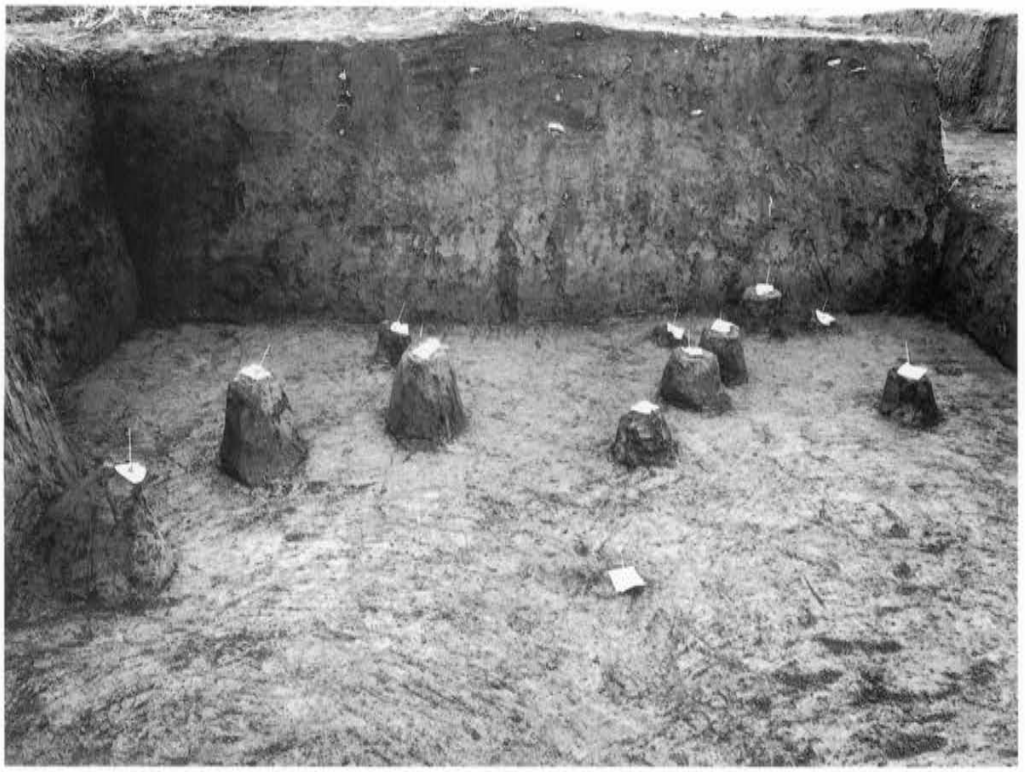
矢船遺跡調査前(南から)

第1ブロック遺物出土状況

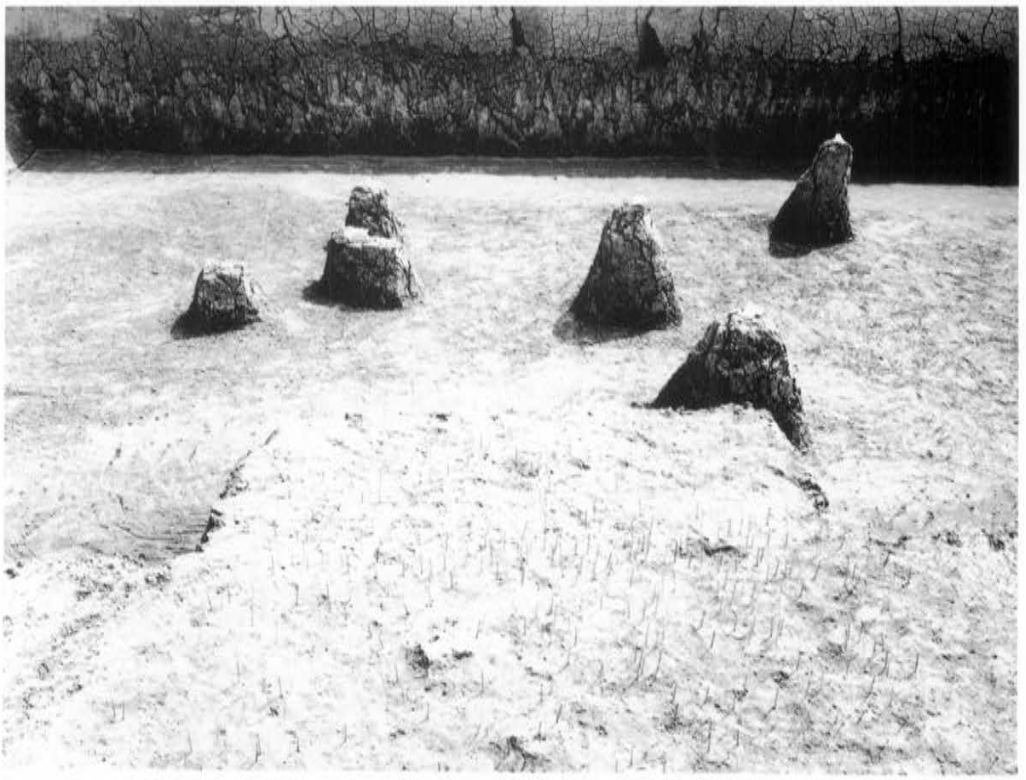
第2ブロック遺物出土状況

第3ブロック遺物出土状況

第3・第4ブロック遺物出土状況



第4ブロック遺物出土状況



第10ブロック北側遺物出土状況

第10ブロック遺物出土状況

D2－23グリッド遺物出土状況

図版74

第1ブロック

第3ブロック

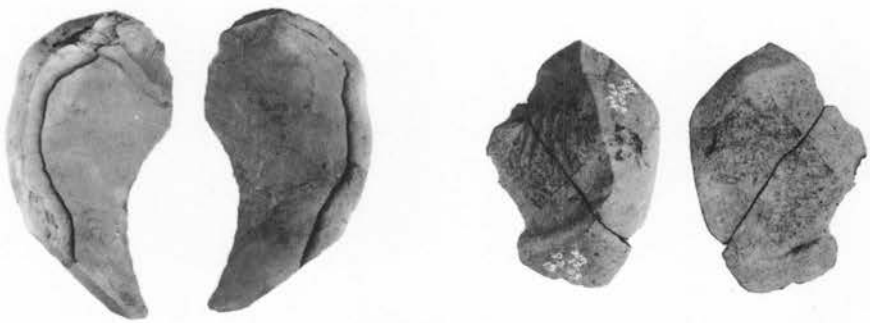
第5ブロック

第7ブロック

第8ブロック

(約2/3)

第9ブロック



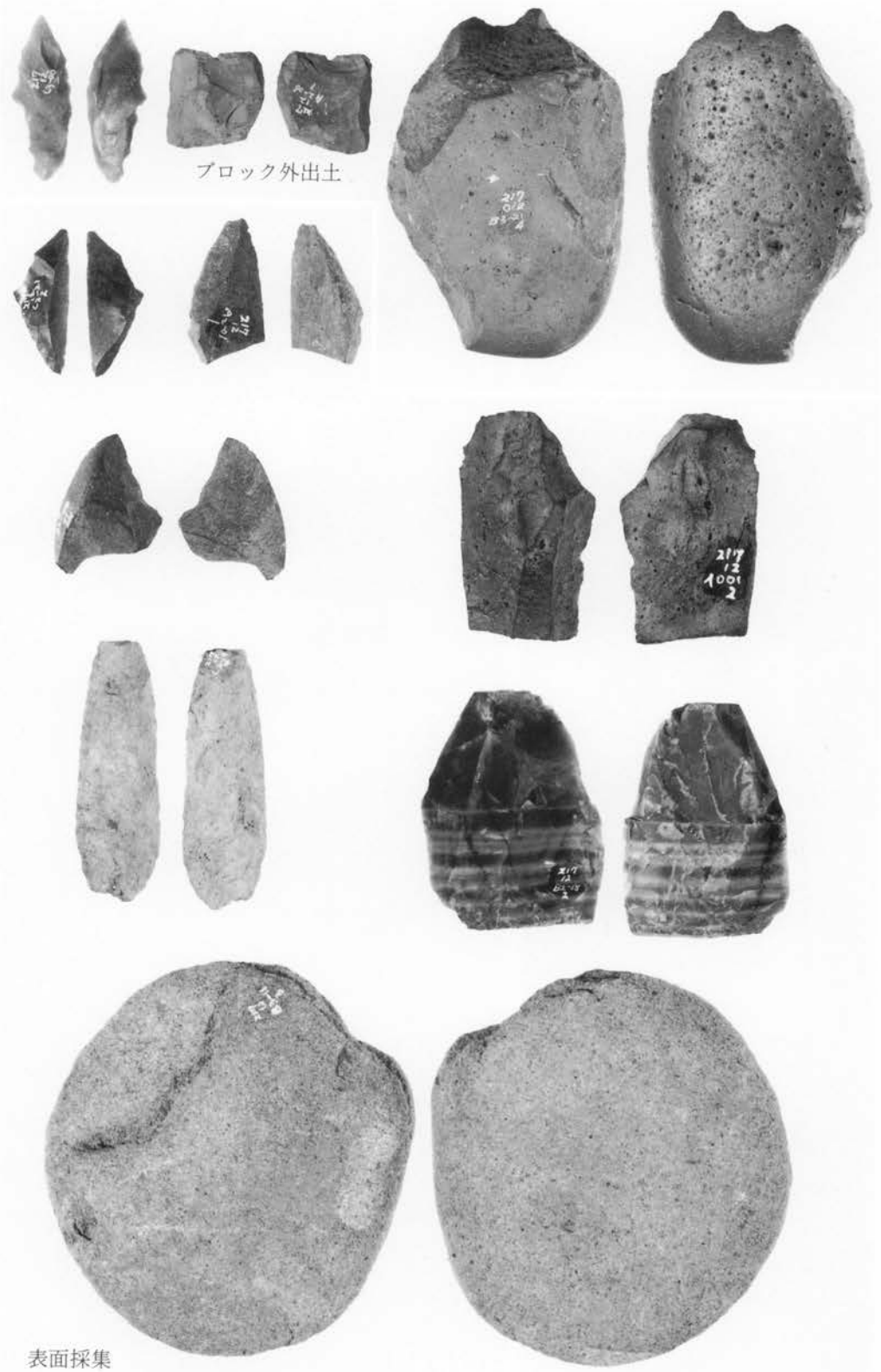
第10ブロック

第11ブロック

(約2/3)

図版76

矢船遺跡

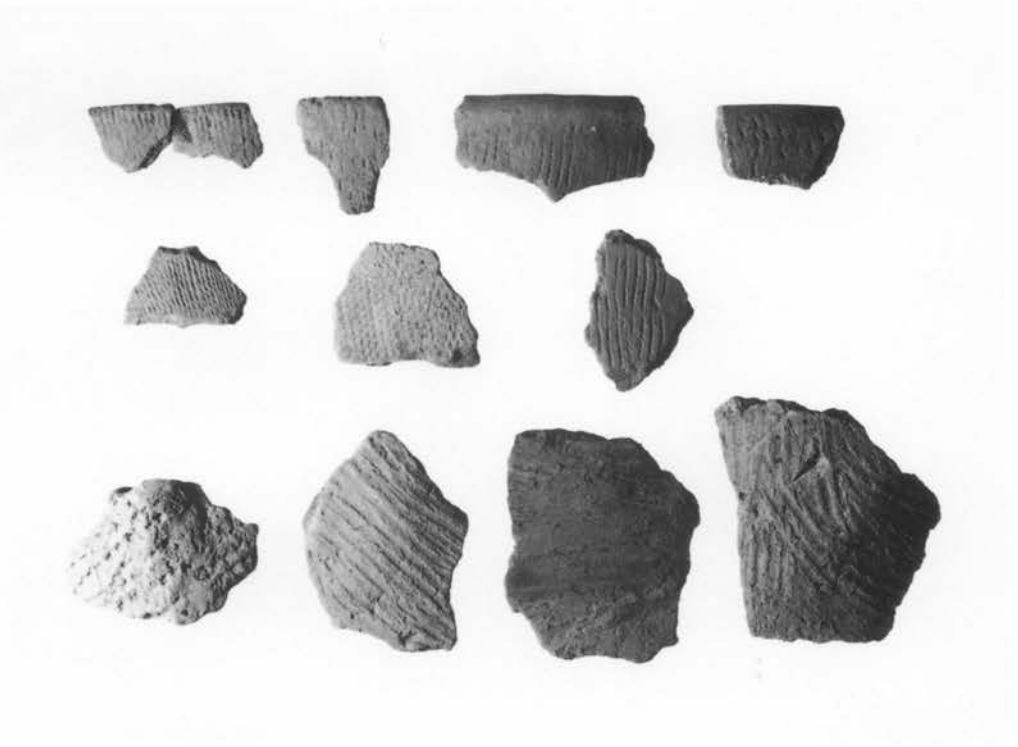


(約2/3)

(約2/3)

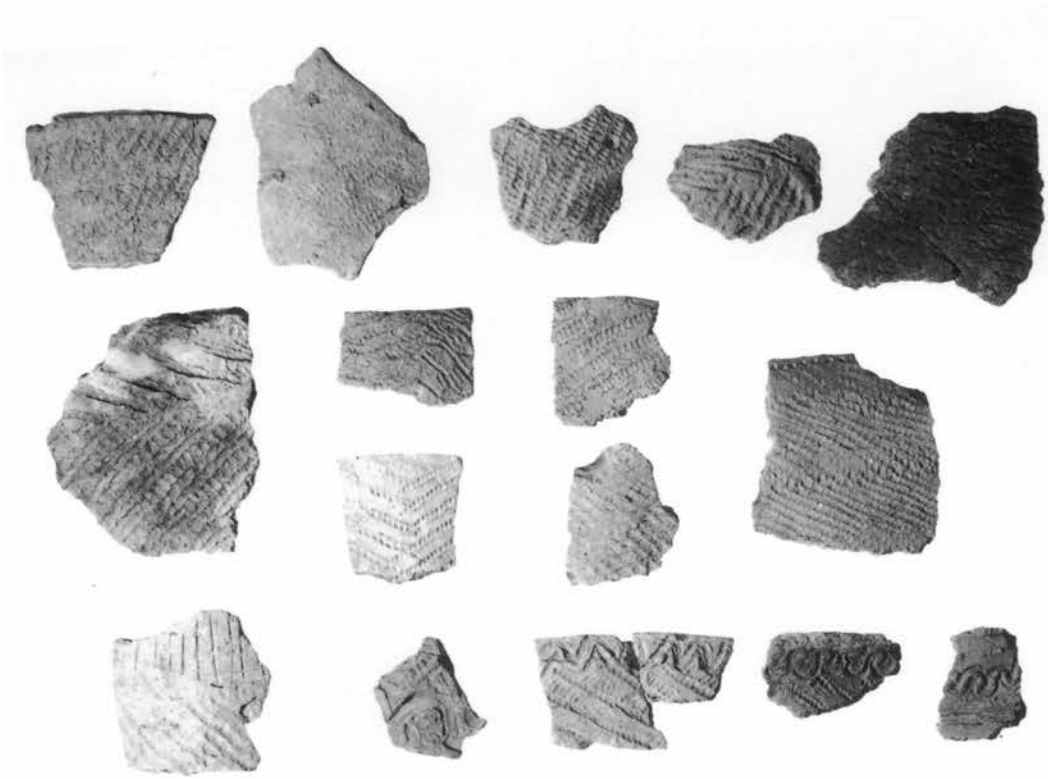
(約1/3)　　(約1/2)

グリッド出土の縄文時代の石器

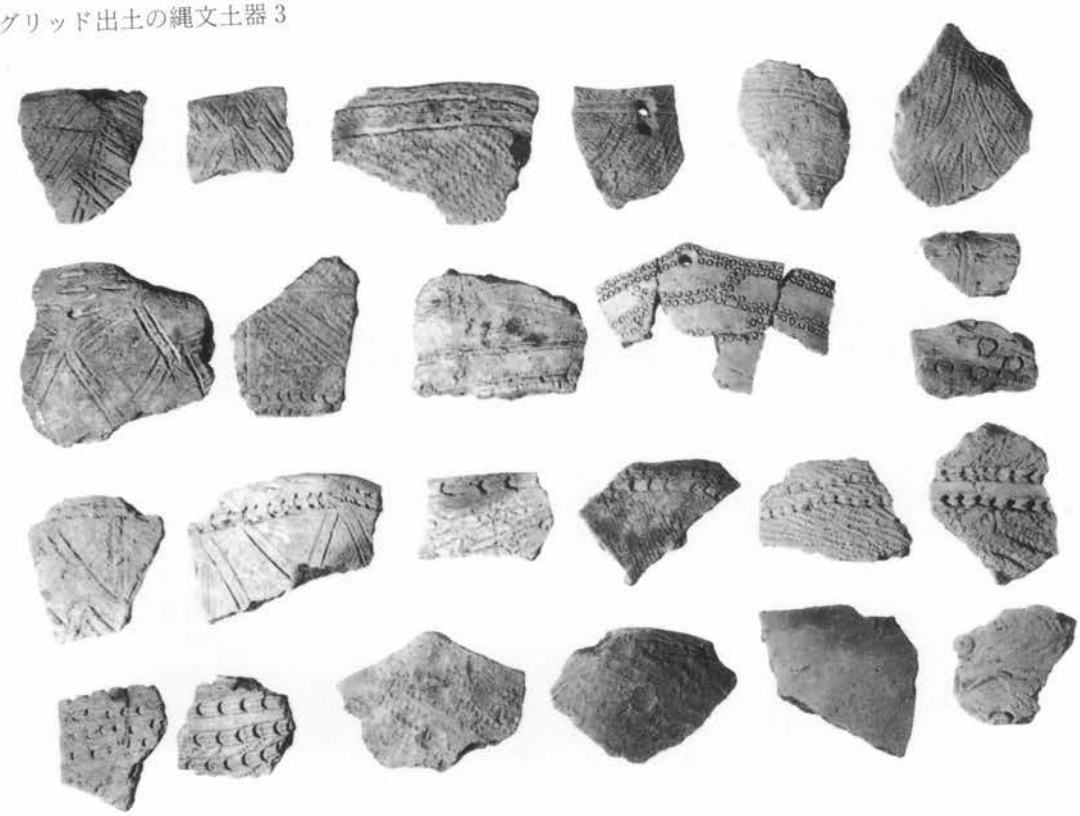


グリッド出土の縄文土器１

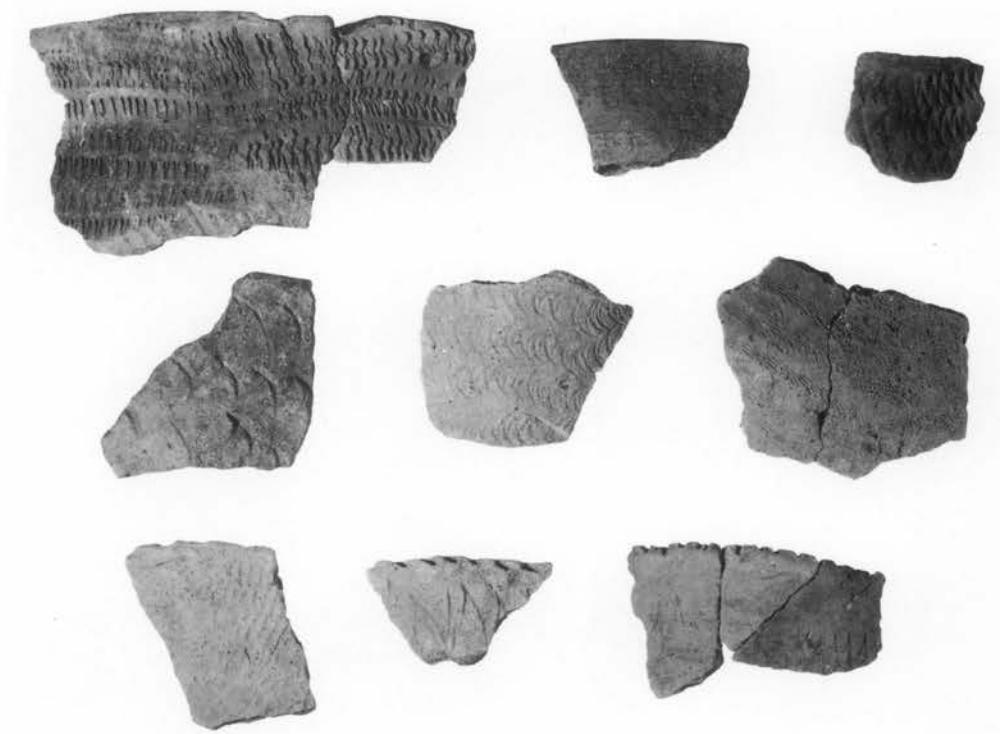
グリッド出土の縄文土器２



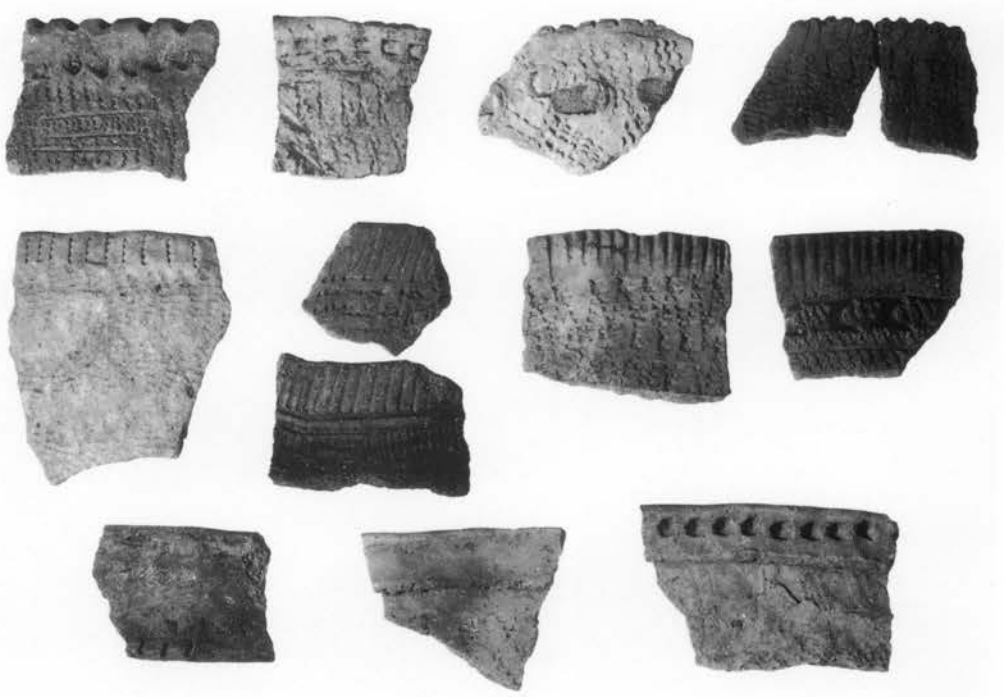
グリッド出土の縄文土器 3



グリッド出土の縄文土器 4



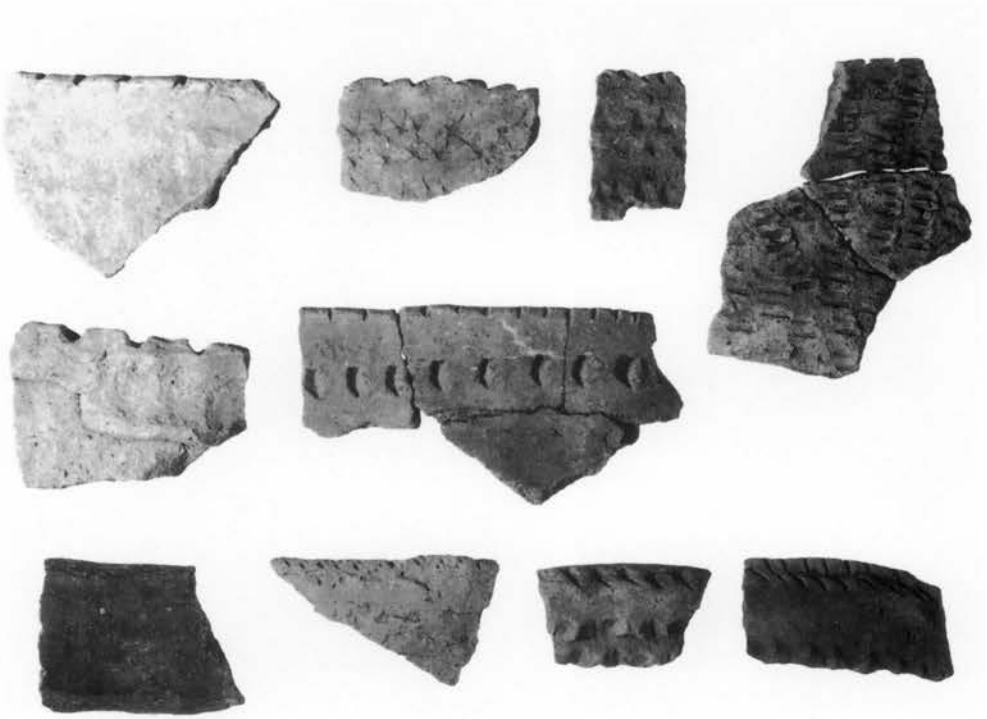
グリッド出土の縄文土器5



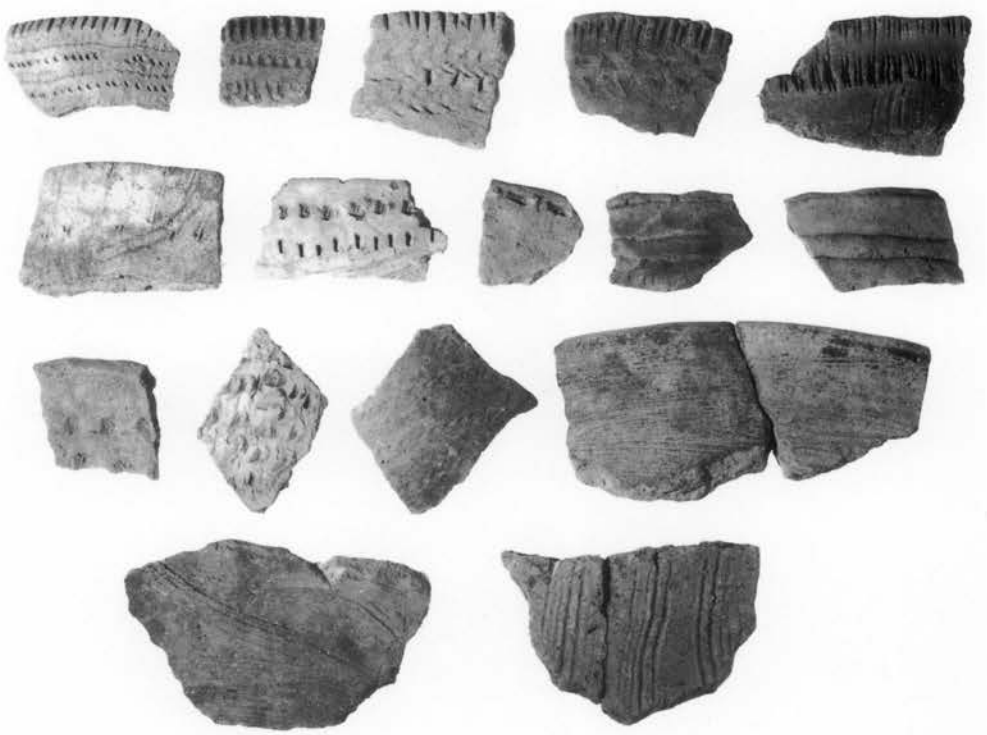
グリッド出土の縄文土器6

グリッド出土の縄文土器 7

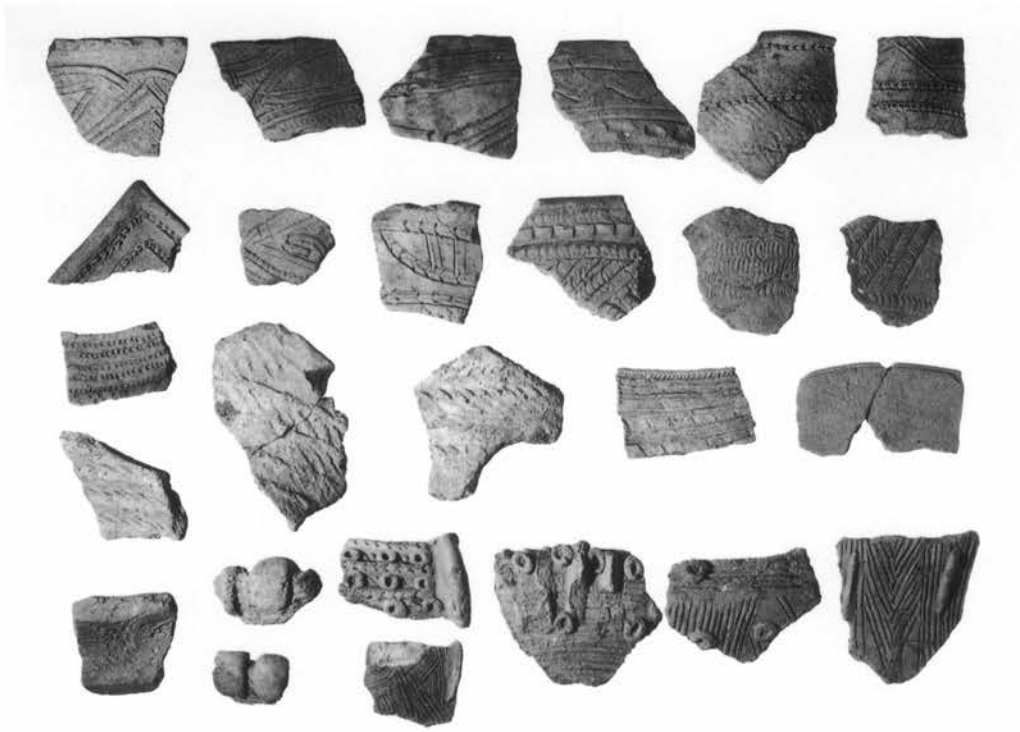
グリッド出土の縄文土器 8



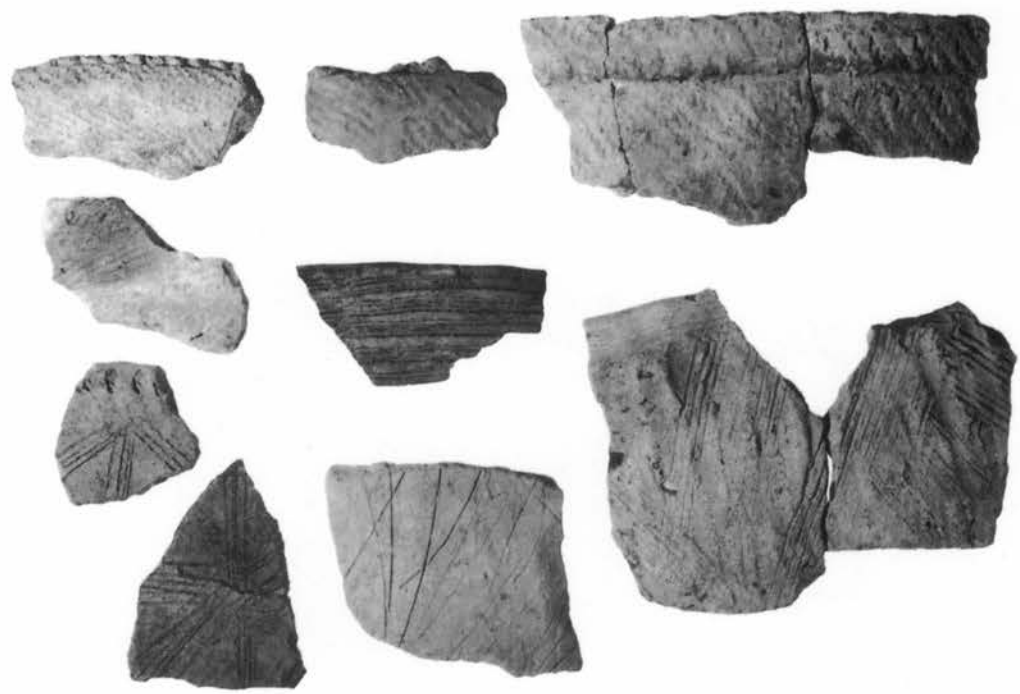
グリッド出土の縄文土器 9



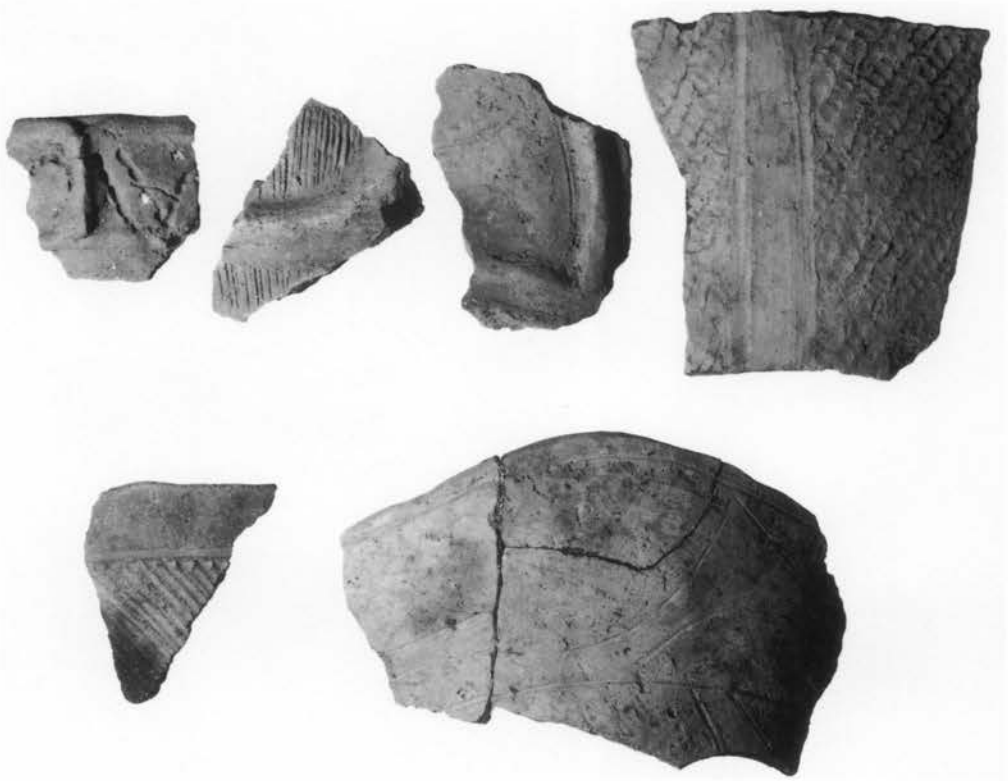
グリッド出土の縄文土器10



グリッド出土の縄文土器11

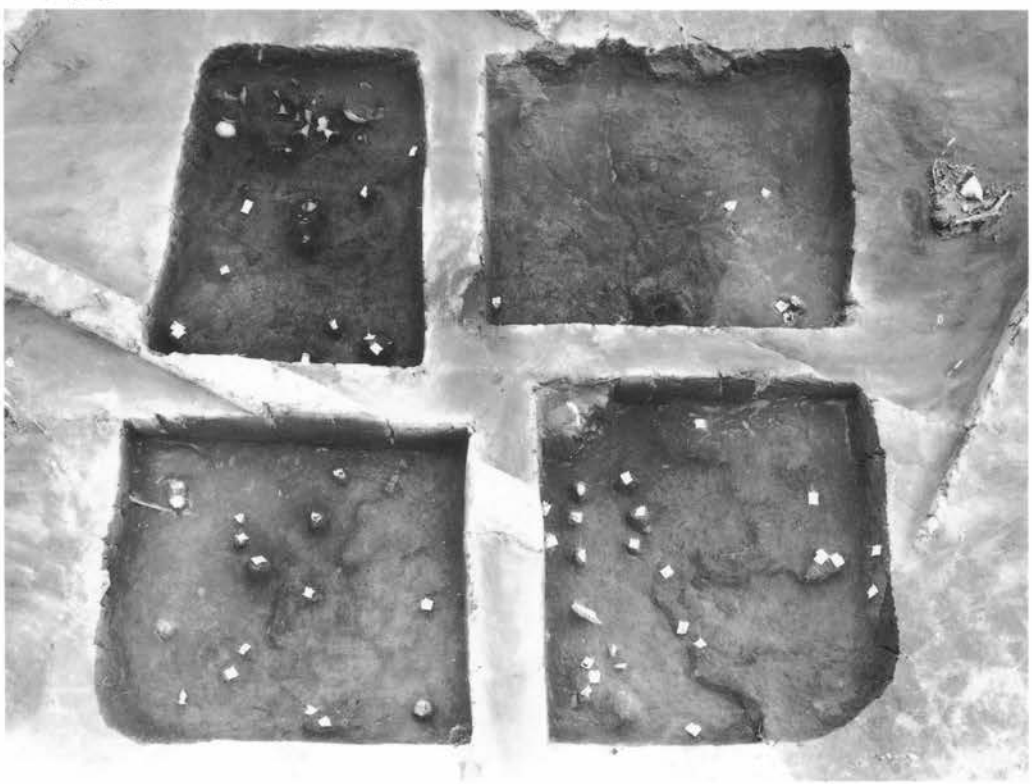


グリッド出土の縄文土器12



グリッド出土の縄文土器13

001住居跡



001住居跡遺物出土状況

001住居跡遺物出土状況(貯蔵穴付近)

002住居跡

1

2

3

4

5

6

001住居跡出土遺物 1

7

8

9

10

11

12

001住居跡出土遺物 2

13

14

15

16

17

18

001住居跡出土遺物 3

19

20

001住居跡出土遺物 4

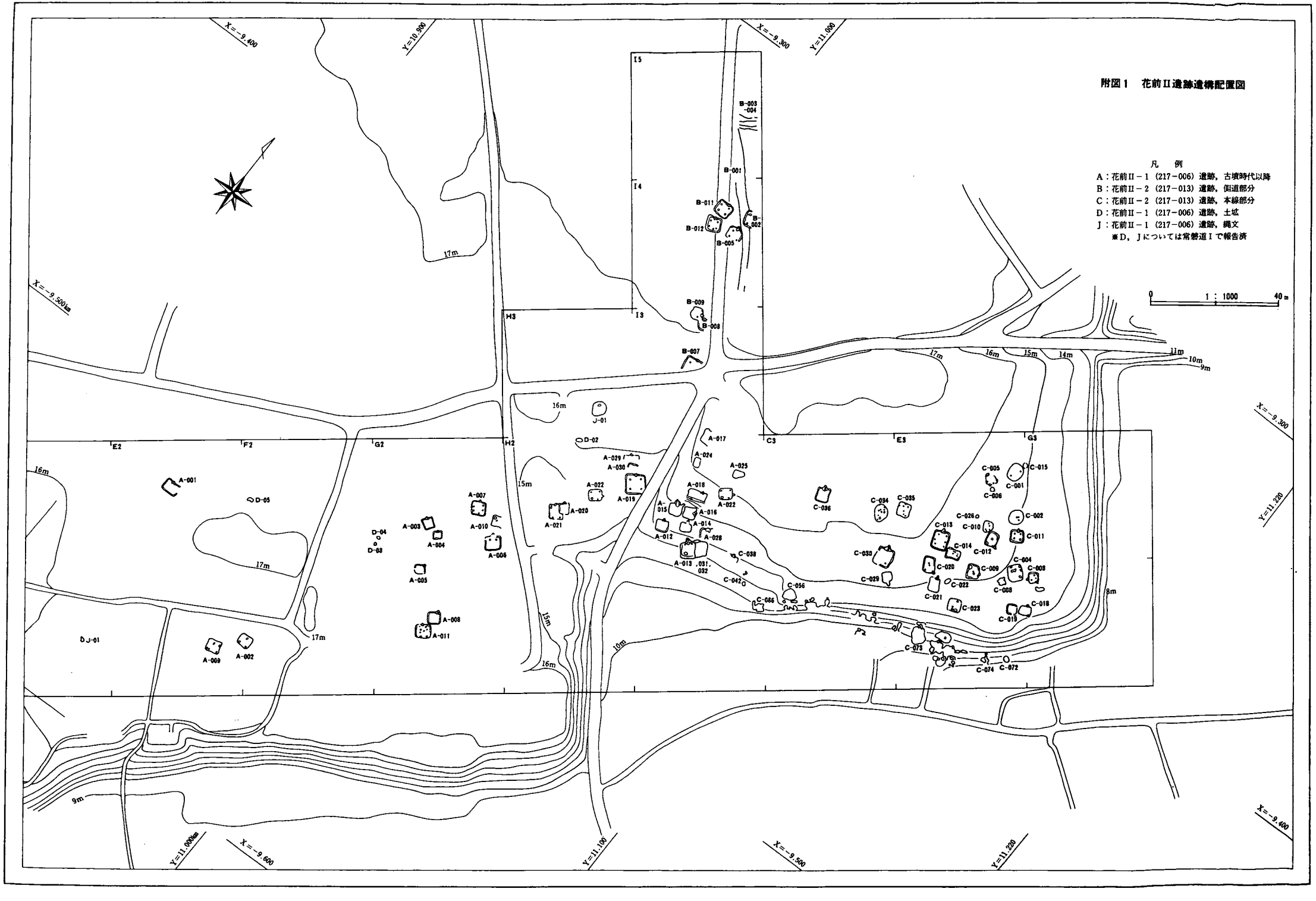
2

1

3

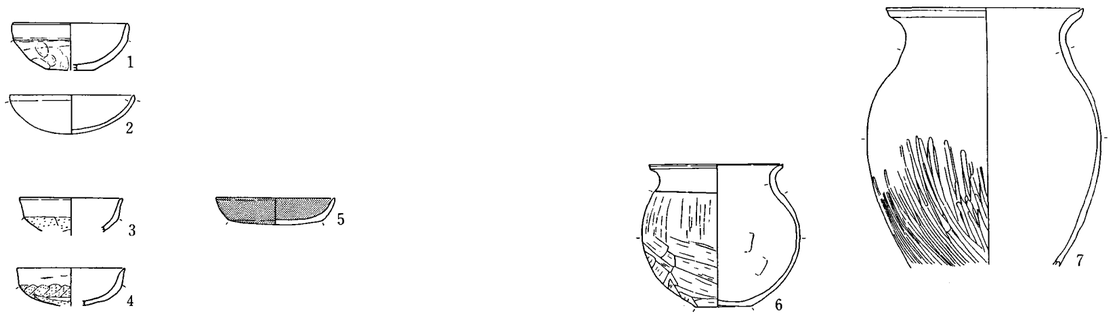
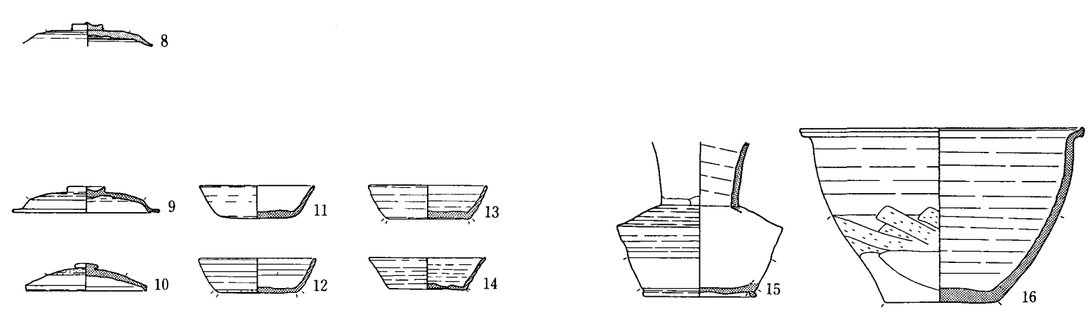
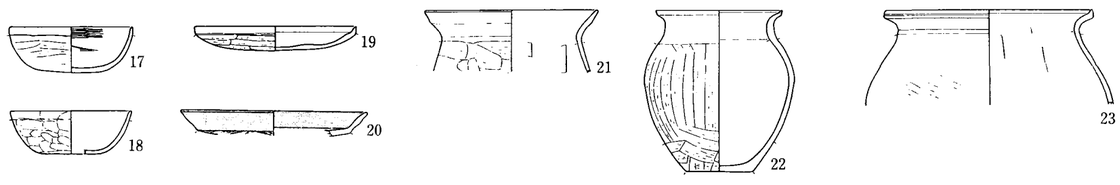
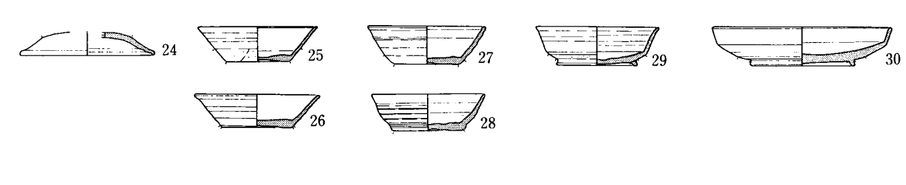
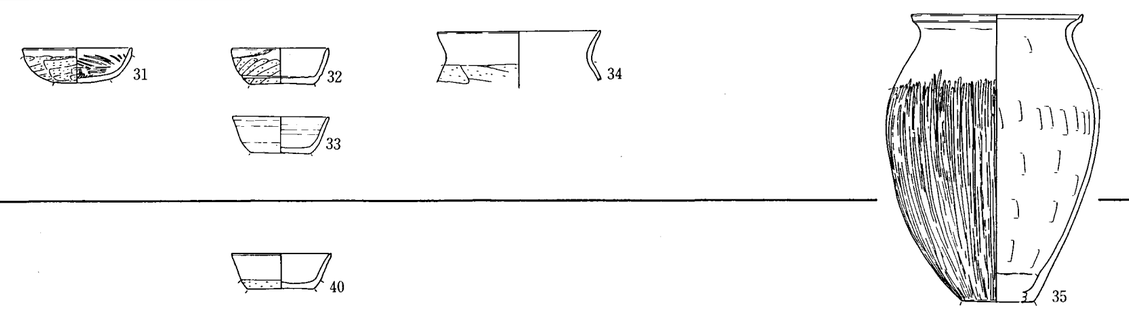
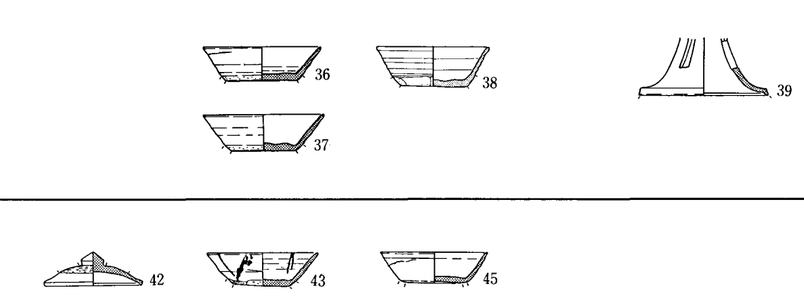
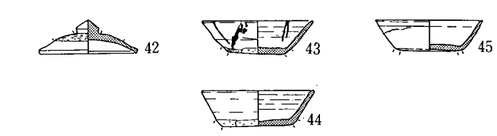
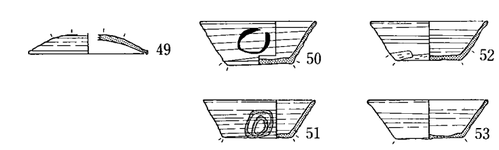
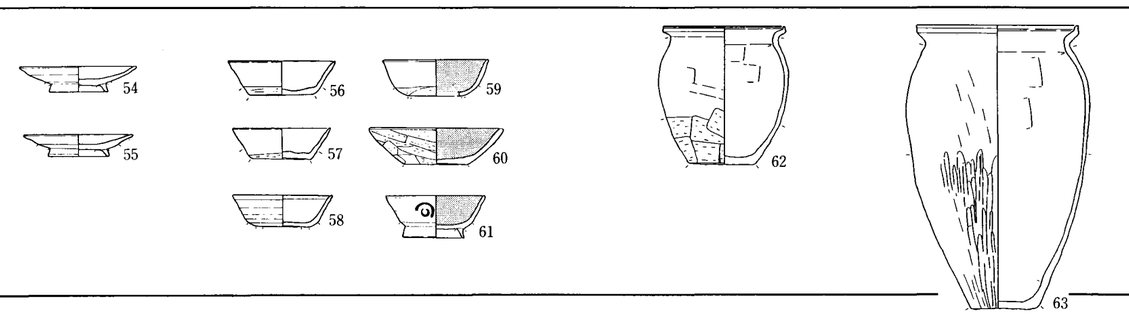
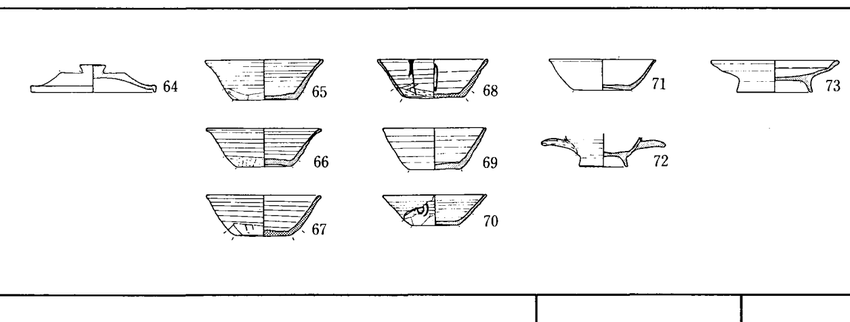
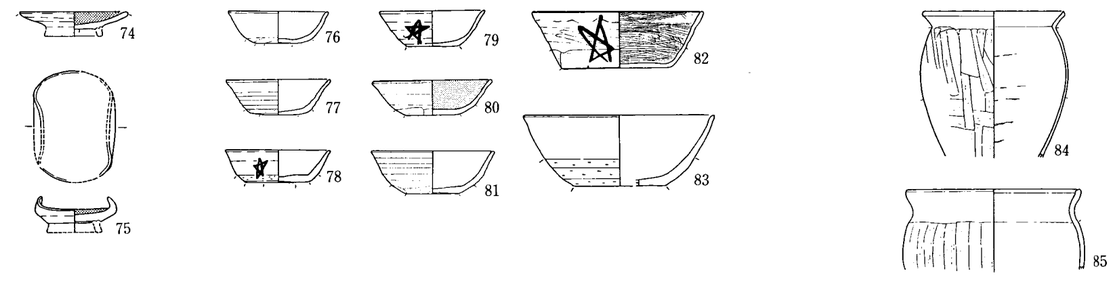
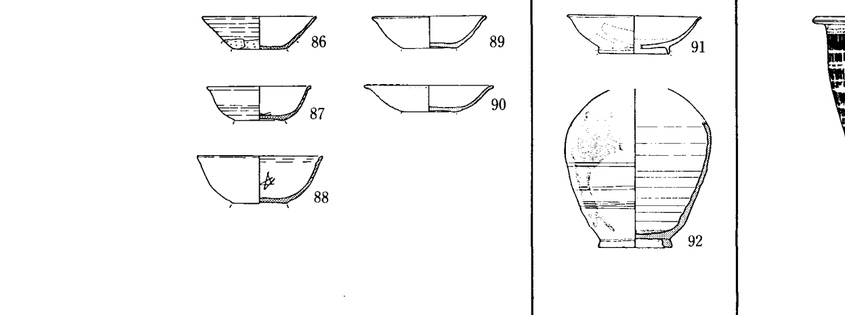
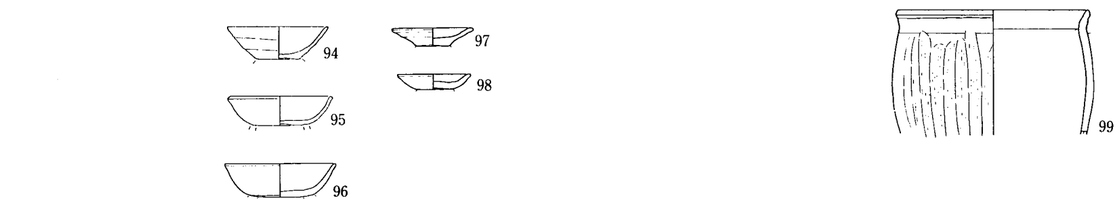
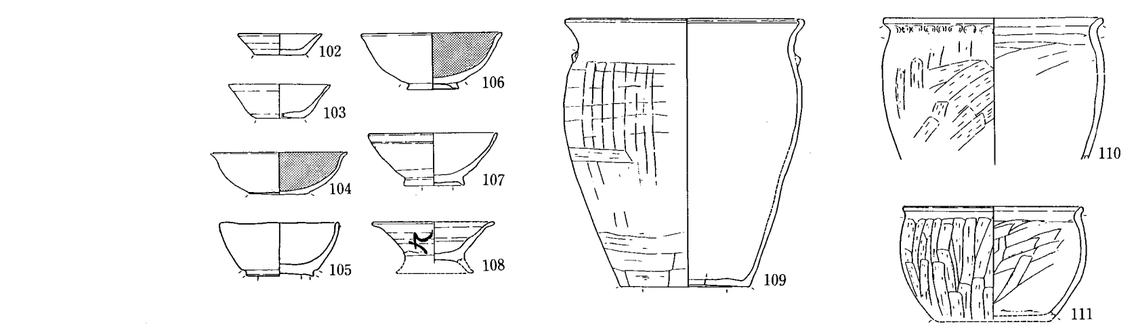
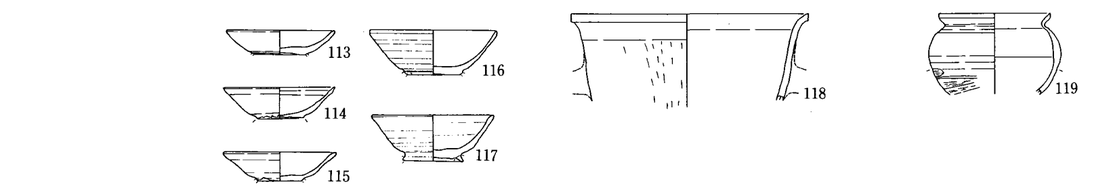
4

004土坑出土遺物


附図1　花前II遺跡遺構配置図
凡　例
A：花前II－1（217－006）遺跡，古墳時代以降
B：花前II－2（217－013）遺跡，側道部分
C：花前II－2（217－013）遺跡，本線部分
D：花前II－1（217－006）遺跡，土坑
J：花前II－1（217－006）遺跡，縄文
※D，Jについては常磐道Iで報告済
0　1：1000　40m
X=-9,400
Y=10,900
X=-9,300
Y=11,000
X=-9,500
Y=11,100
X=-9,600
Y=11,000
Y=11,220
I5
I4
I3
H3
H2
E2
F2
G2
C3
E3
G3
B-003
-004
B-001
B-011
B-012
B-002
B-005
B-009
B-008
B-007
J-01
D-02
A-017
A-024
A-025
A-029
A-030
A-022
A-019
A-018
A-015
A-016
A-014
A-012
A-028
A-013
,031,
032
A-020
A-021
C-038
C-042
C-056
C-066
C-036
C-034
C-035
C-005
C-006
C-001
C-015
C-026
C-010
C-013
C-014
C-012
C-002
C-011
C-033
C-029
C-020
C-009
C-004
C-008
C-022
C-021
C-023
C-018
C-019
P2
C-073
C-074
C-072
D-01
D-04
D-03
A-003
A-004
A-007
A-010
A-006
A-005
A-008
A-011
A-009
A-002
A-001
D-05
J-01
16m
17m
15m
14m
13m
12m
11m
10m
9m
8m

D5
E5
F5
D6
F6
D7
E7
F7
030
029
020
021
022
009
023
15m
056
071
044
060
070
058
069
040
041
068
067
079
037
073
049
048
061
064
063
065
032
031
059
062
054
074
10m
8m
N
0 1:100 8m

附図２　花前Ⅱ遺跡斜面中心部全測図

	土師器	須恵器	灰釉陶器
I 期			
II 期			
III 期			
IV 期			
V 期			
VI 期			
VII 期			
VIII 期			
IX 期			
X 期			

縮尺1/6

花前遺跡群奈良・平安時代土器編年図

常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書III

印　刷　　昭和60年３月20日
発　行　　昭和60年３月31日

発　行　　日本道路公団東京第一建設局
東京都港区虎ノ門１－18－１　(03)502－7431
編　集　　財団法人　千葉県文化財センター
千葉市葛城２－10－１　(0472)25－6478㈹
印　刷　　株式会社　太　陽　堂　印　刷　所
千葉市末広１－４－27　(0472)22－1121㈹